

**Commentary on Ainu Shin'yôshû :  
Collected stories of the Ainu Gods**

**「アイヌ神謡集」  
を読みとく**

**Katayama Tatsumine**  
片山 龍峯

**English Translation by Julie Kaizawa**

草風館



## はじめに

「アイヌ神謡集」が出版されて今年で80年目を迎えます。そして、著者の知里幸恵が生まれてからちょうど100年の節目の年となります。初版は郷土研究社というところから発行され、その後、弘南堂から補訂版が出され、さらに岩波文庫版が作られ、それも既に31刷を数えるまでに版を重ねています。静かなるベストセラーといえるでしょう。最近では、話題になった「声に出して読みたい日本語」(斎藤孝著)の中に並みいる文豪たちと肩を並べて収められています。時代を経て読み継がれてきた名著であることは誰しもが認めるところでしよう。

一方、アイヌ語の本という視点から見ても、これほど多くの人々の手に渡っているアイヌ語の書物はありません。しかし、実のところこの本はその半分しか評価されてこなかったのです。この本の半分を占めるアイヌ語で書かれた左側のページは、ほとんどの人には理解不可能な無縁のものとして見過ごされてきたからです。そのローマ字で表記されたアイヌ語なるものがどんな発音で、どのような抑揚をもち、いかなる意味を持った言葉なのか一般の読者には想像も出来ないものとして出版以来80年の年月を重ねてきたのです。知里幸恵は序文で、アイヌ語が消え失せてしまうことがあまりにも痛ましく名残惜しいと思ってこの本を書いたこと、そして、多くの人にこれを読んでもらえるならば無限の喜びだと書いています。この言葉のように、彼女の最も望んでいたことは、消えるかもしれない危機に瀕したアイヌ語を書きとめ、一人でも多くの人に読んでもらいたいというものでした。それにもかかわらず、出版されて80年経った今も肝心のアイヌ語はほとんど読まれず、日本語だけしか読まれていないという事情は変わらないのです。

昨年5月、私は何気なく「アイヌ神謡集」を手にとってページを繰っていました。そのとき、ふと上記のような事実気がついたのでした。私は、アイヌの女性、中本ムツ子さん(北海道千歳市)とこれまでにアイヌ語の本とそのCD化したものを出版してきました。そうした経験から、誰しもがアイヌ語を読みその意味が分かる解説書と、その発音がわかるCDを作ることは十分可能だと思いました。かつて「カムイユカラ(神謡)」(全6話)を出版したときも、解説書を書きCDも作りました。この「アイヌ神謡集」の解説書もその延長線上にあると考えたのです。

「アイヌ神謡集」には辞書にも出ていない言葉が数多く現れます。研究書でも不明として残してあります。あるとき私はその不明語の幾つかに取り組んでみました。そして私なりの答えが出せるものがあることを知りました。もっと時間をかければさらに多くの不明語も分かってくるかもしれない。こうした気持ちも加わって、今まで誰も手をつけなかった「アイヌ神謡集」の解説書を書くことにしたのです。しかし、私のような浅学には荷が重過ぎることは重々承知しています。しかし、誰かが今踏み出さなければ、また知里幸恵の望みが無にされたままの状態が続くように思えました。生誕100年というこの節目の年に「アイヌ神謡集」の半ばを占めるアイヌ語の部分が多くの人々に読まれるようになれば幸恵さんも喜んでくださるのではないのでしょうか。

「アイヌ神謡集」は世界で初めてアイヌ自身の手で文字化されて出版された記念碑的な書です。わずか19歳の女性がこの偉業を成し遂げ、その直後にこの世を去っていきました。金田一京助は、この本のあとがきで「アイヌ語の唯一のこの記録はどんな意味からも、とこしえの宝玉である。唯この宝玉をば神様が惜しんでたった一粒しか我々に恵まれなかった」と書いています。この生誕100年の年を期して「アイヌ神謡集」が多くの人たちにアイヌ語としても読まれるきっかけになってほしい、その思いを込めて本書を著しました。

1. シマフクロウ神が自らをうたった謡「シロカニベ ランラン ピシカン」 kamuycikap kamuy yayeyukar / Song sung by the owl god.....	p.17
2. キツネが自らをうたった謡「トワ トワ ト」 cironnup yayeyukar / Song sung by the fox god.....	p.98
3. キツネが自らをうたった謡「ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ」 cironnup yayeyukar / Song sung by the fox god .....	p.139
4. ウサギが自らをうたった謡「サンパヤ テレケ」 isepo yayeyukar / Song sung by the hare god .....	p.179
5. 谷地の魔神が自らをうたった謡「ハリッ クンナ」 nitorunpe yayeyukar / Song sung by dragon god .....	p.211
6. 小オオカミの神が自らをうたった謡「ホテナオ」 pon horkewkamuy yayeyukar / Song sung by the little wolf god .....	p.238
7. シマフクロウ神が自らをうたった謡「コンクワ」 kamuycikap kamuy yayeyukar / Song sung by the owl god.....	p.261
8. シャチの神が自らをうたった謡「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フムフム！」 repun kamuy yayeyukar / Song sung by the killer whale (orca) god.....	p.297
9. カエルが自らをうたった謡「トーロロ ハンロケ ハンロケ」 terkepi yayeyukar / Song sung by the frog god.....	p.353
10. 小オキキムイが自らをうたった謡「クニサ クトゥン クトゥン」 pon Okikirmuy yayeyukar / Song sung by little Okikirmui.....	p.370
11. 小オキキムイが自らをうたった謡「タノタ フレフレ」 pon Okikirmuy yayeyukar / Song sung by little Okikirmui .....	p.382
12. カワウソが自らをうたった謡「カップ レウレウ カップ」 esaman yayeyukar / Song sung by the otter god.....	p.403
13. 沼貝が自らをうたった謡「トヌベカ ランラン」 pipa yayeyukar / Song sung by the swamp mussel god.....	p.420

本書は、初版の郷土研究社発行の「アイヌ神謡集」を底本としています。

以前、私が書いた「カムイユカ」の解説書では、左側のページ（アイヌ語）を、カタカナ表記、現在普及しつつあるローマ字表記、逐語訳の3行で表しました。一方、この解説書では4行で表しました。カタカナ表記、知里幸恵のローマ字表記、現行のローマ字表記、逐語訳です。知里幸恵の原文はどうしても外すわけにはいかないからです。なお、原文にはサケへの入る場所を2文字分スペースをとって示してあります。本書では、/（スラッシュ）でそれを示しました。しかし、一つの文章を4行で表すのはあまりにも煩雑すぎないだろうかと思いました。何回か試行錯誤を繰り返すうちに、カタカナ表記を大きくして他を小さくすることで、まとまりが出来て意外にも読みやすいものになりました。この方法ならば、アイヌ語の一語一語の意味が即座に分かります。そして何よりもカタカナで大きく表記されているので誰でもが抵抗なく読める利点があります。

右側のページは、3行で構成しました。知里幸恵の日本語訳、現代日本語訳、英語訳です。現代日本語訳を入れたのは、知里幸恵の時代から80年も経っているため今の若い人には読みにくい仮名遣いや難しい漢字があることと、私自身が直接アイヌ語から訳したものと知里幸恵訳を対照させることで、知里幸恵の日本語訳の深みがさらによく分かるようになるからです。彼女の訳文は独特の文体と韻律が高い文学性を醸し出しているからです。

英語訳は千歳在住のアメリカ合衆国から来た女性、貝澤ジュリーさんの手になります。序文を含めて「アイヌ神謡集」が全て英語に訳されるのは恐らくこれが初めてのこととなるでしょう。英語訳を付けることで「アイヌ神謡集」が世界中の人々に読んでもらえる可能性をさらに広げることになるでしょう。

物語の中には、あまりにも今の人の考え方から離れすぎているため物語全体で一体何を言わんとしているのか分かりにくいものが幾つかあります。それを考慮して「物語の背景」「コラム」といった欄を設けて背景にあるアイヌの伝統文化を説明しました。また、「言葉の説明」の欄ではアイヌ語の単語や文法などを解説しました。さらに「参考」という欄を設け、そこでは辞書に出てこないような不明語や難語の分析を試みました。これはあくまでも読者への参考までにといい気持ちで仮説を提示したものです。巻末には辞書機能を持つグロッサリーも付けました。これが本書の主な構成です。

また、「アイヌ神謡集」を初めて謡として復元し、13話すべてを中本ムツ子さんがうたったCDも出版しました。それを同時に利用していただければアイヌ語の発音が分かり、練習すれば歌えるようになるでしょう。神謡（カムイユカ）とは節つきの歌物語だからです。

## 第1話(その1)

### シマフクロウ神が自らをうたった<sup>うた</sup>謡

### 「シロカニペ ランラン ピシカン」

### 〔1～73行まで〕

この話は長い物語なので三つの部分に分けて解説します。  
まず最初の部分は、1行目から73行目までです。

#### 〔物語とその背景〕

物語は人間の村を見守る神さまであるシマフクロウ神が「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という歌を歌いながら川の流れに沿って下流へと飛んでいき、ある村の上空にさしかかるところから始まります。

村の上空を通りながら、まず目についたのは、昔貧しかった人が今は豊かになっていて、反対に、昔豊かだった人が今は貧しくなっている様子でした。シマフクロウの神さまは コタン コロ カムイ（村を見守る神さま）ともいわれ、その役割は、人間の村に異変が起こらないように常に見守ることです。ですから、村の中で、このように貧富が逆転するようなことが起こっているのは、ある種の異変が起こっているとシマフクロウ神にはとらえられたことでしょう。物語はこのことが予兆となり展開します。

さらに村から海岸のほうへ飛んでいくと、子供達が小さな弓と矢で遊んでいる様子が目に入りました。小さな弓矢での遊びは、将来、大人になってから実際に行く狩猟の準備も兼ねているのです。子供たちは上空でシマフクロウが歌う（鳴く）声にすぐに気がつき、その中で、にわか物持ちの子が「最初にあの美しい鳥を射たものは本当の勇者だぞ」と言いながら、金の矢をシマフクロウ目がけて射放ちました。しかし、シマフクロウの神さまは、その矢を上や下に受け流して受け取りませんでした。人間が矢を射て「命中する」ということは、実は、神さまである動物が「自らの意思で手を差し出してその矢を受け取る」ことだと考えられているのです。ですから「矢がはずれる」とは、神さまが射た人の「矢を嫌って受け取らない」ことです。また、神さまは、常に行いの正しい人の矢を受け取りたいと願っているとも考えられています。この場合、金の小矢を受け取らなかったのは、シマフクロウ神は、その矢を射た子供を嫌ったからです。

シマフクロウ神は、子供たちの中に貧しい身なりをした一人の子供がいることに気がつきました。しかし、その子の眼を見ると、決して卑しい者の子孫ではないことが分かりました（その人間の良し悪などを見抜くのに眼を見る方法は今でも行われています）。たしかに、「目は口ほどに物を言い」という日本語の格言もあります。それと同様で、シク トウム

オロケ（目の中＝まなこ）は、その人の人となりを見る上で重要な判断材料となります。

その身なりの貧しい子のごく普通の木でできた矢でシマフクロウを射ろうとすると、物持ちの子たちは、「そんな腐れ木の矢を神さまが受け取るかよ！」とバカにして踏みつけたりなぐったりするありさま。しかし、その子は、そんな仕うちにもめげず、ぐっと弓をかまえます。そのけなげな姿を見てシマフクロウ神は、あわれみの心をいただきました。そして、その子の上空で輪を描きながら「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という歌をうたいました。この歌は一種の予言のようなものでしょう。この「銀の滴」「金の滴」とは、いったい何を指しているのでしょうか。物語の後の方で、シマフクロウが宝物を降らせるのを見ると、「宝物が降るぞ」という予告だろうと考えられます。

そして、シマフクロウ神は、その子の放った矢を手を差し出して受け取りました（つまり矢は命中しました）。シマフクロウが地面に降りると、貧しい身なりの子が一番最初にそこに駆けつけ、つかまえると、にわか物持ちの子たちは「オレたちが先にしようとしたことを先がけしやがって！」と悪態をつきながら突きとばしたりなぐったりしました。しかし、その子はしっかりと腹の下にシマフクロウを置いて、渡しません。そして、自分の上に折り重なる子供たちのすき間からとび出して、一目散に走ります。石や木片をぶつけられても少しも意に介せず、自分の家まで一気に走り帰ります。そして、家の神窓（神さまだけを出し入れする窓）からシマフクロウを入れながら、家の中の老父母にこれまでのことを伝えたのでした。子供といえども、礼儀をわきまえていて、きちんと神窓から神さまであるシマフクロウを入れたのでした。

ここまでの物語で、物語が展開する上でキーワードとなるのが「テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネ」「テエタ ニシパ タネ ウェンクル ネ」、つまり「昔貧しかった者が今は豊かになっている」「昔豊かだった者が今は貧しくなっている」という言葉です。ひらたく言えば、にわか物持ちの人と、にわか貧乏の人がいたということ。なぜ、こんなことになったのでしょうか。この変事は物語が展開する上での原動力となります。この点については、「コラム (1)」でふれることにします。

カムイチカプ カムイ ヤイエユカラ、「シロカニペ ランラン ピシカン」  
 Kamuichikap kamui yaieyukar, "Shirokanipe ranran pishkan"  
 kamuycikap kamuy yayeyukar, "sirokani pe ran ran piskan"  
 神鳥(シマフクロウ) 神 自らを物語る 銀 滴 降る 降る まわり

- 1 「シロカニペ ランラン ピシカン、コンカニペ  
 "Shirokanipe ranran pishkan, konkanipe  
 "sirokani pe ran ran piskan, konkani pe  
 銀 滴 降る 降る ~のまわり 金 滴
- 2 ランラン ピシカン。」 アリアン レクポ チキ カネ  
 ranran pishkan." arian rekpo /chiki kane  
 ran ran piskan." ari an rekpo ci=ki kane  
 降る 降る ~のまわり と ある 小さい鳴き 私・~をする しながら
- 3 ペテソロ サパシ アイネ、アイヌコタン エンカシケ  
 petesoro /sapash aine, / ainukotan / enkashike  
 pet esoro sap=as ayne, aynu kotan enkasike  
 川 に沿って 下る(複)・私 したあげく 人間 村 ~の上
- 4 チクシ コロ シチョロポクン インカラシ コ  
 chikush kor / shichorpokun / inkarash ko  
 ci=kus kor si- corpok un inkar=as ko  
 私・~を通る しながら 自分の 下 へ 見る・私 すると
- 5 テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネ、テエタ ニシパ  
 teeta wenkur / tane nishpa ne, teeta nishpa  
 teeta wenkur tane nispa ne, teeta nispa  
 昔の 貧乏人 今の 物持ち ~になる 昔の 物持ち
- 6 タネ ウェンクル ネ コトム シラン。  
 tane wenkur ne / kotom shiran.  
 tane wenkur ne kotom siran.  
 今の 貧乏人 ~になる ように 様子がある
- 7 アトウイテクサム タ アイヌヘカッタラ アクシノツポンク  
 Atuiteksam ta / ainuhekattar / akshinotponku  
 atuyteksam ta aynu hekattar ak-sinot-pon-ku  
 海岸 で 人間 子供たち 射る遊び用の小さい弓
- 8 アクシノツポナイ エウエシノツ コロカイ  
 akshinotponai / euweshinot korokai.  
 ak-sinot-pon-ay euesinot kor okay.  
 射る遊び用の小さい矢 ~でみんな遊び合う しながら いる(複)
- 9 「シロカニペ ランラン ピシカン、  
 "Shirokanipe ranran pishkan,  
 "sirokani pe ran ran piskan,  
 銀 滴 降る 降る ~のまわり
- 10 コンカニペ ランラン ピシカン。」 アリアン レクポ  
 konkanipe ranran pishkan." arian rekpo  
 konkani pe ran ran piskan." ari an rekpo  
 金 滴 降る 降る ~のまわり と ある 小さい鳴き

梟の神の自ら歌った謡「銀の滴降る降るまはりに」  
 シマフクロウの神が自らを物語った謡「銀の滴降る降るまはりに」  
 Song Sung by the Owl God "Silver drops fall, fall, all around"

「銀の滴降る降るまはりに、金の滴  
 「銀の滴降る降るまはりに、金の滴  
 "Silver drops fall, fall, all around; gold drops

降る降るまはりに。」と云う歌を私は歌ひながら  
 降る降るまはりに」という歌を私は歌いながら  
 fall, fall, all around." This song I sang,

流に沿って下り、人間の村の上を  
 流れに沿って下り、人間の村の上を  
 as I followed the river downstream. Looking down

通りながら下を眺めると  
 通りながら下を眺めると  
 as I passed over the village of the humans,

昔の貧乏人が今お金持になつてみて、昔のお金持が  
 むかし貧しかった人が、いま豊かになっていて、むかし豊かだった人が  
 I saw that the people who were once poor were now rich, and those who were once rich

今の貧乏人になつてゐる様です。  
 いま貧しくなっている様子です。  
 were now poor.

海辺に人間の子供たちがおもちやの小弓に  
 海辺では人間の子供たちが、遊びに使う小さな弓と  
 On the seashore, human children played with little toy bows

おもちやの小矢をもつてあそんで居ります。  
 小さな矢で遊んでいます。  
 and little toy arrows.

「銀の滴降る降るまはりに  
 「銀の滴降る降るまはりに  
 "Silver drops fall, fall, all around;

金の滴降る降るまはりに。」といふ歌を  
 金の滴降る降るまはりに」といふ歌を  
 gold drops fall, fall, all around."

- 11 チキ カネ ヘカチウタラ エンカシケ  
chiki kane / hekachiutar / enkashike  
ci=ki kane hekaci utar enkasike  
私・~をする しながら 男の子 たち ~の上
- 12 チクシ アフ、ウンチョロポケ エホユツパ  
chikush awa, / unchorpoke / ehoyuppa  
ci=kus awa, un=corpoke ehoyuppa  
私・~を通る したところ 私・ ~の下 ~を走る(複)
- 13 エネ ハウオカイ：——  
ene hawokai：——  
ene hawokay i：——  
このように 言う(複) こと
- 14 「ピリカ チカッポ！ カムイ チカッポ！  
“Pirka chikappo! kamui chikappo!  
“pirka cikappo! kamuy cikappo!  
美しい 小鳥 神 小鳥
- 15 ケケ ヘタク、アカシ フ トアン チカッポ  
Keke hetak, / akash wa / toan chikappo  
keke hetak, ak=as wa toan cikappo  
さあ 早く 矢を射る・私たち して あの 小鳥
- 16 カムイ チカッポ トウカン フ アンクル、ホシキウツクル  
kamui chikappo / tukan wa ankur, / hoshkiukkur  
kamuy cikappo tukan wa an kur, hoski uk kur  
神 小鳥 ~を射る して いる 者 最初に ~を取る 者
- 17 ソンノ ラメトク シノ チパパ ネ ルウエ タパン」  
sonno rametok / shino chipapa / ne ruwe tapan”  
sonno rametok sino cipapa ne ruwe tapan”  
本当に 勇者 真に 強い者 ~である のである
- 18 ハウオカイ カネ、テエタ ウエンクル タネ ニシパ ネパ  
hawokai kane, teeta wenkur / tane nishpa nep  
hawokay kane, teeta wenkur tane nispa ne p  
言う(複) しながら 昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である 者
- 19 ポウタリ、コンカニ ポンク コンカニ ポナイ  
poutari, / konkani ponku / konkani ponai  
poutari, konkani pon ku konkani pon ay  
息子たち 金 小さい 弓 金 小さい 矢
- 20 ウエウヌパ ウントウカン コ、コンカニ ポナイ  
uweunupa / untukan ko, / konkani ponai  
ueunu pa un=tukan ko, konkani pon ay  
~に~をつがえる(複) 私・~を射る すると 金 小さい 矢
- 21 シチヨロポク チクシテ シエンカ チクシテ、  
shichorpok chikushte / shienka chikushte,  
si- corpok ci=kuste si- enka ci=kuste,  
自分 ~の下 私・~を~に通す 自分 ~の上 私・~を~に通す

歌ひながら子供等の上を  
私は歌いながら子供たちの上を  
Singing this song, above the children

通りますと、(子供等は)私の下を走りながら  
私を通ると、子供たちは私の下を走って  
I passed, and they ran about beneath me

云ふことには、  
こう言いました、  
saying,

「美しい鳥！ 神様の鳥！  
「美しい鳥！ 神さま鳥！  
"Beautiful bird! Holy bird!

さあ、矢を射てあの鳥  
さあ、早く矢を射てあの鳥  
Whoever shoots at that bird,

神様の鳥を射当てたものは、一ばんさきにつつた者は  
神さま鳥を射た者、一番先に獲った者は  
that holy bird, and gets it first

ほんとうの勇者ほんとうの強者だぞ。』  
真の勇者 まことの強者だぞ』  
is a true warrior, a true champion."

云ひながら、昔貧乏人で今お金持になつてゐる者の  
と言ひながら、むかし貧しかったけれど今は豊かになっている人の  
Saying this, the children of the people who were once poor but were now rich

子供等は、金の小弓に金の小矢を  
子供たちは、金の小弓に金の小矢を  
fixed their little golden arrows to their little golden bows,

番へて私を射ますと、金の小矢を  
つが  
番えて私を射ると、私は金の小矢を  
and when they shot at me, I passed the little golden arrows

私は下を通したり上を通したりしました。  
自分の下に通したり上に通したりしました。  
beneath me and above me.

- 22 ラポキタ、ヘカチウタラ トウムケヘタ  
rapokita, / hekachiutar / tumukeheta  
rapoki ta, hekaci utar tumukehe ta  
その間 に 男の子 たち ~の中 に
- 23 シネ ヘカチ ヤヤン ポンク ヤヤン ポナイ  
shine hekachi / yayan ponku / yayan ponai  
sine hekaci yayan pon ku yayan pon ay  
一人の 男の子 普通の 小さい 弓 普通の 小さい 矢
- 24 ウコアニ イエウタンネ、チヌカラ チキ  
ukoani / iyeutanne, / chinukar chiki  
ukoani ieutanne, ci=nukar ciki  
~を両方持つ 仲間に入る 私・~を見る したら
- 25 ウェンクル ポホ ネ コトムノ イミ カ ワノ  
wenkur poho / ne kotomno / imi ka wano  
wenkur poho ne kotomno imi ka wano  
貧乏人 ~の息子 ~である らしく 着物 ~の上 から
- 26 アコエラマン。 キフネコロカ シクトウモロケ  
akoeraman. / Kipnekorka / shiktumorke  
a=koeraman. ki p ne korka siktum-orke  
人・~で~がわかる けれども 目つき ~の所
- 27 チウワンテ コ、ニシパサニ ネコトムノ、シンナイ  
chiuwante ko, / nishpasani / nekotomno, / shinnai-  
ci=uwante ko, nispa sani ne kotomno, sinnay  
私・~をよく見て調べる すると 物持ち ~の子孫 ~である らしく 違う
- 28 チカパネ イエウタンネ。 アニヒ ナッカ ヤヤン ポンク  
chikapne / iyeutanne. / Anihi nakka / yayan ponku  
cikap ne ieutanne. anihi nakka yayan pon ku  
鳥 として 仲間になる 彼 も 普通の 小さい 弓
- 29 ヤヤン ポナイ ウエウヌ ワ ウンラマンテ コ、  
yayan ponai / uweunu wa / unramante ko,  
yayan pon ay ueunu wa un= ramante ko,  
普通の 小さい 矢 ~に~をつがえる して 私・~を狙う すると
- 30 テエタ ウェンクル タネ ニシパネブ ポウタリ エウミナレ  
teeta wenkur / tane nishpanep / poutari / euminare  
teeta wenkur tane nispa ne p poutari euminare  
昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である 者 ~の息子たち ~をみんなで笑う
- 31 エネ ハウオカイ：——  
ene hawokai : ——  
ene hawokay i : ——  
このように 言う(複) こと
- 32 「アチカラ タ ウェンクル ヘカチ  
“ Achikara ta / wenkur hekachi  
“ acikara ta wenkur hekaci  
なまいきな (強調) 貧乏人 男の子

其の中に、子供等の中に  
そうしていると、子供たちの中に  
While I was doing this, one child,

一人の子供がたゞの(木製の)小弓にたゞの小矢  
一人の子供が普通の小弓に普通の小矢  
a boy with a plain little bow and a plain little arrow,

を持つて仲間にはいつてみます。私はそれを見ると  
を持つて仲間の中にいるのが目にとまりました。私はそれを見て  
caught my eye. When I looked at him,

貧乏人の子らしく、着物でも  
すぐに貧しい人の子供だろうと着ている着物からも  
I could tell right away from his clothing

それがわかります。けれどもその眼色を  
それが分りました。しかし、その子の眼を  
that he was the child of a poor man. But when I looked into his eyes

よく見ると、えらい人の子孫らしく、一人変り  
よく見ると、立派な人の子孫らしく思われ、まるでその子は別の  
I saw that he was the descendant of a great man, and it was as though a bird of a different feather

者になつて仲間入りをしてみます。自分もたゞの小弓に  
種類の鳥が群の中に混っているようなありさまでした。けな気にもその子が普通の小弓に  
were mixed in with the flock. Admirably, that child

たゞの小矢を番へて私をねらひますと、  
普通の小矢を番へて私をねらっていると、  
fixed a plain arrow to his plain bow and aimed at me, and when he did

昔貧乏人で今金持の子供等は大笑ひをして  
むかし貧しかったが今は豊かになっている人の子供たちは皆で笑いながら  
the children of the people who were once poor and were now rich

云ふには、  
こう言いました。  
said as follows:

「あらかしや貧乏の子  
「これはあきれた。貧乏人の子が  
"Well, would you look at that! The child of the poor man

- 33 トアン チカッポ カムイ チカッポ アオカイウタラ  
toan chikappo / kamui chikappo / aokaiutar  
toan cikappo kamuy cikappo aokay utar  
あの 小鳥 神 小鳥 私 たち
- 34 アコロ コンカニアイ カ ソモウク コ、 エネブコラン  
akor konkaniyai ka somouk ko, / enepkoran  
a=kor konkani ay ka somo uk ko, e=nepkor an  
私・～の 金 矢 も ない ～を取る すると お前・～のように ある
- 35 ウェンクル ヘカチ コロ ヤヤナイ ムニンチクニアイ  
wenkur hekachi / kor yayanai / muninchikuniai  
wenkur hekaci kor yayan ay munin cikuni ay  
貧乏人 男の子 ～の 普通の 矢 腐った 木 矢
- 36 トアン チカッポ カムイ チカッポ シノシノ  
toan chikappo / kamui chikappo / shinoshino  
toan cikappo kamuy cikappo sino sino  
あの 小鳥 神 小鳥 本当に 本当に
- 37 ウク ナンコロ フ。」  
uk nankor wa.”  
uk nankor wa.”  
～を取る だろう よ
- 38 ハウオカイ カネ ウェンクル ヘカチ ウコオテレケ  
hawokai kane / wenkur hekachi / ukooterke  
hawokay kane wenkur hekaci ukooterke  
言う(複) しながら 貧乏人 男の子 ～をみんなで踏みつける
- 39 ウコキツキ。 キブネコロカ ウェンクル ヘカチ  
ukokikkik. / Kipnekorka / wenkur hekachi  
ukokikkik. ki p ne korka wenkur hekaci  
～をみんなで殴る けれども 貧乏人 男の子
- 40 センネ ポンノ エコッタヌ ウネヨコ。  
senne ponno / ekottanu / uneyoko.  
senne ponno ekottanu un=eyoko.  
ちつとも～ない 少し ～に気を留める 私・～を狙う
- 41 シリキ チキ イホマケウトウム チヤイコレ。  
Shirki chiki / ihomakeutum / chiyaikore.  
sirki ciki ihoma kewtum ci=yaykore.  
様子である したら あわれむ 心 私・～を自らに持たされる
- 42 「シロカニペ ランラン ピシカン、  
“Shirokanipe ranran pishkan,  
“sirokani pe ran ran piskan,  
銀 滴 降る 降る ～のまわり
- 43 コンカニペ ランラン ピシカン。」 アリアン レクポ  
konkanipe ranran pishkan.” arian rekpo  
konkani pe ran ran piskan.” ari an rekpo  
金 滴 降る 降る ～のまわり と ある 小さい鳴き

あの鳥、神様の鳥は私たちの  
あのような鳥、神さま鳥をねらっているぞ。  
is aiming at that bird, that holy bird!

金の小矢でもお取りにならないものを、お前の様な  
私たちの金の小矢でさえお受けとりにならないのに、お前のような  
Why, that bird wouldn't even take our little golden arrows. It would be a miracle

貧乏な子のたゞの矢腐れ木の矢を  
貧乏人の子の普通の矢、腐った矢を  
if such a bird, a holy bird

あの鳥、神様の鳥がよくよく  
あのような鳥、神さま鳥がまさか  
were to take a plain arrow, a rotten arrow

取るだろうよ。」  
お受けとりになるだろうか」  
from a poor child like you."

と云って、貧しい子を足蹴にしたり  
と言って貧しい子を皆で踏みつけたり  
Saying this, they all trampled on the poor boy

た、いたりします。けれども貧乏な子は  
なぐったりします。けれども貧しい子は  
and punched him. But the poor boy

ちつとも構はず私をねらつてみます。  
少しも気にせず私をねらいます。  
did not pay them a bit of attention.

私はそのさまを見ると、大層不憫に思ひました。  
その様子を見て私はとてもあわれになりました。  
Seeing this, I felt terribly sorry for him.

「銀の滴降る降るまはりに、  
「銀の滴降る降るまわりに  
"Silver drops fall, fall, all around;

金の滴降る降るまはりに。」といふ歌を  
金の滴降る降るまわりに」という歌を  
gold drops fall, fall, all around."



44 チキ カネ モイレタラ カムイニシ カシ  
 chiki kane / moiretara / kamuinish kashi  
 ci=ki kane moyretara kamuy-nis kasi  
 私・～をする しながら ゆっくりと 神 空 ~の上

45 チコシカリンパ、 ウェンクル ヘカチ  
 chikoshikarinpa, / wenkur hekachi  
 ci=kosikarimpa, wenkur hekaci  
 私・～を何度も回る 貧乏人 男の子

46 オアッチキリ オトウイマアシ オアッチキリ オハンケ アシ、  
 oatchikiri / otuimaashi / oatchikiri / ohanke ashi,  
 oatickiri otuyma-asi oatickiri ohanke-asi,  
 片足 遠くに～を立てる 片足 近くに～を立てる

47 ポクナパプシ シコルキ ヨコ ワ アナイネ  
 poknapapushi / shikoruki / yoko wa anaine  
 pokna papusi sikoruki yoko wa an ayne  
 下の くちびる ~を自らに向けて 狙う して いる したあげく  
 飲み込む

48 ウンコトウスラ、 タパン ポナイ エクシリコンナ  
 unkotushura, / tapan ponai / ekshirkonna  
 un=kotusura, tapan pon ay ek sir konna  
 私・～に矢を放つ この 小さい 矢 来る 様子 は

49 トンナタラ、 シリキ チキ チサンテケヘ  
 tonnatara, / shiriki chiki / chisantekehe  
 tonnatara, siriki ciki ci=santekehe  
 輝いている 様子である したら 私・～の手

50 チトウルパ ワ ネアン ポナイ チエシカリ  
 chiturpa wa / nean ponai / chieshikari  
 ci=turpa wa nean pon ay ci=esikari  
 私・～を伸ばす(複) して その 小さい 矢 私・～をつかむ

51 シカチカチアシ ラパシ フミ  
 shikachikachiash / rapash humi  
 si-kaci-kaci=as rap=as humi  
 自らくるくる回る ・私 落ちる(複)・私 音

52 チエキサラスツ マウクルル。  
 chiekisharshut / maukururu.  
 ci=ekisarsut-mawkururu.  
 私・～で耳元に風が当たり続ける

53 イキチアシ アワ、 ネロク ヘカッタラ ウホユツパレ  
 Ikichiash awa, / nerok hekattar / uhoyuppare  
 iki-ci=as awa, nerok hekattar uhoyuppare  
 する(複)・私 したところ その(複) 子供たち みんな一斉に走る

54 ウェノタウプン シオコツパコロ ウヌエトウシマク。  
 wenotaupun / shiokotpakor / unuwetushmak.  
 wen ota upun si-okotpa kor un=uetusmak.  
 ひどい 砂 吹雪 自分の後ろに しながら 私・～を目がけて競争する  
 ~を付ける(複)

歌ひながらゆつくりと大空に  
 私は歌いながら、ゆつくりと大空の上で  
 Singing this song, I slowly circled

私は輪を糸がいてみました。貧乏な子は  
 円を描いていました。貧しい子は  
 in the sky. The poor boy

片足を遠く立て片足を近く立て、  
 片足を遠くに立て、もう片足を近くに立てて  
 planted one foot far away and planted one foot nearby, and

下唇をグツと噛みしめて、ねらつてみて  
 下唇をぐっと噛みしめ十分ねらってから  
 biting his lower lip hard and aiming carefully,

ひようと射放しました。小さい矢は美しく飛んで  
 私に矢を射放ちました。その小さな矢は飛んで来て  
 he shot an arrow at me. The little arrow

私の方へ来ました、それで私は手を  
 キラキラと光の線を描きました。それを見て私は手を  
 drew a sparkling line as it flew. When I saw that,

差しのべてその小さい矢を取りました。  
 さしのべて、その小さな矢を取りました。  
 I put out my hand and took the little arrow.

クルクルまはりながら私は  
 くるくる回りながら私が降りていくと  
 Spinning round and round, I fell

風をきつて舞下りました。  
 耳元で風がヒューヒュー鳴りました。  
 with the wind whistling in my ears,

すると、彼の子供たちは走つて  
 すると、あの子供たちは、いっせいに走り出し  
 and the children began running all at once,

砂吹雪をたてながら競争しました。  
 ひどい砂ほこりを立てながら私めがけて突進してきました。  
 stirring up a terrible cloud of dust as they charged toward me.

- 55 トイトイ カタ ハチラシ コイラムノ ホシキノポ  
 Toittoi kata / hachirash / koiramno / hoshkinopo  
 toytoy ka ta hacir=as koiramno hoskino-po  
 土 ~の上に 落ちる・私 と同時に 最初に (強調)
- 56 ウェンクル ヘカチ ウンコシレパ ウネシカリ。  
 wenkur hekachi / unkoshirepa / uneshikari.  
 wenkur hekaci un=kosirepa un=esikari.  
 貧乏人 男の子 私・~に到着する 私・~をつかむ
- 57 シリキ チキ テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネ  
 Shirki chiki / teeta wenkur / tane nishpa nep  
 sirki ciki teeta wenkur tane nispa ne p  
 様子である したら 昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である 者
- 58 ポウタリ イヨシノ ホユツパ ワ アラク、  
 poutari / iyoshino / hoyuppa wa arki,  
 poutari iyosino hoyuppa wa arki,  
 ~の子どもたち その後から 走る(複) して 来る(複)
- 59 トウワン ウェニタク レワン ウェニタク スイパ カネ  
 tuwan wenitak / rewan wenitak / shuipa kane  
 tu-wan wen itak re-wan wen itak suypa kane  
 二つの 十の 悪い 言葉 三つの 十の 悪い 言葉 ~を挿する(複) しながら
- 60 ウェンクル ヘカチ ウコオプトウイパ ウコキツキク。  
 wenkur hekachi / ukooputuipa / ukokikkik.  
 wenkur hekaci uko-oputuypa uko-kikkik.  
 貧乏人 男の子 ~をみんなで押す(複) ~をみんなで殴る
- 61 「シルン ヘカチ ウェンクル ヘカチ  
 “ Shirun hekachi / wenkur hekachi  
 “ sirun hekaci wenkur hekaci  
 つまらない 男の子 貧乏人 男の子
- 62 ホシキ タシ アキ クスネア エイエトウシマク。」  
 hoshki tashi / aki kushunep / eiyetushmak.”  
 hoski tasi a=ki kusu ne p e=i=etusmak.”  
 最初に こそ 私たち・~をする つもりである のに お前・私たち・~の先回りをする
- 63 ハウオカイ コ、ウェンクル ヘカチ ウンカシケ  
 hawokai ko, / wenkur hekachi / uncashike  
 hawokay ko, wenkur hekaci un=kasike-  
 言う(複) すると 貧乏人 男の子 私・~の上
- 64 カム カム ウンホンコキシマ。  
 kamu kamu / unhonkokishma.  
 kamu-kamu un=hon-ko-kisma.  
 に被さる 私・~を腹でつかむ
- 65 フシコトイ ワノ イキ アイネ アイヌウトウル ワ  
 Hushkotoi wano / iki aine / ainuutur wa  
 huskotoy wano iki ayne aynu utur wa  
 長い間 する したあげく 人 ~の間 から

土の上に私が落ちると一しよに、一等先に  
 地面の上に私が降りると同時に一番先に  
 The instant I fell to earth, ahead of all the rest,

貧乏な子がかけて私を取りました。  
 貧しい人の子がやってきて私を取りました。  
 the poor boy came and picked me up,

すると、昔貧乏人で今が金持になつてる者の  
 すると、むかし貧しく今は豊かになっている人の  
 whereupon the children of the people who were once poor

子供たちは後から走つて来て  
 子供たちが後から走って来て  
 but were now rich, ran up behind,

二十も三十も悪口をついて  
 二十も三十も悪態をついて  
 and saying twenty or thirty words of abuse,

貧乏な子を押ししたりたゝいたり  
 貧しい子を皆で突きとばしたりなぐったりしました。  
 they knocked down and punched the poor boy.

「にくたらしい子、貧乏人の子  
 「にくたらしいやつ、貧乏人の子のくせに  
 "You hateful poor boy,

私たちが先にしようとする事を先がけしやがつて。」  
 オレたちが先にしていたことを先にやりやがつて」  
 succeeding at what we tried to do first!"

と云ふと、貧乏な子は、私の上に  
 と言いましたが、貧しい子は私の上に  
 they said, but the poor boy,

おほひかぶさつて、自分の腹にしつかりと私を押へてみました。  
 何回もおおいかぶさつて、私を自分の腹でしっかりと押さえました。  
 throwing himself over me again and again, pinned me down under his belly.

もがいてもがひてやつとの事、人の隙から  
 とても長い間そうやっていてから、ようやく子供たちの間から  
 After a very long time, finally the boy broke away

- 66 ソイコサヌ オロフノ ホユプ フミ タクナタラ。  
 soikosanu / orowano / hoyupu humi / taknatara.  
 soykosanu orowano hoyupu humi taknatara.  
 さっと飛び出す それから 走る 音 短くぱっぱと切れながら続く
- 67 テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネブ ポウタリ  
 Teeta wenkur / tane nishpa nep / poutari  
 teeta wenkur tane nispa ne p poutari  
 昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である者 ~の息子たち
- 68 スマ アリ ニフム アリ ヤブキリ コロカ  
 shuma ari / nihum ari / yapkir korka  
 suma ari nihum ari yapkir korka  
 石 で 木片 で 投げる けれども
- 69 ウェンクル ヘカチ センネ ポンノ エコッタヌ  
 wenkur hekachi / senne ponno / ekottanu  
 wenkur hekaci senne ponno ekottanu  
 貧乏人 男の子 ちっとも~ない 少し ~に気を留める
- 70 ウェノタウプン シオコテ ホユプ アイネ シネ ポンチセ  
 wenotaupun / shiokote / hoyupu aine / shine ponchise  
 wen ota upun siokote hoyupu ayne sine pon cise  
 ひどい 砂 吹雪 自分の後に~を付ける 走る したあげく 一つの 小さい 家
- 71 チセソイケヘ アコシレパ。ポン ヘカチ  
 chisesoikehe / akoshirepa. / Pon hekachi  
 cise soykehe a=kosirepa. pon hekaci  
 家 ~の外 私たち~に到着する 小さい 男の子
- 72 ロルンプライ カリ ウナフンケ クルカシケ  
 rorunpurai kari / unahunke / kurkashike  
 rorunpuray kari un=ahunke kurkasike  
 神窓 から 私~を入れる ~の上一带
- 73 イタコマレ、タプネ タプネ ネカトウフ エイソイタク。  
 itakomare, / tapne tapne / nekatuhu / eisoitak.  
 itak-omare, tapne tapne ne katuhu eisoytak.  
 ~に言葉を入れる このように このように その ~の様子 ~について物語る

飛出しますと、それから、どんどんかけ出しました。  
 その子はとび出しました。それから一目散に走りました。  
 from the other children and ran as fast as he could.

昔貧乏人で今は金持の子供等が  
 むかし貧しく今は豊かになっている子供たちは  
 The children of the people who were once poor but were now rich

石や木片を投げつけるけれど  
 石や木片を投げつけたのですが  
 threw stones and pieces of wood at him, but

貧乏な子はちつとも構はず  
 貧しい子は少しも意に介せず  
 the poor boy paid them not a bit of attention.

砂吹雪をたてながらかけて来て一軒の小屋の  
 砂ほこりを立てながら走り続けて、ようやく一軒の小さな家の  
 Stirring up a cloud of dust, he ran and ran, and finally he came to

表へ着きました。子供は  
 外に着きました。その子は  
 a small house. The boy

第一の窓から私を入れて、それに  
 神窓から私を中に入れながら  
 put me in through the sacred window

言葉を添へ、斯々のありさまを物語りました。  
 言葉を添え、かくかくしかじかとこれまでの有様を語りました。  
 and, in his own words, told what had happened.

## 〔言葉の説明〕

## ・カムイチカフ カムイ kamuycikap kamuy (タイトル)

シマフクロウは、コタン コロ カムイ kotan kor kamuy (村・を持つ・神→村の神)とも呼ばれ、その大きな目で魔が入らないように昼も夜も人間の村を見守っている神さまだと考えられています。なかでも一番大きな役目は、村に食糧不足による飢饉が起こらないように見守ることで、カムイユーカラの類話は、そうした物語が一番多く語られています。この「アイヌ神謡集」の第7話「コンクワ」も、シマフクロウと飢饉に関する話です。また、シマフクロウは、カムイチカフ カムイ (神鳥の神さま)とも、カムイチカフ (神鳥)ともいわれます。

では、なぜシマフクロウは食糧の豊かさや欠乏 (飢饉) と関係するのでしょうか。これについては第7話のコラムで取り上げます。

「イオマンテ」というと「クマ送り」のことが考えられがちですが、道東では「クマ」も「シマフクロウ送り」のことも指します。シマフクロウは、カムイチカフ (神さまの鳥) と呼ばれますが、さらにその後にカムイをつけてカムイチカフ カムイと尊敬の意味を付け加えた言い方がされるのも、この鳥の特別な存在を表わしています。

一方、「フクロウ」のことは、イソ サンケ カムイ iso sanke kamuy (獲物を出す神) といわれ、狩りに行ったときに、その鳴き声で、クマなどの居場所を教えてくれるといわれ、大切にされている神さまです。

## ・ヤイエユカラ yayeyukar (タイトル)

ヤイエユカラ yayeyukar は、yay(自分)と eyukar に分解できます。そして エユカラ eyukar のもとの意味は「～をものまねする」ことです。つまり「自分の体験したことをそっくりまねて表わす」ことがヤイエユカラのもとの意味です。ここではシマフクロウの神さまが自分の体験をまねる (同じように表現する) ことです。それは、「自分自身について物語る」ことでもあります。

## ・シロカニ sirokani、コンカニ konkani (1行目)

シロカニは、日本語の銀を表わすシロカネ (シロガネではなく) から入ったものです。この点については「コラム (2)」でふれたいと思います。また コンカニも日本語の金を表わすコガネ (黄金) から、アイヌ語に入った言葉です。

## ・ペ pe (1行目)

アイヌ語で「水」を表わす言葉に①ワッカ wakka と②ペ pe があります。この他にこれに近いウォロ wor (水の中) という言葉もあります。ワッカ wakka は単独で使う言葉ですが、ペ pe の方は、ほとんど単独では使われず主に合成語の中で使われます。例えば、キナベ kina-pe (草の露)、ヌベ nu-pe (目の水→涙)、トペ to-pe (乳房の汁→乳汁 [母乳])、ノキペ noki-pe (軒の滴→雨だれ) というように。一般に飲む水とは違って、「水滴、汁、水分」といった意味をもっています。

## ・ランラン ピシカン ran ran piskan (1行目)

普通の文ならば、ピシカニ タ ランラン piskani ta ran ran (～のまわり・に・降る・降る) となるはずですが、ここでは、平叙文からはずれ、タ ta (～に) も入れず、ランラン ピシカン ran ran piskan (降る・降る・まわり) となっていて、詩や歌のようになっています。これは一種の唱えごと (呪文のような) のように受けとれます。事実、この言葉は、後に宝物を降らせるという行為につながっていて、ある意味で予告 (お告げ) のようなものになっています。まるで「宝物が降るぞ」と告げるように。

## ・レクポ rek-po (2行目)

レク rek は「鳴く」という自動詞。アイヌ語では自動詞は名詞にもなるので、このレク rek は「鳴き」という意味でチ・キ ci=ki (私が～をする) の目的語になっています。ここでは「私が鳴きをする」(直訳) ということです。これは「私は歌 (鳴き) をうたう」ことです。ポ po は、指小辞といって小さいものを表わす言葉。もともと、ポ po は「子」という意味です。レクポ rekpo とは「小さい鳴き→かわいらしい鳴き」という意味にとってもよいかと思います。もしかすると子供のシマフクロウなのかもしれません。後で、トアン チカッポ toan cikap-po、カムイ チカッポ kamuy cikap-po というように、チカッポ cikap-po (小さい鳥) とも出てくるので幼鳥ではないかとも考えられます。

## ・チキ ci=ki / サパシ sap=as (2～3行目)

アイヌ語の日常語では「私 (が)」は、ク ku= で表わします。例えば、「私が～をする」はク・キ ku=ki といいます。ところがカムイユカラの中では、ク ku= の代わりにチ ci= が使われます。このチ ci= は、日常語では、「私たち (相手を含めない)」という意味です。このようにカムイユカラの中では、神さまの語りなので特別な言葉が使われるのです。ところで、チ ci= は、他動詞に付き、自動詞にはアシ =as が付きます。サパ sap (下りる) は自動詞なのでサパシ sap=as (私が下りる) となります。

(他の例)

チ・ヌカラ ci=nukar (私が～を見る)【他動詞】/ インカラシ inkar=as (私が見る)【自動詞】

チ・エミナ ci=emina (私が～を笑う)【他動詞】/ ミナ・アシ mina=as (私が笑う)【自動詞】

## ・エンカシケ enkasike (3行目)

アイヌ語では「上」を表わす言葉でも、ある物の上に「接触して上」か「離れて上」かで言葉が異なります。「接触して上」は、カ ka といい、「離れて上」はエンカ enka といいます。この場合シマフクロウは村の上空を飛んでいるのでエンカ enka が使われています。

さらに具体的な何か「の上」を表わす場合は、エンカシ enka-si とか、その長い形でエンカシケ enka-si-ke といいます。これを所属形 (何かに所属するので) と呼びます。この場合は人間の村の上なのでエンカシケ enkasike となります。この他、クルカシケ kurkasike もありますが、それは後にふれます。

(例)

アイヌ コタン エンカシケ チクシ aynu kotan enkasike ci=kus

(人間の村の上 [空] を私は通った)

トイ カ タ ハチラシ toy ka ta hacir=as

(地面の上には私は落ちた)

## ・コ ko (4行目)

インカラシ コ inkar=as ko のコ ko とは、「～すると」という意味。沙流方言では コロ kor で表わされます。コロ kor は8行目に出てきて「～しつづ」という意味があります。この神謡集は、知里幸恵の生まれた幌別の方言で書かれています。幌別方言では、「～すると」は コ ko で表わし、「～しつづ」は、コロ kor で表わすように使い分けられています。沙流方言ではどちらも コロ kor です。

## ・ウエンクル wenkur / ニシパ nispa (5行目)

ウエンクルは、wen (悪い) kur (人) なので「悪人」と考えやすいのですが、悪人は ウェンペ wen-pe (悪い者) といいます。なぜ「悪い・人」が「貧乏な人」を意味するのでしょうか。

一方、ニシパ nispa は、とても日本語に訳しにくい言葉です。辞書には「金持ち。長者。裕福で身分の高い男性。紳士。人徳のある人。旦那様」などと出ています。金持ちといってもアイヌの人々はかつて金銭を使ったり、貯えたりしたわけではありません。今の感覚では、金持ちと人徳のある人とは、あまり一致しません。むしろ相反することの方が多いともいえます。ではニシパとは本来どのような意味だったのでしょうか。

アイヌ語のニシパ nispa は、次のような背景から生まれた言葉だと考えられます。神々(動物や植物など)にきちんと対応し、行い正しく生きていけば、狩りに行っても沢山の獲物に恵まれ、山や川や海でも山菜や魚が豊富に手に入ることになる、つまり、行い正しく暮らしていれば、人徳も授かり、暮らしも豊かになるという世界観で生きていたのです。ここでは、裕福さと人徳は一体となったものだったのです。一方、行い悪く(ウエン wen)暮らしている人は、自然に狩りや猟に行っても獲物が手に入らなくなってしまうので「貧乏な人」になってしまうと考えられたのです。このテキストの184～186行に出てくる言葉は、まさにそれを裏打ちしています。

何に対して正しく、何に対して悪い(ウエン wen)のでしょうか。それは、神々(カムイ ウタラ)に対してです。このあとに出てくる物語には、人間と神々の関係から、豊かになったり、その反対に飢饉に見舞われたりする話が幾つも出てきます。

## ・ネ ne (6行目)

ネ ne はよく「～である」という意味で使われます。例えば、25行目のウエンクル ポホネ wenkur poho ne (貧しい人の子である)のように。しかし、ネ ne にはもう一つ「～になる」というように、変化して「～になる」という意味があります。この6行目のネ ne は、この「～になる」という意味で使われています。かつて貧しかった者が豊か「になる」、そして、かつて豊かだった者が貧しく「なる」ことを表わしています。この「～になる」という変化こそがこの物語をつき動かしていく原動力になっているのです。その変化はある種の異変でもあるからで、それをシマフクロウの神さまは鋭く察知したことから物語は展開します。

## ・アク ak (7行目)

アク ak は「射る」(自動詞) こと。「～を射る」は トウカン tukan (他動詞) といいま

す。この他、チョッチャ cotca (～を射当てる) という言葉も後に出てきます。

ここでは、アク シノツ ポン ク ak-sinot-pon-ku (射る遊びの小さな弓) と出ていますが、シノツ ポン ク sinot-pon-ku (遊び用の小弓) でも意味は変わりません。アク ak を加えたのは、音節をふやして5音節にしようとしたからです。この7行目の他の語も、例えばヘカッタラ hekattar でいいものをその前にアイヌ aynu を加えたりしていますが、みな音節をふやして5にするためのものです。このようにカムイユカラの中の言葉は、歌のリズムを保つために日常語とは異なったものに变化させる技巧がさまざまに凝らされています。

## ・ウンチヨロポケ un=corpoke (12行目)

ここに出てくる ウン un= は「私に」という意味です(目的格)。例えば、ウンクレ un=kure (私に飲ませてくれる) のように。同じ「私」でも、前に出てきた主格のアシ =as や チ =ci、そして目的格の ウン un= と三つの語(人称接辞と呼ばれます)が使い分けられます。これをまとめると次のようになります(神謡での場合)。

(人称接辞)

- ・アシ =as (私が) 主格(自動詞につく)
- ・チ ci= (私が) 主格(他動詞につく)
- ・ウン un= (私に) 目的格

(例)

- インカラシ inkar=as (私が見る)
- チ・ヌカラ ci=nukar (私が～を見る)
- ウン・ヌカレ un=nukare (私に見せる)

## ・ハウオカイ hawokay (13行目)

アイヌ語の動詞には単数形と複数形をもつものがあります(全てではありません)。このハウオカイ hawokay (言う) も複数形です。単数形はハウエアン hawean (言う)。このハウオカイ hawokay も元はハウエオカイ haweokay。アン an (ある) の複数形はオカイ okay (ある) です。この主語は、ヘカチウタラ hekaci utar (子供たち) なので複数形が使われているのです。

## ・カムイ チカッポ kamuy cikap-po (14行目)

シマフクロウは、カムイチカッポ kamuy cikap (神鳥) とも呼ばれます。しかし、ここでは、ピリカ チカッポ pirka cikap (美しい鳥) と対句の表現になっているので、シマフクロウという意味のカムイチカッポ kamuy cikap ではなく「神のような鳥。立派な鳥。すばらしい鳥」という意味で使われています。カムイ kamuy という言葉は(連体)形容詞として使われて「すばらしい」という意味で使われることがあります。

(例) カムイ シリピリカ kamuy sirpirka (すばらしい晴天)

後に付いている ポ po は指小辞といって「小さいもの」とか「かわいいもの」を表わします。このシマフクロウは字義通り受けとれば幼鳥ではないかと思われま。ポ po は、また親しみを表す語でもあり、その場合は「すばらしい鳥さん」という意味になります。

## ・アカシ ak=as (15行目)

この場合のアシ =as は、「(相手を含めない) 私たち」という意味。ここは引用文の中なので「私」ではなく「私たち」という意味で使われています。アイヌ語には、同じ「私た

ち」でも、相手側を含めない「私たち」の場合には、日常語で チ ci= (他動詞に付く場合)、アシ =as (自動詞に付く場合) を用い、相手側を含める「私たち」の場合には、ア a= (他動詞に付く)、アン =an (自動詞に付く) を用いる、というように使い分けられています。日本語にはこうした用法がないので少しとまどってしまうことでしょう。しかし、中国語や他の幾つかの言語でもこのように使い分けています。

#### ・ラメトク rametok (17 行目)

ラメトク rametok は「勇敢」という意味。村の長となる者の持つべき三つの徳というのがあります。①パウエトク pawetok (雄弁) ②ラメトク rametok (勇敢) ③シレトク siretok (器量よし) の三徳です。それぞれは次のように分解できます。

- ・ pawetok < pa-etok (口・の前) 口がすぐれている
- ・ rametok < ram-etok (心・の前) 心がすぐれている
- ・ siretok < sir-etok (様子・の前) 様子 (器量) がすぐれている

男は儀式のときにカムイ(神)に対して雄弁に対応しなければならないし、争い事が起こったときには、チャランケ caranke (弁論) でも雄弁さが必須となります。また、狩猟に行ったときクマなどに対したときに勇敢でなければなりません。また、儀礼においても弁論においても押し出しがよく(器量がすぐれている)なくては迫力に欠けます。こういうわけでリーダーには三徳が必要とされました。

#### ・ウエウヌパ ueunu pa (20 行目)

ウエウヌ パ ueunu pa は、29 行目に出てくる ウエウヌ ueunu (を番える) に複数を表す パ pa が付いたものです。ウエウヌ ueunu は、< u-e-unu (互いに・～で・をはめる) と分析できます。別々のものを合わせること。ここでは子供たちが主語なので複数形が使われています。しかし同じ行のトゥカン tukan (を射放つ) という動詞は、複数の形になっていません。このようにアイヌ語動詞の複数形は、ひと言で説明しきれない難しさがあります。

#### ・シチヨロポク チクシテ sicorpok ci=kuste (21 行目)

シチヨロポク チクシテ sicorpok ci=kuste (自分の下に私は [矢] を通す) ということは、シマフクロウが自分の意志で矢を下にやり過ごすこと。もし受けとろうとすれば手(羽根)を伸ばして取ることとなります。射た矢が外れるということは、シマフクロウが自分の意志で受けとらないということを意味しています。

#### ・シネ ヘカチ sine hekaci (23 行目)

シネ ヘカチ sine hekaci で「一人の子供」と訳すと、シネ sine が「一人」と考えてしまいがちですが、シネ sine は「一つの」という意味で、「一人」は、シネン sinen といいます。しかし「一人の子供」をアイヌ語に直訳してシネン ヘカチ sinen hekaci とは言いません(ヘカチ シネン hekaci sinen とは言えますが、この場合は「子供一人」という意味)。シネ チァ sine cip (一隻の船)、シネ メノコ sine menoko (一人の女)、シネ セタ sine seta (一頭の犬)、シネ チェパ sine cep (一匹の魚)、シネ カンピ sine kampi (一通の手紙) のように、一隻の、一人の、一頭の、1 匹の、1 通の、と日本語でいうのを

アイヌ語では、ただ、シネ sine (一つの) というだけです。

#### ・イエウタンネ ieutanne (24 行目)

イエウタンネ ieutanne (仲間になる) は、< i-e-utar-ne (人・において・仲間・になる) と分解できます。utar の r は n の前にあるため utan になります。

#### ・渡り音

ieutanne と表記されるのは、母音同士が隣り合うときにアイヌ語の場合「渡り音」が入るためです。母音から母音に移るときに入る子音が渡り音です。

(渡り音の例)

- ・ uweunupa < u-w-eunupa (番つがえる)
- ・ ieutanne < i-y-eutanne (仲間になる)
- ・ pawetok < pa-w-etok (雄弁)
- ・ uwepeker < u-w-epeker (ウエペケレ、昔話)

ただし、テエタ teeta のような語の場合は、テ と エ を区切るように発音します。

知里幸恵のユキエという名前を彼女はノートにローマ字で Yukiye というようにちゃんと渡り音を入れて書いています。ただ日本語の場合でも イエウタンネ と書いてそれを発音しても イ と エ の間に軽い渡り音が自然に入ります。それで、カナ表記では渡り音を入れずに書くルールにこの解説書ではしています(原則として)。ですから、よく イヨマンテ iyomante と渡り音の y を入れて書かれますが、このルールで書くと イオマンテ iomante となります。同じようにウエペケレ uwepeker も、ウエペケレ uepeker と表記しています。ウエペケレだと初めての人にはどのように読んでいいのか困惑してしまいます。

ところがパウエトク pawetok の場合は慣用でこのままの表記にしています(パエトクではなく)。このように、ルールが徹底しているわけでもないのです。しかし、先の uweunupa や ieutanne を ウエウヌパ とか イエウタンネ と書いても、初心者には、どう読んでよいかわからず困ってしまうので、渡り音を入れない書き方にしています。

#### ・シクトウモロケ sik-tum-orke (26 行目)

シクトウモロケ sik tum orke は、「目・の中・の所」→「目つき」のこと。テキストの中の知里幸恵の注でも「人の素性を知ろうと思う時、その眼を見ると一ぱんよくわかる」と書いています。私自身もアイヌの人に眼を見られて判断された経験があります。今でも目を見てその人の素性を見ることを行っている人がいるのです。黒目の部分がよく動いたりキョロキョロするのはよくないとされ知里幸恵も「少しキョロキョロしたりすると叱られます」と注で書いています。日本人の間でも「目は口ほどに物を言い」とか「目は心の窓」という言葉があり、人相を見るときでも目は重要な要素で、目の光、その力などを細かく見ています。とくに三白眼といって黒目の下に白い部分が露出している目は一般的にもよくないとされ、そうした目をもつ人間には気をつけなければならないといわれています。

このテキストに出てくる貧しい子供の目は、きっと澄んで落ちつきのある目をしていただろう。

#### ・ニシパ サニ nispa sani (27 行目)

その子の目つきをよくみると ニシパ サニ nispa sani (立派な人の子孫) であることがわかるのですが、ニシパは前にも述べたように、正しい行いをして暮らすことで人徳も豊かさも備わった人のこと。サニ sani は、< san-i (下りる・もの) つまり、祖先から代々下ってきた者で、子孫のこと。

#### ・シンナイ チカフ ネ sinnay cikap ne (27～28 行目)

童話の「みにくいアヒルの子」のように、鳥の群の中で一羽だけ違った羽根の色をしている鳥のことがシンナイ チカフ (別の鳥) のこと。シマフクロウ神には、その子の存在が周囲の子とはとても違って見えたのでした。この場合のネ ne は「～として」の意味。

#### ・アニヒ anihi (28 行目)

アニヒ anihi は「彼」という意味の幌別方言。沙流方言では、シヌマ sinuma。

#### ・エウミナレ euminare (30 行目)

エウミナレ euminare は< e-u-mina-re (～について・みんなで・笑う・使役) で「～をみんなで笑う」という意味。

#### ・エネ ハウオカイ ene hawokay i (31 行目)

この言葉は、次に出てくる引用文を導入するときの常套句で「次のように語りました」の意味。単数形では、エネ ハウエアニ ene hawean i (直訳すると、このように・言う・こと)。

#### ・アチカラ タ acikara ta (32 行目)

アチカラ acikara は「なまいきな!」という意味。タ ta は強調。また、大きな音などに驚いたときにアチカラ! (びっくりした!) とかアチカラタ! (わあ! 何事だ!) というようにも使います。

#### ・アオカイ aokay (33 行目)

アオカイ aokay は「私たち」という意味の代名詞。沙流方言では、アオカ aoka (私たち)。動詞に付くときはア a= (人称接辞)。

#### ・ソモ somo (34 行目)

アイヌ語で否定文を作るときは、このソモ somo を動詞の前に置きます。アイヌ語と日本語は語順がとてもよく似ていますが、否定のときには、逆転して、ソモ ウク somo uk (～しない・取る→取らない) となります。この点については、[参考] でも述べます。

#### ・エネアコラン e=nepkor an (34 行目)

エ e= は「おまえ。あなた。あなた」という意味の人称接辞 (主格)。ネアコロ nepkor は、「のように」。e=nepkor an (おまえ・のように・ある) →「おまえのような」という意味。

#### ・ムニン munin (35 行目)

アイヌ語では「腐っている」という言い方は物によって違います。木などには、ムニン munin を使い、肉や動物の場合には、ホロセ horse、調理した穀類には、ニポッケ nipopke を使います。

(例)

- ・ムニン チクニ munin cikuni (腐れ木)
- ・ホロセ カム horse kam (腐った肉)
- ・ニポッケ メシ nipopke mesi (酸えたご飯)

#### ・シノシノ ウク ナンコロ ワ sino sino uk nankor wa (36～37 行目)

この「本当に本当に (シマフクロウの神さまは) お受け取りにだらうよ」というのは反語的な言い方で、意味は「受け取るはずはない」というもの。

アイヌ語の動詞には、過去や未来の变化形はありません。そのかわりに、未来のことならば、このナンコロ nankor (～だらう) を付ければわかります。

#### ・ウコオテレケ uko-oterke / ウコキッキク uko-kikkik (38～39 行目)

ここで使われるウコ uko は「互いに」ではなく「一緒に」という意味です。成金の子がみな「一緒に」貧しい子を殴る蹴るしたのです。

#### ・キヤネコロカ kipne korca (39 行目)

ここでは、コロカ korca (しかし) でも十分なのですが、音節をふやすためにキヤネ kipne を加えたもので意味は変わりません。このように神謡の中では、音節をふやすのに語を加えるので、実用文とは違いどうしても装飾的な韻文になってしまいます。もっとも、サケへのリズムにのせてこの雅びやかな言葉を楽しむのも神謡ならではのものといえるでしょう。

#### ・センネ senne (40 行目)

センネ senne も否定を表わす言葉で、ソモ somo と同じように不定する動詞の前に置かれます。センネ ポンノ senne ponno (ない・少し) で「少しも～しない」という意味。

#### ・イホマケウトウム チヤイコレ ihoma kewtum ci=yaykore (41 行目)

これは神謡などで慣用的に使われる表現。日常語では使わない表現です。イホマ ケウトウム チヤイコロパレ ihoma kewtum ci=yaykorpale (私は、あわれの情を催した) という表現もあります。イホマ ihoma (あわれに思う)、ケウトウム kewtum (心)。チヤイコレ ci=yaykore は、< ci-yay-kor-e (私は・自分に・持た・せる) →私は持つ。つまり、単にチコロ ci=kor (私は持つ) と言ってもよいのですが、音節をふやしながら装飾的な言い方をしたものです。

#### ・モイレタラ moyretara (44 行目)

モイレタラ moyretara は、< moyre-tara。モイレ moyre は「ゆっくり」、タラ -tara は、その状態が持続することを表わします。

カムイ (神) というものは、ゆっくりとした動作をするものだとされ、他の神謡でも神の

動作を極端にゆっくりと描写しているものもあります。

・カムイニシ kamuy-nis (44 行目)

カムイ ニシ kamuy nis は直訳すれば「神の空」ですが、この場合のカムイも 14 行目と同じように「すばらしい」とか「立派な」という意味で、知里幸恵は「大空」と訳していません。

・シコルキ sikoruki (47 行目)

シコルキ sikoruki は < si-ko-ruki (自分・に向かって・を飲み込む) で、下唇を自分の方に飲むこと。歯で下唇をかみしめるとこのような形になります。

・エクシリコンナ トンナタラ ek sir konna ton-natara (48 ~ 49 行目)

エク シリ コンナ ek sir konna (来る・様子) のコンナ konna は音節をふやすため、意味はとくにありません。トンナタラ ton-natara のトン ton は < tom で「ピカッと光る」こと。ナタラ -natara は「持続を表わす」のでその光るさまが持続している様子。矢が光りながら尾を引くように飛んで来たことを表わします。

・エシカリ esikari (50 行目)

エシカリ esikari は「～をつかまえる」。シマフクロウ神が自らの意志でその矢をつかまえること。それは、別の見方(現代の我々の見方)からすれば矢が命中すること。

51 行目のラパシ rap=as (降りる・私) もシマフクロウの意志なので「降りる」(落ちるではなく)。

・ウホユツパレ uhoyuppare (53 行目)

ウホユツパレ uhoyuppare は、< u-hoyuppa-re で「みんなで走る」という意味。30 行目のエウミナレ e-uminare (～についてみんなで笑う) と同じ語構成。

・イキチアシ ikici=as (53 行目)

イキチ ikici は、イキ iki (ものをする) にチ -ci が付いたもの。チ -ci は「くりかえしや継続」をあらわします。イキチ・アシ ikici=as で「私がそうやっている」という意味。

・ウェノタウプン シオコツパ wen ota upun siokotpa (54 行目)

ウェン wen は「ひどい」。オタ ウプン ota upun は「砂吹雪」。シオコツパ siokotpa は < si-o-kot-pa (自分の・尻・に付く・複数) で、ひどい砂ほこりを自分の後に立てる、という意味。

・ウヌエトウシマク un=uetusmak (54 行目)

ウン un は「私に」、ウエトウシマク uetusmak は「互いに先を争う」で、「先を争って私に向かってくる」こと。

・ウコオプトウイパ ウコキツク uko-oputuypa uko-kikkik (60 行目)

このウコ uko も「一緒に」という意味。貧乏な子を「みんなで押ししたり、殴ったりする」こと。

・ホシキ タシ アキ クスネ hoski tasi a=ki kusu ne p (62 行目)

「先にオレがしようとしたのに(先がけしやがって)」というのは常套句。「ペナンペ、ペナンペ物語」などによく出てくる言葉。タシ tasi は「強め」。クスネ kusu ne は「～しようとしている」という未来表現。p は、「～のに」という意味。

・カム カム ウンホンコキシマ kamu kamu un=honkokisma (64 行目)

カム kamu は「～を覆う」。カム カム kamu kamu は、シマフクロウをおさえようとして何回も覆いかぶさろうとすること。ウンホンコキシマ un=hon-ko-kisma は、「私を・腹・と共に・つかまえる」こと。

・フシコトイ ワノ huskotoy wano (65 行目)

この言葉は「はるか昔から。」大昔からという意味の慣用句。直訳すると husko toy wa no (古い・土地・から) ですが、このトイ toy は「ひどい」という程度がはなはだしい意味でも使われます。フシコトイ husko-toy で「ずっと古く(から)」という意味。

・ソイコサヌ soykosanu (66 行目)

コサヌ -kosanu は、動詞の語根に付いて、「急に～する」という意味にします。ソイコサヌ soy-kosanu で「パッと外に出る」こと。複数形のコサンパ -kosanpa が接尾することもあります。

・ホユブ フミ タクナタラ hoyupu humi tak-natara (66 行目)

ホユブ フミ hoyupu humi は、「走る音」。タクナタラ taknatara のナタラ -natara は、接続を表わす接尾語。タク tak はタクネ takne (短い) の構成部分。タクナタラ tak-natara で、「短く小刻みに」「タッタッタツツと」。直訳的な意味は「走る音はタッタッタツツと」。

・アリ ヤツキリ ari yapkir (68 行目)

ヤツキリ yapkir は、「投げる」という自動詞。そのため目的語(石や木片)をとるためには、アリ ari (～で) という後置副詞を必要とします。エヤツキリ eyapkir 「～を投げる」(他動詞)だとアリ ari は必要なくなります。日本語の「投げる」は、自動詞だか他動詞だか分りにくい言葉なので、アイヌ語のこうした区別は、簡単には理解しにくいものがあります。

・アコシレバ a=kosirepa (71 行目)

この場合のア a= は、どういう意味でしょうか。神謡の中では、原則的に主人公の「私」をチ ci=、アシ =as で語っていきます。そして引用文の中ではア a=、アン =an で語ります。しかし、ここは引用文ではないのにア a= が使われています。

この場合のア a= は、「私たち(子供とシマフクロウ)」を表わしていると考えられます。「私たちは家の外に到着した」という意味になります。



### ・ロルンプライ *rorun puray* (72 行目)

ロルン プライ *rorun puray* は「神窓」のこと。知里幸恵の生まれた幌別では神窓が東側に向けて作られました。ロルン *rorun* は、< *ror-un* (上座・にある) という意味。プライ *puray* は「窓」。沙流、千歳などでは *プヤラ puray* といいます。神窓は、人間の出入口と反対側に作られ、カムイ (神) だけの専用の出入口となり、山で獲ってきたクマ (キムンカムイ) なども解体した後みなこの窓から家の中に入れます。

興味深いことに神窓の方向は地域によって違いがあります。おおまかにいって静内から西の方では、東に向けて神窓が作られます。そちらが上座の方向になるわけです。一方、静内から東の方では、川の上流に向けて神窓が作られました (切替英雄氏の研究による)。なぜこのような違いが生じたのでしょうか。この問題を追究していけば、さらに興味深いことが分ってくることでしょう。

### ・クルカシケ *kurkasike* (72 行目)

アイヌ語で「上」を表わす言葉には、エンカ *enka* 「(離れて) 上」、カ *ka* 「(接して) 上」という例が、3 行目や 55 行目に出てきました。もう一つクルカシケ *kurkasike* という言葉もあります。これは「(面的なものの) 上」のこと。*kurkasike* は、分析すると *kur-ka* (影・上) で、*kasi* は、*ka* の所属形。*kasi-ke* は、その長い形。ここでは、神窓から入れる動作の～の上に、というのが元の意味でしょう。しかしクルカシケ *kurkasike* で慣用的に「～しながら」という意味に使われます。

### 【参考】

この [参考] では、これまでよく分からなかった不明語や難語などに新しい考察を試みてみました。これはあくまでも試みとして行った仮説です。何かの参考になれば幸いです。

### ・ソモ *somo* (34 行目)

前にも述べましたとおりアイヌ語と日本語は語順が実によく似ています。唯一とっていい例外が否定をあらわす言葉です。その代表格がソモ *somo* です。なぜソモ *somo* だけ異っているのでしょうか。

そこで、発想を逆転させて、ソモ *somo* も日本語と同じ語順だと考えてみたらどうでしょうか。ソモ *somo* を動詞にかかる副詞と考えるのです。

ところで、「ない」を表わす言葉にはもう一つ *イサム isam* があります。ナア *カンピ エク* *isam naa kampi ek isam* (まだ手紙が来ていない。) というように使われます。*isam* の *i* は「もの」を表わすようです。すると「ない」を表わす意味は *サム sam* にありそうです。そこで *サム sam* を否定を表わす言葉のもとだと考えてみました。*no* は副詞化する言葉です。すると *somo* の元は次のように推定できるのではないのでしょうか。

*sam no* (「～なしに」の意味)

*sam no* の *m* と *n* が熟合して *mo* になり *mo* の *o* にひっぱられてその前の *sam* の *a* が *o* に

変化して *somo* になったという道筋が考えられます。そして意味は副詞として「～なしに」となります。

もう一つの否定語に *センネ senne* があります。これも *sam* という自動詞が名詞化して *sam ne* → (*m* が *n* に引かれて) *san ne* → (*a* が後の *e* に引かれて) *sen-ne* という道筋が考えられます。

一つの試論として提示してみました。

### ・シカチカチ *sikacikaci* (51 行目)

*シ si* は「自分」だと考えられます。では *カチカチ kacikaci* は、どういう意味でしょうか。次のように考えてみました。

*kacikaci* < *kari-kari*

*kari* は「まわる」という意味。*si-kari-kari* で「自分がくるくるまわる」。矢に当たった鳥は、もう飛べなくなっているのだから、くるくる回わりながら落ちていきます。その有様をいった言葉ではないのでしょうか。

*カリ* と *カチ* の *リ* と *チ* の発音するときの舌の位置が近いので、こうした音の変化が起こったのではないかと考えます。

*ri-ci* には以下の例があります。

知里真志保は、*perke* (割れる) の語根の *per* や、*petke* (裂ける) の *pet* は関係があると述べています (著作集・植物編 p.77)。これは *r-t* が交替する例です。*ti* は *ci* に発音されます。例えば *askepet* (指) の所属形は *askepeti* = *askepeci*。この「指」という言葉は < *aske* (手) *pet* (断片) で、この *pet* (断片) も *petke* (裂ける) の *pet* と関係していると考えられています。

### ・コイラムノ *koiramno* (55 行目)

*コ ko* とは「と一緒に」の「と」に当ります。*イラムノ iramno* だけで「一緒に」とか「同時に」という意味の副詞です。この言葉も分析されずにきた語です。*iramno* を次のように分析してみました。

*iramno* < *ir-ram-no* (ひとつながり・の心・で)

*イリ ir* は、ひと連らなりになっていること。*ラム ram* は、心。*ノ no* は副詞化する語。意味は、「ひとつながりの心で」→「一緒に」「同時に」。*r-r* がくっついて *r* に。と考えてみたのですが、はたしてどうでしょうか。

謎の多い物語

神謡には似たような話のものが別の地域にも残っている場合があります。この第1話のシマフクロウの神さまの物語も沙流川筋に同系のものがあります。それは、久保寺逸彦の「アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究」の中の第55話と第56話に収められています。この二つの類話と知里幸恵の残したこの物語と比較して一番大きく違うのは、「かつて富んでいた人が今貧しくなった」理由が知里幸恵のものには見当たらない点です。

第55話を見ると、子供の父母が人生の半ば死んでしまって、祖母によって育てられたために貧しい暮らしを余儀なくされたことが理由として明解に出てきます。一方、第56話では、何かのときに弁論が拙かったために宝物を根こそぎ奪い取られ、貧乏になってしまったと理由が述べられています。ところが知里幸恵のこの物語では、マウコウエン「運が悪かった」ためとしか理由が述べられていません。

千葉大学の中川裕教授は、アイヌの物語は「あくまでも論理的整合性というのを追求する」ものであり「たまたまこうなっているということはない」といい、貧乏になった理由を「たぶん知里幸恵はわざと省いている」と考えています。普通のアイヌの物語の場合だと、そのように奇弁をろうして宝物を奪っていった者は、物語の整合性の上で最後に必ず罰せられるか殺されることになるとも中川氏は述べています。そして「知里幸恵はそういう展開をたぶん嫌ったんじゃないかと思うんですね。で、最後に『みんな仲よく』にしたいがために（中略）理由というのを削ってしまったんじゃないかと思うんですね。どうもこの話は、そこところが不自然なのでそう感じるんです」ともいっています（銀の滴講読会発行、講義録No.3）。

たしかに第56話を見ると宝石を奪われた人間は、カムイから雄弁を授けられ、宝物を奪い返します。そしてその成金は前にも増して貧乏になってしまうという展開になっています。

それではなぜ知里幸恵はそういう展開にしなかったのでしょうか。

この第1話には奇妙な点が他にもあります。

全13話の中で、この物語にはサケへ（折りかえしの節）が冒頭に書かれていないのです。有名な「シロカニペ ランラン ピッカン……」は、本文の構成要素になっているのでサケへではないようです。では、この物語のサケへは何だったのでしょうか。

また、55話、56話の主人公は、クジャクという鳥の神さまが主人公です。しかし知里幸恵のこの物語はシマフクロウの神が主人公になっています。一体どちらが本来のものなのでしょうか。

そして、この物語は、「アイヌ神謡集」の中で一番最初に置かれ、他の12話よりもずば抜けた長編（230行）になっています。他のもので一番長くても第8話の193行です。平均すると89行くらいですから、平均よりも3倍近くも長いものになっています。この物語だけなぜそのように特別なものになっているのでしょうか。それは偶然なのでしょうか。それとも、書かれた文学作品として知里幸恵の何らかのメッセージが秘められているのでしょうか。

このシマフクロウの神謡は多くの謎に満ちているのです。

## 第1話(その2)

### シマフクロウ神が自らをうたった話<sup>うた</sup>

#### 「シロカニペ ランラン ピシカン」

〔74～157行まで〕

#### 〔物語とその背景〕

前段はシマフクロウ神と少年たちの外での出来事でした。ここからは主に家の中での出来事です。貧しい家の少年が神窓からシマフクロウの神さまを入れながら中に向かって、これまでのことを語ると、中から少年の両親が一体何事だろうという様子で出てきます。

シマフクロウの神さまがその両親を見ると貧しくはあっても二人とも顔に品格をそなえた立派な人間であることがわかりました。両親はシマフクロウの神さまを見ると驚いて弾かれたように腰をかかめておじぎをしました。父親は着物の帯を締め直し、シマフクロウの神さまを拝みながら次のように言いました。

「シマフクロウの神さま、貧しい我々の家にお越し下さいましてありがとうございます。かつては富裕の者の中に数えられるほどの者でしたが、今はご覧のように貧乏な暮らしをしております。大切な神さまをお泊めすることなど誠におそれ多いことではございますが、今はもう日も暮れてしまいましたので、今晚はここにお泊りいただき、明日は、ただ御幣だけでもお送り申し上げたく存じます」と言い何回も礼拝しました。

母親は、とっておきの大きな花ごぎを神窓の下に敷き、そこにシマフクロウの神さまに座ってもらいました。それから、家中の者はみないびきをかきながら、ぐっすりと眠ってしまいました。

シマフクロウの神さまの魂は、自分の耳と耳の間に座っていましたが、真夜中になると起き出して「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」という歌を静かにうたいながら小さな家の中を下座から上座へと美しい音をたてながら飛びました。羽ばたきをするたびに、そのまわりに美しい宝物、みごとな宝物が美しい音をたてながら落ちました。そして、たちまちのうちに小さな家を宝物で埋めつくしてしまいました。さらに、先ほどの歌をうたいながら、小さな家を立派な大きな家に造り変えてしまいました。そして家の中に宝物の山を築き、みごとな着物もあつという間に作って、富豪の家よりも立派で大きな家の中に飾りました。それが終わるとシマフクロウの神さまは、また元どおり耳と耳の間に戻って座りました。

それから自分が宝物を恵んであげたことを家の人に夢で知らせました。そのとき、その家の主人が運悪く貧乏になってしまい、にわか成金の人々にバカにされたりいじめられたりし

ているさまを見てかわいそうに思ってこの貧しい家にやってきたことも知らせました。

それから間もなく夜が明け、家中の者が一斉に目を覚まし、家の中を見て驚きのあまりみな腰を抜かしてしまいました。母親は泣きじゃくり父親は涙をポロポロと落として感謝し、礼拝しながらシマフクロウの神さまに言いました。「単なる夢だとばかり思っていたのですが、まさか本当だったとは、ただただ驚きでございます。こんなに粗末な家に来ていただくだけでも有難いことなのに、私たちの不運をあわれに思って下さり、これ以上ないほどの恵みを与えて下さいました」と泣きながら言うのでした。

それから父親は木の枝を切って立派な御幣を作ってシマフクロウの神さまを飾り、母親は子供に手伝わせて、薪集め、水汲み、酒造りを行い、たちまちのうちに六つの酒樽を上座に並べました。

シマフクロウの神さまは、家の中の火の神さまと神々たちについての四方山話（よもやまばなし）にうち興じました。三日ほどすると神さまの好物なので、早くも酒がかもされ、その香りが家の中に漂いはじめました。

以上が家の中で起こった出来事です。

家の人たちが熟睡している間にシマフクロウの神さまは「銀の滴降る降る・・・」と歌ったことをまさに現実のものにしました。銀の滴、金の滴とは、宝物のことで、それが家の中に降ったのでした。ところでアイヌの宝物とはどのようなものなのでしょうか。普通、宝物といわれるものは家の上座の壁に積まれ、それは宝壇（カムイ イモマとかイヨイキリ）と呼ばれています。そこに並べて積まれるものには、シントコ（行器）、パッチ（鉢）、イコロ（刀剣）、タマサイ（首飾り）、トゥキ（高杯）、ニンカリ（耳飾り）などがあります。刀剣などは箱に入っている場合もあります。

ところでシマフクロウの神さまは、自分の体（または、よろい）の耳と耳の間に座っていて、真夜中に起き上がったと述べられていますが、これはどういうことを意味しているのでしょうか。

シマフクロウは、矢に当たってすでに死んでいるのです。その場合、その魂は頭の耳と耳の間に座っているといわれています。起き上がって家の中を宝物でいっぱいにして、また元の耳と耳の間に戻った、ということは、シマフクロウの魂が体内から出て行って、そうしたことを行って、また元の耳と耳の間に戻ったということです。つまり、宝物を降らせる行為はシマフクロウの魂が行ったのです。ここで体（ネトパケ）とか、よろい（ハヨッペ）と呼ばれているのは、シマフクロウの魂が神の国から着てきた衣装（肉体や羽根）のことを指します。

そして、夢とは、神さまからのメッセージを知らせてもらう交信手段なのです。

- 74 チセウアソク ワ オンネウムレク  
Chiseupshor wa / onneumurek  
cise upsor wa onne umurek  
家 ~のふところ から 年老いた 夫婦
- 75 テッカキポ リクンルケ ラウンルケ アラキ ワ  
tekkakipo / rikunruke / raunruke / arki wa  
tekkakipo rik-unruke ra-unruke arki wa  
手の垣根 ~を高い所にかざす ~を低い所に下ろす 来る(複) して
- 76 インカラシ コ、シノ ウエンクル イキコロカイキ  
inkarash ko, / shino wenkur / ikikorkaiki  
inkar=as ko, sino wenkur iki korkayki  
見る・私 すると 本当に 貧乏人 する けれども
- 77 ニシパ イポク カツケマツ イポク ウコトウルパ、  
nishpa ipor / katkemat ipor / ukoturpa,  
nispa ipor katkemat ipor ukoturpa,  
紳士 容貌 淑女 容貌 互いに~を伸ばす(複)
- 78 ウンヌカラ アワ、イッケウ ノシキ コムコサンパ。  
unnukar awa, / ikkeu noshki / komkosampa.  
un=nukar awa, ikkew noski komkosanpa.  
私・~を見る したところ 腰 ~の真ん中 さっと曲がる(複)
- 79 ポロシクブクル ヤイククツコロ ユブ カネ  
Poroshikupkur / yaikokutkor / yupu kane  
poro-sikup kur yay-ko-kutkor-yupu kane  
大いに成長した 男(老人) 自ら・に・帯締め・~をきつくする しながら
- 80 ウンコオンカミ。  
unkoonkami.  
un=koonkami.  
私・~に礼拝する
- 81 「カムイチカブ カムイ パセ カムイ  
“Kamuichikap kamui / pase kamui  
“kamuycikap kamuy pase kamuy  
シマフクロウ 神 重い 神
- 82 ウエナシ シリ チウエンチセヘ  
wenash shiri / chiwenchisehe  
wen=as siri ci=wen-cisehe  
貧しい・私たち ~の様子 私たち・~の貧しい家
- 83 コシレパ シリ イヤイライケレ。  
koshirepa shiri / iyairaikere.  
kosirepa siri iyayraykere.  
~に到着する 様子 ありがとうございます
- 84 テエタ アナク ニシパ オッタ ヤユコピシキブ  
Teeta anak / nishpa otta / yayukopishkip  
teeta anak nispa or ta yay-ukopiski p  
昔 は 物持ち ~の中に 自ら・一緒に~を数える 者

家の中から老夫婦が  
家の中から老夫婦が  
The elderly man and woman of the house

眼の上に手をかざしながらやつて来て  
手をそろえて、その手を上にしたり下にしたりしながら出て来たので  
came out, moving their hands up and down.

見ると、大へんな貧乏人ではあるけれども  
私が見てみると、本当に貧しい有様ではありましたが、  
When I saw them, they looked truly destitute, but

紳士らしい淑女らしい品をそなへてゐます、  
二人は紳士の品格、淑女の品格をそなえていました。  
they had the dignity of a gentleman and a lady.

私を見ると、腰の央をギツクリ屈めて、ビックリしました。  
私を見ると、二人はさっと体を折るように腰をかがめました。  
When they saw me, they briefly bent at their waists as if folding their bodies.

老人はキチンと帯をしめ直して、  
老人は帯をキチンと締め直し、  
The old man retied his belt neatly and

私を拝し  
私に礼拝して、  
worshipped me.

「ふくらふの神様、大神様、  
「シマフクロウの神さま、大切な神さま、  
"Owl God, O weighty god,

貧しい私たちの粗末な家へ  
貧しい私たちの粗末な家に  
we thank you for coming

お出で下さいました事、有難う御座います。  
お越し下さりましてありがとうございます。  
to our humble home.

昔は、お金持に自分を数へ入れるほどの者で  
昔は富み栄えた者の中に自分を数え入れるほどの者  
Long ago we counted ourselves among those who prospered,

- 85 チネ アコロカ タネ アナクネ タン コラチ  
 chine akorka / tane anakne / tan korachi  
 ci=ne a korka tane anakne tan koraci  
 私たち・～である した けれども 今 は この ように
- 86 シルン ウェンクル ネ オカヤシ フ、コタンコロ カムイ  
 shirun wenkur ne / okayash wa, / kotankor kamui  
 sirun wenkur ne okay=as wa, kotan kor kamuy  
 つまらない 貧乏人 として いる(複)・私たち して 村 ~の 神
- 87 パセ カムイ チレウシレ カ  
 pase kamui / chireushire ka  
 pase kamuy ci=rewsire ka  
 重い 神 私たち・～を泊める も
- 88 アエオリパク キワネヤッカ タント アナク  
 aeoripak / kiwaneyakka / tanto anak  
 a=eoripak ki wa ne yakka tanto anak  
 私・～をおそれ慎む でも 今日 は
- 89 タネ シルクンネ クス タヌクラン パセ カムイ  
 tane shirkunne kushu / tanukuran / pase kamui  
 tane sirkunne kusu tan ukuran pase kamuy  
 もう 夜になる から 今晚 重い 神
- 90 アレウシレ フ ニサッタ アナク オウセ イナウ アリポカ  
 areushire wa / nisatta anak / ouse inau aripoka  
 a=rewsire wa nisatta anak ouse inaw ari poka  
 私・～を泊める して 明日 は ただの イナウ で だけでも
- 91 パセ カムイ アオマンテ クシネ。」 アリ オカイペ  
 pase kamui / aomante kushne.” ari okaipe  
 pase kamuy a=omante kus ne.” ari okay pe  
 重い 神 私・～を送る つもりである と ある(複) もの
- 92 イエ コロ トウワン オンカミ レワン オンカミ ウカクシテ。  
 ye kor / tuwan onkami / rewan onkami / ukakushte.  
 ye kor tu-wan onkami re-wan onkami ukakuste.  
 ~を言う しながら 二つの 十の 礼拝 三つの 十の 礼拝 ~を繰り返す
- 93 ポロシクマツ ロルンプライ チョロポケ タ  
 Poroshikupmat / rorunpurai / chorpoke ta  
 poro-sikup mat rorunpuray corpoke ta  
 大いに成長した 婦人(老婦人) 神窓 ~の下 に
- 94 オキタルンペ ソホ カラ フ オッタ ウナンテ。  
 okitarunpe / soho kar wa / otta unante.  
 okitarunpe soho kar wa or ta un=ante.  
 模様付きの大ゴザ ~の座 ~を作る して ~の所 に 私・～を置く
- 95 タポロフ オピッタノ ホッケイ ナニ エトロ ハウエ  
 Taporowa / opittano / hotkei nani / etoro hawe  
 tap orowa opittano hotke i nani etoro hawe  
 それから みんな 寝る 時 すぐに いびきをかく ~の声

御座いましたが今はもう此の様に  
 でありましたが、今はこのように  
 but now, as you can see,

つまらない貧乏人になりまして、国の神様  
 ひどく貧しい者になっておりまして、村を守る神さま、  
 we have become terribly poor.

大神様をお泊め申すも  
 大切な神さまをお泊めすることも  
 It would be presumptuous of us to take such a weighty god

畏れ多い事ながら今日はもう  
 おそれおおいことではありますが、今日はもう  
 into our humble home, but today

日も暮れましたから、今宵は大神様を  
 日も暮れましたので、今晩は大切な神さまを  
 the sun has already set, so tonight we offer you lodging, and

お泊め申し上げ、明日は、たゞダイナウだけでも  
 お泊め申し上げ、明日は、ただ御幣だけでも  
 tomorrow, we would like to send you off,

大神様をお送り申し上げませう。」と言う事  
 お送り申し上げたく存じます」ということを  
 even if with only an inau\* \*a beautifully shaved stick used as a religious artifact

申しながら何遍も何遍も礼拝を重ねました。  
 言いながら何回も何回も礼拝を重ねました。  
 Saying this, he worshipped me over and over again.

老婦人は、東の窓の下に  
 老婦人は、神窓の下に  
 Beneath the window, the elderly woman

敷物をしいて私を其處へ置きました。  
 模様入りのゴザを敷いて、そこに私を置きました。  
 spread out a patterned woven mat and laid me upon it.

それからみんな寝ると直ぐに高いびきで  
 それから全員が寝るとすぐにいびきの音が  
 Then everyone went to bed, and soon the sound of their snores

- 96 メシロトツケ。  
meshrototke.  
mesrototke.  
ぐうぐうと響く
- 97 チネトパケ アスルペ ウトウツタ ロカシ カネ  
chinetopake / ashurpe ututta / rokash kane  
ci=netopake asurpe utur ta rok=as kane  
私・～の体 耳 ～の間 に 座る(複)・私 しながら
- 98 オカヤシ アイネ シアンノシキ トウルパケタ  
okayash aine / shiannoshki / turpaketa  
okay=as ayne si-annoski turpake ta  
いる(複)・私 したあげく 本当の・真夜中 ～に及んだ時 に
- 99 チリキプニアシ。  
chirikipuniash.  
ci-rikipuni=as.  
起きあがる ・私
- 100 「シロカニペ ランラン ピシカン、  
“Shirokanipe ranran pishkan,  
“sirokani pe ran ran piskan,  
銀 滴 降る 降る ～のまわり
- 101 コンカニペ ランラン ピシカン。」  
konkanipe ranran pishkan.”  
konkani pe ran ran piskan.”  
金 滴 降る 降る ～のまわり
- 102 アリアン レッポ ハウケノポ チキ カネ、  
arian rekpo / haukenopo / chiki kane,  
ari an rekpo hawkeno-po ci=ki kane,  
と ある 小さい鳴き 静かに (強調) 私・～をする しながら
- 103 タパン ポンチセ エハラキソ ウン エシソ ウン  
tapan ponchise / eharkiso un / eshiso un  
tapan pon cise e-harkiso-un e-siso-un  
この 小さい 家 左座に向かって 右座に向かって
- 104 テレケアシ フミ トウヌニタラ。  
terkeash humi / tununitara.  
terke=as humi tununitara.  
飛ぶ・私 音 チリンチリンと響く
- 105 シラツパアシ コ ウンピシカン タ  
Shirappaash ko / unpishkan ta  
sirappa=as ko un=pishkan ta  
はばたく・私 すると 私・～のまわり に
- 106 ピリカイコロ カムイイコロ トウイフムコンナ  
pirkaikor / kamuiikor / tuihumkonna  
pirka ikor kamuy ikor tuy hum konna  
美しい 宝 神 宝 落ちる 音 は

寝入ってしまった。

ぐうぐうと響きました。

resonated.

私は私の体の耳と耳の間に坐って

私は自分の耳と耳の間に座って

I sat between my own ears,

みましたがやがて、ちょうど、真夜中時分に

いましたがやがて真夜中になった頃

and finally when it was around midnight,

起き上がりました。

起き上がりました。

I woke up.

「銀の滴降る降るまはりに、

「銀の滴降る降るまわりに、

"Silver drops fall, fall, all around;

金の滴降る降るまはりに。」

金の滴降る降るまわりに」

gold drops fall, fall, all around."

といふ歌を静かにうたひながら

という歌を静かにうたいながら

Singing this song softly,

此の家の左の座へ右の座へ

その家の下座へ上座へと

to the lower seat and to the upper seat of the house

美しい音をたて、飛びました。

私は飛び、その音は金属のような響きをたてました。

I flew, and the sound echoed like metal.

私が羽ばたきをすると、私のまはりに

私が羽ばたきすると、私のまわりに

When I flapped my wings, all around me

美しい宝物、神の宝物が美しい音をたて、

美しい宝物、すばらしい宝物がパラパラと落ちて

beautiful treasures, marvelous treasures, fluttered down,

- 107 トウヌニタラ。  
tununitara.  
tununitara.  
チャリンチャリンと響く
- 108 イルカイ ネコ タン ポンチセ ピリカイコ  
Irukai neko / tan ponchise pirkaikor  
irukay ne ko tan pon cise pirka ikor  
ちよつとの間 ~になる すると この 小さい 家 美しい 宝
- 109 カムイイコ チエシクテ。  
kamuiikor / chieshikte.  
kamuy ikor ci=esikte.  
神 宝 私・~で~を満たす
- 110 「シロカニペ ランラン ピシカン、  
“Shirokanipe ranran pishkan,  
“sirokani pe ran ran piskan,  
銀 滴 降る 降る ~のまわり
- 111 コンカニペ ランラン ピシカン。」  
konkanipe ranran pishkan.”  
konkani pe ran ran piskan.”  
金 滴 降る 降る ~のまわり
- 112 アリアン レッポ チキ カネ タパン ポンチセ  
arian rekpo / chiki kane / tapan ponchise  
ari an rekpo ci=ki kane tapan pon cise  
と ある 小さい鳴き 私・~をする しながら この 小さい 家
- 113 イルカイ ネコ カニ チセ ポロ チセ ネ  
irukai neko / kani chise / poro chise ne  
irukay ne ko kani cise poro cise ne  
ちよつとの間 ~になる すると 金 家 大きい 家 として
- 114 チカラ オケレ、チセウアソロ カムイイモマ  
chikar okere, / chiseupshoro / kamuiimoma  
ci=kar okere, cise upsoro kamuy imoma  
私・~を作る ~を終える 家 ~のふところ 立派な 宝壇
- 115 チエカラカラ、カムイコソソテ ピリカイケ  
chiekarkar, kamuikosonte / pirkaike  
ci=ekarkar, kamuy kosonte pirka ike  
私・~に~を作る 立派な 小袖 美しい ~の方
- 116 チトウナシカラカラ チセウアソロ チエトムテ。  
chitunashkarkar / chiseupshoro / chietomte.  
ci=tunas-karkar cise upsoro ci=etomte.  
私・素早く ~を作る 家 ~のふところ 私・~を~で飾る
- 117 ニシパ ホラリ ルウェ オッカシタ タン ポロチセ  
Nishpa horari ruwe / okkashita / tan porochise  
nispa horari ruwe okkasi ta tan poro cise  
物持ち 住む こと ~以上 に この 大きな 家

落ち散りました。  
その音は美しく響きました。  
making a beautiful echo.

一寸のうちに、此の小さい家を、りっぱな宝物  
ほんのわずかの間に私はこの小さな家を、美しい宝物  
In a mere instant, I filled the little house

神の宝物で一ぱいにしました。  
すばらしい宝物でいっぱいになりました。  
with beautiful treasures, marvelous treasures.

「銀の滴降る降るまはりに、  
「銀の滴降る降るまわりに、  
“Silver drops fall, fall, all around;

金の滴降る降るまはりに。」  
金の滴降る降るまわりに」  
gold drops fall, fall, all around.”

といふ歌をうたひながら此の小さい家を  
という歌をうたいながらこの小さな家を  
Singing this song, in an instant

一寸の間にかねの家、大きな家に  
わずかの間に金の家、大きい家に  
I turned the little house into a metallic house,

作りかへてしまひました、家の中は、りっぱな宝物の積場  
私は作りかえてしまい、家の中には立派な宝壇  
a great house, and inside I made a splendid alcove

を作り、りっぱな着物の美しいのを  
を作りました。そして立派な着物の美しいものを  
to hold the treasures. Then I rushed to make some beautiful,

早つぐりして家の中を飾りつけました。  
私は大急ぎで作り、家の中を飾りました。  
splendid kimono and decorated the house with them.

富豪の家よりももつとりつぱに此の大きな家の  
富豪の家よりもさらに立派にこの大きな家  
I decorated this house even more splendidly

- 118 ウアソ口ホ チトムテカラカラ、チオケレ コ  
 upshoroho / chitomtekarkar, / chiokere ko  
 upsoroho ci=tomte-karkar, ci=okere ko  
 ~のふところ 私・~を飾り付ける 私・~を終える すると
- 119 フシコ アンペ チシコパヤラ チハヨクペヘ  
 hushko anpe / chishikopayar / chihayokpehe  
 husko an pe ci=sikopayar ci=hayokpehe  
 古い ある もの 私・~のようである 私・~のよろい
- 120 アスルペウトウタ 口カシ カネ オカヤシ。  
 ashurpeututa / rokash kane / okayash.  
 asurpe utu(r) ta rok=as kane okay=as.  
 耳 ~の間に 座る(複)・私 しながら いる(複)・私
- 121 チセコルタラ チウエンタラツカ。  
 chisekorutar / chiwentarapka.  
 cise kor utar ci=wentarapka.  
 家 ~の 人たち 私・~に夢を見せる
- 122 アイヌニシパ マウコウエン フ ウェンクル ネ フ、  
 Ainunishpa / maukowen wa wenkur ne wa,  
 aynu nispa mawkowen wa wenkur ne wa,  
 人間 主人 運が悪い して 貧乏人 ~になる して
- 123 テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネブ ウタ口口ケ フ  
 teeta wenkur / tane nishpa nep / utarorke wa  
 teeta wenkur tane nispa ne p utar orke wa  
 昔の 貧乏人 今の 物持ち ~になる 者 たち ~のところ から
- 124 アピイエ ハウエ アコレウエン シリ チヌカラ フ、  
 apiye hawe / akorewen shiri / chinukar wa,  
 a=piye hawe a=korewen siri ci=nukar wa,  
 される・~に陰口をいう 言葉 される・~に辛くあたる 様子 私・~を見る して
- 125 チエランポケン クス、パシタカムイ  
 chierampoken kushu, / pashtakamui  
 ci=erampoken kusu, pasta kamuy  
 私・~をあわれに思う ので はした 神
- 126 チネ ルウエ カ ソモネ コロカ、アイヌチセ  
 chine ruwe ka / shomone korka, / ainuchise  
 ci=ne ruwe ka somo ne korka, aynu cise  
 私・~である こと も ない ~である けれども 人間 家
- 127 チコ レウシ チピリカレ ルウエ ネ カトウフ  
 chiko reushi / chipirkare ruwe / ne katuhu  
 ci=korewsi ci=pirkare ruwe ne katuhu  
 私・~に泊まる 私・~を豊かにする のである ~の様子
- 128 チエラマンテ。  
 chieramante.  
 ci=eramante.  
 私・~を~にわからせる

中を飾りつけました。私はそれを終ると  
 の中を飾りつけ、それが終ると  
 than the house of a rich man, and when I finished,

もとのまゝに私の胃の  
 前と同じように自分の体の  
 I went back to sitting between

耳と耳の間に坐つておりました。  
 耳と耳の間に座っていました。  
 the ears of my own body.

家の人たちに夢を見せて  
 そして家の人々に夢を見せました。  
 Then I showed the people of the house a dream:

アイヌのニシパが運が悪くて貧乏人になつて  
 富んでいた人が運悪く貧しい者になってしまい  
 A rich man was unlucky and ended up a poor man

昔貧乏人で今お金持になつている者たちに  
 むかし貧しかったがにわか成金になった者たちから  
 and was ridiculed by the people who used to be poor

ばかにされたりいぢめられたりしてるさまを私が見て  
 バカにされたり、いぢめられたりしている様子を私が見て、  
 and were now rich. Seeing how he was ridiculed and mistreated,

不憫に思つたので、私は身分の卑しいたゞの神では  
 あわれに思つたので、私は身分のいやしい神  
 I felt sorry for him, so, although I am no mere

ないのだが、人間の家  
 ではないのですが、人間の家  
 deity of low standing, I stayed at the human house

に泊って、恵んでやつたのだといふ事を  
 に泊って豊かにしてあげたのだということ  
 and made them wealthy. Of this

知らせました。  
 を知らせました。  
 I told them.



- 129 タポロフ ポンノ オカヤシ シリペケレ アフ  
Taporowa / ponno okayash / shirpeker awa  
tap orowa ponno okay=as sirpeker awa  
それから 少し いる(複)・私 夜が明ける したところ
- 130 チセコロ ウタラ シネ イキンネ ウホブンパレ。  
chisekor utar / shine ikinne / uhopunpare.  
cise kor utar sine ikinne uhopunpare.  
家 ~の 人たち 一つの 列になって みんな一緒に起きる
- 131 シク ノヤノヤ インカンロクペ オピットノ  
Shik noyanoya inkanrokpe / opittano  
sik noyanoya inkar rok pe opittano  
目 ~をこすりこすりする 見る した(複) 者 みんな
- 132 アムソ カタ オアフンタイパ。 ポロシクマツ  
amso kata / oahuntaipa. / Poroshikupmat  
amso ka ta oahuntaypa. poro-sikup mat  
床 ~の上に 腰を抜かず(複) 大いに成長した 婦人
- 133 トウチシ ウエンペ ヤイエコテ、ポロシクマクル  
tuchish wenpe / yayekote, / poroshikupkur  
tu cis wen pe yayekote, poro-sikup kur  
二つの 泣き ひどい もの 自らの前に~を付ける 大いに成長した 男
- 134 トウ ペケレヌペ レ ペケレヌペ ヤイコラプテ、  
tu pekernupe / re pekernupe / yaikorapte,  
tu peker nupe re peker nupe yaykorapte,  
二つの 澄んだ 涙 三つの 澄んだ 涙 ~を自らに降ろす(複)
- 135 オカイ ロキネ、ポロシクマクル チリキプニ  
okai rokine, / poroshikupkur / chirikipuni  
okay rok hine, poro-sikup kur ci-rikipuni  
いる(複) した(複) そして 大いに成長した 男 起き上がる
- 136 ウノッタ アラキ トウワン オンカミ レワン オンカミ  
unotta arki / tuwan onkami / rewan onkami  
un=or ta arki tu-wan onkami re-wan onkami  
私・~の所に 来る(複) 二つの 十の 礼拝 三つの 十の 礼拝
- 137 ウカクシテ クルカシケ イタコマレ：  
ukakushte / kurkashike / itakomare:  
ukakuste kurkasike itak-omare :  
~を繰り返す ~の上 言葉を~に入れる
- 138 「タラプ ヘタプネ モコロ ヘタプネ チキ クニ  
“Tarap hetapne / mokor hetapne / chiki kuni  
“ tarap hetap ne mokor hetap ne ci=ki kuni  
夢 一体~なのだろうか 眠り 一体~なのだろうか 私たち・~をする と
- 139 チラム アフ イヨッセレケレ イカラン ルウエ、  
chiramu awa / iyosserkere / ikaran ruwe,  
ci=ramu awa iyosserkere ikar=an ruwe,  
私たち・~を思う したところ 驚いた こしらえる・される こと

それが済んで少したつて夜が明けますと  
それから間もなく夜が明け  
Soon after, dawn arrived,

家の人々が一しよに起きて  
家の人々が一斉に起き出しました。  
and all at once the people of the house awoke,

目をこすりこすり家の中を見るとみんな  
目をこすりながら見た家の人たち全員は  
and rubbing their eyes as they looked around the house, they all

床の上に腰を抜かしてしまひました。老婦人は  
床の上に腰を抜かしてしまいました。老婦人は  
fell to the floor in disbelief. The elderly woman

声を上げて泣き、老人は  
何度も激しく泣き、老人は  
sobbed loudly over and over, and the old man

大粒の涙をポロポロこぼして  
清らかな涙をポロポロと落として  
spilled pure tears,

みましたが、やがて、老人は起上り  
いましたが、やがて起き上がり  
but finally he stood up

私の処へ来て、二十も三十も礼拝  
私の所に来て二十回も三十回も礼拝  
and came to me and worshipped me twenty or thirty times

を重ねて、そして云ふ事には、  
を重ね、次のように言いました。  
and said as follows:

「たゞの夢たゞの眠りをしたのだと  
「ただ夢か眠りをしただけかと  
"I thought I had just had a dream or fell asleep, but

思つたのに、ほんとうに、かうしていたゞいた事。  
思ったのですが、驚いたことに、実際にこうして下さいました。  
to my surprise, you really have done this for us.

- 140 ウェナシ シリ オトウイアシ シリ チウエンチセへ  
 wenash shiri / otuiash shiri / chiwenchisehe  
 wen=as siri otuy=as siri ci=wen-cisehe  
 貧しい・私たち 様子 ろくでもない・私たち 様子 私たち・への貧しい家
- 141 コシレパ パテク ネヤッカ チエヤイライケ、  
 koshirepa / patek neyakka / chieyairaikep,  
 kosirepa patek ne yakka ci=eyayrayke p,  
 ~に到着する だけ でも 私たち・~に感謝する のに
- 142 コタンコロ カムイ パセ カムイ マウコウエナシ ルウエ  
 Kotankor Kamui / pase kamui / maukowenash ruwe  
 kotan kor kamuy pase kamuy mawkowen=as ruwe  
 村 ~の 神 重い 神 運が悪い ・私たち こと
- 143 チエランポケン ウネカラカラ、  
 chierampoken / unekarkar,  
 ci-erampoken un=ekarkar,  
 される・~をあわれに思う 私たち・~に~をする
- 144 チカシヌカラ ナッカ シパセ イケ アウネカラカラ  
 chikashnukar nakka / shipase ike / aunekarkar  
 ci-kasnukar nakka sipase ike a=un=ekarkar  
 される・~を授ける でも 本当に重い もの される・私たち・~に~をする
- 145 キルウェオカイ。」 アリ オカイペ チシトゥラノ  
 kiruweokai.” ari okaipe chishturano  
 ki ruwe okay.” ari okay pe cis turano  
 ~をする こと だなあ(複) と ある(複)もの 泣くこと と共に
- 146 エオンカミ。  
 eonkami.  
 eonkami.  
 ~に礼拝する
- 147 タポロフ ポロシクアクル イナウニ トウイエ  
 Taporowa / poroshikupkur / inawuni tuye  
 tap orowa poro-sikup kur inaw-ni tuye  
 それから 大いに成長した 男 イナウにする木 ~を切る
- 148 ピリカ イナウ トムテカラ フ ウネトムテ。  
 pirka inau / tomtekar wa / unetomte.  
 pirka inaw tomtekar wa un=etomte.  
 美しい イナウ ~をきれいに作る して 私・~を飾る
- 149 ポロシクマツ ヤイコクツコロ ユブ カネ  
 Poroshikupmat / yaikokutkor / yupu kane  
 poro-sikup mat yaykokutkor-yupu kane  
 大いに成長した 婦人 自らに帯締めをきつくる しながら
- 150 ポン ヘカチ シカスイレ ウサ ニナ  
 pon hekachi / shikashuire / usa nina  
 pon hekaci si-kasuy-re usa nina  
 小さい 男の子 ~に自分を手伝わせる いろんな 薪取り

つまらないつまらない、私共の粗末な家に  
 貧しいつまらない私の粗末な家  
 We were grateful just to have you

お出で下さる事だけでも有難く存じますものを  
 にお越し下さるだけでも有難く存じますものを  
 in our worthless, humble home, but

国の神様大神様、私たちの不運な  
 村の神さま、大切な神さまが私たちの不運  
 you, the God of the Village, the weighty god,

事を哀れんで下さいまして  
 をあわれんで下さいまして  
 have taken pity on us in our misfortune and

お恵みのうちにも最も大きいお恵みをいたゞき  
 神さまの恵みのうちでも最も大きな恵みを与えて  
 blessed us with the greatest of blessings!"

ました事」と云ふ事を泣きながら  
 下さいました」と泣きながら  
 Weeping,

申しました。  
 老人は礼を言いました。  
 the elderly man expressed his thanks.

それから、老人はイナウの木をきり  
 それから、老人は御幣を作るために木を切り  
 Then, the man cut a tree for an inau

りっぱなイナウを美しく作って私を飾りました。  
 立派な御幣を美しく作って私を飾りました。  
 and beautifully made a splendid inau and decorated me with it.

老婦人は身仕度をして  
 老婦人は帯をきちんと締め直して  
 The elderly woman retied her belt neatly,

小さい子を手伝はせ、薪をとつたり  
 その小さな子供に手伝わせて、薪取りや  
 and with the little child's help, gathered firewood

151 ウサ ワッカタ サケスイエ エトコオイキ、イルカイ ネコ  
 usa wakkata / sakeshuye / etokooiki, / irukai neko  
 usa wakka-ta sake-suye etoko-oiki, irukay ne ko  
 いろんな 水くみ 酒作り ~の準備をする ちよつとの間 ~になる すると

152 イワン シントコ □□ライパ。  
 iwan shintoko / rororaipa.  
 iwan sintoko ror oraypa.  
 六つの 行器 上座 ~の方に~を寄せる

153 オロワノ アペフチ カムイフチ トウラ  
 Orowano apehuchi / kamuihuchi tura  
 orowano ape-huci kamuy-huci tura  
 それから 火 おばあさん 神 おばあさん と共に

154 ウサオカイ カムイオルシペ チエウエネウサラ。  
 usaokai / kamuiorushpe / chieuweneusar.  
 usa okay kamuy oruspe ci=euenewsar.  
 いろんな 神 話 私・~について互いに語り合う

155 トウツコ パクノ シラン コ、カムイエルスイベ  
 Tutko pakno / shiran ko, / kamuiershuipe  
 tutko pakno siran ko, kamuy e rusuy pe  
 二日 ほど 経つ と 神 ~を食べる したい もの

156 ネブネクス チセウナソロ サケフラ  
 nepnekushu / chiseupshoro / sakehura  
 ne p ne kusu cise upsoro sake hura  
 ~であるもの~であるから 家 ~のふところ 酒 ~の匂い

157 エパララセ。  
 epararse.  
 epararse.  
 ~に漂う

水を汲んだりして、酒を造る仕度をして、一寸の間に  
 水汲み、酒造りの準備をして、たちまちのうちに  
 and drew water to prepare for making wine, and in no time

六つの酒樽を上座にならべました。  
 酒の入った容器を六つも上座に並べました。  
 there were six tubs full of wine lined up at the head of the hearth.

それから私は火の老女老女神と  
 そして私は火の老女、老女神とともに  
 Then, I and the Fire Goddess, the Elderly Goddess,

種々な神の話を語り合ひました。  
 様々な神同士の話を語り合ひました。  
 began telling stories of various gods.

二日程たつと、神様の好物ですから  
 二日ほどたつと、神の好物  
 After two days had passed, the scent of wine,

はや、家の中に酒の香が  
 なので、酒の香りがもう家の中に  
 a favorite of the gods,

漂ひました。  
 漂いはじめました。  
 wafted through the house.

## 〔言葉の説明〕

## ・テッカキポ リクンルケ ラウンルケ アラキ tekkakipo rikunruke raunruke arki (75 行目)

テッカキポ tekkaki-po は、< tek-kaki-po (手・垣・指小辞) で「手で作った小さな垣」という意味。カキ kaki は、日本語の「垣」から入った言葉。石垣、垣根などと使うあの垣のことです。この場合、それを両手で作ったもの。リクンルケ rikunruke は< riku-unruke (高い所・～を～に位置せしめる) で「高くする」こと。ラウンルケ raunruke も< ra-unruke (低い所・～を～に位置せしめる) で「低くする」こと。両手を上下にすること。リク rik とラ ra は「高」「低」と対になる言葉。ウンルケ unruke はウイルケ uyruke ともいわれ、単独で使われず、動詞の構成要素としてのみ使われ、「～を～に位置せしめる」こと。

アラキ arki (来る) は、エク ek (来る、単数形) の複数形。

## ・ウンヌカラ un=nukar (78 行目)

ウン un= は、「私を」という意味 (目的格)。主格の「私」はチ ci= (他動詞に付く)、アシ =as (自動詞に付く)。アイヌ語は、動詞に付く人称接辞がこのように変わり、この点が学ぶ上で一番難しいところです。

## ・コムコサンパ komkosanpa (78 行目)

コムコサンパ komkosanpa は< kom-kosanpa (曲げる・さつ)。コム kom は、コモ komo (を曲げる、他動詞) の語根。自動詞「曲がる」は、コムケ komke。同じ「曲がる」でも、しなやかに曲がるのは、レウケ rewke (他動詞「曲げる」はレウエ rewe)。角がつくように折れ曲がるのがコムケ komke。曲げて折れるのが、カイエ kaye。このテキストの場合は、腰がカクッと折れ曲がるようになったので、コム kom (語根) を使ったもの。

コサンパ -kosanpa は、動詞に接尾して「急に～する」という意味を添えます (複数形)。単数形はコサヌ -kosanu。コムコサンパ kom-kosanpa で「急に腰をカクッと曲げる」こと。あまりに畏れ多いものを見て思わず最敬礼したこと。その前のイケウ ノシキ ikkew noski (腰の中央) とは、体のどの部分か、と考えてしまいますが、音節をふやすためと考えて腰と、体のまん中の意味を重ねて使ったくらいにとったらどうでしょうか。

## ・ポロシクツクル ヤイクツッコロ ユプ poro sikupkur yaykokutkor-yupu (79 行目)

シクツクル sikupkur は< sikup-kur (成長する・人) 成長した人→成人。ポロ poro は「大きい」。この場合は、大成人で老人のこと。ヤイクツッコロ yaykokutkor は< yay-kokut-kor (自分・に対して、帯・を持つ) 「帯を自ら締める」こと。ユプ yupu は「～をぎゅっときつく締める」こと。両方で一語になって「自ら帯を締めること (名詞) をきつくする」となり「帯をきちんと締める」という意味になったものです。

## ・ウェナシ wen=as / チウエンチセ ci=wen-cise (82 行目)

普通、ウエン wen は「悪い」という意味で使われることが多いのですが、この場合は、ウエン wen は、「貧しい」。wen=as で「私たちが貧しく暮らしている」こと。チウエンチセ ci=wen-cise は、「私たちの・粗末な・家」。

## ・ヤユコピシキ チネ アコロカ yay-uko-piski p ci=ne a korka (84～85 行目)

これは< yay-uko-piski p (自分・一緒に・を数えるもの) で、「(昔は、富裕の者の中に) 自分を一緒に数える者 (でした)」という意味。チネ ア コロカ ci=ne a korka で「私は (富裕な者の中に共に数えられる者) でしたが」の意味。ア a は、過去を表していて、「(そういう者で) あった」という意味。

ピシキ piski は< pis-ki (一つずつ・をする) で「を (一つずつ) 数える」こと。おそろくピシ pisi 「たずねる。質問する」などの pis と関係があるでしょう (一つ一つ聞いていく→たずねる)。[参考] を参照して下さい。

## ・チレウシレ ci=rewsire (87 行目) / アレウシレ a=rewsire (90 行目)

両方とも引用文の中で使われていて、共に「私が (シマフクロウの神さま) を泊める」という意味。しかし、チ ci= とア a= の両方が使われています。これはなぜでしょうか。

普通、カムイユーカラの中で、主人公は主格の「私」をチ ci=、アシ =as で語ってきます。そして引用文の中では、ア a=、アン =an で語ります。ですから、ここではアレウシレ a=rewsire というのが本来の形です。しかし、ときには、このようにチ ci= が混ったりすることもあります。

たとえば千歳のカムイユーカラを見ても主人公がチ ci=、アシ =as で語りはじめて、すぐにア a=、アン =an に変わってしまい、終わりの方でチ ci=、アシ =as に戻ったりすることが多く見られます。ですから、あまり厳密に考えすぎなくてもいいようです。

## ・ホツケイ hotkei (95 行目)

この場合のイ i は、「～ (した) とき」という意味。「(みんな) が寝たとき」ということ。

## ・エトロ ハウエ メシロトツケ etoro hawe mes-rototke (95～96 行目)

意味は「いびき・の声・ぐうぐう」ということ。メシロトツケ mes-rototke のメシ mes は、メシケ meske (はがれる・もげる)、メス mesu (はがす・もぐ) の語根。ロトツケ rototke は、動詞の語根に接尾して「その状態が続く」ことを表わします。メシロトツケ mesrototke で、木の皮などをはがす音に似た音が続くこと。語根のメシ mes は、擬音語。mes < bes で、元はベシベシとかベリベリに似た音を言葉に写したのかもしれない。

## ・チリキプニ cirikipuni (99 行目)

チリキプニ cirikipuni は、< ci-riki-puni (～される・高く・を持ち上げる)、高く持ち上がる→起き上がる。

## ・トゥヌニタラ tununitara (104 行目)

トゥヌン tunun は、< tun-un < tun tun。トゥン tun は金属音が響くことで、「美しい音がする」こと。イタラ itara は、その状態が続くことを表わします。

## ・イルカイ ネコ irukay ne ko (113 行目)

イルカイ ネ コ irukay ne ko は、「わずかの間に」と短時間を表わす慣用句。沙流方言

ではイルカ ネ コロ iruka ne kor といいます。反対に、「だいぶしてから」は、オホンノ  
アン コロ ohonno an kor (沙流)。

・カニ kani (113 行目)

カニ kani は、日本語の金属を表わす「金(かね)」から入ったもので、「立派な」という意味。アイヌ社会では金属がとても大切にされました。そして、立派なものが立てる美しい音も金属の音で表されます(104 行目)。

・マウコウエン mawkowen (122 行目)

マウ maw は「風」「息吹」「気」。吹く「風」は、レラ rera。タント レラ ユケ tanto rera yupke 「今日は風が強い」などと天候のことという風は、レラ rera。

マウコウエン mawkowen は、< maw-ko-wen (風・に対して・悪い) で、神のたてる運気の風の流れにうまく当たらないこと、運が悪い。反対は、マウコピリカ maw-ko-pirka (運が良い)。

・アピエ ハウエ アコレウエン シリ a=piye hawe a=korewen siri (124 行目)

アピエ a=piye (人が・陰口をたたき、バカにする)。アコレウエン a=korewen < a=korewen (人が・与えること・悪い=つらくあたる)。この場合のア a= は「不特定の人が」という意味で「～される」と受身的に訳されます。ここでは、「バカにされる」、「いじめられる」こと。ハウエ hawe は、バカにされる「こと」の意味ですが、人が言葉でバカにするので、ハウエ hawe (声) が使われ、もし、これが家の中から叩いていじめる音がきこえた場合には、フミ humi (音) が使われます。ピエ piye は < pi-ye (小声・を言う) → 小声でヒソヒソと陰で悪口を言うこと。

・エランポケン erampoken (125 行目)

エランポケン erampoken は、エランポキウエン erampokiwen (あわれに思う) の縮約形。erampokiwen は < e-ram-poki-wen (に・心・の下・が悪い) ～に対して心が痛む→憐れむ。

・パシタカムイ pasta kamuy (125 行目)

パシタ pasta は「平凡な。ありふれた」という意味で、日本語の「端(はした)」から入った言葉だと思われます。日本語では「はした者」「はした女」のように使われ「身分の卑しい」という意味。日本語の h 音ではじまる言葉が、アイヌ語では p 音になってとり入れられる例が多くあります。

(日本語)	→	(アイヌ語)
haci (鉢)	→	patci
hiuci (火打ち)	→	piwci
hito (人)	→	pito

・ウホブンパレ uhopunpare (130 行目)

u は再帰接頭辞。u ~ re の形で「みんなで～する」という意味。

u-hopunpa-re 「みんなで起きる」。hopunpa は hopuni (起きる) の複数形。53 行目のウホ  
ユッパレ uhoyuppare (みんなで走る) と同じ形。

・インカンロクペ inkan rok pe (131 行目)

インカラ inkar (ものを見る) の r が後に r があるため n に変わって インカン inkan になったもの。ロク ペ rok pe は、ア ヲ a p の複数形。意味は「～したもの」ということ。「見たもの」という意味。

・トウチシ ウエンペ ヤイエコテ tu cis wenpe yayekoto (133 行目)

トゥ チシ ウエンペ tu cis wenpe の tu は「二つ」が元の意味ですが、134 行目の tu ~ re ~ (二つの～三つの～) と同じように「沢山の」という意味。チシ cis は「泣く」が名詞化して「泣き」。ウエンペ wenpe は、「激しいもの」で「沢山の激しい泣き」という意味。ヤイエコテ yayekote は、< yay-e-kote (自分・～の前・～に～を結びつける) 自分に結びつける。直訳すると「沢山の激しい泣きを自分に結びつけた」となり、「激しく泣く」「大声で泣きじゃくる」という意味。

・ヤイコラプテ yaykorapte (134 行目)

< yay-ko-rap-te (自分・に・落ちるの複数形・させる) 自分に落とす。「(沢山の清い涙を) 自分に落とす」こと。

・オカイ ロキネ okay rok hine (135 行目)

これは複数形で、単数形は アン アイネ an a hine = an ayne (いたあげく) → 「いたが、やがて」という意味。

・タラフ ヘタフネ モコロ ヘタフネ tarap he tap ne mokor he tap ne (138 行目)

タフ tap は「強調」。ヘ ネ he ne は「～か」。タラフ ヘネ、モコロ ヘネ tarap he ne, mokor he ne 「夢か眠りか」を タフ tap で強めて「単なる夢か眠りか(と思っていたのに)」という意味。

・イヨッセレケレ iyosserkere (139 行目)

イヨッセレケレ iyosserkere で「驚いた」「たまげた」という意味の感嘆詞。

・イカラン i=kar=an (139 行目)

イ i= は、主格のア a=、アン =an 「私」に対して、目的格の「私に」という意味。カラ kar は、「をすること」。そして、この場合のアン =an は、「(不特定の) 人が」で、「～される」と受身的に訳されます。「私に人がする」→ 「私が(そう)される(こと)」

・チカシヌカラ cikasnukar (144 行目)

これは < ci-kasnukar (される・～を授ける) 授けられる(もの) → 恵み。

・エトコオイキ etoko-oiki (151 行目)

この言葉はく etoko-o-i-ki (～の前・に・もの・をする)「前もって用事をする」ことで、「準備をする」「用意をする」こと。

・イワン シントコ iwan sintoko (152 行目)

イワン iwan は、数詞の「六」。六は、数多いことを表わす数。シントコ sintoko は、「行器」。ほかいと呼ばれるうるし塗りの大きな容器。シサム sisam (和人) から入手したもので、アイヌの宝物の一つになっている。

・ロロライパ rororaypa (152 行目)

ロロ ror は、「上座」。オライパ oraypa は、「～の方に位置させる」こと (複数形)。単数形は、オライエ oraye。ロロライパ rororaypa で、「上座に位置させる」→「上座に並べる」こと。

・アペフチ ape huci (153 行目)

火の神は、アペ フチ ape huci (火・のおばあさん) と呼ばれています。この他、カムイ フチ kamuy huci (神のおばあさん) とか、イレス フチ iresu huci (ものを育てる・神) ともいわれます。火で煮たきをして食事を作ることができるので「育ての神」と呼ばれるのです。

火の神さまは、人間 (アイヌ) と神々 (カムイ ウタ) との仲介役をしてくれる神さまで、人間の願いをそれぞれの神へ伝えてくれると考えられています。最も人間に近い所にいて、人間を見守っている神さまなので、おばあさん (フチ) としてとらえられたのではないのでしょうか。こうした身近な神さまなので、儀式を行うとき、旅に出るとき、病気になったときなどには、まっ先に火の神さまに祈りを捧げます。この場合も、人間たちが準備で忙しくしている間、人間側の代表のようにシマフクロウの神さまの相手をつとめています。

・エパララセ epararse (157 行目)

酒の匂いがエパララセ epararse したとあります。エパララセ epararse は、< e-par-par-se (で・ハラ・ハラ・という)。パラ par は擬態語で、火が「メラメラ」燃えたり、「飛び散る」様子をいいます。「(酒の匂いが) 空中にフワッと飛びひろがる」こと。

[参考]

ここでは、意味の不明な言葉を取りあげて、その解明を試みてみたいと思います。あくまでも参考までに。

・ウコトウルパ ukoturpa (77 行目)

トウルパ turpa は、トゥリ turi (を伸ばす) の複数形。するとウコトウルパ ukoturpa で「互いに伸ばす」か「一緒に伸ばす」という意味になります。そこから「一緒に連ならせる」そして「紳士や淑女の品格をそなえている」となったものでしょう。

・ヤユコピシキヤ yayukopiskip (84 行目)

この中に含まれているピシキ piski は、「を数える」という意味で、< pis-ki (一つ一つ・をする) と分解できます。

・オッカシタ okkasi ta (117 行目)

オッカシ okkasi は、< ok-kasi (えり首・の上) さらに上。タ ta は「～に」オク ok は「うなじ、えり首」のこと。女性には、この「うなじ」の所に体を守る神さまがいるといわれています。その「うなじ」よりも上、で「もっと上」。オッカシタ okkasi ta で、「さらに上。それ以上」。

・オアフンタイパ oahuntaypa (132 行目)

この言葉も分析できないでいる言葉の一つです。オアフンタイエ oahuntaye (尻もちをつく、単数形) という言葉もあります。そこで次のように分析してみました。オアフンタイパ oahuntaypa < オアフンライパ < o-ahun-raypa < o-aw-un-raypa (尻を・内・に・移動させる) 腰が内側へ引けたようになる→腰を抜かす。ライパ raypa (単数形はライエ raye) は、合成語の中で「位置させる」「移動させる」という意味。r → t の変化が行ったと考えました。しかし、r が t に変化した理由は、調音点がほぼ同じ位置だということくらいしかよくわかりません。

## コラム (2)

### シロカニとコンカニ

コンカニ konkani は、日本語の「黄金 (金のこと)」という言葉から入ったものです。こがね kogane という語の濁音 ga は、アイヌ語では、nka という清音で取り入れられています。これと似た例が他にも多くあります。(幌別方言では、コンカニ。沙流方言では コンカネ。)

(日本語)	→	(アイヌ語)
タバコ tabako	→	タンパク tampusaku
釘 kugi	→	クンキ kunki
鏡 kagami	→	カンカミ kankami
卵 tamago	→	タマンコ tamanko

だとすれば、「白金しろがね (銀のこと)」という日本語は、シロンカニ sironkani になるはずですが、なぜそうならずシロカニ sirokani なのでしょう。

日本語の方を調べてみて理由がわかりました。「シロガネ」と発音されたのは、江戸時代以後になってからでした。その前は、「シロカネ」と発音されていたのです。アイヌ語は、この「シロカネ」という言葉を受け入れたのでしょう。

一方、「コガネ」と発音されていたのも平安時代以後でした。その前の奈良時代には「クガネ」と発音されていました。万葉集 (奈良時代) にも「シロカネもクガネも玉もなにせんに勝れる宝、子にしかめやも」とあります。

このことから次のようなことが推定できます。

- ① 「コガネ」からアイヌ語に入ったのは、平安時代以降。
- ② 「シロカネ」からアイヌ語に入ったのは、江戸初期以前。

以上のことから、金銀という言葉がアイヌ語に入ったのは、平安時代から江戸時代までの間と推定できます。

ところで、アイヌ語では、シロカニ (銀) の方がコンカニ (金) よりも上に見られていたのではないかと千葉大学の中川裕教授が指摘しています。この第1話の折り返し句 (サケへ) も、シロカニ (銀) が先に出てきます。また第11話の中で川の水源地を回復させる矢もシロカニ (銀) です。そして、コンカニ (金) の矢は登場しません。

なぜ、アイヌ語ではコンカニ (金) よりもシロカニ (銀) の方が上に見られたのでしょうか。これは、まだわかっていません。

## 第1話(その3)

### シマフクロウ神が自らをうたった謡

#### 「シロカニペ ランラン ピシカン」

〔158 行目～230 行〔終〕まで〕

#### 〔物語とその背景〕

ここから最終段に入ります。

粗末な家が大きく作り変えられ、宝物でその中を満たされた貧しい家の人々は、神送りの宴をとり行おうと村人たちを招待しようとしています。そして、子供に粗末な衣服を着せて、一軒一軒招待の伝言を伝えさせます。それを聞いて、にわか成金の人たちは、「どんな酒やご馳走があって招待しようとしているんだい。行って見て笑ってやろうじゃないか」と打ち揃って出かけます。ところが、遠くからその大きく立派な家を見ただけで驚いてそのまま引き返してしまう人もいます。家の前まで来て腰を抜かしてしまう者もあります。

その様子を見て家の中から奥さんが出てきて招き入れます。しかし家の中に入っても皆おぼろげとして顔を上げることもできません。そこで家の主人が立ち上がって「これまで私どもは貧しかったために皆さまと行き来もできずに暮らしてきましたが、このようにシマフクロウの神さまのお恵みをいただきました。これからは、私たちは一つになって仲よく暮らしていきたいと望むものであります」と話しました。

すると人々は、これまで分けへだてたことを謝り、これからは仲よくしていきましようと言いました。私、シマフクロウの神も皆から感謝されました。それからは皆の心がほぐれておいしい酒をくみかわし合いました。私（シマフクロウの神）は、火の神さまや家の神、幣棚の神たちと語り合いをしながら人間たちの舞いや踊りを楽しみました。そして2～3日してから酒宴は終わり、人々が仲よくしているのを見て安心した私（シマフクロウの神）は、火の神たちに別れを告げ、家に戻りました。

ところが驚いたことに私（シマフクロウの神）が家に帰り着く前に、家は美しい御幣や美酒でいっぱいになっていました。そこで、他の神々を招き宴をひらきました。そして人間の村を訪問したときの詳しいありさまを語り聞かせたところ神々からほめたてられました。神々が帰るときには美しい御幣もみやげに持って行ってもらいました。

人間の村を見ると、村人たちは平和に仲よく暮らしていて、あの家の主人は村長になり、あの子供はもう立派に成人し妻も子も持って父母に孝行しています。そして儀式のときには、その初めにまず私（シマフクロウの神）へ御幣やお酒でお祈りするので、それがすぐに届きます。私（シマフクロウの神）も村人たちの背後にいて常に人間の世界を見守っています。とシマフクロウの神さまは物語りました。

最終段では、にわか成金とにわか貧乏の関係が逆転し、これまで、にわか成金の人々が貧

乏な家を下げすんでつき合うこともしなかったことを謝り、両者は仲よく暮らすことになりました。バカにされたり、いじめられたりしたことは全て忘れて新しい関係を築こうと語る寛容で高潔な家の主人。ここにこの物語のテーマがあります。しかし、貧乏になった理由が「運が悪かった」といったあいまいなものであり、関係が逆転したときも、今までのいじめや差別は皆忘れて仲よくしましようといったきれいごとで済ませる点にアイヌの物語らしくないものを感じる人もいることでしょう。ここには書き手知里幸恵の人格が強く反映していることは確かでしょう。



- 158 タタ オッタ ネア ヘカチ オカムキノ  
Tata otta / nea hekachi / okamkino  
tata or ta nea hekaci okamkino  
さあ、そこで その 男の子 わざと
- 159 フシコ アミプ アミレ フ コタネピッタ オカイ  
hushko amip / amire wa / kotanepitta okai  
husko amip a=mire wa kotan epitta okay  
古い 着物 人・~に~をして 村 中に いる(複)  
着せる
- 160 テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネプ ウタ□□ケヘ  
teeta wenkur / tane nishpa nep / utarorkehe  
teeta wenkur tane nispa ne p utar orkehe  
昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である者 たち ~の所
- 161 アシケ アウクテ クス アサンケ ワクス  
ashke aukte kushu / asange wakushu  
aske a=ukte kusu a=sanke wakusu  
人・~に~を招待させる ために 人・~を出す ので
- 162 オシインカラシ コ ポンヘカチ チセピシノ  
oshiinkarash ko / ponhekachi / chisepishno  
osi inkar=as ko pon hekaci cise pisno  
その後に見る・私 すると 小さい 男の子 家 ごとに
- 163 アフン フ ソンコイエ コ、  
ahun wa / sonkoye ko,  
ahun wa sonko ye ko,  
入る して 伝言 ~を言う すると
- 164 テエタ ウェンクル タネ ニシパ ネプ ウタ□□ケヘ  
teeta wenkur / tane nishpa nep / utarorkehe  
teeta wenkur tane nispa ne p utar orkehe  
昔の 貧乏人 今の 物持ち ~である者 たち ~の所
- 165 エウミナレ：  
euminare:  
euminare：  
~をみんなで笑う
- 166 「ウサイネタプスイ ウェンクルタラ コオハネポ  
“Usainetapshui / wenkurutar / koohanepo  
“usayne tap suy wenkur utar koohanepo  
これはどうしたことか 貧乏人 たち 生意気な
- 167 ネコナアン サケ カラ フ ネコナアン  
nekonaan / sake kar wa / nekonaan  
nekona an sake kar wa nekona an  
どのように ある 酒 ~を作る して どのように ある
- 168 マラプト アン フ エウナフンケ ハウエ タ アン、  
marapto an wa / eunahunke / hawe ta an,  
marapto an wa e- un-ahunke hawe ta an,  
宴 ある して ~に・人・~を入れる こと(話) (強意) ある

そこで、あの小さい子に態と  
その時、あの子供は、わざと  
Next, the old man and woman purposely dressed that little child

古い衣物を着せて、村中の  
古い着物を着せられ、村中の  
in old clothing and sent him

昔貧乏人で今お金持になつてゐる人々を  
むかし貧しく今は豊かになっている人たち  
to invite to their house the people

招待する為使ひに出してやりました。ので  
を家に招くために使ひに出されました。そこで  
who were once poor and who were now rich. Now,

後見送ると、子供は家毎に  
私はその子の後を見送っていると、子供は一軒一軒の家  
as I watched the child go off, he entered the houses one by one

入つて使ひの口上を述べますと  
入つて伝言を伝えました。すると  
and delivered the message. When he did,

昔貧乏人で今お金持になつてゐる人々は  
むかし貧しく今は豊かになっている人たちは  
the people who were once poor and who were now rich

大笑ひをして  
みな一斉に笑つて、  
all laughed at once.

「これはふしぎ、貧乏人どもが  
「これは驚いた。貧乏人どもが  
"Well, well. What kind of wine have the poor people made

何んな酒を造つて何んな  
一体どんな酒を造つて、どんな  
and what kind of feast is there

御馳走があつてそのため人を招待するのだらう。  
宴会があつて、人を招待するのだろうか。  
that they should invite us?

- 169 パイエアン フ ネコナ シリキ ヤ インカラシ フ  
 payean wa / nekona shirki ya / inkarash wa  
 paye=an wa nekona sirki ya inkar=as wa  
 行く(複)・私たち して どのように 様子がある か 見る ・私たち して
- 170 アエミナ □。』 アリ  
 aemina ro.” ari  
 a=emina ro.” ari  
 私たち・～を笑う しよう と
- 171 ハウオカイ カネ インネ トパ ネ ウエウタンネ  
 hawokai kane / inne topa ne / uweutanne  
 hawokay kane inne topa ne ueutanne  
 言う(複) しながら 人数の多い 群 として 一緒になって
- 172 アラキ アイネ トオプ トウイマノ オウセ チセ ヌカラ フ  
 arki aine / toop tuimano / ouse chise / nukar wa  
 arki ayne toop tuymano ouse cise nukar wa  
 来る(複) したあげく 遙かに 遠くに ただ 家 ～を見る して
- 173 エホマツパ ヤシトマ フ ナニ ホシツパ カ オカイ、  
 ehomatpa / yashtoma wa / nani hoshippap ka okai,  
 ehomatpa yastoma wa nani hosippa p ka okay,  
 ～に驚く(複) 恥ずかしくなる して すぐに 戻る(複) 者 も いる(複)
- 174 チセソイ パクノ アラキ フ オアフンタイパ カ オカイ。  
 chisesoi pakno / arki wa / oahuntaipap ka okai.  
 cise soy pakno arki wa oahuntaypa p ka okay.  
 家 ～の外 まで 来る(複) して 腰を抜かず(複) 者 も いる(複)
- 175 シリキ チキ チセコ□ カツケマツ ソイネ フ  
 Shirki chiki / chisekor katkemat / soine wa  
 sirki ciki cise kor katkemat soyne wa  
 様子である したら 家 ～の 夫人 外に出る して
- 176 アイヌ オピッタ アシケヘ ウク フ アフブテ コ、  
 ainu opitta / ashkehe uk wa / ahupte ko,  
 aynu opitta askehe uk wa ahupte ko,  
 人 みんな ～の手 ～を取る して ～を入れる(複) すると
- 177 オピッタ ノ シヌ カネ レイエ カネ アフブ フ  
 opitta no / shinu kane / reye kane / ahup wa  
 opittano sinu kane reye kane ahup wa  
 みんな いざる しながら 這う しながら 入る(複) して
- 178 ヘブンパ ルウェ オアラリサム。  
 hepunpa ruwe / oararisham.  
 hepunpa ruwe oarar isam.  
 顔を上げる(複) こと 全く ない
- 179 シランチキ チセコン ニシパ チリキプニ  
 Shiranchiki / chisekon nishpa / chirikipuni  
 siran ciki cise kor nispa ci-rikipuni  
 様子がある したら 家 ～の 主人 起き上がる

行つて何んな事があるか見物して  
 行ってどんな様子か見て  
 Let's go see what is going on

笑つてやりませう。」と  
 笑つてやろう」と  
 and laugh at them."

言ひ合ひながら大勢打連れて  
 言いながら大勢がうちそろつて  
 Saying this, a crowd of people came,

やつて来て、ず一つと遠くから、たゞ家を見たゞけで  
 やつて来ました。すると、ずっと遠くからただ家を見ただけで  
 and some of them, even just seeing the house from a distance,

驚いてはづかしがり、其の儘帰る者もあります、  
 驚き恥かしがって、すぐに帰ってしまう者がいたり、  
 were so surprised and ashamed that they went straight home,

家の前まで来て腰を抜かしてゐるのもあります。  
 家の外まで来て腰を抜かず者もいました。  
 while others came to the front of the house and were paralyzed with shock.

すると、家の夫人が外へ出て  
 それを見て家の老婦人は外に出てきて  
 Seeing this, the elderly lady of the house came out

人皆の手を取つて家へ入れますと、  
 そこにいる人みんなの手を取つて家の中に招き入れると、  
 and took their hands and led them into the house, and

みんないざり這ひよつて  
 みんなおそおそと座りながらずつたり、這つたりして入り  
 everyone entered hesitantly, sliding in while seated and crawling in,

顔を上げる者ありません。  
 顔を上げる者もいません。  
 not one of them able to raise his head.

すると、家の主人は起き上つて  
 やがて家の主人は立ち上がつて  
 Finally the man of the house stood

- 180 キ チャランケ カッコクハウ ネ オウセトウルセ  
 ki charanke / kakkokhau ne / ouseturse  
 ki caranke kakkok haw ne ouse turse  
 ~をする 説得するように語る カッコウ 声 として ただ とぶ
- 181 エネ エネ ネ カトウフ エイソイタク:  
 ene ene / ne katuhu / eisotak:  
 ene ene ne katuhu eisoytak:  
 次のように 次のように その ~の様子 ~を物語る
- 182 「タプネ タプネ ウェンクル アネ フ ラウキサムノ  
 “Tapne tapne / wenkur ane wa / raukisamno  
 “tapne tapne wenkur a=ne wa rawkisamno  
 このように このように 貧乏人 私たち・~である して 包みかくさずに
- 183 ウコパイェカイ カ アエアイカフ ルウェ ネ ア コロカ  
 ukopayekai ka / aeaikap ruwe / ne a korka  
 ukopayekay ka a=eaykap ruwe ne a korka  
 互に行き交うこと も 私たち・~ができない のである した けれども
- 184 パセ カムイ ウネランポキウエン、ネプ ウエンプリ  
 pase kamui / unerampokiwen, / nep wenpuri  
 pase kamuy un=erampokiwen, nep wen puri  
 重い 神 私たち・~をあわれに思う 何の 悪い 行い
- 185 チコン ルウェ カ ソモネ ア クス タンコラチ  
 chikon ruwe ka / somone a kushu / tankorachi  
 ci=kor ruwe ka somone a kusu tan koraci  
 私たち・~を持つ こと も ない ~である した ので この ように
- 186 アウンカヌカラ キ ルウェネ クス、  
 aunkashnukar / ki ruwene kushu,  
 a=un=kasnukar ki ruwe ne kusu,  
 される・私たち・~に恵みを ~する のである から  
 与える
- 187 タン テワノ コタネピッタ シネ ウタラ  
 tan tewano / kotanepitta / shine utar  
 tan tewano kotan epitta sine utar  
 この これから 村 中 一つの 仲間
- 188 アネ ルウェネ クス ウエカタイロツケアン  
 ane ruwene kushu / uwekatairotkean  
 a=ne ruwe ne kusu uekatayrotke=an  
 私たち・~である のである から 仲良くする ・私たち
- 189 ウコパイェカイアン キ クニネ ニシパ ウタラ  
 ukopayekaiian / ki kunine / nishpa utar  
 ukopayekay=an ki kunine nispa utar  
 互に行き来する・私たち ~する ように 物持ち たち
- 190 アコラムコロ シリ タパン。」 アリ オカイペ  
 akoramkor / shiri tapan.” ari okaipe  
 a=koramkor siri tapan.” ari okay pe  
 私たち・~に相談する 様子 である と ある(複)もの

カッコウ鳥の様な美しい声で物を言ひました。  
 話しはじめましたが、その声はカッコウのように美しく響き、  
 and began to speak, his voice ringing out beautifully like a cuckoo,

斯々の訳を物語り  
 かくかくしかじかと次のように語りました。  
 and he said as follows:

「此の様に、貧乏人でへだてなく  
 「このように私どもが貧しかったために、分けへだてなく  
 "Because we were poor, we could not associate with everyone

互に往来も出来なかつたのだが  
 互に行き来もできませんでしたが、  
 without discrimination, but the weighty god

大神様があはれんで下され、何の悪い考へも  
 村を守る大切な神さまが私どもをあわれに思って下さいました。何の悪い行い  
 who watches over this village took pity on us. Since we had never

私どもは持つてゐませんでしたので此の様に  
 も私どもはしませんでしたので、このように  
 done any bad deeds, we were blessed

お恵みをいたゞきましたのですから  
 恵みを与えて下さいました。ですから  
 in this way. So,

今から村中、私共は一族の者  
 これからは村中一つ  
 I would like to ask that

なんですから、仲善くして  
 になって、仲よくして  
 from now on

互に往来をしたいといふ事を皆様に  
 互に行き来をしたいものだとすることを皆さまに  
 the people of this village unite and get along

望む次第であります」といふ事を  
 お願いする次第であります」ということを  
 with one another." When the old man

- 191 エチャランケ アワ ニシパ ウタラ  
 echaranke awa / nishpa utar  
 ecaranke awa nishpa utar  
 ~を論じる したところ 物持ち たち
- 192 オトウサナシケ オレサナシケ ウカエノイパ  
 otushanashke / oreshanashke / ukaenoipa  
 otu-sanaske ore-sanaske ukaenoypa  
 二つの 手 三つの 手 ~をすり合わせる(複)
- 193 チセコロ ニシパ コヤヤ PAP、テフノ アナク  
 chisekor nishpa / koyayapapu, / tewano anak  
 cise kor nishpa koyayapapu, te wano anak  
 家 ~の 主人 ~にあやまる これから は
- 194 ウエカタイロツケ クニ エウコイタク。  
 uwekatairotko kuni / eukoitak.  
 uekatayrotke kuni eukoytak.  
 仲良くする こと ~について話し合う
- 195 チオカイ ナツカ アウンコオンカミ。  
 Chiokai nakka / aunkoonkami.  
 ciokay nakka a=un=koonkami.  
 私 も される・私・~に礼拝する
- 196 タポロフ アイヌオピッタ ラムリテン フ  
 Taporowa / ainuopitta / ramuriten wa  
 tap orowa aynu opitta ramuriten wa  
 それから 人 みんな 心が柔らかく して
- 197 シサク トノト ウコアンテ。  
 shisak tonoto / ukoante.  
 sisak tonoto ukoante.  
 極上の 酒 ~をお互いに置く
- 198 チオカイ アナク カムイ フチ チセコロ カムイ  
 Chiokai anak / Kamui Huchi / Chisekor Kamui  
 ciokay anak kamuy-huci cise kor kamuy  
 私 は 火の神 家 ~の 神
- 199 ヌサコロ フチ トウラ ウエネウサラシ コロ  
 Nusakor Huchi tura / uweneusarash kor  
 nusa kor huci tura uenewsar=as kor  
 祭壇 ~の おばあさん と共に 四方山話をする・私 しながら
- 200 アイヌピトウタラ タプカラ シリ リムセ シリ  
 ainupitoutar / tapkar shiri / rimse shiri  
 aynu-pito utar tapkar siri rimse siri  
 人間 たち 踏舞する 様子 踊る 様子
- 201 チヌカラ フ チエヤイキコロ アンテ カネ、  
 chinukar wa / chieyaikiror / ante kane,  
 ci=nukar wa ci=eyaykiror-ante kane,  
 私・~を見る して 私・~を楽しむ しながら

申し述べると、人々は  
 申し述べると、人々は  
 said this, the people

何度も何度も手をすりあはせて  
 何度も何度も手をすり合わせて  
 rubbed their hands together again and again

家の主人に罪を謝し、これからは  
 家の主人にこれまでのことをあやまり、これからは  
 and apologized to the man

仲よくする事を話合ひました。  
 仲よくすることを約束し、話し合ひました。  
 and promised to get along with one another.

私もみんなに拝されました。  
 私もみんなから感謝され拝まれました。  
 I was thanked and worshipped by everyone.

それが済むと、人はみな、心が柔らいで  
 それからは、人々はみな心がほぐれて  
 After that, they all relaxed and took turns

盛んな酒宴を開きました。  
 たぐいまれなほど美味な酒を互いにくみかわしました。  
 pouring for one another the exceptionally delicious wine.

私は、火の神様や家の神様や  
 私も火の神さまや家の神様  
 I had a truly enjoyable time

御幣棚の神様と話合ひながら  
 幣の神さまたちと共に楽しい語らいをしながら  
 watching the humans hopping and dancing about

人間たちの舞を舞つたり躍りをしたりするさまを  
 人間たちの舞いや踊りを  
 while I chatted pleasantly with

眺めて深く興がりました。そして  
 眺めて実に楽しい時を過ごしました。そして  
 the Fire Goddess, the God of the House, and the Inau God.

- 202 トウツコ レレコ シラン コ イクオカ アン、  
 tutko rerko / shiran ko / ikuoka an,  
 tutko rerko siran ko iku oka an,  
 二日 三日 経つ すると 酒宴 ~の後 ある
- 203 アイヌピトウタラ ウエカタイロツケ シリ  
 ainupitoutar / uwekatairotkе shiri  
 aynu-pito utar uwekatayrotke siri  
 人間 たち 仲良くする 様子
- 204 チヌカラ ワ チエラムシンネ、  
 chinukar wa / chieramushinne,  
 ci=nukar wa ci=eramushinne,  
 私・~を見る して 私・~で安心する
- 205 カムイ フチ チセコロ カムイ  
 Kamui Huchi / Chisekor Kamui  
 kamuy-huci cise kor kamuy  
 火の神 家 ~の 神
- 206 ヌサコロ フチ チエトウツコパク。  
 Nusakor huchi / chietutkopak.  
 nusa kor huci ci=etutkopak.  
 祭壇 ~の おばあさん 私・~に別れを告げる
- 207 タポロフ チウンチセヘ チコヘコモ。  
 Taporowa / chiunchisehe / chikohekomo.  
 tap orowa ci=un-cisehe ci=kohekomo.  
 それから 私・~の住む家 私・~へ戻る
- 208 ウネトクタ チウンチセヘ ピリカ イナウ  
 Unetokta / chiunchisehe / pirka inau  
 un=etok ta ci=un-cisehe pirka inaw  
 私・~の先 に 私・~の住む家 美しい イナウ
- 209 ピリカ サケ チエシクテ。  
 pirka sake / chieshikte.  
 pirka sake ci-esikte.  
 おいしい 酒 される・~で~をいっぱいにする
- 210 シラン チキ ハンケ カムイ トウイマ カムイ  
 Shiran chiki / hanke kamui / tuima kamui  
 siran ciki hanke kamuy tuyma kamuy  
 様子がある すると 近い 神 遠い 神
- 211 チコソソコアンパ チタク ワ シサク トノト  
 chikosonkoanpa / chitak wa / shisak tonoto  
 ci=kosonkoanpa ci=tak wa sisak tonoto  
 私・~に伝言を伝える 私・~を招く して 極上の 酒
- 212 チウコアンテ、イクトウイカタ カムイウタラ  
 chiukoante, / ikutuikata / kamuiutar  
 ci=ukoante, iku tuyka ta kamuy utar  
 私・~を互いに置く 酒宴 ~の最中 に 神 たち

二日三日たつと酒宴は終わりました。  
 二、三日たつと酒宴は終わり、  
 After two or three days, the feast ended, and

人間たちが仲の善いありさまを  
 人間たちが仲よくしている様子  
 seeing that the humans were getting along with one another,

見て、私は安心をして  
 を私は見て、安心しました。  
 I was able to relax.

火の神、家の神  
 そして火の神さま、家の神さま  
 So, to the Fire Goddess, the God of the House,

御幣棚の神に別れを告げました。  
 幣の神に別れを告げました。  
 and the Inau God, I said my farewells

それが済むと私は自分の家へ帰りました。  
 それから私は自分の家へ帰りました。  
 and returned to my own home.

私の来る前に、私の家は美しい御幣  
 ところが私が着く前に、私の家はすでに美しい御幣や  
 But before I arrived, my house had already been filled

美酒が一ぱいになつておりました。  
 美酒で満たされていました。  
 with beautiful inau and delicious wine.

それで近い神遠い神に  
 そこで近い神さまや遠い神さまに  
 So I sent a messenger to invite the nearby gods

使者をたて、招待し、盛んな酒宴を  
 使者を送って招待し、たぐいまれな美酒  
 and the far away gods, and we took turns pouring for one another

張りました、席上、神様たちへ  
 をくみかわし、酒宴の席上、神々に  
 the exceptionally delicious wine, and on this occasion

- 213 チコイソイタカ、アイヌコタン チホタヌカラ  
 chikoisoitaka, / ainukotan chihotanukar  
 ci=koisoytak a, aynu kotan ci=hotanukar  
 私・～に物語る した 人間 村 私・～を訪れる
- 214 エネシラニ エネシリキイ チオモンモモ コ、  
 eneshirani / eneshirkii / chiomonmomo ko,  
 ene siran i ene sirki i ci=omonmomo ko,  
 このように様子がある こと このように様子である こと 私・～を詳しく述べる すると
- 215 カムイウタラ ウンコプンテク。  
 kamuiutar / unkopuntek.  
 kamuy utar un=kopuntek.  
 神 たち 私・～をねぎらう
- 216 カムイウタラ ヘコンパイタ ピリカ イナウ  
 Kamuiutar / hekompaita / pirka inau  
 kamuy utar hekempa i ta pirka inaw  
 神 たち 戻る(複) 時 に 美しい イナウ
- 217 トウブ チコレ レブ チコレ。  
 tup chikore / rep chikore.  
 tup ci=kore rep ci=kore.  
 二つ 私・～に～をやる 三つ 私・～に～をやる
- 218 ネア アイヌコタン オルン インカラシ コ  
 Nea ainukotan orun / inkarash ko  
 nea aynu kotan or un inkar=as ko  
 その 人間 村 ～の中に 見る・私 すると
- 219 タネ アナクネ ラッチタラ アイヌピトウタラ  
 tane anakne / ratchitara / ainupitoutar  
 tane anakne ratcitarara aynu-pito utar  
 今 は 穏やかに 人間 たち
- 220 オピッタノ ウエカタイロツケ ネア ニシパ  
 opittano / uwekatarotke / nea nishpa  
 opittano uwekatayrotke nea nispa  
 みんな 仲良くする その 主人
- 221 コタン エサパネ ワ オカイ、  
 kotan esapane wa okai,  
 kotan esapane wa okay,  
 村 ～のリーダーになる して いる(複)
- 222 ネア ヘカチ タネ アナクネ オツカイ パクノ  
 nea hekachi / tane anakne / okkai pakno  
 nea hekaci tane anakne okkay pakno  
 その 男の子 今 は (一人前の)男 まで
- 223 シクブ フ、マツ カ コロ ポ カ コロ、  
 shikup wa, / mat ka kor / po ka kor,  
 sikup wa, mat ka kor po ka kor,  
 成長する して 妻 も ～を持つ 子供 も ～を持つ

私は物語り、人間の村を訪問した時の  
 私は物語り、人間の村を私が訪問し、  
 I told the gods everything that happened

其の村の状況、其の出来事を詳しく話しますと  
 そこであったこと、そこでの様子を詳しく話すと  
 at the village of the humans, and when I told them

神様たちは大そう私をほめたてました。  
 神々は私をほめたてました。  
 the details, the gods praised me heartily.

神様だちが帰る時に美しい御幣を  
 そして神々が帰るときに美しい御幣を  
 Then, when the gods left, I gave them

二つやり三つやりしました。  
 私はたくさん差し上げました。  
 many beautiful inau.

彼のアイヌ村の方を見ると、  
 あの人間の村の方を見ると  
 Now when I look at that human village,

今はもう平穏で、人間たちは  
 今はもう何ごともなく平和に人々は  
 the people live peaceful lives, and everyone

みんな仲よく、彼のニシパが  
 みな仲よく暮らしていて、あの家の主人は  
 gets along with one another. The man of that house

村の頭になつてゐます、  
 村長むらびさになっています。  
 is now the head of the village, and

彼の子供は、今はもう、成人  
 あの子供は、今はもう大人に  
 that child is now an adult

して、妻もち子も持つて  
 なっていて、妻を持ち子も持つて  
 with a wife and children

- 224 オナハ カ、ウヌフ カ、ヌヌケ コロ オカイ、  
 onaha ka, / unuhu ka, / nunuke kor okai,  
 onaha ka, unuhu ka, nunuke kor okay,  
 父 も 母 も ~に孝行する しながら いる(複)
- 225 ランマランマ サケカリチ コ  
 rammaramma / sakekarichi ko  
 ranma ranma sake kar-ci ko  
 いつも いつも 酒 ~を作る・(複) すると
- 226 イキラツパ タ ウサ イナウ ウサ サケ ウネノミ、  
 ikiratpa ta / usa inau / usa sake unenomi,  
 ikir atpa ta usa inaw usa sake un=enomi,  
 列 ~の最初 に いろいろな イナウ いろいろな 酒 私・~で~をまつる
- 227 チオカイ ナツカ アイヌウタラ セレマカハ  
 chiokai nakka / ainuutar / sermakaha  
 ciokay nakka aynu utar sermakaha  
 私 も 人間 たち ~の背後
- 228 ヘンパラ ナツカ チエホラリ、  
 hempara nakka / chiehorari,  
 hempara nakka ci=ehorari,  
 いつ でも 私・~に鎮座する
- 229 アイヌモシリ チエプンキネ ワ オカヤシ。  
 ainumoshir / chiepunkine wa okayash.  
 aynu mosir ci=epunkine wa okay=as.  
 人間 世界 私・~を守る して いる(複)・私
- 230 アリ カムイチカブ カムイ イソイタク。  
 ari kamuichikap kamui isoitak.  
 ari kamuycikap kamuy isoytak.  
 と シマフクロウ 神 物語る

父や母に孝行をしてゐます、  
 父母に孝行しています。  
 and is obedient to his parents.

何時でも何時でも、酒を造つた時は  
 彼らは酒を造ると、いつもいつも  
 Whenever they make wine, they always

酒宴のはじめに、御幣やお酒を私に送つてよこします。  
 酒宴の初めに御幣や酒で私を礼拝します。  
 worship me with inau and wine at the beginning of the feast.

私も人間たちの後に坐して  
 私も人間たちの後立てとなって  
 And I am always with the humans, supporting them

何時でも  
 いつでも見守り、  
 and watching over them.

人間の国を守護つています。  
 人間の世界を守っているのです。  
 In this way, I protect the world of the humans.

と、ふくらふの神様が物語りました。  
 と、シマフクロウの神さまは物語りました。  
 Thus spoke the Owl God.

## 〔言葉の説明〕

## ・オカムキノ okamkino (158 行目)

この言葉は、オカムキノ okamkir no が okamkinno となり、その縮約した形だと思われます。「わざと」という意味。okamkir の語源は「あとで・わかる」という意味だろう。

## ・アミレ a=mire (159 行目) / アシケ アウクテ aske a=ukte (161 行目)

## ／アサンケ a=sanke (161 行目)

この場合のア a= は「人が」という意味で、受身的に「～される」と訳されます。アミレ a=mire (人が着せる) → 「着せられる」。

アシケ ウク aske uk (手を取る) → 「招く」。アシケ アウクテ aske a=ukte (手を・人が・取らせる) → 手を取らせられる → 「招かせられる」。

アサンケ a=sanke (人が・出す) → 「(使いに) 出される」。ここでは、少年が古い着物を着せられて村人を招待するように使いに出されたということ。誰が使いに出したかは明確ではない表現方法。

## ・エピッタ epitta (159 行目)

エピッタ epitta は、「全体」という意味。面的な意味のみんな。オピッタ opitta は「全員。みんな」という数的な意味。コタン エピッタ kotan epitta で「村全体。村中」。コタン オピッタ kotan opitta だと「村人みんな」という意味になります。

## ・オシインカラシ osi inkar=as (162 行目)

オシ インカラシ osi inkar=as (の後を見る・私 → 私が～を見送る)。ここでは「私」シマフクロウが少年を見送ったことがわかります。

## ・ソンコ イエ sonko ye (163 行目)

ソンコ sonko は「伝言」。イエ ye は「～を言う」。「伝言を言い伝える」こと。イオマンテや葬儀など大きい儀式があるときは、必ずその前に使いの者(伝令役)が立てられ、その人が前もって伝えて歩く習わしがあります。

## ・ウサイネタスィ usayne tap suy (166 行目)

ウサイネ usayne (いろいろ。とんでもないことも混って)。タップ tap (強調)、スイ suy (また)。「これはまたとんでもないことだ」→ 「これは意外だ」「これは驚きだ」。

## ・マラプト marapto (168 行目)

この言葉の元は日本語の「まらうと(客人)。「まらうと」は、「まらひと」が転じたもので、この言葉からアイヌ語に入ったと思われます。「まれびと(稀れ人=客人)」と同じ意味。家を訪れてくれたカムイ(神)は、まさに客人(まらうと=まらうど)。アイヌ語では、「(神窓から家の中に入れた)熊の頭」。そこから転じて「酒宴」「酒宴のご馳走」を意味します。マラプト アン marapto an で、「酒宴が催される」こと。

## ・エウナフンケ e-un-ahunke (168 行目)

エ e は「～に」。ウン un は「人(を)」。アフンケ ahunke は「を(家に)入れる」。「～に人を招く」こと。

## ・アエミナ ロ a=emina ro (170 行目)

この場合のア a= は、「私たち」。エミナ emina 「～を笑う」。ロ ro は「～しましょう」の意味。「それを笑いましょう」の意味。この引用文のくだりは、「私たち」をア a=、アン =an で表現していますが、169 行目のインカラシ inkar=as だけ、アン =an の代わりにアシ =as が使われています。

## ・インネ トパ ネ ウエウタンネ inne topa ne ueutanne (171 行目)

インネ トパ ネ inne topa ne は「大勢・の群・になって」。ネ ne は格助詞「に(なる)」。インネ トパ ネ ウエウタンネ inne topa ne ueutanne で「大勢の群になって連れだつ」。

トパ topa は、人や動物の「群」のこと。魚や鳥の群は、別な言い方をします。

(動物・人の) 群 . . . . . トパ topa

(魚の) 群 . . . . . ルッ rup

(鳥の) 群 . . . . . サイ say

## ・エホマツパ ヤシトマ ehomatpa yastoma (173 行目)

エホマツパ ehomatpa は、エホマトウ ehomatu の複数形で「に驚く」こと。

ヤシトマ yastoma は、< yay-sitoma (自分・を恐れる) の縮約形で、「恥かしがる」こと。「驚いて恥かしがる」こと。

## ・カッケマツ katkemat (175 行目)

カッケマツ katkemat は、「立派な女性。淑女。成人女性の尊称」で、ニシパ nispa 「徳のある男性」と対。尊称として、知里ミナ カッケマツ(さま)、とか八重九郎ニシパ(さま)のように使われます。このテキストの場合のチセ コロ カッケマツ cise kor katkemat は「家の主婦」「家の主人」の対。katkemat は、< kat-ke-mat ([よい] 有様・をする・女性) から。

## ・シヌ カネ レイエ カネ sinu kane reye kane (177 行目)

シヌ sinu は、「ひざでずる」こと。レイエ reye は「はう」こと。直訳すると「ひざでずったり、はったりしながら」。これは慣用句で、他人の家に入るときに、へりくだって入っていく様子をいったもの。立ったまま入らずオリパッ oripak (恐れ慎しむ) しながら身を低くて、ずりながら家の人のすすめに応じて少しずつ入っていくこと。

## ・オアラリサム oarar isam (178 行目)

オアララ oarar は、オアラ oar (全く) に、さらに ar が重複され強調したもの。イサム isam は、「ない」。「顔を上げることは) 全くない」ということ。



・ラウキサムノ rawkisam no (182 行目)

ラウキサム rawkisam は、< rawke-isam (水面より低い所・ない) の縮約形。  
ラウケ rawke は、< raw-ke (raw の所属形)。ラウ raw は、「水底。深み」。「(心の) 深み」  
腹に一物を持つこと。  
ラウキサムノ rawkisam no で、腹に一物もなく、「内心でバカにすることもなく」の意味。

・ウコパイェカイ ukopayekay (183 行目)

ウコ uko は、「互いに」。パイェカイ payekay は、パイェオカイ paye-okay の変化したもの。  
paye-okay はオマナン omanan (歩き回わる。往き来する) の複数形。ウコパイェ  
カイ uko-payekay で「互いに往き来する」こと。

・アウンカシヌカラ a=un=kasnukar (186 行目)

アウンカシヌカラ a=un=kasnukar は「人が・私たちに・～を授ける」→「私たちに恵みを  
授ける」こと。

・クニネ kuni ne (189 行目)

クニネ kuni ne で「～(する) つもりである。～(する) 予定である」。ここでは「互い  
に仲よくし、往き来したいものである」という意味。

・オトウサナシケ オレサナシケ ウカエノイパ

otu sanaske ore sanaske ukaenoypa (192 行目)

オトウ～オレ～ otu～ore～は、直訳すると「二度三度」。これで「何回も何回も」とい  
う意味。  
サナシケ san-aske (出る・手) は、単にアシケ aske (手) でもよいのですが、音節をふ  
やし韻文調にした言い方。ウカエノイパ uka-e-noypa は「互いの上・で・繰り返し擦る」  
こと。これは男が礼拝(オンカミ)のときに行う動作で、手の平を擦りながら左右に手を揺  
らすこと。

・コヤヤパプ koyayapapu (193 行目)

< ko-yay-apapu (～に対して・自分・を責める) →～に対して自分が悪かったという→  
に謝る。

・アウンコオンカミ a=un=ko-onkami (195 行目)

アウンコオンカミ a=un=ko-onkami は、「(不特定の) 人が・私に・対して・礼拝する」  
こと。つまり「私は礼拝される」という意味。

・ラムリテン ramuriten (196 行目)

ラムリテン ramuriten は、< ramu-riten (その心・柔らかい) →「心が柔らか」こと。ア  
イヌ語では、精神の活動を表わす言葉は、ほとんどラム ram (心) という語を内包してい  
ます。204 行目の エラムシンネ eramusinne (安心する) もその一つです。

(例)

エラムシンネ eramusinne (安心する) < e-ramu-sir-ne (で・の心が・大地・になる)  
エランポキウエン eramupokiwen (あわれに思う)  
< e-ramu-poki-wen (で・の心・の下・悪い)  
エラムアン eramuan (わかる) < e-ramu-an (で・の心・がある)  
エラムトゥイ eramutuy (びっくりする) < e-ramu-tuy (で・心・が切れる)

・シサク トノト sisak tonmoto (197 行目)

シサク sisak は、< si-sak (本当に・[並ぶもの] を欠く) 珍しい。貴重な。  
トノト tonoto は、「(アワなどをかもして作った) 酒」で、< tono-to (殿・の乳)。トノ  
tono は和人の敬称。

・チエヤイキロロ アンテ ci=eyay-kirorante (201 行目)

チエヤイキロロアンテ e-yay-kiroran-te は、<で・自分・楽しむ・させる →で楽しむ。全  
体で、「私は楽しんだ」という意味。神謡で使われる言葉は実に回わりくどい。単に、楽し  
んだ、ということ、自分を楽しませた、などというのですから。音節をふやし雅やかさを  
表すために発達した技法。

・イクオカ アン iku oka an (202 行目)

イク iku は< i-ku (もの・を飲む) →酒を飲むこと→酒宴。オカ アン oka an は「～  
が終わる」。イク iku の場合「イ i (もの)」とただで「酒」であることは自明のこ  
とになっています。「酒宴が終わる」こと。

・チウンチセ ci=un-cise (207 行目)

ウンチセ uncise で「自分の家」。直訳すると < un-cise (そこにいる・家)。チウンチセ  
ci=uncise で「私の自分の家」→「自分の家」

・チエシクテ ci-esikte (209 行目)

チ～テ ci～te が動詞をはさんで、韻文調の言葉を作ります。チ～テ ci～te で「～  
れる・～させる」で結局意味は、中にはさまれた元の動詞と同じになります。この場合は、  
エシク esik 「～でいっぱいになる」と同じ。これも音節をふやすため。

・コソソコアンパ kosonko-anpa (211 行目)

コ ko は、「～に」という意味の接頭辞。ソソコアンパ sonko-anpa は「伝言・を持って  
いく」こと。チソソコアンパ チタク ci=kosonkanpa ci=tak で「私は～に伝言を持って  
行き、私が招待する」。直訳的には、シマフクロウ本人が伝言を持っていったことになるの  
ですが、実際には、誰かを使者に立てて伝言を持って行って招待するのが普通なので、知里  
幸恵は「使者を立てて招待し」と訳したのでしょう。

・サケカリチ sake karici (225 行目)

サケ カヲ sake kar で「酒を造る」こと。チ ci は、動詞に接尾して「何度も何度も」という意味を付け加えます。その前の i は本来は無かったのではないのでしょうか (誤植?)。「ノート」では sake kar ko となっています。あるいは r 音を残すためか。沙流方言には、このチ -ci がありません。

#### ・イキラツパ ikir atpa (226 行目)

イキリ ikir は < ik-ir (節・一つながり) → 「列」「集合」。アツパ atpa は「初め」。イキリアツパ (一連の儀式・の初め)「酒宴の初め」。

#### ・セレマカハ sermakaha (227 行目)

セレマク sermak (背後)の所属形が、セレマカ sermaka、セレマカハ sermakaha。sermak < ser-mak (身幅・の後側) → 「背後」。セレマカハ エホラリ sermakaha ehorari (背後に座す)は単なる背の側という物理的な意味ではなく、その人の守護神が背後に付くこと (セレマク ウシ sermak us)。そうすると運が向くといわれ、反対は セレマク サク sermak sak (運が尽きる)。

#### ・エホラリ ehorari (228 行目)

この言葉は < e-ho-rari (に・尻・を押さえつける) → に尻を押さえつける → に座る。に住む。

#### ・アリ カムイチカフ カムイ イソイタク ari kamuycikap kamuy isoytak (230 行目)

この最後の言葉は、シマフクロウの語りから突然語り手の言葉に切り替わったもので「と、シマフクロウの神さまは語りました」としめくくったもの。

### 〔参考〕

参考までに難語、不明語の解明を試みてみました。

#### ・コオハネボ koohanepo (166 行目)

コオハネボ koohanepo は相手を見下して言う「くだらない者」とか「つまらぬ者」という意味。コオハイネボ koohaynepo ともいいます (久保寺)。そこで次のような分解を試みて見ました。

< ko-ohayne-po (～を・こわがる・小さいもの) → 「(弱虫の小児のように) とるに足りないつまらない者」?

#### ・アエアイカフ a=eaykap (183 行目)

アイヌ語で「可能」「不可能」は、エアシカイ easkay (出来る)、エアイカフ eaykap (出来ない) といいます。では、可能および不可能は、一体何を元にして言ったのでしょうか。この言葉を分析することからそれが見えてくるようです。

- ・可能 (出来る) は、easkay ですが、さらに分解すると  
< e-askay (～について、上手である) となります。
- ・不可能 (出来ない) は、eaykap ですが、さらに分解すると  
< e-aykap (～について、下手である) となります。

つまり、上手、下手が可能、不可能の元になっていました。では、少々冒険をとまなうのですが、さらにこの上手、下手を分解してみましょう。

- ・上手は、askay ですが、分解すると < aske-an (手・がある) となります。
- ・下手は、aykap ですが、分解すると < aske-ap (手・が危うい) となります。

こうしてみると、「手がある」ことが上手で、「手が危うい」ことが下手だということがわかります。つまり、可能、不可能の元は、「(いい) 手をもっている」か「手もとが危うい」かだったのです。日本語でも上手、下手のようにやはり手が関わっています。はたしてこの分解でよいのかどうか……。

#### ・エトウツコパク etutkopak (206 行目)

これは分析の難しい言葉です。次のように考えてみました。etutkopak < etur-kopak (を伴う (こと) をとがめる) → 一緒に行くことをとがめる → 「(見送ろうとするのを、もうこれ以上は結構ですとって) 別れる」。はたしてどうでしょうか。

### コラム (3)

#### 「銀の滴」とは？

カムイユーカラ（神謡）に必ず付いているのがサケヘ（折り節。繰り返される短い句。リフレイン）です。この第一話のサケヘは、有名な「シロカニペ ランラン ピシカン、コンカニペ ランラン ピシカン」だと考えられてきました。しかし、よく見ると他の物語の冒頭にサケヘが付いているのですが、この第一話には、サケヘが書いてありません。サケヘは本来、物語の本文とは関係なく繰り返される短い句です。たとえそれを取り除いても物語の流れには何の影響も及びません。ところが、この第一話の「シロカニペ……」は本文の一部となっていて取り除くことはできなくなっています。すると、この「シロカニペ……」は、サケヘではなく、本文の一部かもしれません。

ところで、この「シロカニペ……」とは一体どんな意味を持っているのでしょうか。日本語訳では、「銀の滴降る降るまわりに、金の滴降る降るまわりに」となります。では、「銀の滴」「金の滴」とは一体何を表しているのでしょうか。これまで幾つかの答えが考えられてきました。たとえば、天から降ってきた雨の滴が陽に輝いてキラキラと金銀に光る、というものなどがその一つです。

サケヘは、その神謡の主人公の「名のり」のようなものだともいわれています。例えば「ワーオリ」というサケヘが付いた神謡ならばワオ カムイ wao kamuy（アオバト）が主人公だからだとわかります。アオバトの鳴き声は「ワーオ」と聞こえます。また鳴き声ばかりではなく、その神さまの置かれている状況をサケヘにしたものもあります。「リットウンナ」というサケヘは「高い所でゴロゴロ」といった意味で、雷神（カンナ カムイ）の神謡のサケヘです。クジラ（またはカジキマグロ）の場合ですと「アトユット」（海の中で）というサケヘです。

さて、そう考えてシマフクロウの場合をみると、幾つもあるシマフクロウの神謡の多くにはその鳴き声の「フム」が入っています。たとえば「フムフムカト」などというサケヘもあります。こうしてみると、この「シロカニペ……」は、何かシマフクロウにはそぐわない気がします。

そこで目を転じて、この物語とよく似た内容のものを見てみることにしました。久保寺逸彦の編んだ「アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究」の中の第55話と第56話がとてもよく似ています。そのうえ、物語の中に「シロカニペ ランラン」「コンカニペ ランラン」という言葉も入っています。ところが、この二つの物語は両方とも主人公がシマフクロウではなくクジャクです。同じ鳥とはいってもあまりにも違います。シマフクロウはコタン コロ カムイ kotan kor kamuy「村の神」とも呼ばれ、村を守護する大切な神さまとして、古くから尊敬されてきました。ところがクジャクは、北海道にはいない鳥（もともと日本にもいなかった鳥）です。アイヌの人々の暮らしにとっては、無縁だった鳥です。おそらく絵図で見るとはわからなかった鳥でしょう。クジャクのことをケソラフ kesorap といいます。ケソラ

フ kesorap は < kes-o-rap（班文・が沢山ある・翼）と分析できます。

あるときクジャクが羽根を広げた写真を見ていてひらめきました。シロカニペ（銀の滴）とかコンカニペ（金の滴）といわれているものは、クジャクの羽にある沢山の班文のことではないかと思ったのです。ぱっと見たときに羽根に沢山の水玉が付いているように見えたのです。水玉とは、まさにペ pe（滴）のことです。しかも、青緑色の水玉模様の回りに黄金の色の縁どりがなされ、全体が金属光沢で輝いています。これこそコンカニペ（黄金の滴）といえないでしょうか。

物語の中で、シマフクロウの神さまは羽ばたきするとそのまわりに美しい宝物が金属のような美しい音をたてて落ちたと出てきます。クジャクの翼の班文（ケシ kes）とは、金属光沢の輝きをもつ水玉模様で、それは「シロカニペ」（銀の滴）であり「コンカニペ」（金の滴）のことだと考えられないでしょうか。シマフクロウの茶色の地味な羽根とは全く違って

います。こう考えると、あの有名な「シロカニペ……」というフレーズは、本来はケソラフ（班文鳥。クジャク）のためにあった句ではないかと思えてきます。初めは班文鳥（クジャク）の神謡だったものが、伝承の過程で、クジャクのような見知らぬ鳥ではなく、シマフクロウのような身近な鳥に主人公を置き換えたと考えられます。こうした例は、けっして珍しいことではなく、たとえば千歳でクジラの神謡として歌われているものは、実はもともとカジキマグロの神謡だったものです。海から離れ内陸部に位置する千歳の人々はカジキマグロを見たことがないため、主人公を自分たちのよく知っているクジラに置き換えてしまったと考えられています。

「銀の滴」、それはクジャクの羽根の水玉模様だったのではないのでしょうか。知里幸恵はこのフレーズを最初は「辺りに振る降る銀の水」と訳しています（知里幸恵ノート）。クジャクが広げた大きな翼と水玉模様、それは、いかにも「辺り」一面に金銀の滴（宝物）を降らせるような雰囲気をもっています。

神謡の伝承過程で物語の構成要素が変容することは、よくあるのです。なんと知里幸恵自身の中でも変容した例があります。第11話の「この砂赤い赤い」という神謡では、悪魔の子が水源にクルミの「矢を射た」とあります。ところが同じ物語を彼女がノートに書き残したもので、矢ではなく「鉾（もり）で突いた」と書かれています。同じ語り手の中でさえこうした変化が起こるのですから、全く別の人に伝わった場合、もっと大きな変容が生じることは十分考えられます。

もう一つ、ケソラフ（クジャク）からシマフクロウに変化した理由が考えられます。弓矢で遊んでいた子供たちが上空を飛んで来た鳥を見て「ピッカ チカッポ、カムイ チカッポ」と言うくだりが出てきます。カムイチカフ（神の鳥）は、シマフクロウのことですが、この場合は、ピッカ～、カムイ～と対句になっていて、カムイ チカフは「立派な鳥」という意味で使われています。けれども伝承過程で、カムイチカフ（神の鳥）なのでシマフクロウとつながってしまったのではないかと考えられます。銀の滴、それはクジャクの翼の水玉模様、という説。はたして、これでいいのでしょうか。みなさんも考えてみて下さい。

2

キツネが自らうたった謡

「トワトワト」

cironnup yayeyukar

Song sung by the fox god



## 第2話(その1)

キツネが自らをうたった謡<sup>うた</sup>

「トワ トワ ト」

(1～68行目まで)

## 〔物語とその背景〕

人間の男が猟に出かけるように、キツネも食べ物を探しに出かけます。それは自分の猟場である海辺です。

私、キツネはある日海辺の石の多い所や流木の所を食べ物を探しながら進んで行きました。ふと行く手を見るとクジラが陸に打ち寄せられていて、人間たちがみな盛装して感謝の舞いや踊りをおどっています。そして肉を切る者や運ぶ者、祈る人や刀を研ぐ人などが浜辺に黒山の人だかりになっています。それを見た私、キツネは、大喜びしながら近づいて見ました。するとクジラだと見えたものは、犬たちが海辺でした糞が山のように積もっていたものでした。そして人間たちが喜んで踊ったり、肉を切ったり運んだりしているように見えたのは、カラスたちが糞をつついてあちこちへ散らし飛ばしていたものでした。私、キツネはなんとも腹立たしくなりました。「眼の曇ったつまらぬやつ、尻尾の下が臭いやつ、尻から汚水の出るやつ、なんという物の見方をしたのだろう」そう思いながら、また海辺の石の所や流木の所を走っていくと、行く手に舟が見えました。その中で人間が二人神さまに文句を言っています。これはきっと何か事故が起こったにちがいない、もしかすると舟が転覆して人が溺れ死んだのかもしれないと思いました。そうなると思うと早く事情を聞いてみたくなって、凶事を知らせる声を上げながら石原を抜け流木を越えて走って行きました。ところが舟だと思ったのは、海岸の岩で、人間と思ったのは、二羽の大きなウ（鵜）が長い首を伸ばしたり縮めたりしていたのでした。「眼の曇ったつまらないやつ、尻尾の下が臭いやつ、尻尾から汚水の出るやつ、なんという物の見方をしたのだろう」と思ったのでした。

ここまでの物語の前半です。海辺を餌を探してうろつくキツネが二つの場面にでくわしました。一つは寄りクジラと黒山の人だかり、もう一つは、舟の転覆事故で神さまに文句を言っている人たちです。しかし、どちらもキツネが勝手に見た幻映でした。最初のものは、犬のした糞の山をカラスがつつき散らす光景で、次のものは、海岸の岩と二羽のウでした、海辺のどこにでもある光景をキツネは幻映に作り上げてしまったのです。「眼の曇ったつまらないやつ……」と繰り返し出て来るフレーズは、キツネのことを実に的確に言い当てています。そして、この不気味なフレーズは、まるで予言のようにこの物語の結末を暗示しているのです。

このキツネのような人間は、私たちの身の回りにもいそうです。欲の皮が張っていて、人の不幸を内心喜んで、その不幸の事情を根掘り葉掘り聞きたがる人間です。そして何よりも正しいはずの眼が曇ってしまっている人が……。

チロンヌ	ヤイエユカラ	「トフ	トフ	ト」
Chironnup	yaieyukar,	“Towa	towa	to”
cironnup	yayeyukar,	“towa	towa	to”
キツネ	自らを物語る	トフ	トフ	ト

サケヘ：トフ トフ ト towa towa to

- 1 トフ トフ ト  
Towa towa to  
towa towa to  
トフ トフ ト
- 2 シネアント タ アラモイサム ウン ヌニペアシ クス  
Shineanto ta / armoisam un / nunipeash kusu  
sinean to ta armoysam un nunipe=as kusu  
ある 日 に 山向こうの海辺 へ 食べ物を探す・私 ために
- 3 サパシ。  
sapash.  
sap=as.  
浜へ出る・私
- 4 スマトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
Shumatumu / chashchash, / towa towa to  
suma tumu cas cas, towa towa to  
石 ~の中 さっ さっ トフ トフ ト
- 5 ニトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
nitumu chashchash, towa / towa to  
ni tumu cas cas, towa towa to  
木 ~の中 さっ さっ トフ トフ ト
- 6 サパシ コロ シエトク ウン インカラシ アフ  
sapash kor / shietok un / inkarash awa  
sap=as kor si-etok un inkar=as awa  
浜へ出る・私 しながら 自分・~の行く先 へ 見る ・私 したところ
- 7 アラモイサム タ フンペ ヤン ワ  
armoisam ta / hunpe yan wa  
armoisam ta humpe yan wa  
山向こうの海辺 に クジラ 上陸する して
- 8 アイヌピトウタラ ウシユッコ トウルパ カネ  
ainupitoutar / ushiyukko / turpa kane  
aynu-pito utar u-siyuk-ko-turpa kane  
人間 たち 互い・装束・~に・~を伸ばす しながら
- 9 イソエタツカラ イソ エリムセ イチャウタラ イルラウタラ  
isoetapkar / iso erimse / ichautar / irurautar  
iso etapkar iso erimse ica utar irura utar  
獲物 ~に踏舞する 獲物 ~に踊る 切り取る 人たち 運ぶ 人たち

狐が自ら歌った謡「トワトワト」  
キツネが自ら歌った謡「トフ トフ ト」  
Song Sung by a Fox "Towa towa to"

トワトワト  
トフ トフ ト  
Towa towa to

或日に海邊へ食物を拾ひに  
ある日私は海辺に食べ物を探しに  
One day I went to the seaside

出かけました。  
出かけました。  
to look for food.

石の中ちやらちやら  
石の中さっさ  
Through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
流木の中さっさ  
through the driftwood, lickety-split.

行きながら自分の行手を見たところが  
行きながら行く手を見ると  
Looking up ahead as I went,

海邊に鯨が寄上って  
海辺にクジラが岸にうち上げられていて  
I saw a whale washed up on the beach

人間たちがみんな盛装して  
人間たちがみんな盛装して連らなって  
and a procession of humans, all dressed in their finery,

海幸をば喜び舞い海幸をば喜び躍り肉を切る者運ぶ者が  
海の獲物に喜んで舞踏をしたり踊ったりして、肉を切ったり運んだりする人たちが  
rejoicing at the catch. There were people dancing and promenading about,

- 10 ウタサタサ ニシパウタラ イソエオンカミプ  
 utasatasa / nishpautar / isoeonkamip  
 utasatasa nispautar iso eonkami p  
 互いに交差する 紳士 たち 獲物 ~に礼拝する 者
- 11 エムシ ルイケプ アラモイサマ コクンナタラ、  
 emush ruikep / armoisama / kokunnatara,  
 emus ruyke p armoysama kokunnatara,  
 刀 ~を研ぐ 者 山向こうの海岸 ~に黒くなっている
- 12 チヌカツ チキ シノ チエヤイコブンテク。  
 chinukat chiki / shino chieyaikopuntek.  
 ci=nukar ciki sino ci=eyaykopuntek.  
 私・~を見る したら 本当に 私・ ~を喜ぶ
- 13 「ヘタクタ ウサ トオアニ チコシレパ  
 “Hetakta usa / tooani / chikoshirepa  
 “hetak ta usa tooani ci=kosirepa  
 さあ早く (係り言葉) も あそこ 私・~に到着する
- 14 ポンノ ポカ チアフカラ オカイ。」 アリ  
 ponno poka / chiahupkar okai.” ari  
 ponno poka ci=ahupkar okay.” ari  
 少し だけでも 私・~をもらう したいなあ と
- 15 ヤイヌアシ クス 「オノンノ! オノンノ!」 アリ  
 yainuash kushu / “Ononno! Ononno!” ari  
 yaynu=as kusu “ononno! ononno!” ari  
 思う・私 ので やった やった と
- 16 ホトウイパアシ コロ、  
 hotuipaash kor,  
 hotuypa=as kor,  
 叫ぶ・私 しながら
- 17 スマトウム チヤシチャシ、 トフ トフ ト  
 shumatumu / chashchash, towa towa to  
 suma tumu cas cas, towa towa to  
 石 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 18 ニトウム チヤシチャシ、 トフ トフ ト  
 nitumu / chashchash, towa towa to  
 ni tumu cas cas, towa towa to  
 木 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 19 パイエアシ アイネ ハンケノ パイエアシ インカラシ アフ  
 payeash aine / hankeno payeash / inkarash awa  
 paye=as ayne hankeno paye=as inkar=as awa  
 行く(複)・私 したあげく 近くに 行く(複)・私 見る・私 したところ
- 20 センネカ スイ インカラシ クニ チラムアイ  
 senneka shui / inkarash kuni / chiramuai  
 senne ka suy inkar=as kuni ci=ramu a i  
 少しも~ない も まだ 見る・私 と 私・~を思う した のに

行き交ふて重立つた人たちは海幸をば謝し拝む者  
 行き交っていて、重だった人たちや礼拝する人  
 people going back and forth cutting and carrying meat, leaders, worshippers,

刀をとぐ者など濱一ぱいに黒く見えます。  
 刀を研ぐ人などが海辺に黒々と群がっていました。  
 and people sharpening knives, all gathered in a jet-black cluster on the shore.

私はそれを見ると大層喜びました。  
 それを見て私は、なんとも嬉しくなっていました。  
 When I saw them, my heart jumped with joy.

「あ、早くあそこへ着いて  
 「なんとか早くあそこへ行って  
 "Somehow I've got to get there right away

少しでもいいから貰いたいものだ」と  
 少しでもいいからもらいたいものだ」と  
 and get even just a little bit of that whale,"

思って「ばんざーい! ばんざーい」と  
 思って「やった! やった!」と  
 I thought. Shouting,

叫びながら  
 叫びながら  
 "Yippee! Yippee!"

石の中ちやらちやら  
 石の中さっさ  
 through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
 流木の中さっさ  
 through the driftwood, lickety-split

行つて行つて近くへ行つて見ましたら  
 行きつづけてようやく近くに寄って見ると  
 I ran and ran, and when I finally got close and looked,

ちつとも思ひがけなかつたのに  
 まさかそんなものを見るなどとは思ひもしなかつたのだが  
 I never dreamed that I would see such a thing, but

- 21 フンペ ヤン ルウェ ネクニ パテク チラムアプ  
 humpe yan ruwe / nekuni patek / chiramuap  
 humpe yan ruwe ne kuni patek ci=ramu a p  
クジラ 陸に上がる のである と ばかり 私・～を思う した のに
- 22 アラモイサム タ セタウタラ オソマイ アン フ  
 armoisam ta / setautar / osomai an wa  
 armoysam ta seta utar osoma i an wa  
山向こうの海岸 に 犬 たち 糞をする 所 ある して
- 23 ポロ シヌプリ チシレアヌ、  
 poro shinupuri / chishireanu,  
 poro si nupuri ci-sireanu,  
大きい ふん 山 ある
- 24 ネワアンペ フンペ ネ クニ チラム ルウェ  
 newaanpe / humpe ne kuni / chiramu ruwe  
 newaanpe humpe ne kuni ci=ramu ruwe  
それ クジラ ～である と 私・～を思う の
- 25 ネ ココカイ。  
 ne rokokai.  
 ne rokokay.  
である だったのだ
- 26 アイヌピトウタラ イソエリムセ イソエタプカラ  
 Ainupitoutar / isoerimse / isoetapkar  
 aynu-pito utar iso erimse iso etapkar  
人間 たち 獲物 ～に向かって踏舞する 獲物 ～に向かって踊る
- 27 ウサ イチャ ウサ イルラ キシリ ネクニ  
 usa icha / usa irura / kishiri nekuni  
 usa ica usa irura ki siri ne kuni  
いろいろ 切り取ること いろいろ 運ぶこと ～をする 様子である と
- 28 チラムロクペ シパシクルタラ  
 chiramurokpe / shipashkurutar  
 ci=ramu rok pe sipaskur utar  
私・～を思う した もの ハシブトガラス たち
- 29 シ トクパ シ チャリチャリ  
 shi tokpa / shi charichari  
 si tokpa si caricari  
ふん ～をつつく ふん ～を散らし散らしする
- 30 トンタ テレケ テタ テレケ シリネ アウオカイ。  
 tonta terke / teta terke / shirine awokai.  
 ton ta terke te ta terke siri ne awokay.  
あちら に 跳ぶ こちら に 跳ぶ 様子である だったのだ
- 31 イルシカケウトウム チャイコレ。  
 Irushkakeutum / chiyaikore.  
 iruska kewtum ci=yaykore.  
怒る 気持ち 私・～を自らに持たされる

鯨が上つたのだとばかり思つたのは  
 クジラがうち上げられたのだとばかり思つていたのは  
 what I had been sure was a whale washed ashore

濱邊に犬どもの便所があつて  
 海辺に犬たちの便所があつて  
 was actually a toilet for dogs on the beach.

大きな糞の山があります、  
 大きな糞の山が築かれていて  
 There was a big pile of dung,

それを鯨だと私は思つたので  
 それをクジラだと私は思つたの  
 and that's what I had thought

ありました。  
 でした。  
 was a whale.

人間たちが海幸をば喜んで躍り海幸をば喜び舞い  
 そして、人間たちが海の獲物に喜んで踊ったり踏舞したり  
 And what I had thought was humans dancing and promenading joyfully

肉を切つたりはこんだりしてゐるのだと  
 肉を切つたり運んだりしているのだと  
 at the catch and cutting and carrying meat,

私が思つたのはからすどもが  
 思つたものはカラスたちが  
 was actually a flock of crows

糞をつつき糞を散らし散らし  
 糞をつつき散らし散らしして、  
 pecking and scattering the dung

其方へ飛び此方へ飛びしてゐるのです。  
 糞があつちには飛びこつちには飛びしてゐたのだつたのです。  
 so that it flew this way and that.

私は腹が立ちました。  
 私は怒りでいっぱいになりました。  
 I was filled with rage.

- 32 「トイシキマナウシ トフ トフ ト  
 “Toishikimanaush / towa towa to  
 “toy siki mana us towa towa to  
 ひどい 目 ほこり ~に付く トワ トワ ト
- 33 ウエンシキマナウシ トフ トフ ト  
 wenshikimanaush / towa towa to  
 wen siki mana us towa towa to  
 悪い 目 ほこり ~に付く トワ トワ ト
- 34 サラポキ フラオツ トフ トフ ト  
 sarpoki huraot / towa towa to  
 sar poki hura ot towa towa to  
 しっぽ ~の下 匂い ~にある トワ トワ ト
- 35 サラポキ ムニン トフ トフ ト  
 sarpoki munin / towa towa to  
 sar poki munin towa towa to  
 しっぽ ~の下 腐る トワ トワ ト
- 36 オインテヌ トフ トフ ト  
 ointenu / towa towa to  
 o-inte-nu towa towa to  
 尻 やに ~が出る トワ トワ ト
- 37 オタイペヌ トフ トフ ト  
 otaipenu / towa towa to  
 o-taype-nu towa towa to  
 尻 おり ~が出る トワ トワ ト
- 38 インカラ ヘタブ ネプタブ テタ キ フミ オカイ。」  
 inkar hetap / neptap teta / ki humi okai.”  
 inkar hetap nep tap te ta ki humi okay.”  
 見ること いったい~か 何 このように ここで ~をする 感じ なのか?
- 39 オロワノ スイ  
 Orowano shui  
 orowano suy  
 それから また
- 40 スマトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
 shumatumu chashchash, / towa towa to  
 suma tumu cas cas, towa towa to  
 石 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 41 ニトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
 nitumu chashchash, / towa towa to  
 ni tumu cas cas, towa towa to  
 木 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 42 ルツテクサム ペカ ホユプアシ コロ  
 rutteksam peka / hoyupuash kor  
 rutteksam peka hoyupu=as kor  
 海辺 を 走る ・私 しながら

「眼の曇ったつまらない奴  
 「眼の曇ったつまらないヤツ  
 "You miserable, cloudy-eyed so-and-so

眼の曇った悪い奴  
 眼の曇った悪いヤツ  
 you wicked, cloudy-eyed so-and-so

尻尾の下の臭い奴  
 尻尾の下の臭いヤツ  
 you stinking under the tail so-and-so

尻尾の下の腐った奴  
 尻尾の下の腐ったヤツ  
 you rotten under the tail so-and-so

お尻からやにの出る奴  
 尻からやにの出るヤツ  
 you pus coming out of the rump so-and-so

お尻から汚い水の出る奴  
 尻から汚い水の出るヤツ  
 you filthy water coming out of the rump so-and-so

なんという物の見方をしたのだらう。」  
 何という物の見方をしたんだらう」  
 What on earth did you think you were seeing?"

それからまた  
 それからまた  
 So once again,

石の中ちやらちやら  
 石の中をさっさ  
 through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
 流木の中をさっさ  
 through the driftwood, lickety split

海のそばから走りながら  
 海辺を私は走りながら  
 I ran along the shore,



- 43 インカラシ アフ ウネトクタ  
 inkarash awa / unetokta  
 inkar=as awa un=etok ta  
 見る・私 したところ 私・～の行く先に
- 44 チプ アン カネ シラン キコ チポシケタ  
 chip an kane / shiran kiko / chiposhketa  
 cip an kane siran ki ko cip oske ta  
 舟 ある して 様子がある ～する すると 舟 ～の中 に
- 45 アイヌ トウンピシ ウニウエンテ コロ オカイ、  
 ainu tunpish / uniwente kor okai,  
 aynu tunpis uniwente kor okay,  
 人間 二人 互いに異変の際の儀式をする しながら いる(複)
- 46 「ウサイネタプ スイ ネプ アエホマトウブ  
 “Usainetap shui / nep aehomatup  
 “ usayne tap suy nep a=ehomatu p  
 これはどうしたことか 何 人・～に驚く もの
- 47 アン ワ タプネ シリキ キヤ、センネ ネペカ  
 an wa tapne / shiriki kiya, senne nepeka  
 an wa tapne siriki ki ya, senne nepe ka  
 ある して このように 様子である ～する のか ～ない 何 か
- 48 チプコホクシ ウタラ ヘネ オカイ ルウエ ヘアン？  
 chipkohokush / utar hene / okai ruwe hean?  
 cip kohokus utar hene okay ruwe he an?  
 舟 ～と共に倒れる 人たち でも いる(複) の だろうか
- 49 ヘタクタ ウサ ノハンケノ パイエアシ ワ  
 Hetakta usa / nohankeno / payeash wa  
 hetak ta usa nohankeno paye=as wa  
 さあ早く(係り言葉)も すぐ近くに 行く(複)・私 して
- 50 アイヌオルシペ チヌ オカイ。」  
 ainuorushpe / chinu okai.”  
 aynu oruspe ci=nu okay.”  
 人間 話 私・～を聞く したいなあ
- 51 ヤイヌアシ クス タパン ホコクセ  
 yainuash kushu / tapan hokokse  
 yaynu=as kusu tapan hokokse  
 思う ・私 ので この 異変の叫び声
- 52 チリクナプニ、  
 chiriknapuni,  
 ci=riknapuni,  
 私・～を高く挙げる
- 53 スマトウム チャシチャシ、トワ トワ ト  
 shumatumu chashchash, / towa towa to  
 suma tumu cas cas, towa towa to  
 石 ～の中 さっ さっ トワ トワ ト

見たところが私の行手に  
 見ると行く手に  
 and when I looked ahead

舟があつて其の舟の中で  
 舟があつて、その舟の中で  
 I saw a boat, and in the boat

人間が二人互ひにお悔みをのべてゐます。  
 人間が二人互いに神さまを批難しています。  
 there were two humans criticizing the gods.

「おや、何の急変が  
 「これは驚いた。どんな事故が  
 "This is a surprise. What kind of accident

あるのであ、いふ事をしてゐるのだろう、もしや  
 起こつて、あんなことをしているのだろう。もしかすると  
 must there have been to make them do such a thing? I wonder

舟と一しょに引繰かへつた人でもあるのではないかしら、  
 舟が転ぶくして溺れた人たちでもいたのではないだろうか。  
 if maybe a boat overturned and somebody drowned?

お、早くずっと近くへ行つて  
 何とか早くうんと近くに行つて  
 Somehow I've got to get there right away

人の話を聞きたいものだ。」と  
 人の話を聞いてみたいものだ」  
 and hear what the humans are saying,"

思ふのでフオホホーイと  
 こう思つて事故を知らせる叫び声  
 I thought. So, raising my voice high

高く叫んで  
 を高く上げながら  
 to tell everyone of the accident,

石の中ちやらちやら  
 石の中さっさ  
 through the rocks, lickety-split

- 54 ニトウム チヤシチャシ、トフ トフ ト  
 nitumu chashchash, / towa towa to  
 ni tumu cas cas, towa towa to  
 木 ~の中 さっ さっ トフ トフ ト
- 55 テレケアシ カネ パイエアシ ワ インカラシ アワ  
 terkeash kane / payeash wa / inkarash awa  
 terke=as kane paye=as wa inkar=as awa  
 跳ぶ・私 しながら 行く(複)・私 して 見る・私 したところ
- 56 チブ ネ クニ チラムアア アトウイテクサムタ アン  
 chip ne kuni / chiramuap / atuiteksamta an  
 cip ne kuni ci=ramu a p atuyteksam ta an  
 舟 ~である と 私・~を思う したもの 海岸 に ある
- 57 シララ ネ ワ、アイヌ ネ クニ チラムアア  
 shirar ne wa, / ainu ne kuni / chiramuap  
 sirar ne wa, aynu ne kuni ci=ramu a p  
 岩 ~である して 人間 ~である と 私・~を思う したもの
- 58 トウ ポロウリリ ネ アウオカイ。  
 tu porourir / ne awokai.  
 tu poro urir ne awokay.  
 二つの 大きい 鵜 ~である だったのだ
- 59 トウ ポロウリリ タンネレクチ トウルパ ヨンパ、  
 Tu porourir / tannerekuchi / turpa yonpa,  
 tu poro urir tanne rekuci turpa yonpa,  
 二つの 大きい 鵜 長い のど ~を伸ばす(複) ~を縮める(複)
- 60 イキチ シリ ウニウエンテ アン シリネ ペコロ  
 ikichi shiri / uniwente an / shirine pekor  
 iki-ci siri uniwente an siri ne pekor  
 する(複) 様子 異変の際の儀式 ある 様子である かのよう
- 61 チヌカン ルウェ ネ アウオカイ。  
 chinukan ruwe / ne awokai.  
 ci=nukar ruwe ne awokay.  
 私・~を見る のである だったのだ
- 62 「トイシキマナウシ トフ トフ ト  
 “Toishikimanaush / towa towa to  
 “toy siki mana us towa towa to  
 ひどい 目 ほこり ~に付く トフ トフ ト
- 63 ウエンシキマナウシ トフ トフ ト  
 wenshikimanaush / towa towa to  
 wen siki mana us towa towa to  
 悪い 目 ほこり ~に付く トフ トフ ト
- 64 サラポキ フラオツ トフ トフ ト  
 sarpoki huraot / towa towa to  
 sar poki hura ot towa towa to  
 しっぽ ~の下 匂い ~にある トフ トフ ト

木片の中ちやらちやら  
 流木の中さっさ  
 through the driftwood, lickety-split,

飛ぶやうにして行つて見たら  
 とびながら行ってみると  
 leaping as I went, I saw that

舟だと思つたのは濱邊にある  
 舟だと思つたものは、海辺にある  
 what I had thought was a boat was actually a

岩であつて、人だと思つたのは  
 岩だった。人間だと思つたものは  
 boulder on the shore. What I had thought were humans

二羽の大きな鵜であつたのでした。  
 二羽の大きなうだった。  
 were two big cormorants.

二羽の大きな鵜が長い首をのばしたり縮めたり  
 二羽の大きなうが長い首を伸ばしたり縮めたり  
 The two cormorants, stretching and shrinking their long necks,

してゐるのを悔みを言ひ合つてゐる様に  
 しているのを神さまを批難しているかのように  
 had looked to me like they were criticizing

私は見たのでありました。  
 私は見てしまったのでした。  
 the gods.

「眼の曇つたつまらない奴  
 「眼の曇つたつまらないヤツ  
 "You miserable, cloudy-eyed so-and-so

眼の曇つた悪い奴  
 眼の曇つた悪いヤツ  
 you wicked, cloudy-eyed so-and-so

尻尾の下の臭い奴  
 尻尾の下の臭いヤツ  
 you stinking under the tail so-and-so

- 65 サラポキ ムニン トワ トワ ト  
 sarpoki munin / towa towa to  
 sar poki munin towa towa to  
 しっぱ ~の下 腐る トワ トワ ト
- 66 オインテヌ トワ トワ ト  
 ointenu / towa towa to  
 o-inte-nu towa towa to  
 尻 やに ~が出る トワ トワ ト
- 67 オタイペヌ トワ トワ ト  
 otaipenu / towa towa to  
 o-taype-nu towa towa to  
 尻 おり ~が出る トワ トワ ト
- 68 インカラ ヘタブ ネフタブ テタ キ フミ オカイ。」  
 inkar hetap / neptap teta / ki humi okai.”  
 inkar hetap nep tap te ta ki humi okay.”  
 見ること いったい~なのか 何 このように ここで ~をする 感じ なのか?

尻尾の下の腐った奴  
 尻尾の下の腐ったヤツ  
 you rotten under the tail so-and-so

お尻からやにの出る奴  
 尻からやにの出る奴  
 you pus coming out of the rump so-and-so

お尻から汚い水の出る奴  
 尻から汚い水の出るヤツ  
 you filthy water coming out of the rump so-and-so

何と云ふ物の見方をしたのだらう。」  
 何という物の見方をしたんだらう」  
 What on earth did you think you were seeing?"

## 〔言葉の説明〕

## ・アラモイサム armoysam (2行目)

＜ ar-moy-sam (山向こう・入江・そば) →山向うの海辺 (地名アイヌ語小辞典) が元の意味。海辺。

## ・ヌニペ nunipe (2行目)

ヌニペ nunipe は、「食べ物を探す」こと。nunipe < nun-ipe (吸う・ものを食べる) 吸って食べる→食いものあさりをする。キツネが鼻先を地面につけてまるで吸い取るように忙しく移動する食い物あさりの様子。

## ・フンペ hunpe (7行目)

ここはフンペ hunpe になっていますが、他ではフンペ humpe (24行目など) となっています。語源的には < hum-pe (フーンという・もの) で、「フーンと潮を吹くもの」。

## ・ウシユッコ トウルパ usiyukko-turpa (8行目)

テキストは usiyakko となっていますが誤植で、ウシユッコ usiyukko。シユク siyuk で「盛装する」という意味。自動詞なので名詞にもなります。< u-siyuk-ko-turpa (一緒に・盛装・と共に・～を伸ばす) 「みんなで盛装して連なる」こと。

## ・イソエタツカラ イソ エリムセ iso etapkar iso erimse (9行目)

イソ iso は「獲物」。< iso-e-tapkar (海の獲物・に対して・踏舞する)。< iso-e-rimse (海の獲物・に対して・踊る)。クジラが手に入ったので感謝の舞いや踊りをする。海幸への感謝の舞や踊り。

## ・コクンナタラ kokunnatara (11行目)

コクンナタラ kokunnatara は、< ko-kur-natara ([海岸] に・黒い・状態の継続) 海岸に黒くなっている。人々が海岸が黒々としている (黒山の人だかり状態)。

## ・トオアニ too an i (13行目)

＜トアン ヒ toan hi (あの・所→あそこ)。トオ too はト to の強調。

## ・オカイ okay (14行目)

チアフツカラ オカイ ci=ahupkar okay で「もらいたいものだ」。オカイ okay は願望を表わして「～したいものだ」という意味。

## ・センネカ スイ インカラシ クニ チラムアイ

## senne ka suy inkar=as kuni ci=ramu a i (20行目)

センネ カ スイ senne ka suy で「少しも～しない」。インカラシ クニ チラム・アイ inkar=as kuni ci=ramu a i (私が見る・と・思う・過去・のに) →私が見ると思っていたのに。全体で「私が見るなどとは少しも思っていなかったのに」という意味。

## ・チシレアヌ cisireanu (23行目)

チシレアヌ cisireanu は、< ci-sir-e-anu (～される・辺り・に・置く) 辺りに置かれる→ある。単にアン an (ある) といえは済むのですが、音節を5にして、美文調にした言葉。神謡には、こうした日常語では使わない言葉、アトムテ イタツ (飾られた言葉) が数多く出てきます。

## ・ルウエ ruwe (24行目)

ネワアンペ フンペ ネ クニ チラム ルウエ ネ newaanpe hunpe ne kuni ci=ramu ruwe ne (そのものをクジラだと私は思ったのです)。この場合のルウエ ruwe は「確かに」そう思ったという意味が含まれています。

## ・ロク rok (28行目)

チラム ロク ペ ci=ramu rok pe (私が思ったもの)。rok は a の複数形。単数形は、チラム ア プ ci=ramu a p (私が思ったもの)。日本語だと、この後に、「は」が付いて、「私が思ったものは」となるのですが、アイヌ語では、格助詞の「は」に相当するものは使わないのが普通です。アナク anak、アナクネ anakne は、日本語の「は」のように常に使うということはありません。アナク anak の場合は、題目を明示するときに使われます。

(例) チラム ロク ペ アナク (ネ) パシクル ネ ci=ramu rok pe anak(ne) paskur ne  
([あなたが思ったのものは犬ですが] 私が思ったものはカラスです)

このように「あなたが思ったの」と較べて、「私が思ったもの」をはっきりと示したい気持ちを表わすときに使います。

こうしたとき以外には日本語の「は」に相当する格助詞をあまり使いません。

## ・シパシクル si paskur (28行目)

シパシクル si paskur は、< si-paskur (糞・カラス) で「糞のカラス」。しかし、< si-paskur (本当の・カラス) というようにも考えられます。ハシプトガラスのこと。ハシボソガラスは、カララク kararak といいます。これはカラカラという鳴き声から。

## ・トイシキマナウシ toy siki mana us (32行目)

トイ toy は「ひどい」という意味。シキ siki は、「～の目」(所属形)。誰の目かは、はっきりしないが、誰かの目であることは確か。概念形は、シク sik。マナウシ mana us のマナ mana は、沙流方言のパナ pana (ほこり) と同じ。マナウシで「ほこりが付く」。ここは韻文で、平常文ならトイ シキ オロ マナウシ toy siki oro mana us となります。次の三行もみな韻文。

直訳すると、「ヤツのひどい目ほこり付き」「ヤツの悪い目ほこり付き」「ヤツの尻の下、臭い」「ヤツの尻の下腐ってる」「尻にやにが出る」「尻から汚水が出る」となります。これを知里幸恵は、「眼の曇ったつまらない奴」「眼の曇った悪い奴」「尻尾の下の臭い奴」「尻尾の下の腐った奴」「お尻からやにの出る奴」「お尻から汚い水の出る奴」と訳しています。とてもわかりやすい訳となっています。

オインテヌ o-intenu は < o-inte-nu (尻・目やに・もつ) 尻にやにがある。オタイペヌ

o-taypenu < o-taype-nu (尻・<sup>おり</sup>澱・もつ) 尻から汚水の出る。

・インカラ ヘタテ ネテテ テタ キ フミ オカイ

inkar he tap nep tap te ta ki humi okay (38 行目)

直訳すると「見るにしても、なんでこのように見たのだろう」。知里幸恵の「何という物の見方をしたのだろう」という訳は、すばらしい。この物語で一番の問題になっているのは物の「見方」だから。このキツネは曇った眼で事実を全てゆがめて見ることで、それが結果に不運をもたらすことになるのです。

・ルツテッサム ペカ rutteksam peka (42 行目)

ルツテッサム rutteksam は < rur-teksam (海水・そば) 海のそば。ペカ peka は、「(ある面や線のな広がりの所) を」。海辺を (走りながら)、という意味。

・トウンピシ tun pis (45 行目)

トゥン tun で「二人」という意味。ピシ pis は「一つ一つ」という意味。トゥン ピシ tun pis で「(人間が) 二人」。

・ウニウエンテ uniwente (45 行目)

ウニウエンテ uniwente は、火事や水死などの事故があったときに、神々に抗議して、注意を促す行進をすること。< u-niwen-te (一緒に・怒る・させる→みなで怒る)。

ニウエン niwen は「(犬などが) いがむ。激しく怒る」こと。niwen は < ni-wen (歯・をむき出す) →怒る。

・アエホマトウア a-e-homatu-p (46 行目)

これは < a-e-homatu-p (される・に・驚く・もの) →驚かされるもの→変事。

・ネペ nep-e (47 行目)

これは < nep-he (何・～か?) の h が落ちたものではないでしょうか。

・チアコホクシ cip kohokus (48 行目)

チア コホクシ cip kohokus (舟・と共にひっくり返る)。

・ノハンケノ nohanke no (49 行目)

ノハンケノ nohanke no < no-hanke-no (十分・近く・に) →ずっと近くに。

・ホコッセ hokokse (51 行目)

ホコッセ hokokse < hok-hok-se (ホクホクいう) →ホホホホホーイという。変事を知らせる男の声。

・トウルパ ヨンパ turpa yonpa (59 行目)

トウルパ ヨンパ turpa yonpa は、トゥリ ヨニ turi yoni の複数形で「を伸ばす、を縮

める」。

〔参考〕

難語、不明語の解明を試みてみます。

・トワ トワ ト towa towa to (1 行目)

サケへの「トワトワト」は、一体何を意味しているのでしょうか。類話のサケへ (繰り返しの節) には、「ハワトワト hawatowato」(日高の荷葉の平目カレピアの謡) というのがあります。また、同じ平目カレピアのキツネの神謡では、「pawcowacopa hum hum」となっています。パウ paw は、キツネの鳴き声です。すると paw → hawa → towa に変化した可能性が考えられます。トワトワの元は パウア パウア というキツネの鳴き声かもしれないと思ったのですが、どうでしょうか。

・スマトウム チャシチャシ suma tumu cascas (4 行目)

ノニトウム チャシチャシ ni tumu cascas (5 行目)

この物語の中に、このフレーズが7回も出てきます。トワトワトがこの物語のサケへですが、この二行のフレーズも一種のサケへとみてよいでしょう。ただし、一つの出来事が終わって、次への移行の場面で出てくるので、意味的には物語の中で重要な役割を担っています。そのうえ、チャシ cas は「走る」という意味でもあります。石原や木原を「駆け」抜けて次の場面に移るキツネの姿をほうふつとさせてくれ、物語の流れを作る上で欠かせない意味をもっているので単なるリフレインの節 (ふし) とは少し違うようです。

知里真志保は「石原さらさら駆けぬける、木原もさらさら駆けぬける」と訳している。

・オノンノ ononno (15 行目)

オノンノ ononno は、ノンノ nonno < no-no (よい、よい) という言葉に、感嘆のオが付いたものではないでしょうか。「オー、すばらしい！」というのが元の意味ではないかと考えるのです。現代風に訳せば「ヤッター！」といったところ。

・ウリリ urir (58 行目)

この言葉は海の場面に出てくるのでウリリは、ウミウ (海鷗) でしょう (カワウではなく)。ウリリ urir は、< u-ri-ri (互いに・高くなる・高くなる) が元かもしれません。首を交互に (または一緒に) 伸ばし伸ばしするこの鳥の行動からではないかと考えるのですが。

## コラム (4)

### なぜくり返しの表現をするのか？

カムイユーカラ（神謡）は、メロディとリズムをもって歌われる物語です。もし誰もが知っている今の流行歌のメロディやリズムを取ってしまい、ただ歌詞だけを読んだとしたらどんな印象を受けるでしょうか。しかも、ヒット曲になる前にただ歌詞だけ見て、これはすばらしいなどと言えるでしょうか。歌はやはりメロディが付いて始めて歌としての生命が吹き込まれるものではないでしょうか。このカムイユーカラも同じことが言えます。歌われていたものからメロディを取り除いた形で私たちは、このテキストを読んでいるのです。

この第2話の中には繰り返し表現が沢山出てきます。どれほど繰り返しがあるか見てみましょう。まず「スマ トウム チャシ チャシ」「ニトウム チャシ チャシ」という二行のフレーズが7回出てきます。さらに「トイ シキ マノウシ・・・」という7行のフレーズは、4回出てきます。これだけで42行もあります。これ以外にも「オロワノスイ」とか「行手を見ると」といった表現も繰り返し出てきます。そして何よりも、誤った見方と現実の場景と、というパターンが何回も繰り返されます。

- ①クジラに喜ぶ黒山の人だかり→犬のした糞の山
  - ②二人の女性の神への抗議→首を伸ばしたり縮めたりする二羽のウ
  - ③泣き合っている二人の女性→川の流れを受けて揺れている二本の築の杭
  - ④自分の家が火事で屋根から黒煙が登っている→搗いていた粟の糠が風に飛ばされている
- という4つの話で構成されています。

さらに、全ての句の頭に「トワトワト」というサケヘが常に繰り返されます。すると、いろいろなことが気になってきます。物語の筋だけを追っただけでいこうとしているので、やたらに同じ言葉が繰り返されて、少々退屈になってくる人もいるでしょう。物語の展開に深みが足りないと感じる人もいることでしょう。同じ字数を費すならば、もっと話のディテールや深みを知りたくなる人もいるでしょう。しかし、もう一度考えてみてください。これは本来目で読まれる物語ではなく、耳で聞いて味わう歌物語なのです。すると、やはりどうしてもメロディ付きのカムイユーカラを聞きたくてくるでしょう。

そう考えて、私は中本ムツ子さんの協力を得て、このカムイユーカラにメロディを付けて歌に復元してみました。すると、この繰り返しの効果がリズムを刻み出して何ともいえないこちよ響きをつくり、物語の展開も実に楽しく聞こえてきました。

カムイユーカラは、やはり歌として耳で聞く物語なのだと思わずに思いました。

ところで、内容が簡潔であることは、逆に、その意味を強く訴える力となります。自分の欲に飢え他人の不幸を待ち望んでばかりいる目の曇ったヤツ（キツネ）と、他人のスキャンダルを喜び、物欲に満ちた現代の人々と何と似かよっていることでしょうか。この物語は、シンプルであればあるほど痛烈に私たちの心に迫ってくるのではないのでしょうか。

## 第2話(その2)

### キツネが自らをうたった謡

#### 「トワ トワ ト」

(69 行目～136 行〔終〕まで)

#### 〔物語とその背景〕

私、キツネは、自分の見間違いに懲りもせず、次に海から川に入って上流へ向います。すると、川の浅瀬で二人の女性が泣いている姿が目に入りました。きっと事故が起こったからあんな風に泣いているのだと思い、その事情、つまり不幸な事情を一時も早く聞きたくてたまらなくなりました。石原や木原を跳びながら行ってみると、なんと、二人の女性が泣きながら顔を伏せたり、上げたりしていると思ったものは、川の中流に置かれたやなの二本の杭が流れにぶつかって揺れ動いているものだったのです。そこで、餌あさりをあきらめて家に帰ることにしました。ところが行く手を見ると、なんと自分の家が燃えて空に黒煙がもくもくと広がっています。驚いて思わず危急を知らせる声で叫びました。すると誰かが私の声に驚いて、危急の声を上げながら私に向かって走ってきます。見ると、それは私の妻でした。妻は私に何が起こったのですかと聞いてきたので、よく見ると、燃えていると思っていた家はそのままで、火も煙も出ていません。妻に聞いてみると、粟をついていたときに突風が起り粟の糠を吹きとばしたのです。それを私は煙だと思ってしまったのです。その上、私が大声を上げたので、妻は驚いてついていた粟を箕と一緒に放り出してしまったのです。

そのため、今夜の食事もなくなりました。私は、腹を立てながら床に身を投げて寝ることにしました。目の曇ったつまらぬヤツとは、まさに自分のこと。ああ何という物の見方をしたのだらうと、キツネは物語りました。

あの不気味なフレーズの繰り返しは、まさにキツネの行く先を予言していたのです。欲の皮が突っ張り目が曇って、他人の不幸を喜ぶ者の末路は、このように自分の持っていた物まで失うことになるというお話。

- 69 オロフ ノ スイ  
Orowa no shui  
orowano suy  
それから また
- 70 スマトウム チャシチャシ、 トフ トフ ト  
shumatumu chashchash, / towa towa to  
suma tumu cas cas, towa towa to  
石 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 71 ニトウム チャシチャシ、 トフ トフ ト  
nitumu chashchash, / towa towa to  
ni tumu cas cas, towa towa to  
木 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 72 テレケアシ カネ ペットウラシ パイエアシ アフ、  
terkeash kane / petturashi / payeash awa,  
terke=as kane pet turasi paye=as awa,  
跳ぶ・私 しながら 川 に沿って上へ 行く(複)・私 したところ
- 73 トオプ ペナタ メノコ トウンピシ  
toop penata / menoko tumpish  
toop pena ta menoko tumpis  
ずっと 川上の方に 女 二人
- 74 ウツカ オッタ ロシキ カネ ウチシカラ コロ オカイ、  
utka otta / roshki kane / uchishkar kor okai,  
utka or ta roski kane uciskar kor okay,  
浅瀬 ~の所に 立つ(複) しながら 互いに泣く しながら いる(複)
- 75 チヌカラ チキ チエホマトウ、  
chinukar chiki / chiehomatu,  
ci=nukar ciki ci=ehomatu,  
私・~を見る したら 私・~に驚く
- 76 「ウサイネタプスイ ネプ ウエンペ アン、  
“Usainetapshui / nep wenpe an,  
“usayne tap suy nep wenpe an,  
これはどうしたことか 何 悪いこと ある
- 77 ネプ アスレク ワタ ウチシカラシ シリ  
nep ashurek wata / uchishkaran shiri  
nep asur ek wa ta uciskar an siri  
何 うわさ 来る して(強調) 互いに泣くこと ある 様子
- 78 オカイペ ネ ヤ?  
okaibe ne ya?  
okay pe ne ya?  
ある(複)もの ~である のか
- 79 ヘタクタウサ シレパアシ ワ アイヌオルシペ  
Hetaktausa / shirepaash wa / ainuorushpe  
hetak ta usa sirepa=as wa aynu oruspe  
さあ早く(係り言葉)も 到着する・私 して 人間 話

それからまた  
それからまた  
So once again,

石の中ちやらちやら  
石の中さっさ  
through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
流木の中さっさ  
through the driftwood, lickety-split

飛ぶ様にして川をのぼって行きましたところが  
とびながら川に沿ってのぼって行ったところ  
I followed the river upstream, leaping as I went,

ずーつと川上に女が二人  
ずっと川上に女が二人  
and far upstream I found two women

浅瀬に立つてみて泣き合つてみます。  
浅瀬に立つて泣き合っていました。  
standing in the shallows weeping together.

私はそれを見てビツクリして  
それを見て私はびっくりして  
When I saw them, I was taken aback.

「おや、何の悪い事があつて  
「これは驚いた、どんな悪いことが起こって、  
“What a surprise. What bad thing could have happened,

何の凶報が来てあんなに泣き合つて  
どんな知らせが来てあんなに泣き合つて  
what news could make them weep together

ゐるのだろう?  
いるのだろう?  
like that?

あ、早く着いて人の話を  
さあ早く行って人の話  
I've got to get there right away

- 80 チヌ オカイ。」  
chinu okai.”  
ci=nu okay.”  
私・～を聞く したいなあ
- 81 ヤイヌアシ クス、  
yainuash kushu,  
yaynu=as kusu,  
思う ・私 ので
- 82 スマトウム チャシチャシ、 トフ トフ ト  
shumatumu chashchash, / towa towa to  
suma tumu cas cas, towa towa to  
石 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 83 ニトウム チャシチャシ、 トフ トフ ト  
nitumu chashchash, / towa towa to  
ni tumu cas cas, towa towa to  
木 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 84 テレケアシ カネ パイエアシ ワ インカラシ アワ  
terkeash kane / payeash wa / inkarash awa  
terke=as kane paye=as wa inkar=as awa  
跳ぶ ・私 しながら 行く(複)・私 して 見る ・私 したところ
- 85 ペツホントムタ トウ ウライニ □シキ カナン コ、  
pethontomta / tu uraini / roshki kanan ko,  
pet hontom ta tu uray ni roski kane an ko,  
川 ~の途中 で 二つの やな 木 立つ(複) しながら ある すると
- 86 トウ ウライイクシペ チウクルル コ、  
tu uraiikushpe / chiukururu ko,  
tu uray ikuspe ciw-kururu ko,  
二つの やな 柱 水流が当たり続ける と
- 87 トウ メノコ ウコ ヘポキ ウコヘタリ カネ  
tu menoko / uko hepoki / ukohetari kane  
tu menoko ukohepoki ukohetari kane  
二つの 女 互いに頭を下げる 互いに頭を上げる しながら
- 88 ウチシカラ シリ ネ クニ チラム ルウエ  
uchishkar shiri / ne kuni / chiramuru ruwe  
uciskar siri ne kuni ci=ramu ruwe  
互いに泣く 様子である と 私・～を思う の
- 89 ネ アウオカイ、  
ne awokai,  
ne awokay,  
である だったのだ
- 90 「トイシキマナウシ トフ トフ ト  
“Toishikimanaush / towa towa to  
“toy siki mana us towa towa to  
ひどい 目 ほこり ~に付く トワ トワ ト

聞きたいものだ。」  
を聞いてみたいものだ」  
and hear what they're saying,"

と思つて  
と思つて  
I thought. So,

石の中ちやらちやら  
石の中さっさ  
through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
流木の中さっさ  
through the driftwood, lickety-split

飛ぶ様にして行つて見たら  
とびながら行つてみると  
leaping as I went, when I got there, I saw

川の中程に二つの築があつて  
川の中流に二本のやなの杭が立っていて  
two fish-trap stakes standing in midstream.

二つの築の杭が流れに<sup>くい</sup>あたつてグラグラ動いてゐるのを  
二本のやなの杭が流れに当つてグラグラ揺れているのを  
I had seen the stakes swaying in the current

二人の女がうつむいたり仰むいたりして  
二人の女が互いに顔を下げたり上げたりしながら  
and thought they were two women raising and lowering

泣き合つてゐるのだと私は思ったの  
泣き合つているのだと私は思ったの  
their heads and weeping

でありました。  
でありました。  
together.

「眼の曇つたつまらぬ奴  
「眼の曇つたつまらないヤツ  
"You miserable, cloudy-eyed so-and-so



- 91 ウェンシキマナウシ トフ トフ ト  
wenshikimanaush / towa towa to  
wen siki mana us towa towa to  
悪い 目 ほこり ~に付く トワ トワ ト
- 92 サラポキ フラオツ トフ トフ ト  
sarpoki huraot / towa towa to  
sar poki hura ot towa towa to  
しっぽ ~の下 匂い ~に溜まる トワ トワ ト
- 93 サラポキ ムニン トフ トフ ト  
sarpoki munin / towa towa to  
sar poki munin towa towa to  
しっぽ ~の下 腐る トワ トワ ト
- 94 オインテヌ トフ トフ ト  
ointenu / towa towa to  
o-inte-nu towa towa to  
尻 やに ~が出る トワ トワ ト
- 95 オタイペヌ トフ トフ ト  
otaipeinu / towa towa to  
o-taype-nu towa towa to  
尻 おり ~が出る トワ トワ ト
- 96 インカラ ヘタプ ネアタプ テタ キ フミ オカイ。」  
inkar hetap / neptap teta / ki humi okai.”  
inkar hetap nep tap te ta ki humi okay.”  
見ること いったい~なのか 何 このように ここで ~をする 感じ なのか?
- 97 オロワノ スイ ペットウラシ  
Orowano shui / petturashi  
orowano suy pet turasi  
それから また 川 に沿って上に
- 98 スマトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
shumatumu chashchash, / towa towa to  
suma tumu cas cas, towa towa to  
石 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 99 ニトウム チャシチャシ、トフ トフ ト  
nitumu chashchash, / towa towa to  
ni tumu cas cas, towa towa to  
木 ~の中 さっ さっ トワ トワ ト
- 100 テレケアシ カネ ホシツパ アシ ワ アラキアシ。  
terkeash kane / hoshippa ash wa / arkiash.  
terke=as kane hosippa=as wa arki=as.  
跳ぶ・私 しながら 帰る(複)・私 して 来る(複)・私
- 101 シエトクン インカラシ アフ、  
Shietokun / inkarash awa,  
si-etok un inkar=as awa,  
自分・~の行く先へ 見る・私 したところ

眼の曇った悪い奴  
眼の曇った悪いヤツ  
you wicked, cloudy-eyed so-and-so

尻尾の下の臭い奴  
尻尾の下の臭いヤツ  
you stinking under the tail so-and-so

尻尾の下の腐った奴  
尻尾の下の腐ったヤツ  
you rotten under the tail so-and-so

お尻からやにの出る奴  
尻からやにの出るヤツ  
you pus coming out of the rump so-and-so

お尻から汚い水の出る奴  
尻から汚い水の出るヤツ  
you filthy water coming out of the rump so-and-so

何といふ物の見方をしたのだらう。」  
なんという物の見方をしたのだらう」  
What on earth did you think you were seeing?"

それからまた、川をのぼつて  
それからまた川に沿って上流へ  
So once again, I followed the river upstream,

石の中ちやらちやら  
石の中さっさ  
through the rocks, lickety-split

木片の中ちやらちやら  
流木の中さっさ  
through the driftwood, lickety-split

飛ぶやうにして帰って来ました。  
跳びながら帰ってきて  
leaping my way home,

自分の行手を見ましたところが  
自分の行く手を見たところ  
and when I looked up ahead

- 102 ネコンネ シリ ネ ナンコラ、  
nekonne shiri / ne nankora,  
nekon ne siri ne nankora,  
どのように ~である 様子である だろうか
- 103 チウンチセヘ ヌイコホプニ  
chiunchisehe / nuikohopuni  
ci=un-cisehe nuy kohopuni  
私・~の住む家 炎 ~に対して立ちのぼる
- 104 カムイニシ カタ リキン スプヤ  
kamuinish kata / rikin shupuya  
kamuy nis ka ta rikin supuya  
神 空 ~の上に 上る 煙
- 105 クツテクニシ ネ、チヌカラ チキ  
kutteknish ne, / chinukar chiki  
kuttek nis ne, ci=nukar ciki  
黒々としている 雲 のように 私・~を見る したら
- 106 ホマツパアシ、ヤイヌトウライヌアシ パクノ  
homatpaash, / yainuturainuash pakno  
homatpa=as, yaynuturaynu=as pakno  
驚く ・私 失神する ・私 ほど
- 107 ホマツパアシ、マツリミムセ チリクナプニ  
homatpaash, / matrimimse / chiriknapuni  
homatpa=as, mat rimimse ci=riknapuni  
驚く ・私 婦人 叫び声 私・~を高く上げる
- 108 テレケアシ アワ ウネトウナンカラ ヘマンタアンペ  
terkeash awa / unetunankar / hemantaanpe  
terke=as awa un=etunankar hemanta an pe  
跳ぶ ・私 したところ 私・~に出会う いったい何 ある 者
- 109 タルイペウタンケ リクナプニ ウンテクサムタ  
taruipoutanke / riknapuni / unteksamta  
ta ruy pewtanke riknapuni un=teksam ta  
ほら 激しい 危急の叫び ~を高く上げる 私・~のそば で  
ここに
- 110 チトウルセシ、インカラシ アワ チマチヒ  
chitursere, inkarash awa / chimachihi  
ci-tursere, inkar=as awa ci=macihi  
される・~を飛ばす 見る ・私 したところ 私・~の妻
- 111 ホマトウイポロ エウン カネ ヘセ ハウエ タクナタラ：  
homatuipor / eun kane / hese hawe / taknatara:  
homatu ipor eun kane hese hawe taknatara:  
驚く 顔色 ~に現れる しながら 息をする 声 短くぱっぱと切れながら続く
- 112 「チコロ ニシパ ネコンネ ハウエ タン？」  
“Chikor nispa / nekonne hawe tan?”  
“ci=kor nispa nekon ne hawe ta an?”  
私・~の 旦那 どのように ~である こと なのか

どうしたのだから  
いったいどうしたのだろう  
--what on earth!--

私の家が燃えあがつて  
私の家から火の手が上がって  
I saw flames rising from my house

大空へ立ちのぼる煙は  
大空に立ちのぼる煙が  
and it appeared that the smoke which rose to the sky

立ちこめた雲の様です。それを見た私は  
黒雲となって空に広がっているようです。それを見て  
had become a black cloud spreading out in the sky. Seeing that,

ビツクリして気を失ふほど  
私はびっくりして気を失うほど  
I was so shocked that I thought

驚きました。女の声で叫びながら  
驚きました。急を告げる女の叫び声を私は上げながら  
I might faint. I leaped up, raising my voice like a woman

飛上りますと、むかふから誰かが  
跳び上がりました。すると向こうから誰かが  
screaming to warn of an emergency. Then someone came rushing

大きな声でホーイと叫びながら私のそばへ  
急を告げる大声を上げて私のそばに  
up to me from across the way, shouting

飛んで来ました。見るとそれは私の妻で  
とんできました。見るとそれは私の妻で  
in a loud voice of warning. I looked and saw that it was my wife,

ビツクリした顔色で息せききって、  
驚きあわてた顔つきをして、息を切らせて  
wearing a panicked expression and out of breath.

「旦那様何うしたのですか？」と  
あなた、いったいどうしたんですか？」  
"Husband, whatever is the matter?"

- 113 ハワシ チキ インカラシ アフ ネイタ タツネ  
 Hawash chiki / inkarash awa / neita tapne  
 hawas ciki inkar=as awa ne i ta tapne  
 言う したら 見る ・私 したところ その所 に このように
- 114 チセウファイ アン ポココ インカラシ アフ  
 chiseuhui / an pokor / inkarash awa  
 cise-uhuy an pokor inkar=as awa  
 家の火事 ある かのよう 見る ・私 したところ
- 115 チウンチセヘ エネ アニ ネブココ  
 chiunchisehe / ene ani nepkor  
 ci=un-cisehe ene an i nepkor  
 私 ・ ~の住む家 このように ある こと のように
- 116 アシ カネ アン、アペ カ イサム スプヤ カ イサム、  
 ash kane an, ape ka isam / shupuya ka isam,  
 as kane an, ape ka isam supuya ka isam,  
 立つ しながら いる 火 も ない 煙 も ない
- 117 オロヤチキ チマチヒ イユタ コ  
 oroyachiki / chimachihi / iyuta ko  
 oroyaciki ci=macihi iyuta ko  
 なるほど 私 ・ ~の妻 搗き物をする すると
- 118 ラポケタ レラルイ ワ トウイトウイェ アマム  
 rapoketa / rerarui wa / tuituye amam  
 rapoke ta rera ruy wa tuytuye amam  
 ~の間 に 風 激しくなる して ~を箕でぬか飛ばしする 粟
- 119 ムリヒ レラ パル シリ  
 murihi / rera paru shiri  
 murihi rera-paru siri  
 ぬか 風で飛ぶ 様子
- 120 スプヤ ネブココ チヌカン ルウエ ネ ココカイ。  
 shupuya nepkor / chinukan ruwe / ne rokokai.  
 supuya nepkor ci=nukar ruwe ne rokokay.  
 煙 のように 私 ・ ~を見る のである だったのだ
- 121 ヌニペアシ ヤッカ アエプ オムケナシ カシクンスイ、  
 Nunipeash yakka / aep omukenash / kashikunshui,  
 nunipe=as yakka aep-omuken=as kasike un suy,  
 食べ物を探す ・ 私 しても 食べ物が獲れない ・ 私 その上 に また
- 122 ペウタンケアシ ワ チマチヒ  
 peutankeash wa / chimachihi  
 pewtanke=as wa ci=macihi  
 危急の叫び声を上げる ・ 私 して 私 ・ ~の妻
- 123 エホマトウ クス、トウイトウイェ コラン アマム ネヤッカ  
 ehomatu kushu, / tuituye koran / amam neyakka  
 ehomatu kusu, tuytuye kor an amam ne yakka  
 ~に驚く ので ~を箕でぬか飛ばしする しながら いる 粟 ~である しても

云ふので、見ると  
 と言うので、家を見てみると、なんと  
 she asked. So I looked at my house, and to my surprise,

火事の様に見えたのに  
 火事のように見えたのに  
 although I had been sure that it was on fire,

私の家はもとのまゝ、  
 私の家は元のまま  
 I saw that it was standing there

たつてゐます。火もなし、煙もありません。  
 立っています。火もなければ煙もありません。  
 just as it always had been. There was no fire and no smoke.

それは、私の妻が搗物をしてゐると  
 思いがけないことに私の妻が粟をついていた  
 Apparently, at the very instant my wife had been pounding millet,

その時に風が強く吹いて簸てゐる粟の  
 ちょうどその時、強風が吹いて、箕でとばしていた粟の  
 a strong wind had come up and blown away the chaff she

糠が吹飛ばされるさまを  
 糠を吹きとばしたのです。そのさまを  
 had been winnowing. That sight

煙の様に私は見たのでありました。  
 私は煙のように見てしまったのでした。  
 had looked like smoke to me.

食物を探しに出かけても食物も見付からず、其の上に  
 食べ物を探しにいったのに食べ物が見つからず、その上  
 So although I had gone out to search for something to eat, I didn't find any food, and on top of that,

また、私が大声を上げたので私の妻が  
 私が急を告げる声を上げたので私の妻は  
 because I had raised my voice to warn of the emergency, my wife

それに驚いて簸ていた粟をも  
 その声に驚いて、とばしていた粟も  
 was startled and ended up tossing away both the millet

- 124 ムイ トウラノ エヤブキリ ワ イサム クス、  
 mui turano / eyapkir wa / isam kushu,  
 muy turano eyapkir wa isam kusu,  
 箕 と一緒に ~を投げる して しまう ので
- 125 タヌクラン アナク サヨサカシ  
 tanukuran anak / sayosakash,  
 tanukuran anak sayo-sak=as,  
 今晚 は おかゆがない・私
- 126 イルシカアシ クス チアマソツキ ソツキアサム  
 irushkaash kushu / chiamasotki / sotkiasam  
 iruska=as kusu ci-ama sotki sotki asam  
 怒る ・私 ので される・~を置く 寝床 寝床 ~の底
- 127 チコヤヨスラ。  
 chikoyayoshura.  
 ci=ko-yayosura.  
 私・~に身を投げ出す
- 128 「トイシキマナウシ トフ トフ ト  
 “Toishikimanaush / towa towa to  
 “toy siki mana us towa towa to  
 ひどい 目 ほこり ~に付く トフ トフ ト
- 129 ウエンシキマナウシ トフ トフ ト  
 wenshikimanaush / towa towa to  
 wen siki mana us towa towa to  
 悪い 目 ほこり ~に付く トフ トフ ト
- 130 サラポキ フラオツ トフ トフ ト  
 sarpoki huraot / towa towa to  
 sar poki hura ot towa towa to  
 しっぽ ~の下 匂い ~に溜まる トフ トフ ト
- 131 サラポキ ムニン トフ トフ ト  
 sarpoki munin / towa towa to  
 sar poki munin towa towa to  
 しっぽ ~の下 腐る トフ トフ ト
- 132 オインテヌ トフ トフ ト  
 ointenu / towa towa to  
 o-inte-nu towa towa to  
 尻 やに ~が出る トフ トフ ト
- 133 オタイペヌ トフ トフ ト  
 otaipenu / towa towa to  
 o-taype-nu towa towa to  
 尻 おり ~が出る トフ トフ ト
- 134 インカラ ヘタプ ネプタプ テタ キ フミ オカイ。」  
 inkar hetap / neptap teta / ki humi okai.”  
 inkar hetap nep tap te ta ki humi okay.”  
 見る事 いったい~なのか 何 このように ここで ~をする 感じ なのか?

簸と一しよに放り飛ばしてしまつたので  
 箕も一緒に放り投げてしまつたので  
 and the winnow, so tonight

今夜は食べる事も出来ません  
 今夜は、おかゆさえ食べられず  
 there wasn't even any porridge to eat.

私は腹立だしくて床の底へ  
 腹立ちまざれに私は寝床の下に  
 In a fit of anger, I threw myself

身を投げて寝てしまいました。  
 身を投げたのでした。  
 under my bed.

「眼の曇つたつまらぬ奴  
 「眼の曇つたつまらぬヤツ  
 "You miserable, cloudy-eyed so-and-so

眼の曇つた悪い奴  
 眼の曇つた悪いヤツ  
 you wicked, cloudy-eyed so-and-so

尻尾の下の臭い奴  
 尻尾の下の臭いヤツ  
 you stinking under the tail so-and-so

尻尾の下の腐つた奴  
 尻尾の下の腐つたヤツ  
 you rotten under the tail so-and-so

お尻からやにの出る奴  
 尻からやにの出るヤツ  
 you pus coming out of the rump so-and-so

お尻から汚い水の出る奴  
 尻から汚い水の出るヤツ  
 you filthy water coming out of the rump so-and-so

何といふ物の見方をしたのだらう。」  
 何という物の見方をしたんだらう」  
 What on earth did you think you were seeing?"

135 アリ  
ari  
ari  
と

136 チロンヌプ トノ ヤイエユカラ。  
Chironnup tono yaieyukar.  
cironnup tono yayeyukar.  
キツネ 親方 自らを物語る

と  
と  
Thus

狐の頭が物語りました。  
位の高いキツネが物語りました。  
recounted a fox of high stature.

## 〔言葉の説明〕

## ・ペナ pena (73 行目)

アイヌ語では、川の上流、下流に関する言葉は実に細かく分かれています。このペナ pena (上流方向) もその一つです。下流方向は、パナ pana といいます。そして、ペナンペ penanpe (上流の人) とパナンペ pananpe (下流の人) という言葉を生み、「ペナンペ、パナンペ物語」という一つの物語のジャンルもできています。また、「川に沿って登る」場合は、トゥラシ turasi、「川に沿って下る」場合は、エソロ esoro というように使い分けられます。川はアイヌの人たちの生活の中心軸であると考えられています。

## ・ホントム hontom (85 行目)

ホントム hontom は「途中」のこと。ホントム hontom は、< hon-tom (腹・中央)。ペツホントム pet hontom で「川の中ほど」「川の中流」。

## ・カナン kanan (85 行目)

カナン kanan は、カネ アン kane an (して・ある) の縮まったもの。ロスキ カナンコ roski kanan ko で5音節になるので。

## ・ウライイクシペ uray ikuspe (86 行目)

ウライ uray は、魚を取るために作られた筒状のもので「簾 (やな)」といわれます。水の中に沈めておいて、流されないように杭にしばっておきます。イクシペ ikuspe は、< i-kuspe (もの・を通る・もの) 杭。

## ・ウコ ヘポキ ウコヘタリ uko-hepoki uko-hetari (87 行目)

ウコヘポキ ukohepoki は、< uko-he-poki (互いに・顔・下げる)、ウコヘタリ ukohehari は、< uko-he-tari (互いに・顔・上げる)。泣くときの身ぶりを表わしたものの。

## ・ウチシカラ uciskar (88 行目)

ウチシカラ uciskar は、< u-cis-kar (互いに・泣くこと・をする)。葬式など不幸な場では、泣きを行う女性が、大きな声をあげて泣き、悲しみを表現しました。

## ・クツテクニシ ネ kuttek nis ne (105 行目)

クツテク kuttek は、< kur-tek (黒い・さっと~する) で、「さっと黒くなる」こと。クツテクニシ kuttek nis で、「たちまち黒く広がる雲」。ネ ne は「~のようである」という意味。

## ・マツリミムセ mat rimimse (107 行目)

マツリミムセ mat rimimse は、< mat-rim-rim-se (女性が・ドシン・ドシン・という) で、女性が危急の声を上げながら大地を踏みしめたことが元の意味だと考えられます。知里幸恵の注では、ペウタンケ pewtanke (危急を知らせる女性のよく通る叫び声) と同じだといっています。

## ・ウネトウナンカラ un=etunankar (108 行目)

これは < un=etunankar (私に・に行き会う)。エトウナンカラ etunankar は、< e-tu-nankar (〜で・二つ・顔・を作る) 〜で二つの顔になる→に行き会う。この前の部分と一緒に直訳すると、「私は危急を告げる声を上げながら跳んでいくと私は行き会った。誰かがひどい大声を上げて私のすぐそばに飛んできた」。

## ・チトウルセレ citursere (110 行目)

チ〜レ ci〜re (される〜させる) で美文調にしたもの。意味はトゥルセ turse (飛ぶ) と同じ。音節をふやし美文調にするユーカラ特有の言葉づかい。

## ・エウン eun (111 行目)

エウン eun は、「(そこ) がある」「(そこ) に現われる」。ホマツ イポロ エウン homat ipor eun 「驚いた顔色が現われる」

## ・ヘセ ハウエ タクナタラ hese hawe taknatara (111 行目)

ヘセ ハウエ hese hawe は「息をたてる・声」。タクナタラ taknatara は「小刻みに」。「ハッハッと息を切らして」という意味。

## ・ハウエ hawe (112 行目)

このハウエ hawe (声) が使われたのは、夫のたてた叫び声を話題にしているためです。もし、夫の走る姿を見てそれを話題にするならば、ネコン ネ シリ タ アン nekon ne siri ta an? (どうしたのですか?) となります。このように人の声ならば、ハウエ hawe、音ならば、フミ humi、見た様子ならば、シリ siri、確実なことならば、ルウェ ruwe、というように使い分けられます。

## ・ネイタ タツネ ne i ta tap ne (113 行目)

ネイタ ne i ta (その・所・に)。タツネ tap ne (そのように)。全体で「そこに、そのように (火事のように見えたのに)」という意味。

## ・ポコロ pokor (114 行目)

pokor は pekor (〜のように) と同じような意味の言葉だと思われます。

## ・エネ アニ ネツコロ ene ani nepkor (115 行目)

エネ アニ ネツコロ ene ani nepkor は < ene an i ne pokor (そのようで・ある・こと・である・ように) 「元あったもののように (立っています)」。

## ・オロヤチキ oroyaciki (117 行目)

オロヤチキ oroyaciki < or-oya-ciki (そこ・別の・ならば) → [いままでの見方] とは別の (見方) ならば→見方を変えてみると、気がついてみると。

## ・アエフ オムケン aep omuken (121 行目)

アエフ aep は、< a-e-p (人が・食べる・物) 食べ物。オムケン omuken は、獲物がとれない。アエフオムケン aep-omuken で「食べ物がとれない」。

## ・カシクンスイ kasikun suy (121 行目)

カシクン kasikun は、< kasike-un (その上・に)。スイ suy は、「また」。カシクン スイ kasikun suy で「その上にまた」。

## ・サヨサク sayosak (125 行目)

サヨ sayo は「おかゆ」。サク sak 「～がない」。直訳すると「おかゆが無い」。「食べものが無い」の意味。

## ・コヤヨスラ koyayosura (127 行目)

< ko-yay-osura (～に・自分・を捨てる) →わが身を投げる。

## ・トノ tono (136 行目)

トノ tono は、日本語の「殿」から入ったもの。意味は、①殿さま。役人。和人男子の敬称。②位の高い者。頭(かしら)。この場合は、キツネの中でもリーダー格のキツネという意味。

## [参考]

## ・ウッカ utka (74 行目)

ウツ ut は「肋骨。あばら骨」のこと。カ ka は「上」。ウッカ utka で「肋骨の上」という意味。水の中から瀬があちこち顔を出している様子が、「あばら骨」がすけて浮き上がっている様子に似ているので「浅瀬」のことをウッカ utka といったのでしょう。このように地形や地名の言葉は、人体名称から来ているものが数多くあります。

## コラム (5)

## ペウタンケとは？

ペウタンケ pewtanke は、何か事故や大変なことが起こったときに、離れた所にいる人に知らせる叫び声のことです。一体どんな発声をするのか聞いてみたいものだと私は思ったのですが、本当にその叫び声を上げれば、誰かが本当に驚いてとんでくるかもしれません。知里幸恵はこのテキストの注の中で「何か急変の場合または ウニウエンテ uniwente の場合」「女はほそくホーイと叫びます。女の声は男の声より高く強くひびくので神々の耳にも先にはいると云います。それで急な変事が起った時には、男でも女の様にはほそい声を出して、二声三声叫びます」と述べています。そしてペウタンケは普通よく用いられる言葉で、リミムセ rimimse の方は少し難しい言葉だとも述べています。

言葉だけの説明では、どうしてもよく分からないので、どんな声を出すのか親しくしている日高在住のアイヌのフチ(おばあさん)に聞いてみました。彼女は自分では出したことはないが、近くで火事が起ったときに、その家のおばあさんがペウタンケした声を聞いたことがあるということです。そして、ようやく外にもれないような声でペウタンケの声を出して聴かせてくれました。それは、高音部を使った細長い声で「ホーイ」とソプラノで発声したように聞こえました。あまり大きな声を出さなくても、こういう声は遠くまでよく通るのだそうです。

山などで変事(例えば、雪崩に巻き込まれたり、崖から落ちたり、クマに襲われたりした)があれば、それを見た人がペウタンケの声を出すと、それを聴いた山近くの家の人が、さらに里の方の家に、ペウタンケをして知らせたといえます。つまり途中で中継して、さらに遠くへ事故などを知らせたということです。普通は、女性がペウタンケをするのですが、高く細長い声の方が遠くに届くので、男もペウタンケの声を上げることがあったといえます。一番近い例えで言えば、サイレンのような音と役割だといえるでしょう。

このペウタンケの声は、他の人に事故を知らせるだけではなく、変事ときの儀礼 ウニウエンテ uniwente (ニウエンホリツパ niwenhorippa とニウエンホムス niwenhomsu ともあります) のときに、男たちは太刀を振り上げ、足で大地を踏みしめながら隊列を作って進み、その後を女性たちが、このペウタンケの声をあげながら行ったといえます。これはカムイたち(神々)の耳に届き、ふり向いてくれるからだといえます。この儀礼は事故が起った原因の一端は神々にもあることをカムイに伝え、これから二度とこういう変事が起らないように気をつけてくれるようきつく申し渡す儀礼です。

3

キツネが自らうたった謡

「ハイクンテレケ ハイコシテムトウリ」

cironnup yayeyukar

Song sung by fox god





## 第3話(その1)

### キツネが自らをうたった<sup>うた</sup>謡

#### 「ハイクンテレケ ハイコシテムトウリ」

(1～61行目)

##### 〔物語とその背景〕

物語の冒頭でキツネが暮らしている場所が出てきます。同じ神さまでもそれぞれ格があって、格の上の神さまは、山でも高い所に暮らし、格の低い神さまは、山すそに暮らしているといわれています。このキツネの場合、大地から突き出た立派な岬の頂に暮らしているのが格の高いキツネであることがわかります。

その格の高いキツネ（私）が幸せな情景を目にして、何かかき乱してやりたいという衝動にかきたてられます。三人の男（それは神に近い人間の始祖たち）が波一つ立たない鏡のような海に出漁して沖漁をしようとした光景を目にして、むらむらと悪さをしたい衝動が胸にわき起こってきました。

そこで、始めたのが川の水源に住む悪天候をもたらす魔をさそい出す行動です。腰を高く張り上げて勢いをつけて岬の上空をかき乱すように跳びはね、バリバリバリと細い棒を折るかのような恐ろしい吠え声をたて、さらにガラガラと川の水源をにらんで魔を呼びました。すると、それにさそわれて、激しい竜巻が起り海に入ってきました。竜巻は大きな海をひっくり返すかのように荒れ狂います。大海原で三人の乗った舟はくるくる回わり、大浪は舟の上に激しく打ちかぶさります。三人は声を出し合いながら力いっぱい舟を漕ぎますが、小さな舟は落葉のように吹きとばされて、いまにも転覆しそうになります。しかし、三人は、この嵐の中でよく持ちこたえます。

その様子を見たキツネに、またむらむらと悪さをしたい衝動がこみ上げてきます。竜巻を起す魔に加勢するように、はね跳び吠え声をたて続けます。すると、まず男の中の一人、サマユンクルの手から血が流れ出し、疲労で倒れてしまいました。それを見たキツネは、しめたとばかり心の中で笑みを浮かべ、さらにはね跳び吠え声をあげ竜巻を起す魔を励まします。それでも残りの二人は櫂（かい）も折れんばかりに舟を漕ぎ続けます。しかし、もう一人、スブンラムカの手からも血が吹き出し倒れてしまいます。これを見てキツネは心の中でニヤッと笑い、また、はね跳び吠え声を立てました。

ところが、最後に残ったオキキリムイは全く疲れた様子を見せません。薄い着物一枚を身にまといながら舟を漕ぎ続けます。しかし、自分で握っていた舵が折れしまいました。そこで、サマユンクルの所に跳んでその舵をつかみ、ただ一人で舟を漕ぎました。

それを見たキツネに、持ち前の悪い心がむらむらと湧き起り、また、ひどい吠え声を立て、跳びはねながら竜巻を起す魔に加勢したのでした。

ここまでが前半です。キツネは、天候を悪くする魔神と一緒に、のどかな海で漁をしようとする人間にひどい悪さを働くのでした。こうしてみるとキツネという動物は、天候と何か関連があるようにみえますが、はたしてそうなのでしょうか？

「コタン動物記Ⅱ」（更科源蔵・更科光）を見ると、八雲では、海が時化しけたときに身を護ってくれるという伝承が残っていること、穂別では、凶漁のときに人間を救い、危険からも身を守ってくれるといわれ、新冠では、津波のあることを知らせるとか、三石では、大水が出るのを知らせる、というように出ています。またキツネの頭骨を海漁の守護神にした話も各地に残っています。八雲では、キツネの頭骨を海漁に行くときに持って行って、急に時化が来たときには「もし舟が沈むと私もお前も海に沈んで、もう木幣もお酒ももらえなくなるぞ、頑張って舟を海岸につけなさい」と協力を強要したといっています。こうしてみると伝承には、海漁の守り神で、時化のときにそれを静めてくれる力をもつことが伝えられています。嵐を起こして悪さをすることとだいぶ違います。これは何故なのでしょう？ コラム(7)の中で、この答えを考えてみることにします。

チロンヌブ ヤイエユカラ、「ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ」  
 Chironnup yaieyukar, “Haikunterke Haikoshitemturi.”  
 cironnup yayeyukar, “haykunterke haykositemturi.”  
 キツネ 自らを物語る ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ

狐が自ら歌った謡 「ハイクンテレケ ハイコシテムトリ」  
 キツネが自らを歌ったうた「ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ」  
 Song Sung by the Fox God "Haikunterke Haikoshitemturi"

サケヘ：ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ haykunterke haykositemturi

- 1 ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ  
 Haikunterke / Haikoshitemturi  
 haykunterke haykositemturi  
 ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ
- 2 モシレサニ カムイエサニ タツカシケ  
 Moshiresani / kamuiesani / tapkashike  
 mosir esani kamuy esani tapkasike  
 大地 岬 立派な 岬 (小高い所)の上
- 3 チエホラリ オカヤシ。  
 chiehorari / okayash.  
 ci=ehorari okay=as.  
 私・～に座る いる(複)・私
- 4 シネアント タ ソイタ ソイネアシ インカラシ アフ、  
 Shineanto ta / soita soineash / inkarash awa,  
 sineanto ta soy ta soyne=as inkar=as awa,  
 ある日 に 外 に 外に出る・私 見る・私 したところ
- 5 ピリカ ネット ネットクルカシ テシナタラ、アトウイソ カタ  
 pirka neto / netokurkashi / teshnatara, / atuisho kata  
 pirka neto neto kurkasi tesnatara, atuy so ka ta  
 よい なぎ なぎ ～の上面 平らかである 海面 ～の上に
- 6 オキキリムイ スブンラムカ サマユンクル  
 Okikirmui / Shupunramka / Samayunkur  
 Okikirmuy Supunramka Samayunkur  
 オキキリムイ スブンラムカ サマユンクル
- 7 レパ クス レソウシ ワ パイエ コロカイ。シリキ チキ  
 repa kushu / resoush wa / paye korokai. / Shirki chiki  
 repa kusu resous wa paye kor okay. sirki ciki  
 沖漁に出る ために 三人乗りする して 行く(複) しながら いる(複) 様子である したら
- 8 チコロ ウェンプリ ウンコサンコサン。  
 chikor wenpuri / unkosankosan.  
 ci=kor wen puri un=kosan-kosan.  
 私・～の 悪い 性格 私・～に出る出る
- 9 タパネサンノツ モシレサニ カムイ エサニ  
 Tapanesannot / moshiresani / kamui esani  
 tapan esannot mosir esani kamuy esani  
 この 岬 大地 岬 立派な 岬

ハイクンテレケ ハイコシテムトリ  
 ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ  
 Haikunterke Haikoshitemturi

国の岬、神の岬の上に  
 大地の先の岬、立派な岬、その上に  
 Above the cape at the end of the earth, the magnificent cape,

私は坐して居りました。  
 私は座っていました。  
 I sat.

或日に外へ出て見ますと  
 ある日、私は外に出かけてみると、  
 One day, I went out

海は凪ぎてひろびろとしてみて、海の上に  
 海は風いで広々しています。海の上を  
 and found the sea was calm and wide open. Above the sea,

オキキリムイとシユブンラムカとサマユンクルが  
 オキキリムイ、スブンラムカそしてサマユンクルが  
 Okikirmui, Supunramka, and Samayunkur

海獵に三人乗りで出かけてゐます、それを見た私は  
 沖の漁に三人乗りの舟で出かけているところでした。それを見て  
 were out fishing in the sea in a three-man boat. When I saw this,

私の持つてる悪い心がむらむらと出て来ました。  
 私の持ち前の悪い心がむらむらとわき起こって来ました。  
 my wicked nature surged up from inside.

この岬、国の岬、神の岬  
 この出崎、大地の先の岬、立派な岬  
 Far to the east, far to the west, above

- 10 タツカシケ トオ ヘペライ トオ ヘパシ  
 tapkashike / too heperai / too hepashi  
 tapkasike too heperay too hepasi  
 (小高い所)の上 ずーっと 川上へ ずーっと 川下へ
- 11 コシネテレケ チコイックウカン マトウニタラ  
 koshneterke / chikoikkeukan / matunitara  
 kosne terke ci=ko-ikkew-kan -matun -itara,  
 軽い 跳躍 私・～と共に・～の腰・～の上・起き上がる・～し続けている
- 12 ニツネパウセ パウセニツカン チケツケケツケ  
 nitnepause / pausenitkan / chikekkekekke  
 nitne pawse pawse nit kan ci-kekke-kekke  
 性悪である 鳴き声 鳴き声 棒 ～の上 される・～を何度も折る
- 13 タパン ペテトク チヌカンヌカラ シリウエン ニツネイ  
 tapan petetok / chinukannukar / shirwen nitnei  
 tapan pet etok ci=nukar-nukar sirwen nitne i  
 この 川 ～の源 私・～を何度も見る 天気が悪くなる 性悪である 者
- 14 チホトウイェカラ、 ネイコラチ タパン ペツポ  
 chihotuyekar, / neikorachi tapan petpo  
 ci=hotuyekar, ne i koraci tapan petpo  
 私・～を呼ぶ その こと のように この 小川
- 15 ペテトクワノ ユブケレラ スブネ レラ  
 petetokwano / yupkerera / shupne rera  
 pet etok wano yupke rera supne rera  
 川 ～の源 から 激しい 風 渦巻く 風
- 16 チサナサンケ アトウイカ オシマ ホントモタ  
 chisanasanke / atuika oshma / hontomota  
 ci-sanasanke atuy ka osma hontomo ta  
 される・～を浜へ出す 海 ～の上 ～に突っ込む ～したとたん
- 17 タパン アトウイ カンナアトウイ チポクナレ  
 tapan atui / kannaatui / chipoknare  
 tapan atuy kanna atuy ci-poknare  
 この 海 上の 海 される・～を下にする
- 18 ポクナアトウイ チカンナレ。 オキキリムイ ウタロケ  
 poknaatui / chikannare. / Okikirmui / utarorke  
 pokna atuy ci-kannare. Okikirmuy utar orke  
 下の 海 される・～を上にする オキキリムイ たち ～の所
- 19 コン レパチパ レプンクラトウイ ヤウンクラトウイ  
 kon repachip / repunkuratui / yaunkuratui  
 kor repa cip repunkur atuy yaunkur atuy  
 ～の 沖漁 舟 沖の人 海 陸の人 海
- 20 ウエウシ タ アニサプシカバ カイトウル  
 uweushi ta / anisapushkap / kaiuturu  
 ueus i ta a=nisapuska p kay uturu  
 互いにくっつく 所 に される・～を突然 もの 波 ～の間  
 付かせる

の上をずーつと上へずーつと下へ  
 の上のはるか上手へ、はるか下手へ  
 this cape at the end of the earth, this magnificent cape,

軽い足取りで腰やはらかにかけ出しました。  
 腰を張り上げて軽々と跳んで  
 I lifted up my haunches and jumped nimbly

重い調子で木片をポキリポキリと折る様にパーウ、パウと叫び  
 棒をポキポキ折るようなひどい吠え声を私はたてました。  
 and let out a horrible howl like the crunch-crunch of sticks breaking.

此の川の水源をにらみにらみ暴風の魔を  
 そして、この川の水源地をギッとにらんで悪天候をもたらす魔神  
 Then, I stared fixedly at the source of this river and called

呼びました。すると、それにつれて此の川の  
 を私は呼びました。すると、それにつれてこの川の  
 the Storm Demon. From the source

水源から烈しい風、つむじ風が  
 水源から激しい風、竜巻が  
 of this river, strong winds and tornadoes

吹き出して海にはいと直ぐに  
 次々にわき起こって海に突進するやいなや  
 swelled up one after another and charged into the sea. In an instant,

此の海は、上の海が下になり  
 海は、上層の部分が下になり  
 the top layer of the ocean became the bottom layer,

下の海が上になりました。オキキリムイたち  
 海の下層の部分は上になりました。オキキリムイたち  
 and the bottom layer became the top layer. Where the inland sea and the open sea meet,

の漁舟は沖の人の海と、陸の人の海との  
 の漁舟は、外海と内海が  
 the fishing boat of Okikirmui and the others ran into a whirlpool,

出会ったところ（海の中程）に、非常な急変に会って波の間を  
 出会った所で急変にあって波の間  
 and the boat spun round and round

- 21 コシカリンパ。タパン ルヤンペ ヌプリ シンネ  
koshikarimpa. / Tapan ruyanpe / nupuri shinne  
ko-sikarimpa. tapan ruyanpe nupuri sinne  
～を何度も回る この しけ 山 のようになって
- 22 チプ クルカシ コトソサツキ。シリキ チキ  
chip kurkashi / kotososatki. / Shirki chiki  
cip kurkasi kotososatki. sirki ciki  
舟 ～の上面 ～で荒れ続ける 様子である したら
- 23 オキキリムイ サマユンクル スブンラムカ  
Okikirmui Samayunkur Shupunramka  
Okikirmuy Samayunkur Supunramka  
オキキリムイ サマユンクル スブンラムカ
- 24 フムセ トウラ チポコナンペ コホクシホクシ。  
humse tura / chipokonanpe / kohokushhokush.  
humse tura cipo-konanpe-ko-hokus-hokus.  
雄叫びを挙げる と共に 舟を漕ぐ・ようにあるもの・～に何度も倒れる
- 25 タパン ポンチブ コムハム トウルセ シコパヤラ  
Tapan ponchip / komham turse / shikopayar  
tapan pon cip komham turse sikopayar  
この 小さい 舟 木の葉 とぶ かのような
- 26 チキポカイキ ウアシ アンケ シリキ コロカ  
chikipokaiki / upsh anke / shirki korka  
ci=ki pokayki upsi anke sirki korka  
私・～をす だけでも うつぶせになる 今にも～しそう 様子である けれども
- 27 イネアアクス アイヌピトウタラ オキラシヌ フ  
ineapkushu / ainupitoutar / okirashnu wa  
ineapkusu aynu-pito utar okirasnu wa  
何とまあ 人間 たち 力が強い して
- 28 シリキ ナンコラ タパン ポンチブ レラ トウムタ  
shirki nankora / tapan ponchip / rera tumta  
sirki nankora tapan pon cip rera tum ta  
様子である のだろうか この 小さい 舟 風 ～の中 で
- 29 カンペクルカ エチャララセ。  
kampekurka / echararse.  
kanpe kurka ecararse.  
水面 ～の上面 ～を滑って行く
- 30 チヌカツ チキ チコロ ウエンプリ ウンコサンコサン。  
Chinukat chiki / chikor wenpuri / unkosankosan.  
ci=nukar ciki ci=kor wen puri un=kosankosan.  
私・～を見る したら 私・～の 悪い 性格 私・～に出る出る
- 31 コシネテレケ チコイツケウカン マトウニタラ  
Koshneterke / chikoikkeukan / matunitara,  
kosne terke ci=ko-ikkew-kan -matun -itara,  
軽い 跳躍 私・～と共に・腰 ・上 ・ 起きあがる ・ ～し続けている

クルリと廻りました。大きな浪が山の様に  
をくるくる回りました。荒れた波が山のようになって  
between the waves. The rough waves became like mountains

舟の上へかぶさり寄ります。すると、  
舟の上に激しくかぶさります。すると  
and crashed over the boat, and

オキキリムイ、サマユンクル、シユブンラムカは  
オキキリムイ、サマユンクル、スブンラムカは  
Okikirmui, Samayunkur, and Supunramka,

声をふるつて、舟を漕ぎました。  
声をふりしぼりながら、力いっぱい舟を漕ぎます。  
calling "heave-ho," paddled the boat with all their might.

此の小さい舟は落葉の飛ぶ様に吹飛ばされ  
小さな舟はまるで落ち葉が飛ばされるようなありさまです。  
The little boat was blown about as though it were a fallen leaf.

今にもくつがへりさうになるけれども  
しかし、私がそこまでしても、舟は転覆しそうになりながらも  
But no matter what I did, although the boat seemed about to overturn,

感心にも人間たちは力強くて  
感心なことに人間たちは力強くもちこたえて  
the admirable humans must have held strong,

此の小舟が風の中に  
いるのでしょうか、小舟は風を受けて  
for the little boat took the wind

波の上をすべります。  
波の上を滑っていきます。  
and glided over the waves.

其れを見ると私の持つてゐる悪い心がむらむらと出て来ました。  
それを見て、私の悪い心がむらむらとわき起こって来ました。  
Seeing this, my wicked nature surged up from inside.

軽い足取で腰やはらかにかけまはり、  
腰を張り上げて軽々と跳んで  
I lifted up my haunches and jumped nimbly,

- 32 ニツネパウセ パウセニツカン チケツケケツケ  
nitnepause / pausenitkan / chikekkekekke  
nitne pawse pawse nit kan ci-kekke-kekke  
性悪である 鳴き声 鳴き声 棒 上 される・～を何度も折る
- 33 シリウエン ニツネイ セレマカ チウシ チコアリキキ。  
shirwen nitnei / sermaka chiush / chikoarikiki.  
sirwen nitne i sermaka ci=us ci=koarikiki.  
天気が悪くなる 性悪である 者 ～の背後 私・～に付く 私・～にがんばる
- 34 シリキ アイネ フナクパケタ サマユンクル  
Shirki aine / hunakpaketa / Samayunkur  
sirki ayne hunakpaketa Samayunkur  
様子である したあげく どれほど騒ってか サマユンクル
- 35 テクトウイカ ワ テクトウイポク ワ ケム チャララセ  
tektuika wa / tektuipok wa / kem chararse  
tek tuyka wa tek tuypok wa kem cararse  
手 ～の上側 から 手 ～の下側 から 血 流れる
- 36 シンキエコツ。  
shinkiekot.  
sinki ekot.  
疲れ ～で死ぬ
- 37 シリキ チキ ラウキ ミナ チウエスイエ。  
Shirki chiki rauki mina / chiuweshuye.  
sirki ciki rawki-mina ci=uesuye.  
様子である したら 含み笑い 私・～を揺らす(楽しむ)
- 38 オロフノスイ アリキキアシ  
Orowanoshui / arikikiash  
orowano suy arikiki=as  
それから また がんばる・私
- 39 コシネテレケ チコイツケウカン マトウニタラ、  
koshneterke / chikoikkeukan / matunitara,  
kosne terke ci=ko-ikkew-kan -matun -itara,  
軽い 跳躍 私・～と共に・～の腰・～の上・起き上がる・～し続けている
- 40 ニツネパウセ パウセニツカン チケツケケツケ、  
nitnepause / pausenitkan / chikekkekekke,  
nitne pawse pawse nit kan ci-kekke-kekke,  
性悪である 鳴き声 鳴き声 棒 ～の上 される・～を何度も折る
- 41 シリウエン ニツネイ セレマカ チウシ。  
shirwen nitnei / sermaka chiush.  
sirwen nitne i sermaka ci=us.  
天気が悪くなる 性悪である 者 ～の背後 私・～に付く
- 42 オキキリムイ スブンラムカ エトウンネ カネ  
Okikirmui / Shupunramka / etunne kane  
Okikirmuy Supunramka etunne kane  
オキキリムイ スブンラムカ 二人で しながら

重い調子で木片がポキリポキリと折れる様にパウ、パウと叫び  
棒を何本も折るようなひどい吠え声を私はたて  
letting out a horrible howl like the crunch-crunch of countless sticks breaking,

暴風の魔を声援するのみに精を出しました。  
悪天候をもたらす魔神に一生けん命加勢しました。  
and encouraged the Storm Demon with all my might.

そうしてる中に、やつと、サマユンクルが  
そうやっていると、ついにサマユンクルが  
After a while, Samayunkur finally

手の上から、手の下から血が流れて  
手の上からも手の下からも血を流して  
began bleeding from above his hand and below his hand

疲れてたふれました。  
疲れて倒れてしまいました。  
and fell over exhausted.

そのさまを見て私はひそかに笑みを浮かべました。  
その様子を見て私は心の中で笑みを浮かべました。  
Seeing this, I smiled inwardly.

それからまた、精を出して  
それからまた、がんばって  
Once again, with a push,

軽い足取りで腰やはらかにかけまはり  
腰を張り上げ軽々と跳んで  
I lifted up my haunches and jumped nimbly,

重い調子で木片をポキリポキリと折る様に叫び  
棒を何本も折るようなひどい吠え声を私はたて  
letting out a horrible howl like the crunch-crunch of countless sticks breaking,

暴風の魔を声援しました。  
悪天候をもたらす魔神に加勢しました。  
and encouraged the Storm Demon.

オキキリムイとシユブンラムカと二人で  
オキキリムイとスブンラムカは二人で  
Okikirmui and Supunramka took turns encouraging one another

- 43 ウコオロスツケ トウマシヌ アッサブ ペコトポ ペコレウパ  
 ukoorshutke / tumashnu assap / pekotopo / pekoreupa  
 uko-orsutke tumasnu assap pe-ko-topo pe-ko-rewpa  
 互いに励ます 丈夫な 權(かい) 水に対して~を回す 水に対して~をたわめる(複)
- 44 イキチ アイネ フナクパケタ スブンラムカ  
 ikichi aine / hunakpaketa / Shupunramka  
 iki-ci ayne hunakpaketa Supunramka  
 する・(複) したあげく どれほど経ってか スブンラムカ
- 45 テクトウイカ フ テクトウイポク フ ケム チャララセ  
 tektuika wa / tektuipok wa / kem chararse  
 tek tuyka wa tek tuypok wa kem cararse  
 手 ~の上側 から 手 ~の下側 から 血 流れる
- 46 シンキエコツ。 シリキ チキ  
 shinkiekot. / Shirki chiki  
 sinki ekot. sirki ciki  
 疲れ ~で死ぬ 様子である したら
- 47 ラウキミナ チウエスイエ。  
 raukimina / chiuweshuye.  
 rawki-mina ci=uesuye.  
 含み笑い 私・~を揺らす(楽しむ)
- 48 オロフノスイ コシネ テレケ チコイッケウカン  
 Orowanoshui / koshne terke / chikoikkeukan  
 orowano suy kosne terke ci=ko-ikkew-kan-  
 それから また 軽い 跳躍 私・~と共に・腰 ~の上
- 49 マトウニタラ、 ニツネ パウセ、 パウセニツカン  
 matunitara, / nitne pause, / pausenitkan  
 -matun -itara, nitne pawse, pawse nit kan  
 起き上がる・~し続けている 性悪である 鳴き声 鳴き声 棒 ~の上
- 50 チケツケケツケ チコアリキキ。  
 chikekkekekke / chikoarikiki.  
 ci-kekkekkeke ci=koarikiki.  
 される・~を何度も折る 私・~にがんばる
- 51 キプネコロカ オキキリムイ シンキ ルウエ オアラリサム、  
 Kipnekorka / Okikirmui / shinki ruwe / oararisam,  
 ki p ne korka Okikirmuy sinki ruwe oarar isam,  
 けれども オキキリムイ 疲れる こと 全く ない
- 52 エアラカパラペ エイトウマモロ ノイエ カネ  
 earkaparpe / eitumamor / noye kane  
 ear kaparpe e-i-tumam-or-noye kane  
 一つだけの 薄手の着物 ~で・それ・~の胴・~の中・~をよじる しなから
- 53 チポコナンペ コホクシホクシ、 イキ アイネノ  
 chipokonanpe / kohokushhokush, iki aineno  
 cipo-konanpe-ko-hokus-hokus, iki ayneno  
 舟を漕ぐ・ようにあるもの・~に何度も倒れる する したあげく

励まし合ひながら勇ましく舟を漕いで  
 互いに励ましあいながら丈夫な權を折れんばかりに漕いで  
 as they paddled so hard I thought their oars would break,

居りましたが、と、ある時シユブンラムカは  
 いましたが、いつの間にかスブンラムカ  
 but in no time Supunramka began

手の上から手の下から血が流れて  
 の手の上からも下からも血が流れて  
 bleeding from above his hand and below his hand

疲れてたふれてしまひました、それを見て  
 疲れて倒れてしまひました。その様子を見て  
 and fell over exhausted. Seeing this,

ひそかに私は笑ひました。  
 私は心の中で笑みを浮かべました。  
 I smiled inwardly.

それからまた軽い足取で腰やはらかに  
 それからまた腰を張り上げて軽々と跳び  
 Once again, I lifted up my haunches and jumped nimbly,

飛びまはり重い調子でかたい木片を  
 棒を何本も折るようなひどい吠え声  
 leaping and barking as hard as I could, while letting out a horrible howl

ポキリポキリと折る様に叫び精を出しました。  
 をたてながら一生けん命跳んだり吠えたりしました。  
 like the sound of countless sticks breaking,

けれども、オキキリムイは疲れた様子は少しも無い。  
 けれども、オキキリムイは疲れた様子を全く見せず  
 but Okikirmui showed no sign of tiring.

一枚の薄物を体にまとひ、  
 薄い着物一枚を身にまとって  
 Dressed in only a thin garment,

舟を漕いでゐます、そのうちに  
 力いっぱい舟を漕いでいました。そうやっていたところ  
 he paddled with all his might. Eventually,

- 54 テクトウイポク タ コロ カンチ チオアラカイエ。  
 tektuipok ta / kor kanchi / chioarkaye.  
 tek tuypok ta kor kanci ci-oar-kaye.  
 手 ~の下側 で ~を持つ かじ される・全く・~を折る
- 55 シリキ チキ、シンキエコツ サマユンクル  
 Shirki chiki, / shinkiekot / Samayunkur  
 sirki ciki, sinki ekot Samayunkur  
 様子である したら 疲れ ~で死ぬ サマユンクル
- 56 コテツテレケ コロ カンチ エシカリ シネン ネ カネ  
 kotetterke / kor kanchi / eshikari / shinen ne kane  
 kotetterke kor kanci esikari sinenne kane  
 ~にとびつく ~の かじ ~をつかむ 一人で しながら
- 57 チポコナンペ コホクシホクシ。  
 chipokonanpe / kohokushhokush.  
 cipo-konanpe-ko-hokus-hokus.  
 舟を漕ぐ・ようにあるもの・~に何度も倒れる
- 58 チヌカッチキ、チコロ ウエンプリ ウンコサンコサン。  
 chinukatchiki, / chikor wenpuri / unkosankosan.  
 ci=nukar ciki, ci=kor wen puri un=kosan-kosan.  
 私・~を見る したら 私・~の 悪い 性格 私・~に出る出る
- 59 ニツネパウセ パウセニツカン チケツケケツケ、  
 nitnepause / pausenitkan / chikekkekekke,  
 nitne pawse pawse nit kan ci-kekke-kekke,  
 性悪である 鳴き声 鳴き声 棒 ~の上 される・~を何度も折る
- 60 コシネテレケ チコイツケウカン マトウニタラ、  
 kosneterke / chikoikkeukan / matunitara,  
 kosne terke ci=ko-ikkew-kan -matun -itara,  
 軽い 跳躍 私・~と共に・~の腰・~の上・起き上がる・~し続けている
- 61 アリキキアシ シリウエン ニツネイ セレマカ チウシ。  
 arikikiash / shirwen nitnei / sermaka chiush.  
 arikiki=as sirwen nitne i sermaka ci=us.  
 かんばる・私 天気が悪くなる 性悪である 者 ~の背後 私・~に付く

手の下で其の持つてみた楫が折れてしまいました。  
 手の下にあった舵がバリンと折れてしまいました。  
 the oars beneath his hand snapped.

すると、疲れ死んだサマユンクルに  
 そこで、疲れて死んでしまったサマユンクル  
 So he leaped over to Samayunkur, who had

躍りかかり其の持つてゐる楫をもぎとつてたつた一人で  
 の所に跳んでいって、その舵をつかんで一人で  
 died from exhaustion, and grabbed Samayunkur's oars and began

舟を漕ぎました。  
 力いっぱい舟を漕ぎました。  
 paddling alone with all his might.

私はそれを見ると、持前の悪い心がむらむらと出て来ました。  
 それを見た私に持ち前の悪い心がむらむらとわき起こりました。  
 Seeng this, my wicked nature surged up from inside.

重い調子でかたい木片をポキリポキリと折る様に叫び  
 棒を何本も折るようなひどい吠え声を立てて  
 Letting out a horrible howl like the sound of countless sticks breaking,

軽い足取りで腰やはらかにかけまはり  
 腰を張り上げて軽々と跳びながら  
 I lifted up my haunches and jumped nimbly

精を出して暴風の魔に声援しました。  
 一生けん命悪天候をもたらす魔神に加勢しました。  
 and encouraged the Storm Demon with all my might.

## 〔言葉の説明〕

## ・ハイクンテレケ ハイコシテムトゥリ haykunterke haykositemturi (1行目)

サケへ(折り返し句)のハイクンテレケ haykunterke とは、どんな意味があるのでしょうか。< haykun-terke と分けて、テレケ terke (跳ぶ) という言葉が入っていることは確かです。しかし、その前のハイクン haykun とは何か分かりません。大胆に haykun < yaykur (自分の影) と考えてみると「自分の影が跳ぶ」となりますが、これは単なる推定の域を出ません。もう一つのハイコシテムトゥリ haykositemturi は < hayko-si-tem-turi と分けてみて、後半の tem-turi (腕を伸ばす) は、何となく分かるのですが、その前半の haykosi が分かりません。これも大胆に < yayko-si-tem-turi (自分で、自らの腕を伸ばす) と推定してみましたが、あまりに意味がすっきりしません。

このようにサケへは、伝承の途中で変化したのか、意味のよく分からなくなったものが多くあります。

## ・モシレサニ mosiresani (2行目)

モシレサニ mosiresani は < mosir-e-san-i (大地・そこで・前に出る・もの) と分析でき、「大地から突き出たもの=岬」という意味です。エサン esan(i) だけでも「岬」という意味があります。

## ・ネト neto (5行目)

ネト neto とありますが、他の地域では、ノト noto 「風(なぎ)」といます。ノト noto は、< no-to (良い・海) と分析できます(知里真志保、地名アイヌ語小辞典)。

## ・レソウシ resous (7行目)

レソウシ resous は、< re-so-us (三つの・座・～に付く) で、「三つの座席がある」つまり「三人乗りする」という意味。

## ・ウェンプリ wen puri (8行目)

ウェン wen は「悪い」。プリ puri は、日本語の「振り」から入った言葉ですが、意味が少し変化し、「習慣。態度」。ウェン プリ wen puri で「怒りの気持」という意味になります。この場合には、知里幸恵の訳「悪い心」が適切。

## ・ウンコサンコサン un=kosankosan (8行目)

ウン un= は、「私に」。コサンコサン kosan kosan は、< ko-san-ko-san (に・出る・に・出る) で「私に(悪い心)がどんどん出てくる」こと。

## ・エサンノツ esannot (9行目)

エサンノツ esan not は、< e-san-not(そこへ・出る・あご)で「岬」のこと。ノツ not は「あご」。その出張った形から「岬」という意味になったもの。

## ・ヘペライ、ヘパシ heperay, hepasi (10行目)

ヘペライ heperay は、< he-pe-e-raye (頭・川上・に・移動させる) で、「川上に」という意味になったもの。ヘパシ hepasi は、< he-pa-asi (頭・川下・立てる) で「川下に」という意味になったもの。

## ・チコイッケウカン マトウニタラ ci=koikkewkan-matunitara (11行目)

これを分析すると、< ci=ko-ikkew-kan-matun-itara (私・～と共に・～の腰・～の上・起きあがる・～し続けている) で、「(軽々とした跳躍)と共に私の腰の上が起きあがり続けている」。短距離走の手を着いて行うスタートのように、跳び出す前に腰を高く上げる姿勢をいったものではないでしょうか。腰を張り上げて力をためては、ピョーンと跳ぶ。そして、-itara (継続を表わす) が付いているので、それを何回もやり続けるということです。

マトウン matun は他に例のない難しい単語ですが、ここでは「起き上がる」という意味の語根「mat」に、他動詞の「un ～にある」が付いたものと解釈しました。

## ・ニツネパウセ nitne pawse (12行目)

ニツネ nitne は < nit-ne (棒・のようである) で、「硬い」ことを意味します。「硬い」ことは「柔らかい」ことと較べて、よくない(悪い)とされます。そのため魔神は、ニツネカムイ nitne kamuy (硬い神)といわれます。パウセ pawse は、< paw-se (パウ・という) で、「パウというキツネの鳴き声をたてる」こと。ニツネパウセ nitne pawse で「硬い鳴き声をたてる(こと)」→「悪い鳴き」。

## ・パウセニツカン チケツケケツケ pawse nitkan ci=kekkekekke (12行目)

パウセニツカン pawse nitkan は、< paw-se-nit-kan (パウ・という・棒・上) で、この場合、カン kan は音節をふやすため、意味的には無くてもいいので、「キツネの鳴き声の棒」という意味。

チケツケケツケ ci=kekkekekke は、< ci=kekke-kekke (私・を何本も折る・を何本も折る)。全体で、「(その悪い)鳴き声の棒を私はバリバリ折る」という意味。鳴き声を棒を沢山折ることで表現する点がとても面白い。けれども、その音は、知里幸恵の訳のように「重い調子」で、何となく想像できそうです。

## ・シリウエン ニツネイ sirwen nitne i (13行目)

シリウエン sirwen は「天気が悪い」こと。ニツネイ nitnei < nitne-i (悪い・もの) → 魔。ひらたくいえば「悪天候をもたらす魔」。これを知里幸恵は「暴風の魔」と訳しています。

## ・スナネ supne (15行目)

スナネ supne は < sup-ne (渦巻・である) → つむじ風。竜巻。

## ・ホントモタ hontomo ta (16行目)

ホントモ hontomo は「～の途中」。ホントモタ hontomo ta は熟語で、「～した途端。～するやいなや」。



・カンナアトウイ チポクナレ kanna atuy cipoknare (17行目)

カンナ アトウイ kanna atuy (上方の・海) →海の上層部。チポクナレ cipoknare < ci-pokna-re (～される・下になる・させる) →下になる。全体で、「海の上層部が下になる」こと。激しい竜巻で海が攪拌されること。その反対に、ポクナ アトウイ チカンナレ pokna atuy cikannare 「海の下層部が上になる」。

・レプンクラトウイ repun kur atuy (19行目)

レプンクル repun kur (沖の人) →外国人。全体で、「外海」のこと。反対は、ヤウンクル アトウイ yaun kur atuy (内陸の人の海) →自国の人の海 → 「内海」

・ウエウシ ueusi (20行目)

ウエウシ ueusi は < u-e-us-i (互いに・頭・が付く・所) →出会う。

・ルヤンペ ruyanpe (21行目)

ルヤンペ ruyanpe は、< ruy-an-pe (激しく・ある・もの) 嵐。この場合は、荒れ狂う波。

・シンネ sinne (21行目)

シンネ sinne は、< sir-ne (様子・のようだ) ですが、意味は「～になって」。ここでは、「山のようになって」という意味になります。

・コトソサッキ kotososatki (22行目)

コトソサッキ kotososatki は、< ko-tos-os-atki (に・散乱・反復・自動詞化) ～をかき乱す。トシ tos は、散乱したり荒れることを表わす擬態語。「(舟の上) をメチャクチャにかき乱す」こと。

・フムセ humse (24行目)

フムセ humse は、< hum-se (フム・という) 力を入れながらウンという。ふんばったり力んだりするときウンと声を出すこと。

・コホクシホクシ kohokushokus (24行目)

コホクシホクシ kohokushokus は、< ko-hokus-hokus (～に倒れ、倒れする)。櫂 (かい) を漕ぐときにグイとオールを引いたとき後に倒れるようになること。ホクシ hokus は、「ひっくりかえる」という意味で、< ho-kus (尻・を通る) で、着物など筒状のものをひっくりかえして裏にすると、袖尻を通してひっくり返すことから。

・チキ ポカイキ ci=ki pokayki (26行目)

チキ ci=ki は、「私が～をする」。ポカイキ pokayki は poka と同じ意味で「だけでも」。全体で「私が～をしただけでも」。

・ウァシ upsi (26行目)

原文「upsh」は、おそらく誤植で、本来の形は、ウァシ upsi。知里真志保は、この語を

upsi < up-se (ふところ・を背負う) →「うつぶせになる」と分析しています。

・オキラシヌ okirasnu (27行目)

オキラシヌ okirasnu は、< o-kir-asnu (尻・力・すぐれている) →腰の力が強い。

・カンペ kanpe (29行目)

カンペ kanpe は、< kan-pe (上方の・水) →水面。

・セレマカ チウシ sermaka ci=us (33行目)

セレマカ ウシ sermaka us は、直訳すると「～の背後に付く」で、そこから「かげで守る。神が守護する」という意味になったもの。sermak は < ser-mak (身幅・の後側) →背後。人間や村の背後に付くことは、その人や村を守ったり、不運にあわないようにするという考え方があります。この場合は、キツネの神さまが、竜巻を起こす魔の後だてになって加勢すること。

・シンキエコツ sinki ekot (36行目)

シンキエコツ sinki ekot は < sinki e-kot (疲れ・で・死ぬ) 疲労で死ぬ、こと。

・ラウキ ミナ チウエスイエ rawki mina ci=uesuye (37行目)

ラウキ rawki は、他の地域では、ラウケ rawke (深い・所) といいます。「深い所」は「心の中」という意味でもあります。ラウキ ミナ rawki mina は心の中での笑い。ウエスイエ uesuye は < u-e-suye (一緒に・～で・揺らす) →で心を揺さぶる。全体で、「私は、心の中で笑みを浮かべる」「内心ほくそ笑む」。

・エトウンネ etunne (42行目)

エトウンネ etunne < e-tun-ne (～で・二人・になる) → (オキリリムイとスブンラムカ) で二人になる。56行目にシネンネ sinen ne (一人になる) が出ています。一人、二人、三人という言い方は、シネン sinen、トウン tun、レン ren となります。

・ウコオロスツケ トゥマシヌ アッサァ ペコトポ ペコレウパ

ukoorsutke tumasnu assap pekotopo pekorewpa (43行目)

ウコオロスツケ ukoorsutke は、< uko-orsutke (互いに・励ます) 互いに励ましあう。トゥマシヌ tumasnu は、< tum-asnu (力・すぐれている) 丈夫だ、健康だ、強い。ペコトポ pekotopo は、< pe-ko-topo (水・に対して・を返す) →水に(櫂)を返す。ペコレウパ pekorewpa は、< pe-ko-rewpa (水・に対して・をしなわせる) →水に(櫂)をしなわせる。レウパ rewpa はレウエ rewe の複数形。全体で「互いに励ましあい丈夫な櫂を水に対して返したり、しなわせたりする」という意味。

・エアラカパラペ エイトウマモロ ノイエ ear kaparpe eytumamor-noye (52行目)

エアラ ear は < e-ar (～で・一つ) →一つだけ(の)。カパラペ kaparpe < kapar-pe (薄い・もの) 薄衣。エイトウマモロノイエ eytumamornoye は、< e-i-tumam-or-noye (～で・

もの・からだ・所・をねじる) → (薄衣) を体にまとう。全体で、「一枚だけの薄衣を身にまとう」。

・カンチ チオアラカイエ kanci cioarkaye (54 行目)

カンチ kanci は、日本語の舵 (かじ) から入った言葉。チオアラカイエ cioarkaye は、  
 < ci-oar-kaye (～される・全く・を折る) →完全に折れる。

[参考]

・テシナタラ tesnatara (5 行目)

テシナタラ tesnatara は、< tes-natara (編み連らねた・状態の持続) →ずっと連らなっている。広々としている。テシ tes は、テセ tese (ござ編みをする) という動詞の語根であり、テシ tes (魚をとるヤナ) とも関連する言葉。「編み連らねる状態」を指す言葉だと考えられます。

・アニサプシカア a=nisapuska p (20 行目)

アニサプシカア a=nisapuska p は、< a=nisap-us-ka p (される・突然・に付く・させるもの) →「突然出会ったもの」急変。オキキリムイたちの漁舟が外海と内海が合流した所にさしかかると急変 (渦?) が波の間でぐるぐる回る、という意味ではないでしょうか。

・チポコナンペ cipo-konanpe (24 行目)

チポコナンペ cipo-konanpe は、< cip-o-kon-an-pe (舟・に乗る・ようで・ある・もの) →舟を漕ぐようであるもの。全体で、「舟を漕ぐ様子は (櫂を引いて) 倒れ倒れする」という意味になるのではないのでしょうか。

コラム (6)

「死」とは

シンキエコツ sinkiekot という言葉を知里幸恵は「疲れて倒れる」とか「疲れ死ぬ」とも訳しています。「倒れる」と「死ぬ」では全く違います。どちらが本当なのでしょう。

この話とよく似たストーリーをもつ類話 (千歳の中本ムツ子さんが歌ったもの) でも、やはりキツネの悪さで舟を漕ぎ疲れて死ぬ場面が出てきます。そのとき、死んだ小サマユンクルはドンと踏まれて蘇生し「まだ寝ていたかったのにもう起こしたの」と目をこすって起きてくる場面が出てきます。これ以外のところでも簡単に死んで、またすぐ生き返る描写が多く出てきます。カムイユーカーの中で「死」はどうしてこのようにまるで眠っていたり、倒れていたかのように描かれるのでしょうか。

それは、魂が肉体から出入りすることと関係があるようです。肉体から一時的にでも魂が抜け出れば、死を意味します。そして、魂が肉体に戻れば、蘇生したことを意味します。つまり、死とは、肉体から魂が抜け出した状態をいうのです。そして抜け出した魂がまた肉体に戻ることはよくあることなので、またすぐに生きかえることになるのです。

このように疲れて一時的にせよ倒れることは、魂が抜けた状態、つまり死ととらえられるのです。また、ひどく驚いたときも口や鼻から魂が抜け出ると考えられていて、魂が抜け出した状態が続くと死ぬと考えられています。そのため驚くときは、魂が抜け出ないように口や鼻をふさいだといわれています。また万が一魂が抜け出した場合は、その魂を肉体に戻す儀式も行われました。

## 第3話(その2)

### キツネが自らをうたった謡

「ハイクンテレケ ハイコシテムトウリ」

(62～121 行目まで)

#### 〔物語とその背景〕

キツネの悪さにさんざん痛めつけられ、ついにオキキリムイは舟の上に仁王立ちになり、はるかかなたの岬の上の私、キツネを、嵐を起こす張本人だと見抜いて、その目の中をギツと見すえ、顔面に怒りを浮かべてヨモギの弓矢を取り出し、私キツネのえり首を射抜きました。霊力のあるヨモギの矢は、キツネの全身をまるで樺の皮が燃え縮むような痛みで苦しめます。そして死んだキツネの上あごの骨はオキキリムイの便所の土台に、下あごの骨は、その妻の便所の土台に使われました。そのため夜も昼も悪臭に悩まされながら私キツネは非業の死をとげたのでした。位の高い黒ギツネではありませんが、悪い心を抱いたために、そのようなひどい死をとげたのでした。これからのキツネは決してこのような悪心を抱いてはならないと黒ギツネの神さまは物語りました。

というのがあら筋です。ところで、類話では、位の低い毛もまばらな見すぼらしいキツネが、このような悪さを働く話が出てきます。このテキストでは、なぜ位の高い、つまり物事の分別のそなわった立派な黒ギツネがこのような悪さを働いたのでしょうか。そのへんはよくわかりません。

各地の伝承の中に黒ギツネのことが出てきます。新冠では、黒ギツネが祭壇で騒ぐのは津波の知らせである、とか、千歳では、黒ギツネの頭骨を木幣に包んで飾っておき、漁の豊凶を占ったといえます。黒ギツネは天災を予知して人間に知らせる役目をもっていたことがわかります。またキツネの下あごの骨を使って占いもしました。こうしてみると、黒ギツネは、人間に天災の予知などで役に立つことで位の高いキツネとされたのでした。いずれにせよキツネは、善い面と悪い面の両方を持っていて、その強い（霊）力を使って悪さもすれば、人間に役立つこともする存在なのでしょう。このことについては、コラム（7）でもう少し詳しく述べます。

- 62 キ アイネノ サマユンクル コロ カンチ ナツカ  
 Ki ainenno / Samayunkur / kor kanchi nakka  
 ki ayneno Samayunkur kor kanci nakka  
 ~する したあげく サマユンクル ~の かじ も
- 63 チオアラカイエ、オキキリムイ スプンラムカ  
 chioarkaye, / Okikirmui / Shupunramka  
 ci-oar-kaye, Okikirmuy Supunramka  
 される・全く・~を折る オキキリムイ スプンラムカ
- 64 コテツテレケ、コロ カンチ エシカリ、  
 kotetterke, / kor kanchi / eshikari,  
 kotetterke, kor kanci esikari,  
 ~に飛びかかる ~の かじ ~をつかむ
- 65 トウマシヌ アッサブ ペコトポ ペコレウエ。  
 tumashnu assap / pekotopo / pekorewe.  
 tumasnu assap pe-ko-topo pe-ko-rewe.  
 丈夫な 權 水に対して~を回す 水に対して~をたわめる
- 66 キブネ コロカ ネア カンチ カ ルヤンペ カイエ、  
 Kipne korka / nea kanchi ka / ruyanpe kaye,  
 ki p ne korka nea kanci ka ruyanpe kaye,  
 けれども その かじ も しけ ~を折る
- 67 タタ オッタ オキキリムイ チポシケタ  
 tata otta / Okikirmui / chiposhketa  
 tata or ta Okikirmuy cip oske ta  
 さあ、そこで オキキリムイ 舟 ~の中 で
- 68 チアットウシテツカ、ユブケ レラ レラ トウムタ  
 chiashtustekka, / yupke rera / rera tumta  
 ci-astustek-ka, yupke rera rera tum ta  
 される・立ちつくす・~させる 激しい 風 風 ~の中 で
- 69 センネカスイ アイヌピト ウンヌカラ クニ  
 sennekashui / ainupito / unnukar kuni  
 senne ka suy aynu-pito un=nukar kuni  
 ちっとも~ない も また 人間 私・~を見る と
- 70 チラム アワ モシレサニ カムイエサニ  
 chiramu awa / moshiresani / kamuiesani  
 ci=ramu awa mosir esani kamuy esani  
 私・~を思う したところ 大地 岬 立派な 岬
- 71 タツカシクン チシクノシキケ エニトモモ、  
 tapkashikun / chishiknoshkike / enitomomo,  
 tapkasike un ci=sik-noskike enitomomo,  
 (小高い所)の上 に向かって 私・~の目の真ん中 ~をじっと見つめる
- 72 イポロ コン ルウエ ピリカ ロクペ コロ ウエンプリ  
 ipor kon ruwe / pirka rokpe / kor wenpuri  
 ipor kor ruwe pirka rok pe kor wen puri  
 容貌 ~を持つ こと 美しい した(複)の ~の 悪い 性格

そうしてるうちにサマユンクルの舵も  
 そうしているとサマユンクルの舵も  
 Eventually, Samayunkur's oars also

折れてしまひました。オキキリムイはシユプンラムカに  
 バリンと折れてしまい、オキキリムイはスプンラムカの所  
 broke with a crunch, so Okikirmui leaped over to Supunramka

躍りかゝりその楫をとつて  
 に跳んでいってその舵を取って  
 and took his oars

勇ましく舟を漕ぎました。  
 丈夫な權を折れんばかりに漕ぎました。  
 and paddled furiously, almost to the point of breaking them.

けれども彼の楫も波に折られてしまひました。  
 けれどもその舵も荒波に折られてしまひました。  
 But those oars also broke in the rough surf.

そこで、オキキリムイは舟の中に  
 ことここに至って、オキキリムイは舟の中で  
 So, finally, Okikirmui planted his feet wide apart

立ちつくして、烈しい風のうちに  
 仁王立ちになって、激しい風を受けながら、  
 and stood firm in the boat. I never dreamed that a human would sense

まさか人間の彼が私を見つけようとは  
 まさか人間ごときものが私がいることを見抜くなどとは  
 my presence in the middle of such a fierce wind, but he turned to me

思はなかつたに、国の岬、神の岬の  
 思ってもいなかったのに、大地の先の岬、立派な岬  
 in my place above the cape at the end of the earth, the magnificent cape,

上の、私の眼の奥を見つめました。  
 の上にいる私の眼の中を見つめたのです。  
 and looked me straight in the eye.

今までやさしかった顔に怒りの色を  
 それまで柔和だった彼の顔には怒りの気持が  
 His face, which had worn a gentle expression,

- 73 エナントウイ カ エパラセシ、プシトツタ オロ オイキ カネ  
 enantui ka / eparsere, / pushtotta oro / oiki kane  
 e-nan-tuyka-eparsere, pustotta oro-oiki kane  
 ~の先・顔・~の上側・~で~を沸き起こらせる 海用のカバン ~の中をまさぐる しながら
- 74 ヘマンタ サンケ インカラシ アワ ノヤボンク  
 hemanta sanke / inkarash awa / noyaponku  
 hemanta sanke inkar=as awa noya pon ku  
 何 ~を出す 見る・私 したところ ヨモギ 小さい 弓
- 75 ノヤポナイ サナサンケ。  
 noyaponai / sanasanke.  
 noya pon ay sanasanke.  
 ヨモギ 小さい 矢 ~を出す
- 76 シリキ チキ ラウキミナ チウエスイエ、  
 Shirki chiki / raukimina / chiuweshuye,  
 sirki ciki rawki-mina ci=uwesuye,  
 様子である したら 含み笑い 私・~を揺らす(楽しむ)
- 77 「アイヌピト ネプ キ コ アシトマ ヘキ、  
 “Ainupito / nep ki ko / ashtoma heki,  
 “ainu-pito nep ki ko astoma he ki,  
 人間 何 ~をする すると 恐ろしい か ~をする
- 78 エネ オカイ ノヤポナイ ネプ アエカラペ タアナ。」  
 ene okai / noyaponai / nep aekarpe taana.”  
 ene okay noya pon ay nep a=ekar pe ta an ya.”  
 そのように ある(複) ヨモギ 小さい 矢 何 人・~で~をするもの なのか
- 79 ヤイヌアシ カネ タパン エサンノツ  
 yainuash kane / tapan esannot  
 yaynu=as kane tapan esannot  
 思う・私 しながら この 岬
- 80 モシレサニ カムイエサニ タツカシケ  
 moshiresani / kamuiesani / tapkashike  
 mosir esani kamuy esani tapkasike  
 大地 岬 立派な 岬 (小高い所)の上
- 81 トオ ヘペライ トオ ヘパシ コシネテレケ  
 too heperai / too hepashi / koshneterke  
 too heperay too hepasi kosne terke  
 ずーっと 川上へ ずーっと 川下へ 軽い 跳躍
- 82 チコイッケウカン マトゥニタラ、 ニツネパウセ  
 chikoikkeukan / matunitara, / nitnepause  
 ci=ko-ikkew-kan -matun -itara, nitne pawse  
 私・~と共に・~の腰・~の上・起き上がる・~し続けている 性悪である 鳴き声
- 83 パウセニツカン チケツケケツケ。  
 pausenitkan / chikekkekekke.  
 pawse nit kan ci-kekke-kekke.  
 鳴き声 棒 上 される・~を何度も折る

あらはして、鞆をいちつてみたが  
 顔中に現れてきました。オキキリムイは皮製の容れ物の中をまさぐっていたので  
 now showed rage. Okikirmui groped around in his leather bag,

中から出したものを見ると、蓬の小弓と  
 私は何が出てくるのか見ているとヨモギの小さな弓や  
 and as I watched to see what would come out, he pulled out

蓬の小矢を取り出しました。  
 ヨモギの小さな矢を取り出しました。  
 a little mugwort bow and a little mugwort arrow.

それを見てひそかに私は笑ひました。  
 それを見て私は心の中で笑みを浮かべました。  
 Seeing this, I smiled inwardly and thought,

「人間なぞ何をしたつて、恐い事があるものか、  
 「人間などが何をしようと、恐いことなどあるものか。  
 "That human can do whatever he wants, I'm not afraid.

あんな蓬の小矢は何に使ふものだらう。」  
 あんなヨモギの小さな矢など何の役に立つというのか」  
 What does he think he's going to do with a little mugwort arrow like that?"

と思つてこの岬  
 と私は思つて、この岬  
 So above this cape,

国の岬、神の岬の上を  
 大地の先の岬、立派な岬の上を  
 the cape at the end of the earth, the magnificent cape,

ずーっと上へずーっと下へ軽い足取りで  
 はるか上手へ、はるか下手へと軽々と跳び  
 I lifted up my haunches and jumped nimbly

腰やはらかにかけまはり、重い調子で  
 私は腰を張り上げながら、ひどい吠え声  
 far to the east, far to the west, letting out a horrible howl

かたい木片をポキリポキリと折る様にパウ、パウと叫び  
 何本もの棒を折るような吠え声をたて、  
 like the sound of countless sticks breaking,

- 84 シリウエン ニツネイ チコプンテク。  
shirwen nitnei chikopuntek.  
sirwen nitne i ci=kopuntek.  
天気が悪くなる 性悪である 者 私・～をねぎらう
- 85 ラボケタ オキキリムイ エアク ポナイ エク アイネ  
Rapoketa / Okikirmui / eak ponai / ek aine  
rapoke ta Okikirmuy eak pon ay ek ayne  
～の間 に オキキリムイ ～を射る 小さい 矢 来る したあげく
- 86 チオクストウフ コロコサヌ。  
chiokshutuhu / kororkosanu.  
ci=oksutuhu ko-ror-kosanu.  
私・～のえり首 ～でズブツという
- 87 パテクネテク ネコンネヤ チエラミシカレ。  
Pateknetek / nekonneya / chieramishkare.  
patek ne tek nekon ne ya ci=eramiskare.  
それだけ ～である して どのように ～である のか 私・～がわからない
- 88 フナクパケタ ヤイシカルナシ インカラシ アフ  
Hunakpaketa / yaishikarunash / inkarash awa  
hunakpaketa yaysikarun=as inkar=as awa  
どれほど経ってか 気が付く ・私 見る ・私 したところ
- 89 ピリカ シリピリカ チシレアヌ、アトウイソ カシ  
pirka shirpirka / chishireanu, / atuiso kashi  
pirka sirpirka ci-sireanu, atuy so kasi  
よい 天気が良い ある 海 面 ～の上
- 90 テシナタラ、オキキリムイ コン レパチプ オアラリサム。  
teshnatara, / Okikirmui / kon repachip / oararisam.  
tesnatara, Okikirmuy kor repa cip oarar isam.  
平らかである オキキリムイ ～の 沖漁 舟 全く ない
- 91 ネコンネ フミ ネ ナンコラ、チカンキタイエ ワノ  
Nekonne humi / ne nankora, / chikankitaye wano  
nekon ne humi ne nankora, ci=kankitaye wano  
どのように ～である 感じである のだろうか 私・～の頭のでっぺん から
- 92 チポキシリケ パクノ タツカララセ シコパヤラ。  
chipokishirke pakno / tatkararse / shikopayar.  
ci=pokisirke pakno tat kararse sikopayar.  
私・～の下の所 まで 樺の皮 燃え縮む かのようである
- 93 センネカスイ アイヌピト エアク ポナイ エネ ウニユニンカ クニ  
Sennekashui / ainupito / eak ponai / ene uniyuninka kuni  
senne ka suy aynu-pito eak pon ay ene un=iyuninka kuni  
ちっとも～ない 人間 ～を射る 小さい 矢 このように 私・～を痛めつける と
- 94 チラムアイ オロワノ ホチカチカアシ、  
chiramuai / orowano / hochikachikaash,  
ci=ramu a i orowano hocikacika=as,  
私・～を思う した のに それから 足をばたばたさせてもがき苦しむ・私

暴風の魔をほめた、へました。  
悪天候をもたらす魔神を励ましました。  
and encouraged the Storm Demon.

其中に、オキキリムイの射放した矢が飛んで来たが  
そうしているとオキキリムイが射た小さな矢が飛んできて  
As I was doing that, Okikirmui's little arrow came

ちょうど私の襟首のところへ突きささりました。  
私のえり首にズブと命中しました。  
and struck me right in the scruff of the neck.

それつきりあとどうなつたか解らなくなつてしまひました。  
それきり、私は意識を失いどうなつたか分からなくなりました。  
At that moment I lost consciousness, and that is the last thing I remember.

ふと気がついて見ると  
ふと気がついてみると  
When I came to and looked around,

大そう好いお天気で、海の上は  
実によい天気で、海の上は  
the weather was beautiful and there was not a single wave

広々として、オキキリムイの漁舟も何もありません。  
波一つなく、オキキリムイの漁舟は全く見あたりません。  
on the sea, and Okikirmui's fishing boat was nowhere to be seen.

何うした事か私は頭のさきから  
どういふわけか私の頭の上から  
For some reason, from the top of my head to the tip of my toes,

足のさきまで雁皮が燃え縮む様に痛みます。  
つま先までまるで樺の木の皮が燃え縮むようなありさまで。  
it was as though I was shrinking like a piece of burning birch bark.

まさか人間の射た小さい矢がこんなに私を苦しめ  
まさか人間の射た小さい矢がこんなにも私を痛めつけるなどとは  
I never dreamed that a little arrow shot by a human

やうとは思はなかつたのに、それから手足をもがき苦しみ  
思わなかつたのに、それから私は手足をバタバタさせてもだえ苦しみ  
could cause me so much pain, but after that I thrashed my arms and legs about, writhing in agony,

- 95 タパン エサンノツ モシレサニ カムイエサニ  
 tapan esannot / moshiresani / kamuiesani  
 tapan esannot mosir esani kamuy esani  
 この 岬 大地 岬 立派な 岬
- 96 タブカシケ トオ ヘペライ トオ ヘパシ ラヤヤイセアシ コロ  
 tapkashike / too heperai / too hepashi / rayayaiseash kor  
 tapkasike too heperay too hepasi rayayayse=as kor  
 (小高い所)の上 ずーっと 川上へ ずーっと 川下へ ひどく泣き叫ぶ・私 しながら
- 97 ライエパサシ、トカプ ヘネ クンネ ヘネ シクヌアシ ランケ  
 raiyepashash, / tokap hene / kunne hene / shiknuash ranke  
 ray-epas=as, tokap hene kunne hene siknu=as ranke  
 死に走りする・私 昼 でも 夜 でも 生きる・私 何度も～する
- 98 ライアシ ランケ キ アイネノ ネコンネヤ  
 raiash ranke / ki ainenno / nekonneya  
 ray=as ranke ki ayneno nekon ne ya  
 死ぬ・私 何度も～する ～する したあげく どのように ～である のか
- 99 チエラミシカレ。  
 chieramishkare.  
 ci=eramiskare.  
 私・～がわからない
- 100 フナクパケタ ヤイシカルナシ インカラシ アフ、  
 Hunakpaketa / yaishikarunash / inkarash awa,  
 hunakpaketa yaysikarun=as inkar=as awa,  
 どれほど経ってか 気が付く・私 見る・私 したところ
- 101 ポロ シトウンペ アスルペウトウツ タ オカヤシ カネ オカヤシ。  
 poro shitunpe / ashurpeutut ta / okayash kane / okayash.  
 poro situnpe asurpe utur ta okay=as kane okay=as.  
 大きい 黒ギツネ 耳 ～の間 に いる(複)・私 しながら いる(複)・私
- 102 トウツコ パクノ シラン アフ オキキリムイ カムイシリ ネ  
 Tutko pakno / shiran awa / Okikirmui / kamuishiri ne  
 tutko pakno siran awa Okikirmuy kamuy siri-ne  
 二日 ほど 経つ したところ オキキリムイ 神 のように
- 103 アラキ ワ サンチャ オッタ ミナ カネ エネ イタキ：——  
 arki wa / sancha otta / mina kane / ene itaki：——  
 arki wa sanca or ta mina kane ene itak i：——  
 来る(複) して 口元に笑みを浮かべて このように 話す こと
- 104 「イラマシレ モシレサニ カムイエサニ  
 “Iramashire / moshiresani / kamuiesani  
 “iramasure mosir esani kamuy esani  
 おもしろい 大地 岬 立派な 岬
- 105 タブカシケ エプンキネ シトウンペ カムイ、  
 tapkashike / epunkine / shitunpe kamui,  
 tapkasike epunkine situnpe kamuy,  
 (小高い所)の上 ～を見守る 黒ギツネ 神

此の岬、国の岬、神の岬  
 この岬、大地の先の岬、立派な岬  
 and above this cape, the cape at the end of the earth, the magnificent cape,

の上を、ずーっと上へ、ずーっと下へ泣き叫びながら  
 の上を、はるか上手へ、はるか下手へと泣きわめきながら  
 far to the east, far to the west, sobbing at the top of my lungs,

もがき苦しみ、昼でも夜でも生きたり  
 狂ったように走り、昼も夜も生き返ったり  
 I ran about like a mad thing, being reborn and dying

死んだり、してゐる中に、何うしたか  
 死んだりを繰り返し、そのあげく、何がなんだか  
 over and over again, day and night, until finally,

わからなくなりました。  
 わからなくなり意識を失いました。  
 without the faintest idea what was happening, I lost consciousness.

ふと気がついて見ると、  
 ふとわれに返って辺りを見ると  
 When I came to and looked around,

大きな黒狐の耳と耳との間に私は居りました。  
 大きな黒ギツネの耳と耳の間に私はいました。  
 I found myself between the ears of a big black fox.

二日ほどたった時、オキキリムイが神様の様な様子で  
 そして二日ほどたった時、オキキリムイが神のような有様で  
 About two days later, Okikirmui came

やって来て、ニコニコ笑って言ふことには、  
 やって来て、口元に笑みを浮かべてこう言いました。  
 in the form of a god, and said with a grin:

「まあ見ばのよい事、国の岬、神の岬  
 「何と格好のよいこと、大地の先の岬、立派な岬  
 "Well, what a fine sight, the Black Fox God who keeps watch above

の上を見守る黒狐の神様は、  
 の上を見守る黒ギツネの神さまは、  
 the cape at the end of the earth, the magnificent cape;

- 106 ピリカプリ カムイプリ コロ アクス  
 pirkapuri / kamuipuri / kor akushu  
 pirka puri kamuy puri kor a kusu  
 よい 性格 神 性格 ~を持つ した ので
- 107 ライ ネヤッカ カトウピリカノ キ ルウエ オカイ  
 rai neyokka / katupirkano / ki ruwe okai."  
 ray ne yakka katu pirkano ki ruwe okay."  
 死 ~である しても 格好 よく ~をする こと だなあ
- 108 イタク カネ、チサパハ ウイナ フ、  
 itak kane, / chisapaha / uina wa,  
 itak kane, ci=sapaha uyna wa,  
 話す しながら 私・~の頭 ~を取る(複) して
- 109 ウンチセヘ タ アンパ フ、チカンナノツケウエ  
 unchisehe ta / ampa wa, / chikannanotkewe  
 un-cisehe ta anpa wa, ci=kanna-notkewe  
 ~の住む家 に ~を持ち運ぶ(複) して 私・ ~の上あご
- 110 ヤイコタ コロ アシンルイッケウ ネ カラ チポクナノツケウエ  
 yaikota kor / ashinruikkeu ne kar, / chipoknanotkewe  
 yaykota kor asinru ikkew ne kar, ci=poknanotkewe  
 自分で ~を持つ 便所 ~の腰 として ~を作る 私・ ~の下あご
- 111 マチヒ コロ アシンルイッケウ ネ カラ フ、  
 machihi kor / ashinruikkeu ne kar wa,  
 macihi kor asinru ikkew ne kar wa,  
 ~の妻 ~を持つ 便所 ~の腰 として ~を作る して
- 112 チネトパケ アナク ネエノ トイコムニン フ イサム。  
 chinetopake anak / neeno / toikomunin wa isam.  
 ci=netopake anak neeno toy-ko-munin wa isam.  
 私・ ~の体 は そのまま 土・と共に・腐る して しまう
- 113 オロワノ クンネ ヘネ トカプ ヘネ  
 Orowano / kunne hene / tokap hene  
 orowano kunne hene tokap hene  
 それから 夜 でも 昼 でも
- 114 シフラコウエナシ キ アイネノ トイライ ウエン ライ  
 shihurakowenash / ki ainenno / toirai wen rai  
 si-hura-kowen=as ki ayneno toy ray wen ray  
 糞・臭い・~を嫌う ・私 ~する したあげく ひどい 死 悪い 死
- 115 チキ。  
 chiki.  
 ci=ki.  
 私・ ~をする
- 116 パシタカムイ チネ ルウエ カ ソモネ アコロカ、  
 Pashtakamui / chine ruwe ka / somone akorka,  
 pasta kamuy ci=ne ruwe ka somo ne a korka,  
 端下 神 私・~である こと も ない ~である した けれども

善い心神の心を持つてゐたから  
 よい行い、立派な行いをする  
 when he does good deeds, splendid deeds,

死にざまの見ばのよい死方をしたのですね。』  
 死にざまも格好のよいものなのですね』  
 he also dies a fine-looking death."

言ひながら私の頭を取つて、  
 と言ひながら私の頭をつかんで  
 Saying this, he picked up my head

自分の家へ持つて行き私の上顎の骨を  
 自分の家に運んでいって、私の上あごの骨を  
 and took it to his own house and made my upper jaw

自分の便所のどだいとし、私の下顎を  
 自分の便所の土台にし、私の下あごの骨を  
 into a foundation for his own toilet and made my lower jaw

其の妻の便所の礎として、  
 オキキリムイの妻の便所の土台にして、  
 into a foundation for his wife's toilet,

私のからだは其の儘土と共に腐つてしまひました。  
 私の体は、そのまま土と一緒に腐つてしまひました。  
 and my body was left to rot along with the soil.

それから夜でも昼でも  
 それから夜も昼も  
 After that, day and night,

悪い臭気に苦しんでゐる中に私はつまらない死方、悪い  
 大便の臭いに私は苦しみ、そしてついに、つまらない死、ひどい死を  
 I endured the the smell of feces, and at last I died a miserable death,

死方をしました。  
 とげたのでした。  
 a terrible death.

たゞの身分の軽い神でもなかつたのですが  
 私は身分の低い神ではなかつたのですが  
 Now, I was no low-ranking god, but



- 117 アラウエンプリ チコラ クス ネフネウシ カ  
 arwenpuri / chikora kushu / nepneushi ka  
 arwen puri ci=kor a kusu nep ne us i ka  
 極悪である 性格 私・~をしたので 何として~にものか  
 持つ 付く
- 118 チエランペウテク ウエンライ チキ シリ タパンナ。  
 chierampeutek / wenrai / chiki shiri tapanna.  
 ci=erampewtek wen ray ci=ki siri tapan na.  
 私・~がわからない 悪い 死 私・~をする 様子 である よ
- 119 テフノ オカイ チロンヌプタラ、イテツキ  
 Tewano okai / chironnuputar, / itekki  
 tewano okay cironnup utar, itekki  
 これから いる(複) キツネ たち 決して~するな
- 120 ウエンプリ コロ ヤン。  
 wen puri kor yan.  
 wen puri kor yan.  
 悪い 性格 ~を持つ しなさい
- 121 アリ チロンヌプ カムイ ヤイエユカラ。  
 ari chironnup kamui yaieyukar.  
 ari cironnup kamuy yayeyukar.  
 と キツネ 神 自らを物語る

大変な悪い心を私は持つてゐた為何にも  
 とても悪い心を持ったために、何にもなら  
 because I had a very wicked heart,

ならない、悪い死方を私はしたのですから  
 ないような、ひどい死をとげてしまったのです。  
 I died an empty, terrible death.

これからの狐たちよ、決して  
 これから生きていくキツネたちよ、けっして  
 So I say to all you young foxes, you must never

悪い心を持ちなさんな。  
 悪い心を持つてはいけませんよ。  
 have a wicked heart.

と狐の神様が物語りました。  
 とキツネの神さまは物語りました。  
 Thus told the Fox God.

## 〔言葉の説明〕

・ピト pito (69 行目)

日本語の「人」から入った言葉。しかし、意味は、多少変化して使われています。カムイと対の形で出てきて、「カムイ（神）と同義語」で使われる場合と、「尊い人」という意味で使われます。ここでは、そのどちらでもなく、人（アイヌ）と同義語で使われているようです。

・タツカシクン tapkasikun (71 行目)

これは、タツ カシケ ウン tap kasike un（肩・の上・にいる）のつづまった形。意味は、「(岬の) 頂の上にいる」。

## ・コロ ウェンプリ エナントウイ カ エパラセレ

kor wen puri e-nan-tuyka-eparsere (73 行目)

コロ ウェンプリ kor wen puri は「持前の怒り」。エナントウイカ エパラセレ enan tuyka eparsere は、「その顔・の上・～を現わす」で、全体の意味は「持前の怒りを顔の上に現わす」。エパラセレ eparsere は、< e-par-se-re (～を・ふわっと・する・させる) → (顔の上に) ふわっとならせる→持前の怒りを顔の上にふわっと現わす。

・オイキ oiki (73 行目)

オイキ oiki は、< o-i-ki (そこで・もの・をする) → (皮の容れものの中) で物事をする。まさぐる、こと。

・ネッ アエカラペ タアナ nep a=ekar pe ta an a (78 行目)

アエカラペ a=ekar pe (人・それで・作る・もの)。タ アナ ta an a < ta an ya (だろうか)。全体で、「(あのようなヨモギの小さな矢は) 何をするのだろうか」→あんなもので何ができるといふのだろうか。

・エアク eak (85 行目)

エアク eak は、< e-ak (～を・射る) →を射る。

・チオクストウフ ココロコサヌ ci=oksutuhu ko-rorkosanu (86 行目)

オクストウフ oksutuhu は、オクスツ oksut (えり首) の所属形。コロコサヌ ko-rorkosanu は < ko-ror-kosanu (～に・擬音語・瞬間的な動作) → (えり首) にズブッと刺さる。

・チシレアヌ cisireanu (89 行目)

チシレアヌ cisireanu は、< ci-sir-e-an-u (される・辺り・に・置く) →置かれている。

・タツカララセ tat kararse (92 行目)

この言葉は、< tat karar-se (樺皮 くるくる巻く・ようである) →樺の木の皮が(燃える

ときに) くるくる巻き(ながら縮む) ようである。

・チラムアイ ci=ramu a i (94 行目)

この言葉は、< ci=ramu a i (私・思う・過去・のに) →私が思ったのに。この前にセンネ senne (～ない) があるので、「私は思わなかったのに」という意味。

・ホチカチカ hocikacika (94 行目)

この言葉は、< ho-cika-cika (尻・をバタバタする) →尻をバタバタする。苦しんで尻や手足をバタバタする。七転八倒の苦しみをする。

・ラヤヤイセ rayayayse (96 行目)

この言葉は、< ray-ay-ay-se (ひどく・わあ・わあ・言う) →大声でわあわあ泣きわめく。ay-ay は、擬声語。-se は擬声語や擬態語に接尾して自動詞を作ります。

(例) エセ ese (はい、という返事をする)

トクトクセ toktokse (ドキドキする。動悸がする)

・トカフ ヘネ クンネ ヘネ tokap hene kunne hene (97 行目)

この言葉は、熟語で、< tokap hene kunne hene (昼・でも・夜・でも) →昼も夜も。

・ランケ ranke (97 行目)

この言葉は、助動詞で、反復を表わします。シクヌ ランケ ライ ランケ siknu ranke ray ranke で、「生きたり死んだり」。

・サンチャ オッタ ミナ カネ sanca or ta mina kane (103 行目)

この言葉は、慣用句で、「ニヤニヤ笑って」という意味。サンチャ sanca は、< san-ca (前・口) で、直訳すると、「口元に笑いを浮かべて」。

・イラマシレ iramasire (104 行目)

この言葉は、沙流方言では、イラマスレ iramasire (すばらしい)。< i-ramasu-re (もの・面白い・させる) →ものが面白くさせる→面白い。みごとだ。

・ウイナ uyna (108 行目)

ウイナ uyna は、ウク uk (取る) の複数形。このくだけでは、この他にも複数形が使われています。アンパ anpa (単数形は、アニ ani)。意味は「手に持つ。抱いて運ぶ」。複数形が使われるのはオキキリムイへの尊敬を表わしていると考えられます。

・アシルイッケウ ネ カラ asinru ikkew ne kar (110 行目)

アシル asinru は < asin-ru (出る・道) →出ていく道。トイレは家の外にあるので、えん曲に「出でいく道」といってトイレを表わしたもの。この他、ルカリウシ rukariusi < ru-kari-usi (道・をまわる・よくする所) その道をよく往復する所、という言い方でトイレを表わすいい方もあります。

ネ カラ ne kar は、「～に作る」こと。イッケウ ikkew の元の意味は、「腰。背骨」で、一番基になるものなので、土台という意味になったもの。

・シフラコウエン sihurakowen (114 行目)

この言葉は、< si-hura-kowen (糞・におい・を嫌う) →糞の臭気をいやがる

・トイライ ウェン ライ チキ toy ray wen ray ci=ki (114 行目)

この言葉は、慣用句で、< toy ray wen ray (土・死・悪い・死) →ひどい死悪い死。

チキ ci=ki の ki は、「～をする」で、その前の、toy ray、wen ray を目的語として「ひどい死悪い死を私はする」となります。つまらない死に方をする事。

[参考]

・オキキリムイ Okikirmuy (63 行目)

他の地域では、オキクルミ Okikurmi と呼ばれる所もあります。知里幸恵自身も、(注)の中で、オキクルミ Okikurumi とも書いています。多くの物語では、オキクルミとサマユンクルの二人が対のような形で出てきます。地域によってオキクルミの方がより優れた者と述べられたり、逆にサマユンクルの方がより優れた者であるとされたりしています。スブンラムカは、他の地域では、ほとんど登場してきません。

・チアシトウシテッカ ciastustekka (68 行目)

この言葉は、< ci-as-tus-tek-ka (～される・立つ・忘我・状態になる・させる) →立ってじっとする。この中の トウシテッ tustek という言葉は、「ぼうっとなって我を忘れるようになる」「じっと金縛り状態になる」こと。これは、一種の巫に入る(神がかりの)状態になっていることを示していると思われます。舟の上に立ち、身心をじっと澄ませて、はるか遠くにいる黒ギツネの眼の中を見つめて、その悪業を見破ったのです。

カムイユーカラの中には、透しの術(千里眼)を行う場面が出てくることがあります。そのとき、針の先を見つめたり、刀の刃を見つめたり、伏せた腕の上に立ったりして意識を集中し、一種の巫の状態になってはるか離れた所のものを見透すのです。ここでもややそれに近い状態でオキキリムイは黒ギツネの眼の中まで見つめ、透し術で悪業を見破ったと考えられます。

そして、このトウシ tus という言葉は、トウス tusu (神がかって巫術を行う)、トウスクル tusukur (巫術を行う人) などという言葉の語根と関係があるでしょう。

・ライエパサシ ray-epas=as (97 行目)

この言葉は、おそらく、ライエパサシ rayepas=as で、ライエパシ rayepas は、< ray-e-pas (死・に・走る) →狂い走る。

・シトウンペ situnpe (101 行目)

この言葉は、< situ-un-pe (山の走り根・にいる・もの) 山の走り根にいる者、という意味が元です。シトゥ situ は、山から平地に尾根が伸びたものを指し、海に伸びていけば、岬に相当するものです。黒ギツネは、山の尾根にいたので、山の尾根にいる者と呼ばれたのでしょう。

・ネブネウシ カ nep ne usi ka (117 行目)

この言葉は、< nep ne usi ka (何・になる・所・かも) で、「何になるのかも(分からない)」→何にもならない。

## コラム (7)

### キツネは善神か悪神か？

キツネは、はたして善い神さまなのでしょうか、それとも悪い神さまなのでしょうか？ 答えを先にいうと、両方です。良い神として扱われることもあり、また、悪い神として登場することもあります。普通、悪い神として扱われるときは、毛の生えそろっていない赤毛のキツネである場合が多く、良い神として登場するキツネは、黒ギツネの場合が多いようです。このテキストでは、黒ギツネなのに悪い神として出てきます。これと物語がよく似た類話では、毛の生えそろっていない裸のようなキツネとして登場します。そちらの方が、よくあるタイプといえます。

各地の伝承をみてみますと、悪いキツネの場合、嵐を起こして舟を転覆させようとしたり、人間に化けて人間に嫁入りしようとしたり、人間の魂を取ろうとしたり、あるいは人間にとりついて狂わせようとしたりします。一方、善い神としては、海の時化（しけ）のときに舟を守ったり、鳴き声で、火事や津波、病気の流行、漁の豊凶を知らせたりします。

なぜ、キツネは、このように善神として扱われたり悪神になったりするのでしょうか？ キツネは、里の動物として、常に人間の近くに暮らしています。人間よりも鋭敏な感覚を持っているキツネは、天候の変化、異変にいち早く気づき、鳴き声で仲間に知らせます。また、川に魚が登ってきたときなども鳴き声で仲間に知らせます。その声を人間が読み取って、海化や津波、また、漁の豊凶を知ったのでしょうか。その場合には、キツネを善神として扱いました。

ところが、人間の村近くに暮らすキツネは、人間が干している魚を盗んだり、貯えておいた食べ物をこっそり取っていったりして悪さを働くこともあります。大切な食糧を奪われるのでキツネは悪い神として扱われたのです。キツネは海外でも悪賢い動物としてみられることが多いのもそのためです。

キツネは、チロンヌ *cironnup* といわれます。この言葉は *ci-ronnu-p* 「我々が・たくさん殺す・もの」が元の意味です。この言葉は、里近くの動物一般を元々さしていました。この他 シトゥンペ *situnpe* < *situ-un-pe* (山の走り根・にいる・もの) といわれる黒ギツネもいます。またキツネのことを シュマリ *sumari* ともいいます。この語源は、おそらく *sum-ani* (油・を持っていく) で、油が好きな動物だから付けられた名でしょう。キツネ取りのワナには、油を入れておびき寄せる方法もありました。地名にも シュマリナイ *sumarinay* (キツネ沢) というのが残っています。シュマリはスマリとも発音されます。

鋭い感覚と知能をもつキツネは、人間に異変を知らせる大切な働きをしてくれる反面、食糧を奪うという悪い面ももっていたため善神として扱われたり悪神として扱われたりしたのでしょうか。またその高い知能の故に人間を化かすとも考えられたのでしょうか。これは、世界の多くの地域で共通したとらえ方だといえます。日本各地でも、キツネは、お稲荷さんとして神仰の対象になったり、人を化かしたりたぶらかすものとして恐れ嫌われもしています。

## 4

### ウサギが自らをうたった謡

#### 「サンパヤテレケ」

*isepo yayeyukar*

Song sung by rabbit god



## 第4話

### ウサギが自らをうたった謡うた

#### 「サンパヤ テレケ」

#### 〔物語とその背景〕

この物語は前半と後半で語り手が変わります。前半は弟ウサギ。

私（弟ウサギ）は兄ウサギについて毎日幾つもの谷をこえて山に行きます。兄ウサギは、人間が仕掛けておいた仕掛けを見つけると、次々と矢を発射させて、仕掛けを使えなくしてしまいます。私はそれを見て面白がっていました。

この日もまた山に行ってみると、意外なことに、兄ウサギが仕掛けにかかって泣き叫んでいました。驚いて近寄ってみると兄は、村に戻って自分が仕掛けにかかったことを皆に知らせてくれと頼みました。私は、承知して村に向いましたが、途中でもうその用事を忘れてしまって、遊びながら帰りました。村に着いて、はじめて兄から何かを頼まれたことを思い出したのですが、一体何を頼まれたのか思い出せません。しかたなく兄の所に戻ってもう一度きこうとしまして、また、後跳びなどして遊びながら帰りました。ところが元の所には兄ウサギの姿はなく、血の着いたあとだけが残っていました。

（ここで物語の主人公は兄ウサギに変わります）

私は、毎日山に行き、人間の仕掛けておいた弓を使えなくするのを面白がっていました。その日も前の所に仕掛けがあるのを見つけました。しかし、その脇に小さなヨモギの弓も仕掛けてありました。これも使えなくしてやろうと面白半分にはまってしまいました。逃げようと思いましたが、ところがバーンと仕掛けにはまってしまいました。逃げようともがけばもがくほどワナは強く締め、どうすることもできずに泣いていると、弟ウサギがとんできました。私は喜んで、村の皆に知らせるよう頼みました。しかし、それからいくら経っても何の音さたもありません。

ワナにはまって泣いていると私のそばを人影が現われました。見ると立派な若者でした。その若者は、ニヤニヤしながら私をつかんでどこかへ運んでいきました。見るとそこは大きな家で、家の中は宝物でいっぱいになっています。その若者は、大きな鍋を掛け火をたきつけてから、刀を抜いて私を毛皮ごとぶつ切りにして鍋いっぱいに入れて、火をどんどん強くしました。なんとか逃げ出したいと私は思うのですが若者は私から目を離しません。このまま鍋が沸き立てば、私は煮えてしまい、つまらない死に方をするようになると思って、若者のスキをなんとか見つけて、鍋の中の肉片にさっと化けました。そして立ちのぼる湯気にまぎれこんで鍋の縁に登り、下座の方へとび降り家の外へとび出しました。私は泣きながら走って家に帰り着き、ようやく安どの胸をなでおろしました。そして、いったいあの若者は何者だったのだろうと振り返ってみると、ただの人間ではなく、神のように勇壮なオキキリ

ムイであることがわかりました。私が毎日こわしていた弓は、オキキリムイが仕掛けたものだったのです。それをオキキリムイが怒ってヨモギの小弓で私を殺そうとしたのでした。しかし、私もただのウサギではなかったので、私が無駄な死をとげれば、私の親類の者たちも困るだろうとあわれんでくれて、私が逃げても追いかけてこなかったのです。しかし、それからというもの、鹿ほどの大きさもあった私たちウサギは、オキキリムイの食べる肉片くらいに小さくなってしまいました。ですから、これからのウサギはみな、このように小さい体になるだろう、そして、これからのウサギたちは決して人間に悪さをしてはいけないとウサギの長（おさ）は、子供ウサギたちに教えて死んでいきました。

ここには二つのタイプのウサギが出てきます。前半の主人公の弟ウサギは、のんき者で、もの忘れの激しいウサギ。そして、後半の兄ウサギのような仕掛けを見破る知恵をもち、人をバカにするタイプのウサギです。角や牙といった特別な武器をもつこともなく、無抵抗で一日中のんびりと草を食んでいるウサギは弟ウサギのイメージです。一方、知恵者で人間をバカにする兄ウサギのイメージもウサギにはあるようです。その点については、「コラム」で述べてみます。ウサギのもつこうした二つのイメージを、この兄弟ウサギは示しているようです。

イセポ ヤイエユカラ、「サンパヤ テレケ」  
 Isepo yaieyukar, "Sampaya terke"  
 isepo yayeyukar, "sampaya terke"  
 ウサギ 自らを物語る サンパヤ テレケ

## サケへ：サンパヤ テレケ sampaya terke

- 1 サンパヤ テレケ  
 Sampaya terke  
 sampaya terke  
 サンパヤ テレケ
- 2 トウ ピンナイ カマ レ ピンナイ カマ テレケアシ カネ  
 Tu pinnai kama / re pinnai kama / terkeash kane  
 tu pinnay kama re pinnay kama terke=as kane  
 二つの 谷川 を越えて 三つの 谷川 を越えて 跳ぶ・私 しながら
- 3 シノタシ コロ ユピネクル オシ エキムン パイエアシ。  
 shinotash kor / yupinekur oshi / ekimun payeash.  
 sinot=as kor yupi ne kur osi ekimun paye=as.  
 遊ぶ・私 しながら 兄～である人 の後から 山へ 行く(複)・私
- 4 ケシトアンコ ユピネクル オシ パイエアシ インカラシ コ、  
 Keshtoanko / yupinekur / oshi payeash / ingarash ko,  
 kesto an ko yupi ne kur osi paye=as inkar=as ko,  
 毎日 ある すると 兄～である人 の後から 行く(複)・私 見る・私 すると
- 5 アイヌピト クアレ ワ アンコ、ネ ク ユピネクル  
 Ainupito / kuare wa anko, / ne ku / yupinekur  
 aynu-pito kuare wa an ko, ne ku yupi ne kur  
 人間 仕掛弓をしかける して いる すると その 弓 兄～である人
- 6 ヘチャウエレ ランケ、ネワアンペ チエミナ コロ パテク  
 hechawere ranke, / newaanbe / chiemina kor patek  
 hecawere ranke, newaanpe ci=emina kor patek  
 ～を発射させる たびたび～する そのこと 私・～を笑う しながら ばかり
- 7 オカヤシペ ネクス、タナント スイ  
 okayashpe nekushu, / tananto shui  
 okay=as pe ne kusu, tananto suy  
 いる(複)・私 もの ～である から 今日 まだ
- 8 パイエアシ ワ インカラシ アワ、センネカスイ  
 payeash wa / ingarash awa, / sennekashui  
 paye=as wa inkar=as awa, senne ka suy  
 行く(複)・私 して 見る・私 したところ ちつとも～ない
- 9 シラン クニ チラムアイ  
 shiran kuni / chiramuai  
 siran kuni ci=ramu a i  
 様子がある と 私・～を思う したのに

兎が自ら歌った謡「サンパヤ テレケ」  
 兎が自ら歌った謡「サンパヤ テレケ」  
 Song Sung by the Hare God "Sampaya terke"

サンパヤ テレケ  
 サンパヤ テレケ  
 Sampaya terke

二つの谷三つの谷を飛越え飛越え  
 二つの谷、三つの谷を跳び越えて  
 Hopping over two valleys, three valleys,

遊びながら兄様のあとをしたつて山へ行きました。  
 私は、遊びながら兄さんの後について山へ行きました。  
 I played while following my elder brother to the mountains.

毎日毎日兄様のあとへ行つて見ると  
 毎日毎日兄さんの後について行って見ると、  
 Every day when I followed Brother to the mountains,

人間が弩を仕掛けて置いてあると其の弩を兄様が  
 人間が仕掛け弓を置いていました。そこで兄さんはその弓の  
 we found traps laid by a human. Brother would release trap after trap,

こはしてしまふ。それを私は笑ふのを  
 矢を次々と発射させて使えないようにしました。それを私は面白がってばかり  
 making them useless. This was endlessly entertaining

常としてゐたので此の日また  
 いました。そしてこの日もまた  
 to me. So today,

行つて見たら、ちつとも  
 行って見たところ、全く  
 we went as usual, and quite

思ひがけない  
 思いもかけなかったのですが、  
 unexpectedly, I found my

- 10 ヲピネクル クオロクシ フ ライヤイセ コラン。  
 yupinekur / kuorokush wa / rayaiyaise koran.  
 yupi ne kur ku oro kus wa ray-ayyayse kor an.  
 兄 ~である 人 弓 ~の所 ~を通る して ひどく泣き叫ぶ しながら いる
- 11 チエホマトウ ヲピネクル サマケタ  
 Chiehomatu / yupinekur / samaketa  
 ci=ehomatu yupi ne kur samake ta  
 私・~に驚く 兄 ~である 人 ~のそば に
- 12 テレケアシ フ パイエ アシ アフ、 ヲピネクル  
 terkeash wa / paye ash awa, / yupinekur  
 terke=as wa paye=as awa, yupi ne kur  
 跳ぶ・私 して 行く(複)・私 したところ 兄 ~である 人
- 13 チシ トウラノ エネ イタキ：——  
 chish turano / ene itaki : ——  
 cis turano ene itak i : ——  
 泣く と共に このように 話す こと
- 14 「インカルクス チアキネクル、タンテワノ  
 “ Ingarkusu / chiakinekur, / tantewano  
 “ inkar kusu ci=aki ne kur, tan te wano  
 これこれ 私・~の弟 ~である 人 このこれ から
- 15 エホユプ フ エオマン フ  
 ehoyupu wa / eoman wa  
 e=hoyupu wa e=oman wa  
 お前・走る して お前・行く して
- 16 アコロ コタン コタノシマクタ エシレパ チキ  
 akor kotan / kotanoshmakta / eshirepa chiki  
 a=kor kotan kotan osmak ta e=sirepa ciki  
 私たち・~の 村 村 ~の後ろ に お前・到着する したら
- 17 「ユピネクル クオロクシ ナ、フ オホホイ！」 アリ  
 ‘Yupinekur / kuorokush na, / hu ohohoi!’ ari  
 ‘yupi ne kur ku oro kus na, hu ohohoy!’ ari  
 兄 ~である 人 弓 ~の所 ~を通る よ (危急を知らせる叫び声) と
- 18 エホトウイパ クシネナ。」  
 ehotuipa kushnena.”  
 e=hotuypa kus ne na.”  
 お前・叫ぶ のだ よ
- 19 ハワシ チキ、  
 hawash chiki,  
 hawas ciki,  
 言う したら
- 20 チエエセクル エチウ カネ、オロワノ  
 chieesekur / echiu kane, orowano  
 ci=eese-kur-eciw kane, orowano  
 私・~に同意する(虚辞) して それから

兄様が弩にかゝつて泣叫んでゐる。  
 兄さんが仕掛け弓に当たって泣叫んでいたのです。  
 elder brother hit by an arrow and crying.

私はビックリして、兄様のそばへ  
 私は驚いて兄のそばに  
 Astonished, I rushed

飛んで行つたら兄様は  
 跳んで行くと、兄は  
 to my brother's side, and sobbing,

泣きながら云ふことには  
 泣きながら、次のように言いました。  
 he said the following:

「これ弟よ、今これから  
 「これ弟よ、今これから  
 "Little Brother,

お前は走つて行つて  
 お前は走って行って  
 I want you to run

私たちの村の後へ着いたら  
 私たちの村、村の後に着いたならば、  
 to our village, and when you get to the back of the village,

兄様が弩にかゝつたよ——、フオホホイと  
 兄さんが弓に当たったよー、フオホホイと  
 you must shout, 'Big Brother has been caught in a trap,

大聲でよぶのだよ。」  
 呼ぶのだよ」  
 hu ohohoi!"

私はきいて  
 というので、  
 So

ハイ、ハイ、と返辭をして、それから  
 私は、ハイ、ハイ、といて、それから  
 I replied, "All right," and then,

- 21 トウ ピンナイ カマ レ ピンナイ カマ テレケアシ カネ  
 tu pinnai kama / re pinnai kama / terkeash kane  
 tu pinnay kama re pinnay kama terke=as kane  
 二つの 谷川 を越えて 三つの 谷川 を越えて 跳ぶ・私 しながら
- 22 シノタシ コロ サパシ アイネ、  
 shinotash kor / sapash aine,  
 sinot=as kor sap=as ayne,  
 遊ぶ・私 しながら 下る(複)・私 したあげく
- 23 チコロ コタン コタノシマケ チコシレパ。  
 chikor kotan / kotanoshmake / chikoshirepa.  
 ci=kor kotan kotan osmake ci=kosirepa.  
 私・～の 村 村 ～の背後 私・～に到着する
- 24 オッタ エアシリ ユピネクル ウヌイテカイ  
 Otta eashir / yupinekur / unuitekai  
 or ta easir yupi ne kur un=uytek a i  
 そこで 初めて 兄・～である 人 私・～を使いに出す したこと
- 25 チエシカルン、タンルイ ホトウイエ チキ クシネ アフ  
 chieshikarun, / tanrui hotuye / chiki kushne awa  
 ci=esikarun, tan ruy hotuye ci=ki kusne awa  
 私・～を思い出す この 激しい 叫ぶこと 私・～をする つもりである したところ
- 26 ユピネクル ネコンタプネ ウヌイテク アフ  
 yupinekur / nekontapne / unuitek awa  
 yupi ne kur nekon tapne un=uytek aw a  
 兄・～である 人 どのように (強調) 私・～を使いに出す という話か
- 27 オアラ チオイラ。チアシトウシテツカアシ  
 oar chioira. / Chiashtushtekkaash  
 oar ci=oyra. ci-astustek -ka =as  
 全く 私・～を忘れる される・立ちつくす・～させる・私
- 28 チエヤイシカルンカ、キプネコロカ オアラ チオイラ。  
 chieyaishikarunka, / kipnekorka / oar chioira.  
 ci=eyaysikarunka, ki p ne korka oar ci=oyra.  
 私・～について思い出そうとする けれども 全く 私・～を忘れる
- 29 オロワノ ヘトポ スイ  
 Orowano / hetopo shui  
 orowano hetopo suy  
 それから 戻って また
- 30 トウ ピンナイ カマ レ ピンナイ カマ  
 tu pinnai kama / re pinnai kama  
 tu pinnay kama re pinnay kama  
 二つの 谷川 を越えて 三つの 谷川 を越えて
- 31 ホロカテレケ ホロカタプカラ チキ カネ、  
 horkaterke / horkatapkar / chiki kane,  
 horka terke horka tapkar ci=ki kane,  
 逆方向に 跳ぶこと 逆方向に 踏舞すること 私・～をする しながら

二つの谷三つの谷飛越え飛越え

二つの谷、三つの谷を跳び越えて

hopping over two valleys, three valleys,

遊びながら来て

遊びながら行くと、やがて

playing as I went, finally

私たちの村の村後へ着きました。

私の村、村の後に着きました。

I reached my village, the back of the village.

そこではじめて兄様が私を使いによこしたことを

そこで初めて兄さんが自分を使いに出したことを

There I remembered that my elder brother

思ひ出しました、私は大声で叫び聲を挙げやうとした

私は思い出し、大声をあげようとしたのですが

had sent me on an errand, and the moment I tried to raise a cry,

が、兄様が何を言つて私を使いによこしてあつたのか

兄さんがなんで自分を使いに出したのか

I completely forgot what my brother

すっかり私は忘れてみました。其處に立ちつくして

すっかり忘れてしまいました。私は、ほう然と立ちつくして

had sent me to do. I stood dumbstruck,

思ひ出さうとしたが何うしてもだめだ。

思い出そうとしたのですが、どうしても思い出せません。

trying to remember, but no matter how I tried, I couldn't.

それからまた

それから、もと来た方へまた

So I went back the way I came,

二つの谷を越え三つの谷を越え

二つの谷、三つの谷をとび越え

hopping over two valleys, three valleys,

後へ逆飛び逆躍びしながら

後へ逆とびしたり、後歩きしたりしながら

hopping backwards and walking backwards as I went.



- 32 ヲピネクル オッタアニ ウン アラキアシ フ  
 yupinekur / ottaani un / arkiash wa  
 yupi ne kur or ta an i un arki=as wa  
 兄～である人 そこに いる所 へ 来る(複)・私 して
- 33 インカラシ アワ ネプカ イサム。  
 ingarash awa / nepka isam.  
 inkar=as awa nep ka isam.  
 見る・私 したところ 何 も ない
- 34 ヲピネクル オウセ ケミ シルシ カネ シラン。  
 Yupinekur / ouse kemi / shirush / kane shiran.  
 yupi ne kur owse kemi sirus kane siran.  
 兄～である人 ただ ～の血 地面に付く しながら 様子がある
- 35 (アリ アンコ オヤクタ テレケ)  
 (ari anko oyakta terke)  
 (ari an ko oyak ta terke)  
 と ある すると 別の所 に 跳ぶ

サケヘ：ケツカ ウオイウオイ ケツカ、ケツカ ウオイ ケツカ  
 ketka woywoy ketka, ketka woy ketka

- 36 「ケツカ ウオイウオイ ケツカ、ケツカ ウオイ ケツカ」  
 “Ketka woiwoi / ketka, / ketka woi ketka”  
 “ketka woywoy ketka, ketka woy ketka”  
 ケツカ ウオイウオイ ケツカ ケツカ ウオイ ケツカ
- 37 ケシトアンコ キムタ パイエアシ、  
 keshtoanko / kimta payeash,  
 kesto an ko kim ta paye=as,  
 毎日 ある すると 山 に 行く(複)・私
- 38 アイヌピト アレワアン ク チヘチャウエレ、  
 Ainupito / arewaan ku / chihechawere,  
 aynu-pito are wa an ku ci=hecawere,  
 人間 ～を仕掛ける して いる 弓 私・～を発射させる
- 39 ネワアンペ チエミナ コロ パテク オカヤシ アワ  
 newaanbe / chiemina kor patek / okayash awa  
 newaanpe ci=emina kor patek okay=as awa  
 そのこと 私・～を笑う しながら ばかり いる(複)・私 したところ
- 40 シネアンタ スイ、ネアイタ ク アアレ カネ  
 shineanta shui, / neaita ku aare kane  
 sineanta suy, nea i ta ku a=are kane  
 ある時 また その 所に 弓 人・～を仕掛ける しながら
- 41 シラン キコ、ウトロサマタ ポン ノヤク  
 shiran kiko, / utorsamata / pon noyaku  
 siran ki ko, utorsama ta pon noya ku  
 様子がある ～する すると ～の脇 に 小さい ヨモギ 弓

兄様のゐる處へ来て  
 兄さんのいる所へやって来て  
 I came to the place where my brother should have been,

見ると誰もゐない。  
 見ると、姿はありません。  
 but when I looked, he was gone.

兄様の血だけが其處等に附いてゐた。  
 ただ兄さんの血だけが辺りに着いていました。  
 All that remained was his blood, scattered all over the place.

(こゝまでで話は外へ飛ぶ。)  
 (ここで話は別な所にとぶ)  
 (Here the story jumps to another place)

ケトカライライケトカ、ケトカライケトカ  
 ケツカ ウオイウオイ ケツカ、ケツカ ウオイ ケツカ  
 "Ketka woiwoi ketka, ketka woi ketka"

毎日毎日私は山へ行つて  
 毎日、私は山に行つて  
 Every day, I went to the mountains,

人間が罠を仕掛けてあるのをこはして  
 人間が仕掛けておいた弓を発射させて使えないようにして  
 releasing the traps set by the humans and making them useless.

それを面白がるのが常であつた處が  
 それを面白がってばかりいましたが、  
 This was endlessly entertaining to me, but

或日また、前の所に罠が仕掛けて  
 ある時また、前の場所に弓が仕掛けられて  
 one day I found a trap set in the same place as before,

あると、其の側に小さい蓬の罠が  
 いて、そのそばに小さいヨモギの弓が  
 and next to it someone had set

- 42 アアレ カネ シラン、  
aare kane shiran,  
a=are kane siran,  
人・～を仕掛ける しながら 様子がある
- 43 チヌカラ チキ  
chinukar chiki  
ci=nukar ciki  
私・～を見る したら
- 44 「エネオカイペ ネブ アエカラペ タン？」  
“Eneokaibe / nep aekarpe tan?”  
“ene okay pe nep a=ekar pe ta an?”  
このようにある(複)もの 何 人・～で～をするもの か
- 45 ヤイヌアシ チエミナ ルスイ クス  
yainuash / chiemina rushui kushu  
yaynu=as ci=emina rusuy kusu  
思う 私 私・～を笑う ～したい ので
- 46 ポンノ チケレテク、ナニ キラアシ クス  
ponno chikeretek, / nani kiraash kusu  
ponno ci=kere tek, nani kira=as kusu  
ちょっと 私・～に触る さっと すぐに 逃げる・私 ようと
- 47 イキチアシ アフ センネカスイ シリキ クニ  
ikichiash awa / sennekashui / shirki kuni  
iki-ci=as awa senne ka suy sirki kuni  
する(複)・私 したところ ちっとも～ない 様子である と
- 48 チラムアイ、ネア ク オロ チオシマ フミ  
chiramuai, / nea ku oro / chioshma humi  
ci=ramu a i, nea ku oro ci=osma humi  
私・～を思うしたのに その 弓(ワナ) ～の中 私・～にはまる 音
- 49 チモネトコ コココサヌ。  
chimonetoko / rorkosanu.  
ci=mon-etoko ror-kosanu.  
私・～の手の先 ズブツという
- 50 キラアシ クス ヤイエホトウリリアシ コ  
Kiraash kushu / yayehotuririash ko  
kira=as kusu yay-e-hoturiri=as ko  
逃げる・私 ために 自ら尻を伸ばし伸ばしする・私 すると
- 51 ポオ ユパケノ アウンヌンパ エネフ ポカ  
poo yupkeno / aunnunba / enewa poka  
poo yupkeno a=un=numpa ene wa poka  
ますます 激しく される・私・～を締め このようにして だけでも  
付ける(複)
- 52 イキチアシ カ イサム クス チサシ コロ  
ikichiashi ka / isam kusu / chishash kor  
iki-ci=as i ka isam kusu cis=as kor  
する(複)・私 こと も ない ので 泣く・私 しながら

仕掛けてある、  
仕掛けてあった。  
a mugwort bow.

私はそれを見ると  
私はそれを見て  
I looked at it and thought,

「こんな物、何にする物だらう。」  
「こんな物、何に使うものなんだろう」  
"I wonder what this thing is used for."

と思つてをかしいので  
と思つて、私は面白がつて  
Out of curiosity

ちよつとそれに觸つて見た、直ぐに逃げやうと  
ちよつと触れてみて、すぐに逃げやうと  
I tapped it lightly, but when I tried

したら、思ひがけ  
したところ、思いもかけ  
to run away, unexpectedly,

なく、其の弩にいやといふ程  
ないことに、そのワナにはまって  
I got caught in the trap

はまつてしまつた。  
腕の先がガーンとした。  
and--wham!--something struck the tip of my arm.

逃げやうともがけば  
逃げやうともがけば  
The harder I struggled to escape,

もがくほど、強くしめられるので何うする事も  
もがくほど、きつく締めつけられて、どうすることも  
the more tightly I was bound. While I was

出来ないで、私は泣いて  
できないため、私は泣いて  
crying out in utter helplessness,

- 53 オカヤシ アフ ウンサマタ ヘマンタアンペ  
 okayash awa / unsamata / hemantaanpe  
 okay=as awa un=sama ta hemanta an pe  
 いる(複)・私 したところ 私・～のそばに 何 あるもの
- 54 チトウルセシ、インカラシ アフ、チアキネクル  
 chitursere, / ingarash awa, / chiakinekur  
 ci-tursere, inkar=as awa, ci=aki ne kur  
 される・～を飛ばす 見る・私 したところ 私・～の弟である人
- 55 ネ カネアン。チエヌペツネ フ チウタリヒ  
 ne kanean. / Chienupetne wa / chiuitarihi  
 ne kane an. ci=enupetne wa ci=utarihi  
 ～である して いる 私・～を喜ぶ して 私・～の仲間
- 56 チコアスラヌレ チウイテク アフ  
 chikoashuranure / chiuitek awa  
 ci=ko-asur-anu-re ci=uytek awa  
 私・～に～への知らせを 私・～を使いに出す したところ  
 持たせる
- 57 オロワノ チテレ イケカ、ネプ フミ カ オアラリサム。  
 orowano / chitere ikeka, / nep humi ka / oararisam.  
 orowano ci=tere ikeka, nep humi ka oarar isam.  
 それから 私・～を待つ したけれど 何 ～の音 も 全く ない
- 58 チサシ コロ オカヤシ アフ、ウンサマタ  
 Chishash kor / okayash awa, / unsamata  
 cis=as kor okay=as awa, un=sama ta  
 泣く・私 しながら いる(複)・私 したところ 私・～のそばに
- 59 アイヌクルマム チシプスレ。インカラシ アフ  
 ainukurmam / chishipushure. / Ingarash awa  
 aynu-kurmam ci-sipusu-re. inkar=as awa  
 人 影 される・浮き上がる・～させる 見る・私 したところ
- 60 カムイシリネ アン アイヌ オツカイボ  
 kamuishirine an / Ainu okkaipo  
 kamuy siri ne an aynu okkaypo  
 神 ～のようで ある 人間 若者
- 61 サンチャ オッタ ミナ カネ、ウヌイナ フ  
 sancha otta / mina kane, / unuina wa  
 sanca or ta mina kane, un=uyna wa  
 口元 に 笑み を 浮かべて 私・～を取る(複)して
- 62 フナクタ ウナニ。インカラシ アフ  
 hunakta unani. / Ingarash awa  
 hunak ta un=ani. inkar=as awa  
 どこか に 私・～を持ち運ぶ 見る・私 したところ
- 63 ポロ チセ ウプソロホ カムイコロペ  
 poro chise / upshoroho / kamuikorpe  
 poro cise upsoroho kamuy kor pe  
 大きい 家 ～のふところ 神 ～を持つもの

みると、私の側へ何だか  
 いると、私のかたわらに何か  
 something came flying

飛んで来たので見るとそれは私の弟  
 飛んできた。見ると私の弟  
 to my side. When I looked, I saw that it was

であつた。私はよろこんで、私たちの一族のものに  
 であつた。私は大喜びで、私の同朋に  
 my younger brother. I told him to

此を事を知らせる様に言ひつけてやつたが  
 この事を知らせるようにつけたが  
 go tell our compatriots what had happened, but

それからいくら待つても何の音もない。  
 それからいくら待つても何のおとさたもない。  
 no matter how long I waited after that, there was no news.

私は泣いてみると、私の側へ  
 私が泣きながら待っていると、私のそばに  
 As I was crying and waiting, a shadow

人の影があらはれた。見ると、  
 人影が現れました。見ると  
 appeared next to me. When I looked at it,

神の様な美しい人間の若者  
 神のように立派な人間の若者  
 I saw a magnificent young human, who had the appearance of a god.

ニコニコして、私を取つて、  
 がニヤニヤ笑いながら、私をつかんで  
 Smirking, he picked me up and

何處かへ持つて行つた。見ると  
 どこかへ運んでいった。私が見ると  
 took me someplace. When I looked,

大きな家の中が神の寶物で  
 大きな家の中に立派な寶物が  
 I saw a big house which appeared to be

- 64 チエシクテ カネ シラン。  
chieshikte kane / shiran.  
ci-esikte kane siran.  
される・～で～を して 様子がある  
満たす
- 65 ネア オツカイポ アペアレ フ、  
Nea Okkaipo / apeare wa,  
nea okkaypo apeare wa,  
その 若者 火をたく して
- 66 タンポロ ス ホカ オツテ、ソサモツペ エタイエ フ、  
tanporo shu / hoka otte, / sosamotpe etaye wa,  
tan poro su hoka otte, so sam ot pe etaye wa,  
この 大きい 鍋 火 ～に～をかける 座のそばに掛かって いるもの(刀) ～を抜く して
- 67 チネトパケ ルシ トウラノ タウキタウキ  
chinetopake / rush turano / taukitauki  
ci=netopake rus turano tawki-tawki  
私・～の体 毛皮 と共に 叩き切る切る
- 68 スオロ エシクテ、オロワノ スチヨロポケ エウシエウシ  
shuoro eshikte, / orowano / shuchorpoke / eusheush  
su oro esikte, orowano su corpoke eus-eus  
鍋 ～の中 ～を～で満たす それから 鍋 ～の下 ～に頭を付ける付ける
- 69 アペ アレ。ネコナカ イキチアシ フ  
ape are. / Nekonaka / ikichiash wa  
ape are. nekona ka iki-ci=as wa  
火 ～をたく どのように か する(複)・私 して
- 70 キラアシルスイ クス アイヌ オツカイポ シクトウル  
kiraashrushui kusu / ainu okkaipo / shikuturu  
kira=as rusuy kusu aynu okkaypo sik-uturu  
逃げる・私 ～したい ので 人間 若者 ～の目の間
- 71 チトウシマク コロカ アイヌ オツカイポ ウノヤクン  
chitushmak korka / ainu okkaipo / unoyakun  
ci=tusmak korka aynu okkaypo un=oyak un  
私・～の先を越す けれども 人間 若者 私・～の別の所へ
- 72 インカラ シリ オアリサム。  
inkar shiri / oarisam.  
inkar siri oar isam.  
見る ～の様子 全く ない
- 73 「ス ポプ ワ チアシ ヤクン、ネブネウシ カ  
“Shu pop wa / chiash yakun, nepneushi ka  
“su pop wa ci=as yakun, nep ne us i ka  
鍋 煮立つ して 煮える・私 ならば 何 として～に付くものか
- 74 チエランペウテク トイ ライ ウェン ライ チキ エトクシ。」 アリ  
chierampeutek / toi rai / wen rai / chiki etokush.” ari  
ci=erampewtek toy ray wen ray ci=ki etokush.” ari  
私・～が理解できない ひどい 死 悪い 死 私・～をする ～することになる と

一ぱいになつてゐる、  
いっぱいになっている様子でした。  
filled with splendid treasures.

彼の若者は火を焚いて  
その若者は火をたいて、  
The young man lit a fire and

大きな鍋を火にかけて掛けてある刀を引抜いて  
大きな鍋を火に掛け、壁にかけてある刀を引き抜いて  
put a big pot on the fire. He took a knife down from the wall,

私のからだを皮のまゝ、ブツブツに切つて  
私の体を毛皮ごと何回もたたき切つて  
and hacked me to pieces, fur and all.

鍋一ぱいに入れそれから鍋の下へ頭を突入れ突入れ  
鍋いっぱいにして、それから、鍋の下に頭を突っ込んで  
Then he filled the pot full of the pieces and stuffed my head under the pot

火を焚きつけ出した。何うかして  
火を燃やしました。なんとかして  
to stoke the fire. Somehow or other,

逃げたいので私は人間の若者の隙を  
私は逃げ出したいと思って、人間の若者が目を離してるスキを  
I wanted to escape, so I waited for the young human

ねらふけれども、人間の若者はちつとも私から  
ねらうのですが、人間の若者は、私から目を離す  
to look away, but he showed no sign

眼をはなさない。  
様子は全くありません。  
of taking his eyes from me.

鍋が煮え立つて私が煮えてしまつたら、何にも  
「鍋が沸き立つて私が煮えてしまつたら、どうなるかも  
"If that pot boils and I am cooked, I will die

ならないつまらない死方、悪い死方をしなければならぬ、と  
分からないひどい死、悪い死をとげることになるだろう」と  
a useless death, a bad death,"

- 75 ヤイヌアシ カネ、アイヌ オツカイポ シクトウル  
 yainuash kane, / ainu okkaipo / shikuturu  
 yaynu=as kane, aynu okkaypo sik-uturu  
 思う・私 しながら 人間 若者 ~の目の間
- 76 チトウシマク アイネ、フナクパケタ、  
 chitushmak aine, / hunakpaketa,  
 ci=tusmak ayne, hunakpaketa,  
 私・~を出し抜く したあげく どれほど経ってか
- 77 シネ カマハウ ネ チヤイカッテク、  
 shine kamahau ne / chiyaikattek,  
 sine kamahaw ne ci=yaykar tek,  
 一つの 肉片 として 私・化ける さっと~して
- 78 リクン スパ チヤイコポイエ、スパルルケヘ  
 rikun shupa / chiyaikopoye, / shuparurkehe  
 rikun su pa ci=yaykopoye, su parurkehe  
 上の 鍋 湯気 私・~に自分を混ぜる 鍋 ~のふち
- 79 チコヘメス、ハラキソツタ テレケアシテク、  
 chikohemeshu, / harkisotta / terkeashtek,  
 ci=kohemesu, harkiso or ta terke=as tek,  
 私・~に登る 左座 ~の所に 跳ぶ・私 さっと~して
- 80 ソヨ テレケアシ、チシ トウラノ、  
 soyo terkeash, / chish turano,  
 soyoterke=as, cis turano,  
 外へとび出す・私 泣く と共に
- 81 テレケアシ カネ パサシ カネ、キラアシ アイネ  
 terkeash kane pashash kane, / kiraash aine  
 terke=as kane pas=as kane, kira=as ayne  
 跳ぶ・私 しながら 走る・私 しながら 逃げる・私 したあげく
- 82 チウンチセヘ チコシレパ、  
 chiunchisehe / chikoshirepa,  
 ci=un-cisehe ci=kosirepa,  
 私・~の家 私・~に到着する
- 83 エアシカ ヤイカフムスアシ。  
 eashka yaikahumshuash.  
 easka yaykahumsu=as.  
 やっと 胸をなでおろす・私
- 84 シオカ ウン インカラシ アフ、  
 Shioka un / inkarash awa,  
 si-oka un inkar=as awa,  
 自分の後 へ 見る・私 したところ
- 85 ヤヤン アイヌ ウセ オツカイポ ネクニ パテク  
 yayan ainu / use okkaipo / nekuni patek,  
 yayan aynu use okkaypo ne kuni patek,  
 普通の 人間 ただの 若者 ~であると ばかり

思つて人間の若者の油断を  
 思つて、人間の若者が目を離しているスキを  
 I thought, so I waited for the young human

ねらつてねらつて、やつとの事  
 ねらつて、ようやくのこと  
 to look away, and finally I managed to quickly

一片の肉に自分を化らして  
 一つの肉片に私は、さっと変身して  
 disguise myself as a piece of meat.

立上る湯気に身を交て鍋の椽に  
 立ちのぼる鍋の湯気に混じり込んで、鍋のふちに  
 Blending myself in with the rising steam, I climbed up to the edge

上り、左の座へ飛下りると直ぐに  
 のぼつて、左座の所へさっととび下り  
 of the pot, quickly flew down to the guest seat,

戸外へ飛出した、泣きながら  
 外へとび出して、泣きながら  
 and sprang outdoors. Sobbing,

飛んで息を切らして逃げて来て  
 跳ねたり走ったりしながらにげてきて、ようやく  
 I ran away by leaps and bounds, and finally

私の家へ着いて  
 自分の家に着いて  
 came to my own house

ほんとうにあぶないことであつたと胸撫で下した。  
 やつとのこと自分が無事だったことに胸をなでおろしました。  
 and heaved a sigh of relief at my narrow escape.

後ふりかへつて見ると、  
 後をふり向いてみると  
 When I looked behind me,

たゞの人間、たゞの若者とばかり  
 ただの人間、普通の若者とばかり  
 the person I had thought was a mere human, just an average youth,

- 86 チラムアプ、オキキリムイ カムイ ラメトク  
chiramuap, / Okikirmui / kamui rametok  
ci=ramu a p, Okikirmuy kamuy rametok  
私・～を思う したのに オキキリムイ 神 勇者
- 87 ネ ルウエ ネ アワン。  
ne ruwe ne awan.  
ne ruwe ne awan.  
～である のである だったのだ
- 88 ヤヤン アイヌピト アレ ク ネ クニ チラム フ、  
Yayan ainupito / are ku ne kuni / chiramu wa,  
yayan aynu-pito are ku ne kuni ci=ramu wa,  
普通の 人間 ～を仕掛ける 弓 ～である と 私・～を思う して
- 89 ケシトケシト イララ アシ フ、オキキリムイ  
keshtokeshto / irara ash wa, / Okikirmui  
kesto kesto irara=as wa, Okikirmuy  
毎日 毎日 いたずらをする・私 して オキキリムイ
- 90 ルシカ クス ノヤポンク アリ  
rushka kusu / noyaponku ari  
ruska kusu noya pon ku ari  
～を怒る ので ヨモギ 小さい弓 で
- 91 ウンライケ クス イキア コロカ、チオカイ カ  
unraiike kusu / ikia korka, chiokai ka  
un=rayke kusu iki a korka, ciokay ka  
私・～を殺す しようと する した けれども 私 も
- 92 パシタ カムイ チネ ソモキ コ、トイ ライ ウェン ライ  
pashta kamui / chine somoki ko, / toi rai / wen rai  
pasta kamuy ci=ne somo ki ko, toy ray wen ray  
端下 神 私・～である ない ～する すると ひどい 死 悪い 死
- 93 チキ ヤクネ チウタリヒ カ、ヤイエランペウテク クニ  
chiki yakne / chiutarihi ka, / yaierampeutek kuni  
ci=ki yakne ci=utarihi ka, yayerampewtek kuni  
私・～をする ならば 私・～の仲間 も 自分がわからなくなる こと
- 94 チエランポケン ウネカヲカラ クス、  
chierampoken / unekarkar kusu,  
ci-erampoken un=ekarkar kusu,  
される・～を哀れに思う 私・～に～をする ので
- 95 レンカイネ キラアシ ヤッカ ソモ ウンノシパ  
renkaine / kiraash yakka / somo unnoshpa  
renkayne kira=as yakka somo un=nospa  
おかげで 逃げる・私 しても ない 私・～を追いかける
- 96 ルウエ ネ アワン。  
ruwe ne awan.  
ruwe ne awan.  
～である だったのだ

思つてゐたのはオキキリムイ、神の様な強い方  
思っていたのは、実はオキキリムイ、神のように勇壮なお方  
was actually Okikirmui, the gentleman who is as brave

なのでありました。  
だったのでありました。  
as a god.

たゞの人間が仕掛けた弩だと思つて  
ただの人間が仕掛けた弓だと思つて  
Thinking that those traps had been set by a mere human,

毎日毎日悪戯をしたのをオキキリムイ  
毎日毎日私が悪さを働いたのをオキキリムイ  
I had played my tricks every day, and Okikirmui had

は大そう怒つて蓬の小弩で  
は怒つてヨモギの小さい弓で  
grown angry and tried to kill me

私を殺さうとしたのだが私も  
私を殺さうとしたのですが、私も  
with a mugwort bow. Although I am no

たゞの身分の軽い神でもないのに、つまらない死方悪い死方  
身分の軽い神ではなかったのに、ひどい死悪い死  
low-ranking deity, if I had died a terrible death, a bad death,

をしたら、私の親類のもの共も、困り惑ふであらう  
をとげたならば、私の親類の者たちも、困るだろうと  
my relatives would also be distressed,

事を不憫に思つて下されて  
あわれに思つて下さって、  
but thankfully Okikirmui took pity on me

おかげで、私が逃げても追いかけてこなかった  
おかげさまで私が逃げても追いかけてこなかった  
and did not follow me when I tried

のでありました。  
のでありました。  
to escape.

- 97 エエパキタ、ホシキノ アナク、イセポ アナク  
Eepakita, / hoshkino anak, / isepo anak  
eepaki ta, hoskino anak, isepo anak  
その次 に 最初 は ウサギ は
- 98 ユク パクノ ネットパケ ルプネプ ネア コロカ、  
yuk pakno / netopake rupnep / nea korka,  
yuk pakno netopake rupne p ne a korka,  
シカ ほど ~の体 大きい もの ~である した けれども
- 99 タンコラチ アン ウェン イララ チキ クス  
tankorachi an / wen irara / chiki kusu  
tan koraci an wen irara ci=ki kusu  
この ように ある 悪い いたずら 私・~をする ので
- 100 オキキリムイ シネカマハウエ パクノ オカヤシ ルウエ ネ。  
Okikirmui / shinekamahawe pakno / okayash ruwe ne.  
Okikirmuy sine kamahawe pakno okay=as ruwe ne.  
オキキリムイ 一つの ~の肉片 ほど ある(複)・私 のである
- 101 テワノ オカイ アウタリヒ、オピッタノ、エネパクノ  
Tewano okai / autarihi, / opittano, enepakno  
te wano okay a=utarihi, opittano, ene pakno  
これから いる(複) 私たち・~の仲間 みんな このように まで
- 102 オカイ クニイ ネ ナンコロ。  
okai kunii ne nangor.  
okay kuni i ne nankor.  
いる(複) ことになるもの ~である だろう
- 103 テワノオカイ イセポウタラ、イテツキ イララ ヤン。  
Tewanookai / Isepoutar, itekki irara yan.  
te wano okay isepo utar, itekki irara yan.  
これから いる(複) ウサギ たち 決して~するな いたずらする しなさい
- 104 アリ イセポトノ ポウタリ パシクマ ワ オンネ。  
ari Isepotono poutari pashkuma wa onne.  
ari isepo tono poutari paskuma wa onne.  
と ウサギ 長(おさ) 子供たち ~に教え諭す して 年老いて死ぬ

それから、前には、兎は  
それから、前にはウサギというものは  
Now, although hares were once

鹿ほども體の大きなものであつたが  
鹿ほど体が大きかったのですが、  
as large as deer,

此の様な悪戯を私がした爲に  
このように悪い行いを私がしたために  
because I did wicked deeds,

オキキリムイの一つの肉片ほど小さくなつたのです。  
オキキリムイの食べる鍋の中の肉片ほどの大きさに私はなつてしまったのです。  
I ended up as small as a piece of meat in Okikirmui's pot, and

これからの私たちの仲間はみんなこの位の  
これからの私の仲間たちは、みなこれくらいの小さい体に  
from now on, all my kin will be

からだになるのであらう。  
なるだろう。  
as small as I am.

これからの兎たちよ、決していたづらをしなさんな。  
これからのウサギたちは、決して人を見下げるようなことをしないように  
All you young hares, you must never look down on the humans.

と、兎の首領が子供等を教へて死にました。  
とウサギの長は子供たちに教へて死にました。  
So taught the leader of the hares to the hare children, and died.

## 〔言葉の解説〕

## ・ピンナイ カマ pinnay kama (2行目)

ピンナイ pinnay は、< pir-nay (傷・沢) で、傷のように細く深い沢 (知里、地名アイヌ語小辞典)。カマ kama (をまたぐ) は、この場合、副詞的に使われています。幅の狭い細く深い谷をまたいで跳びこえたということ。

## ・ユピネクル yupinekur (3行目)

「兄」は、ユプ yup。その所属形はユピ yupi。これでは音節が2にしかならないので、ユピネクル yupinekur < yup-ne-kur (兄・である・人) と4つにふやしたもの。

## ・ケシトアンコ kes to an ko (4行目)

これは慣用句で「毎日」と言う意味。元の遂語的な意味は、ケシト アンコ kes to an ko (毎・日・ある・～すると)。

沙流方言では、ケシト アンコロ kes to an kor といいます。

## ・クアレ ku are (5行目)

ク ku は弓のこと。アレ are は、< a-re (座る・させる) で、置く、仕掛ける、こと。他の地域では、クアリ kuari ともいいます。ところで、普通、ウサギ猟では、仕掛け弓 (アマッポ) は使われず、枝の弾力を利用したワナを使います。これをヘピタニ hepitani (頭・を解く・木) といいます。これにカ ka という糸輪をつけて、ウサギが輪の中に頭を突っ込むと枝が弾けて、ウサギがぶら下がるようにしたワナ (イセボカ isepo ka) です。しかし、この話では、まだウサギが鹿ほどの大きさがあったということなので、仕掛け弓 (クアレ kuare、または、アマッポ) が使われたことになるのです。

## ・ヘチャウエレ ランケ hecawere ranke (6行目)

ヘチャウエレ hecawere は、< he-cawe-re (頭・を解く・させる) 仕掛けの頭部 (トリガー) がはずれて、矢を発射させること。ウサギは、仕掛けられている矢を事前に発射させて、仕掛け弓を無効にしたのでした。クマなどは利口なため、仕掛け弓を見つけると、こわして使えなくした話も残っています。

ランケ ranke は、助動詞で、「くりかえし～する」という意味。

## ・ネワアンペ ne wa an pe (6行目)

この言葉は、直訳するとネワアンペ ne wa an pe (～になっ・て・いる・もの) で、「それ」という意味。

## ・センネカスイ… チラムアイ senne ka suy... ci=ramu a i (8～9行目)

センネカスイ senne ka suy は「少しも～しない」という意味。

チラムアイ ci=ramu a i は、(私が思っ・た・のに) という意味。i には「(～したのに)」という意味があります。ここ全体で「(そうであるとは) 思ってもみなかったのに」という意味。

## ・クオロクシ ku oro kus (10行目)

直訳すると、ku oro kus (弓・の所・を通る) となります。仕掛け弓には、その先にノッカ nop ka という延べ糸が動物の通り路に張られています。ちょうどケモノ道を横切るようになっているので、そこを通ると、矢が発射される仕組みになっています。ですからクオロクシ ku oro kus するとは、矢の所から出ている糸を通過すること、つまり、仕掛け弓に射たれることです。

## ・ラヤイセイセ rayayayse (10行目)

これは、ラヤイセイセ rayayayse を誤植したのではないのでしょうか。第3話の96行目は、ラヤイセイセ rayayayse となっています。この言葉は < ray-ay-ay-se (ひどく・ワー・ワー・と言う) と分解でき「ワーワー泣き叫ぶ」こと。

## ・インカラス inkar kusu (14行目)

直訳すれば、インカラス inkar kusu (見る・ので) ですが、慣用句で「さて」とか「これこれ」という意味。

## ・アコロ コタン a=kor kotan (16行目)

アコロ a=kor のア a= は、神謡の引用文中では、「私」という意味になります。と同時に、「私たち」という意味にもなります。知里幸恵は「私たちの村」と訳しています。

## ・コタノシマク kotan osmak (16行目)

村に到着したとき、コタン オシマク kotan osmak (村・の後) で、大声で人を呼ぶようにと兄ウサギは頼みました。なぜ村のオシマク osmak で、大声を出すのでしょうか。切替英雄氏は オシマク osmak を「村の裏山の方角」と考えています。

## ・クシネナ kusne na (18行目)

この言葉は「～することになるだろうよ」という意味ですが、実際には「～するのだぞ」という命令の意味になります。

## ・チエエセクル エチウ ci=eeseeskur-eciw (20行目)

意味的には、エエセ eese < e-ese (～について・了承する) で十分なのですが、神謡的な雅語の言い回しで音節を増やすために エエセクルエチウ eeseeskur-eciw (はいと言う) となっています。この場合のクル kur は、特別に意味をもっていません。たとえばヤイクルカタ yay-kur-kata (自分で) という言葉のクル kur も同様に、これといった意味をもっていません。ヤイカタ yaykata でも同じ意味です。エチウ eciw < e-ciw (頭・を刺す) は、彫刻のときのように頭を床にこすり付けんばかりに前屈みになった様子。そこから「ひたむきに」といった意味になったのではないのでしょうか。ここではひたむきに「ハイハイという」こと。

## ・チエイシカルンカ ci=eyaysikarunka (28行目)



エヤイシカルンカ eyaysikarunka は、< e-yay-sikarun-ka (～について・自分・を思い出す・させる) で、「自分のことを思い出させる」→自分自身の記憶をたどろうとする、こと。

・ヘトポ hetopo (29 行目)

ヘトポ hetopo は、副詞で、「もどって」という意味。

・ホロカ タツカラ horka tapkar (31 行目)

ホロカ タツカラ horka tapkar は、「後へ踏舞する」こと。逆向きに踏舞するとは、後歩きのようにして遊びながら行くこと。兄ウサギから頼まれた危急の内容をすっかり忘れてしまったために、村に向うときと同じようにのん気に遊びながら現場へ向うこと。

・アリ アンコ オヤクタ テレケ ari an ko oyak ta tarke (35 行目)

この言葉は、直訳すると、「と・ある・すると・別・に・とぶ」→「と(話が)あったが、別な所に飛んだ」。このテレケ terke (とぶ) は、話が別な所に「とぶ」ことと、ウサギが「とぶ」ことと掛けてあります。

・ネブ アエカラペ タン nep a=ekar pe tan (44 行目)

直訳すると「何・を人がする・もの・なのか」。カラ kar には様々な意味があって、一般的には「を作る。をする」という意味。ここでは「(こんな物) 何に使われるんだろう」といった意味。

・ネア ク オロ チオシマ フミ nea ku oro ci=osma humi (48 行目)

直訳すると「その・弓・の中・に私が突っ込む・感じ」「その弓にはまる感じ」ということ。クアレ kuare (仕掛け弓) ならば、ウサギが触れてトリガー (とめ金) が外れ、矢が発射されたことを意味します。自分から弓にはまるという表現は、まるでウサギワナ (イセボカ isepo ka) にはまったような感じがして何か変です。51 行目の表現とともに、もう一度考えてみます。

・チモネトコ ロココサヌ ci=monetoko rorkosanu (49 行目)

モネトコ ロココサヌ monetoko rorkosanu は < mon-etoko ror-kosanu (手・の先 擬音・急に～する) →「手の先がガンとする」。「腕の先に衝撃が走った」こと。

・ヤイエホトウリリ yayehoturiri (50 行目)

この言葉は、< yay-e-ho-turiri (自分・～に対して・尻・を伸ばし伸ばしする) →「自分自身で～に対して尻を何回も伸ばす」。もがいて逃げようとする動作。これもウサギワナから逃れる動作を感じさせます。

・ポオ ユツケノ アウンヌンパ poo yupkeno a=un=numpa (51 行目)

ポオ ユツケノ poo yupkeno は「なおさら、きつく」という意味。アウンヌンパ a=un=numpa は「くり返し締められる」こと。

この表現は、まさにウサギワナにかかった様子を表わしているようです。ウサギワナは、

ウサギが、カ ka (糸輪) に首を突っこむと、その弾みで、止めが外れ曲げておいた枝 (ヘビタニ hepitani) が弾けて、ウサギの首に輪をかけたまま首吊り状態でぶら下げます。そのときウサギの後足が地面に着くくらいでぶら下がっています。ウサギは苦しまぎれに後足で尻を伸ばすように逃げようともがきます。すると首にかかった糸輪は、首にぐいぐい食い込みます。これを「くり返し締められる」と表現したものと思われれます。

こうしてみると、仕掛け弓 (クアレ) とウサギワナ (イセボカ) が混同して語られているように思えます。一般に狩猟は男性が行うもので、女性は、狩猟についての詳しい知識をもっていないのが普通です。そうした背景から、混同が行ったのではないのでしょうか。知里幸恵は、彼女のおばあさんのモナシノウクからこの物語を伝承しているのです。これらの女性たちは猟具の構造にうかつたと考えられます。もう一つ。ウサギ猟といえば、イセボカを使うのは常識なので、どうしても、ウサギが鹿ほども大きかったというこの物語の前提をついつい忘れてしまった、ということも考えられます。

・チコアスラヌレ ci=koasuranure (56 行目)

コアスラヌレ koasuranure は、< ko-asur-anu-re (～に・うわさ・運ぶ・させる) →「～に伝言を運ばせる」。アスラヌ asuranu は、緊急なことを知らせる、こと。沙流方言では、アスラニ asurani といいます。

・クルマム kurmam (59 行目)

クル kur は「人影」。マム mam を加えて音節をふやしたもの。mam については [参考] で触れます。

・チシプスレ cisipusure (59 行目)

この言葉は、< ci-si-pusu-re (～される・自分・をとび出させる・させる) →自分を出す → (見えない所から) 現われる。神話的な雅語表現。

・カムイコロペ kamuy kor pe (63 行目)

この言葉は、< kamuy-kor-pe (神・～をもつ・もの) →神の持ち物。宝物、宝器のことをいいます。具体的には、シントコ (行器)、パッチ (鉢)、タマサイ (首環)、宝刀など。

・チエシクテ ciesikte (64 行目)

チ～テ ci～te という型をもつ日常語とは異なる言葉づかい。意味はエシク esik (でいっぱいになる) と同じ。59 行目のチシプスレ cisipusure も、チ～レ ci～re という同じ型の言いまわし。

・ホカ オツテ hoka otte (66 行目)

ホカ hoka は、「火の上」。オツテ otte は、< ot-te (～ついている・させる)。(鍋を) 火の上に掛ける、こと。日常語では、ホカ オ hoka o といいます。

・ソサモツペ sosamotpe (66 行目)

この言葉は、< so-sam-ot-pe (座・そば・についでいる・もの) →壁に掛かっている刀。

・タウキタウキ tawkitawki (67 行目)

タウキ tawki は「をたたき切る」こと。似た言葉に トウイエ tuye (を切る) があります。トウイエ tuye は、切る動作一般に使われます。タウキタウキ tawkitawki は、バツサバツサとメツタ切りにすること。

・エウシエウシ eus-eus (68 行目)

この言葉は、< e-us (頭・をつける) の反復形。鍋の下に頭をつけるようにして火を吹くこと。エウシエウシ euseus と繰り返すことで、フーフーと頭を動かして吹く反復の動作を表わす。

・ネコナカ イキチアシ ワ nekona ka iki-ci=as wa (69 行目)

ネコナ ka nekona ka で、「どうにかして」。イキチアシ ワ iki-ci=as wa は、(ものをする・くり返す・私・して) で、「私がくり返しして」。全体で「どうにかして」という意味。

・シクトウル チトウシマク sik-uturu ci=tusmak (70～71 行目)

シクトウル sik-uturu は、「目・の間」→目が見ているスキ間。チトウシマク ci=tusmak は、「私が先を越す」こと。目が見ていないスキをねらうこと。

・ウノヤクン インカラ un=oyak un inkar (71～72 行目)

ウノヤク ウン インカラ un=oyak un inkar は、「私の外の所を見る」こと。ウノヤク un=oyak (私に・別な所) というように位置名詞の オヤク oyak に目的格が付いたアイヌ語独特の表現。似た表現に ウンサム タ un=sam ta (私のそばに) があります。

・ネッネウシ カ チエランペウテク nep ne usi ka ci=eranpewtek (73～74 行目)

同じ表現が第3話の117行目に出てきます。直訳では「何になる所も私は分らない」→「何にもならない」。つまり、意味もない死に方を指しているのでしょうか。

・エトクシ etokus (74 行目)

エトクシ etokus は、助動詞で「～しそうになっている」。このままでは～になってしまう、という意味。ここでは「ひどい死、悪い死をとげてしまうことになる」ということ。

・ネ チヤイカッテク ne ci=yaykar tek (77 行目)

ネ ヤイカッテク ne yaykattek は < ne yay-kar tek (～に自分が化ける・さっとする)。ネ ヤイカラ ne yaykar で「～に化ける、に変身する」こと。テク tek は瞬間的な動作を表わし、「さっと」という意味をそえます。yaykar の r が、すぐ後の tek の t に影響されて yaykat になったもの。「に私はさっと身を変える」こと。

ところで、浜田隆史氏の指摘で気がついたのですが、ヤイカラ yaykar は自動詞なのに、他動詞の接辞 チ ci= がついています。本来ならばヤイカラシ テク yaykar=as tek となるはずですが。中川辞典ではネ ヤイカラン ne yaykar=an とちゃんと自動詞の人称接辞がついています。もしかすると、エヤイカラ eyaykar (～化ける) という他動詞と混同したのかも

知れません。

・リクン SPA チヤイコポイエ rikun su pa ci=yaykopoye (78 行目)

リクン SPA rikun su pa は、「上方の・鍋・の湯気」。yaykopoye は、< yay-ko-poye (自分を・～に・混ぜる)。全体で、「立ちのぼる鍋の湯気に自分をまぎれこませる」こと。

・テレケアシテク terke=as tek (79 行目)

テレケアシ terke=as (私がとぶ) に助動詞 テク tek (さっと) が付いたもの。「私は、さっとと跳ぶ」。見つからないようにす速い動作で跳ぶこと。なお、テク tek は「～して」という接続助詞と解釈することもできます。

・エアシカ ヤイカフムスアシ easka yaykahumsu=as (83 行目)

エアシ カ easka は、「初めて、やっと」。ヤイカフムス yaykahumsu は、< yay-ka-humsu (自分・の上・をねぎらう) →自分自身で危難をなんとか越えたことに安堵する。全体で、「やっとのこと難をのがれてホッと胸をなでおろす」こと。フムス humsu は、沙流などでは ホムス homsu。よく ケウエホムス kewe homsu (難をのがれたことをねぎらう) という形で使われます。

・ヤイエランペウテク クニ チエランポケン ウネカラカラ

yayerampewtek kuni cierampoken un=ekarkar (93～94 行目)

ヤイエランペウテク クニ yayerampewtek kuni は「自分が分からなくなる」。チエランポケン ウネカラカラ cierampoken un=ekarkar は「私をあわれんでくれる」。チエランポケン cierampoken は、< ci-erampoken (人が・あわれむ) →あわれみ。ウネカラカラ un=ekarkar は「私に(あわれみ)をしてくれる」→私をあわれんでくれる。全体で、「(親類が) 何者かもわからなくなって困ることをあわれんでくれる」という意味。

・エエパキタ eepaki ta (97 行目)

エエパキ eepaki は、エエパク eepak (次) の所属形。エエパキ タ eepaki ta で「その次に」→「それからは」。知里の分析によると、eepaki < e-i-pake (それについて (の)・そのの・頭部) 端 (地名アイヌ語小辞典)。エエパキ eepaki には「端、次」という意味があります。ものの「端」は、「次」への初まりでもあるので。

・イセポ isepo (104 行目)

イセポ isepo (ウサギ) は、< i-se-po (イー・という・小さなもの) から。ウサギは普段ほとんど鳴くことはないのですが、交尾期にオス同士が、かなり激しい闘いをし、そのときにイーというような声を上げて鳴きます。そこから「イーという小さなもの」→ウサギ。

## 〔参考〕

ここでも難語、不明語の解明を試みてみます。

・サンパヤ テレケ sampaya terke (1行目)

サケへのこの言葉の中では、テレケ terke (とぶ) しか意味が分かりません。その前のサンパヤ sampaya とは何でしょうか？

久保寺辞典に、sampanun terke=ikonnu terke とあり ikonnu は「のろう、だます」と出ています。また萱野辞典にもウサギが ikonnu (のろう) する話が出ています。全体で「呪い跳び」するというような意味があるのかも。このテキストの内容もまさに「呪い跳び」です。

・ケツカ ウオイウオイ ketka woy woy (36行目)

これは、途中で変わったサケへです。これも意味不明です。

ケツ ket は、「なめした皮を張る枠」のこと。ケツニ ketni は「なめした皮を張る枠木」のこと。ウオイウオイ woy woy は、泣き声。そこから、ket(ni) ka woy woy 「皮張り木の上でオイオイ泣く」。つまり、ワナにとらえられ、皮をなめされ皮張り木に張られてその上でオイオイ泣く様子を表わしたのではないのでしょうか。いずれにせよ、仕掛け矢に当たって泣いている兄ウサギの心情を表わしたものと考えられます。

・ウトロサマタ utorsama ta (41行目)

ウトロ utor は、< ut-or (肋骨・の所) で、「脇」という意味。サマ sama も「そば」という意味。

・アイヌクルマム aynu kurmam (59行目)

アイヌ クルマム aynu kur-mam (人影) は、アイヌ クル aynu kur だけでも同じ意味です。これも音節をふやすために kurmam としたのでしょうか。しかし、この mam の意味は不明です。

mam は、< maw (気。風。息吹) からではないのでしょうか。maw には、maw-tum (気・中) → 「様子」という派生語もあります。kurmam で「影の気配」といった意味になるのではないのでしょうか。

・カマハウ kamahaw (77行目)

カマハウ kamahaw も意味不明の言葉です。カム kam は、「肉」という意味です。ahaw とは何でしょうか？

ahaw は、< ohaw (汁) が元ではないのでしょうか。その前にある a に引かれて o が a に変わったと考えられます。kam-ohaw (肉・汁) が「汁の中の肉」という意味になったと考えられます。

オハウ ohaw は、ルル rur (実のない汁) とは違って、具がたっぷり入ったスープで、アイヌ民族の代表的な料理です。日本語の「おつゆ」や「汁」とは違って、むしろ、汁分の多い鍋料理に近いものです。日本食の「おつゆ」のように主食の添え物ではなく、それが主食となるもので、語源的には、ohaw < oma-p ((鍋) に入っている・もの) が考えられま

す。

・ルウェ ネ アワン ruwe ne awan (87行目)

この中のアワン awan とは、どのような言葉でしょうか。

一つとして、< a(w) an、つまり w は渡り音で、元は < a an (であった・ある) という解釈。もう一つは < a(wa) an (であったのである)、つまり、ワ wa (~して) の a が重なるので一つになったという解釈。私としては、前者の渡音ではないかと考えています。第2話の30行目にアウォカイ awokay (複数形) が出てきます。これだと wa と考えにくいからです。しかも複数形でロコカイ rokokay の形もあります。ロク rok はア a (座る) の複数形。

・イララ irara (89行目)

イララ irara を知里幸恵は「いたずらをする」と訳しています。この言葉は、物語の結末によく出てきて「これからの〇〇よ、決して人間たちにイララ irara するのではないぞ」と結ばれます。現代の私たちには、「いたずら」程度で、殺すなんてちょっとやりすぎではないか、と思われまます。そこで、この言葉の元々の意味を考えてみました。

この言葉の関連語で、i の伴わない、ララ rara という言葉があります。これは「(誰か)を見下げる」という意味です。i-rara で「もの(人)見下げる」という意味になります。

相手を軽く見て、バカにしたり、軽蔑すること、それを、決してするのではないぞ、と若い次世代に伝えることが真意だったのではないのでしょうか。

コラム (8)

ウサギはなぜ小さくなったのか？

このテキストでは、かつてウサギ(エゾノウサギ)は鹿ほどの大きさもあったが、人間に悪さをしたために肉片ほどの小さなものになったと語られています。これは登別での伝承ですが、道東の釧路でも同じように、人間に悪さを働いたために大ウサギの体が細かく切りきざまれて、今のように小さくなったという伝承が残っています。いったいなぜ大きかったウサギが小さくなったという話が生まれるようになったのでしょうか？

それから、ウサギは、この話の中の弟ウサギのようにのん気者として登場する半面、兄ウサギのように仕掛けたワナを見破って、こわしてしまうという「知恵者」としても描かれています。静内の伝承には、ウサギが若い男に化けて、人間の女を嫁にしようとする話が伝えられています。なぜ、ウサギには、知恵者で、人をだまそうと「化身」したりする話があるのでしょうか？このテキストでも、兄ウサギが人間をバカにして悪さを働きます。ウサギは、なぜ人間を「バカにする」ように描かれているのでしょうか？

また各地のウサギに関する伝承では、悪さをしてこらしめられる話が多くあります。悪さをして逃げようとするところを燃えた薪で叩かれたので耳の先が黒いのだ、という話もあります。ウサギは、なぜ「悪さをする者」とされたのでしょうか？

まず、悪さをする点について。イセポ isepo (ウサギ) という言葉を口に出すと、海が荒れると考えられ、代わりにカイクマ kaykuma (折れる棒) といわれる地域もあります。それは、沖に白波の立つことをイセポ テレケ isepo terke (ウサギが跳ぶ) と呼んでいたのので、海が荒れないようにウサギ(イセポ) という言葉を海では使わなかったのです。カイクマ(折れ棒)は、横棒のように並んだ波が折れて白波を立てることをいったのでしょうか。このように海を荒れさせる力をウサギがもっていると考えられたことが、悪さをする者のイメージを作ったのではないのでしょうか。もう一つ、胆振の伝承では、畑に出て「イセポ」(ウサギ) という言葉を口にする、ウサギが出てきて畑を荒らす、と伝えられています。そのため、代わりに、エペッケ epetke (顔が裂けている) という言葉で呼んだといわれています。このように、ウサギには、海を荒らしたり、畑を荒らすもの、というイメージ、つまり悪さを働く者のイメージがあるようです。

次に、知恵者とか、化身したり、人をだますという点について。

アイヌのクマ撃ち猟師として長い経験をもつ千歳に在住する姉崎等<sup>あねざきひとし</sup>さんに聞いてみました。姉崎さんは、子供のときからウサギ猟をやってきて、ウサギの生態についてとても詳しい方です。姉崎さんによればウサギは、いろいろな動物の中で最もみごとに「止め足」を使う動物だといえます。止め足とは、追われた動物が、雪や土に残った自分の足跡をもう一度逆に辿って、ある地点で、横に大きく跳んで (sampaun terke すること)、自分の足跡をたどれなくする実に知恵に満ちた方法です。ウサギの足跡を追っていった人間は、途中から足跡が消えてしまうので、だまされたような気持ちになります。何か近くの物に化けたのではないかとも思えてしまいます。ウサギは動物の中で止め足が最も上手なので、人をだますとか、化身すると考えられたのではないのでしょうか。sampaun terke (脇へ跳ぶこと) が ikonnu (だます) といわれるのはそのためでしょう ([参考] の「サンパヤ テレケ」参照)。

最後に、ウサギが小さくなったのはなぜかという点について。私は、この謎が、どうしても分りませんでした。しかし、あるとき、ウサギの後足が大きいことに気がつきました。もしかすると雪の上にウサギの足跡がつくと鹿の足跡よりも大きいのではないかと考えたのです。ウサギの後足は、よくカンジキを履いたようだといわれます。早速、また姉崎さんに聞いてみました。すると、たしかにウサギの後足の足跡は大きくて、雪の上の足跡が少しとけると、クマの足跡と間違える人もいるくらいだといえます。さらに道東の弟子屈や樺太の伝承では、鹿とウサギが脚をとりかえたという話が残っていました。鹿の脚をつけたウサギは、それ以降どんな深い雪の上でも早く走れるのだといえます。鹿ほども大きかったのが小さくなったという話は、やはりウサギの足跡が鹿よりも大きいことから生まれたのだと考えられます。しかし、止め足を使って人間をだましたり、バカにしたりすることに、こらしめが必要だということから多くの話で、ウサギがこらしめられて小さくされたと、なっているのだと考えられます。

## 5

### 谷地の魔神が自らうたった謡

#### 「ハリツクンナ」

#### nitatorunpe yayeyukar

#### Song sung by dragon god



## 第5話

### 谷地の魔神が自らをうたった<sup>うた</sup>謡

#### 「ハリッ クンナ」

##### 〔物語とその背景〕

これは、村の近くの湿地帯（谷地）に住む魔もの、竜が自ら物語ったお話。

私、竜は、良い天気につられて湿地から目と口だけ出して辺りをながめていた。すると、二人の男が浜の方から連れだってやってきた。先にやってきた男は、りりしい顔つきをしていて、後からきた男は、恰好も悪く顔色も悪かった。

後から来た男は、私の前に立ち止まると「なんて臭くて汚い谷地だろう」といった。それを聞いて私は前後の見さかひもなくなるほど怒りが一気にこみあげてきて、泥の中からとび出し、牙をガチガチかみ鳴らしながら二人の男を追いかけた。先に来た男は、さっと身をかかわして逃げたので、私は顔色の悪い男を追いかけて、頭から丸のみにしてしまった。そこで、もう一人の男を追いかけていくと、その男の村に着いた。すると赤衣着物を沢山着て正装した火の神がとんできて、ただちに帰れと行って、赤い杖をふり上げると炎が雨のように降ってきた。それにひるむことなく私、竜は、その男を追いかけて村中をとんでいくと、大地は裂けて破れ、村中大騒ぎとなり、泣き叫びながら逃げまどう人で煮えくりかえるようなありさまとなった。すると火の神が私のそばに走ってきて巨大な炎を頭の上に炸裂させた。その時、逃げている男は、一軒の家にとびこんでヨモギの小矢をもってきて私をねらった。私は笑いを浮かべながら「そんなものが当たっても痛いものか」とその男をのみこもうとした。そのとき、矢は私の首に命中し、それきり私は意識を失った。ふと気がつくとき、竜の耳と耳の間に自分がいた。そして、あの男の指示で村中の人たちが集まって私の体を細かく刻んで集めて燃やして山の岩の後にばらまいた。その時、あの男は、ただの男ではなく、立派な勇者オキキリムイであることを初めて知った。オキキリムイは、村の近くに私、竜が住んでいて危険なので、わざと私をあざけり、自分を追いかけてさせてヨモギの矢で殺したのだった。そして顔色の悪い男だと思っていたのは、オキキリムイが、大便で人間を作ったものだった。私は、人に災いをもたらす魔神なので今はもう奈落につき落とされてしまい、人間の世界には危険も困難もなくなったのである。

私は人も恐れる魔神だったが、一人の人間の霊力に負けて、つまらない死をとげることになったのである、と谷地の魔神は物語った。

これは、竜の方から人間に悪さを働いたのではなく、人間に挑発されて人間を追うことになった話。現代風にいえば、おとり捜査による逮捕といったところでしょう。なぜこんなことをしたのでしょうか。

話の中に、男を丸のみにする場面が出てきます。人間を丸のみするとは、谷地（湿地）の

中に人間がはまっけてのまれていくことを象徴しているようです。こうした事故は、実は、そこに住む魔もの（竜）のしわざだと考えられました。そのため、人をのむ魔ものを前もって退治しておかなければ、次々と犠牲者が出ることとなります。こうして、先を見通す力をもつ人間によって事故を未然に防ぐ方策がとられたのでした。それが挑発して正体を出させて退治することだったのでしょう。

竜が自分のことを物語っているが、実は人間の英知を反対側からの目で語ってくれたのです。人間たるもの英知を持たなければならないぞ、というメッセージでもあります。この英知に相当するアイヌ語はヌプルカス *nupurkasu*（優れた霊力）といえるでしょう。

ニタトルンペ ヤイエユカラ 「ハリッ クンナ」  
 Nitatorunpe yaieyukar, “ Harit kunna ”  
 nitat or un pe yayeyukar, “ harit kunna ”  
 湿地 ~の中にある者 自らを物語る ハリッ クンナ

サケヘ：ハリッ クンナ harit kunna

- 1 ハリッ クンナ  
 Harit kunna  
 harit kunna  
 ハリッ クンナ
- 2 シネアント タ シリピリカ クス  
 Shineanto ta / shirpirka kusu  
 sineanto ta sirpirka kusu  
 ある日 に 天気がいい ので
- 3 チコロ ニタツ オッタ チシキヒ ネフ チパロホ パテック  
 chikor nitat otta / chishikihi newa / chiparoho patek  
 ci=kor nitat or ta ci=sikihi newa ci=paroho patek  
 私・~の 湿地 ~の中で 私・~の目 と 私・~の口 だけ
- 4 チエトウツカ ワ、インカラシ カネ オカヤシ アフ  
 chietukka wa, / inkarash kane / okayash awa  
 ci=etukka wa, inkar=as kane okay=as awa  
 私・~を突き出す して 見る ・私 しながら いる ・私 したところ
- 5 ト オピスン アイヌクツケシ サラサラ。  
 to opishun / ainukutkesh sarasara.  
 to opisun aynu kutkes sara sara.  
 ずっと 浜の方から 人間 かすかな声 現れる 現れる
- 6 インカラ アシ アフ トウ オツカイポ ウセトウル カ ララパ カネ。  
 Inkar ash awa / tu okkaipo / usetur ka / rarpa kane.  
 inkar=as awa tu okkaypo u-setur-ka-rarpa kane.  
 見る ・私 したところ 二人の 若者 互いに背中を押す しながら
- 7 ホシキ エクペ、ラメトクソネ ラメトキポロ  
 Hoshki ekpe, / rametoksone / rametokipor  
 hoski ek pe, rametok sone rametok ipor  
 最初に 来る 者 勇者 間違いなく 勇者 容貌
- 8 エイポットウム ニウナタラ、カムイシリネ オカイコ、  
 eipottumu / niunatarā, / kamuishirine / okaiko,  
 e-ipor-tumu-niwnatarā, kamuy siri ne okay ko,  
 ~で・容貌・~の中・猛々しい 神 ~のようである(複) すると
- 9 イヨシ エクペ チヌカラ コ、カトウフ カ ウエナウエナ  
 iyoshi ekpe / chinukar ko, / katuhu ka / wenawena  
 iyosi ek pe ci=nukar ko, katuhu ka wen a wen a  
 その後に 来る 者 私・~を見る すると 格好 も 悪い して 悪い して

谷地の魔神が自ら歌った歌「ハリッ クンナ」  
 谷地の魔神が自らを歌った歌「ハリッ クンナ」  
 Song Sung by the Dragon God "Harit kunna"

ハリッ クンナ  
 ハリッ クンナ  
 Harit kunna

或日によいお天気なので  
 ある日よい天気なので  
 One day, the weather was fine, so

私の谷地に眼と口とだけ  
 自分の谷地で目と口とだけ  
 I stuck just my eyes and mouth outside my swamp

出して見てみたところが  
 突き出してあたりをながめていると  
 to look around. When I did,

ずっとと濱の方から人の話聲がきこえて来た。  
 はるか浜の方から人のかすかな話し声が聞こえてきました。  
 I heard the faint sound of voices coming from the beach far away.

見ると、二人の若者が連れだつて来た。  
 私が見ていると、二人の若者が連れだつて来ました。  
 When I looked, I saw two young men coming toward me.

先に来た者は勇者らしく勇者の品を  
 先に来た者は、いかにも勇者らしく、顔に  
 The first one who came appeared quite brave

そなへて、神の様に美しいが  
 りりしささをそなえて、神のような気高さをもっていました、  
 and manly and carried himself with the nobility of a god, but

後から来た者を見ると、様子の悪い  
 後から来た者を私が見ると、格好もひどく  
 when I looked at the second one who came, I saw that he was an awkward,

- 10 レレク オッカヨ ネフ、ヘマンタオカイペ エウコイタッコ  
 rerek okkayo newa, / hemantaokaipe / eukoitakkor  
 rerek okkayo ne wa, hemanta-okay-pe eukoytak kor  
 弱々しい 男 ~である して 何か ある(複)こと ~について話し合う しながら
- 11 アラキ アイネ、チコロ ニタツ サマケヘ クシパ、  
 arki aine, / chikor nitat / samakehe kushpa,  
 arki ayne, ci=kor nitat samakehe kuspa,  
 来る(複) したあげく 私・~の 湿地 ~のそば ~を通る(複)
- 12 ウンペカノ アラキ アイケ、イヨシノ エク レレク アイヌ  
 unpekano / arki aike, / iyoshino ek / rerek ainu  
 un=pekano arki ayke, iyosino ek rerek aynu  
 私・~を通して 来る(複) したのだが 最後に 来る 弱々しい 人間
- 13 アシアシ カネ イキ エトウフ キシマ、  
 ashash kane iki / etuhu kishma,  
 as as kane iki etuhu kisma,  
 立つ 立つ しながら する ~の鼻 ~をつまむ
- 14 「フム、シルン ニタツ ウエン ニタツ、コツチャケ アクシ アフ  
 “Hm, shirun nitat / wen nitat, / kotchake akush awa  
 “hm, sirun nitat wen nitat, kotcake a=kus awa  
 フム つまらない 湿地 ひどい 湿地 ~の前 私たち・~を通る したところ
- 15 イチャツケレ ネプタプテタ ウエン フラハ オカイペネヤ？」  
 ichakkere / neptapteta / wen huraha / okaipeneya?”  
 icakkere nep tap te ta wen huraha okay pe ne ya?”  
 汚い 何でまた ここ に ひどい におい ある(複)もの ~である のか
- 16 アリ ハウエアン。  
 ari hawean.  
 ari hawean.  
 と 言う
- 17 イヌ ネフ チキブ ネ コロカ、オカヤシ フミ カ  
 Inu newa / chikip ne korka, / okayash humi ka  
 inu ne wa ci=ki p ne korka, okay=as humi ka  
 聞くこと ~である して 私・~をもの ~である けれども いる(複)・私 感じ も
- 18 チエランペウテク トウルシキンラネ ウンコヘタリ。  
 chierampeutek / turushkinrane / unkohetari.  
 ci=erampewtek turus kinra ne un=kohetari.  
 私・~がわからない 狂ったような怒り として 私・~に持ち上がる
- 19 ヤチトウム フ ソヨテレケアシ、テレケアシコ  
 Yachitum wa / soyoterkeash, / terkeashko  
 yaci tum wa soyoterke=as, terke=as ko  
 谷地 ~の中 から 外へ飛び出す・私 跳ぶ・私 すると
- 20 トイ ヤサシケ トイ ペレレケ。チノツセフフミ  
 toi yasashke / toi pererke. / Chinotsephumi  
 toy yasaske toy pererke. ci=notsep-humi  
 土 裂けに裂ける 土 割れに割れる 私・~の牙の音

顔色の悪い男で、何か話合ひながら  
 顔色の悪い男で、二人は何か一緒に話をしながら  
 pale-faced man. The two men were talking

やつて来たが私の谷地の側を通り  
 来て、ついに私のいる谷地のそばを通り  
 as they came, and when they passed by my swamp

ちょうど私の前へ来ると、あとから来た顔色の悪い男が  
 ちょうど私の前に来て、後から来た顔色の悪い男が  
 and came right in front of me, the second pale-faced man

立止まり立止まり自分の鼻をおほひ  
 立ち止まり立ち止まりして自分の鼻をふさいで  
 stopped short and covered his nose.

「おゝ臭い、いやな谷地、悪い谷地の前を通つたら  
 「わあ臭い、ひどい谷地、悪い谷地、この前を通つたら  
 "Phew, what a foul-smelling swamp, a bad swamp. What a filthy place

まあ汚い、何だらうこんなに臭いのは、  
 なんて汚らしい、いったい何でこんなに臭いんだろうか  
 to pass by! Why the devil does it smell so bad?"

と言つた、  
 と言いました。  
 he said.

私はたゞ聞いたばかりだけれど自分の居るか居ないかも  
 私は、それを聞いたとたんに、前後の見さかきも  
 The moment I heard this, I became so angry

わからぬほど腹が立つた。  
 なくなるほど怒りがこみ上げてきました。  
 that I couldn't tell one thing from another.

泥の中から飛出した。私が飛上ると  
 泥の中から私はとび出して、跳び上がると  
 I flew out from the mud, and when I leaped up,

地が裂け地が破れる。牙を  
 地は裂け、地は破れました。牙の音が  
 the ground split, the ground ripped apart. I gnashed my

- 21 タウナタラ、ネロクペ チトイコノシパ、イキアシ アフ、  
 taunatarā, / nerokpe / chitoikonoshpa, / ikiash awa,  
 tawnatarā, nerok pe ci=toyko-nospa, iki=as awa,  
 ガチガチという その(複)者 私・～を激しく追いかける する・私 したところ
- 22 ホシキ エクペ ウェニンカラポ キテク  
 hoshki ekpe / weninkarpo / kitek  
 hoski ek pe wen inkar-po ki tek  
 最初に 来る 者 ざっと 見ること(強調) ~をする ざっとして
- 23 チエシキル エカンナユカラ、レレク アイヌ  
 chepshikiru / ekannayukar, / rerek ainu  
 cep sikiru ekannayukar, rerek aynu  
 魚 向きを変える まるで~のようである 弱々しい 人間
- 24 テンポキヒ クシ ワ、トオ ホシキノ キラフ イサム。  
 tempokihi kush wa, / too hoshkino / kirawa isam.  
 tempokihi kus wa, too hoskino kira wa isam.  
 ~の脇の下 ~を通る して ずっと 最初に 逃げる して しまう
- 25 レレク アイヌ トウテム レテム チノシパ コ  
 Rerek ainu / tutem retem / chinoshpa ko  
 rerek aynu tu tem re tem ci=nospa ko  
 弱々しい 人間 二つの ひろ 三つの ひろ 私・～を追いかける すると
- 26 チオシコニ、キタイナ ワノ チオアンルキ。  
 chioshikoni, / kitaina wano / chioanruki.  
 ci=osikoni, kitay na wano ci=oanruki.  
 私・～に追いつく 頭のでっぺんの方 から 私・～を丸飲みにする
- 27 タタオッタ ネア オッカヨ チトイコノシパ、サパシ アイネ  
 Tataotta / nea okayo / chitoikonoshpa, / sapash aine  
 tata or ta nea okayo ci=toyko-nospa, sap=as ayne  
 さあ、そこで その 男 私・～を激しく追いかける 下る(複)・私 したあげく
- 28 アイヌ コタン ポロ コタン オシマケヘ アコシレパ。  
 Ainu kotan / poro kotan / oshmakehe / akoshirepa.  
 aynu kotan poro kotan osmakehe a=kosirepa.  
 人間 村 大きい 村 ~の背後 私・～に到着する
- 29 インカラシ アフ ウネトウナンカラ、  
 Ingarash awa / unetunankar,  
 inkar=as awa un=etunankar,  
 見る・私 したところ 私・～に出会う
- 30 アペ フチ カムイ フチ フレ コソソテ イワン コソソテ  
 Ape Huchi / Kamui Huchi / hure kosonte / iwan kosonte  
 ape huci kamuy huci hure kosonte iwan kosonte  
 火 おばあさん 神 おばあさん 赤い 小袖 六つの 小袖
- 31 コクツコロ カネ イワン コソソテ オパンネレ、  
 kokutkor kane, / iwan kosonte / opannere,  
 kokutkor kane, iwan kosonte opannere,  
 ~と共に帯を締める しながら 六つの 小袖 ~をはおる

鳴らしながら、彼等を強く追っつけたところが  
 ガチガチ鳴り、二人を激しく追いかけてました。すると  
 fangs and chased after the men ferociously. When I did,

先に来た者は、それと見るや  
 先に来た者は、それを見てざっと  
 the man who came first saw me,

魚がクルリとあとへかへる様に引かへして顔色の悪い男の  
 魚が反転するように向きを変えて、顔色の悪い男の  
 and like a fish changing direction, he did an about-face, ducked

わきの下をくぐりずーっと逃げてしまった。  
 脇の下をくぐって、はるか先へと逃げていってしまいました。  
 under the arm of the pale-faced man, and ran far ahead.

青い男を二間三間追っかけると  
 私は顔色の悪い男を二、三間追っかけると、  
 I chased the pale-faced man a short distance, caught up

直ぐ追っついて頭から呑んでしまった。  
 追っついて頭から丸のみにしてしまいました。  
 with him, and swallowed him up headfirst.

そこで今度は彼の男をありつただけの速力で追っかけて来て  
 そこで今度は、もう一人の男を私は激しく追っかけて浜の方に行ったので、ついに  
 Then, I ferociously chased the other man toward the beach, and at last

人間の村、大きな村の後へ着いた。  
 人間の村、大きな村の裏へと辿り着きました。  
 arrived at the back of a human village, a large village.

見るとむかふから  
 ふと見ると向こうから私に向かって  
 I took a glance, and across the way

火の老女神の老女があかい着物、六枚の着物に  
 火のおばあさん、神のおばあさんが赤い着物、6枚の着物  
 the Elderly Fire Lady, the Elderly Goddess, tied a belt over

帯をしめ、六枚の着物を羽織つて  
 に帯を締め、6枚の着物を羽織って  
 her six red robes and slipped on six more robes over that,



- 32 フレ クワ エクワコロ カネ、ウンテクサムタ チトウルセレ。  
 hure kuwa / ekuwakor kane, / Unteksamta / chitursere.  
 hure kuwa ekuwakor kane, un=teksam ta ci-tursere.  
 赤い 杖 ~で杖を突く しながら 私・~のそば に される・~をとばす
- 33 「ウサイネタプスイ ネブ エカラ クス タン アイヌ コタン  
 “Usainetapshui / nep ekar kusu / tan ainu kotan  
 “usayne tap suy nep e=kar kusu tan aynu kotan  
 これは不思議 何 お前・~をする ために この 人間 村
- 34 エコサン シリ タン、ヘタク ホシピ、ヘタク ホシピ！」  
 ekosan shiri tan, / hetak hoshipi, / hetak hoshipi!”  
 e=kosan siri ta an, hetak hoshipi, hetak hoshipi!”  
 お前・~に出る ~の様子 なのか さあ早く 戻る 早く 戻る
- 35 イタク カネ フレ クワ カニ クワ ウンクルカシ  
 itak kane / hure kuwa / kani kuwa / unkurkashi  
 itak kane hure kuwa kani kuwa un=kurkashi  
 話す しながら 赤い 杖 金属の 杖 私・~の表面一帯
- 36 エシタイキ、クワトウイカ ワ オトウウエンヌイ オレウエンヌイ  
 eshitaiki, / kuwatuika wa / otuwennui / orewennui  
 esitayki, kuwa tuyka wa otu wen nuy ore wen nuy  
 ~で~を叩きつける 杖 ~の上側 から 二つの ひどい 炎 三つの ひどい 炎
- 37 ウンクルカシ ウエナプトシンネ チラナランケ。  
 unkurkashi / wenaptoshinne chiranaranke.  
 un=kurkashi wen apto sinne ci-ranaranke.  
 私・~の表面一帯 ひどい 雨 のように される・~を降ろす
- 38 キブネ コロカ センネボンノ チエコッタヌ、  
 Kipne korka / sennepoanno / chiekottanu,  
 ki p ne korka senne ponno ci=ekottanu,  
 けれども ちつとも~ない 少し 私・~を気にする
- 39 チノツセブフム タウナタラ コロ、ネア アイヌ  
 chinotsephum / taunatar kor, / nea ainu  
 ci=notsep-hum tawnatar kor, nea aynu  
 私・~の牙の音 ガチガチという しながら その 人間
- 40 チトイコノシパ コ ネア アイヌ、コタントウム ペカ  
 chitoikonoshpa ko / nea ainu, / kotantum peka  
 ci=toyko-nospa ko nea aynu, kotan tum peka  
 私・~を激しく追いかける すると その 人間 村 ~の中 を
- 41 パシノ カリア シコパヤラ。オシ テレケアシ コ  
 pashno karip / shikopayar. / Oshi terkeash ko  
 pasno karip sikopayar. osi terke=as ko  
 よく走る 輪 まるで~のようである 後から 跳ぶ・私 すると
- 42 トイ ヤサシケ トイ ペレレケ。コタヌトウル ハウシタイキ  
 toi yasashke / toi pererke. / Kotanutur / haushitaiki  
 toy yasaske toy pererke. kotan utur hawsitayki  
 土 裂けに裂ける 土 割れに割れる 村 ~の間 大騒ぎになる

あかい杖をついて私の側へ飛んで来た。  
 赤い杖をついて私のそばに飛んできました。  
 and came flying toward me leaning on a red cane.

「これはこれは、お前は何しに此のアイヌ村へ  
 「これ、これ、お前は何をしにこの人間の村に  
 "Hey! What do you think you're doing,

来るのか。さあお歸り、さあお歸り。」  
 やって来たのだい。さあお歸り、お歸り」  
 coming to this human village! Go away! Shoo!"

言ひながら、あかい杖かねの杖をふり上げて私を  
 といいながら、赤い杖、金（かね）の杖で私の上を  
 she said, and when she struck me with her red cane, her metal cane,

たゝくと、杖から焰が  
 叩くと、杖の上から大量の炎が  
 from the top of the cane a mass of flames

私の上へ雨の様に降つて来る。  
 私の上にとしゃぶりの雨のように降り注ぎました。  
 poured down upon me like rain.

けれども私はちつとも構はず、  
 けれども、私は、それに少しもひるむことなく、  
 But without flinching in the least,

牙打鳴らしながら彼の男を  
 牙をガチガチと噛み鳴らしながら、その男を  
 I gnashed my fangs and chased that man

追かけると、彼の男は村の中を  
 激しく追いかけてました。すると、その男は村の中を  
 ferociously. When I did, the man passed through the village at a

よくまはる環の様に走つて行く。そのあとを飛んで  
 猛烈な速さで回わる輪のように走っていきました。私はその後をとんでいくと  
 breakneck pace, running like a rolling hoop. When I flew after him,

行くと、大地が裂け大地が破れる、村中は大きき  
 地は裂け、地は破れました。村中は大騒ぎで  
 the ground split, the ground ripped apart. The village went into an uproar.

- 43 マツテク アンパプ、ポテク アンパプ、ウラヤヤイセレ、  
mattek ampap, / potek ampap, / urayayaisere,  
mat tek anpa p, po tek anpa p, u-ray-ayayse-re,  
妻 手 ~を持つ 者 子 手 ~を持つ 者 みんなひとく泣き叫ぶ
- 44 ウキラレプ シリポプ アプコロ ハワシ コロカ、  
ukirarep / shirpop apkor / hawash korka,  
u-kira-re p sirpop apkor hawas korka,  
みんな逃げる 者 辺りが煮立つ したかのように 声がする けれども
- 45 センネポンノ チエコッタヌ、ウエン トイウブン  
sennepunno / chiekottanu, / wen toiupun  
senne ponno ci=ekottanu, wen toy upun  
ちっとも~ない 少し 私・~を気にする ひどい 土 吹雪
- 46 チシオコテ、カムイ フチ ウンテクサマ エホユブ コ  
chishiokote, / Kamui Huchi / unteksama / ehoyupu ko  
ci=siokote, kamuy huci un=teksama ehoyupu ko  
私・~を自分の後ろに 神 おばあさん 私・~のそば ~に走る すると  
付ける
- 47 ウエン ヌイイキリ ウネンカタ パツケパツケ。  
wen nuiikir / unenkata / patkepatke.  
wen nuy ikir un=enka ta patke-patke.  
ひどい 炎 列 私・~の上に はねとぶ はねとぶ
- 48 ラポキタ ネア オッカヨ シネ チセ チセウブソ  
Rapokita / nea okkayo / shine chise / chiseupshor  
rapoki ta nea okkayo sine cise cise upsor  
その間 に あの 男 一軒の 家 家 ~のふところ
- 49 コラウオシマ ホントモタ ソヨテレケ。  
korawoshma / hontomota / soyoterke.  
korawosma hontomo ta soyoterke.  
~に潜り込む ~すると直ぐに 外にとび出す
- 50 インカラシ アフ、ノヤ ポンク ノヤ ポナイ ウエウヌ  
Inkarash awa, / noya ponku / noya ponai / uweunu  
inkar=as awa, noya pon ku noya pon ay ueunu  
見る・私 したところ ヨモギ 小さい 弓 ヨモギ 小さい 矢 ~に~をつがえる
- 51 ウネトウナンカラ サンチャ オッタ ミナカネ ヨコヨコ、  
unetunankar / sancha otta / minakane / yokoyoko  
un=etunankar sanca or ta mina kane yoko-yoko  
私・~に出会う 口元 に 笑み を 浮かべて 狙う 狙う
- 52 シリキ チキ チエミナ ルスイ。  
shirki chiki / chiemina rushui.  
sirki ciki ci=emina rusuy.  
様子である したら 私・~を笑う したい
- 53 「エネアン ポン ノヤアイ ネイケ アウニンペ タン？」 アリ  
“Enean pon noyaai / neike auninpe tan?” ari  
“ene an pon noya ay neike a=unin pe ta an?” ari  
このように ある 小さい ヨモギ 矢 どこ 人・~を痛がる もの か と

妻の手を引く者子の手を引く者泣叫び  
妻の手をとって逃げる者、子供の手をとって逃げる者がみな泣き叫んで  
Some took their wives' hands and ran; some took their children's hands and ran.

逃げゆくもの、煮えくりかへるやうなありさま、けれども  
みな逃れようと煮えくりかえるやうなありさまで助けを呼びます。しかし  
All were screaming and trying to escape, calling for help in utter confusion. But

私は少しも構はず、土吹雪  
私は少しもおかまもなく、ひどい土煙りを  
I ignored everything and flew away, stirring up

をたてる、火の老女神は私の側を走つて来ると  
立てながらとんでいきました。そこへ火のおばあさん神が私のそばに走ってくると  
a terrible cloud of dust. Then the Elderly Fire Goddess came running to my side,

大へんな焰が、私の上に飛交ふ。  
ものすごい炎の束が私の上でさく裂しました。  
and a frightful bundle of flames exploded above me.

其中に、彼の男は一軒の家に  
その最中、あの男は一軒の家の中に  
In the middle of all that, the man plunged into a house

飛込むと直ぐにまた飛出した  
とび込むと、すぐにまたとび出しました。  
and immediately burst back out again.

見ると、蓬の小弓に蓬の小矢をつがへて  
見ると、ヨモギの小さな弓にヨモギの小さな矢をつがえて  
When I looked, I saw that he was fixing a little arrow to a little mugwort bow.

むかふから、ニコニコして、私をねらつてゐる。  
私に向かって、ニヤニヤ笑いながら、ねらい定めています。  
Smirking, he faced me and aimed.

それを見て私は可笑しく思つた  
それを見て、私は、おかしくなりました。  
When I saw that, I became amused.

「あんな小さな蓬の矢、何で人が苦しむものか」と  
「あんな小さなヨモギの矢などで、どうして人が痛むものか」と  
"How does he expect to hurt anyone with a little mugwort arrow like that?"

- 54 ヤイヌアシ カネ チノツセフム タウナタラ、  
yainuash kane chinotsephum / taunatarā,  
yaynu=as kane ci=notsep hum tawnatarā,  
思う・私 しながら 私・～の牙 ～の音 ガチガチという
- 55 キタイナ ワノ チルキ クス イキチアシ アフ、  
kitaina wano / chiruki kushu / ikichiash awa,  
kitay na wano ci=ruki kusu iki-ci=as awa,  
頭のでっぺんの方 から 私・～を飲み込む しようとする(複)・私 したところ
- 56 ラポケタ ネア オッカヨ チオクストウ ペカ  
rapoketa / nea okkayo / chiokshutu peka  
rapoke ta nea okkayo ci=oksutu peka  
その間 に この 男 私・～のえり首 を通って
- 57 ウンシリコチヨツチャ、パテクネテク ネコンネヤ  
unshirkochotcha, / pateknetek / nekonneya  
un=sirko-cotca, patek ne tek nekon ne ya  
私・～を激しく射当てる それだけ ～である して どのように ～である のか
- 58 チエラミシカレ。  
chieramishkare.  
ci=eramiskare.  
私・～がわからない
- 59 フナクパケタ ヤイシカルナシ、インカラシ アフ  
Hunakpaketa / yaishikarunash, / ingarash awa  
hunakpaketa yaysikarun=as, inkar=as awa  
どれほど経ってか 気が付く・私 見る・私 したところ
- 60 ポロ チャタイ アスルペウトウツタ オカヤシ カネ オカヤシ。  
poro chatai / ashurpeututta / okayash kane / okayash.  
poro catay asurpe utur ta okay=as kane okay=as.  
大きい 竜 耳 ～の間 に いる(複)・私 しながら いる(複)・私
- 61 コタンコロ ウタラ ウエカラパ、ネア チノシパ オッカイポ  
Kotankor utar / uwekarpa, / nea chinoshpa okkaipo  
kotan kor utar uekarpa, nea ci=nospa okkaypo  
村 ～の 人たち 集まる その 私・～を追いかける 若者
- 62 アリパウェクル テンケ カネ、チラクウェヘ ウコタタ  
aripawekur / tenke kane, / chirakewehe / ukotata,  
ar-i-pawe- kur -tenke kane, ci=ra(y)kewehe uko-tata,  
大声で命令する しながら 私・～の死体 みんなで～を切り刻む
- 63 シネ アニウン ルルパ ワ ウファイカ ワ ネ パスフ  
shine aniun / rurpa wa / uhuika wa / ne pashuhu  
sine an i un rurpa wa uhuyka wa ne pasuhu  
一つの ある 所へ 運ぶ(複) して ～を燃やす して その ～の燃えかす
- 64 キムニワ イフオシマケ コチャリ ワ イサム。  
kimuniwa / iwaoshmake / kochari wa isam.  
kimun iwa iwa osmake kocari wa isam.  
山の 岩山 岩山 ～の背後 ～に～をばらまく して しまう
- 思ひながら私は牙を打鳴らして  
思いながら私は牙をガチガチ噛み鳴らして、  
I thought, and gnashed my fangs and
- 頭から吞まうとしたら  
頭からのみこもうと何度も試みました。  
tried again and again to swallow him up headfirst.
- 其の時彼の男は私の首ツ玉を  
その時、男は私のえり首を  
At that time, with a loud smack
- した、かに射た。それつきり何うしたか  
バシッと射抜きました。それきり、もうどうなったのか  
the man shot me in the scruff of the neck, and that's the last thing
- わからなくなつてしまった。  
分からなくなつてしまいました。  
I remember.
- ふと気がついて見たところが  
ふと気がついてあたりを見ると  
When I came to and looked around,
- 大きな龍の耳と耳の間に私はゐた。  
巨大な龍(大蛇)の耳と耳の間に私はいました。  
I found myself between the ears of a big dragon.
- 村の人々が集つて、彼の私が追つかけた若者が  
村の人々が集まっていた、あの私が追いかけていた若者が  
The people of the village had gathered, and the young man
- 大声で指圖をして、私の屍體をみんな細かに刻み  
大声で指図して、私の死体をみんなで刻んで  
I had been chasing was shouting instructions, and together everyone chopped my body into pieces,
- 一つ所へ運んで焼いて其の灰を  
一ヶ所に集めて燃やし、その燃えかすを  
gathered the pieces in one place, then burned them and
- 山の岩の岩の後へ捨て、しまった。  
山の岩山の後へ撒いてしまいました。  
scattered the ashes behind a craggy mountain.

- 65 タブ エアシリ インカラシ コ、オヤチキ、ヤヤン アイヌ  
 Tap eashir / ingrash ko, / oyachiki, / yayan ainu  
 tap easir inkar=as ko, oyaciki, yayan aynu  
 このように 初めて 見る・私 すると なるほど 普通の 人間
- 66 ウセオツカイポ ネ クニ チラム アフ、  
 useokkaipo / ne kuni / chiramu awa,  
 use okaypo ne kuni ci=ramu awa,  
 ただの 若者 ~である と 私・~を思う したところ
- 67 オキキリムイ カムイ ラメトク ネ アワン。  
 Okikirmui / kamui rametok / ne awan.  
 Okikirmuy kamuy rametok ne awan.  
 オキキリムイ 神 勇者 ~である だったのだ
- 68 アシトマ ウェン カムイ ニツネ カムイ チネ キフ、  
 Ashtoma wen kamui / nitne kamui / chine kiwa,  
 astoma wen kamuy nitne kamuy ci=ne ki wa,  
 恐ろしい 悪い 神 性悪の 神 私・~である ~する して
- 69 アイヌ コタン コエハンケノ オカヤシ フ、  
 ainu kotan / koehangeno / okayash wa,  
 aynu kotan ko-ehanke no okay=as wa,  
 人間 村 ~に近づく して いる(複)・私 して
- 70 オキキリムイ コタン エヤム クス、ウンシメモッカ  
 Okikirmui / Kotan eyam kusu, / unshimemokka  
 Okikirmuy kotan eyam kusu, un=simemokka  
 オキキリムイ 村 ~を心配する ので 私・~をからかって怒らせる
- 71 ウンシノシパレ フ、ノヤアイ アリ ウンライケ ルウエ  
 unshinoshpare wa, / noyaai ari / unraike ruwe  
 un=si-nospa-re wa, noya ay ari un=rayke ruwe  
 私・~に自分を追い して ヨモギ 矢 で 私・~を殺す の かけさせる
- 72 ネロココカイ。オロワ、ホシキノ チオアンルキ  
 nerokokai. / Orowa, / hoskino / chioanruki  
 ne rokokay. orowa, hoskino ci=oanruki  
 である だったのだ それから 最初に 私・~を丸飲みにする
- 73 レレカイヌ アナク、アイヌネ クニ チラム アフ、  
 rerekainu anak, / ainune kuni / chiramu awa,  
 rerek aynu anak, aynu ne kuni ci=ramu awa,  
 弱々しい 人間 は 人間 ~である と 私・~を思う したところ
- 74 オヤチキ オキキリムイ エオソマブ アイヌネ カラ フ、  
 oyachiki / Okikirmui / eosomap / ainune kar wa,  
 oyaciki Okikirmuy eosoma p aynu ne kar wa,  
 なるほど オキキリムイ ~を排便する もの 人間 として ~を作る して
- 75 トウラ フ エク ルウエ ネ アワン。  
 tura wa / ek ruwe / ne awan.  
 tura wa ek ruwe ne awan.  
 ~を運れる して 来る のである だったのだ
- 今になつてはじめて見ると、それは、たゞの人間  
 そのとき初めてよく見てみると、なるほどそれは、ただの人間  
 Then I took a good look for the first time and saw that the person
- たゞの若者だと思つたのは  
 普通の若者だと私が思つたのは  
 I had thought was just a human, a common youth,
- オキ、リムイ神の勇者であつた  
 オキキリムイ、神のような勇者だったのです。  
 was actually Okikirmui, the godlike hero.
- 恐しい悪い神、悪魔神、私はそれであつて  
 恐しくも悪い神、魔神である私が  
 Because I, a fierce and bad god, an evil spirit,
- 人間の村の近くにゐるので  
 人間の村の近くに住んでいたの、  
 lived near the human village,
- オキ、リムイは村の爲を思つて、私をおこらせ  
 オキキリムイは村のことを心配して、私をあざけて  
 Okikirmui had feared for the village and mocked me
- 自分を追ひかけさせて、蓬の矢で私を殺したので  
 私に追ひかけさせて、ヨモギの矢で私を殺したの  
 into following him and then killed me
- あつた。それから、先に私が吞んでしまつた  
 でありました。それから、先に私がのんだ  
 with a mugwort arrow. And although I had thought
- 青い男は、人間だと思つたのだつたが  
 顔色の悪い男は、人間だと思つていたのに、  
 that the pale-faced man I had swallowed first was a human,
- それは、オキ、リムイがその放糞を人に作り  
 なんと、それはオキキリムイの大便を人間の形に作ったもので、  
 incredibly, Okikirmui had made his own feces into the form of a human
- それを連れて來たのであつた。  
 それを連れて來たのです。  
 and brought it with him.

- 76 ニツネ カムイ チネア クス、 タネ アナクネ  
 Nitne kamui / chinae kushu, / tane anakne  
 nitne kamuy ci=ne a kusu, tane anakne  
 性悪の 神 私・～である した ので 今 は
- 77 ポクナモシリ アラウエン モシリ ウン アウノマンテ クス、  
 poknamoshir / arwen moshir un / aunomante kusu,  
 poknamosir arwen mosir un a=un=omante kusu,  
 地獄 極悪の 世界 へ される・私・～を送る ので
- 78 テワノ アナク アイヌ モシリ ネプ アコエヤムペ カ  
 tewano anak / ainu moshir / nep akoeyampe ka  
 te wano anak aynu mosir nep a=koeyam pe ka  
 これ から は 人間 世界 何 人・～について もの も  
 ～を心配する
- 79 イサム。アエエランナクペ カ イサム ナンコロ。  
 isam, / aeerannakpe ka isam nankor.  
 isam, a=eerannak pe ka isam nankor.  
 ない 人・～について～に困る もの も ない だろう
- 80 アシトマ ニツネ カムイ チネア コロカ、  
 Ashtoma nitne kamui / chinae korka,  
 astoma nitne kamuy ci=ne a korka,  
 恐ろしい 性悪の 神 私・～である した けれども
- 81 シネ アイヌピト チヌプルカスレ ウネカラカラ、  
 shine ainupito / chinupurkashure / unekarkar,  
 sine aynu-pito ci-nupur-kasu-re un=ekarkar,  
 一人の 人間 される・～の霊力を優れさせる 私・～に～をする
- 82 タネ アナクネ トイ ライ ウエン ライ チキ シリ タパン。  
 tane anakne / toi rai / wen rai / chiki shiri tapan.  
 tane anakne toy ray wen ray ci=ki siri tapan.  
 今 は ひどい 死 悪い 死 私・～をする 様子である
- 83 アリ ニタトルン ニツネ カムイ ヤイエユカラ。  
 ari nitatorun nitne kamui yayeyukar.  
 ari nitat or un nitne kamuy yayeyukar.  
 と 湿地 ～の中 ～にいる 性悪の 神 自らを物語る

私は魔神であつたから今はもう  
 私は、魔神であつたために今はもう  
 Because I was an evil spirit, I was cast down

地獄のおそろしい悪い國にやられたのだから  
 地下のひどく悪い世界に落とされてしまいました。だから  
 into the terribly bad world of the underground. So

これからは、人間の國には、何の危険も  
 これから、人間の世界には、何の心配も  
 from now on, there will no longer be any worries

ない、邪魔ものもないであらう。  
 なくなり、人を困らせるものもなくなるでしょう。  
 in the human world, and there will be nothing to cause people trouble.

私は恐しい魔神であつたけれども  
 私は恐ろしい魔神であつたけれども、  
 I was a fearsome evil spirit, but

一人の人間の計略にまけて  
 一人の人間の霊力にやぶれて  
 having lost to one human's spiritual power,

今はもう、つまらない死方、悪い死方をするのです。  
 今はもう、ひどい死悪い死をとげるのです。  
 now I will die a terrible death, a bad death.

と谷地の魔神が物語りました。  
 と谷地の魔神は自らを物語りました。  
 So a dragon recounted of himself.

## 〔言葉の解説〕

## ・ニタツ nitat (3行目)

日本語にも「にた」という言葉があって、同じように湿地という意味をもっています。その変化したものと思われる「ぬた」という言葉もあります。このニタツ nitat は、はたして元は、アイヌ語なのか、日本語なのか。知里は、アイヌ語由来をほのめかしている風でもあります。しかし、今のところどちらとも言えません。ヤチ（谷地）という言葉が19行目に出てきますが、これは日本語由来といえるでしょう。

## ・オピスン opisun (5行目)

この言葉は、< o-pis-un (尻・浜・にある) 尻を浜に向けている→浜のほうから。反対にエピスン episun は、< e-pis-un (頭・浜・にある) 頭が浜に向いている→浜の方へ。このように、オ～ウン o～un、エ～ウン e～un という構成をもった単語は数多くあります。例えば、エキムン ekimun < e-kim-un (頭・山・にある) →山の方へ。

## ・クツケシ サラサラ kutkes sarasara (5行目)

この言葉は、< kut-kes (のど・末端) →話し声の端 (かすかなもの)。その後のサラサラ sarasara のサラ sara は、「(かくれていたものが) 現われる」こと。その反復形。人の話し声の端々が聞こえたり聞こえなかったりすること。

## ・ウセトウル カ ララパ カネ u-setur-ka-rarpa kane (6行目)

ウセトウルカラッパ カネ u-setur-ka-rarpa kane (互い・の背中・の上・をくり返し押しつける しつつ) 互いに背中を押しようにして→一方が、後から近づいて相手の背中を押しようにして (抜き)、もう一方が今度は、相手の背中を押し (つまり、抜きかえそうとする)。→追いつ追われつしながら。

## ・ソネ sone (7行目)

ソネ sone は「確かである・本当である」という意味。この言葉の語構成は不明。ne が付いているので so は名詞。しかし、so は単独でこのような意味では見あたりません。ソノ sonno (本当に) の son などと関係がありそうですが。

## ・ウェナウェナ wen a wen a (9行目)

これは、～ア ～ア ～a～a という形をもった構文。例えば、エ ア エ ア eaea (食べに食べる)、チサ チサ cis a cis a (泣きに泣く) というように使われます。この場合は、「(その格好の) 悪いこと悪いこと限りない」といった意味。

## ・レレク rerek (10行目)

レレク rerek は、沙流方言のレワレワク rewarewak (弱々しい) という言葉と関係があるかもしれません。

## ・アイケ ayke (12行目)

アイケ ayke は < a ike (した・～のだが) →したのだが、という意味。アイネ ayne は「～したあげく。いろいろ～してようやく」。

## ・イヌ ネワ チキブ ネ inu ne wa ci=ki p ne (17行目)

直訳すると、「聞いて、それを私がしたことである」→「私が聞いただけである」。

## ・トウルシキンラネ turus kinra ne (18行目)

トウルシ turus (あかだらけである) →ひどい。キンラ kinra (狂気)。ネ ne (～になる)。「激しい怒りとなって (こみ上げてくる)」。

## ・トイ ヤサシケ トイ ペレレケ toy yasaki toy pererke (20行目)

ヤサシケ yasaki は、< yas-yas-ke (裂け、裂け・する)。pererke は < per-per-ke (破れ、破れ・する)。yas も per もともに擬態語。竜が跳びはねると、地が裂け、地が破れる、というからまるでゴジラのような。

## ・タウナタラ tawnatara (21行目)

ナタラ -natara は、状態の持続を表わす語。タウ taw は擬態語で、音が激しく鳴る様子。この場合は、(牙が) ガチガチ噛み鳴らされること。

## ・ウェニンカラポ wen inkar-po (22行目)

直訳すると、「ざっと見る・指小辞」。ざっと (わずかに) 見ること。

## ・サパシ アイネ sap=as ayne (27行目)

サパ sap は、サン san の複数形。意味は、「山側から浜の方へ行くこと」。山の方に住んでいた竜が浜の方にある村に降りてきたこと。

## ・フレ コソソテ hure kosonte (30行目)

コソソテ kosonte は、日本語の「小袖」から入ったアイヌ語。美しい立派な着物という意味。フレ コソソテ hure kosonte 「赤い着物」というのは、火の神の衣裳を表わします。神々(カムイ ウタラ) は、それぞれ衣を着ることで、その神の姿となります。クマ(の魂) は黒い着物を着ることでクマの姿となります。

## ・イワン コソソテ iwan kosonte (30行目)

イワン iwan は、「6」。6という数は、特別な意味をもって「たくさん」という意味があります。ですから、ここでは、「何枚もの着物」という意味。

## ・オパンネレ opannere (31行目)

この言葉は、< o-pan-ne-re (で・下方・になる・させる) →を羽織る

## ・オトウウェンヌイ オレウェンヌイ otu wen nuy ore wen nuy (36行目)

オトウ otu ~ オレ ore ~ という形をとって、「2つの~3つの~」で「たくさんの」という意味になります。ウェン ヌイ wen nuy は「ひどい炎」。全体で「ものすごい量の炎」。

・ウェナプトシンネ チラナランケ wen apto sinne ciranaranke (37 行目)

ウェン アプト シンネ wen apto sinne で「ひどい雨のように」。チラナランケ ciranaranke は、< ci-ra-na-ran-ke (～される・下・の方・降る・させる) →下に降る。神謡によく使われる雅語。全体で「どしゃ降りの雨のように降りかかる」。

・パシノ カリパ シコパヤラ pasno karip sikopayar (41 行目)

パシノ pasno は、< pas-no (走る・よく) →よく走る。このノ no は、「よく」という意味。カリパ karip は < kari-p (回る・もの)。シコパヤラ sikopayar (のようだ)。全体で「よく走る輪のようだ」。輪とは、子供たちが、遊びに使うもので、つるで作る。遊びはカリパ パシテ karip paste (輪を走らせる) というもので、文字通り輪を棒で速く走らせて楽しむもの。

・ハウシタイキ hawsitayki (42 行目)

これは、< haw-sitayki (声・を打つ) →声があぶつかる。「大変だ!」「逃げろ!」といった声がガンガンひびく、こと。

・ウラヤヤイセレ urayayaysere (43 行目)

これは、< u-ray-ay-ay-se-re (一緒に・ひどく・ワア・ワア・言う・させる) みんなで、ひどく泣く。ウ~レ u~re という形をとり、「みんなで~する」という意味になります。

・ウキラレパ ukirare p (44 行目)

この言葉は、43 行目と同じく < u-kira-re (一緒に・逃げる・させる) みんなで逃げる。パ p は「者」。

・ヌイイキリ ウネンカタ パッケパッケ nuy ikir un=enka ta patkepatke (47 行目)

ヌイ イキリ nuy ikir は、「炎の連らなり」。ウネンカ タ un=enka ta 「私の上に」。エンカ enka は、離れて上。接触して上は、カ ka。パッケパッケ patkepatke は < pat-ke のくりかえし。パツ pat は、擬態語で、パツと炸裂すること。ケ ke は自動詞をつくる語。全体で「(ひどい) 炎の連らなりが私の真上で炸裂をくりかえす」。

・コラウオシマ korawosma (49 行目)

この言葉は < ko-raw-osma (～に・下・へ突っ込む) ~へとび込む。

・ノヤ ポナイ noya pon ay (50 行目)

ノヤ noya (ヨモギ) は、ノヤノヤ noyanoya (もむ・くり返し) が語源だと考えられています。その葉をもんで使うことから。ポナイ pon ay (小さい・矢) といわれるのは、ヨモギは草本植物なので茎も短いため。しかし、冬を越した茎 (リヤ ヲ riya p) は丈夫で、

矢としても使えます。これに射られると再生できないといわれます。

・アウニンペ a=unin pe (53 行目)

アウニン a=unin は、「人が~を痛がる」。ペ pe は、「もの、こと」。全体で「(何で) 人が痛がること (があるか)」。

・シリコチョツチャ sirkocotca (57 行目)

チョツチャ cotca (を射当てる) に、シリコ sirko が付いたもの。シリコ sirko が付くと、「強く。激しく」という意味が加わります。sirko < sir-ko (地面に対して) は、大地にドンとぶつかるように、ということからでしょうか。シリコチョツチャ sirkocotca で「(私のえり首) を激しく射当てる」という意味。

・アリパウエクル テンケ aripawekur-tenke (62 行目)

これは、< ar-i-paw-e-kur-tenke (激しく・もの・口・で・虚辞・飛ばす) 激しく命令する。大声で指図する。kur は、とくに意味をもちません。音節をふやすために使われています。

・チラケウエヘ ci=rakewehe (62 行目)

この言葉を、知里幸恵の「ノート」で見ると、raykewehe となっています。しかし、ラケウエヘ rakewehe のように y が脱落することもあります。ライケウエヘ raykewehe は、< ray-kew-e-he (死んだ・体・所属形形成辞の長形)。

・シネ アニウン ルルパ sine an i un rurpa (63 行目)

シネアニウン sineanun は、< sine an i un (一つ・ある・所・へ)。ルルパ rurpa は、ルラ rura (を運ぶ) の複数形。一ヶ所に運んで集めること。

・パスフ pasuhu (63 行目)

パスフ pasuhu は、パシ pas (燃えかす) の所属形で、pas-u-hu は、その長い形。

・イワ iwa (64 行目)

イワ iwa は、日本語の「岩」から入った言葉だと思われていますが、意味は少し異なるようです。iwa 「岩山、山」(知里、地名アイヌ語小辞典)。

・オヤチキ oyaciki (65 行目)

オヤチキ oyaciki は、「今まで知らなかったが、なるほど」という意味。語源的には < oya ci=ki (別に・人が・~をする) →別な見方をすると、とも考えられます。

・ポクナモシリ pokna mosir (77 行目)

この言葉は < pok-na-mosir (下・の方・の世界) で、地下世界。一般的にはテイネ ポクナモシリ teyne pokna mosir 「じめじめした地下の世界」が、悪いことをした罰として落とされる所。細かく切刻まれて、そこに落とされると魔ものは再生できないとされています。仏教的な地獄とは異なります。これについては、コラム (14) を参照のこと。

・アウノマンテ a=un=omante (77行目)

アウノマンテ a=un=omante は「人が・私を・を送る」→私が送られる。

・ネブ アコエヤムペ カ イサム nep a=koeyam pe ka isam (78～79行目)

ネブ アコエヤム ペ nep a=koeyam pe は、「何の人が心配するもの」→「心配するものは何(もない)」。

・アエエランナクペ acerannak pe (79行目)

アエエランナク ペ a=e-erannak pe (人が・～について・を困る もの) →困難。

・チヌプルカスレ ウネカラカラ cinupurkasure un=ekarkar (81行目)

チヌプルカスレ cinupurkasure は、< ci-nupur-kasu-re (～される・霊力・～を越す・させる) 霊力がありすぎる(こと)。ウネカラカラ un=ekarkar は「私に・する」。直訳すると全体で、「霊力が勝ることを私にする」→私は優れた霊力に負ける。

【参考】

・エイポットウム ニウナタラ eipottumu-niwnatara (8行目)

エイポットウム eipottumu は、< e-ipor-tumu (～で・顔色・中)、ニウナタラ niwnatara は < niw-natara (荒々しい様子・状態の継続) たけだけしい、りりしい。ニウ niw は擬態語。全体で、「～で顔の表情がりりしい」という意味だと思われます。

・チノツセフミ ci=notsep-humi (20行目)

この中にある ノツセフ notsep という言葉は、「牙」という意味。なぜ notsep は「牙」なのでしょう。ここで、一つなぞなぞを出します。「あごが背負っているものなあに?」。これをアイヌ語で言うと、ノツ セ フ ネフ タ(ヘマンタ) アン? not se p nep ta (hemanta) an?, not se p は「あごが・背負っている・もの」。答えは、「牙」。アイヌ語の語分析をしていると、なぞなぞを解いているように感じることがあります。アイヌの子供たちの間で、なぞなぞ遊びがよく行われていたことと、アイヌ語の単語の作り方とどこか共通するものを感じます。

・イワン iwan (30行目)

アイヌ語の数詞は、手の指から来ているようです。1は、シネ si-ne (自分・である→自立している→親指)。2は、トゥ tu (tur (連れる) の tu か。親指と連れだっている人指し指)。3は、レ re (ri [高い] からか。最も長い指、中指)。4は、イネ ine (ir-ne 列になっている。薬指の前後と一列になっている。irne → inne → ine)。5は、アシクネ asikne (aske ne 手になっている。片手)。6は、イワン iwan (i(r)-e-wan あと4つで10)。7は、アワン arwan (re-e-wan あと3つで10)。8はトゥベサン tupesan (tup-e-san 2つで出

る)。9は、シネペサン sinepesan (sinep-e-san 1つで出る)。10は、ワン wan (< u-an 両手がある)。

・アウニン a=unin (53行目)

ウニン unin (痛む) とアッカ arka (痛い) の違いは、ウニンは、人称が付きますが、アッカは付かない点。アウニン a=unin(人が・～を痛がる)とは言えますが、アッカ a=arka とは言えません。クテケヘ アッカ ku=tekehe arka (私の手が痛む)とは言えます。もう一つの違いは、ウニンは、激しく痛む、こと。アッカは、ただ、痛い。

・チャタイ catay (60行目)

チャタイ catay は、日本語の「蛇体」から。日本語で蛇体は、「へびの姿」という意味。これをなぜ「龍」と知里幸恵は訳したのでしょうか。萱野辞典では「大蛇」と訳しています。どうも、日本語の蛇体という言葉と合わないような気がします。そこで方言を調べてみました。すると青森県津軽や秋田県鹿角郡では、「じゃだい」に「大形のへび。大蛇」という意味があり、さらに青森県南津軽郡では「龍」という意味で使われていることがわかりました。チャタイ catay は、青森や秋田の方言からアイヌ語に入って「大蛇」「龍」という意味になったのでしょうか。龍は架空の動物です。秋田県の田沢湖には、昔、この湖に龍が住んでいたという伝説が残っています。湖沼や湿地に龍が住むという考え方は、東北地方から入ったのかもしれない。アイヌ語では、単にニタトルンペ nitat or un pe (谷地に住むもの) とか谷地の魔神(ニタトルン ニッネ カムイ) といっていたものが、沼湖に住むといわれる龍の伝説と習合してしまったのではないのでしょうか。

・ウンシメモッカ un=simemokka (70行目)

シメモッカ simemokka は「バカにする。あざける」。un=simemokka で「私をあざける」。



## コラム (9)

### ヨモギの小矢はなぜ強いのか？

第4話のウサギの神話でも、この第5話の竜の神話でも、ヨモギの小さな矢で射られるとひどい死に方をするように語られています。なぜ、ヨモギにはそれほどの力があるのでしょうか。

それはヨモギには特別な魔を祓う力(除魔力)があると考えられているからです。ヨモギには数々の薬効もあります。

知里真志保の「分類アイヌ語辞典・植物編」には、ヨモギの薬効や効能が数多く述べられていて、それをまとめてみると次のようなものがあります。

- (1) ヨモギの葉をゆがいて乾かし、アワの団子にまぜて、ノヤシト(ヨモギ団子)を作って食べた。心身の健康を保つため。
  - (2) 若葉をつんで、粥の中に入れて、ノヤサヨ(ヨモギがゆ)を作り、それを食べると回虫がわからない。
  - (3) 葉をせんじて咳止め、虫くだしに飲用した。
  - (4) ケガをしたときは、葉をもんで汁を絞り、傷につけて、止血薬として使った。
  - (5) 虫歯のとき、もんだ絞り汁を痛む穴にたらして痛み止めとした。
  - (6) わきがの臭みをとるのに葉をもんで拭いた。
  - (7) あぶら手を清めるために葉を両手でもんで洗い落とした。
  - (8) 枯れた葉をもんで「もぐさ」にした。
  - (9) 青い茎や葉を燃やしていぶし蚊を退治した。
  - (10) 枯れた葉や茎を燃やすと火の神が喜ぶ。
  - (11) 茎や葉を鍋に入れてせんじ、湯気が立ったら、その上に着物をかぶって湯気を受け、汗を出すとカゼに効く(千歳)。
  - (12) カンシャクのような病気の場合は、着物を裂き、ヨモギを束にして着物の裂け目から病魔を叩き出すように体を叩いてから、新しい着物に着がえた。
  - (13) 重病人がいるときは、ヨモギで人形を作り、着物を着せ、病人の病気を移したことにして、戸外に捨てた(屈斜路)。
  - (14) 天然痘や、他の伝染病が流行したときは、村の境や川に、ヨモギ人形を立て、伝染病が入ってくるのを防いだ。
  - (15) ヨモギを家の入り口に差しして病魔が家の中に入らないようにした。
  - (16) 蛇が穴の中に入ったら、ヨモギの串を穴の入口に立てて、出てこないようにした。
  - (17) 蛇を殺したときは、必ずヨモギの串で頭を刺し止めておいた。さもなければ、生き返ってくると信じられた。
- この他にも、更科源蔵の「コタン生物記、樹木・雑草編」に次のように出ています。
- (18) 若芽を煮つめるとアメのようなになるので、それを咳止めや虫下しに使った。
  - (19) 夢見の悪いときは、自分で自分の体をヨモギの束で祓った。

- (20) 流行病のときは、家の入口にトゲの生えたタラノキの枝と一緒にヨモギを立てた。
- (21) 家を新築したときは屋根裏にひそむ魔物をヨモギの矢で追い出した。
- (22) 雷のひどいときには、炉にヨモギをくべて雷を鎮めた。

これほど、ヨモギは多様な効能をもつ重要な植物だったのです。しかし、ヨモギの効能は、日本をはじめ、お隣の韓国や中国、そしてギリシャなどヨーロッパの国々でも認められ、ヨモギは、こうした国々で薬用植物として古くから利用されてきています。

それにしても、薬用植物は他にも数多くあるのになぜヨモギは特別な力をもつものとされるのでしょうか。

ヨモギは、国造りの神がチキサニ[アカダモ]と共に地上に最初に降ろした植物の一つだと伝承され、特別視されています。知里は、人間が火を作り出すことと関係していると考えられているようです。アカダモは、木をこすって火を起こすときに使われる木で、乾いてもまれたヨモギ(もぐさ)は、つき始めた火口に寄せて、炎にするときに使われたのだらうといます。つまり、アカダモとヨモギは火を起こすときのセットとして最も大切なもの(人類は火を使うことで氷河期を生きのびた)と考えられたのではないのでしょうか。

また、ヨモギには、独得の強い臭気があります。強い臭気をもつものは(イケマなど)魔を祓う力をもつと考えられていて、単なる薬効以上にその力がみとめられています。

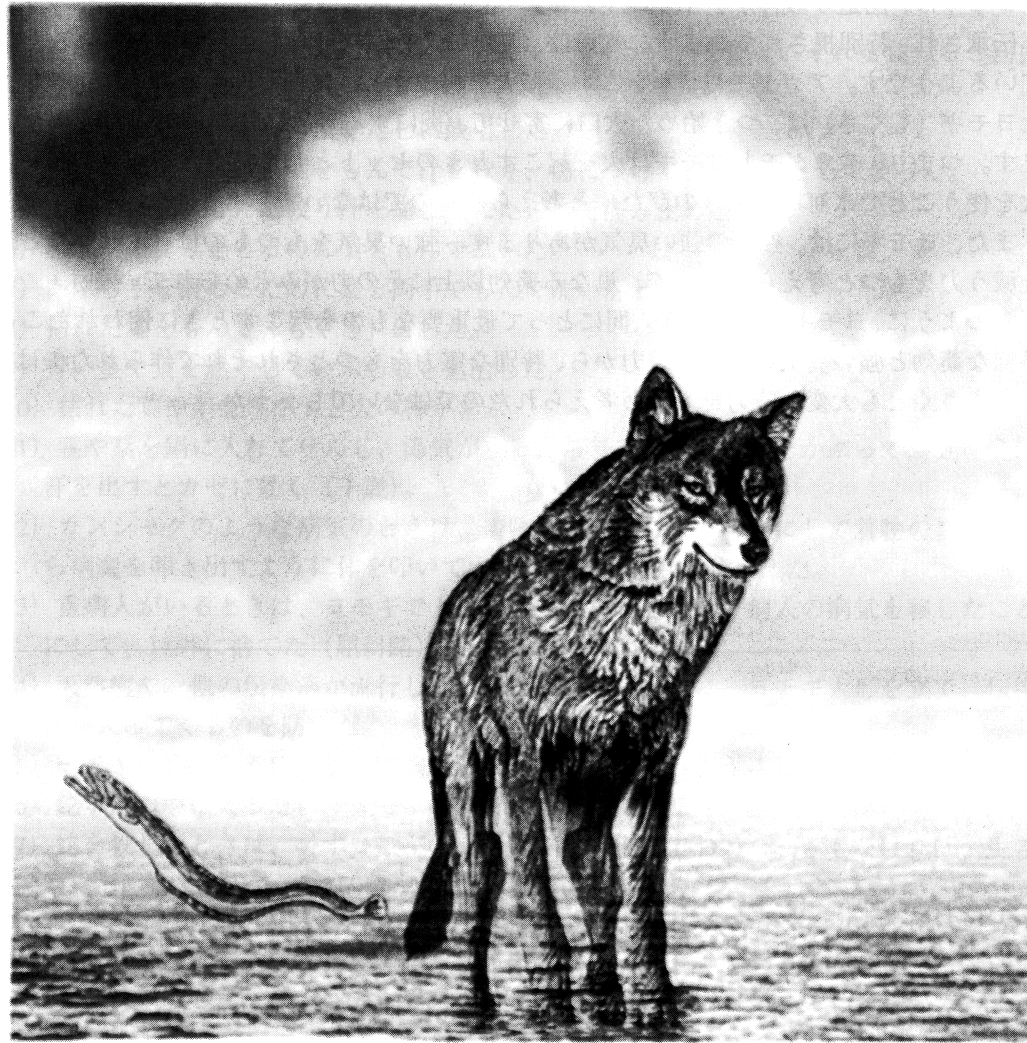
このように、ヨモギは火という人間にとって最も重要なものを起こすときに使われたことや、多様な薬効と強い臭気による除魔力から、特別な霊力をもつとされそれで作られた矢は、たとえ小さくとも大変な威力をもつと考えられたのではないのでしょうか。

6

小オオカミの神が自らうたった謡  
「ホテナオ」

pon horkewkamuy yayeyukar

Song sung by the little wolf god



第6話

小オオカミの神が自らをうたった謡  
「ホテナオ」

〔物語とその背景〕

これは、オオカミの子供と小男に化けた魚の知恵くらべの物語のようにみえますが、はたしてそうなのでしょうか。ストーリーを追ってみることにします。

ある日、私（オオカミの子供）は、退屈まぎれに浜辺で一人遊んでいると、小男がやって来た。私は、その男の行く手を何回もさえぎると、怒り出して、私に難問をしかけてきた。「そんなことするなら、この岬の昔の名と今の名をあててみろ」という。私は、「そんなことわけないさ。昔は尊い時代だったので、この岬は神の岬と呼ばれていて、今は時代が衰えたので御幣の岬と呼ばれているのさ」と答えた。小男は、にくらしそうに次の問いを出した。「それならば、この川の昔の名と今の名をあててみろ」という。私は、「そんなことわけないさ。昔は尊い時代だったので、この川は、急流川と呼ばれていて、今は時代が衰えたので、遅流川と呼ばれているのさ」と答えた。すると今度は、「お互いの素性の当てっこをしよう」という。そこで私は「お前の素性などかんたんさ。大昔、オキキムイが山で狩り小屋を造るときにハンノキで炉縁を作ったら、火に当って乾いてしまい、一方が反ってしまった。それでオキキムイは、怒って炉縁を川に捨ててしまった。そして炉縁は海に下り波にもまれていた。それを神々が見て、せっかくのオキキムイの手作りの物が無駄に海の中で腐ってしまうことを惜しんで、それを炉縁魚に変身させた。しかし、炉縁魚は自分の素性がわからないため、人間に化けてうろついている。それがお前なのさ」といった。小男は顔色を変えながら聞いていて「お前は、オオカミの子孫なのさ」といってすぐに海にザブンと飛び込んだ。その後姿を見ると、一匹の赤い魚が尾びれを動かして沖を目指していた。とオオカミの子供は物語った。

この物語は、いったい何にポイントを置いて全体の意味をとらえていけばいいのか正直いってわかりにくいです。小オオカミがわざわざ小男の行く手をじゃましてまで難問をしかけさせたのはなぜでしょう。結局は、相手の素性を言いあててやることに何か意味がありそうですが、それがどんな意味をもっているのかもわかりません。炉縁魚などという変な魚の素性を知ること一体何の意味があるのでしょうか。このように分らないことだらけです。

そこでまず、炉縁魚の出自ともいえるハンノキからみていくことにします。すると、ミヤマハンノキのことをアイヌ語で、ホロケウ ケネ horkew kene（オオカミのハンノキ）ということがわかりました。オオカミとハンノキは、この物語の両主役。そして、このホロケウ ケネ「オオカミのハンノキ」は、沖漁に行くとき御幣として使われ、海に流されたといいます。それは漁で最も恐ろしい逆風から守ってもらうためだといいます。そのためカムイ

ケネ kamuy kene「神のハンノキ」ともいわれたといひます。

美幌には、この物語とよく似た話が伝えられています。国造りの神が昔、ハンノキで炉縁を作ったときに、木が反りかえって役に立たないので腹を立てて海に捨てた。するとそれはトドになった。そのためトドの肉はハンノキのように赤い、という話です。炉縁魚がトドに代わっただけで全体の話の流れは同じといひます。魚の色がハンノキと同じく赤い点も同じ。ハンノキは、ケネ keneといひ、それは <kem-ni (血の木) からだといひます。事実ハンノキの幹は赤いのです。さらに、炉縁魚である イヌンペペ (他では、イヌンペイペ) とは何かを調べてみると、それはタチウオ (刀魚) のことだといひます (知里、分類)。頭が角ばって細長いからです。しかし、これはタチウオが炉縁の木に似ているというだけで、場所によっては、トドの所もあるので、あまりタチウオにはこだわらない方がいいかもしれません。

そこで、この物語が生まれる背景を次のように考えてみました。

ハンノキで御幣を作ることはほとんどないといひれます。それは、この木が腐りやすく、そのうえ、御幣のように細かい削りかけをつけると、さらに早く腐ってボロボロになってしまうからです。しかし、沖の神であるシャチにあげる御幣にだけは特別にハンノキが使われます。それはシャチが赤いものを好むからです。そして、樺太でも北海道でも沖漁に出るときは、ハンノキで作った御幣を海に持って行って流したといひます。

こうした伝承は、この物語の中の幾つかの言葉と符号するようです。「オキキムイがハンノキで作った炉縁を捨てて、海に流した」ことや「海の中で腐っていく」こと、などです。そして、それが赤い魚に変身したことは、赤いハンノキが魚に変身したことになります。こうしてみると、ハンノキは、(炉縁などの) 材としてはあまり役立たない (薬効はたくさんありますが) けれども、海での漁には、沖の海に捧げる御幣として役に立つものです。しかし、すぐに腐ってしまう。それが惜しいので神々の力で魚 (またはトド) に変身させた。ということなのではないでしょうか。これは赤い魚の由来話といひえるでしょう。その由来をたずねると、赤い魚の元は材として不向きだった (反り返る炉縁) ハンノキであることがわかります。それを解いたのは、ホロケウ (オオカミ) とケネ (ハンノキ=小男) の二人の会話の中のようにみえますが、実は、両者の合体した名をもつ ホロケウ ケネ (ミヤマハンノキ) のことを暗示しているのではないのでしょうか。狩りの名手としてのオオカミの特徴がこの話の中では何も出ていないのも、単に ホロケウ という名と関連させる意味しかないからではないのでしょうか。

アイヌの伝承を見ると、ものごとの由来話 (ウパシクマという) が実に豊富です。セミの由来、カッコーの由来、アオバトの由来、月の影の由来、バッタの由来・・・というように、ほとんどのものに由来話があるといひても過言ではないほど沢山あります。そして、アイヌの人々も自分たちの由来 (家系) についても高い関心をもっていて、祖先を何代もさかのぼってそらんじている人もいました。そして、簡単に自分の由来を人には明かしていませんでした。素性 (由来) が知られるとどんな悪さをされるかわからないからです。名前は、即素性を表わすものなので、名前も簡単に見知らぬ人に明かすことはありませんでした。そして、自分自身の由来がわからないものは、この物語の小男のように、自分の素性 (由来) を求めてうろうろし続けることになります。こうしてみると、由来 (素性=ルーツ) を知っていること

の大切さをこの物語は語っている、と考えられます。

では、なぜ由来を知ることが大切なのでしょう。アイヌの人たちは、自分たちが死んだ後、祖先のクニ (シンリッ モシリ sinrit mosir) に行く信じていました。そこで、一足先にそのクニに旅立っていった祖先たちと一緒に暮らすこととなります。つまり、今この世に暮らしていても、死後は、祖先との暮らしが待っているのです。自分のルーツである祖先のことを忘れることはよくないことなのです。現代のように、この世の終わり (死) は、全ての終わりという考え方とは違っていて、死んだ後は、自分のルーツである人々との第二の生活が待っているのです。こうした考え方は倫理観にも大きく働きかけることとなります。もし自分が悪いことをすれば、自分のルーツ (素性) である人々の顔に泥を塗ることになるからです。ハンノキやオオカミのような植物や動物も全く同じで、この世を去れば、また自分たちのルーツ (祖先=素性) である者たちの待っているクニに行くことになるのです。そこでは人間たちと同じような暮らしが営まれていると考えられています。

ポン ホロケウカムイ ヤイエユカラ 「ホテナオ」  
 Pon Horkeukamui yaieyukar, “Hotenao”  
 pon horkew kamuy yayeyukar, “hotenao”  
 小さい オオカミ 神 自らを物語る ホテナオ

## サケへ：ホテナオ hotenao

- 1 ホテナオ  
Hotenao  
hotenao  
ホテナオ
- 2 シネアントタ ニシムアシ クス ピシタ サパシ、  
Shineantota / nishmuash kusu / pishta sapash,  
sinean to ta nismu=as kusu pis ta sap=as,  
ある 日に 寂しくなる・私 ので 浜 に 出る(複)・私
- 3 シノタシ コロ オカヤシ アフ、シネ ポンルアネアイヌ  
shinotash kor / okayash awa, / shine ponrupneainu  
sinot=as kor okay=as awa, sine pon rupne aynu  
遊ぶ・私 しながら いる(複)・私 したところ 一人の 小さい 大人の 男
- 4 エク コラン ワクス、ヘパシ サン コ ヘパシ チエトウシマク、  
ek koran wakusu, / hepashi san ko / hepashi chietushmak,  
ek kor an wakusu, hepasi san ko hepasi ci=etusmak,  
来る しながら いる したので 川下へ 出る すると 川下へ 私・~の先回りをする
- 5 ヘペライ エク コ ヘペライ チエトウシマク。  
heperai ek ko / heperai chietushmak.  
heperay ek ko heperay ci=etusmak.  
川上へ 来る すると 川上へ 私・~の先回りをする
- 6 イキチ アフ、ヘパシ イワンスイ  
Ikichiash awa, / hepashi iwanshui  
iki-ci=as awa, hepasi iwan suy  
する(複)・私 したところ 川下へ 6 回
- 7 ヘペライ イワンスイ ネ イタ ポンルアネアイヌ  
heperai iwanshui / ne ita / ponrupneainu  
heperay iwan suy ne i ta pon rupne aynu  
川上へ 6 回 ~になる 時 に 小さい 大人の 男
- 8 コロ ウエンプリ エナントウイカ エパラセレ、エネイタキ：—  
kor wenpuri / enantuika / eparsere, / eneitaki : —  
kor wen puri e-nan-tuyka -eparsere, ene itak i : —  
~を持つ 悪い 気性 ~の先・顔・~の上側 ~で~を沸き起こらせる このように 話す こと
- 9 「パイ トゥントゥン、パイ トゥントゥン！」  
“Pii tuntun, / pii tuntun!”  
“pii tuntun, pii tuntun!”  
パイ トゥントゥン パイ トゥントゥン

小狼の神が自ら歌った謡「ホテナオ」  
 小オオカミの神が自ら歌った謡「ホテナオ」  
 Song Sung by the Little Wolf God "Hotenao"

ホテナオ  
ホテナオ  
Hotenao

或日に退屈なので濱邊へ出て  
ある日私は退屈してしまったので浜辺に出かけて行って  
One day I was bored, so I went to the beach

遊んでゐたら一人の小男が  
遊んでいると一人の小男が  
to play, when a little man

来てゐたから、川下へ下ると私も川下へ  
やって来ました。男が川下へ向おうとすると私も川下へ  
came along. When the man tried to head downstream, I

下り、川上へ来ると私も川上へ行き道をさへぎつた。  
先回りし、男が川上へ行こうとすると私も川上に先回りして行く手をさえぎりました。  
went downstream ahead of him, and when he tried to go upstream, I went upstream ahead of him and blocked his way.

すると川下へ六回  
そうやって川下へ6回  
When we had gone downstream six times

川上へ六回になった時小男は  
川上へ6回になったとき、小男は  
and upstream six times, the little man

持前の瘡癩を顔に表して言ふことには  
とうとう怒りを顔に表してこう言いました。  
finally showed rage on his face and said the following:

「パイパイ  
「パイトゥントゥン パイトゥントゥン  
"Pii tuntun, pii tuntun!"

- 10 タン ヘカチ ウェン ヘカチ エイキ チキ、  
tan hekachi / wen hekachi / eiki chiki,  
tan hekaci wen hekaci e=iki ciki,  
この 男の子 悪い 男の子 お前・する したら
- 11 タン エサンノツ テエタ レヘ タネ レヘ  
tan esannot / teeta rehe / tane rehe  
tan esannot teeta rehe tane rehe  
この 岬 昔 ~の名 今 ~の名
- 12 ウカエピタ エキ クシネナ！」  
ukaepita / eki kushnena!”  
ukaepita e=ki kus ne na!”  
解きあうこと お前・~をする するんだぞ
- 13 ハワシ チキ チエミナ コロ イタカシ ハウエ  
Hawash chiki / chiemina kor / itakash hawe  
hawas ciki ci=emina kor itak=as hawe  
言う したら 私・~を笑う しながら 話す・私 ~の話
- 14 エネ オカイ：——  
ene okai：——  
ene okay i：——  
このように ある(複) こと
- 15 「ネンナモラ タン エサンノツ テエタ レヘ  
“Nennamora / tan esannot / teeta rehe  
“nen nam ora tan esannot teeta rehe  
誰 (強調) いったい この 岬 昔 ~の名
- 16 タネ レヘ エランペウテカ！  
tane rehe / erampeuteka!  
tane rehe erampewtek ya!  
今 ~の名 ~を知らない か
- 17 テエタ アナク シンヌプル クス  
Teeta anak / shinnupur kusu  
teeta anak sinnupur kusu  
昔 は 時代が優れている ので
- 18 タパン エサンノツ 『カムイエサンノツ』 アリ  
tapan esannot / ‘Kamuiesannot’ ari  
tapan esannot ‘kamuy esannot’ ari  
この 岬 神 岬 と
- 19 アイエア コロカ タネ アナクネ シリパン クス  
ayea korka / tane anakne / shirpan kusu  
a=ye a korka tane anakne sirpan kusu  
人・~を言う した けれども 今 は 時代が衰える ので
- 20 『イナウエサンノツ』 アリ アイエ ルウエ タシ アンネ！」  
‘Inauesannot’ ari / aye ruwe / tashi anne!”  
‘inaw esannot’ ari a=ye ruwe tasi an ne!”  
イナウ 岬 と 人・~を言う こと でこそあるのだぞ

此の小僧め悪い小僧め、そんな事をするなら  
この小僧、なんて悪いガキなんだ、そんなことするんなら  
You little rascal, what a wicked brat you are! If you're so clever,

此の岬の、昔の名と今の名を  
この岬の昔の名と今の名を  
let's see you guess this cape's old name

言解いて見ろ」  
言い当ててみる！」  
and its new name!"

私は聞いて笑ひながらいふこと  
と小男が言うので、私が笑いながら言ったのは  
the little man said, so laughing, what I said

には……  
次のようでした。  
was as follows:

「誰が此の岬の昔の名と  
「誰がこの岬の昔の名と  
"Why, who doesn't know this cape's old name

今の名を知らないものか！  
今の名を知らないものか！  
and its new name!

昔は、尊いえらい神様や人間が居つたから  
昔は、尊い時代だったので  
The olden days were a noble era, so

此の岬を神の岬と  
この岬は、神の岬と  
this cape was called the Cape of the Gods,

言つたものだが、今は時代が衰へたから  
呼ばれていたが、今は時代が衰えたので  
but the current age is in decline, so now it's called

御幣の岬とよんでゐるのさ！」  
御幣の岬と呼ばれているのさ！」  
the Cape of the Inau!"

- 21 イタカシ アワ ポンルプネアイヌ エネイタキ：——  
 itakash awa / ponrupneainu / eneitaki：——  
 itak=as awa pon rupne aynu ene itak i：——  
 話す・私 したところ 小さい 大人の 男 このように 話す こと
- 22 「パイ トゥントゥン、パイ トゥントゥン！  
 “Pii tuntun, / pii tuntun!  
 “pii tuntun, pii tuntun!  
 パイ トゥントゥン パイ トゥントゥン
- 23 タン ヘカチ、ソンノヘタテ エハワン チキ  
 Tan hekachi, / sonnohetap / ehawan chiki  
 tan hekaci, sonno hetap e=hawan ciki  
 この 男の子 本当に (強調) お前・言う したら
- 24 タパン ペツポ テエタ レヘ タネ レヘ  
 tapan petpo / teeta rehe / tane rehe  
 tapan petpo teeta rehe tane rehe  
 この 小川 昔 ~の名 今 ~の名
- 25 ウカエピタ エキ クシネナ。」  
 ukaepita / eki kushnena.”  
 ukaepita e=ki kus ne na.”  
 解きあうこと お前・~をする するんだ ぞ
- 26 ハワシ チキ イタカシ ハウエ エネ オカイ：——  
 hawash chiki / itakash hawe / ene okai：——  
 hawas ciki itak=as hawe ene okay i：——  
 言う したら 話す・私 ~の話 このように ある(後) こと
- 27 「ネンナモラ タパン ペツポ テエタ レヘ  
 “Nennamora / tapan petpo / teeta rehe  
 “nen nam ora tapan petpo teeta rehe  
 誰 (強調) いったい この 小川 昔 ~の名
- 28 タネ レヘ エランペウテカ！  
 tane rehe / erampeuteka!  
 tane rehe erampewtek ya!  
 今 ~の名 ~を知らない か
- 29 テエタ カネ シンヌプリタ タパン ペツポ  
 teeta kane / shinnupurita / tapan petpo  
 teeta kane sinnupur i ta tapan petpo  
 昔 して 時代が優れている 時に この 小川
- 30 『カンチウエトウナシ』 アリ アイエア コロカ  
 ‘Kanchiwetunash’ ari / ayea korka  
 ‘kanciwe-tunas’ ari a=ye a korka  
 上の流れ 速い と 人・~を言う した けれども
- 31 タネ シリパン クス 『カンチウエモイレ』 アリ  
 tane shirpan kushu / ‘Kanchiwemoire’ ari  
 tane sirpan kusu ‘kanciwe-moyre’ ari  
 今 時代が衰える ので 上の流れ 遅い と

云ふと、小男のいふことには  
 と答えると、小男はこう言いました。

I replied, and the little man said these words:

「パイトンパイトン  
 「パイトゥントゥン パイトゥントゥン  
 "Pii tuntun, pii tuntun!

此小僧め本當にお前はさういふなら  
 この小僧めそこまで言うんなら  
 You little rascal, if you're so clever,

此の川の前の名と今の名を  
 この川の昔の名と今の名を  
 let's see you guess this river's old name

言つて見ろ。」  
 当ててみる！」  
 and its new name!"

聞くと、私の言ふことには  
 と言うので、私はこう言いました。  
 he said, so I said this:

「誰が此の川の前の名  
 「誰がこの川の昔の名  
 "Why, who doesn't know this river's

今の名を知らないものか！  
 今の名を知らないものか！  
 old name and its new name!

昔、えらかつた時代には此の川を  
 昔は尊い時代だったのでこの川は  
 The olden days were a noble era, so this river

流れの早い川と言つてゐたのだが  
 急流川と呼ばれていたのだけれど  
 was called the Rapid-Flowing River,

今は世が衰へてゐるので流れの遅い川と  
 今は時代が衰えているので遅流川と  
 but the current age is in decline, so now it's called

- 32 アイエ ルウエ タシ アンネ！」  
 aye ruwe tashi anne! ”  
 a=ye ruwe tasi an ne! ”  
 人・～を言う こと でこそあるのだ ぞ
- 33 イタカシ アワ ポンルプネアイヌ エネ イタキ：——  
 itakash awa / ponrupneainu / ene itaki : ——  
 itak=as awa pon rupne aynu ene itak i : ——  
 話す・私 したところ 小さい 大人の 男 このように 話す こと
- 34 「パイ トゥントゥン、パイ トゥントゥン！」  
 “Pii tuntun, / pii tuntun!  
 “pii tuntun, pii tuntun!  
 パイ トゥントゥン パイ トゥントゥン
- 35 ソンノヘタプネ エハワン チキ、  
 sonnohetapne / ehawan chiki,  
 sonno hetap ne e=hawan ciki,  
 本当に (強調) として お前・言う したら
- 36 ウシンリツピタ アキ クシネナ！」  
 ushinritpita / aki kushnena! ”  
 u-sinrit-pita a=ki kus ne na! ”  
 素性の当てっこ 私たち・～をする するんだ ぞ
- 37 ハワシ チキ イタカシ ハウエ エネオカイ：——  
 hawash chiki / itakash hawe / eneokai : ——  
 hawas ciki itak=as hawe ene okay i : ——  
 言う したら 話す・私 ～の話 このように ある(複) こと
- 38 「ネンナモラ エシンリチヒ エランペウテカ！」  
 “Nennamora / eshinrichihi / erampeuteka!  
 “nen nam ora e=sinricihi erampewtek ya!  
 誰 (強調) いったい お前・～の素性 ～を知らない か
- 39 オツテエタ オキキリムイ キムタ オマン フ、  
 otteeta / Okikirmui / kimta oman wa,  
 otteeta Okikirmuy kim ta oman wa,  
 大昔 オキキリムイ 山 に 行く して
- 40 クチャ カリタ ケネイヌンペ カラ アイケ  
 kucha karita / keneinunpe / kar aike  
 kuca kar i ta kene inumpe kar ayke  
 狩小屋 ～を作る 時に ハンノキ 炉ぶち ～を作る したのだが
- 41 ネ イヌンペ アペカラ フ サツテク オケレ、  
 ne inunpe / apekar wa / sattek okere,  
 ne inunpe apekar wa sattek okere,  
 その 炉ぶち 火に当たる して 乾く ～してしまう
- 42 オキキリムイ オアラケヘ オテレケ コ オアラケヘ  
 Okikirmui / oararkehe / oterke ko / oararkehe  
 Okikirmuy oararkehe oterke ko oararkehe  
 オキキリムイ ～の半分 ～を踏む すると ～の半分

言つてゐるのさ。」  
 呼ばれているのさ！」  
 the Slow-Flowing River!"

云ふと小男の云ふことには  
 と私が言うと小男はこう言いました。  
 I said, and the little man said as follows:

「ピイトントンピイトントン  
 「ピイトゥントゥン ピイトゥントゥン  
 "Pii tuntun, pii tuntun!"

本当にお前そんな事を云ふなら  
 そこまで言うんなら  
 If you're so clever,

お互の素性の解合ひをやらう。」  
 お互いの素性の当てっこをしよう」  
 let's guess each other's origins,"

聞いて私の云ふことには  
 と言うので、私はこう言いました。  
 he said, so I said the following:

「誰がお前の性素を知らないものか！」  
 「誰がお前の素性を知らないものか！」  
 "Why, who doesn't know your origin!"

大昔、オキ、リムイが山へ行つて  
 大昔、オキキリムイが山へ行って  
 Long, long ago, Okikirmui went to the mountains

狩獵小屋を建てた時榛の木の爐縁を作つたら  
 狩り小屋を作ろうとしたとき、ハンノキの炉縁を作つたところ  
 and tried to build a hunting shack, and when he built a hearth frame of alder wood,

その爐縁が火に當つてからからに乾いてしまつた。  
 その炉縁が火に當って乾いてしまつた。  
 the hearth frame was dried out by the fire.

オキ、リムイが片方を踏むと片一方が  
 オキキリムイが片側を踏むと、もう片側が  
 When Okikirmui stepped on one side of the hearth frame, the other side

43 ホタリ。ネフアンペ オキキリムイ ルシカ クス  
 hotari. Newaanpe / Okikirmui / rushka kushu  
 hotari. newaanpe Okikirmuy ruska kusu  
 尻を上げる そのこと オキキリムイ ~に怒る ので

上る、それをオキ、リムイが怒つて  
 上がった。それにオキキリムイが怒って  
 went up. That made Okikirmui angry, and he

44 ネ イヌンペ ペトツタ コロ ワ サン ワ、  
 ne inunpe / pet otta / kor wa san wa,  
 ne inumpe pet or ta kor wa san wa,  
 その 炉ぶち 川 ~の所に ~を持つ して 出る して

其の爐縁を川へ持つて下り  
 その炉縁を川に持って行って  
 took the hearth frame to the river

45 オスラ ワ イサム ルウエ ネ。  
 oshura wa / isam ruwe ne.  
 osura wa isam ruwe ne.  
 ~を捨てる して しまう のである

捨て、しまったのだ。  
 捨ててしまったのだ。  
 and threw it away.

46 オロワノ ネ イヌンペ ペテソロ モム アイネノ、  
 Orowano / ne inunbe / petesoro / mom ainenō,  
 orowano ne inumpe pet esoro mom ayneno,  
 それから その 炉ぶち 川 ~に沿って下へ 流れる したあげく

それから其の爐縁は流れに沿って流れていつて  
 それから、その炉縁は流れに沿って漂い下り、そのうち  
 Then the hearth frame drifted downstream with the current, and before long

47 アトウイオロ オシマ、トゥ アトウイペンルル レ アトウイペンルル  
 atuioro oshma, / tu atuiopenrur / re atuiopenrur  
 atuy oro osma, tu atuy pen-rur re atuy pen-rur  
 海 ~の中 ~に入る 二つの 海 上の海水 三つの 海 上の海水

海へ出で、彼方の海此方の海波  
 海に入った。そこで何度も何度も波  
 it went into the sea. There, it was struck by the waves

48 チエシリック シリ カムイウタラ ヌカラ ワ  
 chieshirkik shiri / kamuiutar / nukar wa,  
 ci-esirkik siri kamuy utar nukar wa,  
 される・~にぶつける 様子 神 たち ~を見る して

に打つけられる様を神様たちが御覧になつて、  
 に打たれた。その様子を神々がお覧になって、  
 again and again. The gods saw this and

49 アエオリパク オキキリムイ テケカラペ ネエノ  
 aeoripak / Okikirmui / tekekarpe / neeno  
 a=eoripak Okikirmuy tekekar pe neeno  
 人・~を敬う オキキリムイ ~を手作りする もの そのまま

敬ふべきえらいオキ、リムイの手作りの物が其の様に  
 尊いオキキリムイさまの手作りのものが、そのように  
 thought it a pity for something made by the noble Okikirmui's hand

50 ヤイエランペウテク ワ モム アイネノ アトウイコムニン  
 yaierampeutek wa / mom ainenō / atuiKOMUNIN  
 yayerampewtek wa mom ayneno atuy-ko-munin  
 自分がわからなくなる して 流れる したあげく 海 と共に 腐る

何の役にもた、ず迷ひ流れて海水と共に腐つてしまふのは  
 何の役にも立たずに海に漂い、あげくのはてに海の中で腐ってしまうのは  
 to drift uselessly

51 アエヌケ クス、カムイウタラ オロワ  
 aenunuke kusu, / kamuiutar orowa  
 a=enunuke kusu, kamuy utar orowa  
 される・~について ので 神 たち から  
 ~を惜しむ

勿体ない事だから神様たちから  
 惜しいので、神々から  
 and finally end up rotting in the middle of the sea,

52 ネ イヌンペ チェツポネ アカラ ワ 『イヌンペペチェツポ』 アリ  
 ne inunbe / cheppone akar wa / 'Inunpecheppo' ari  
 ne inumpe ceppo ne a=kar wa 'inumpe-ceppo' ari  
 その 炉ぶち 小魚 として 人・~を作る して 炉ぶち魚 と

其の爐縁は魚にされて、爐縁魚  
 その炉縁は魚に姿を変えられて炉縁魚  
 so that hearth frame was turned into a fish and was named

53 アレコレ ルウエ ネ。  
 arekore ruwe ne.  
 a=rekore ruwe ne.  
 人・~に名前を付ける のである

と名づけられたのだ。  
 と名づけられたのだ。  
 a 'hearth-frame fish.'



- 54 アフ、ネ イヌンペペチェツポ、ヤイシンリツ  
 Awa, / ne inunpepecheppo, / yaishinrit  
 awa, ne inumpepe-ceppo, yaysinrit  
 すると その 炉ぶち魚 自分の素性
- 55 エランペウテク ワ アイヌネ ヤイカラ ワ イキ コラン。  
 erampeutek wa / ainune yaikar wa / iki koran.  
 erampewtek wa aynu ne yaykar wa iki kor an.  
 ~を知らない して 人間 として 化ける して する しながらい
- 56 ネ イヌンペペチェツポ エネ ルウエ タシ アンネ。」  
 Ne inunpepecheppo / ene ruwe tashi anne.”  
 ne inumpepe-ceppo e=ne ruwe tasi an ne.”  
 その 炉ぶち魚 お前・~である こと でこそあるのだ ぞ
- 57 イタカシ アフ、ポン ルアネアイヌ イポロホカ  
 itakash awa, / pon rupneainu iporohoka  
 itak=as awa, pon rupne aynu iporoho ka  
 話す・私 したところ 小さい 大人の 男 ~の顔色 も
- 58 ウエナウエナ イコカヌ ワ アン アイネ  
 wenawena ikokanu wa an aine  
 wen a wen a ikokanu wa an ayne  
 悪い して 悪い して じっと聞く して いる したあげく
- 59 「パイ トゥントゥン、パイ トゥントゥン！」  
 “Pii tuntun, / pii tuntun!”  
 “pii tuntun, pii tuntun!”  
 パイ トゥントゥン パイ トゥントゥン
- 60 エアニ アナク ポン ホロケウサニ エネ ルウエ タシ  
 eani anak / Pon Horkeusani / ene ruwe tashi  
 eani anak pon horkew sani e=ne ruwe tasi  
 お前 は 小さい オオカミ ~の子孫 お前・~である こと でこそ
- 61 アンネ。」  
 anne.”  
 an ne.”  
 あるのだぞ
- 62 イタツクセタ アトウイ オルン テレケ フミ チョブコサヌ、  
 itakkeseta / atui orun / terke humi / chopkosanu,  
 itak kese ta atuy or un terke humi copkosanu,  
 言葉 ~の末 に 海 ~の中 へ 跳ぶ 音 ザブンと言う
- 63 オシ インカラシ アフ、シネ フレ チェツポ  
 oshi inkarash awa, / shine hure cheppo  
 osi inkar=as awa, sine hure ceppo  
 後から 見る・私 したところ 一匹の 赤い 小魚
- 64 ホノヤノヤ ワ トオ ヘレパシ  
 honoyanoya wa / too herepashi  
 honoyanoya wa too herepasi  
 尻をねじりねじりする して ずっと 沖の方へ

ところが其の爐縁魚は、自分の素性が  
 ところが、その炉縁魚は、自分の素性が  
 However, that hearth-frame fish did not know

わからないので、人にばけてうろついてゐる。  
 分からないので、人間に化けてうろついている。  
 its own origin, so it turned itself into a human being and is now loitering around.

その爐縁魚がお前なのさ。」  
 その炉縁魚がお前なのさ」  
 That hearth-frame fish is you!"

云ふと、小男は顔色を  
 と私が言うと、小男は顔色を  
 While I was saying this, color rose to the little man's face

變へ變へ聞いてみたが  
 変えながら聞いていたが、あげくのはてに  
 as he listened, and finally,

「ピイトントン、ピイトントン！」  
 「ピイトゥントゥン ピイトゥントゥン  
 "Pii tuntun, pii tuntun!"

お前は、小さい、狼の子なの  
 お前は、オオカミの子孫の子なの  
 And you're a wolf's descendant!"

さ。」  
 さ」

云ひ終ると直ぐに海へパチヤンと飛込んだ。  
 と言ひ終わると、海へザブンととび込んだ。  
 he said, and when he finished, he plunged into the sea with a splash.

あと見送ると一つの赤い魚が  
 私その後姿を見ると、一匹の赤い魚が  
 As I gazed after him, I saw one red fish

尾鰭を動かしてずーつと沖へ  
 尾びれを動かして、ずっと沖へ  
 move its tailfin and go far, far,

65 オマン ワ イサム。  
 oman wa isam.  
 oman wa isam.  
 行く して しまう

66 アリ ポン ホロケウカムイ イソイタク。  
 ari pon Horkeukamui isoitak.  
 ari pon horkew kamuy isoytak.  
 と 小さい オオカミ 神 物語る

行つてしまつた。

行つてしまつた。

offshore.

と、幼い狼の神様が物語りました。

と、幼いオオカミの神さまが物語りました。

So the young Wolf God recounted.

## 〔言葉の説明〕

## ・ニシムアシ nismu=as (2行目)

ニシム nismu は「淋しい。退屈である。人恋しい」。沙流方言では、ミシム mismu。幾つもの神謡の初まりで、神さまが「退屈する」あまり出かけると語られます。神々は、なぜ「退屈する」のでしょうか。〔参考〕でもう少し掘り下げてみます。

## ・ポンルプネアイヌ pon rupne aynu (3行目)

ルプネ rupne は、「大きい。大粒の」。ルプネ アイヌ rupne aynu で「大人。成人」。ルプネ クル rupne kur (大人)の方が一般的。全体で、「小さい大人の男」。

## ・ヘパシ hepasi / ヘペライ heperay (4～5行目)

ヘパシ hepasi は、< he-pa-asi (頭・川下・立てる) →川下へ。ヘペライ heperay は、< he-pe-raye (頭・川上・移す) →川上へ。

## ・ウカエピタ ukaepita (12行目)

この言葉は、< u-ka-e-pita (互い・上・で・をほどく) →を次々と解く。

## ・エランペウテカ erampewtek ya (16行目)

この言葉は、< erampewtek ya (知らないか) で、「知らないだろうか (いや、知っている)」。

## ・シンヌプル sinnupur (17, 29行目) / シリパン sirpan (19, 31行目)

この言葉は < sir-nupur (あたり・霊力がある) →尊い時代。シリパン sirpan は、< sir-pan (あたり・霊力がうすい) →衰えた時代。これは、一体何を意味しているのでしょうか。

これはオキクルミの昇天と関係がありました。人間に様々な文化を教えた始祖神(文化神)オキクルミが天から降ろされ、この人間界にいた時代は黄金時代(尊い時代)だと考えられていました。ところが世も末になり、人間たちがずるくなった時、オキクルミは人間に愛想をつかして天へ去っていったと考えられています(オキクルミの昇天)。この時代のことを(時代が衰えている)ととらえられているのです(金田一京助「アイヌ始祖オキクルミ伝説」)。金田一は「アイヌは……一つの人類墮落説を採って」いると述べています。

なお、オキキリムイまたはオキクルミについては、コラム(15)も参照のこと。

## ・カンチウェトウナシ kanciwetunas (30行目)

この言葉は、< kan-ciw-e-tunas (上・流れ・そこで・速い) →出水の流れが速い。カンチウ kan ciw とは「雨が降って最初にどっと下る出水」(地名アイヌ語小辞典)。

## ・ウシンリツピタ usinrit-pita (36行目)

この言葉は、< u-sinrit-pita (互いに・祖先・をときほどく) →互いに素性を解きあう。

シンリツ sinrit は < sir-rit (大地・筋) 天地に入りこんでいる筋。(植物の)根。「先祖」という意味もあります。面白いのは、英語の root が「根」「根本」「祖先」を表わすのと同

じようにアイヌ語でも「根(シンリツ)は、自らのルーツである「先祖」という意味を持ちます。ここでは「根本」を解く、といった意味。

## ・オツテエタ otteeta (39行目)

これは < or-teeta (全く・昔) →大昔。

## ・アペカラ ape kar (41行目)

アペ カラ ape kar は「火に当たる」。風に当たる、は、レラ カラ rera kar。雨に当たる、は、アプト カラ apto kar。

## ・オアラケヘ oararkehe (42行目)

これは、< oar-arke-he (全く・片方・所属形辞) 全く片一方。アラケ arke (片方) で意味は十分ですが、音節をふやして5つにするため。

## ・ホタリ hotari (43行目)

これは < ho-tari (尻・を上げる) →片側が上がる。火に当って乾燥し反ったために踏むと片側が上がること。

## ・アトウイペンルル atuy pen-rur (47行目)

ペンルル penrur は < pen-rur (上方の・海水) →(海の)表層水→波。pen は < pe-ne (川上・である) →上手である。上方の。例えば、ペンラム penram (上方の・胸腹部) 体の上部。アトウイ ペンルル atuy penrur で「海の表層水(波)」、トゥ～レ～tu～re～は、「二つの～三つの～」→数々の～。さまざま～。ここでは、あちらの海の波、こちら海の波。

## ・チエシリキク ciesirkik (48行目)

これは < ci-e-sir-kik (～される・で・あたり・を打つ) →打ちつけられる。全体で「(炉縁がさまざまな波に)打ちつけられる」という意味。

## ・アエオリパク a=eoripak (49行目)

これは、< a=e-oripak (人が・～を・敬う) 人が敬う→敬われる。

## ・テケカラペ tekekarpe (49行目)

この言葉は、< tek-e-kar-pe (手・で・を作る・もの) →手作りの物。

## ・アトウイコムニン atuykomunin (50行目)

これは < atuy-ko-munin (海・と共に・腐る) →海水と共に腐る。

## ・チェツポネ アカラ ceppo ne a=kar (52行目)

これは < cep-po ne a=kar (魚・指小辞・に・人が・を作る) →小魚にされる。

・イヌンペペチェツポ inunpepeceppo (52行目)

これは < inunpe-ipe-cep-po (炉縁・魚・魚・指小辞) 炉縁魚。ここでは イヌンペペ inunpepe ですが沙流方言などでは、イヌンペイペ inunpe-ipe。魚という言葉がくりかえされていますが、「ノート」をみると、inunpecheppo となっていて繰り返しがありません。

・アレコレ a=rekore (53行目)

これは < a=re-kor-e (人が・名前・を持つ・させる) →人が名前を持たせる→名前を与える。名づけられる。

・サニ sani (60行目)

これは < san-i (下りる・もの) → (先祖から代々) 下ってきたもの→子孫。

・イタツケセタ itak kese ta (62行目)

これは < itak kese ta (言葉・の末端・で) →言い終わると。

・チョブコサヌ copkosanu (62行目)

これは < cop-kosanu (水音の擬音語・急に~する) →チャポンとする。テレケ フミ チョブコサヌ terke humi copkosanu で「飛び込む音は、ザブンとした」。

・ホノヤノヤ honoyanoya (64行目)

これは < ho-noya-noya (尻・を揺らす・反復) →尾びれを揺らめかす。

〔参考〕

ここでも難語、不明語の解明を試みてみます。参考までに。

・ホテナオ hotenao (1行目) / ピイ トゥントゥン pii tuntun (9行目)

ホテナオというサケへは、白老に伝承されている類話では、ホテナ hotenna となっています。

ピイトゥントゥンというサケへは何でしょうか。「アイヌ民譚集」中のパナンベ放屁譚に、ピイトゥントゥンという言葉が出てきます。そこでは、「カニ トゥントゥン ピイトゥントゥン」になっています。これは、愛らしい鳥が鳴く声として表現されているものです。カニトゥントゥンの意味は、美しい金属音がチャリンチャリンと鳴る、という意味だと考えられます。ピイは小鳥の鳴き声。つまり、愛らしい小鳥の「ピイチャリンチャリン」という美しい鳴き声を意味すると考えられます。しかし、なぜ小男(炉縁魚)にこのようなかわいらしいサケへが付くのかは、よくわかりません。想像を思いきりたくましくすれば、小男のルーツであるハンノキ、そこにとまりにくる小鳥、ということからでしょうか。

・ニシム nismu (2行目)

ニシム nismu は「退屈する。淋しい」という意味。沙流方言では ミシム mismu。なぜ神々は退屈すると表現されるのでしょうか。

退屈は、別の言い方では平穏無事、ということ。反対に神さまが退屈ではなく、出かける用事があるということは何か災いか事件が起こっているということになるのかもしれませんが。そうだとすれば、神謡の初まりで、神さまが「退屈する」とは、「平穏な日々が毎日続いて」という意味になります。

・ネンナモラ nennamora (15行目)

この言葉も分析が難しいです。浜田隆史氏の一つの試案を紹介します。「ユーカラ集2」(金田一京助)に nen tap ora が出ています。nam はこの tap の異形か急言ではないかというもの。つまり、nennamora < nen-nam-ora (誰・強調・いったい) →「誰がいったい」。

・イヌンペ inumpe (40行目)

「<sup>ろぶち</sup>炉縁」のことを イヌンペ inumpe といいます。

子供たちのナゾナゾに「朝も夕も背中あぶりをしているものなあに」というのがあります。背中あぶりとは、炉端に寝ころんで火で背中をあたためていることですが、仕事をせずを楽しんでいる(怠けている)ことをも意味します。答えは「イヌンペ(炉縁)」。

イヌンペ inumpe を分解すれば、< inun-pe (くん製にする・もの) となります。inun 「くん製にする」(バチラー辞典)。先のナゾナゾを考えると、火で一日中背中をあぶっているものだといいます。そこから、「炉であぶられる(くん製にされる)もの」→炉縁、となったのでしょうか。

## コラム (10)

### 犬のルーツはオオカミか？

オオカミは ホロケウ カムイ horkew kamuy とか、ウォセ カムイ wose kamuy (ウォーという神)といわれ、クマ、シマフクロウに次ぐ位の高い神さまとされました。北海道に住んでいたエゾオオカミは残念なことに明治20年代に絶滅しました。剥製は北大の博物館に残っています。

ところで、オオカミについての神謡では、よく犬と混同したような話になっています。そればかりか北海道各地に残る地名で、セタ (犬) の名のつくもの (例えば、セタウシナイ) の多くは、実はオオカミのことを表わしているのだといえます。また寛政4年の「夷謡俗話」にも、メス犬が山に入ってオオカミの仔を胎んで戻ってきて仔を3匹産み、また仔をくわえて山に帰った」という記録が残っています。そしてオオカミと犬が交尾してできた仔を飼っていたという話も残っています。

さらに、沙流川筋では、犬が死んで犬送りをするときには、犬を山の方に向けて「あなたの祖神は偉大な方であるから、祖先のオオカミ神の国へ行くのですよ」といって送るといいます。

アイヌ文化研究者の中には、オオカミと犬は全く別な動物なので、狩りの上手なオオカミの血が混ざることによって犬も狩りの名手になるという信仰から生まれた伝承だろうと考える人もいました。

はたして、犬の祖先はオオカミなのでしょうか？ この疑問に最新のDNA科学が挑みました。その結果、犬の祖先はオオカミであることがわかりました。今から二万数千年ほど前にオオカミは人間よって家畜化され、犬になったのだといえます。また、犬はオオカミと交尾して仔をつくることもできます。そりを引く犬として有名なシベリアン・ハスキーは、オオカミと犬を交配してできた犬だといわれます。またシベリアの狩猟民は、メス犬を森の木の下につないで置いてオオカミと交配させ、気性の荒い狩りの上手な仔をとったといえます。

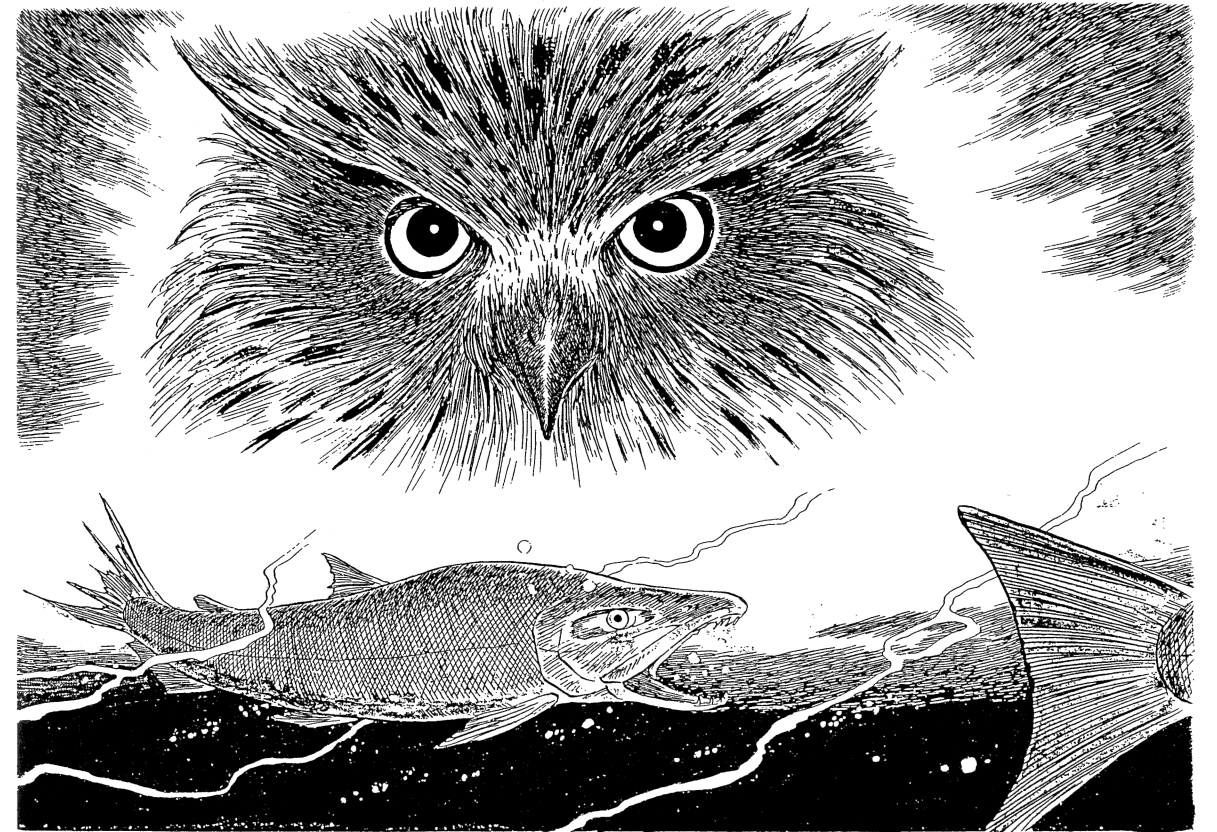
このようにアイヌ民族の中で古くから伝えられてきた神謡や言い伝えは、単なる信仰ではなく、確かな根拠をもっていたのです。

千歳に伝わる「トゥミッミッ」というサケへのついた神謡は、犬の話で始まるが後半オオカミの話になったのかと思わせるほど犬とオオカミは同じものとして扱われています。

## 7

### シマフクロウ神が自らうたった謡 「コンクワ」

**kamuycikap kamuy yayeyukar**  
**Song sung by owl god**



## 第7話

# シマフクロウ神が自らをうたった謡

## 「コンクワ」

### 〔物語とその背景〕

これは年老いたシマフクロウが自ら語った物語です。シマフクロウは、コタン コロ カムイ kotan kor kamuy (村の神さま) と呼ばれていて、常に人間たちが食糧に恵まれて生活できるよう見守るのがその役割です。その役目にどれほど一生けん命なのか、この物語からわかってくるでしょう。

昔の私(シマフクロウ)の声は、立派な弓の弦から弾き出される音のように力強かったのだが、今はすっかり老い衰えてしまった。今、私は、私に代わって天へ行って神々に訴えるため、弁論に自信のある者を求めている。訴えは5つ半の条項に及んでいる、と行器のふたを叩いて拍子をとりながら私は語った。すると入口で誰かが「私の他に誰が雄弁で、訴えに自信のある者がいるでしょうか」と言うので、見るとカラスの若者だった。そこで私は若者を家に入れて、行器のふたを叩いて拍子をとりながら訴えの内容を語り伝えて3日経った。三つ目の訴えを語っている最中ふと見るとカラスの若者は炉縁の後に居眠りをしているのではないか。それを見て私は、むらむらと怒りがこみ上げてきて、その若者を羽根ごと叩いて殺してしまった。

それからまた行器のふたを叩いて拍子をとりながら、誰か雄弁な者はいないかと語った。するとまた誰かが入口に来て「私の他に誰が雄弁で、訴えに自信のある者がいるでしょうか」と言う。見ると、それは山のカケスだった。私は家に入れ、また行器のふたを叩きながら訴えを語り聞かせた。四日経って四つ目の訴えを語っている最中、山のカケスは炉縁の後に居眠りを始めた。私は、カッときて山のカケスを羽根ごとなくって殺してしまった。

それからまた行器のふたを叩いて拍子をとりながら、誰か雄弁な者で天に使者として行ってくれる者はいないかと語った。すると誰かがうやうやしい態度で入ってきた。それはカワガラスの若者で、立派な様子で左座(来訪者の座る場所)に座った。そこで私は、5つ半の訴えを昼も夜もぶっ続けて語り伝えた。カワガラスの若者は居眠りする気配も全くなく真剣に聞いていて、六日目に私が全てを伝え終るやいなや天窓を通り抜けて天へ行った。

私の語り伝えた訴えは、次のような内容である。人間世界に飢饉が起こって、人間たちは餓死寸前になっていた。いったいどういう訳でそうなったのかを調べてみると、天で鹿を降ろす神と魚を降ろす神が相談し合って鹿も魚も人間界に降ろさないように決めていたからだった。他の神々も心配してなんとか降ろしてやったらどうかと言っても、全く聞こうともしない。その結果、人間たちが獵に山に入っても鹿もいないし、漁に川へ行っても魚もいないことになったのである。それを見て、これではあまりにひどすぎると私は怒って、鹿の神と魚の神へ訴えるためカワガラスを使者に立てたのだった。

結果を待っていて、数日経つと天のはるかかなたから微かな音が聞こえてきて、やがて誰かが入ってきた。見るとカワガラスの若者が、以前よりも美しく、勇者の顔つきもりりしく返事を述べはじめた。それは次のようなものだった。

鹿の神と魚の神が天から鹿や魚を降ろさなかった訳は、人間たちが鹿を獲ったときに木で頭を叩き、剥いだ皮はそのまま木原に投げ捨てていた。魚を捕ると腐れ木で頭を叩いて殺していた。そのため鹿たちは裸で泣きながら鹿の神のもとへ帰り、魚たちは腐れ木をくわえて魚の神のもとへ帰った。鹿の神と魚の神は怒って互いに話し合って鹿も魚も降ろさないことにしたのだった。しかし、これから後、人間たちが鹿や魚をきちんとした扱い方で臨むならば、鹿も魚も降ろすだろう、と鹿の神と魚の神が言ったとカワガラスは詳しく述べた。

それを聞いて私は、カワガラスをほめたたえた。たしかに見てみると人間たちは鹿や魚を粗末に扱っている。そこで以後そのようなことのないよう飢饉の原因を人間たちに夢で知らせた。すると人間たちも、はっと気がつき、それからは、御幣のような魚の頭打棒を美しく作り、それで魚を捕るようになった。また鹿を獲ったときは、鹿の頭を美しく飾って御幣で祭った。そのため魚たちは喜んで美しい御幣をくわえて魚の神のもとへ帰り、鹿たちは喜んで新しく飾られた頭で鹿の神のもとへ帰っていった。それを鹿の神や魚の神はとても喜んで、魚も鹿もたくさん人間界に降ろしたのである。人間たちはもう何一つ困ることも飢えることもなく暮らしている。私はそれをみて安心した。

私は、老い衰えて天へ行こうと考えていたが、私の守っている人間の世界が飢饉になり、人々が餓死寸前になっているのを放って行くことができないので、これまで踏み止まってきたが、今はもう何も心配することはなくなった。私のあとに真の勇者を置いて、人間の世界を守るようにして、今、私は天へ行くのである。と村を見守る神、おじいさん神が物語って天へ行った。

神々は、みな役割をもってこの世(人間界)に降りてきています。シマフクロウは、その大きな目で人間の村に魔が入らないように見張り、人々が飢えないように見守るのが最大の役目となっています。そして、もしも人間界に異変(飢饉のような)が起これば、ただちにその原因を探り出し解決しようと全力を傾けます。この物語は年老いて声も弱り神々に訴える力が衰えたシマフクロウが代理の者を立てようとしてテストをくり返し、それに合格したカワガラスの若者に重要な役目を託す、というものです。

この物語の最大のテーマは、食糧となるものに人間はどのような態度で臨まなければならないかを伝えることです。日本語に訳すと「粗末に扱う」とか、その反対に「ていねいに扱う」となるのですが、アイヌ語のカトゥ ウェン katu wen とかカトゥ ピリカ katu pirka には、もっと奥深い意味があります。ただ感謝の言葉を唱えて食べればいいというものではありません。そこには、きちんとした一定の作法が必要なのです。

では、その作法が目指していることは何でしょうか。

それを知ることは、神謡が伝える世界観の最も重要なものを知ることになるでしょう。

カムイチカフ カムイ ヤイエユカラ 「コンクワ」  
 Kamuichikap Kamui yaieyukar, “Konkuwa”  
 kamuycikap kamuy yayeyukar, “konkuwa”  
 神鳥(シマフクロウ) 神 自らを物語る コンクワ

## サケヘ：コンクワ konkuwa

- 1 コンクワ  
 Konkuwa  
 konkuwa  
 コンクワ
- 2 「テエタ カネ イタカシ ハウエ カリンパウンク  
 “Teeta kane / itakash hawe / karinbaunku  
 “teeta kane itak=as hawe karimpa-un-ku  
 昔 話す・私 ~の声 サクラの木の皮を巻いた弓
- 3 クヌム ノシキ チャウチャワツキ コラチタフネ  
 kunum noshki / chauchawatki / korachitapne  
 kunum noski cawcawatki koraci tapne  
 弓弦 ~の真ん中 ビュンビュンと音を立てる ように このように
- 4 イタカシ ハウエ オカイ アフ、  
 itakash hawe / okai awa,  
 itak=as hawe okay awa,  
 話す・私 ~の声 ある(複) したところ
- 5 タネ レツテカシ タネ オンネアシ キ フミ オカイ。  
 tane rettekash / tane onneash / ki humi okai.  
 tane rettek=as tane onne=as ki humi okay.  
 今 衰える・私 今 年老いる・私 ~をする ~の感じ だなあ(複)
- 6 ネフネヤッカ ネンカタウサ パウエトッコ ワ、  
 Newaneyakka / nenkatausa / pawetokkor wa,  
 ne wa ne yakka nen ka ta usa pawetokkor wa,  
 そうであるけれども 誰 か(係り言葉)も 雄弁である して
- 7 ソンコ オッタ ヤヨトウワシブ アン ヤクネ  
 sonko otta / yayotuwaship / an yakne,  
 sonko or ta yayotuwasi p an yakne,  
 伝言 ~の所 に 自信がある 者 ある ならば
- 8 カント オルン ソンコエムコ エイワンソンコ  
 kanto orun / sonkoemko / eiwansonko  
 kanto or un sonko emko e-iwan sonko  
 天 ~の所 へ 伝言 ~の半分 ~で6つの 伝言
- 9 チエウイテッカカイ。」アリ  
 chieuitekkarokai.” ari  
 ci=euytekkar okay.” ari  
 私・~について~を したいなあ と  
 使いを出す

梟の神が自ら歌った謡「コンクワ」  
 梟の神が自ら歌った謡「コンクワ」  
 Song Sung by the Owl God "Konkuwa"

コンクワ  
 コンクワ  
 Konkuwa

「昔私の物言ふ時は桜皮を巻いた弓の  
 「昔は、私が物言う声は桜皮を巻いた弓  
 "Long ago, when I spoke my voice rang out strong

弓把の央を鳴り渡らす如くに  
 その弓の絞の中央をビュンビュンと鳴らすかのように  
 like the whirl of a bow wrapped in cherry bark

言つたのであつたが  
 力強く言つたのであつたが、  
 when its center was plucked, but

今は衰へ年老ひてしまつた事よ。  
 今はもう老い衰えてしまつたことよ。  
 now I am old and feeble.

けれども誰か雄辯で  
 しかしながら、誰か雄弁で  
 However, if there is anyone

使者としての自信を持つてゐる者があつたら  
 伝言を伝える自信のある者がいたら  
 who is eloquent and confident in his ability to deliver a message,

天國へ五つ半の談判  
 天へ五つ半の伝言  
 I want to send him to carry five and a half

を言ひつけてやりたいものだ。」と  
 を届ける使者としてつかわしたいものだ」と  
 messages to heaven," I said,

- 10 クトシントコ プタカシケ チオレポレプ コロ  
kutoshintoko / putakashike / chioreporep kor  
kutosintoko puta kasike ci=oreporep kor  
たが付き行器 ふた ~の上 私・~を叩いて拍子を取る しながら
- 11 イタカシ アフ、アパ オッタ カナカンクニプ  
itakashi awa, / apa otta / kanakankunip  
itak=as awa, apa or ta kanakan kuni p  
話す・私 したところ 戸口 ~の所で どのような ~する 者
- 12 「ネン ウンモシマ ソンコ オッタ パウエトツコロ フ  
“ Nen unmoshma / sonko otta / pawetokkor wa  
“ nen un=mosma sonko or ta pawetokkor wa  
誰 私・~の他に 伝言 ~の所で 雄弁である して
- 13 ヤヨトウワシ ヤ。」 アリ、イタク ワクス  
yayotuwashi ya.” ari, itak wakusu  
yayotuwasi ya.” ari, itak wakusu  
自信がある か と 話す したので
- 14 インカラシ アフ パシクロツカヨ ネ カネ アン。  
inkarashi awa / Pashkurokkayo / ne kane an.  
inkar=as awa paskur okkayo ne kane an.  
見る・私 したところ カラス 男 ~である して ある
- 15 チアフンケ フ、オロワノ クトシントコ  
Chiahunge wa, / orowano / kutoshintoko  
ci=ahunke wa, orowano kutosintoko  
私・~を家に入れる して それから たが付き行器
- 16 プタ カシケ チオレポレプ コロ  
puta kashike / chioreporep kor  
puta kasike ci=oreporep kor  
ふた ~の上 私・~を叩いて拍子を取る しながら
- 17 パシクロツカヨ チウイテク クス、  
Pashkurokkayo / chiuitek kushu,  
paskur okkayo ci=uytek kusu,  
カラス 男 私・~を使いに出す ために
- 18 ネ ソンコ チイエ アイネ レレコ シラン、  
ne sonko / chiye aine / rerko shiran,  
ne sonko ci=ye ayne rerko siran,  
その 伝言 私・~を言う したあげく 三日 経つ
- 19 レソンコ パテク チイエラポクタ インカラシ アフ、  
resonko patek / chiyerapokta / ingarashi awa,  
re sonko patek ci=ye rapok ta inkar=as awa,  
三つの 伝言 だけ 私・~を言う 間に 見る・私 したところ
- 20 パシクロツカヨ イヌンペオシマク  
Pashkurokkayo / inumbeoshmak  
paskur okkayo inumpe osmak  
カラス 男 炬ぶち 後ろ

たが付のシントコの蓋の上をた、きながら  
私は、たが付きの行器のふたの上を叩き拍子を取りながら  
beating time on the lid of a hooped

私は云つた、ところが入り口で誰かが  
言った。すると戸口で誰かが  
shintoko.\* Just then, from the doorway, I heard someone say,

\* a large lacquer container

「私をおいて誰が使者として雄弁で  
「私の他に誰が雄弁で  
"Who is more eloquent

自信のあるものがあるでせう」といふので  
自信のある使者がいるでしょうか」と言うので  
and more confident a messenger than I?"

見ると鴉の若者であつた  
見るとカラスの若者であつた。  
When I looked, I saw that it was a young crow.

私は家に入れて、それから、たがつきのシントコの  
私は家に入れ、それから、たが付きの行器の  
I let him in, and then, in order to send the young crow on my errand,

蓋の上をた、きながら  
ふたの上を叩きながら  
I told him the messages as I

鴉の若者を使者にたてる爲  
カラスの若者を使者につかわすため  
beat on the lid of the hooped shintoko.

其の談判を云ひきかせて三日たつて  
その伝言を私が言いかけると三日経つた。  
After three days had passed,

三つ目の談判を話しながらかつて見ると  
まだ三つしか伝言を言いかけないというのを見ると  
although I had told only three of the messages, when I looked up,

鴉の若者は爐縁の後で  
カラスの若者は炬縁の後で  
I saw the young crow behind



- 21 コヘラチチ。シリキ チキ ウェンキンラネ  
 koherachichi. Shirki chiki / wenkinrane  
 koheracici. sirki ciki wen kinra ne  
 ～に頭をだらんと 様子である したら 狂ったような怒り として  
 ぶら下げる
- 22 ウンコヘタリ パシクロツカヨ  
 unkohetari / Pashkurokkayo  
 un=kohetari paskur okkayo  
 私・～に頭を持ち上げる カラス 男
- 23 チラブコキツク、チライケ ワ イサム。  
 chirapkokikkik, / chiraike wa isam.  
 ci=rap-ko-kikkik, ci=rayke wa isam.  
 私・～を羽ごとぶん殴る 私・～を殺す して しまう
- 24 オロワノ スイ クトシントコ プタカシケ  
 Orowano shui / kutoshintoko / putakashike  
 orowano suy kutosintoko puta kasike  
 それから また たが付き行器 ふた ～の上
- 25 チオレブコロ、  
 chiorepkor,  
 ci=orep kor,  
 私・～で拍子 しながら  
 を取る
- 26 「ネンカタウサ ソンコ オッタ ヤヨトウワシブ  
 “Nenkatausa / sonko otta / yayotuwaship  
 “nen ka ta usa sonko or ta yayotuwasi p  
 誰 か(係り言葉)も 伝言 ～の所 に 自信がある 者
- 27 アン ヤクネ カント オルン ソンコエムコ エイワンソンコ  
 an yakne / kanto orun / sonkoemko / eiwansonko  
 an yakne kanto or un sonko emko e-iwan sonko  
 ある ならば 天 ～の所 へ 伝言 ～の半分 ～で6つの 伝言
- 28 チエウイテツカラ オカイ。」アリ、  
 chieuitekkar okai.” ari.  
 ci=euytekkar okay.” ari.  
 私・～について～を したいなあ と  
 使いを出す
- 29 イタカシ アフ、ヘマンタ スイ アパ オルン  
 itakash awa, / hemanta shui / apa orun  
 itak=as awa, hemanta suy apa or un  
 話す・私 したところ 何か また 戸口 ～の所 へ
- 30 「ネン ウンモシマ パウエトツコロ ワ  
 “Nen unmoshma / pawetokkor wa  
 “nen un=mosma pawetokkor wa  
 誰 私・～の他に 雄弁である して
- 31 カント オルン アウイテクノイネ アンペ オカイ ハウエ。」  
 kanto orun / auiteknoine anpe / okai hawe.”  
 kanto or un a=uytek noyne an pe okay hawe.”  
 天 ～の所 へ 人・～を使いに出す らしく ある 者 ある(複) ～の話

居眠りをしてゐる、それを見ると、癪に  
 居眠りをしている。それを見て、激しい怒りが  
 the hearth frame, nodding off. Seeing that, violent anger

さわつたので鴉の若者を  
 こみ上げてきて、私はカラスの若者を  
 surged up within me, and I beat the young crow

羽ぐるみ引ばたいて殺してしまつた。  
 羽根ごとになぐって殺してしまつた。  
 to death, feathers and all.

それから又たが付きのシントコの蓋の上を  
 それからまた、たが付きの行器のふたの上を  
 Then, once again beating time on the lid

たゝきながら  
 叩いて拍子を取りながら、  
 of a hooped shintoko, I said,

「誰か使者として自信のある者が  
 「誰か伝言を届ける自信のある者が  
 "If there is anyone who is confident in his ability

あれば天國へ五つ半の  
 いれば、天に五つ半の伝言  
 to deliver a message, I want to send him

談判を言ひつけてやりたい。」と  
 の使者としてつかわしたいものだ」と  
 to carry five and a half messages to heaven."

言ふと、誰かがまた入口へ  
 言うと、誰かがまた戸口に立って  
 When I said this, once again, someone stood in the doorway and said,

「誰が私をおいて、雄辯で  
 「私の他に誰が雄弁で  
 "Who is more eloquent

天國へ使者に立つほどの者がありませう。」  
 天へ使者としてつかわされるような者があるでしょうか」  
 and more suited to deliver a message to heaven than I?"

- 32 イタク ワクス、 インカラシ アワ メトテヤミ  
 itak wakushu, / ingarash awa / Metoteyami  
 itak wakusu, inkar=as awa metot eyami  
 話す したので 見る・私 したところ 山奥 カケス
- 33 ネ カネ アン。  
 ne kane an.  
 ne kane an.  
 ~である して ある
- 34 チアフンケ ワ オロワノ スイ  
 Chiahunke wa, / orowano shui  
 ci=ahunke wa, orowano suy  
 私・~を家に入れる して それから また
- 35 クトシントコ プタ カシケ チオレブ コロ  
 kutoshintoko / puta kashike / chiorep kor  
 kutosintoko puta kasike ci=orep kor  
 たが付き行器 ふた ~の上 私・~を叩いて しながら  
 拍子を取る
- 36 ソンコエムコ エイワンソンコ チイエ ワ  
 sonkoemko / eiwansonko chiye wa  
 sonko emko e-iwan sonko ci=ye wa  
 伝言 ~の半分 ~で6つの 伝言 私・~を言う して
- 37 イネレレコ シラン、 イネソンコ チイエラポクタ  
 inererko shiran, / inesonko / chiyerapokta  
 ine rerko siran, ine sonko ci=ye rapok ta  
 四つの 日 経つ 四つの 伝言 私・~を言う 間 に
- 38 メトテヤミ イヌンペ オシマク コヘラチチ。  
 metoteyami / inumpe oshmak / koherachichi.  
 metot eyami inumpe osmak koheracici.  
 山奥 カケス 炉ぶち ~の後ろ ~に頭をだらんとぶら下げる
- 39 チルシカ クス メトテヤミ チラプコキッキク  
 Chirushka kushu / Metoteyami / chirapkokikkik  
 ci=ruska kusu metot eyami ci=rap-ko-kikkik  
 私・~を怒る ので 山奥 カケス 私・~を羽ごとぶん殴る
- 40 チライケ ワ イサム。  
 chiraike wa isam.  
 ci=rayke wa isam.  
 私・~を殺す して しまう
- 41 オロワノ スイ クトシントコ プタ カシケ  
 Orowano shui / kutoshintoko / puta kashike  
 orowano suy kutosintoko puta kasike  
 それから また たが付き行器 ふた ~の上
- 42 チオレブカネ、  
 chiorepkane,  
 ci=orep kane,  
 私・~で拍子 しながら  
 を取る

云ふので見ると山のかけす  
 と言うので、見ると山のカケス  
 When I looked, I saw that it was

であつた。  
 であつた。  
 a mountain jay.

家へ入れてそれからまた  
 家に入れてそれからまた  
 I let him in, and once again,

たが付のシントコの蓋の上をた、きながら  
 たが付きの行器のふたの上を叩いて拍子をとりながら  
 beating time on the lid of a hooped shintoko,

五ツ半の談判を話して  
 五つ半の伝言を語るのに  
 I spent four days telling the five and a half messages

四日たつて、四つの用向を言つてゐるうちに  
 四日が経った。四つ目の伝言を伝えている最中に  
 to the mountain jay. When I was in the middle of the fourth message, I noticed

山のかけすは爐縁の後に居眠りをしてゐる、  
 山のカケスは炉縁の後に居眠りをしている。  
 the bird dozing behind the hearth frame.

私は腹が立つて山のかけすを羽ぐるみひつぱたいて  
 私は怒って山のカケスを羽根ごとくぐって  
 Enraged, I beat the mountain jay to death,

殺してしまつた、  
 殺してしまつた。  
 feathers and all.

それからまたたが付のシントコの蓋の上を  
 それからまた、たが付きの行器のふたの上を  
 Once again, beating time on the lid

た、きながら、  
 叩いて拍子をとりながら、  
 of a hooped shintoko, I said,

- 43 「ネンカタウサ パウエットッコ ワ ソンコ オッタ  
 “Nenkatausa / pawetokkor wa / sonko otta  
 “nen ka ta usa pawetokkor wa sonko or ta  
 誰 か(係り言葉)も 雄弁である して 伝言 ~の所 に
- 44 ヤヨトウワシブ アン ヤクネ カント オルン  
 yayotuwaship / an yakne / kanto orun  
 yayotuwasi p an yakne kanto or un  
 自信がある 者 ある ならば 天 ~の所 へ
- 45 ソンコエムコ エイワンソンコ チコレ オカイ。」  
 sonkoemko / eiwansonko / chikore okai.”  
 sonko emko e-iwan sonko ci=kore okay.”  
 伝言 ~の半分 ~で6つの 伝言 私・~に~をやる したいなあ
- 46 イタカシ アイケ、カナカンクニブ  
 itakash aiike, / kanakankunip  
 itak=as ayke, kanakan kuni p  
 話す・私 したのだが どのような する 者
- 47 オリパク カネ シアウオライエ、インカラシ アワ  
 oripak kane / shiaworaye, / inkarash awa  
 oripak kane si-aworaye, inkar=as awa  
 恐縮する しながら 自分を中に押しやる 見る・私 したところ
- 48 カツケノツカヨ カムイシリネ  
 Katkenokkayo kamuishirine  
 katken okkayo kamuy siri ne  
 カワガラス 男 神 ~のようである
- 49 ハラキソネ エホラリ。シリキ チキ、  
 harkisone / ehorari. / Shirki chiki,  
 harkiso ne ehorari. sirki ciki,  
 左座 に ~に鎮座する 様子である したら
- 50 クトシントコ プタ カシケ チオレブ カネ、  
 kutoshintoko / puta kashike / chiorep kane,  
 kutosintoko puta kasike ci=orep kane,  
 たが付き行器 ふた ~の上 私・~を叩いて しながら  
 拍子を取る
- 51 ソンコエムコ エイワンソンコ クンネ ヘネ  
 sonkoemko / eiwansonko / kunne hene  
 sonko emko e-iwan sonko kunne hene  
 伝言 ~の半分 ~で6つの 伝言 夜 でも
- 52 トカブ ヘネ チエチャランケ。インカラシ コ  
 tokap hene / chiecharanke. / Inkarash ko  
 tokap hene ci=ecaranke. inkar=as ko  
 昼 でも 私・~を論じる 見る・私 すると
- 53 カツケノツカヨ ネペチウ ルウエ オアリサムノ  
 Katkenokkayo / nepechiu ruwe / oarisamno  
 katken okkayo nep eciw ruwe oar isam no  
 カワガラス 男 何 頭が~に刺さる こと 全く ない で

「誰か雄辯で使者として  
 「誰か雄弁で伝言を届ける  
 "If there is anyone who is confident

自信のある者があれば、天國へ  
 自信のある者があれば、天へ  
 in his ability to deliver a message, I want to

五ツ半の談判を持たせてやりたい。」  
 五つ半の伝言をその者に持たせたいものだ」  
 send him to heaven with five and a half messages."

と云ふと、誰かゞ  
 と言うと、誰かが  
 When I said this, someone

慎深い態度ではいつて来たので見ると  
 おそれ慎みながら入ってきた。見ると  
 respectfully entered my house. When I looked,

川鴉の若者美しい様子で  
 カワガラスの若者で、立派な様子をして  
 I saw that it was a young water ouzel, and with a splendid appearance,

左の座に坐つた。それで私は  
 左座に腰を下ろした。それを見て私は  
 he sat in the guest seat. Seeing that,

たが付のシントコの蓋の上をた、きながら  
 たが付きの行器のふたの上を叩いて拍子を取りながら  
 I began beating time on the hooped shintoko lid

五ツ半の用件を夜でも  
 五つ半の伝言を夜も  
 and told the five and a half messages,

晝でも言ひ續けた。見れば  
 昼も語り続けた。見ると  
 continuing night and day. When I looked up, I saw that

川ガラスの若者何も疲れた様子もなく  
 カワガラスの若者は居眠りする様子もなく  
 the water ouzel was listening to my words,

- 54 イコカヌ フ オカイ アイネ、トカプレレコ クンネレレコ  
 ikokanu wa / okai aine, / tokaprerko / kunnererko  
 ikokanu wa okay aine, tokap rerko kunne rerko  
 じっと聞く して いる(複) したあげく 昼 三日 夜 三日
- 55 チウコピシキ イワンレレコ ネ イタ  
 chiukopishki / iwanrerko / ne ita  
 ci=ukopiski iwan rerko ne i ta  
 私・～をお互いに数える 六つの 日 ～になる 時 に
- 56 チイエオケレ コ ナニ リクンスイカ  
 chiyeokere ko nani / rikunshuika  
 ci=ye okere ko nani rikunsuy ka  
 私・～を言う ～を終える すると すぐ 天窓 上
- 57 チオポソレ、カント オルン オマンフ イサム。  
 chioposore, / kanto orun / omanwa isam.  
 ci-oposore, kanto or un oman wa isam.  
 される・～に～を 天 ～の所へ 行く して しまう  
 通り抜けさせる
- 58 ネ ソンコ イツケウエ アナク、アイヌモシリ  
 Ne sonko / ikkewe anak, / ainumoshir  
 ne sonko ikkewe anak, aynu mosir  
 その 伝言 ～の要旨 は 人間 世界
- 59 ケムシ フ アイヌピトウタラ タネ アナクネ  
 kemush wa / ainupitoutar / tane anakne  
 kemus wa aynu-pito utar tane anakne  
 飢饉になる して 人間 たち 今 は
- 60 ケメコツ クシキ。ネピツケウネ エネシリキ シリネヤ  
 kemekot kushki. / Nepikkeune / eneshirki shirineya  
 kemekot kuski. nep ikkew ne ene sirki siri ne ya  
 飢えて死ぬ しそうである 何 ～の理由 として このように 様子である ようである か
- 61 インカラシ アフ、カント オッタ  
 inkarash awa, / kanto otta  
 inkar=as awa, kanto or ta  
 見る・私 したところ 天 ～の所 で
- 62 ユッコロ カムイ ネフ チェアココロ カムイ  
 Yukkor Kamui newa / Chepkor Kamui  
 yuk kor kamuy newa cep kor kamuy  
 シカ ～を持つ 神 と 魚 ～を持つ 神
- 63 ウコラムコロ フ ユク ソモサプテ チェア ソモサプテ  
 ukoramkor wa / yuk somosapte / chep somosapte  
 ukoramkor wa yuk somo sapte cep somo sapte  
 相談する して シカ ない ～を出す(複) 魚 ない ～を出す(複)
- 64 ルウエ ネ アワン クス、カムイウタラ オロフ  
 ruwe ne awan kusu, / kamuiutar orowa  
 ruwe ne awan kusu, kamuy utar orowa  
 のである だったのだ ので 神 たち から

聞いてみて晝と夜を  
 私の言葉に耳を傾けていた。そして昼と夜を  
 with no sign of nodding off. When it had been

数へて六日目に  
 数え合わせて六日目になったときに  
 altogether six days and six nights,

私が言ひ終ると直ぐに天窓から  
 私は語り終えた。するとカワガラスは直ちに天窓から  
 I finished speaking. Immediately, the water ouzel flew out through the smokehole

出て天国へ行つてしまった。  
 抜け出て天へ行つてしまった。  
 and went up to heaven.

其の談判の大むねは、人間の世界に  
 その伝言の内容とは、人間の世界に  
 The content of the message was that

饑饉があつて人間たちは今にも  
 饑饉が起こり人間たちが今にも  
 there was a famine and the humans were on the verge of

餓死しようとしてゐる。何う云ふ譯かと  
 餓死しようとしている。どういう訳でそうなったのかと  
 starvation. Looking at the reasons for this,

見ると天国に  
 見てみると、天で  
 it seemed that the god

鹿を司る神様と魚を司る神様とが  
 鹿を降ろす神さまと魚を降ろす神さまが  
 who sent the deer and the god who sent the fish down from heaven

相談をして鹿も出さず魚も出さぬことに  
 相談して鹿も降ろさず魚も降ろさない  
 had conferred and decided not to send down any more deer

したからであつたので神様たちから  
 ことにしたからだったので他の神々から  
 or any more fish. No matter how the other gods pleaded,

- 65 ネコナ アイエ ヤッカ センネポンノ エコッタヌノ  
 nekona aye yakka / senneponno / ekottanuno  
 nekona a=ye yakka senne ponno ekottanu no  
 どのように される・～を言う しても ちっとも～ない ～を気に留める で
- 66 オカイ クス、アイヌピトウタラ エキムネ クス  
 okai kusu, / ainupitoutar / ekimne kushu  
 okay kusu, aynu-pito utar ekimne kusu  
 いる(複) ので 人間 たち 山獵に行く ために
- 67 キムタ パイエ ヤッカ ユク カ イサム、チェブコイキ クス  
 kimta paye yakka / yuk ka isam, / chepkoiki kushu  
 kim ta paye yakka yuk ka isam, cep koyki kusu  
 山 に 行く(複) しても シカ も ない 魚 ～をとる ために
- 68 ペトツタ パイエ ヤッカ チェブ カ イサム ルウェ ネ アワン。  
 petotta / paye yakka / chep ka isam ruwe / ne awan.  
 pet or ta paye yakka cep ka isam ruwe ne awan.  
 川 ～の所 に 行く(複) しても 魚 も ない のである だったのだ
- 69 チヌカラ フ チルシカ クス カント オルン  
 Chinukar wa / chirushka kushu / kanto orun  
 ci=nukar wa ci=ruska kusu kanto or un  
 私・～を見る して 私・～を怒る ので 天 ～の所 へ
- 70 ユツコロ カムイ チェブコロ カムイ チコ ソンコアンパ  
 Yukkor Kamui / Chepkor Kamui / chiko sonkoanpa  
 yuk kor kamuy cep kor kamuy ci=kosonkoanpa  
 シカ ～を持つ 神 魚 ～を持つ 神 私・～に伝言を届けること
- 71 キ ルウェネ。  
 ki ruwene.  
 ki ruwe ne.  
 ～をする のである
- 72 オロワノ ケシトケシト シラン アイネ、  
 Orowano / keshtokeshto / shiran aine,  
 orowano kesto kesto siran ayne,  
 それから 毎日 毎日 時が経つ したあげく
- 73 カントコトコ セペパッキ フマシ アイネ、  
 kantokotor / sepepatki / humash aine,  
 kanto kotor sepepatki humas ayne,  
 天 面 はたはたと鳴る 音がする したあげく
- 74 カナカンクニヤ シアウオライエ。インカラシ アワ  
 kanakankunip / shiaworaye. / Inkarash awa  
 kanakan kuni p si-aworaye. inkar=as awa  
 どのような 者 ～する 自分を入に押しやる 見る ・私 したところ
- 75 カッケノツカヨ タネアン ピリカ シオアラウエンルイ、  
 Katkenokkayo / tanean pirka / shioarwenrui,  
 katken okkayo tane an pirka si-oar-wen-ruy,  
 カワガラス 男 今 ある 美しさ 全く素晴らしい

何んなに言はれても知らぬ顔をして  
 どんなに頼まれても少しも意に介さず  
 they would not pay them the slightest heed.

ゐるので人間たちは獵に  
 にいたため、人間たちが獵をしに  
 So when the humans went to the mountains to hunt,

山へ行つても鹿も無い、魚漁に  
 山に行っても鹿もいないし、魚とりに  
 there were no deer, and when they went to the river to fish,

川へ行つても魚も無い。  
 川へ行っても魚もいないのだった。  
 there were no fish.

私はそれを見て腹が立つたので  
 私はそれを見て腹が立ったので  
 Seeing that, I had become angry, so

鹿の神、魚の神へ使者をたてた  
 鹿を降ろす神、魚を降ろす神へ伝言を届けさせた  
 I sent a messenger to the gods who sent down the deer

のである。  
 のである。  
 and the fish from heaven.

それから幾日もたつて  
 それから何日かたつて  
 Several days passed,

空の方に微かな音がきこえてみたが  
 空のかなたから、かすかな音が聞こえてきた後、  
 and after I heard a faint sound from across the sky,

誰かがはいつて来た。見ると  
 誰かが入ってきた。見ると  
 someone entered my house. When I looked,

川ガラスの若者今は前よりも美しさを増し  
 カワガラスの若者が以前よりも美しくなって  
 I saw the young water ouzel, even more beautiful than before,

- 76 ラメトキポロ エイポットウム ニウナタラ、  
rametokipor / eipottumu / niunatarā,  
rametok ipor e-ipur-tumu-niwnatarā,  
勇者 容貌 ~で・容貌・~の中・猛々しい
- 77 イタサソソコ エチャランケ。  
itasasonko echaranke.  
itasa sonko ecaranke.  
返答の 伝言 ~を論じる
- 78 カント オッタ ユッコロ カムイ チェブッコロ カムイ  
Kanto otta / Yukkor Kamui / Chepkor Kamui  
kanto or ta yuk kor kamuy cep kor kamuy  
天 ~の所で シカ ~を持つ 神 魚 ~を持つ 神
- 79 タント パクノ ユク ソモアッテ チェブ ソモアッテ  
tanto pakno / yuk somoatte / chep somoatte  
tanto pakno yuk somo atte cep somo atte  
今日 まで シカ ない ~を沢山降ろす 魚 ない ~を沢山降ろす
- 80 イッケウエ アナク アイヌピトウタラ ユッコイキ コ  
ikkewe anak / ainupitoutar / yukkoiki ko  
ikkewe anak aynu-pito utar yuk koyki ko  
~の理由 は 人間 たち シカ ~をとる すると
- 81 チクニ アリ ユクサパ キク、イリ コ  
chikuni ari / yuksapa kik, / iri ko  
cikuni ari yuk sapa kik, iri ko  
棒 で シカ ~の頭 ~を叩く 毛皮を剥ぐ すると
- 82 ユクサパハ ネエノ ケナシ カタ  
yuksapaha / neeno kenash kata  
yuk sapaha neeno kenas ka ta  
シカ ~の頭 そのまま 木原 ~の上に
- 83 オスルパ ワ アレ、チェブコイキ コ  
oshurpa wa are, / chepkoiki ko  
osurpa wa are, cep koyki ko  
~を捨てる(複) して ~を置く 魚 ~をとる すると
- 84 ムニンチクニ アリ チェブサパ キク クス、  
muninchikuni ari / chepsapa kik kushu,  
munin cikuni ari cep sapa kik kusu,  
腐る 棒 で 魚 ~の頭 ~を叩く ので
- 85 ユクタラ アトウシパ カネ チシッコロ  
yukutar / atushpa kane / chishkor  
yuk utar atuspa kane cis kor  
シカ たち 裸になる(複) して 泣く しながら
- 86 ユッコロ カムイ オッタ ホシッパ、チェブタラ  
Yukkor Kamui / otta hoshippa, / cheputar  
yuk kor kamuy or ta hosippa, cep utar  
シカ ~を持つ 神 ~の所に 戻る(複) 魚 たち

勇しい氣品をそなへて  
勇者の面立ちもりりしく  
his heroic features even more gallant,

返し談判を述べはじめた。  
伝言に対する返事を述べた。  
and he stated the response to my message.

天國の鹿の神や魚の神が  
天の鹿の神、魚の神は  
The reason that the deer god

今日まで鹿を出さず魚を出さなかつた  
今日まで鹿も降ろさず魚も降ろさなかつた  
and the fish god did not send any deer or fish

理由は、人間たちが鹿を捕る時に  
理由は、人間たちが鹿を獲るときに  
down from heaven was that when the humans hunted the deer,

木で鹿の頭をたゝき、皮を剥ぐと  
木で鹿の頭を叩き、皮を剥ぐと  
they beat them over their heads with a stick, and when they skinned the deer,

鹿の頭を其の儘山の木原に  
鹿の頭をそのまま木原に  
they abandoned their heads

捨て置き、魚をとると  
捨て置き、魚を捕ると  
in the forest, and when the humans caught the fish,

腐れ木で魚の頭をたゝいて殺すので、  
腐れ木で魚の頭を叩くので、  
they hit the fish over their heads with rotten sticks, so

鹿どもは、裸で泣きながら  
鹿たちは裸で泣きながら  
the deer had gone naked and crying

鹿の神の許へ歸り、魚どもは  
鹿の神のもとへ歸り、魚たちは  
back to the deer god, and the fish

- 87 ムニンチクニ エクパカネ チェブコロ カムイ  
muninchikuni / ekupakane / Chepkor Kamui  
munin cikuni ekupa kane cep kor kamuy  
腐る 棒 ~を喰わえる して 魚 ~を持つ 神
- 88 オッタ ホシツパ。 ユッコロ カムイ チェブコロカムイ  
otta hoshippa. / Yukkor Kamui Chepkorkamui  
or ta hosippa. yuk kor kamuy cep kor kamuy  
~の所に 戻る(複) シカ ~を持つ 神 魚 ~を持つ 神
- 89 イルシカ クス ウコラムコロ フ ユク ソモアツテ  
irushka kushu / ukoramkor wa / yuk somoatte  
iruska kusu ukoramkor wa yuk somo atte  
怒る ので 相談する して シカ ない ~を沢山降ろす
- 90 チェブ ソモアツテ ルウエ ネアコロカ、 タンテワノ  
chep somoatte / ruwe neakorka, / tantewano  
cep somo atte ruwe ne a korka, tan te wano  
魚 ない ~を沢山降ろす のである した けれども この これから
- 91 アイヌピトウタラ ユク ヘネ チェブ ヘネ  
ainupitoutar / yuk hene / chep hene  
aynu-pito utar yuk hene cep hene  
人間 たち シカ でも 魚 でも
- 92 コロカトウ ピリカ クスネ ヤクン ユク アアツテ  
korkatu pirka / kusune yakun / yuk aatte  
kor katu pirka kusu ne yakun yuk a=atte  
~を持つ ~の様子 よくなる つもりである ならば シカ される・~を沢山降ろす
- 93 チェブ アアツテ キクシネ。 アリ、 ユッコロ カムイ  
chep aatte / kikushne. / ari, / Yukkor Kamui  
cep a=atte ki kus ne. ari, yuk kor kamuy  
魚 される・~を増やす ~をする つもりである と シカ ~を持つ 神
- 94 チェブコロ カムイ ハウオカイ カトウフ オモンモモ。  
Chepkor Kamui / hawokai katuhu / omommomo.  
cep kor kamuy hawokay katuhu omommomo.  
魚 ~を持つ 神 言う(複) ~の様子 ~を詳しく述べる
- 95 チヌ オロフ カツケノツカヨ オッタ  
Chinu orowa / Katkenokkayo otta  
ci=nu orowa katken okkayo or ta  
私・~を聞く それから カワガラス 男 ~の所で
- 96 イラムイエアシ フ、 インカラシ アフ ソンノカウ  
iramyash wa, / inkarash awa / sonnokaun  
iramy=as wa, inkar=as awa sonno ka un  
感心してほめる・私 して 見る ・私 したところ 本当に
- 97 アイヌピトウタラ ユク ヘメム チェブ ヘメム  
ainupitoutar / yuk hemem / chep hemem  
aynu-pito utar yuk hemem cep hemem  
人間 たち シカ も 魚 も

腐れ木をくはへて魚の神の  
腐れ木をくわえて魚の神の  
had gone back to the fish god holding rotten sticks

許へ歸る。鹿の神魚の神は  
もとへ歸った。鹿の神、魚の神は  
in their mouths. The deer god and the fish god

怒つて相談をし、鹿を出さず  
怒って互いに話し合つて鹿を降さず  
had become angry, and after conferring,

魚を出さなかつたのであつた。がこののち  
魚を降さなかつたのであつた。しかし、この後  
they had decided not to send down any more deer or fish. But after that,

人間たちが鹿でも魚でも  
人間たちが鹿や魚  
the river crow explained in detail, the deer god and the fish god

ていねいに取扱ふといふ事なら鹿も出す  
をきちんとした作法で扱うというのであれば鹿も降ろすし  
decided that if the humans would handle the deer

魚も出すであらう。と鹿の神と  
魚も降ろすだろう、と鹿の神と  
and fish with proper etiquette,

魚の神が言つたといふ事を詳しく申立てた。  
魚の神が言つたと、事の次第を詳しくカワガラスが申し述べた。  
the gods would agree to send down more deer and fish.

私はそれを聞いてから川ガラスの若者に  
私はそれを聞いて、それからカワガラスの若者を  
When I heard this, I praised the young

讃辭を呈して、見ると本当に  
ほめたたえた。そして見ると、本当に  
water ouzel. When I looked, I saw that the humans

人間たちは鹿や魚を  
人間たちは鹿や魚を  
really did treat the deer

- 98 コロカトウ ウェン キロコカイ。  
korkatu wen / kirokokai.  
kor katu wen ki rokokay.  
~を持つ ~の様子 悪い ~する だったのだ
- 99 オロフ テワノ アナク イテキ ネエノ イキチ クニ  
Orowa / tewano anak / iteki / neeno / ikichi kuni  
orowa te wano anak iteki neeno iki-ci kuni  
それから これから は 決して~するな そのように する(複) と
- 100 アイヌピトウタラ モコロ オッタ タラア オッタ  
ainupitoutar / mokor otta / tarap otta  
aynu-pito utar mokor or ta tarap or ta  
人間 たち 眠り ~の中 で 夢 ~の中 で
- 101 チエパカシヌ アワ アイヌピトウタラ カ  
chiepakashnu awa / ainupitoutar ka  
ci=epakasnu awa aynu-pito utar ka  
私・~に~を教える したところ 人間 たち も
- 102 イパシテランポ ヤイコロパレ、オロフノ アナク  
ipashterampo / yaikorpore, / orowano anak  
i-paste-ram-po yaykorpore, orowano anak  
それ・~にはっと気が付く・心(強調) ~を自らに持たされる それから は
- 103 イナウ コラチ イサパキクニ トムテカラカラ  
inau korachi / isapakikni / tomtokarkar  
inaw koraci isapakikni tomtokarkar  
御幣 のように 魚の頭を叩く棒 ~をきれいに作る
- 104 アリ チェブコイキ ユクコイキ コ ユクサパハ カ  
ari chepkoiki, / yukkoiki ko / yuksapaha ka  
ari cep koyki, yuk koyki ko yuk sapaha ka  
それで 魚 ~をとる シカ ~をとる すると シカ ~の頭 も
- 105 ピリカノ トムテ ワ イナウコロパレ。キワクス  
pirkano / tomte wa / inaukorpore. / Kiwakushu  
pirkano tomte wa inaw korpore. ki wakusu  
きれいに ~を飾る して 御幣 ~に~を ~をする したので  
持たせる(複)
- 106 チェプタラ ヌペツネノ ピリカ イナウ エクパ カネ  
cheputar / nupetneno / pirka inau / ekupa kane  
cep utar nupetne no pirka inaw ekupa kane  
魚 たち 喜ぶ で 美しい 御幣 ~を喰わえる して
- 107 チェブコロ カムイ オッタ パイエ、ユクタラ  
Chepkor Kamui / otta paye, / yukutar  
cep kor kamuy or ta paye, yuk utar  
魚 ~を持つ 神 ~の所 に 行く(複) シカ たち
- 108 ヌペツネノ アシッサパカラ カネ ユツコロ カムイ  
nupetneno / ashirsapakar kane / Yukkor Kamui  
nupetne no asir sapa kar kane yuk kor kamuy  
喜ぶ で 新しい 頭 ~を刈る して シカ ~を持つ 神

粗末に取扱つたのであつた。

粗末に扱つたのであつた。

and fish carelessly.

それから、以後は、決してそんな事をしない様に

それから以後は、決してそんなことをしないように

After that, I taught the humans in their sleep,

人間たちに、眠りの時、夢の中に

人間たちに眠りの中、夢の中で

in their dreams, that they must never do

教へてやつたら、人間たちも

私は教えてやった。すると人間たちも

such things again. With a start, the humans

悪かつたといふ事に気が付き、それから

はっと気がついて、それから

realized their mistake, and from that day they

幣の様に魚をとる道具を美しく作り

御幣のような魚の頭を叩く棒を美しく作り

made beautiful sticks like inau

きれいで魚をとると、鹿の頭も

それで魚を捕るし、鹿を獲るときは鹿の頭も

for beating the heads of the fish and catching them, and when they hunted deer,

きれいに飾つて祭る、それで

美しく飾つて御幣を持たせる。そうすると

they decorated the deer beautifully with inau.

魚たちは、よろこんで美しい御幣をくはへて

魚たちは喜んで美しい御幣をくわえて

The fish happily put the beautiful inau in their mouths

魚の神のもとに行き、鹿たちは

魚の神のもとへ行き、鹿たちは

and went back to the fish god, and the deer

よろこんで新しく月代をして鹿の神

喜んで新たに飾った頭で鹿の神

happily went back to the deer god with their newly



- 109 オッタ ホシツパ。 ネフアンペ ユツコロ カムイ  
otta hoshippa. / Nawaanpe Yukkor Kamui  
or ta hosippa. newaanpe yuk kor kamuy  
~の所 に 戻る(複) そのこと シカ ~を持つ 神
- 110 チエブコロ カムイ エヌペツネ クス、  
Chepkor Kamui / enupetne kusu,  
cep kor kamuy enupetne kusu,  
魚 ~を持つ 神 ~を喜ぶ ので
- 111 ポロンノ チエパツテ、ポロンノ ユカツテ。  
poronno chepatte, / poronno yukatte.  
poronno cep atte, poronno yuk atte.  
たくさん 魚 ~を沢山降ろす たくさん シカ ~を沢山降ろす
- 112 アイヌピトウタラ タネ アナクネ ネブ エランナク  
Ainupitoutar / tane anakne / nep erannak  
aynu-pito utar tane anakne nep erannak  
人間 たち 今 は 何 ~に困る
- 113 ネペルスイ ソモキノ オカイ。  
neperushui / somokino okay,  
nep e rusuy somo ki no okay,  
何 ~を したい ない ~をする で いる(複)  
食べる
- 114 チヌカツ チキ チエラムシンネ。  
chinukat chiki / chieramushinne.  
ci=nukar ciki ci=eramushinne.  
私・~を見る したら 私・~で安心する
- 115 チオカイ アナク タネ オンネアシ タネ レツテカシ  
Chiokai anak / tane onneash / tane rettekash  
ciokay anak tane onne=as tane rettek=as  
私 は もう 年老いる・私 もう 衰える・私
- 116 キワ クス、カント オルン パイエアシ クニ  
ki wa kushu, / kanto orun / payeash kuni  
ki wakusu, kanto or un paye=as kuni  
~する したので 天 ~の所 へ 行く(複)・私 と
- 117 チラムア コロカ、チエブンキネ アイヌモシリ  
chiramua korka, / chiepunkine / ainumoshir  
ci=ramu a korka, ci=epunkine aynu mosir  
私・~を思う した けれども 私・~を守る 人間 世界
- 118 ケムシワ アイヌピトウタラ ケメコツ クシキ コ  
kemush wa / ainupitoutar / kemekot kushki ko  
kemus wa aynu-pito utar kemekot kuski ko  
飢饉になる して 人間 たち 飢えて死ぬ ~しそである すると
- 119 チエコッタヌ ソモキノ パイエアシ カ エアイカブ クス、  
chiekottanu / somokino / payeash ka / eaikap kusu,  
ci=ekottanu somo ki no paye=as ka eaykap kusu,  
私・~を気に留める ない ~をする で 行く(複)・私 も ~できない ので

のもとに立歸る。それを鹿の神や  
のもとへ帰る。それを鹿の神や  
decorated heads. Pleased with this, the deer god

魚の神はよろこんで  
魚の神は喜んで  
and the fish god

澤山、魚を出し、澤山鹿を出した。  
たくさん魚を降ろし、たくさん鹿を降ろした。  
sent down plenty of fish and plenty of deer.

人間たちは、今はもう何の困る事も  
人間たちは、今はもう何も困ることがなく  
Now the humans live without worries

ひもじい事もなく暮してゐる  
何を食べたいと思うこともなく暮らしている。  
and without wanting for food.

私はそれを見て安心をした。  
私は、それを見て安心をした。  
Seeing that, I was relieved.

私は、もう年老い、衰へ弱つた  
私はもう老い衰え  
Old and feeble,

ので、天國へ行かうと  
たので、天へ行こうと  
I had wanted to go

思つてゐただけけれども、私が守護してゐる人間の國に  
思つてゐただけ、私が守っている人間世界  
to heaven, but because a famine had occurred in the human world

饑饉があつて人間たちが餓死しようとしてゐるのに  
に饑饉が起こり、人間たちが餓死しようとしているというのに  
that I was protecting, I could not abandon the humans when

構はずに行く事が出来ない  
それを見捨てて行くことも出来ない  
they were on the verge of starvation, so

- 120 タネパクノ オカヤサ コロカ、 タネ アナクネ  
 tanepakno / okayasha korka, tane anakne  
 tane pakno okay=as a korka, tane anakne  
 今 まで いる(複)・私 した けれども 今 は
- 121 ネパエランナクペ カ イサム クス シノラメトク  
 nepaerannakpe ka / isam kushu / shinorametok  
 nep a=erannak pe ka isam kusu sino rametok  
 何 人・~に困る こと も ない ので 真の 勇者
- 122 ウペンラメトク ウノカケタ アイヌモシリ  
 upenrametok / unokaketa / ainumoshir  
 upen rametok un=okake ta aynu mosir  
 若き 勇者 私・~の後 に 人間 世界
- 123 チエプンキネレ、 タネ カント オルン パイエアシ シリ タパン。  
 chiepunkinere, / tane kanto orun / payeash shiri tapan.  
 ci=epunkinere, tane kanto or un paye=as siri tapan.  
 私・~に~を守らせる 今 天 ~の所へ 行く(複)・私 という様子である
- 124 アリ コタンコロ カムイ カムイ エカシ  
 ari Kotankor Kamui kamui ekashi  
 ari kotan kor kamuy kamuy ekasi  
 と 村 ~の 神 神 おじいさん
- 125 イソイタク オロワ カント オルン オマン。アリ。  
 isoitak orowa kanto orun oman. / ari.  
 isoytak orowa kanto or un oman. ari.  
 物語る そして 天 ~の所へ 行く と

これまで居ただけけれども、今はもう  
 今まで居たのだが、今はもう

I had stayed here. But now that there are

何の気が、りも無いから、最も強い者  
 何の心配もなくなったので、真の勇者、  
 no more worries, I am leaving a true warrior,

若い勇者を私のあとにおき人間の世を  
 若い勇者に私の後で人間世界を  
 a young warrior, to protect the world of the humans

守護させて、今天國へ行く所なのだ。  
 守ってもらって、今わたしは天へ行くところなのだ。  
 after me, and now I am about to go to heaven.

と、國の守護神なる翁神（梟）が  
 と村の守り神であるおじいさん神が  
 Thus told the guardian god, the Old Man God of the Village,

物語つて天國へ行きました。と、  
 物語ってから天へ行った。と。  
 and went up to heaven. Thus the Owl God recounted.

## 〔言葉の説明〕

・カリンパウンク karimpa un ku (2行目)

カリンパ karimpa は、「桜の皮」のこと。この語源は知里真志保によると < kari-no-pa (まわる・よく・何回も) くるくるよく巻く (もの)。桜の木の皮は弓に巻いたりして補強と美しさの両方の役目をします。桜皮は、今でも日本各地で茶筒などに巻いて使われています。ウン un は「(そこ)にある。(そこ)につく」という意味。全体で「桜皮で巻かれた弓」。

・クヌム ノシキ ku num noski (3行目)

ヌム num とは「実(み)」のこと。木の実や、おつゆの実(具)もヌム。またイタクヌム itak num (言葉の実) → 意味、というようにも使われます。クヌム ノシキ ku num noski とは、萱野茂「アイヌの民具」で「弓の体のまん中」とであると述べられています。具体的には、つがえた矢が弓にふれる部分。ちょうど弓の中央部で、補強のため桜皮が巻かれています。

・チャウチャワツキ cawcawatki (3行目)

アツキ atki は、擬音語などに接尾して自動詞をつくります。チャウチャウ cawcaw とは、「ブンブン」といった音を表します。矢がブンと飛ぶさまもチャウ caw を使います (cawkosanu)。この場合、弓の弦を弾く音なので「ピンピン」という音でしょうか。

・コラチタプネ koraci tap ne (3行目)

コラチ タプネ koraci tap ne で「あたかも～のように」。3行目全体で、「弓の中央があたかもピンピンと鳴るかのように」という意味。tap ne がなくとも意味は通じるので、強調または音節の調節のためと思われます。

・ハウエ オカイ hawe okay (4行目)

ハウエ オカイ hawe okay は、「(～である) のだなあ」というように思いを込めた表現。この場合は「(弓の鳴るごとく力強く語った) のだったなあ」という意味。

・フミ オカイ humi okay (5行目)

「(～している) ことよ！」という詠嘆を表します。

・ネンカタウサ nen ka ta usa (6行目)

ネン カ nen ka は「誰か」。タウサ ta usa は ta～okay (～したいものだ) という構文の強調形。誰か雄弁者がいたら使者に出したいものだ、という意味。

・ソンコ オッタ ヤヨトウワシ sonko otta yayotuwasi p (7行目)

ソンコ オッタ sonko otta 「伝言において」。ヤヨトウワシ yayotuwasi p 「自信がある者」。伝言に関して、自信のある者。この場合、伝言用紙を届けるわけではないので、伝言の内容を理解し記憶して、それを相手に雄弁に(説得力をもって)伝える仕事に自信のあ

る者。

・ソンコエムコ エイワンソンコ sonko emko e-iwan sonko (8行目)

直訳すると「伝言(もう) 半分で6つ(になる) 伝言」。あと半分で6つとは、5つ半。5つ半の伝言。なぜ6つではなくて、5つ半などという中途半端な数なのでしょう。切替英雄氏は「六つで完全なメッセージになるが、残りの半分は使者の器量に任せられているということか?」と述べています(「アイヌ神謡集」辞典)。6は「たくさん」とか「大量の」という特別な意味をもつ数。そのことから考えて、5つ半は、「大量に近い」とか「相当な量の(伝言)」という意味にもとれます。

・チエウイテッカロカイ ci=euytekkar okay (9行目)

エウイテッカ euytekkar は < e-uytek-kar (～に・をいに出す・をする) → ～に～をいに出す。オカイ okay は「～したい」。前のタ ta と係り結びの構文となっています。「(5つ半の伝言を天に) 私は使者として派遣したいものだ」。

・クトシントコ kutosintoko (10行目)

これは < kut-o-sintoko (帯・を付けた・行器) → 容器の周囲にたがを巻いてあるもの。シントコ(行器 [ほかい]) は、本州から交易で手に入れた漆塗りの大型の容器。かつては、大名など位の高い人々が使った調度品で、食物を盛って遠出の際に運ぶために用いられました。これをアイヌの人々は、祭りのときに酒をかもす容器として使いました。漆で塗られた美しいこの容器は、宝物の一つとして考えられ、普段は宝壇(イヨイキリ)に並べて大切にされました。やはり漆塗りのシントコのふたは、祭りのときに女性たちが交互に叩いて拍子を取り、ウポポ(座り歌)などを歌うときに用いられます。クツ kut (たが) が付いている行器は、丈夫なため酒をかもすのによく用いられました。

・レレコ rerko (18行目)

レレコ rerko は「三日」という意味。本来ならばレト reto (三日) となります。これがなぜ rerko になるのでしょうか? 参考までに浜田隆史氏の考えを紹介すると、この語はトゥッコ tutko (二日) とペアで出てきます。アイヌ語は tuto と開音語は発音しづらいようで、tutto となり、希に起こる t と k の混乱から tutko になって、それに合わせるように reto が rerko に変化した、というもの。

・コヘラチチ koheracici (21行目)

この言葉は < ko-he-racici (～に・頭・をだらんと垂らす) → に頭をだらんと垂らす → 居眠りする。

・ウェンキンラネ ウンコヘタリ wen kinra ne un=kohetari (21～22行目)

ウェン キンラネ wen kinra ne 「ひどい・狂気・になる」。ウンコヘタリ un=kohetari 「私に・に頭をもち上げる」。怒りが私にこみあげてくる。

・ラポキッキク rapkokikkik (23行目)

この言葉は < rap-ko-kik-kik (羽根・と共に・を打つ・を打つ) →羽根ごとなくる。

・オカイ ハウエ okay hawe (31 行目)

オカイ ハウエ okay hawe は、「あるだろうか」といった反語を表します。「(私の他に天へつかわされるような者)があるだろうか」。

・メトテヤミ metoteyami (32 行目)

この言葉は < metot-eyami (山奥・カケス) 山奥のカケス。しかし、metot-eyami で「ホシガラス」と知里真志保の「分類辞典」に出ています。知里幸恵の頃は、まだアイヌ語と日本語の対応(辞書づくり)が進んでいなかったので山のカケスと訳したのですが「ホシガラス」の方が正しいように思えます。

・イネレレコ ine rerko (37 行目)

イネ ine は「4つの」。レレコ rerko は本来「三日」という意味ですが、ここでは、単に「日」という意味で使われているようです。

・シアウオライエ siaworaye (47 行目)

この言葉は < si-aw-oraye (自分・内・へ移動させる) →自らを家の中に移動させる→家の中に(遠慮しながら)入る。

・ハラキソネ harkiso ne (49 行目)

ハラキソ harkiso は < harki so (左・座) 左座。来訪者の座る場所。ネ ne は、「～になる」。左座になる。

・エチウ eciw (53 行目)

このエチウ eciw は < e-ciw (頭・～を刺す)。居眠りをして頭が床を刺しそう(ぶつけそう)になること。

・ケムシ kemus / ケメコツ kemekot (59～60 行目)

ケムシ kemus は、< kem-us (飢饉・がつく) →飢饉になる。村が飢饉になること。ケメコツ kemekot は、< kem-e-kot (飢饉・で・死ぬ) →餓死する。

・イッケウ ikkew (60 行目) / イッケウエ ikkewe (80 行目)

イッケウ ikkew の本来の意味は「腰」。腰は体の要(かなめ)となる重要なもの。そこからアシンルイッケウ asinru ikkew (便所の土台)というように「土台」とか、ネアイッケウ nep ikkew (何の理由)というように「理由」などといった意味になります。イッケウ ikkew は < ik-kew (節・骨)で、もともと骨の一節ずつの連なりである背骨を指したものでしょう。そのためイッケウ ikkew には、「腰」と「背骨」の両方の意味があります。

・ウコラムコロ ukoramkor (63 行目)

この言葉は、< u-ko-ram-kor (互い・に対して・心・を持つ) →互いに思っていることを

持ち合う→互いに相談する。

・サプテ sapte (63 行目)

この言葉は、< sap-te (降りる・させる) 降ろす。sap は san (降りる。出る)の複数形。天に鹿やサケの神様がいて、その神様たちが天から鹿やサケを降ろすと考えられています。鹿やサケは、個々がカムイというよりは、食糧と考えられていて、まるで食糧を天から降ろすような感じを受けます。

・ネコナ nekona (65 行目)

幌別方言でネコナ nekona は「どのように」という意味。沙流方言では、ネコナ nekona はユーカラ語に使われ、日常語ではネコン nekon (どのように)が使われることが多いです。意味はほぼ同じ。

・カントコトロ セペパッキ フマシ kanto kotor sepepatki humas (73 行目)

カント コトロ kanto kotor は「天・の面」→はるか上空。セペパッキ sepepatki は < sep-sep-atki (擬音語でハタハタという音・がする)。空で何か音がする。sep は、ものがはたはたと「はためく音」と久保寺辞典に出ています。

・タネアン ピリカ シオアラウエンルイ tane an pirka sioarwenruy (75 行目)

タネ アン ピリカ tane an pirka は「今ある美しいこと」、シオアラウエンルイ sioarwenruy は < si-oar-wen-ruy (本当に・全く・ひどく・激しい) →今の美しさは本当にすばらしい→以前よりもずっと美しさが増している。

・アッテ atte (79 行目)

アッテ atte は < at-te (沢山いる・させる) →沢山いるようにする。鹿や魚の神が天から鹿や魚を沢山降ろす(沢山いるようにする)こと。63行目のサプテ sapte (降ろす)と似たような意味。

・チェサパ キク cep sapa kik (84 行目)

これは「人間たちが魚の頭を叩く」という意味。本州の川でもサケを捕るのに今も棒で頭を叩いて息を止めるという方法が行われている所があります。漁師に言わせると、この方法は川から上げるサケが長く苦しめないし、身も新鮮なままで保てるとのこと。アイヌ語は目的格を表す助詞を使わないのが普通なので、このままの文で「魚が頭を叩く」という意味にもなります。

・アトウシパ atuspa (85 行目)

このアトウシパ atuspa は、アトウサ atusa (裸である)の複数形。知里真志保は、atusa < ar-rus-sak (全く・衣・を欠く) 全く衣類を欠く→裸の、と分析しています。

・コロカトウ ピリカ kor katu pirka (92 行目)

/ コロカトウ ウエン kor katu wen (98 行目)

このカトゥ *katu* には「有様・恰好・態度」などの意味があります。概念形はカッ *kat*。*katu* は動詞の後に置かれて「仕方、やり方」などという意味になります。この場合、*kor* (を持つ) *katu* (仕方) *pirka* (よい) → 鹿や魚を手に入れる (持つ) やり方がよい。つまり鹿や魚を捕る作法が良い、ということ。この場合の「良い作法 (*katu*)」とはどのようなものでしょうか。その作法を伝えるのがこの物語の最大のテーマになっています。

#### ・ユク アアッテ *yuk a=atte* (92 行目)

アアッテ *a=atte* のア *a=* は「(いわゆる) 人」という意味で、「～される」という受身に訳されます。「(鹿や魚) が沢山にされる」。天から沢山降ろされること。

#### ・キクシネ *ki kus ne* (93 行目)

キ *ki kus ne* (または、キ *クスネ* *ki kusu ne*) は、「～するつもりだ」という意味。

#### ・イラムイエアシ *iramye=as* (96 行目)

イラムイエ *iramye* は < *i-ram-ye* (もの・心・を言う) → 感謝の心 (気持) を述べる。自動詞なのでアシ *=as* (私) が付きます。

#### ・ソンノカウ *sonno ka un* (96 行目)

ソンノ *sonno* は「本当に」で、カ *ウン* *ka un* の元の意味は、「～の上へ」ですが、ここでは強調として使われて「まさに本当に」とか「まさにその通りで」といった意味。

#### ・ヘムム *hemem* (97 行目)

ヘムム *hemem* は < *hem-hem* で、*hem* (～も) の強めた言い方。～ヘムム ～ヘムム ～*hemem* ～*hemem* で「(鹿) も (魚) も」という意味。

#### ・モコロ オッタ タラオ オッタ *mokor or ta tarap or ta* (100 行目)

この言葉は直訳すると、「眠りの中で、夢の中で」。「夢の中で (教える)」を同じ意味を重ねて表現したもの。

#### ・イパッテランポ ヤイコロパレ *ipaste rampo yaykorpore* (102 行目)

イパッテ *ipaste* は < *i-pas-te* (もの・走る・させる) → ものを走らせる → さっと分かる。ランポ (ラムポ) *rampo* は < *ram-po* (心・指小辞) → 心。この場合のポ *po* は、音節をふやす役割で、とくに意味はないと思われます。ヤイコロパレ *yaykorpore* は < *yay-kor-pa-re* (自分・を持つ・複数化・させる) 自らに持たせる → 自分で持つ。全体の直訳では「さっと分かる心を自ら持つ」。「さっと気がつく」こと。いかにも神謡らしいもって回った言い方。

#### ・イサパキクニ *isapakikni* (103 行目)

この言葉は < *i-sapa-kik-ni* (もの・の頭・を叩く・木) → 魚の頭を叩く 40cm くらいの棒。網や銚 (もり) で川から上げられたサケなどは、まだ地面や舟の上でピチピチとはねていま

す。そのまま放っておくと、魚はまた川の中へ逃げ込んでしまうか、疲れはてて動けなくなるまで跳ね続けることになります。これでは魚も苦しみ続けるし、身もエネルギーを費やし尽くすのでまずくなります。漁師は「生き締め」といって、サケの頭を木の棒で叩いて一発で息の根を止めます。このテキストでは、その際、腐った棒や普通の棒ではよくないといっています。イサパキクニ (頭打棒) は、単なる棒ではなく、手で握る部分に削り掛けが付いているもの。この削り掛けはイナウ (御幣) を意味します。かつては、この棒で魚の頭を叩くときに、イナウ *コロ!* *inaw kor!* (御幣を持って!) と唱えたといっています。つまり、一打するごとに魚に御幣を捧げていたのです。これは、魚の魂を神の世界に送る魂送りの儀礼にほかなりません。魚を捕ったならば、きちんと魂送りをしてやること、それがカトゥ *ピリカ* (扱い方がよい) なのでした。

#### ・アシサパカラ *asir sapa kar* (108 行目)

直訳すれば、「新しく頭を刈る」こと。人間でいえば新しく頭を刈ることですが、この場合は、鹿の魂送りの儀礼のときに頭の皮を剥ぎ、さまざまな飾りをする (ウンムケ *unmemke*) をいっているのだと思われます。つまり鹿を獲ったときも、きちんと魂送りの儀礼を行うことがカトゥ *ピリカ* *katu pirka* (扱い方がよい) であることを伝えています。鹿を獲っても魚を捕っても、きちんと魂送りの儀礼を行わずに、ただ殺して、いらない部分は木原に捨てるという行為が、飢饉を招くことになったと、シマフクロウ (村を守る) 神は人間たちに夢で教え、人間たちは、それに気がついてすぐにきちんとした扱いを実行したのでした。

#### ・ネベルスイ ソモキノ オカイ *nep e rusuy somo ki no okay* (113 行目)

ネベルスイ *ソモキノ* *オカイ* *nep e rusuy somo ki no okay* は、逐語訳をすると「何を・食べ・たい・～ない・をする・(副詞化)・暮らす」→「何を食べたくすることもなく暮らす」。つまり、「(食べたいと思うものは全て食べることが出来るので、それ以上) 何を食べたいと思うこともなく暮らす」こと。満ち足りた暮らしをすること。字義通り受け取ると、食べただけ食べ、飽食して、もう何も食べたいものがないという昔の王様のような暮らしを思い浮かべるかもしれません。しかし、神々 (カムイたち = 動物や植物 = それらが食糧ともなる) を敬って暮らしているのに、必要以上獲り過ぎること (乱獲) などありえなかったのです。したがって、飽食などもありえませんでした。食べるものと着るもの、そして暖をとるものさえあれば、それで十分、という欲望のコントロールが効いていたのです。

#### ・チオカイ *ciokay* (115 行目)

チオカイ *ciokay* は、代名詞の「私」。日常語では「(相手を含まない) 私たち」。沙流方言ではチョカ *coka*。分析的には、*ciokay* < *ci-oka-i* (私・ある・もの)。アイヌ語には代名詞の「私」と人称接辞の「私」があります。この点は日本語と違うので、初心者には理解しにくいです。(例) 私は、もう年老いた チオカイ *アナク タネ オンネアシ* *ciokay anak tane onne=as* (私・は・もう・年老いる・私)。タネ *オンネアシ* *tane onne=as* だけでも「私はもう年老いた」という意味になります。では、チオカイ *ciokay* は何のために使っているのでしょうか。「他でもない私」は、といった私を強調する場合によく使われます。

・クシキ kuski (118 行目)

クシキ kuski で「～しようとしている」という意味の助動詞。

・シリ タパン siri tapan (123 行目)

シリ タパン siri tapan で、「様子がある」→「～する次第です」と話を結びます。

・オマン oman (125 行目)

オマン oman は「行く」で、その複数形がパイェ paye。123 行目では、カムイ (神) が自叙するため複数形が使われています。カムイが特別な存在であることを表すため(尊敬)、複数形が使われていると考えられます。一方、125 行目は、語り手が客観的に「天へ行ったんです。」とカムイの行動を述べているため単数形の オマン oman が使われています。

[参考]

ここでも意味不明な言葉の解明を試みてみます。参考までに。

・コンクワ konkuwa (1 行目)

この物語のサケへ「コンクワ」とはいったいどのような意味をもっている言葉なのでしょう。この語からは全く見当が付きません。ところで、シマフクロウのサケへの多くには、その鳴き声の「フム」とか「フン、フーン」という音が入っています。道東で伝承されているシマフクロウの神謡のサケへに「フーンコ、フンコ、フーンコ」というものがあります。やはり「フン」や「フーン」という音が入っています。物語の中身もこのテキストのものとはほとんど同じです。ただ天に使者として行くのがカケスである点(このテキストではカワガラス)だけが違います。さて、このサケへを切れ目を入れずに書くと「フーンコフンコフンコ」となります。この後半の「コフーンコ」を抜き取り、フを弱めに発音し、終わりのコをクワに変えると「コーンクワ」つまり「コンクワ」になることを発見しました。こうしてみると「コンクワ」の元には、このように「フーン」というシマフクロウの鳴き声が入っていたことと思われれます。普段はフン、フンと鳴くシマフクロウも獲物を見つけたときは、「フンコッ」と鳴くといわれます。フーンコのサケへもそこから来ているのでしょう。

・カナカクニャ kanakankunip (11 行目)

久保寺辞典には「kanak 疑問詞 どんな」「kanakan どんな」と出ていて、「= makanakan」と述べています。すると kanak は makanak (どんな) の ma のない形と考えられます。カナカクニャ kanakankunip を復元すると、マカナク アン クニ ャ makanak an kuni p (どのように・ある・べき・もの) となり、これならば「どのようにあるべきもの」→「どのような者」「誰か」となり、理解できます。では、なぜマ (ma) が取れてしまったのでしょうか。声に出して発音してみると、ka にアクセントがあるため ma が弱くなり、音として聞こえにくくなることがわかりました。そのために ma が消えてしまったのでしょうか。かつては文字ではなく音として、耳で聞いていたのですから。これは「語頭音消失」ともいわ

れます。

・イタサソッコ itasa sonko (77 行目)

イタサ itasa は < i-tasa (もの・と交差する) 返る、という意味。イタサ ソッコ itasa sonko で、返る伝言→伝言の返事。似た言葉に、イタサ イタタ itasa itak 「返事・返答」、イタサ カンピ itasa kampi 「返事の手紙」などがあります。タサ tasa には、行ったものと返るものがすれちがうという意味があります。そこから、ウタサレ utasare 「を交換する」という意味にもなります。tasa は、分析するとどんな意味を持っているのでしょうか。仮説を挙げると・・・、tasa < tas-a (息・他動詞化) 吸気と呼気がすれ違う。吸った息が吐き出されるときに交差を動詞化したものではないでしょうか。レラ タサ rera tasa 「風に向かう」という言葉があります。それを口の中で行われる呼吸の空気を動きでみると、向こうから吹いてくる風(吸う息)に向かう(吐く息)とみなすことができるようなのですが。

・オモンモモ omommomo (94 行目)

実に不思議な音を持つ言葉です。ここまで「モ」が連なっている言葉も珍しい。意味は「を詳しく述べる」。いったいどんな言葉の成り立ちでこんな単語ができあがっているのでしょうか。様々に考えた結果、次のような語構成を考えてみました。omommomo < o-pon-pon-u-o (の尻・小さく・小さく・一緒に・を付ける) →話の末をこまごまと一緒に付ける →話の小さな端々を付ける。久保寺辞典に omommomo 「かどかどはしよらずに詳述する」「略さずにすっかり詳しく」と出ている。この意味とよく合致するようです。音の推移は、oponponwo → (p が弱音化して m に) omonmonwo → (w が m に、n が m の影響で m に) omommomo → (後半の m が一つに) omommomo。はたしてこれでよいのか。あくまでも私論です。

・ヌペツネ nupetne (106 行目)

ヌペツネ nupetne は、「喜ぶ」という意味。また「さわやかな」(萱野辞典) という意味もあります。この言葉を次のように分析してみました。< nu-pet-ne (顔・濡れている・ようになる) 顔を水で洗ってさっぱりした状態になる → さわやかな → 喜ぶ。

・コタンコロ カムイ kotan kor kamuy (124 行目)

コタン コロ カムイ kotan kor kamuy は直訳すると「村・を持つ・神」この kor (を持つ) というのは本来何を意味しているのでしょうか。今までシマフクロウに関しては「司る」「領有する」「統治する」などと訳されてきました。村を司る神、村を領有する神、村を統治する神、などと訳されているのに私は何か違和感を抱いてきました。他にもっと的確な訳はないのでしょうか。だいいち神謡にはシマフクロウが村を司る(コントロールする) ことも統治や領有することも出てきません。シマフクロウは村の人々が飢えないように見守っていて、もし飢饉が起これば、それを解消しようと努める役割しか神謡には述べられていません。統治したり、司ったりする様子は何も出てこないのです。シマフクロウの偉大さを強調するあまり、こうした訳語を使ってきたのだと思われれます。では、kor をどのように訳せばよいのでしょうか。kor には ku=kor hapo (私の母) というように「の」と訳すような用法があります。これは、私が母を「所有する」わけでもなければ、「司る」わけでもないので、

「の」としか訳せません。すると「村の神」という訳語になる。これが一番ぴったりきます。この場合、所有ではなく所属ととればよいのでしょうか。つまり「村に所属している神」「村と一体となって（生きている）神」。

### コラム (11)

#### シマフクロウはなぜ村を守る神なのか？

各々のカムイ（神）は、この世に或る役割（アイヌ語でヤク yaku）を持って天から降ろされていると考えられています。シマフクロウの役割は、人間の村（世界）が飢餓に襲われないように見守ることです。村を守るといっても、戦争に負けないように、村を防衛する武力をもつ神ではありません。魔がはびこり、病気や飢えが人間の村（世界）を襲わないように見守るといって役目を持っているだけなのです。では、シマフクロウは、なぜそのような役目を持つと考えられるのでしょうか。鋭い牙をもつオオカミの方が村に魔物が入るのを守るのにふさわしいとも考えられるし、怪力無双のクマだって防衛に向いていそうです。なぜシマフクロウなのでしょう。

シマフクロウの一番大きな特徴は、夜闇の中でも目が見える点です。その大きな目で闇を見透かし、ときにはフム、フムと大きな声を上げて驚かします。魔物は本来、夜の闇の中で跋扈（ばっこ）すると考えられています。その闇の中にある魔物が村に入り、病気や飢えをまき散らさないように見張っているのがシマフクロウの最大の役割なのです。夜、この鳥が辺りを揺るがすように鳴くと、コタンコロカムイ（村の神）が魔物をどなりつけているのだと思い、人間のそばに魔物が近づかないように見守って下さるのだと安堵したといわれています。では、なぜシマフクロウは、飢饉が起こらないように見守っていると考えられているのでしょうか。例えば沢山の実を成らす巨木（シランパカムイ）がその役割をもつ神であってもよいのではないのでしょうか。ここから先は私の想像ですが、シマフクロウは現代風に言えば、森の生態系の頂点に立つ生き物であって、この鳥が森に多く生息することは、即、森の動植物が豊かであることを表しているのです。植物の実りがなければ、リスやウサギのような小動物や昆虫が少なく、それが少ないと森の他の動物は少ないことになります。それらをつまみ食いするシマフクロウは森の豊かさのバロメーターといえます。現在、北海道のシマフクロウは減少し続けてきて危機的状況にあります。森や川が荒れて森の生物がかつてよりもはるかに減少しているからです。巣箱をかけたたり、餌となる魚を放したりする増殖の努力で、ようやく絶滅をまぬがれているような有様です。翼を広げると2メートルもある巨大な猛禽類であるシマフクロウは、それほど森の豊かさを体現している存在なので、シマフクロウが村のそばにいることは、食糧の豊かさの保証だと考えられます。そこで、シマフクロウがいれば村に飢饉が来ない、来てもすぐに解消すると考えられたのではないのでしょうか。

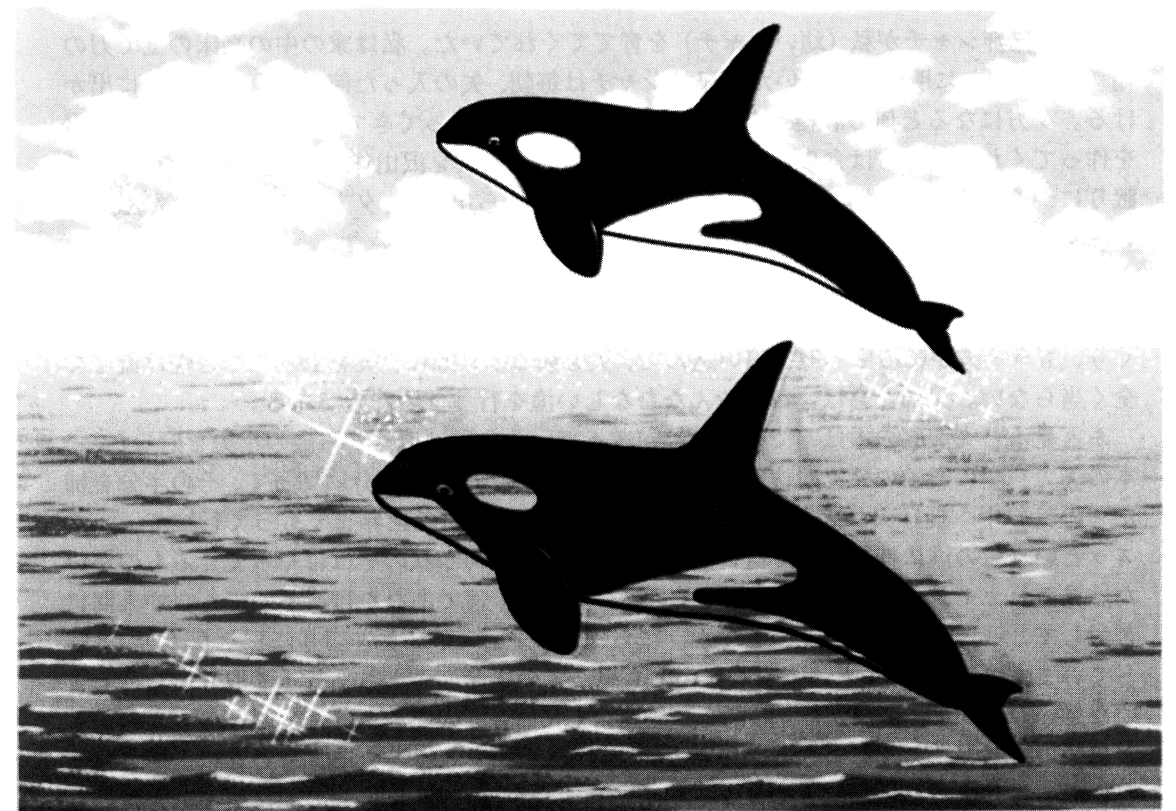
## 8

### シャチの神が自らうたった謡

「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フム フム」

repun kamuy yayeyukar

Song sung by orca god



## 第8話(その1)

### シャチが自らをうたった謡うた

「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フムフム!」

(1～88行目まで)

#### 〔物語とその背景〕

これは沖の神といわれるシャチの物語。群れで暮しているシャチの中で最も幼いシャチが自ら物語った話。このシャチの子供は、天才的な狩りの名手なのです。シャチは一般にオスの体長が約10m、メスが約8mといわれています。この物語でも体長の長い兄と姉のシャチ各々6頭、そして体長の短い兄と姉のシャチ各々6頭、計24頭が主人公の幼いシャチと一緒に暮らしています。

毎日、兄姉シャチが私(幼いシャチ)を育ててくれていた。私は家の中の高床の上で刀の鞘(さや)彫りに明け暮れていた。兄姉シャチは毎朝、矢の入った筒を背負って狩りに出かける。夕方になると何の収穫もなく疲れ切った顔つきで帰ってきて、姉のシャチは私に食事を作ってくれ、兄たちは食事の後、翌日の準備のために矢を沢山作り、その後、疲れはてて眠りにつく。次の日も同じように兄姉は朝暗いうちから出かけ、夕方になると疲れた顔で何の収穫もなく帰ってきていつもと同じようなことをくり返していた。

ある日、兄姉たちが出かけた後、私は彫刻の手をとめて、金の弓矢をもって外へ出た。風いで平らかな海では鯨たちが水しぶきを上げて遊んでいた。そこで兄姉たちの一方が輪をつくり、もう一方が輪の中へ鯨を追い込んで、矢を射るが、鯨は、矢を上へ下へと受け流して全く当たらない。兄姉たちは、毎日こんなむなしい漁を行っていたのである。

ふと見ると大海原の中ほどで親子の鯨が遊んでいる。私は遠くから金の小矢を射ると、一本の矢で一度に親子の鯨を射抜いてしまった。そこで、一頭を半分に切って、その半分を姉たちの輪の中へ投げ入れてやり、残りの一頭半の鯨を人間の世界までもって行って、オタスツという村の浜に押し上げて置いてきた。その帰途、何か私のそばにやってくるものがいた。見るとカモメだった。カモメは、「立派な神さま、何であなたは、ろくでもない人間に苦労してとった獲物をあげたのですか。彼らはオノや鎌で、メッタ切りにしたり、つつき回しています。それに、もらっても有難いとも思っていないよ。さあ行って取り戻してしまいなさい」という。私はカモメの話一笑に付して「もう人間にあげたものなのだから彼らが自分の持ち物をどうしようとかまわらないではないか」というとカモメもそれ以上何も言えなくなってしまった。私はカモメなぞ相手にせず日が落ちる頃、自分の海に戻ってきた。見ると、兄姉たちは、あの私のやった半分の鯨を運びきれずにまだウンウンいいながら引きずっている。私はあきれながらもそれには構わず家に帰り、例のごとく高床の上に座った。

ここまでが前半。兄や姉シャチが24人でかかっても獲れない鯨をこのシャチの子供は、

一度に2頭も射抜いてしまうほどの狩の名手なのです。そして何よりも驚くことは、その大半を人間にあげてしまう気前のよさです。兄姉たちには、わずか半頭(4分の1)しかあげないのに。これはいったい何を物語っているのでしょうか。



レプン カムイ ヤイエユカラ 「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フム フム!」  
 Repun Kamui yaieyukar, "Atuika tomatomaki kuntuteshi hm hm!"  
 repun-kamuy yayeyukar, "atuyka tomatomaki kuntutesi hm hm!"  
 沖の神(シャチ) 自らを物語る アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フム フム

海の神が自ら歌った謡「アトイカトマトマキ、クントテアシフム、フム!」  
 沖の神(シャチ)が自ら歌った謡「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フムフム!」  
 Song Sung by the Killer Whale (Orca) God "Atuika tomatomaki kuntuteashi hm hm!"

サケヘ：アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フム フム!  
 atuyka tomatomaki kuntutesi hm hm!

- 1 アトウイカ トマトマ キ クントウテアシ フム フム!  
 Atuika tomatoma ki / kuntuteshi hm hm!  
 atuyka tomatoma ki kuntutesi hm hm!  
 アトウイカ トマトマ キ クントウテアシ フム フム
- 2 タンネユピ イワン ユピ タンネ サポ イワン サポ  
 Tanneyupi / iwan yupi / tanne sapo / iwan sapo  
 tanne yupi iwan yupi tanne sapo iwan sapo  
 長い 兄 六人の 兄 長い 姉 六人の 姉  
 My tall elder brothers, six elder brothers, my tall elder sisters, six elder sisters,
- 3 タクネ ユピ イワン ユピ タクネ サポ イワン サポ  
 takne yupi / iwan yupi / takne sapo / iwan sapo  
 takne yupi iwan yupi takne sapo iwan sapo  
 短い 兄 六人の 兄 短い 姉 六人の 姉  
 my short elder brothers, six elder brothers, my short elder sisters, six elder sisters
- 4 ウンレシパ ワ オカヤシ コ チオカイ アナク  
 unreshpa wa / okayash ko / chiokai anak  
 un=respa wa okay=as ko ciokay anak  
 私・～を育てる(複) して いる(複)・私 すると 私 は
- 5 イキツウカリ チトウイエアムセツ アムセツ カシ  
 ikittukari / chituyeamset / amset kashi  
 ikir tukari ci-tuye amset amset kasi  
 列 ~の手前 される・～を切る 寝台 寝台 ~の上
- 6 チエホラリ、ケプシペヌイエ シリカヌイエ  
 chiehorari, / kepushpenuye / shirkanuye  
 ci=ehorari, kepuspe nuye sirka nuye  
 私・～に鎮座する さや ~に彫刻する 刀のさやの表 ~に彫刻する
- 7 チコキアシレチウ、ネアンペ パテク  
 chikokipshirechiu, / neambe patek  
 ci=ko-kip-sir-eciw, nean pe patek  
 私・～で・額・地面 ~を～で その 事 ばかり  
 突き刺す
- 8 モンライケ ネ チキ カネ オカヤシ。  
 monraike ne / chiki kane / okayash.  
 monrayke ne ci=ki kane okay=as.  
 仕事 として 私・～をする しながら いる(複)・私
- 9 ケットアンコ クンネワノ チユプタリ  
 Keshtoanko / kunnewano / chiyuputari  
 kesto an ko kunnewano ci=yup-utari  
 毎日 ある すると 朝から 私・～の兄たち

アトイカトマトマキ、クントテアシフムフム  
 アトウイカ トマトマ キ クントウテアシ フムフム!  
 Atuika tomatomaki kuntuteashi hm hm

長い兄様六人の兄様、長い姉様六人の姉様  
 丈の長い兄、六人の兄、丈の長い姉、六人の姉、  
 My tall elder brothers, six elder brothers, my tall elder sisters, six elder sisters,

短い兄様六人の兄様、短い姉様六人の姉様が  
 丈の短い兄、六人の兄、丈の短い姉、六人の姉が  
 my short elder brothers, six elder brothers, my short elder sisters, six elder sisters

私を育て、居たが、私は  
 私を育てていたが、私は  
 were raising me, and I

寶物の積んである傍に高床をしつらへ、其の高床の上に  
 宝物置場の手前にある別づくりの高床の上に  
 sat near the treasure pile on the movable bed,

すわつて鞘刻み鞘彫り  
 座って、刀の鞘刻み鞘彫り  
 immersed in engraving and carving sword scabbards.

それのみを  
 に夢中になっていて、それだけを  
 I made only that my work, and

事として暮してゐた。  
 仕事として暮していた。  
 that's how I passed the days.

毎日、朝になると兄様たちは  
 毎日、朝になると兄たちは  
 Every day when morning came, my brothers would

- 10 イカヨブ セ フ チサウタリ トウラ ソユンパ フ、  
 ikayop se wa / chisautari tura / soyunpa wa,  
 ikayop se wa ci=sa-utari tura soyunpa wa,  
 矢筒 ~を背負うして 私・~の姉たち と共に 外に出る(複) して
- 11 オヌマンコ セミポロカン トイネ カネ  
 onumananko / semiporkan / toine kane  
 onuman an ko sem-ipor-kan-toyne kane  
 夕方 ある すると よくない・顔色・の上・ひどい して
- 12 ネツカ サクノ ホシツパ フ、チサウタリ  
 nepka sakno / hoshippa wa, / chisautari  
 nep ka sak no hosippa wa, ci=sa-utari  
 何 も ~がないで 戻る(複) して 私・~の姉たち
- 13 シンキ シリ スケ キワ ウンコイブンパ  
 shinki shiri / shuke kiwa / unkoipunpa,  
 sinki siri suke ki wa un=koipunpa,  
 疲れる ~の様子 炊事 ~をする して 私・~に食べ物を出し出す(複)
- 14 オカイウタラ ナッカ イペ フ イペルウォカ チシトゥリレ コ、  
 okaiutar nakka / ipe wa / iperuwoka / chishiturire ko,  
 okay utar nakka ipe wa ipe ruwoka ci-siturire ko,  
 彼ら たち も 食事する して 食事 ~の終わった後 される・~を伸ばす すると
- 15 オロワノ チユプタリ アイカラネアプ コテツカンカリ、  
 orowano / chiyuputari / aikarneap / kotekkankari,  
 orowano ci=yup-utari aykar-neap-kotekkankari,  
 それから 私・~の兄たち 矢作り・~であったもの・~で手がくるくる回る
- 16 イカヨブ シク コ、オピッタノ シンキブネ クス、  
 ikayop shik ko, / opittano / shinkipne kushu,  
 ikayop sik ko, opittano sinki p ne kusu,  
 矢筒 一杯になる すると みんな 疲れる もの ~である から
- 17 ホツケ フ エトロハウエ メシロトツケ。  
 hotke wa / etorohawe / meshrototke.  
 hotke wa etoro hawe mesrototke.  
 寝る して いびきをかき ~の声 ぐうぐうと響く
- 18 ネ シムケアンコ クンネニサツ ペケレニサツ  
 Ne shimkeanko / kunnenisat / pekernisat  
 ne simke an ko kunne nisat peker nisat  
 その 翌日 ある すると 暗い 夜明け 明るい 夜明け
- 19 エホブンパ、チサウタリ スケ フ ウンコイブンパ、  
 ehopunpa, / chisautari / shuke wa / unkoipunpa,  
 ehopunpa, ci=sa-utari suke wa un=koipunpa,  
 ~に起きる(複) 私・~の姉たち 炊事する して 私・~に食べ物を出し出す(複)
- 20 オピッタノ イペオケレ コ トオ スイ イカヨブ セ フ  
 opittano / ipeokere ko / too shui ikayop se wa  
 opittano ipe okere ko too suy ikayop se wa  
 みんな 食事 ~を終える すると ずっと また 矢筒 ~を背負う して

矢筒を背負って姉様たちと一しょに出て行つて  
 矢筒を背負って姉たちと一緒に出かけ  
 shoulder their quivers and go out with my sisters,

暮方になると疲れた顔色で  
 夕方になると疲労で土気色の顔になって  
 and when evening came, they would come home empty-handed, faces pale

何も持たずに歸つて来て姉様たちは  
 何の収穫もなく帰ってきて、姉たちは  
 with exhaustion, and my sisters, looking tired,

疲れてゐるのに食事拵へをし、私にお膳を出して  
 疲れた様子で食事を作って私に食べさせてくれた。  
 would cook supper and feed me.

自分たちも食事をして食事のあとが片附くと  
 彼らも食事をして、食事のあとが片づくとき、  
 Then they would eat, and when they had cleaned up after supper,

それから兄様たちは矢を作るのに忙しく手を動かす。  
 それから兄たちは矢作りに精を出す。  
 my brothers would busy themselves making arrows.

矢筒がいっぱいになると、みんな疲れてゐるものだから  
 矢筒がいっぱいになると、みな疲れているため  
 When their quivers were full, because they were so exhausted,

寝ると高鼾を響かせてねむつてしまふ。  
 横になるとごうごうといびきをたてた。  
 they would lie down and their snores would echo.

其の次の日になるとまだ暗い中に  
 その次の日になると朝暗いうちに  
 When the next morning came, they would get up

みんな起きて姉様たちが食事拵へをして私に膳を出し  
 起きて、姉たちは食事を作って私に食べさせ、  
 while it was still dark, and my sisters would make breakfast and feed me,

みんな食事が済むと、また矢筒を背負つて  
 みんな食事が済むと、また矢筒を背負つて  
 and when everyone had finished eating, they would once again shoulder their quivers

21 パイエ フ イサム。スイ オヌマナンコ  
 paye wa isam. / Shui onumananko  
 paye wa isam. suy onuman an ko  
 行く(複) して しまう また 夕方 ある すると

22 セミポロカン トイネ カネ ネツカ サクノ アラキ フ、  
 semiporkan / toine kane / nepka sakno / arki wa,  
 sem-ipor-kan-toyne kane nep ka sak no arki wa,  
 よくない・顔色・の上・ひどい して 何 も ~がないで 来る(複) して

23 チサウタリ スケ、チユプタリ アイカラ カネ  
 chisautari / shuke, / chiyuputari / aikar kane  
 ci=sa-utari suke, ci=yup-utari ay kar kane  
 私・~の姉たち 炊事する 私・~の兄たち 矢 ~を作る しながら

24 ヘンパラ ナツカ イキチ コロ オカイ。  
 hempara nakka / ikichi kor okai.  
 hempara nakka iki-ci kor okay.  
 いつ でも する(複) しながら いる(複)

25 シネアントタ スイ チユプタリ チサウタリ  
 Shineantota shui / chiyuputari / chisautari  
 sinean to ta suy ci=yup-utari ci=sa-utari  
 ある 日 に また 私・~の兄たち 私・~の姉たち

26 イカヨブ セ フ ソユンパ フ イサム。  
 ikayop se wa / soyunpa wa isam.  
 ikayop se wa soyunpa wa isam.  
 矢筒 ~を背負うして 外に出る(複) して しまう

27 イコロカヌイエ チキ コロ オカヤシ アイネ  
 Ikorkanuye / chiki kor / okayash aine  
 ikor ka nuye ci=ki kor okay=as ayne  
 宝 ~の上 ~に 私・~を しながら いる(複)・私 したあげく  
 彫刻する する

28 アムセツ カタ ホブンパアシ コンカニ ポンク  
 amset kata / hopunpaash / konkani ponku  
 amset ka ta hopunpa=as konkani pon ku  
 寝台 ~の上 で 起きる(複)・私 金 小さい 弓

29 コンカニ ポナイ チウコアニ、ソイネアシ フ  
 konkani ponai / chiukoani, / soineash wa  
 konkani pon ay ci=ukoani, soyne=as wa  
 金 小さい 矢 私・~を両方持つ 外に出る・私 して

30 インカラシ アフ、ネトクルカシ テシナタラ、  
 inkarash awa, / netokurkashi / teshnatara,  
 inkar=as awa, neto kurkasi tesnatara,  
 見る・私 したところ なぎ ~の表面一帯 平らかである

31 シアトウイパ フ シアトウイケシ フ フンペウタラ  
 shiatuipa wa / shiatuikesh wa / humpeutar  
 si atuy pa wa si atuy kes wa humpe utar  
 大きな 海 上端 から 大きな 海 末端 から クジラ たち

行つてしまふ、また夕方になると  
 行ってしまう。また夕方になると  
 and go out. And when evening came,

疲れた顔色で何も持たずに歸つて来て  
 土気色の顔色をして何も収穫もなく歸つて来て  
 once again they would come home with pale faces and empty-handed,

姉様たちは食事拵へ兄様たちは矢を作つて、  
 姉たちは食事を作り、兄たちは矢を作り、  
 and my sisters would make supper and my brothers would make arrows,

何時でも同じ事をしてゐた。  
 いつも、そうやって暮らしていた。  
 and that was how we lived, all the time.

或日にまた兄様たち姉様たちは  
 ある日、また兄や姉たちが  
 One day, my brothers and sisters

矢筒を背負つて出て行つてしまつた。  
 矢筒を背負つて出かけて行つてしまつた。  
 shouldered their quivers and went out as usual.

寶物の彫刻を私はしてゐたがやがて  
 私は、宝物を彫つていたが、やがて  
 I was carving treasures, but eventually

高床の上に起上り金の小弓に  
 高床の上に起き上がり、金の小弓と  
 I stood up on the bed with a little golden bow

金の小矢を持つて外へ出て  
 金の小矢を共に持つて外へ出て  
 and a little golden arrow in hand. When I went outside,

見ると海はひろびろと風ぎて  
 見ると、海は風いで平らかに広がって  
 I found the sea spread out calm and wide,

海の東へ海の西へ鯨たちが  
 大海原の東端から大海原の西端から鯨たちが  
 and from the eastern tip to the western tip of the great plain of the sea, echoed

- 32 シノツシリコンナ チョポパツキ コ、  
shinotshirkonna / chopopatki ko,  
sinot sir konna copopatki ko,  
遊ぶ 様子 は パチャパチャする すると
- 33 シアトウイパタ タンネ サポ イワン サポ サイ カラ コ  
shiatuipata / tanne sapo / iwan sapo / sai kar ko,  
si atuy pa ta tanne sapo iwan sapo say kar ko,  
大きな 海 上端 に 長い 姉 六人の 姉 輪 ~を作る すると
- 34 タクネ サポ イワン サポ サイニコロ ウン フンペ オケウパ、  
takne sapo / iwan sapo / sainikor un / humpe okeupa,  
takne sapo iwan sapo saynikor un humpe okewpa,  
短い 姉 六人の 姉 輪の中 へ クジラ ~を追い払う(複)
- 35 タンネ ユピ イワン ユピ タクネ ユピ イワン ユピ  
tanne yupi / iwan yupi / takne yupi / iwan yupi  
tanne yupi iwan yupi takne yupi iwan yupi  
長い 兄 六人の 兄 短い 兄 六人の 兄
- 36 サイニコロ ウン フンペ ラマンテ コ ネアンフンペ  
sainikor un / humpe ramante ko / neanhumpe  
saynikor un humpe ramante ko nean humpe  
輪の中 へ クジラ ~を狙う すると その クジラ
- 37 チョロポケ アイクシ エンカシ アイクシ。  
chorpoke aikush / enkashi aikush.  
corpoke ay kus enkasi ay kus.  
~の下 矢 ~を通る ~の上 矢 ~を通る
- 38 ケットケット エネアニキチ キコロ オカイルウエ  
Keshtokeshto / eneanikichi / kikor okairuwe  
kesto kesto ene an iki-ci ki kor okay ruwe  
毎日 毎日 そのように ある する(複) ~をする しながら いる(複) の
- 39 ネロコカイ。インカラシ コ アトウイノシキタ  
nerokokai. / Inkarash ko / atuinoshkita  
ne rokokay. inkar=as ko atuy noski ta  
である だったのだ 見る ・私 すると 海 ~の真ん中 で
- 40 シノコロフンペ ウポコロフンペ ヘペライ ヘパシ  
shinokorhumpe / upokorhumpe / heperai / hepashi  
si-nokorhumpe upokor humpe heperay hepasi  
イワシクジラ 親子である クジラ 川上へ 川下へ
- 41 シノツ シリ チョポパツキ、チヌカラ ワクス  
shinot shiri / chopopatki, / chinukar wakushu  
sinot siri copopatki, ci=nukar wakusu  
遊ぶ ~の様子 パチャパチャする 私 ・ ~を見る したので
- 42 オトウイマシリ フ コンカニ ポンク コンカニ ポナイ  
otuimashir wa / konkani ponku / konkani ponai  
otuymasir wa konkani pon ku konkani pon ay  
速く から 金 小さい 弓 金 小さい 矢

パチャパチャと遊んで居る。すると  
遊ぶ音がパチャパチャと響いた。すると  
the splashing sounds of the whales at play. At the eastern tip

海の東に長い姉様六人の兄様が手をつらねて輪をつくると、  
大海原の東端に丈の長い姉、6人の姉が並んで輪を作ると、  
of the great plain of the sea, my tall sisters, six sisters, would make a circle,

短い姉様六人の姉様が、輪の中へ鯨を追込む、  
丈の短い姉、6人の姉が輪の中へ鯨を追いつつ、  
and my short sisters, six sisters, would drive the whales into the circle.

長い兄様六人の兄様短い兄様六人の兄様が  
丈の長い兄、6人の兄と、丈の短い兄、6人の兄が  
When my tall brothers, six brothers, and my short brothers, six brothers,

輪の中へ鯨をねらひ射つと、其の鯨の  
輪の中へ鯨をねらい射つと、その鯨  
shot at the whales in the circle, their arrows

下を矢が通り上を矢が通る。  
の下を矢が外れ、上を矢が外れてしまう。  
would miss their marks, passing under the whales and over the whales.

毎日毎日彼等はこんな事をして  
毎日毎日彼らはそんなことをしていたの  
Day after day, my brothers and sisters

みたのであつた。見ると海の中央に  
であった。見ると海の中ほどで  
would do this. When I looked, I saw a gigantic sei whale mother and calf

大きな鯨が親子の鯨が上へ下へ  
巨大なイワシクジラが親子連れで海の上へ下へ  
out in the middle of the sea swimming back and forth,

パチャパチャと遊んでゐるのが見えたので  
泳ぎ遊びバシャバシャ音をたてている。それを私は見て  
making splashing sounds as they played. When I saw this,

遠い所から金の小弓に金の小矢を  
遠い所から金の小弓と金の小矢  
I fixed a little golden arrow to my little golden bow, and shot

- 43 チウエウヌ チトウカン アフ エアライ アリ  
 chiuweunu / chitukan awa / earai ari  
 ci=ueunu ci=tukan awa ear ay ari  
 私・～に～をつがえる 私・～を射る したところ ただ一本の 矢 で
- 44 シネイキンネ ウポコロフンペ チシリコ チョツチャ。  
 shineikinne / upokorhumpe / chishirko chotcha.  
 sine ikinne upokor humpe ci=sirko-cotca.  
 一つの 列になって 互いに子供を持つ クジラ 私・～を激しく射当てる
- 45 タタオッタ シネフンペ ノシキ チトウイエ  
 Tataotta / shinehumpe / noski chituye  
 tata or ta sine humpe noski ci=tuye  
 さあ、そこで 一つの クジラ ～の真ん中 私・～を切る
- 46 フンペアラケ チサウタリ サイニコルン  
 humpearke / chisautari / sainikorun  
 humpe arke ci=sa-utari saynikor un  
 クジラ ～の半分 私・～の姉たち 輪の中 へ
- 47 チエヤブキリ、オロワノ フンペアラケ エトウフンペ  
 chieyapkir, / orowano / humpearke etuhumpe  
 ci=eyapkir, orowano humpe arke e-tu humpe  
 私・～を投げる それから クジラ ～の半分 ～で、二つの クジラ
- 48 チイシポコマレ、アイヌモシリ  
 chiishpokomare, / ainumoshir  
 ci=is-pok-omare, aynu mosir  
 私・尾の下・～に～を入れる 人間 世界
- 49 コパケ ウン ヤパシ アイネ オタスツ コタン  
 kopake un / yapash aine / Otashut kotan  
 kopake un yap=as ayne Otasut kotan  
 ～の近く へ 上陸する(複)・私 したあげく オタスツ 村
- 50 チコシレバ、フンペアラケへ エトウフンペ  
 chikoshirepa, / humpearke / etuhumpe  
 ci=kosirepa, humpe arke e-tu humpe  
 私・～に到着する クジラ ～の半分 ～で、二つの クジラ
- 51 コタンラケへ チコオプトウイエ。  
 kotanrakehe / chikooptuye.  
 kotan rakehe ci=kooputuye.  
 村 ～の下の方 私・～に～を押す
- 52 タポロフ アトウイソ カタ モイレヘロリ  
 Taporowa / atuiso kata moireherori  
 tap orowa atuy so ka ta moyre herori  
 それから 海 面 ～の上に ゆっくりである 頭を沈めること
- 53 チコヤイクルカ オマカネ、ホシツパアシ フ  
 chikoyaikurka / omakane, / hoshippaash wa  
 ci=ko-yay-kurka-oma kane, hosippa=as wa  
 私・～と共に自分の上一帯に入る して 戻る(複)・私 して

番へてねらひ射つたところ、一本の矢で  
 をつがえて射った。するとただ一本の矢で  
 from far away. With a single arrow,

一度に親子の鯨を射貫いてしまった。  
 一度に親子の鯨を射貫いてしまった。  
 I shot through the whale mother and her calf.

そこで一つの鯨のまんなかを斬つて  
 そこで一頭の鯨のまん中を切って  
 Then I cut one whale down the middle

其の半分を姉様たちの輪の中へ  
 その半分を姉たちの輪の中へ  
 and threw half of it into the circle

はふりこんだ。それから鯨一ツ半の鯨を  
 投げこんだ。それから一頭半の鯨  
 my sisters had made. Then I put the other whale and a half

尾の下に入れて人間の國に  
 を尾びれの下に入れて人間の世界  
 under my tailfin and headed for the world

むかつて行きオタシユツ村に  
 に向って行き、ようやくオタストウ村  
 of the humans, and when I finally arrived at the village

着いて一ツ半の鯨を  
 に着いて一頭半の鯨  
 of Otasut, I pushed the whale and a half up

村の濱へ押上げてやつた。  
 を村の浜へ押し上げてやつた。  
 onto the shore of the village.

それから海の上にゆつくりと  
 それから海の上をゆつたりと潜ったり  
 After that, I swam home,

游いで歸つて  
 はね上がったたりしながら帰って  
 diving and jumping serenely in the ocean

- 54 アラパアシ アワ、カナカンクニプ  
arpaash awa, / kanakankunip  
arpa=as awa, kanakan kuni p  
行く・私 したところ どのようにある ~する 者
- 55 ヘセハウエ タクナタラ、ウンピシカニ エホユプ、  
hesehawe / taknatara, / unpishkani / ehoyupu,  
hese hawe taknatara, un=piskani ehoyupu,  
息をする ~の声 短く切れながら続く 私・~のまわり ~に走る
- 56 インカラシ アワ アトウイチャクチャク ネ カネ アン。  
ingarash awa / atuichakchak / ne kane an.  
inkar=as awa atuy cakcak ne kane an.  
見る・私 したところ 海 ミソサザイ ~である して ある
- 57 タシカン トウイトウイ コロ エネ イタキ：—  
Tashkan tuitui kor / ene itaki：—  
tas kan tuy tuy kor ene itak i：—  
息 ~の上 切れる 切れる しながら このように 話す こと
- 58 「トミンカリクル カムイカリクル イソヤンケクル  
“Tominkarikur Kamuikarikur / Isoyankekur  
“Tominkarikur Kamuykarikur Isoyankekur  
トミンカリクル カムイカリクル イソヤンケクル
- 59 カムイラメトク パセカムイ、  
kamuirametok / pasekamui,  
kamuy rametok pase kamuy,  
神 勇者 尊い 神
- 60 ネプ エカルクス トヤイヌウタラ ウェナイヌウタラ  
nep ekarkushu / toyainuutar / wenainuutar  
nep e=kar kusu toy aynu utar wen aynu utar  
何 あなた・~をする ために ひどい 人間 たち 悪い 人間 たち
- 61 クントウイソ エコヤンケ ルウェタン。  
kuntuiso / ekoyanke ruwetan.  
kuntu-iso e=koyanke ruwe ta an.  
黒々とした 獲物 あなた・~に~を陸揚げする こと (強調) ある
- 62 トヤイヌウタラ ウェナイヌウタラ ムカラ アリ  
Toyainuutar / wenainuutar / mukar ari  
toy aynu utar wen aynu utar mukar ari  
ひどい 人間 たち 悪い 人間 たち 斧 で
- 63 イヨッペ アリ クントウイソ タウキタウキ トツパトツパ  
iyoppe ari / kuntuiso / taukitauki / toppatoppa  
iyoppe ari kuntu-iso tawki tawki toppa toppa  
鎌 で 黒々とした 獲物 ~を叩き切る 切る ~をつつく つつく
- 64 ケウレコロ オカイナ、カムイラメトク  
keurekor okaina, / kamuirametok  
kewre kor okay na, kamuy rametok  
~を削る しながら いる(複)よ 神 勇者

来たところが、誰かが、  
行った。すると誰かが  
as I went. As I did this, someone

息を切らして其の側をはしるものがあるので  
息を切らしながら私のかたわらに走ってきた。  
came rushing up to my side, panting.

見ると、海のごめであつた。  
見ると、カモメであつた。  
When I looked, I saw a seagull.

息をきらしながらいふことには  
息をきらしながら次のように言った。  
Huffing and puffing, it said:

「トミンカリクル、カムイカリクル、インヤンケクル  
「トミンカリクル、カムイカリクル、イソヤンケクル  
"Tominkarikur Kamuikarikur Isoyankekur

勇マシイ神様大神様、  
立派な勇者、大切な神さま、  
O, brave hero, o weighty god,

あなたは何の爲に、卑しい人間共悪い人間共に  
あなたは何のためにひどい人間、悪い人間たちに  
why did you give the terrible humans, the bad humans

大きな海幸をおやりになつたのです。  
大きな獲物を上げたのです。  
the big catch?

卑しい人間共悪い人間共は、斧もて  
ひどい人間、悪い人間たちはオノヤ  
The terrible humans, the bad humans are hacking

鎌をもて大きな海幸をブツブツ切つたり突つたり  
鎌でその獲物をメッタ切りにしたり、つつきまわしたり  
at the big catch with hatchets and sickles, and poking and

削り取つてゐます、勇しい神様  
削ったりしていますよ。立派な勇者  
scraping at it. O, brave hero,

- 65 パセカムイ ケケ ヘタク クントウイソ  
pasekamui / keke hetak / kuntuiso  
pase kamuy keke hetak kuntu-iso  
早い 神 さあ 早く 黒々とした獲物
- 66 オカエタイエ ヤン。テペシケコ イソ アヤンケ ヤッカ  
okaetaye yan. / Tepeshkeko / iso ayanke yakka  
oka etaye yan. tepeskeko iso a=yanke yakka  
～の後 ～を引っ張る しなさい たくさん 獲物 人・～を陸揚げする しても
- 67 トヤイヌウタラ ウェナイヌウタラ  
toyainuutar / wenainuutar  
toy aynu utar wen aynu utar  
ひどい 人間 たち 悪い 人間 たち
- 68 エヤイライケ カ ソモキノ エネ イキチイ タン。」  
eyairaike ka / somokino / ene ikichii tan.”  
eyayrayke ka somo ki no ene iki-ci i ta an.”  
～に感謝する も ない ～をする で そのように する(複) こと (強調) ある
- 69 ハウオカイ チキ チエミナ、イタカシ ハウエ  
hawokai chiki / chiemina, / itakash hawe  
hawokay ciki ci=emina, itak=as hawe  
言う(複) したら 私・～を笑う 話す・私 ～の話
- 70 ナイコサヌ、エネ オカイ：——  
naikosanu, / ene okai : ——  
naykosanu, ene okay i : ——  
美しくさつと響く このように ある(複) こと
- 71 「アイヌピトウタラ チコロパレブ ネ クス  
“Ainupitoutar / chikorparep / ne kushu  
“aynu-pito utar ci=korpap ne kusu  
人間 たち 私・～に～をあげる 物 ～である ので
- 72 タネ アナクネ コロペ ネフ アンペ アイヌピトウタラ  
tane anakne / korpe newa anpe / Ainupitoutar  
tane anakne kor pe ne wa an pe aynu-pito utar  
今 は ～を持つ物 ～である して ある もの 人間 たち
- 73 ヤイコタ コロペ イヨッペ アリ ヘネ ムカラ アリ ヘネ  
yaikota korpe / iyoppe ari hene / mukar ari hene  
yaykota kor pe iyoppe ari hene mukar ari hene  
自分で ～を持つ物 鎌 で でも 斧 で でも
- 74 トクパトクパ メシパメシパ ネコナ ヘネ  
tokpatokpa / meshpameshpa / nekona hene  
tokpa tokpa mespa mespa nekona hene  
～をつつく つつく ～をむしり取る取る どのように でも
- 75 エネ カンルスイイ ネブコロ カラ フ エパ コ  
ene kanrushuii nepkor / kar wa epa ko  
ene kar rusuy i nepkor kar wa e pa ko  
どのように ～をする したい こと のように ～をする して ～を食べる(複) すると

大神様さあ早く大海幸を  
大切な神さま、さあ早くあの獲物  
o weighty god, you must take back your big catch

お取返しなさいませ。あんなに澤山、海幸をおやりに  
を取り返しなさい。沢山の獲物をもたらしても  
right away. Even though they have received an abundant catch,

なつても卑しい人間たち共悪い人間たちは  
ひどい人間、悪い人間たちは  
those terrible humans, those bad humans

有難いとも思はずこんな事をします。」  
ありがたいとも思わず、そんな無作法を続けていますよ」  
are ungratefully continuing their disgraceful behavior."

と云ふので私は笑つて云ふ  
というので、私は一笑にふして、  
I scoffed at the seagull when he said this,

ことには  
美しい声を響かせながら次のように言った。  
and my beautiful voice ringing out, I said as follows:

「私は人間たちに呉れてやつたものだから  
「人間たちに私が与えたものなのだから  
"It is something I gave to the humans, and

今はもう自分の物だから、人間たちが  
今はもう彼らの物になっているのだから、人間たちが  
now it belongs to them, so if the humans want to

自分の持物を鎌でつつかうが斧で  
自分の持物を鎌であれオノであれ  
poke and scrape what belongs to them

削らうが何うでも  
つつきまわしたり、削ったりどのようにしようと  
with sickles and hatchets and eat it

自分たちの自由に食べたい、ではないか  
好きなようにして食べることが  
any way they want, then that is

- 76 ネコンネ ハウエ?」 イタカシ アフ  
 nekonne hawe? ” itakash awa  
 nekon ne hawe? ” itak=as awa  
 どのように～である ～の話 話す・私 したところ
- 77 アトウイチャクチャク エラムカ パテッ カネ オカイ コロカ、  
 atuichakchak / eramuka / patek kane / okai korka,  
 atuy cackak eramuka patek kane okay korka,  
 海 ミソサザイ ～を考える ばかり しながら いる(複) けれども
- 78 センネ ポンノ チエコッタヌ アトウイソ カタ  
 senne ponno / chiekottanu / atuiso kata  
 senne ponno ci=ekottanu atuy so ka ta  
 ちっとも～ない 私・～を気に留める 海 面 ～の上に
- 79 モイレヘロリ チコヤイクルカ オマ カネ  
 moireherori / chikoyaikurka / oma kane  
 moyre herori ci=koyaykurka-oma kane  
 ゆっくりである 頭が沈むこと 私・～と共に自分の上一帯に入る して
- 80 タネ チュパフン コツポケタ チコロ アトウイ  
 tane chupahun / kotpoketa / chikor atui  
 tane cup ahun kotpoke ta ci=kor atuy  
 もう 太陽 入る ～の直前 に 私・～の 海
- 81 チコシレパ。 インカラシ アフ  
 chikoshirepa. / Inkarash awa  
 ci=kosirepa. inkar=as awa  
 私・～に到着する 見る・私 したところ
- 82 トウニカシマ ワンチュピ トウニカシマ  
 tunikashma / wanchiyupi / tunikashma  
 tun ikasma wan ci=yupi tun ikasma  
 二人 余る 十の 私・～の兄 二人 余る
- 83 ワンチサハ ネア フンペアラケ ニンパコヤイクシ  
 wanchisaha / nea humpearke / nimpakoyaikush  
 wan ci=saha nea humpe arke ninpa koyaykus  
 十の 私・～の姉 その クジラ ～の半分 ～を引きずる(複) ～しきれない
- 84 ウコハヤシ トウルパ カネ、  
 ukohayashi / turpa kane,  
 uko-hayasi-turpa kane,  
 お互いに離子を伸ばす して
- 85 シアトウイパ タ ウコヤエラムシツネ コロ オカイ。  
 shiatuipa ta / ukoyaeramushitne / kor okai.  
 si-atuypa ta ukoyaeramusitne kor okay.  
 大きな 海の上端 で お互いに苦しみ合う しながら いる(複)
- 86 シヨロケウトウム チヤイコレ。  
 Shiyorokeutum / chiyaikore.  
 siyoro kewtum ci=yaykore.  
 あされる 心 私・～を自らに持たされる

それが何うなのだ。」といふと  
 どうだというのだ」と私が言うと  
 their own business," I said, and

海のごめは所在無げにしてゐるけれども  
 カモメは、ただ考えてばかりいる。しかし  
 the seagull brooded and brooded over my words. But

私はそれを少も構はず海の上を  
 私は、そんなことにおかまもなく海の上で  
 I paid no attention to him and continued

ゆつくりとおよいで  
 ゆったり潜ったり、とびはねたりしながら  
 serenely diving and jumping in the ocean,

もう日が暮れようとしてゐる時に、私の海へ  
 もう日が暮れようとしている時に、自分の海  
 and when it was almost dark, I arrived

着いた。見ると  
 に到着した。見ると  
 at my home sea. When I looked, I saw

十二人の兄様、十二人の  
 12人の兄と12人の  
 my twelve elder brothers and twelve

姉様は、彼の半分の鯨をはこび  
 姉が、あの半分の鯨を引きずりきれず  
 elder sisters unable to move that half a whale.

きれなくてみんなで掛聲高く  
 みんなで掛け声をかけながら  
 At the eastern side of the sea, all calling "heave-ho" and

海の東に、グツグツしてゐる。  
 海の上手で進めずに困り切っている  
 making no progress, they were at a complete loss.

私は實にあきれてしまつた。  
 私は、まだそんな所にいるのかと驚いてしまつた。  
 I could not believe that they were still in the same place I had left them.



- 87 センネ チエコッタヌ チウンチセヘ  
 Senne chiekottanu / chiunchisehe  
 senne ci=ekottanu ci=un-cisehe  
 ちっとも～ない 私・～を気に留める 私・～の住む家
- 88 チコヘコモ、アムセツカシ チエホラリ。  
 chikohekomo, / amsetkashi / chiehorari.  
 ci=kohekomo, amset kasi ci=ehorari.  
 私・～へ戻る 寝台 ～の上 私・～に鎮座する

私はそれに構はずに家へ  
 しかしそれにはおかまいなく自分の家  
 But without paying them a bit of attention, I returned

歸り、高床の上にすわつた。  
 へ戻り、高床の上に座った。  
 to my house and sat upon my bed.

## 〔言葉の解説〕

## ・ユピ yupi (2行目)

ユピ yupi (の兄)は、所属形。概念形は、ユパ yup (兄)。姉の概念形は、サ sa。所属形はサハ saha。サポ sapo (姉さん)は、サ saに、親しみを表すポ poがついたもの。同じようにユポ yupo (兄さん)という言い方があります。ここでは、なぜかユポ／サポ yupo / sapo という形ではなくユピ／サポ yupi / sapo という形で出てきます。

## ・チトウイエアムセツ cituye amset (5行目)

この言葉は、< ci-tuye-amset (～される・を切る・高床) →切られた高床→別づくりの高床。独立した寝台。ユーカラの中には、主人公がよくこの上で彫り物をしている描写がでてきます。

## ・ケプシペヌイエ シリカヌイエ kepuspe nuye sirka nuye (6行目)

物語の中で男の主人公が日常している仕事の描写。ケプシペ kepuspe は、「鞆」。シリカ sirka は「表面」。全体で「鞆を彫り、(鞆の)表面を彫る」こと。

## ・コキプシレチウ kokipsireciw (7行目)

この言葉は < ko-kip-sir-eciw (～に対して・額・あたり・に刺す) → (前のめりになって)額を地にぶつけるようにする彫刻のときの姿勢。夢中になっていること。

## ・クンネワノ kunne wano (9行目)

クンネ kunne は「暗い」。ワノ wano は「から」。暗くから。沙流方言ではクンネイワノ kunney wano < 暗い・時・から。朝早くから。

## ・イカヨフ ikayop (10行目)

イカヨフ ikayop は「矢筒」。10～20本ほどの矢を入れる入れ物。この言葉は、< i-ka-ay-o-p (人・の上・矢・～を～にのせる・もの) で、→「人の背の上に矢をのせるもの」からでしょうか。

## ・ソユンパ soyunpa (10行目)

ソユンパ soyunpa は「外に出る」(複数形)。沙流方言では、ソイエンパ soyenpa。

## ・セミポロカン sem ipor kan (11行目)

セム sem は音節をふやし、飾り言葉のためのもの。セム sem は、センネ senne やイサム isam、ソモ somo と関係があるらしく、否定的な意味をそえる語。ここでは、「疲れた顔色」。

## ・ウンコイブンパ un=koinunpa (13行目)

ウン un= は「私に」。イブンパ ipunpa は < i-punpa (もの・を持ち上げる) →食べ物差し出す。ブンパ punpa はプニ puni の複数形で「を持ち上げる」こと。お膳などを持

ち上げることから、食事を差し出す、という意味になったものと思われます。

## ・イペルウォカ チシトウリレ ipe ruwoka cisiturire (14行目)

イペ ルウォカ ipe ruwoka は < ipe ru oka で「食事する・の・後」。ル ru はルウエ ruwe と同じで、「～すること」。チシトウリレ cisiturire は < ci-si-turi-re (～される・自分・を伸ばす・させる) →伸びる。食事が終わった後の状態が続く。

## ・コテツカンカリ kotekkankari (15行目)

これは < ko-tek-kar-kari (～に・手が、回る・回る) →手をくるくると動かす。

## ・トオ スイ too suy (20行目)

この場合のトオ too は「ずっと」。後のパイエ ワ イサム paye wa isam に係って、「ずっと、行ってしまう」。

## ・シアトウイパ si atuy pa (31行目)

シ アトウイ si atuy (大きい・海) →大海原。パ pa は、「上手。東の端」。反対にケシ kes は、下手の端、西の端。シ アトウイ パ si atuy pa で「大海原の東端」。

## ・チョポパッキ copopatki (32行目)

アッキ -atki は、擬態語を自動詞にする語。チョポパ copop は、水がはねる音「チャボン、ザブン」といった音を表わす。「パチャパチャと音をたてる」こと。

## ・サイ カラ say kar (33行目)

サイ say は、首環のような「輪」のこと。もとの意味は、一連に連なったものを指し、チカフ サイ cikap say (鳥の連なり)、ヌイト サイ nuyto say (巻いて輪にした糸)、タマ サイ tama say (首飾り)などの語があります。サイ カラ say kar で「輪を作る」こと。シャチがずらっと並んで輪を作ること。

## ・シノコロフンペ sinokorhumpe (40行目)

知里真志保は、これを「イワシクジラ」としています(分類・動物編)。そして、それを < si-nu-kor-humpe (大いなる・豊漁・をもつ・クジラ) と分析しています。フンペ humpe は < hum-pe (フームと潮を吹く・もの) からでしょう。

## ・ウポコロフンペ upokor humpe (40行目)

ウポコロ upokor < u-po-kor (お互いに・息子・を持つ) →息子と親の関係である。全体で「親子クジラ」。

## ・シネイキンネ sine ikinne (44行目)

これは、< sine ikir ne (一つ・連らなり・として) 一度に(貫く)。

## ・フンペアラケ エトウフンペ humpe arke etu humpe (47行目)

アッケ エトゥ arke etu を直訳すると「(あと) 半分・～で二つ (になる)」→あと半分で二頭→一頭半。一頭半の鯨。

・イシボコマレ ispokomare (48 行目)

これは < is-pok-omare (尾・下・に入れる) →尾びれの下に入れる。is は普通、鳥の尾のこと。

・コパケ kopake (49 行目)

コパク kopak で「の方、の近く」。コパケ kopake は、その所属形。

・ヘロリ herori (52 行目)

これは < he-rori (頭・～を沈める) →潜る。

・コヤイクルカ オマ koyaykurka oma (53 行目)

これは、< ko-yay-kurka oma (と共に・自分・の上・に位置する)。

久保寺の「アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究」P.603 に、ko-yay-si-kurka-oma-re (と共に・自分を・自ら・の上・に位置・させる) が出ています。これだと、「跳ぶ」意味になる。si ~ re が欠けたものかもしれません。

・アトウイチャクチャク atuyacakcak (56 行目)

これは、< atuy-cacak (海・鳴き声の擬音語) これを知里幸恵はゴメ (北海道方言でカモメのこと) と訳しています。チャクチャク cacak だけだと「ミソサザイ」。カモメは、カピウ kapiw といわれることが多いです。アトウイチャクチャクは、知里真志保の分類動物編にも出てきません。

・タシカン トウイトウイ tas kan tuytuy (57 行目)

この場合 カン kan は、とくに意味を持たない虚辞。音節調整のため。タシ トウイトウイ tas tuytuy は、「息・切れる切れる」息が切れ切れになること。

・トミンカリクル カムイカリクル イソヤンケクル

Tominkarikur Kamykarikur Isoyankekur (58 行目)

これは、シャチ (沖の神) の本名の一部。トミンカリクル Tominkarikur は < tomi-inkarikur < tomi-inkar-kur (宝物・見る・神)。カムイカリクル Kamykarikur は < kamuy-inkarikur (神・見る・神)。イソヤンケクル Isoyankekur は < iso-yanke-kur (海幸・を浜へ上げる・神)。トミ tomi は、日本語の「富」から入った言葉。インカラ inkar の末尾に i がなぜ入ったのかは不明。おそらく語源意識から離れ、名前としての音が伝わったためでしょう。

・ネブ エカラス nep e=kar kusu (60 行目)

直訳すると「何を・あなた・をする・ために」で、何をするために→「何のために」。

・クントウイソ kuntu iso (61 行目)

クントウ kuntu は、「危険である」(バチラー辞典) とあり、kunnu と同じでもあります。クヌヌ kunnu は < kur-nu (黒い・十分) で「黒々とした」という意味。おそらく黒い鯨を意味したものでしょう。全体で、「黒々とした鯨」。

・トツパトツパ toppatoppa (63 行目)

74 行目に同じ言葉が、トツパトツパ tokpatokpa と表記されています。トツパトツパ tokpatokpa は < tok-pa-tok-pa (ものをつつく音を表わす擬音語・多回辞・くりかえし) →何回もつづく。

・オカエタイエ ヤン oka etaye yan (66 行目)

オカエタイエ oka etaye で「後・を引っぱる」→取り戻す。ヤン yan は「～しなさい」。全体で「取り返しなさい」。

・イタカシ ハウエ ナイコサヌ itak=as hawe naykosanu (69～70 行目)

ナイコサヌ naykosanu は、< nay-kosanu (金属が鳴る音を表わす擬音語・瞬間的に起こることを示す自動詞化語) →美しい (金属) 音をさっと響かせる。全体で「私が語る声は、美しく響く」。

・コロペ kor pe (72 行目)

この場合のコロ kor の人称は第三人称 (彼、彼女、人間、など)。アイヌ語の場合、第三人称は 0 (ゼロ) が付くと考え、ここでは、人称が付いていないのではなく、0 (ゼロ) が付いているのでコロ kor を訳すときは、「人間が持つ」となります。「人間が持っているもの」→彼の自分のもの。

・メシパメシパ mespamespa (74 行目)

メシパ mespa を重ねた言葉。語根の mes は、擬音語で、ものが「はがれたり、もげたりする」ことを表わします。ここでは、「(鯨の肉を) はぎ取ったり、むしり取ったりする」こと。トツパトツパ tokpatokpa (つつきまわす) と同じく、手荒く扱うこと。

・コヤイクシ koyaykus (83 行目)

コヤイクシ koyaykus は、「～しかねる」という意味。ニンパ コヤイクシ ninpa koyaykus で「(重すぎて) 引っぱりきれない」。

・ウコハヤシ トウルパ ukohayasi-turpa (84 行目)

この言葉は、< uko-hayasi-turpa (一緒に・掛け声・を伸ばす) → (ヨーイショ! と) みんなで掛け声を長く響かせること。ハヤシ hayasi は、日本語の「囃子 (はやし)」からだと思われる。

・ウコヤエラムシツネ ukoyaeramusitne (85 行目)

これは、< uko-yay-e-ramu-sitne (お互いに・自ら・について・～の心・よじれるように苦しむ) →みんなでも苦しむ。一生懸命やってもなかなか事が進まず難儀する。

・シヨロケウトウム チヤイコレ siyoro kewtum ci=yaykore (86行目)

シヨロ siyoro は「驚く」。ケウトウム kewtum は「心」。チヤイコレ ci=yaykore は、< ci=yay-kor-e (私・自分・を持つ・させる) →私は自ら持たせる→私は持つ・全体で、「驚く心を私は持つ」→私は驚いてしまう。

〔参考〕

難語、不明語について検討してみます。あくまでも参考までに。

・アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フム フム

atuy ka toma toma ki kuntuteasi hm hm (1行目)

この長いサケへ(折り返しの節)は、いったい何を意味するのでしょうか。アトウイカ atuy ka は「海の上」。トマトマキ toma toma ki が難しい。～a～a(くり返しくり返し)の文として、トマ トマ キ tom a tom a ki で「何度も光り光りする」か。クントウテアシ kuntuteasi のクントウ kuntu は、61行目に出てくる言葉で、元の意味は「黒々としている」。テアシ teasi は全く分かりません。想像をたくましくして、t-p の変化がよくあるので、ペアシ peasi (水・立てる)と考えると、「水を立てる」。フム フム hm hm は「フーンと潮を吹く」。全体で「海の上で何度も光る、黒い体が水を立ててフーンと潮を吹く」となりますが、これは全くの想像でしかありません。「光り光りする」とは何でしょうか。シャチの黒と白の鮮やかな体色がはねるときに光ることを指しているのかとも思えます。フム フム hm hm は、シャチも鯨と同様に水上で呼吸をするので、その音を表わしているとも考えられます。いずれにせよ、今後まだまだ検討の余地があります。サケへは変容が激しいので、この言葉をこのまま分析することも危険でしょう。

・ケプシペ kepuspe (6行目)

ユーカラの慣用句としてよく使われるこの言葉も、分析されていません。分かりそうでわかりません。ウシペ uspe は、< us-pe (～に付く・もの)と解せそうですが、ケプ kep は何でしょうか。< ke-p (を削る・もの)→刃物、と考えると、「刃物に付いているもの」→鞘(さや)、と考えたが、はたしてどうでしょうか。一方、浜田隆史氏は、ケプ kep を「縁」(久保寺辞典)ととらえ、「縁に付いているもの」と考えています。今後も検討の余地のある言葉です。

・テベシケコ tepeskeko (66行目)

これは何かの語が音韻変化をしたものだろうと考えました。p音はm音とよく代わる(mが強く発音されてpに)。すると、temeskeko という語が浮び上がってきました。これは< tem-e-sike-ko (一間・を・運ぶ・反語)→「(長さが)一間の荷を運ぶのではない」→「一間(両手を広げた長さ)の荷運びどころではなく、もっと大きい」ではないでしょうか。シケ sike は、「荷を運ぶ」。名詞のシネ シケ sine sike (一つの荷物)で、「魚20尾、一束」

(久保寺辞典)と出ています。これだと、大きさだけではなく、量(魚の)も表わすことになります。知里幸恵が「あんなに沢山」と訳したのは、そのためかもしれません。

反語を表わすコ ko は、トゥイマコ tuymako (遠くない→近い)、とかポンコ ponko (小さくない→大きい)というように使われます。このコ ko は、単なる否定ではなく、心の動きを微妙にいい表わしているようです。トゥイマコ tuymako は「(近いと思っていたのに) 遠くない→遠い」、ポンコ ponnko 「(ほんの小さなものと思っていたのに) 小さくない→大きい」というように、それまで、考えていたことをくつがえされたような気持ちを表わします。例えば、ものを(米など)をくれるというので、もらってみると、思っていたよりも少ないのでポロコ poroko (なんだ多くないんだ)とつぶやいたりします。

・エラムカ eramuka (77行目)

バチラー辞典に、ramuka で「考える」と出ています。すると e- が付いて他動詞化したのがエラムカ eramuka で「～を考える」という意味にとれます。エラムカ パテク eramuka patek で「を考えてばかりいる」。つまり何の反論もできずに考えてばかりいてぼうっとしていることではないでしょうか。

## 第8話(その2)

### シャチが自らをうたった<sup>うた</sup>謡

「アトウイカ トマトマキ クントウテアシ フムフム!」

(89～193行目まで)

#### 〔物語とその背景〕

一本の矢で親子二頭の鯨を獲り、人間と自分の兄姉にあげて家に帰ってきた子供のシャチ。後半の物語は、家の中での出来事が主な舞台となります。

私(子供のシャチ)は、ふり向いて人間界を見た。すると、自分が浜に押し上げた鯨を立派な男女がとり巻いて、思いがけない海幸に喜びの舞いや踊りをしていた。丘には美しい模様の入ったゴザが敷かれ、そこでオタスツ村の村長が6枚の小袖に帯を締め正装し、冠をかぶり立派な剣を腰につけて手を高く差し上げて礼拝し、他の人々は泣きながら海幸を喜んでいる。カモメが言ったオノや鎌で海幸をひどく扱っているなど全くの嘘で、村長をはじめ村人たちは最も大切な剣で肉を切って運んでいるのではないか。

ところで私の兄姉たちは、いっこうに帰ってくる気配がない。

2～3日経った頃、目の縁に何か感じるものがあった。窓の方を見ると、神窓に金かねの高杯に酒があふれんばかりに入って、その上に捧酒箸が乗り、その箸が動きながら伝言を次のように伝えた。

「私はオタスツ村の者で恐れ慎しみながらお御酒を差し上げる次第です」と村長が村人を代表して事細かく申し述べる。「尊い神さま、あなた様でなくて誰が、饑饉に襲われ飢えにひんしている私たちを心にかけて下さる方がおりましたか。私たちの村に生命をよみがえらせて下さいまして誠にありがとうございます。海幸のお礼にわずかばかりのお酒と御幣をお送りする次第でございます」と述べた。そこで私は上座に届いた六樽の酒のふたを開き少しずつ金の杯に注ぎ入れて、それを窓の上にのせた。するとそれはすぐに人間界に送られていき、その場から消えた。

それから再び、いつものように刀の鞘を彫る仕事に専念した。ふと気がつくと、家の中が美しい御幣で満たされ、それが白いもやに包まれて美しく輝いていた。さらに2～3日経つとようやく兄や姉たちが鯨を引きながら戻ってくる声が聞こえてきた。みな疲れきった顔つきで帰ってきた。ところが家に入って沢山の御幣があるのを見てびっくりして礼拝した。さらに上座にある六樽の酒の香りが家中に漂い出した。そこで、私は家を御幣で美しく飾って、遠くや近くの神々を招待し、宴を開いた。姉たちが鯨の肉を煮て出すと神々はみな大喜びだった。宴たけなわになった頃、私は立ち上がり、神々にそれまでのことを詳しく物語った。人間界の饑饉のこと、それをあわれに思って鯨を浜に押し上げたこと、それをねたんでカモメが中傷したこと、オタスツ村の村長が感謝して伝言とともに酒を送ってよこしたこと、などを。すると神々は、うち揃ってうなづき合い、私をほめたたえた。それからまた宴は盛り

上がり、宴席のそこここで神々が舞いや踊りにうち興じた。姉の中には、神々にお酌してまわるものや、女神たちと一緒に歌うものもいた。そして、2～3日経って宴が閉じた。神々に土産の御幣を2～3本ずつ贈るとみな深く頭を下げ礼を言って帰っていった。

その後、私はまた兄や姉たちといつもの暮らしに戻った。人間たちは、酒を造ると、その都度私に酒や御幣を送ってよこす。人間たちは、もう食べ物の不足も、困ることも何一つなく平穏に暮している所以我は安心して暮らしている。

以上が後半の話です。

ここには、人間と神々の関係が実に分りやすく描かれています。人間が飢えに苦しむ→それを見てシャチ神が食べ物(鯨)を恵む→人間は感謝して、お礼の言葉とお酒、御幣を神へ送る→沢山の御幣と酒でシャチ神は、他の神々を招待する→ことの次第を聞いて神々はシャチ神をほめたたえる→日常の生活に戻る→人間たちも平穏な暮らしをし、ことあるごとに神へ感謝の気持を酒や御幣を送ることで表わす、という流れです。これは、シャチ神だけでなくシマフクロウの神の場合でも全く同じ流れとなります。

この美しい人間と神の関係が壊れるとき(つまり饑饉に襲われるとき)、それは、第7話で描かれたように人間が、感謝の心を忘れ、神から送られたもの(食糧をはじめ生活の糧一切)を粗末に扱ったときです。

- 89 タポロフ シオカ ウン アイヌ モシリ チコホサリ  
 Taporowa / shioka un / ainu moshir / chikohosari  
 tap orowa si-oka un aynu mosir ci=kohosari  
 それから 自分・～の後へ 人間 世界 私・～の方を向く
- 90 インカラシ アワ、チヤンケア フンペアラケ  
 inkarash awa, / chiyanke / humpearke  
 inkar=as awa, ci=yanke a humpe arke  
 見る・私 したところ 私・～を陸揚げする した クジラ ～の半分
- 91 エトゥフンペ オカリノ ニシパウタラ  
 etuhumpe / okarino / nishpautar  
 e-tu humpe okarino nispa utar  
 ～で二つの クジラ ～のまわりに 紳士 たち
- 92 カツケマトウタラ ウシユッコ トウルパ カネ  
 katkematutar / ushiyukko / turpa kane  
 katkemat utar u-siyuk-ko-turpa kane  
 淑女 たち 互い・装束・～に・～を伸ばす しながら
- 93 イソエタプカラ イソエリムセ、マクンフンキ  
 isoetapkar / isoerimse, / makunhunki  
 iso etapkar iso erimse, makun hunki  
 獲物 ～に踏舞する 獲物 ～に踊る 背後の 砂丘
- 94 フンキ カタ オキタルンペ ソホネフ  
 hunki kata / okitarunpe / sohonewa  
 hunki ka ta okitarunpe soho ne wa  
 砂丘 ～の上に 模様付きの大ゴザ ～の座 ～になる して
- 95 カシケ タ オタスツ コタン コタンコロニシパ  
 kashike ta / Otashut kotan / kotankornishpa  
 kasike ta Otasut kotan kotan kor nispa  
 ～の上 に オタスツ 村 村 ～を持つ 紳士
- 96 イワン コソソテ コクツコロ イワン コソソテ  
 iwan kosonte / kokutkor / iwan kosonte  
 iwan kosonte kokutkor iwan kosonte  
 六つの 小袖 ～に帯を締める 六つの 小袖
- 97 オパンネレ、カムイパウンペ エカシパウンペ  
 opannere, / kamui paunpe / ekashpaunpe  
 opannere, kamuy paunpe ekas paunpe  
 ～を羽織る 神 儀式用の冠 先祖 儀式用の冠
- 98 キムイラリレ カムイランケタム シトムシ  
 kimuirarire / kamuiranquetam / shitomushi  
 kimuy rarire kamuy ranke tam sitomusi  
 頭頂 ～に～を押さえさせる 神 ～を降ろす 刀 ～を腰につける
- 99 カムイシリネ テクリキクル プニ カネ  
 kamuishirine / tekrikikur / puni kane  
 kamuy siri ne tek-riki-kur-puni kane  
 神 ～のようである 手を上に持ち上げる して

そこで後ふりかへつて人間の世界の方を  
 それから、自分の後の人間世界をふり返って  
 Then, when I looked back on the world

見ると、私が打上げた一つ  
 見ると、私の上げた鯨  
 of the humans, I saw, surrounding the whale and a half

半の鯨のまわりをとりまいてりつばな男たちや  
 一頭半のまわりに立派な男たち  
 I had pushed ashore, splendid men

りつばな女たちが盛装して  
 立派な女たちが盛装して居並び  
 and splendid women dressed in their finery, all lined up

海幸をば喜び舞ひ海幸をば歡び躍り、後の砂丘  
 獲物に喜びの舞いや踊りをして、後の砂丘  
 doing dances of rejoicing. On the sand dune

の上にはりつばな敷物が敷かれて  
 の上には大きな模様付きのゴザを敷きつめて  
 behind them, they had laid out a great patterned mat,

その上にオタシユツ村の村長が  
 その上でオタストウ村の村長が  
 and on top of it sat the chief of the village of Otasut,

六枚の着物に帯を束ね、六枚の着物を  
 6枚の立派な着物を帯で締め、6枚の立派な着物を  
 wearing six fine kimono, belted, with another six fine kimono

羽織つて、りつばな神の冠、先祖の冠を  
 羽織って、神の冠、先祖の冠  
 on the outside, and he wore on his head a holy crown,

頭に冠り、神授の劔を腰に佩き  
 を頭にかぶり、神授の劔を腰につけ  
 an ancestral crown, and on his belt a holy sword.

神の様に美しい様子で手を高くさし上げ  
 神のように立派な様子で手を高く差し上げながら  
 With the magnificent appearance of a god, he was raising his hands high in

- 100 オンカミ コラン。アイヌピトウタラ チシトゥラノ  
 onkami koran. / Ainupitoutar / chishturano  
 onkami kor an. aynu-pito utar cis turano  
 礼拝する しながら いる 人間 たち 泣く と共に
- 101 イソエヌペツネ コロ オカイ。  
 isoenuptne kor okai.  
 iso enupetne kor okay.  
 獲物 ~を喜ぶ しながら いる(複)
- 102 ネイケ タプネ アトウイチャクチャク アイヌピトウタラ  
 Neike tapne / atuichakchak / ainupitoutar  
 neike tapne atuy cakcak aynu-pito utar  
 どこ (強調) 海 ミソサザイ 人間 たち
- 103 ムカラ アリ イヨツペ アリ チヤンケフンペ  
 mukar ari / iyoppe ari / chiankehumppe  
 mukar ari iyoppe ari ci=yanke humpe  
 斧 で 鎌 で 私・~を陸揚げする クジラ
- 104 トクパトクパ アリ ハウオカイ アワ、コタンコロ ニシパ ヘメム  
 tokpatokpa ari / hawokai awa, / kotankor nishpa hemem  
 tokpa tokpa ari hawokay aw a, kotan kor nispa hemem  
 ~をつつく(複) と 言う(複) という話か 村 ~を持つ 紳士 も
- 105 コタンコルトラ、フシコトイ フノ  
 kotankorutar, hushkotoi wano  
 kotan kor utar, huskotoy wano  
 村 ~の 人たち ずっと前 から
- 106 イコロソツカラネ コロ カムイ ポソミ サプテ フ  
 ikorsokkarne kor / kamui posomi / sapte wa  
 ikor sokkar ne kor kamuy posomi sapte wa  
 宝 最上のもの として ~を持つ 立派な 細身の刀 ~を出す(複) して
- 107 アリ イチャ フ ルルパ コロ オカイ。  
 ari icha wa / rurpa kor okai.  
 ari ica wa rurpa kor okay.  
 それで 切り取る して 運ぶ(複) しながら いる(複)
- 108 オロワノ チユプタリ チサウタリ アラキシリ  
 Orowano / chiyuputari / chisautari / arkishiri  
 orowano ci=yup-utari ci=sa-utari arki siri  
 それから 私・~の兄たち 私・~の姉たち 来る(複) ~の様子
- 109 オアラリサム。  
 oararisam.  
 oarar isam.  
 全く ない
- 110 トウツコ レレコ シラン アワ プライ オルン  
 Tutko rerko / shiran awa / purai orun  
 tutko rerko siran awa puray or un  
 二日 三日 経つ したところ 窓 ~の所へ

禮拜をしてゐる。人間たちは泣いて  
 礼拝をしている。人間たちは泣きながら  
 worship, and the humans were weeping with joy

海幸をよろこんでゐる。  
 獲物を喜んでいる。  
 at the catch.

何をごめが人間たちが  
 何だ、カモメのやつ、人間たちが  
 Why, that lying seagull had told me

斧で鎌で私の押上げた鯨を  
 オノや鎌で私の上げた鯨を  
 that the humans, with their hatchets and sickles, were poking

突つついてゐると言つたが、村長を  
 つつきまわしていると言つたが、村長や  
 at the whale I had pushed ashore, but in fact the village chief and

はじめ村民は、昔から  
 村人たちは、大昔から  
 the villagers had taken out the sword

寶物の最も尊いものとしてゐる神劍を取り出して  
 宝物の中でも最も大切にしてきた立派な剣を取り出して  
 that they prized the most out of all their treasures since ancient times

それで肉を斬つて搬んでゐる、  
 それで鯨の肉を切つて、運んでいるではないか  
 and were cutting the whale meat with it and carrying the pieces.

それから、私の兄様たち姉様たちは歸つて来る  
 それから時が経つても、私の兄や姉が戻つて来る様子は  
 Some time passed after that, but my brothers and sisters showed no sign

様子もない。  
 全くない。  
 of returning.

二日三日たつた時、窓の方に  
 2~3日経つたころ、窓の方から  
 After two or three days, from the direction of the window,

- 111 チシクサマ チイクルレ、タンペ クス  
 chishiksama / chiikurure, / tampe kusu  
 ci=siksama ci-ikurure, tanpe kusu  
 私・～の目のそば される・～に気配を これ のため  
 感じさせる
- 112 インカラシ アワ、ロルンプライ プライ カタ  
 ingarash awa, / rorunpurai / purai kata  
 inkar=as awa, rorunpuray puray ka ta  
 見る・私 したところ 神窓 窓 ～の上に
- 113 カニ トウキ カンパスイカン モムナタラ、  
 kani tuki / kampashuikan / momnatara,  
 kani tuki kan-pasuy-kan-momnatara,  
 金属の 杯 捧酒箸の上に漂っている
- 114 サケオ カネ カシケタ  
 sakeo kane / kashiketa  
 sake o kane kasike ta  
 酒 ～に入る して ～の上 に
- 115 キケウシパスイ アン カネ シラン コ、  
 kikeushpashui an kane shiran ko,  
 kike-us-pasuy an kane siran ko,  
 削り掛けのある捧酒箸 ある して 様子がある すると
- 116 ホシピ ランケ ソンコイエ ハウエ エネオカイ：――  
 hoshipi ranke / sonkoye hawe / eneokai :――  
 hosipi ranke sonko ye hawe ene okay i :――  
 戻る たびたび～する 伝言 ～を言う ～の話 このように ある(複) こと
- 117 「チオカイ アナク オタストウンクル チネ ワ  
 “Chiokai anak / Otashutunkur / chine wa  
 “ciokay anak Otasut un kur ci=ne wa  
 私たち は オタスツ ～に住む 人 私たち・～である して
- 118 オリパカシ ヤッカ パスイエプニ アキ シリネナ。」 アリ  
 oripakash yakka / pashuiepuni / aki shirinena.” ari  
 oripak=as yakka pasuy epuni a=ki siri ne na.” ari  
 恐縮する・私たち であっても 捧酒箸 ～を持ち上げる 私・～をする 様子である よ と
- 119 オタスツ コタン コタンコロ ニシパ コロ ウタリ  
 Otashut kotan / kotankor nishpa / kor utari  
 Otasut kotan kotan kor nispā kor utari  
 オタスツ 村 村 ～を持つ 紳士 ～の 人々
- 120 オピッタノ コツチャケネ ウンコヤイライケ カトゥフ  
 oppittano / kotchakene / unkoyairaike katuhu  
 opittano kotcake ne un=koyayrayke katuhu  
 みんな ～の前 ～になって 私・～に感謝する ～の様子
- 121 オモンモモ。  
 omommomo,  
 omommomo,  
 ～を詳しく述べる

何か見える様だ、それで  
 私の目のふちに何かを感じさせるものがあった。それで  
 I saw something out of the corner of my eye. Then,

振りかへつて見て見ると、東の窓の上に  
 振り向くと、神窓の、窓の上に  
 when I turned around, on the sacred window frame,

かねの盃にあふれる程  
 かねの高杯にあふれるほど  
 a metal tuki\* was brimming

\*a ceremonial wine cup

酒がはいつてゐて其の上に  
 酒が入っている。その上に  
 with wine. On top of it

御幣を取りつけた酒箸が載つてゐて、  
 削り掛けの付いた捧酒箸が載っていて、そのうちに  
 sat a kike-us-pasui\*, and soon

\*a libation stick decorated with wood shavings

行きつ戻りつ、使者としての口上を述べて云ふには……  
 箸が揺れながら伝言を次のように言った。  
 the kike-us-pasui began to sway and deliver the following message:

「私はオタシユツ村の人で  
 「私はオタストウ村の者で  
 "I am a resident of Otasut Village, and

畏多い事ながらおみきを差上げます。」と  
 おそれ慎しみながら、捧酒箸でお酒をさし上げるのでございます」と  
 it is my honor to offer you wine through this kike-us-pasui."

オタシユツ村の村長が村民  
 オタストウ村の村長が村人  
 Representing all the villagers of Otasut,

一同を代表に私に禮をのべる  
 全員を代表して私に感謝することの次第を  
 the village chief expressed in detail

次第をくはしく話し、  
 こと細かく申し述べ、  
 their gratitude to me.



122 「トミンカリクル カムイカリクル イソヤンケクル  
 “Tominkarikur / Kamuikarikur / Isoyankekur  
 “Tominkarikur Kamuykarikur Isoyankekur  
 トミンカリクル カムイカリクル イソヤンケクル

123 パセ カムイ カムイ ラメトク ソモオヤペ  
 pase kamui / kamui rametok / somooyape  
 pase kamuy kamuy rametok somo oya pe  
 尊い 神 神 勇者 ない 別の 者

124 タン コラチ チコロ コタニ ケムシ フ  
 tan korachi / chikor kotani / kemush wa  
 tan koraci ci=kor kotani kemus wa  
 これ のように 私たち・～の 村 飢饉になる して

125 タネ アナクネ ヤイウエンヌカラシ パクノ  
 tane anakne / yaiwenukarash pakno  
 tane anakne yaywenukar=as pakno  
 今 は どうしようもなく困る・私たち まで

126 エプサカシラポクタ ウネランポキウエンペ タン。  
 epsakashrapokta / unerampokiwenpe tan.  
 ep-sak=as rapok ta un=erampokiwen pe ta an.  
 食物不足・私たち ～の間に 私たち・～を哀れに思う もの (強調) がある  
 になる

127 チコロ コタニ チラマツコレ ウネカラカン ルウエ、  
 Chikor kotani / chiramatkore / unekarkan ruwe,  
 ci=kor kotani ci-ramatkore un=ekarkar ruwe,  
 私たち・～の 村 される・～に魂を与える 私たち・～に～をする こと

128 イヤイライケレ、イソ チエヌペツネ クス  
 iyairaikere, / iso chienupetne kushu  
 iyayraykere, iso ci=enupetne kusu  
 ありがとうございます 獲物 私たち・～を喜ぶ ので

129 ポン トノトポ チカラ キワ ポン イナウポ  
 pon tonotopo / chikar kiwa / pon inau po  
 pon tonoto-po ci=kar ki wa pon inaw-po  
 少しの 酒 (指小辞) 私たち・～を ～をして 小さい 御幣 (指小辞)  
 作る する

130 チコタマ パセカムイ チコヤヤッタサ  
 chikotama / pasekamui / chikoyayattasa  
 ci=kotama pase kamuy ci=koyayattasa  
 私たち・～を～に 尊い 神 私たち・～に返礼する  
 添える

131 キシリ タパン ナ。」 アリ オカイペ、  
 kishiri tapan na.” / ari okaipe,  
 ki siri tapan na.” ari okay pe,  
 ～する という様子である よ と ある(複) もの

132 キケウシパスイ ホシピ ランケ エチャランケ。  
 kikeushpashui / hoshipi ranke / echaranke.  
 kike-us-pasuy hosipi ranke ecaranke.  
 削り掛けの付いたイナウ 戻る たびたび～する ～に論じる

「トミンカリクル、カムイカリクル、イソヤンケクル  
 「トミンカリクル、カムイカリクル、イソヤンケクル  
 "Tominkarikur Kamuikarikur Isoyankekur

大神様勇しい神様でなくて誰が、  
 大切な神さま、立派な勇者、あなたさまの外に誰が  
 O weighty god, magnificent warrior, who else but you

此の様に私たちの村に饑饉ががあつて  
 このように私の村に饑饉が起こって  
 would take pity on us while we were in the midst

もう、何うにも仕様がな程  
 もうどうしようないほど  
 of a famine and were so short of food

食物に窮してゐる時に哀れんで下されませう。  
 食糧がなくなっているときに、あわれに思ってくれるでしょう。  
 that we did not know what to do?

私たちの村に生命を與へて下さいました事、  
 私の村に生命を与えて下さったこと  
 We thank you for giving life

誠に有難う御座います、海幸をよろこび  
 ありがとうございます。獲物をいただき嬉しく思いまして  
 to our village. We were pleased to receive the catch, so

少しの酒を作りまして、小さな幣を  
 わずかの酒を作り、小さな御幣  
 we have made a bit of wine and accompanied it with

添え、大神様に謝禮  
 を添えて大切な神さまに返礼  
 a small inau to return

申上る次第であります。」といふ事を  
 する次第であります」ということを  
 the weighty god's favor." This message the

幣つきの酒箸が行きつ戻りつ申立てた。  
 削り掛け付きの棒酒箸が揺れながら申し述べた。  
 kike-us-pasui relayed while swaying.

- 133 シリキ チキ チリキプニアシ カニ トウキ  
 Shirki chiki / chirikipuniash / kani tuki  
 sirki ciki ci-rikipuni=as kani tuki  
 様子である したら 起き上がる・私 金属の 杯
- 134 チウイナ ワ チリクンルケ チラウンルケ  
 chiuina wa / chirikunruke / chiraunruke  
 ci=uyna wa ci=rikunruke ci=raunruke  
 私・～を取る(複)して 私・～を高くかざす 私・～を低くおろす
- 135 ロルンソ カタ イワン シントコ プタ チマカ、  
 rorunso kata / iwan shintoko / puta chimaka,  
 rorunso ka ta iwan sintoko puta ci=maka,  
 上座 ~の上に 六つの 行器 ふた 私・～を開ける
- 136 ピリカサケ ポンノ ランケ チオマレ イネ  
 pirkasake / ponno ranke / chiomare ine  
 pirka sake ponno ranke ci=omare ine  
 よい 酒 少し たびたび～する 私・～に～を入れる して
- 137 カニ トウキ プライカ ウン チアンテ。  
 kani tuki / puraika un / chiande.  
 kani tuki puray ka un ci=ante.  
 金属の 杯 窓 ~の上 へ 私・～を置く
- 138 タポロワ アムセツカシ チオソルシ、  
 Taporowa / amsetkashi / chiosorushi,  
 tap orowa amset kasi ci=osorusi,  
 それから 寝台 ~の上 私・～に座る
- 139 インカラシ アワ ネア トウキ パスイ トウラン  
 inkarash awa / nea tuki / pashui turano  
 inkar=as awa nea tuki pasuy turano  
 見る・私 したところ その 杯 樽酒箸 と共に
- 140 オアラリサム。 オロワノ ケプシペヌイエ  
 oararisam. / Orowano / kepushpenuye  
 oarar isam. orowano kepuspe nuye  
 全く ない それから さや ~に彫刻する
- 141 シリカヌイエ チキ コロ オカヤシ アイネ、  
 shirkanuye / chiki kor / okayash aine,  
 shirka nuye ci=ki kor okay=as ayne,  
 刀のさやの表 ~に彫刻する 私・～を しながらい(複)・私 したあげく  
 する
- 142 フナクパケタ ヘプニアシ ワ インカラシ アワ  
 hunakpaketa / hepuniash wa / ingarash awa  
 hunakpaketa hepuni=as wa inkar=as awa  
 どれほど経ってか 顔を上げる・私 して 見る・私 したところ
- 143 チセウアソロ ピリカ イナウ チエシクテ、  
 chiseupshoro / pirka inau / chieshikte,  
 cise upsoro pirka inaw ci-esikte,  
 家 ~のふところ 美しい イナウ される・～で～をいっぱいにする

それで私は起上つて、かねの盃を  
 それを見て私は起き上がり、金の高杯  
 Seeing that, I stood up and took the metal tuki,

取り、押しいたゞいて  
 を取り、それを高く上げ、低く下げして  
 raised it and lowered it,

上の座の六つの酒樽の蓋を開き  
 上座の六つの酒樽のふたを開け  
 opened the six wine tubs at the seat of honor,

美酒を少しづゝ入れて  
 美酒を少しづつ注いで  
 poured the delicious wine bit by bit,

かねの盃を窓の上へのせた。  
 金の高杯を窓の上に置いた。  
 and put the metal tuki on the window frame.

それが済むと、高床の上に腰を下し  
 それが済むと、高床の上に腰を下ろし、  
 When I had finished, I sat upon my bed.

見ると彼の盃は箸と共に  
 見るとその高杯は樽酒箸と共に  
 Then I looked and saw that the tuki and the kike-us-pasui

なくなつてゐた。それから、鞘を刻み  
 影も形もなくなっていた。それから鞘を刻み  
 had disappeared without a trace. After that, I continued engraving

鞘を彫り、してゐてやがて  
 鞘を彫っていた。やがて  
 and carving scabbards. Eventually,

ふと顔をあげて見ると、  
 ふと顔をあげて見ると、  
 I looked up by chance and saw that

家の中は美しい幣で一ぱいになつてゐて  
 家の中は美しい御幣でいっぱいになつていて、  
 the house was filled with beautiful inau.

- 144 チセウナソロ レタラ ウララ エトウシナツキ、レタラ イメル  
 chiseupshoro / retar urar / etushnatki, / retar imeru  
 cise upsoro retar urar etusnatki, retar imeru  
 家 ~のふところ 白い もや 立ちこめている 白い 稲光り
- 145 エシマカ コロ シラン。アンラマス チウエスイエ  
 eshimaka kor shiran. / Anramashu / chiuweshuye.  
 esimaka kor siran. anramasu ci=uesuye.  
 ~で光り輝く しながら 様子がある 素晴らしい 私・~(心)を揺さぶる
- 146 オロワノ スイ トウツコ レレコ シラン アイケ、  
 Orowano shui / tutko rerko / shiran aike,  
 orowano suy tutko rerko siran ayke,  
 それから また 二日 三日 経つ したのだが
- 147 オッタ エアシリ チセソイケ ウン チユプタリ  
 otta eashir / chisesoike un / chiyuputari  
 or ta easir cise soyke un ci=yup-utari  
 ~の所で 初めて 家 ~の外へ 私・~の兄たち
- 148 チサウタリ ウコハヤシ トウルパ カネ、ネア フンペ  
 chisautari / ukohayashi / turpa kane, / nea humpe  
 ci=sa-utari uko-hayasi-turpa kane, nea humpe  
 私・~の姉たち お互いに囃子を伸ばす して あの クジラ
- 149 ニンパ ワ アラキ フマシ。シヨロケウトウム  
 nimpa wa / arki humash. / Shiyoro keutum  
 ninpa wa arki humas. siyoro kewtum  
 ~を引きずる(複)して 来る(複) 感じである あきれた 心
- 150 チヤイコレ。チセウナソルン アフア シリ  
 chiyaikore. / Chiseupshorun / ahup shiri  
 ci=yaykore. cise upsor un ahup siri  
 私・~を自らに 家 ~のふところへ 入る(複) ~の様子  
 持たされる
- 151 チヌカラ コ、チユプタリ チサウタリ  
 chinukar ko, / chiyuputari / chisautari  
 ci=nukar ko, ci=yup-utari ci=sa-utari  
 私・~を見る すると 私・~の兄たち 私・~の姉たち
- 152 シンキルイペ イポットウムコンナ スムナタラ。  
 shinkiruipe / ipottumkonna / shumnatara.  
 sinki ruy pe ipor-tum-konna-sumnatara.  
 疲れ 激しいもの 顔の表情がしおれている
- 153 シアウオライバ、イナウイキリ ヌカンロクワ  
 Shiaworaipa, / inauikir / nukanrokwa  
 si-aworaypa, inaw ikir nukar rok wa  
 自分を内に押しやる(複) 御幣 列 ~を見る した(複)して
- 154 ホマツパ ワ オンカミロク オンカミロク。  
 homatpa wa / onkamirok onkamirok.  
 homatpa wa onkami rok onkami rok.  
 驚く(複) して 礼拝する して(複) 礼拝する して(複)

家の中は白い雲がたなびき白いいなびかりが  
 家の中には白いもやがたなびき、白い稲光りが  
 A white haze hung in the house, and white lightning

ピカピカ光つてゐる。私はあゝ美しいと思つた。  
 ピカピカと光っている。私は、そのすばらしさに心をゆさぶられた。  
 sparkled. My heart was moved by the splendor of it.

それからまた、二日三日たつと、  
 それから二~三日経って、ようやく  
 Two or three days passed after that, and finally

その時やつと、家のそとで、兄様たちや  
 その頃になって初めて家の外へ兄たちや  
 I began to hear the voices of my brothers

姉様たちが掛聲高く彼の鯨を  
 姉たちが掛け声をかけ合いながらその鯨  
 calling "heave-ho" as they dragged the whale

引張つて来たのがきこえだした。私はあきれて  
 を引きずってくる声が聞こえはじめた。私はあきれて  
 toward the house. I was utterly

しまつた。家の中へはいる様子を  
 しまつた。家の中に入る様子を  
 exasperated with them. When I looked

眺めると、兄様たちや姉様たちは  
 見ると、兄や姉たちは  
 at my brothers and sisters as they entered the house,

たいへん疲れて、顔色も萎れてゐる。  
 すっかり疲れて、表情もぐったりとしている。  
 they were completely exhausted and their faces looked tired and washed out.

みんなはいつて来て、澤山の幣を見ると、  
 彼らが家の中に入って来て、沢山の御幣を見たとき  
 They came into the house, and when they saw all the inau,

驚いてみんな何遍も何遍も拜した。  
 驚いて何度も礼拝をくりかえした。  
 they were surprised and worshipped them over and over again.

- 155 ラポケタ □ルンソ カタ イワン シントコ  
 Rapoketa / rorunso kata / iwan shintoko  
 rapoke ta rorunso ka ta iwan sintoko  
 その間 に 上座 ~の上に 六つの 行器
- 156 カンパスイカン モムナタラ、カムイエルスイベ  
 kampashuikan / momnatara, / kamuierushuibe  
 kan-pasuy-kan-momnatara, kamuy e rusuy pe  
 樽酒箸の上に漂っている 神 ~を食べる ~したいもの
- 157 サケフラ チセウアソ□ エパララセ。  
 sakehura / chiseupshor / epararse.  
 sake hura cise upsor epararse.  
 酒 ~の匂い 家 ~のふところ ~に漂う
- 158 オ□フノ チセウアソ□ ピリカ イナウ チエトムテ、  
 Orowano / chiseupshoro / pirka inau / chietomte,  
 orowano cise upsoro pirka inaw ci=etomte,  
 それから 家 ~のふところ 美しい イナウ 私・~で~を飾る
- 159 トウイマ カムイ ハンケ カムイ アシケチウク、  
 tuima kamui / hanke kamui / ashkechiuk,  
 tuyma kamuy hanke kamuy aske ci=uk,  
 遠い 神 近い 神 ~の手 私・~を取る(招く)
- 160 シサク トノト チウコアンテ。チサウタリ  
 shisak tonoto / chiukoante. / Chisautari  
 sisak tonoto ci=ukoante. ci=sa-utari  
 極上の 酒 私・~を互いに置く 私・~の姉たち
- 161 フンペ スイパ カムイウタラ コポンパ コ  
 humpe shuipa / kamuiutar / kopumpa ko  
 humpe suypa kamuy utar kopunpa ko  
 クジラ ~を煮る(複) 神 たち ~に~を差し上げる(複) すると
- 162 カムイウタラ ウコオハアセ エチウ カネ。  
 kamuiutar / ukooahapse / echiu kane.  
 kamuy utar uko-ohapse-eciw kane.  
 神 たち みんなおいしいとほめる して
- 163 チクプノシキ オマン カネ チリキプニアシ、  
 Chikupnoshki / oman kane / chirikipuniash,  
 cikup noski oman kane ci-rikipuni=as,  
 酒席 ~の真ん中 行く して 起き上がる 私
- 164 タブネタブネ アイヌモシリ ケム ウシ フ  
 tapnetapne / ainumoshir / kem ush wa  
 tapne tapne aynu mosir kem-us wa  
 このように このように 人間 世界 飢饉になる して
- 165 チエランポキウエン、イソ チヤンケカトウフ ヘMEM  
 chierampokiwen, / iso chiyankekatuhu hemem  
 ci=erampokiwen, iso ci=yanke katuhu hemem  
 私・~を哀れに思う 獲物 私・~を陸揚げする ~の有様 も

其のうちに、東の座の六つの酒樽は  
 すると、上座の六つの酒樽が  
 Then, the six wine tubs at the seat of honor

溢れるばかりになつて、神の好物の  
 あふれんばかりになつていて、神の好物の  
 were filled nearly to brimming, and the scent of wine,

酒の香が家の中に漂ふた。  
 酒の香りが家中に漂った。  
 a favorite of the gods, drifted throughout the house.

それから私は、美しい幣で家の中を飾りつけ、  
 それから私は家の中を美しい御幣で飾り  
 After that, I decorated the inside of the house with beautiful inau

遠方の神近所の神を招待し  
 遠くの神や近くの神を招いて  
 and invited the far away gods and the nearby gods,

盛んな酒宴を張つた。姉様たちは  
 極上の酒で宴をひらいた。私の姉たちは  
 and we had an incomparable feast. When my sisters

鯨を煮て、神たちに出すと、  
 鯨を煮て、神々に差し出すと  
 cooked the whale and served it to the gods,

神たちは、舌鼓を打つてよろこんだ。  
 神々はみなおいしいとほめそやした。  
 the gods praised its wonderful flavor.

宴酣の頃私は起上り  
 宴もたけなわになった頃、私は起き上がり、  
 At the height of the feast, I stood

斯々、人間世界に饑饉があつて  
 人間世界は饑饉が起こり  
 and told the story of how a famine had occurred

あはれに思ひ、海幸を打上げた次第や  
 私はそれをあはれに思って獲物を上げてやった次第をかくかくしかじか話し、  
 in the world of the humans and I had taken pity on them and given them a whale and a half

- 166 アイヌピトウタラ チピリカレ コ ウェン カムイウタラ  
ainupitoutar / chipirkare ko / wen kamuiutar  
aynu-pito utar ci=pirkare ko wen kamuy utar  
人間 たち 私・～をよくする すると 悪い 神 たち
- 167 ウンケシケ クス、アトウイチャクチャク ウンケウトウムウエンテ  
unkeshke kushu, / atuichakchak / unkeutumwente  
unkeske kusu, atuy cakcak un=kewtum-wente  
ねたむ ので 海 ミンサザイ 私・～を根性悪にする
- 168 カトウフ ヘメム、オタスツ コタン  
katuhu hemem, / Otashut kotan  
katuhu hemem, Otasut kotan  
～の有様 も オタスツ 村
- 169 コタンコロ ニシパ エネエネ ウンコヤイライケ フ  
kotankor nishpa / eneene / unkoyairaike wa  
kotan kor nispa ene ene un=koyayrayke wa  
村 ～を持つ 紳士 このように このように 私・～に感謝する して
- 170 キケウシパスイ ソンココロ フ エク カトウフ  
kikeushpashui / sonkokor wa / ek katuhu  
kike-us-pasuy sonko kor wa ek katuhu  
削り掛けの付いた棒酒箸 伝言 ～を持つ して 来る ～の有様
- 171 チオモンモモ チエチャランケ コ、カムイウタラ  
chiomommomo / chiecharanke ko, / kamuiutar  
ci=omommomo ci=ecaranke ko, kamuy utar  
私・～を詳しく述べる 私・～を論じる すると 神 たち
- 172 イリヘツチェハウ イリフムセハウ ウコトウルパ  
irhetchehau / irihumsehau / ukoturpa  
ir hetce haw ir humse haw ukoturpa  
一緒の 拍子を取る 声 一緒の 感嘆する 声 互いに～を伸ばす
- 173 イラムイエ ハウエ カリ カネ。  
iramyé hawé / kari kane.  
iramyé hawé kari kane.  
感心してほめる ～の声 回る して
- 174 オロワノ スイ シサク トノト チウコアンテ、  
Orowano shui / shisak tonoto / chiukoante,  
orowano suy sisak tonoto ci=ukoante,  
それから また 極上の 酒 私・～を互いに置く
- 175 カムイウタラ チクフソパタ  
kamuiutar / chikupshopata  
kamuy utar cikupso pa ta  
神 たち 酒宴の座 ～の先に
- 176 チクフソケシタ タプカラ フミ リムセハウエ  
chikupshokeshta / tapkar humi rimsehawe  
cikupso kes ta tapkar humi rimse hawe  
酒宴の座 ～の末 に 踏舞する ～の音 踊る ～の音

人間たちをよくしてやると、悪い神々が  
また、このように人間たちを良くしてやると、悪い神々が  
and the evil gods were envious that I had did the humans

それをねたみ、海のごめが私に中  
それをねたんで、カモメを使って私に中傷  
a good turn, so they sent the seagull to me

傷した事や、オタシユツ村の  
させたことなど、オタストウ村の  
to slander the villagers, and how the chief

村長が斯々の言葉をとつて私に禮をのべ  
村長が様々と私に礼をのべて  
of the village of Otasutu expressed gratitude to me in various ways

幣つきの酒箸が使者になつて来た事など  
削り掛けの付いた棒酒箸が伝言を伝えに来たことなど  
in the message that the kike-us-pasui related, and so on.

詳しく物語ると、神たちは  
詳しく話すと、神々は  
When I spoke of these things in detail, the gods

一度に揃つて打ちうなづきつゝ  
みなそろって合いづちをうち感嘆の声をあげ、  
all nodded and exclaimed in admiration

私をほめたゝへた。  
次々に私をほめたたえた。  
and commended me.

それからまた、盛な宴をはり  
それからまた、極上の酒で宴を開き  
After that, once again we had a feast with the finest wine,

神たちの、其處に  
神々が宴の上座や  
and the sound of the gods dancing and prancing

此處に舞ふ音躍る音は  
宴の下座で舞う音や踊る音が  
at the seat of honor and at the guest seat

- 177 トウヌニタラ、チサウタリ ニマラハ  
 tununitara, / chisautari / nimaraha  
 tununitara, ci=sa-utari nimaraha  
 美しく響く 私・～の姉たち ～の半数
- 178 アンプンタリ アンパ カネ チクアソウトウル  
 anipuntari / ampa kane / chikupshoutur  
 anipuntari anpa kane cikupso utur  
 把手の付いた銚子 ～を持ち運ぶ(複) して 酒宴の座 ～の間
- 179 エルトウツケ、ニマラハ カムイメノクタラ  
 erututke, / nimaraha / kamuimenokutar  
 erututke, nimaraha kamuy menoko utar  
 ～ににじり寄る ～の半数 神 女 たち
- 180 エウタンネ ヘチリ ハウエ トウヌニタラ。  
 eutanne / hechiri hawe / tununitara.  
 ewtanne heciri hawe tununitara.  
 ～と仲間になる 歌や踊り ～の声 美しく響く
- 181 トウツコ レレコ シラン コ イク アオケレ。  
 Tutko rerko / shiran ko / iku aokere.  
 tutko rerko siran ko iku a=okere.  
 二日 三日 経つ すると 酒宴 人・～を終える
- 182 カムイウタラ ピリカ イナウ トウブ レブ ランケ  
 Kamuiutar / pirka inau / tup rep ranke  
 kamuy utar pirka inaw tup rep ranke  
 神 たち 美しい 御幣 二つ 三つ ずつ
- 183 チコロパレ コ カムイウタラ イツケウノヨキ  
 chikorpare ko / kamuiutar / ikkeunoshki  
 ci=korpore ko kamuy utar ikkew noski  
 私・～に～を すると 神 たち 腰 ～の真ん中  
 あげる(複)
- 184 コムコサンパ、オンカミロク オンカミロク、  
 komkosanpa, / onkamirok / onkamirok,  
 komkosanpa, onkami rok onkami rok,  
 さっと曲げる 礼拝する して(複) 礼拝する して(複)
- 185 オピッターノ ウンチセヘ コヘコンパ。  
 opittano / unchisehe / kohekompa.  
 opittano un-cisehe kohekompa.  
 みんな ～の住む家 ～へ戻る(複)
- 186 オカケヘタ ランマカネ タンネ ユピ イワン ユピ  
 Okakeheta / rammakane / tanne yupi / iwan yupi  
 okakehe ta ramma kane tanne yupi iwan yupi  
 ～の後 で いつものように 長い 兄 六人の 兄
- 187 タンネ サポ イワン サポ タクネ サポ イワン サポ  
 tanne sapo / iwan sapo / takne sapo / iwan sapo  
 tanne sapo iwan sapo takne sapo iwan sapo  
 長い 姉 六人の 姉 短い 姉 六人の 姉

美しき響をなし、姉様たちは  
 美しく響いた。姉たちのうちのある者は  
 echoed beautifully. Some of my elder sisters

提子を持つて席の間を酌して  
 お銚子を持って座の間を  
 brought little wine bottles and went from seat to seat

まはるもあり、女神たち  
 お酌してまわった。またある者は女神たち  
 pouring wine. The rest of my sisters mixed

と共に美しい聲で歌ふもある。  
 とうちとけ合って、歌ったり踊ったりする声が美しく響いた。  
 with the goddesses and sang and danced, their voices echoing beautifully.

二日三日たつて宴を閉じた。  
 2～3日たつて宴は終わった。  
 After two or three days, the feast ended.

神々に美しい幣を二つ三つづゝ  
 神々に美しい御幣を二、三本ずつ  
 When I gave each of the gods two or three

上げると神々は腰の央を  
 渡すと、神々は腰のまん中を  
 inau, the gods quickly bent themselves over

ギツクリ屈めて何遍も何遍も禮をして、  
 さっと曲げて何度も何度も礼をして、  
 at their waists again and again in thanks.

みんな自分の家に立歸つた。  
 全員自分の家に戻っていった。  
 Then they all returned to their own homes.

そのあと、何時でも同じく長い兄様六人の兄様  
 その後、いつものように丈の長い兄、六人の兄  
 After that, I lived on as always with my tall elder brothers, six elder brothers,

長い姉様六人の姉様短い姉様六人の姉様  
 丈の長い姉、六人の姉、丈の短い姉、六人の姉  
 my tall elder sisters, six elder sisters, my short elder sisters, six elder sisters,

- 188 タクネ ユピ イワン ユピ トウラ オカヤシ。  
 takne yupi / iwan yupi / tura okayash.  
 takne yupi iwan yupi tura okay=as.  
 短い 兄 六人の 兄 と共に いる(複)・私
- 189 アイヌピトウタラ サケカラ コ ピシノピシノ  
 Ainupitoutar / sakekar ko / pishnopishno  
 aynu-pito utar sake kar ko pisno pisno  
 人間 たち 酒 ~を作る すると そのたびごとに そのたびごとに
- 190 ウンノミ ウン オルン イナウエプンパ ランケ、  
 unnomi / un orun / inaupumpa ranke.  
 un=nomi un=or un inaw epunpa ranke.  
 私・~を祭る 私・~の所 へ 御幣 ~を差し出す(複) たびたび~する
- 191 タネ アナクネ アイヌピトウタラ ネプ エルスイ  
 Tane anakne / ainupitoutar / nep erushui  
 tane anakne aynu-pito utar nep e rusuy  
 今 は 人間 たち 何 ~を食べる ~したい
- 192 ネプ エランナクペ カ イサムノ ラッチタラ  
 nep erannakpe ka / isamno / ratchitara  
 nep erannak pe ka isam no ratcitora  
 何 ~に困る もの も ない で 平穩に
- 193 オカイクス、チエラムシンネ フ オカヤシ。  
 okaikushu, / chieramushinne wa okayash.  
 okay kusu, ci=eramushinne wa okay=as.  
 暮らす(複) ので 私・~に安心する して いる(複)・私

短い兄様六人の兄様と一しよにみ、  
 丈の短い兄、六人の兄と一緒に私は暮らした。  
 and my short elder brothers, six elder brothers.

人間たちが酒を造るとその度毎に  
 人間たちが酒を造ると、そのたびごとに  
 Every time the humans brew wine,

私に酒を送り私のところへ幣をよこす。  
 私にうやうやしく酒を造り、私の所に御幣を送り続ける。  
 they respectfully continue to send wine and inau to me.

今はもう、人間たちも食物の不足も  
 今はもう人間たちは何を食いたいとも  
 And now the humans live peacefully,

何の困る事も無く平穩に  
 何に困ることもなく平穩に  
 eating all the food they want

暮してゐるので、私は安心をしております。  
 暮らしているので、私は安心しています。  
 and free of all worries, and my mind is at ease.

## 〔言葉の説明〕

## ・イワン コソソテ オパンネレ iwan kosonte opannere (96～97行目)

イワン コソソテ iwan kosonte は「6枚の小袖」。コソソテ kosonte は日本語の「小袖」から。この場合、6は「沢山」を表わす数。コソソテは、「立派な男性の着物」という意味。オパンネレ opannere は < o-pan-ne-re (で・下方・になる・させる) → を羽織る。

これと似た言葉に オパンナアッテ opannaatte があります。これは < o-pan-na-atte (で・下・方・に掛ける) → で羽織る。

## ・エカシパウンペ キムイラリレ ekas paunpe kimuyrarire (97～98行目)

エカシ ekas は「祖父」。エカシ ekas は親族関係をあらわす言葉。「おじいさん」と親しみや呼びかけの言葉は、エカシ ekasi。パウンペ paunpe は < pa-un-pe (頭・にはめる・もの) → 冠かんむり。キムイラリレ kimuyrarire < kimuy-rari-re (頭・を押さえる・させる) → をかぶる。全体で「祖父(祖先)の冠をかぶる」。

## ・カムイランケタム シトムシ kamuy ranke tam sitomusi (98行目)

カムイ ランケ タム kamuy ranke tam は「神が・～を降ろす・刀」→ 神が降ろした刀→ 神からいただいた刀。シトムシ sitomusi は < si-tom-usi (自分・中ほど・に付ける) → 腰に付ける。

## ・テクリキクル プニ tekrikikur-puni (99行目)

テクリキクルプニ tekrikikurpuni は、< tek-riki-kur-puni (手・高い所・虚辞・を持ち上げる) → 手を高く持ち上げる。

## ・ネイケ タツネ neike tapne (102行目)

ネイケ neike は「どこ」。タツネ tapne は強調。ネイケ タツネ ～アリ ハウオカイ アワ neike tap ne ~ ari hawokay aw a で「いったいどこが～と言う話なのか」。

## ・フシコトイ ワノ husko toy wano (105行目)

「はるか昔から」という意味の慣用句。遂語訳は フシコ トイ ワノ husko toy wano で「古い・土地・から」だが、トイ toy は、強調の「ひどく」という意味もあるので、「ずっと古くから」。

## ・イコロソツカラネ コロ カムイ ポソミ サツテ

## ikor sokkar ne kor kamuy posomi sapte (106行目)

イコロ ソツカラ ネ コロ ikor sokkar ne kor は、「最上の家宝・として・持つ」。カムイ ポソミ kamuy posomi は、「神の刀」。ポソミ posomi は、日本語の「細身」から。

## ・チシクサマ チイクルレ ci=siksama ciikurure (111行目)

シクサマ siksama は < sik-sama (目・のそば)。チイクルレ ciikurure は、< ci-i-kuru-re (～される・もの・を打つ・させる) → ものに当たる。全体で、「私の目のそばが打たれる」

→私の目のそばに気配を感じる。

## ・カンパスイカン モムナタラ kan pasuy kan momnatara (113行目)

カン パスイ kan pasuy は「(杯)の上の捧酒箸」。次のカン kan は、特に意味をもたない音節調整のための虚辞。モムナタラ momnatara は < mom-natara (流れ漂う・持続) → 漂っている。全体で「金かねの杯の上の捧酒箸が漂っている」。杯に酒があふれるほど注がれているため、その上に置かれた箸が、漂っていること。酒がなみなみと注がれていることをいい表わしたもの。

## ・ホシピ ランケ hosipi ranke (116行目)

ホシピ ランケ hosipi ranke は「帰る・くり返し」→ 行きつ戻りつする。これは捧酒箸で祈り言葉を言うときの動作をいい表わしているものと思われます。祈り言葉を述べるときは、捧酒箸に酒をつけて、「上下に揺らすようにする」。この動作を、行きつ戻りつすると表現したものでしょう。

## ・オリパカシ ヤッカ パスイエプニ アキ シリネナ

## oripak=as yakka pasuy epuni a=ki siri ne na (118行目)

オリパカシ ヤッカ oripak=as yakka は、「私たちはおそれ慎しみながらも」。パスイ エプニ pasuy epuni は「捧酒箸・で(お酒)を差し上げる」。アキ シリ ネ ナ a=ki siri ne na は「私・をする様子ですよ」→ (箸でお酒を差し上げること) をするのですよ。

文末の ナ na は、相手に理解や同意を訴えるもので、「私たち村人はおそれ慎しみながらも、私は捧酒箸でお酒を差し上げるのでございますよ(この気持をどうぞ分って下さい)」という意味。

村長の語りは、第一人称を チ ci=、ウン un=、アシ =as で表わしているが、このアキ a=ki だけは、チ ci= ではなく ア a= で表わされています。引用文の中では ア a=、アン =an が用いられるので、このアキ a=ki は、「私は(捧酒箸で)お酒を差し上げます」という意味で、チ ci=、アシ =as の部分は「私たちはおそれ慎みながら」というように使い分けられていると考えられます。

## ・コツチャケネ kotcake ne (120行目)

コツチャケ kotcake は、コツチャ kotca (前)の所属形。コツチャ kotca は空間的なものの「前」を表わします。動くもの前は、エトク etok。この場合は、村人全員の前(空間的な)なのでコツチャ kotca。コツチャケ kotcake で「(村人全員)の前」→「(村人全員)の代表」。ネ ne は、「として」。代表として。

## ・ペ タン pe tan (126行目)

文末に ペ タン pe tan と来て、「(誰が私たちをあわれんでくれる)でしょうか」と反語的な意味になります。

## ・コヤヤッタサ koyayattasa (130行目)

この言葉は < ko-yayattasa (～に・返礼する)。yayattasa は < yay-ar-tasa (自ら・片方・



と交換する) 自分の方から片方を返す→返礼する。

・カニ トウキ プライカ ウン チアンテ kani tuki puray ka un ci=ante (137 行目)

これは「金かねの・杯を・窓の上・へ・私は・置く」という意味。139～140行目に、ネア トウキ パスイ トウラノ オアラリサム nea tuki pasuy turano oarar isam (その杯は、捧酒箸と共に全くななくなっていた)とあります。これは何を意味するのでしょうか。おそらく、これは、人間界へ杯と箸を送り返したことを表わしているのでしょう。

・レタラ ウララ エトウシナツキ retar urar etusnatki (144 行目)

レタラ ウララ retar urar は「白いもや」。エトウシナツキ etusnatki は「～にたなびく」。白いもやがたなびく。

・アンラマス チウエスイエ an=ramasu ci=uesuyue (145 行目)

アンラマス anramasu は、本来は アネラマス an=eramasu の形だったが、何らかのために e が落ちて アンラマス an=ramasu になったと考えられています (田村辞典による)。アネラマス an=eramasu (人が・を好ましく思う)→好ましい。ウエスイエ uesuyue は、< u-e-suyue (共に・～で・を揺らす)→で (心を) 共に揺らす→で心をゆさぶられる。に感動する。全体で「好ましいと感動する」。

・ウコオハハセ エチウ uko-ohapse-eciw (162 行目)

ウコオハハセエチウ uko-ohapse-eciw は、< uko-o-hap-se-eciw (一緒に・～で・ほめる声・言う・ひたむきに)→みなで (おいしいと) ほめそやす。エチウ eciw の元の意味は「頭が刺さる」→床に額が付くくらい (刺さる) 一生懸命する。→ひたむきになる。

・チクァノシキ オマン cikup noski oman (163 行目)

チクァ cikup は < ci-ku-p (人・を飲む・こと) 酒を飲むこと。宴会。ノシキ noski は「中央」。チクァ ノシキ cikup noski で「宴がピークに達すること」「宴たけなわ」。オマン oman は「行く。進む」。全体で「宴がたけなわに進む」。

・ウンケシケ クス unkeske kusu (167 行目)

ウンケシケ unkeske で「それをねたむ」。クス kusu は「～の故に」。それをねたんで。ケシケ keske は、< kes-ke (末端・他動詞化)→末端にする→ひどく扱う→ねたむ、か。ウン un は、ここでは目的語を減らす接頭辞 (un-) とみなしましたが、もしかしたら単純に人称接辞 ウン un= (私を) と考えることができるかもしれません。

・ウンケウトウムウエンテ un=kewtumwente (167 行目)

これは < un-kewtum-wen-te (私に・心・悪い・させる)→私の心を悪くさせる→私を怒らせる。

・イリヘツチェハウ イリフムセハウ ウコトウルパ

ir hetce haw iri humse haw ukoturpa (172 行目)

イリ ヘツチェ ハウ ir hetce haw は「一連らなりの掛け声」。イリ フムセ ハウ iri humse haw は「一連らなりの感嘆の声」。

ウコトウルパ ukoturpa は「一緒に伸ばす」。全体で「みな合づちを打ち、感嘆の声を一緒に伸ばす」。二度目の iri の後の i は、無い方がよいので、もしかすると誤植かもしれません。

・イラムイエ ハウエ カリ iramye hawe kari (173 行目)

イラムイエ iramye は < i-ramye (人を・ほめる) ほめる。カリ kari は「を回らす」。全体で「ほめる声が回わる」→「(神々が) 次々にほめそやす」。

・ニマラハ nimaraha (177 行目)

ニマラハ nimaraha は、ニマラ nimar の所属形の長い形で「半数」という意味。ここでは、ニマラハ～ ニマラハ～ nimaraha～nimaraha～と使われていて「半数は～(をし)、半数は～(をやる)」という意味。しかし、この nimar(aha) という語は、厳密に半数 (半分) を表わしているわけではなく、場合によっては「或る者は～をし、或る者は～をやる」というように訳すこともあり、このテキストでも、むしろそちらに近い意味のようですか。それが分れば、この言葉の本当の意味がつかめます。

この言葉は、nimar < ni-ar (木・片側) が語源で、i-a と母音がつながるので渡り音がアイヌ語の場合入りやすい。そして、渡り音 w が入り、それが少し強く発音され m となって、nimar になったと考えられます (y の渡り音だと niyar 「木の皮」となり、それとの混同をさけた)。語源が「木の片側」「木の片方」→片方、なので、「半数」とか「一方 (或るもの)」となったものではないでしょうか。

・エルトウツケ erututke (179 行目)

この言葉は、エルトウツケ erututke < e-rut-rut-ke (～に・ずるつという擬態語・くりかえし・自動詞化)→にずるずるとする→～に (座って) ずり寄る。酒を酌ぐときに、人々にじり寄ること。

・ヘチリ heciri (180 行目)

ヘチリ heciri は、歌と踊りが一体となったもの。興に乗って、手拍子をうち掛け声をかけ、10～20人で楽しく歌い踊るもの (知里真志保著作集2 P.93)。北海道南西部では、リムセ rimse や ウポホ upopo と同意語といえます。

・ピシノピシノ pisno pisno (189 行目)

ピシノ pisno で「一つずつ」「～ごとに」。ピシノピシノ pisno pisno で「そのたびごとに」。

〔参考〕

難語、不明語を検討してみます。参考までに。

### ・イコロソツカラネ ikor sokkar ne (106 行目)

イコロ ソツカラ ikor sokkar で「最上の家宝」という意味。しかし、ソツカラ sokkar という言葉が分かりません。イコロ ikor は「家宝」という意味。ソツカラ sokkar が付くと、「最上の」という意味が加わります。この言葉はソツカラ sotkar ともいわれます (久保寺辞典)。そこで次のように考えてみました。

sotkar を < sotki-kar (寝床・を作る) と分析し、全体で「宝物の寝床を作る」。久保寺辞典のこの語の所に、「ikor suop (宝物の箱) の一番下に入れて置く、最上の宝として秘蔵する」という説明が入っています。箱の一番下に入れて置く、とは、寝床を作ってそこに置くことではないでしょうか。ソツキ sotki とは、単なる寝床ではなく、その家の主人の寝床という意味もそれを裏うちするかもしれません。音としては、ソツキカラ sotkikar が縮約されて→ sotkar または sokkar になったと考えてみました。

神剣 (カムイ ポソミ kamuy posomi) は、神格 (人格と同じような) のあるものなので寝床を作ってお休みいただく (箱にしまうのではなく) と考えたのではないのでしょうか。

### ・ソモオヤベ somo oya pe (123 行目)

オヤ oya は「他のものである」。ソモ オヤ ベ somo oya pe で「他ではないもの」。(大切な神さま、神の勇者) をおいて (飢えに苦しんでいる私たちをあわれんでくれるものは) 他にいない、ということ。しかし、oya のように母音の後には p (pe ではなく) が来るのが普通ですが、ここでは pe になっています。5 音節にするよう音節数をふやしたためでしょうか。

### ・コタマ kotama (130 行目)

このコタマ kotama (～に～を加える) と似た言葉に コタムケ kotamke (～に～をおまけにつける) があります。

ko は「～に対して」という意味なので、tam に「加える」という意味がありそうです。tam < tap (肩) と考えてみました。肩を動詞化 (ke または、他動詞化母音 a) して「のせる」「加える」になったと考えれば、kotama も kotamke も理解できるようです。

p 音が弱く発音され m 音になる例は他にも多くあります。p よりも m の発音の方がエネルギーを軽減できるからです。言葉が頻度高く使われるにつれ、省エネ化していく傾向があります。

例；テスマ tesma (かんじき) < tespa (くり返し反らせる)。おそらく元は ci=tespa (反らされたもの)。ラマニ rarmani (イチイ[植物]) < rarpa ni。これも元は ci=(または a)=rarpa ni (くりかえし押しつけられた [弓なりにされた] 木) でしょう。ただし、この逆の m → p の場合もあります。この場合は、アクセントと関係するのかもしれませんが。

### ・エトウシナツキ etusnatki (144 行目)

知里幸恵はエトウシナツキ etusnatki を「たなびく」という意味に訳しています。どの辞典にもこの言葉は出ていませんが、唯一久保寺辞典に「むらむらと立ちこめる」と出ています。いったいこの言葉は、元来どんな意味をもっているのでしょうか。

アツキ -atki は、自動詞を作る語。その前に擬態 (音) 語が来ます。エ e は「～で」という意味。残る tus (n は挿入音) は、「ブルブル震える」ことを表わす擬態語。するとエトウシナツキ etusnatki は「～でくり返しふるえる」とか「ゆらゆら揺れる」という意味にとれます。これは「たなびく」とよく似ています。「白いもやがゆらゆら揺れる」ことではないでしょうか。

## コラム (12)

### シャチはなぜ海の神なのか？

シャチは、アイヌ語でレプン カムイ repun kamuy (沖の神) といわれます。知里幸恵はこれを「海の神」と訳しています。たしかに、ヒグマが山の神 (キムン カムイ kimun kamuy) であるのに対して、海を代表する神は、シャチなのです。しかし、海には、もっと大きなクジラもいれば、セイウチ、トドなどの巨大海獣もいます。なぜ海を代表する神がシャチなのでしょう。

シャチは、英語で killer whale (殺し屋クジラ) といわれます。最近では、この言葉を嫌ってオルカと呼ばれることが多いです。とはいえ、シャチは「海のギャング」とも呼ばれ、あまりいいイメージを持たれていません。しかし、アイヌの人々は、シャチを海の神さまとして海では最も位の高い神として扱いました。それはなぜでしょうか。答えは実に明解。クジラを陸に追い上げてくれるからです。巨大な食糧 (肉) を運んでくれるのでシャチは海の中で最も尊い神さまとされたのです。一方、クジラは、神としては扱われず、シャチの与えてくれる海幸 (獲物) という扱いでしかないのです。

この物語の中には、シャチの様々な生態が描写されています。興味深いことに、最近急速に進んだシャチの科学的な研究成果とよく一致する点が幾つもあるのです。その幾つかを以下に紹介してみます。

#### ① 主人公の幼いシャチは、24 頭の兄や姉のシャチと暮らしているという点について。

最近、シャチの体の模様が一頭ずつ異なっていることを使って個体識別を行い、その個々の行動が明らかにされてきました。そして、シャチは 3～25 頭くらいの群 (ポッドという) をつくって暮らしていることがアメリカやカナダの研究で分かりました。

#### ② 兄や姉シャチが群で狩りを行っているという点について。

研究結果でも、シャチはグループ・ハンティング (群れによる狩り) を行っていることが分かりました。

#### ③ 輪をつくってそこに追い込む描写が出てくる点について。

これも同じで、シャチが獲物のまわりを丸く囲んで捕ることがアメリカやノルウェーの

シャチ研究で明らかになりました。

④ 「自分の海」に帰ってくる描写がある点について。

シャチの群れにはレジデント（滞在）型とトランジェント（通過）型の2つの種類があり、レジデント型のシャチは自分の海域をもって暮らしています。またトランジェント型のシャチも、本拠地となる自分の海域を持っています。

⑤ クジラの半分とか1つ半という描写がある点について。

シャチは、強力なアゴと頑丈な歯で、くり返し噛んだり振り回したりして大型のクジラでさえも小さく食いちぎってしまうので、半分にすることも可能です。このように猛烈な力をもったシャチですが、不思議なことに海で出会ってもサメのように人間を襲わないといえます。水族館でもシャチは実によく人間に慣れます。背中に人を乗せて水中を泳いだり空中を跳んだりします。こうしたことからシャチは人間に好意をもち、食糧を運んでくれるととらえられたのかもしれませんが。

⑥ 79行目で、シャチの泳ぎについて「海の上でゆったり潜ったり、とびはねたりしながら」と出てくる点について。

シャチは実はクジラの仲間で、ゴンドウクジラ科に属しています。4～8分くらいの潜水をしては、海上に頭を出して呼吸します。そして最も特徴的なのは、水面上に跳躍（ブリーチング）することです。体全体が海上にとび出す実に勇壮な跳躍です。

⑦ 50～51行目にクジラを浜に押し上げることが出てくる点について。

シャチに追われたクジラは、よく浜に打ち上げられます。シャチは50mほどの幅で横一列になってクジラを巧みに追いこんで行きます。その際、何種類もの音を発して追い込むことが分かっています。海の世界の頂点に立つシャチは、高度なハンティング能力を持っています。強烈な破壊力のある歯をもちながらも人間を襲わないで、巨大な食糧となる鯨を運んでくれるシャチは、まさに「海の神さま」なのです。

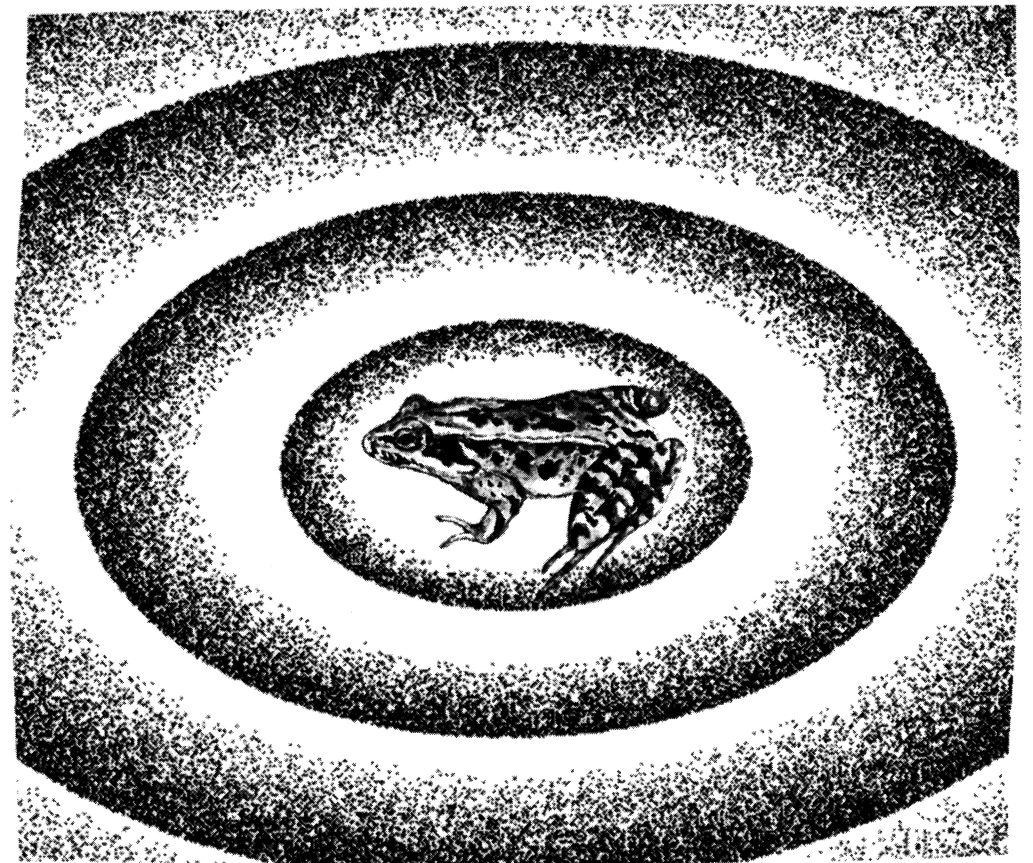
9

カエルが自らうたった謡

「トーロロ ハンロク ハンロク」

terkepi yayeyukar

Song sung by frog god



## 第9話

### カエルが自らをうたった謡

#### 「トーロロ ハンロク ハンロク」

##### 〔物語とその背景〕

これはカエルのでき心が自らの不幸を招いた物語のようです。

ある日、草の原を跳びながら遊んでいた私（カエル）は、一軒の家を見つけた。その家の戸口からのぞいてみると一人の若者が一生懸命刀の鞘を彫っていた。私は、この若者に悪いいたずらをしかけてやろうと思った。そして「トーロロ ハンロク ハンロク」と鳴いた。仕事に夢中になっている若者がいきなり大きな鳴き声がしてびっくりするかと思ったら、その若者はニコニコしながら、「それは、あんたのユーカラかい、それとも酒歌かい。もっと聞きたいね」といった。私は嬉しくなって、また鳴くと、もっと近くで聞きたいと若者はいう。ますます嬉しくなった私は、下座近くの炉縁に乗ってまた鳴いた。すると若者はもっと近くで聞きたいという。本当に嬉しくなった私は、上座近くの炉縁に乗ってまた鳴いた。すると、突然若者は立ちあがり大きな薪の燃えさしを私めがけて投げつけた。私は腕に強い衝撃を受けたさき意識を失った。そして、しばらくして気がついてみると、一匹の腹のふくれたカエルが外の灰捨て場のはじめで死んでいて、私はその耳と耳の間に座っていた。その家をよく見てみると、それはただの人間の家ではなく神のように勇ましいオオキリムイの家だった。私は、オオキリムイだとも知らずにバカにして悪いいたずらをしかけたのだった。こうして今はもうつまらない死を私はとげることになったが、これからのカエルたちよ、決して人間をバカにしてはならないぞ、と言いながら腹のふくれたカエルは死んでしまった。

今の私たちの感覚からすると、カエルが人間をバカにして驚かそうと鳴いたくらいで殺されるのは、なんだかかわいそうな気がしてしまいます。そういう気持ちでいるかぎりこの物語にあまり共感はできないでしょう。どこにこの物語の真意があるのでしょうか。

実は、カエルは、言い伝えの中で嫌われもの最たるものの一つなのです。どの伝承をみてもカエルは忌み嫌われる存在として登場します。それは、この世で悪業を重ねた人間があの世界（地下世界）でひどい仕打ちを受けて、たとえまたこの世に生き返ってきてもカエルにされてジメジメした湿地で跳ねまわっていると考えられているからです。そのためカエルがソソソと家の中に入ってきたりすると頭から熱い灰をぶっかけて追い出してしまうといいます。

こうした背景があるために、この物語でもカエルが家の中に入ってくると最後には、殺されて灰捨て場で腹のふくれた無残な姿で横たわる結果になるのです。

なぜカエルは嫌われものなのでしょう？ その理由は、カエルの姿もさることながら、なによりもジメジメした沼地と関係しているのではないのでしょうか。アイヌの人々の最も恐

れるのは、仏教でいう地獄に相当する「テイネ ポクナ モシリ teyne pokna mosir（ジメジメした地下世界）」に行くことです。つまり最も忌み嫌われる場所は、ジメジメした湿地のような場所なのです。その住人（カエル）は、悪を重ねてあの世界にも行けず浮ばれないでそこにいるのだと考えられています。そのためカエルが家に一步でも入ろうものならば、魔を祓う力をもつと考えられている灰（しかも熱い）をぶっかけられ頭を踏みつぶされてしまうのです。つまりカエルの存在の背後に、この世で何人もの人を殺して悪の限りをつくしたどうしようもない者（人に化身した魔物）がダブっているのです。

テレケピ ヤイエユカラ、「トロロ ハンロク ハンロク！」  
 Terkepi yaieyukar, “Tororo hanrok, hanrok!”  
 terkepi yayeyukar, “tororo hanrok, hanrok!”  
 カエル 自らを物語る トロロ ハンロク ハンロク

蛙が自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」  
 カエルが自らを歌った謡「トーロロ ハンロク ハンロク！」  
 Song Sung by the Frog God "Tororo hanrok hanrok!"

- 1 トロロ ハンロク、ハンロク！  
 Tororo hanrok, hanrok!  
 tororo hanrok, hanrok!  
 トロロ ハンロク ハンロク
- 2 シネアントタ ムントウム ペカ テレケテレケアシ  
 Shineantota / muntum peka / terketerkeash  
 sinean to ta mun tum peka terketerke=as  
 ある 日に 草 中 を 跳び跳びする・私
- 3 シノタシコロ オカヤシ アイネ インカラシ アワ、  
 shinotashkor / okayash aine / ingarash awa,  
 sinot=as kor okay=as ayne inkar=as awa,  
 遊ぶ・私 しながら いる(複)・私 したあげく 見る・私 したところ
- 4 シネ チセ アン ワクス アパパケタ パイエアシ ワ  
 shine chise / an wakusu / apapaketa / payeash wa  
 sine cise an wakusu apa pake ta paye=as wa  
 一軒の 家 ある したので 戸口 ~の上手に 行く(複)・私 して
- 5 インカラシ アワ、チセウアソツタ イキツウカリ  
 inkarash awa, / chiseupshotta / ikittukari  
 inkar=as awa, cise upsor ta ikir tukari  
 見る・私 したところ 家 ふところ で 列 ~の手前
- 6 チトウイエアムセツ チシレアヌ。アムセツ カタ  
 chituyeamset / chishireanu. / Amset kata  
 ci-tuye amset ci-sireanu. amset ka ta  
 される・~を切る 寝台 される・~を辺りに置く 寝台 ~の上に
- 7 シネ オツカイポ シリカヌイエ コキブシレチウ  
 shine okkaipo / sirkanuye / kokipshirechiu  
 sine okkaypo sirka nuye ko-kip-sir-eciw  
 一人の 若者 刀の鞘の表 ~に彫刻する ~で額を地面に突き刺す
- 8 オカイ チキ チララ クス トンチカマニ カタ  
 okai chiki / chirara kusu / tonchikamani kata  
 okay ciki ci=rara kusu toncikamani ka ta  
 いる(複) したら 私・~に ために 敷居 ~の上に  
 いたずらする
- 9 ロカシ カネ。「トロロ ハンロク、ハンロク！」 アリ  
 rokash kane. “Tororo hanrok, hanrok!” ari  
 rok=as kane. “tororo hanrok, hanrok!” ari  
 座る(複)・私 して トロロ ハンロク ハンロク と

トーロロ ハンロク ハンロク！  
 トーロロ ハンロク ハンロク！  
 Tororo hanrok hanrok!

「或日に、草原を飛廻つて  
 「ある日、草はらをピョンピョンとびながら  
 One day, I was hopping playfully

遊んでゐるうちに見ると、  
 遊んでいて、ふと見ると  
 across the meadow, and when I looked,

一軒の家があるので戸口へ行つて  
 一軒の家があったので戸口に行つて  
 I saw a house. When I went

見ると、家の内に寶の積んである側に  
 みると、家の中の宝壇の手前に  
 to the doorway, I saw near the house's pile of treasures

高床がある。其高床の上に  
 別造りの高床があった。その高床の上で  
 a separately-made bed. Atop the bed,

一人の若者が鞘を刻んでうつむいて  
 一人の若者が刀の鞘刻みに夢中になって  
 a young man was immersed in carving sword scabbards,

ゐたので、私は悪戯をしかけようと思つて敷居の上に  
 いたので、私はいたずらをしてやろうと思つて敷居の上に  
 so deciding to play a wicked trick on him, I sat above

坐つて、「トーロロ ハンロク ハンロク！」と  
 座つて、「トーロロ ハンロク ハンロク！」と  
 the threshold and cried, "Tororo hanrok hanrok!"

- 10 レカシ アフ、ネア オツカイポ タム タララ  
 rekash awa, / nea okkaipo / tam tarara  
 rek=as awa, nea okkaypo tam tarara  
 鳴く・私 したところ その 若者 刀 ~を上にあげる
- 11 ウンヌカラ アフ、サンチャ オッタ ミナ カネ、  
 unnukar awa, / sancha otta / mina kane,  
 un=nukar awa, sanca or ta mina kane,  
 私・~を見る したところ 口元に笑みを浮かべて
- 12 「エユカリ ネ ルウエ? エサケハウエ ネ ルウエ?  
 “Eyukari ne ruwe? / esakehawe ne ruwe?  
 “e=yukari ne ruwe? e=sakehawe ne ruwe?  
 お前・~のユーカラ ~である のか お前・~のサケハウ ~である のか
- 13 ナ ヘンタ チヌ。」 イタク ワクス  
 na henta chinu.” itak wakushu  
 na henta ci=nu.” itak wakusu  
 もっと (強調) 私・~を聞く 話す したので
- 14 チエヌペツネ、「トロロ ハンロク、ハンロク！」アリ  
 chienupetne, “Tororo hanrok, hanrok!” ari  
 ci=enupetne, “tororo hanrok, hanrok!” ari  
 私・~を喜ぶ トロロ ハンロク ハンロク と
- 15 レカシ アフ ネア オツカイポ エネ イタキ：—  
 rekash awa / nea okkaipo / ene itaki : —  
 rek=as awa nea okkaypo ene itak i : —  
 鳴く・私 したところ その 若者 このように 話す こと
- 16 「エユカリ ネ ルウエ? エサケハウエ ネ ルウエ?  
 “Eyukari ne ruwe? esakehawe ne ruwe?  
 “e=yukari ne ruwe? e=sakehawe ne ruwe?  
 お前・~のユーカラ ~である のか お前・~のサケハウ ~である のか
- 17 ナ ハンケンタ チヌ オカイ。」  
 na hankenota / chinu okai.”  
 na hankeno ta ci=nu okay.”  
 もっと 近くに (係り言葉) 私・~を聞く したいなあ(結び言葉)
- 18 ハワシチキ チエヌペツネ、オウトウルン  
 hawashchiki / chienupetne, / outurun  
 hawas ciki ci=enupetne, outurun  
 言う したら 私・~を喜ぶ 下座から
- 19 イヌンペ カタ テレケアシテク、  
 inumpe kata / terkeashtek,  
 inumpe ka ta terke=as tek,  
 炬ぶち ~の上に 跳ぶ・私 さっとして
- 20 「トロロ ハンロク、ハンロク！」 レカシ アフ  
 “Tororo hanrok, hanrok!” rekash awa  
 “tororo hanrok, hanrok!” rek=as awa  
 トロロ ハンロク ハンロク 鳴く・私 したところ

鳴いた、ところが、彼の若者は刀持つ手を上げ  
 鳴いた。すると、その若者は刀を持ち上げて  
 When I did that, the young man held up his sword,

私を見ると、ニツコリ笑つて、  
 私を見て、ニヤっと笑つて、  
 looked at me, and grinned.

「それはお前の謡かえ? お前の喜の歌かえ?  
 「それはお前の謡か? それとも、お前の喜びの歌か?  
 “Is that your chant? Or is it your song of rejoicing?

もつと聞きたいね、」といふので  
 もっとうんと聞きたいね」というので  
 Let's hear some more," he said, so

私はよろこんで「トーロロ ハンロク ハンロク！」と  
 私は嬉しくなって「トーロロ ハンロク ハンロク」と  
 pleased, I cried, "Tororo hanrok hanrok,"

鳴くと、彼の若者のいふ事には  
 鳴くと、その若者はこのように言った。  
 and the young man said as follows:

「それはお前のユーカラかえ? サケハウかえ?  
 「それはお前の謡か? それとも、喜びの歌か?  
 “Is that your chant? Or is it your song of rejoicing?

もつと近くで聞きたいね、」  
 もっと近くで聞きたいね」  
 Come closer and let me hear some more,"

私はそれをきいて嬉しく思ひ下座の方の  
 と言うので、私は嬉しくなって下座の方から  
 he said, so happily I hopped from the guest seat

爐縁の上へピヨンと飛んで  
 炉縁の上にピヨンと跳んで、  
 to the top of the hearth frame

「トーロロ ハンロク ハンロク！」と鳴くと  
 「トーロロ ハンロク ハンロク！」と鳴くと、  
 and cried, "Tororo hanrok hanrok!"

- 21 ネア オツカイポ スイ エネ イタキ：——  
nea okkaipo shui / ene itaki : ——  
nea okkaypo suy ene itak i : ——  
その 若者 また このように 話す こと
- 22 「エユカリ ネ ルウエ? エサケハウエ ネ ルウエ?  
“Eyukari ne ruwe? / esakehawe ne ruwe?  
“e=yukari ne ruwe? e=sakehawe ne ruwe?  
お前・～のユーカラ ～である のか お前・～のサケハウ ～である のか
- 23 ナ ハンケノタ チヌ オカイ」 ハワシ チキ、  
na hankenota / chinu okai” hawash chiki,  
na hankenota ta ci=nu okay” hawas ciki,  
もっと 近くで (係り言葉)私・～を聞く したいなあ 言う したら
- 24 シノ チエヌペツネ、ロルニヌンペ  
shino chienupetne, / roruninumpe  
sino ci=enupetne, rorun inumpe  
本当に 私・～を喜ぶ 上座の 炉ぶち
- 25 シツケウエタ テレケアシテク、  
shikkeweta / terkeashtek,  
sikkewe ta terke=as tek,  
～のかど に 跳ぶ ・私 さっとする
- 26 「トロロ ハンロク、ハンロク！」 レカシ アワ  
“Tororo hanrok, hanrok!” / rekash awa  
“tororo hanrok, hanrok!” rek=as awa  
トロロ ハンロク ハンロク 鳴く・私 したところ
- 27 アレクシコンナ ネア オツカイポ マツケ フミ  
arekushkonna / nea okkaipo / matke humi  
arekuskonna nea okkaypo matke humi  
全く突然 その 若者 バツと立つ ～の音
- 28 シウコサヌ、ホントモタ シ アペケシ  
shiukosanu, / hontomota / shi apekesh  
siwkosanu, hontomo ta si apekes  
シュツと音がする ～するとすぐに 大きな 燃えさし
- 29 テクサイカリ ウンカウン エヤブキリ フミ  
teksaikari / unkaun / eyapkir humi  
teksaykari un=ka un eyapkir humi  
～を手に取る 私・～の上 へ ～を投げる ～の感じ
- 30 チエモネトク ムッコサヌ、パテクネテク  
chiemonetok / mukkosanu, / pateknetek  
ci=emonetok-mukkosanu, patek ne tek  
私・～で手の先がさっとふさがる そればかり ～である して
- 31 ネコナ ネヤ チエラミシカレ。  
nekona neya / chieramishkare.  
nekona ne ya ci=eramiskare.  
どのように ～である か 私・～がわからない

彼の若者のいふことには  
その若者は、またこう言った。  
and once again the young man said,

「それはお前のユーカラかえ? サケハウかえ?  
「それはお前の謡かい? それとも、喜びの歌かい?  
"Is that your chant? Or is it your song of rejoicing?

もつと近くで聞きたいね。」それを聞くと私は  
もつと近くで聞きたいね」と言うので、  
Come even closer and let me hear some more."

本当に嬉しくなつて、上座の方の爐縁の  
本当に嬉しくなつて上座にある炉縁  
Truly pleased, I hopped to the hearth frame

隅のところへピヨンと飛んで  
の角へピヨンと跳んで、  
at the head of the hearth near the seat of honor.

「トーロロ ハンロク ハンロク！」と鳴いたら  
「トーロロ ハンロク ハンロク！」と鳴くと、  
When I cried, "Tororo hanrok hanrok!"

突然!彼の若者がパツと起ち  
全く突然、その若者がパツと立つ音が  
quite suddenly, I heard the young man stand rapidly,

上つたかと思ふと大きな薪の燃えさしを  
シュツとしたかと思うと、大きな薪の燃えさし  
and before I knew it, he grabbed a big

取上げて私の上へ投げつけた音は  
をつかんで私めがけて投げつけ  
half-burned log and threw it right at me.

體の前がふさがつたやうに思はれて、それつきり  
まるで腕の先がふさがつたように感じて、それきり  
I felt a shock when the tip of my arm was struck, and that is

何うなつたかわからなくなつてしまつた。  
どうなつたか私は分からなくなつた。  
the last thing I remember.

- 32 フナクパケタ ヤイシカルナシ インカラシ アフ、  
 Hunakpaketa / yaishikarunash / inkarash awa,  
 hunakpaketa yaysikarun=as inkar=as awa,  
 どれほど経ってか 気がつく・私 見る・私 したところ
- 33 ミンタラケシタ シネ ピセネテレケピ  
 mintarkeshta / shine piseneterkepi  
 mintar kes ta sine pisene terkepi  
 家の前の ~の端 に 一匹の 膨らんでいる カエル  
 空間
- 34 ライ カネ アン コ アスルペウトウツタ オカヤシ カナン。  
 rai kane an ko / ashurpeututta / okayash kanan.  
 ray kane an ko asurpe utur ta okay=as kane an.  
 死ぬ して いる すると 耳 ~の間 に いる(複)・私 して いる
- 35 ピリカノ インカラシ アフ、ウセアイヌ ウンチセヘ  
 pirkano / inkarash awa, / useainu / unchisehe  
 pirkano inkar=as awa, use aynu un-cisehe  
 よく 見る・私 したところ ただの 人間 ~の住む家
- 36 ネ クニ チラムアプ オキキリムイ カムイ ラメトク  
 ne kuni / chiramuaup / Okikirmui / kamui rametok  
 ne kuni ci=ramu a p Okikirmuy kamuy rametok  
 ~である と 私・~を思うした のに オキキリムイ 神 勇者
- 37 ウンチセヘ ネアウオカイ コ  
 unchisehe / neawokai ko  
 un-cisehe ne awokay ko  
 ~の住む家 ~である だったのだ すると
- 38 オキキリムイ ネイ カ チエランペウテクノ  
 Okikirmui / nei ka / chierampeutekno  
 Okikirmuy ne i ka ci=erampewtek no  
 オキキリムイ ~である こと も 私・~がわからない で
- 39 イララアシ ルウェ ネアワン。  
 iraraash ruwe / neawan.  
 irara=as ruwe ne awan.  
 いたずらする・私 のである だったのだ
- 40 チオカイ アナク タネ タンコラチ トイ ライ ウエン ライ  
 Chiokai anak / tane tankorachi / toi rai wen rai  
 ciokay anak tane tan koraci toy ray wen ray  
 私 は もう この ように ひどい 死 悪い 死
- 41 チキシリ タパン ナ、テワノ オカイ  
 chikishiri tapan na, tewano okai  
 ci=ki siri tapan na, te wano okay  
 私・~をする 様子である よ これ から いる(複)
- 42 テレケピウタラ イテッキ アイヌウタラ オッタ イララ ヤン。  
 terkepiutar / itekki ainuutar otta / irara yan.  
 terkepi utar itekki aynu utar or ta irara yan.  
 カエル たち 決して~するな 人間 たち ~の所 で いたずらする しない

ふと気がついて見たら  
 やがて気がついて、見ると  
 I finally came to, and when I looked around,

芥捨場の末に、一つの腹のふくれた蛙が  
 灰捨て場のはじめに一匹の腹のふくれたカエルが  
 I saw a frog with a bloated belly lying dead at the edge

死んでゐて、其の耳と耳との間に私はすはつてゐた。  
 死んでいて、その耳と耳の間に私は座っていた。  
 of the yard, and I was sitting between its ears.

よく見ると、たゞの人間の家  
 そこで、よく見てみると、ただの人間の家  
 Then, when I took a good look, I saw that what I had thought

だと思つたのは、オキキリムイ、神の様に  
 だと思つたのは、オキキリムイ、神のような勇者  
 was the house of a mere human was actually the house

強い方の家なのであつた、そして  
 の家であつたのだ。そして  
 of Okikirmui, the godlike brave man, and

オキキリムイだという事も知らずに  
 オキキリムイだということも知らずに  
 without knowing that it was Okikirmui,

私が悪戯をしたのであつた。  
 私は悪いいたずらをしかけたのであつた。  
 I had played a wicked trick.

私はもう今此の様につまらない死方悪い死方  
 私はもうこのようにつまらない死、悪い死  
 Now I am dying a miserable death, a bad

をするのだから、これからの  
 をとげるのであるから、これからの  
 death, so I say to all you young frogs:

蛙たちよ、決して、人間たちに悪戯するのではないよ。  
 カエルたちよ、決して、人間たちをバカにしていたずらをするのではないよ。  
 you must never look down on and play wicked tricks on the humans.



43

アリ	ピセネテレケピ	ハウエアン	コロ	ライワ	イサム。
ari	piseneterkepi	hawean	kor	raiwa	isam.
ari	pisene terkepi	hawean	kor	ray wa	isam.
と	膨らんでいる カエル	言う	しながら	死ぬ して	しまう

と、ふくれた蛙が云ひながら死んでしまった。  
 と、腹のふくれたカエルが言いながら死んでしまった。  
 This was told by one dying frog with a bloated belly.

## 〔言葉の説明〕

## ・ムントウム ペカ mun tum peka (2行目)

ムン mun は「雑草」。トウム tum は、「(びっしり雑草の茂った) 中」。ペカ peka は「(線または面状の広がりのある所) で」。

## ・ララ rara (8行目)

ララ rara は「(人) を見下げる」こと。この言葉と関係する イララ irara は < i-rara (人を・見下げる) →人をバカにして悪いいたずらをする事。

## ・タム タララ tam tarara (10行目)

タム tam は「刀」。タララ tarara は < tara-ra < tara-tara (を上を持ち上げる・反復) →を持ち上げている。横にして鞘彫りをしていた刀を、手を休めて、持ち上げる事。

## ・サンチャ オッタ ミナ カネ sanca otta mina kane (11行目)

ユーカラの中によく出てくる表現。サンチャ sanca は < san-ca (出る・口) →外側の口。この場合の san (出る) はとくに意味をもたない虚辞で、音節数をふやすためとも考えられます。オッタ otta は < or-ta (所・で)。ミナ カネ mina kane (笑う・～しつつ) 笑いつつ。全体で、「口元に笑みを浮かべて」→「ニヤニヤしながら」。何か含むところのある笑い。

チャ ca (口) は、北海道東部方言。南西部では、パ pa (口) が用いられます。この場合、慣用句のため、パ pa より古いタイプのアイヌ語 チャ ca が使われているのでしょう。

## ・ユカリ yukari (12行目)

ユカリ yukari は < yukar-i (ユーカラ=歌物語・所属形を造る語)。～の謡 (うた) (所属形)。その前にエ e= (お前) が付いているので、「(お前) の謡」となったもの。ユーカラ一般ではなく、お前に所属する謡という意味。

## ・サケハウエ sakehawe (12行目)

「酒歌」といわれるもの。酒宴のときの喜びの歌。サケハウエ sakehawe は、サケハウ sakehaw の所属形。

## ・オウトウルン outurun (18行目)

これは < o-utur-un (尻・下座・にある) 尻を下座にしている、ので→下座から。

このようにオ～ウン o～un という形をもつ言葉は他にも多くあります。例：オレプン o-rep-un (沖から)、オキムン o-kim-un (山から)。反対に、エ～ウン e～un は「頭～にある」という形で、エキムン e-kim-un (山へ) という言葉をつくります。また、エ～ネ e～ne という形(頭～になる)もあり、エウトウンネ e-utur-ne (eutunne) で「下座へ(向く)」となります。

## ・アレクシコンナ arekuskonna (27行目)

これは < ar-ekuskonna (全く・突然に) 突然。全く思いがけなく。出し抜けに。

エクシコンナ ekuskonna の konna は、特に意味を持たない虚辞なので、ekus が意味を構成します。エクシ ekus 「そこを通過する」で、出合いがしらにものが横切る→出しぬけに、突然、という意味になったものでしょうか。

## ・マッケ フミ シウコサヌ matke humi siwkosanu (27～28行目)

マッケ matke は「パッと立つ」。フミ humi は「音(所属形)」。シウコサヌ siwkosanu は < siw-kosanu (擬音語・瞬間的動作を意味する動詞化語) →シュッとすること。全体で、「パッと立ち上がる音はシュッとした」→「シュッと立ち上がる」。

## ・アペケシ テクサイカリ apekes teksaykari (28～29行目)

アペケシ apekes は < ape-kes (火・末端) 火の燃えさし。テクサイカリ teksaykari は、tek-say-kari (手・輪・を回す) 手の輪をくるりと巻く→さっとつかむ。火の燃えさしをさっと手に取る。

## ・ウンカウン エヤキリ フミ チエモネトク ムッコサヌ

## un=ka un eyapkir humi ci=emonetok-mukkosanu (29～30行目)

ウンカ ウン un=ka un で、「私の上へ」。エヤキリ フミ eyapkir humi 「～を投げる感じ」。チエモネトクムッコサヌ ci=emonetok-mukkosanu は < ci-e-mon-etok-muk-kosanu (私・で・手・先・ふさがる・さっと)。知里幸恵は、このテキストの中でモン mon (手) を「体」と訳しています。「私～で手の前がさっとふさがる」。全体を直訳すると、「私の上へ(火の燃えさし)を投げた感じは、私の腕の先がそれでさっとふさがる(ようだ)」。私の上へに火の燃えさしを投げつけられて腕の先に衝撃を感じた、ということでしょう。

## ・ミンタラケシ mintar kes (33行目)

ミンタラ mintar は、「家の外のゴミ捨て場」。ケシ kes は「末端」。ゴミ捨て場の端<sup>はし</sup>。

## ・ピセネテレケピ pisene terkepi (33行目)

ピセネ pisene は、「ふくれている」。ピセ pise は、「魚の浮き袋やクマの膀胱」。ネ ne は「のようである」。腹が風船のように膨れていること。カエルの死んだときの姿。テレケピ terkepi は < terke-p-i (とぶ・もの・所属形化語) とぶもの→カエル(所属形)。カエルのことを沙流方言ではテレケイペ terkeipe (とぶ・魚) といいます。

## ・イテッキ itekki (42行目)

イテッキ itekki は イテキ iteki (決して～するな) を強調した形。< itek-ki (決して～するな・～する) か?

## 〔参考〕

## ・トロロ ハンロク ハンロク tororo hanrok hanrok (1行目)

このサケへはいったい何を意味しているのでしょうか。

知里真志保は「沼の中・にすわれ・すわれ」あるいは「あそこに・私はすわる・すわる」という意味だったようだと言っています（「ユーカラ鑑賞」）。

また、このサケへ全体がカエルの鳴き声を表わしているのではないかと考えられますが、ウサギの神謡のサケへで、これによく似たサケへがあるので、必ずしもカエルの鳴き声ともいいきれません。サケへの解説は実に難しいものです。

#### ・トンチカマニ *toncikamani* (8行目)

家の入口にある「敷居」を意味するこの言葉は、どんな構成になっているのでしょうか。いままで分析されてこなかった言葉です。そこで、こう分析してみました。

*toncikamani* < *toy-un-ci-kama-ni* (地面・につく・される・をまたぐ・木) → 地面についているまたがれる木 → 敷居。音の推移は、*toy un* → *toyun* → *toun* → *ton*、と考えられます。

#### ・ヘンタ *hen ta* (13, 17, 23行目)

この言葉もよく分かりません。ヘンタ *henta* は、ヘン タ *hen ta* と考えられます。タ *ta* はチヌ (オカイ) *ci=nu (okay)* と係り結びをつくって、「～聞きたいものだ」という意味。ヘン *hen* は強調。ナ ヘン タ チヌ (オカイ) *na hen ta ci=nu (okay)* で「もっとうんと聞きたいものだ」という意味ではないでしょうか。

### コラム (13)

#### どんな動物が嫌われものか？

ジメジメした湿地や沼に生きるカエル（エゾアカガエル）は、嫌われものの一つとなっています。カエルのように嫌われものは他にもいます。

まず、カエルに似た感じで嫌われるのが、サンショウウオです。名寄ではサンショウウオが山の狩小屋の中に入ってくると、カエルのとくと同じように、頭から灰をぶっかけて外に放り出し、「もう一度入ってきてみる、火の中に投げ込んでやるから」と言ったといひます（更科源蔵・光「コタン生物記」Ⅲ）。知里真志保によれば幌別では、サンショウウオは、パウチ・チェッポ（淫魔の小魚）といわれ、人間を色情狂にする魔物と考えられ、オオバセンキュウという草で追い払われたといひます。

ヨタカという鳥も嫌われもの一つとなっています。その名も、オラウン クル カムイ *oraun kur kamuy* (あの世から来る神) で、化物だといわれます。美幌や釧路では、アウンラサンペ *ahunrasanpe* (あの世にすむ化物) といわれました。この鳥が頭に止まって毛を三本抜くと長生きしないとされました。（前掲書）。

ヘビは一見嫌われもののように見えますが、恐ろしい反面その威力を使って流行病の病魔を追い払ってもらったりしました。柳の木の削り掛けでヘビの形を作り女性のお守りにもしました。これを持っていると運がよいともいひます。そしてアオダイショウが家の中に入って屋根裏にすむと家が豊かになるともいわれました。しかし、マムシ(トッコニ *tokkoni*)は、嫌われもの一つで、カミアシ(化物)とも呼ばれました。マムシは野盗のなれのはてだという伝承もあります。「このろくでなし、マムシの頭！」と悪口にも使われました。それでも、ウエベケレ(昔話)の中には、悪いクマから人間を助けたマムシの話があります。ヘビはやはり、その猛毒ゆえに恐れられもしますが、尊ばれたのでしょう。

意外なのはネコです。ネコは魔性のものとされウエベケレ(昔話)の中でも忌み嫌われる存在になっています。ネコは、アイヌ語でチャベ *cape* といひます。これは、東北地方の方言がアイヌ語に入ったもの。またアイヌ語でメコ *meko* ともいひます。これも日本語のネコが元です。このようにネコはもともとアイヌの人たちの飼っていたものではなく、和人が連れていったもので、アイヌ世界に入ったのは比較的新しいことがわかります。一方、イヌは狩猟になくなくてはならない存在で、大切に扱われてきました。セタ *seta* (イヌ) は古くからアイヌの人々の中で重要な働きをしてきましたが、ネコはおそらく、これといった働きもせず、暗闇で目をギラギラ光らせ、干魚やその他の食べ物を盗むものとして嫌われたのでしょう。しかし、最近では、犬もネコもとてもよくかわいがられています。

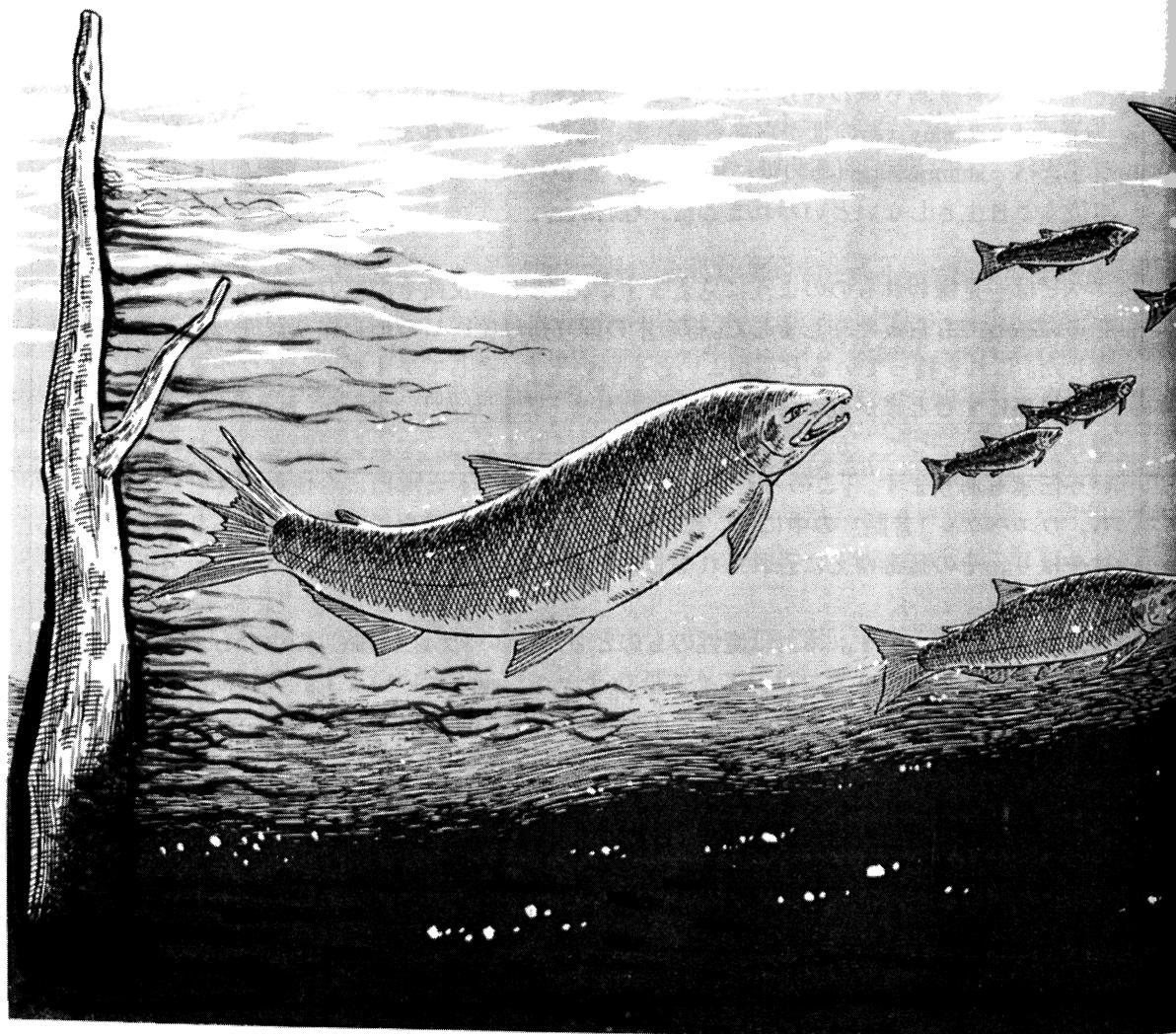
10

小オキキリムイが自らをうたった謡

「クツニサ クトウン クトウン」

pon Okikirmuy yayeyukar

Song sung by little Okikirmui



## 第10話

小オキキリムイが自らをうたった謡

「クツニサ クトウンクトウン」

〔物語とその背景〕

これはオキキリムイの子供と、一人の小男の物語。

私（オオキリムイの子供）は、ある日、川の源へ遊びに出かけると、そこに一人の小男がクルミの木でヤナを作っていた。小男は私がいるのに気づくと、手伝ってくれという。よく見るとクルミの木のヤナなので、水は濁り、川をのぼってきたサケは濁った水が嫌で泣きながら戻って行ってしまった。それを見て私は我慢できなくなり、小男の持っている木槌をひたくり、小男の腰を叩いて腰を折って殺して奈落の底へ踏み落としてしまった。ヤナの杭を揺り動かして、その根元を見ると、その根は6層もある奈落の一番下まで届いていた。そこで私は腰の力、手の力を全て出して、その杭の根元から折って、奈落の底へ踏み落としてしまった。すると川の源から清らかな風が吹き出し、清い水が流れ出した。泣きながら帰ったサケたちは、その清い風、清い水に癒されて大喜びしながら川をのぼってきた。それを見て私は安心して川を下って帰ってきた。とオオキリムイの子供は物語った。

この物語で一番わかりにくいのは、クルミの木でヤナを作るとなぜ水が濁って、サケたちが嫌がるのかという点です。

知里真志保は「このクルミの樹皮や外果皮を突き砕いて川に流し、それで魚を取る毒流しの漁法もあったらしく、神話の中にその反映が見られる。すなわち、悪魔が水源にクルミのヤナ杭を打つと、クルミの濁った水が流れ出て、鮭どもがその水に中毒して（nesko-wakka-ko-wen [クルミの水・に・当る]）浮いて流れる話があり」と書いています。これは、この第10話について述べたものです。

またクルミの木の皮は染料としても用いられました。クルミの木の皮を煎じると黒い汁が出るので、それを使って黒い色に染めるのに使われたのです。

こうしてみると、クルミの木で杭をつくり川の水源地に立てれば、その皮から黒い汁が出て、しかも、それは毒になって魚を中毒死させることになったのだということがわかります。黒い色は、おそらくタンニンだと思われます。このタンニンが川に流れると毒として魚を中毒死させるのでしょう。

物語の中で「小男」と出てきますが、これは実は、悪魔が姿を変えているのです。第11話には、はっきりとその悪魔が登場します。

ここに出てくるヤナ（<sup>やな</sup>）とは、ヤナギの枝を編んで筒状（円錐形）のものを作り、川の流れの狭くなった所に寝かせて置き、魚がその中に入ると返しがあるため出られなくなるという構造の漁具。長さは2m余り、入り口は40cm少々で、流されないように入口の両端に杭を打って固定させる。この物語で出てくる杭とは、このヤナを固定する二本の杭のことで

ポン オキキリムイ ヤイエユカラ 「クツニサ クトウンクトウン」  
 Pon Okikirmui yaieyukar, “Kutnisa kutunkutun”  
 pon Okikirmuy yaeyukar, “kutnisa kutunkutun”  
 小さい オキキリムイ 自らを物語る クツニサ クトウンクトウン

小オキキリムイが自ら歌った謡「クツニサ クトウンクトウン」  
 小オキキリムイが自らを歌った謡「クツニサ クトウンクトウン」  
 Song Sung by Little Okikirmui "Kutnisa kutunkutun"

サケヘ：クツニサ クトウンクトウン kutnisa kutunkutun

- 1 {クツニサ クトウンクトウン}  
 {Kutnisa kutunkutun}  
 {kutnisa kutunkutun}  
 クツニサ クトウンクトウン
- 2 シネアントタ ペテトク ウン シノタシ クス  
 Shineantota / petetok un / shinotash kushu  
 sinean to ta pet etok un sinot=as kusu  
 ある 日に 川 水源 に 遊ぶ・私 ために
- 3 パイエアシ アフ、ペテトクタ シネ ポンルナネクル  
 payeash awa, / petetokta / shine ponrupnekur  
 paye=as awa, pet etok ta sine pon rupne kur  
 行く(複)・私 したところ 川 水源 で 一人の 小さい 大人である 者
- 4 ネシコ ウライ カラ クス ウライキク ネアプ  
 neshko urai / kar kushu / uraikik neap  
 nesko uray kar kusu uray kik neap  
 クルミの木 やな ~を作る ために やな ~を叩く ~であったもの
- 5 コサニツケウカン プナシプナシ。  
 kosanikkeukan / punashpunash.  
 ko-san-ikkew-kan-punas-punas.  
 ~と共に腰の上が上げ立つ上げ立つ
- 6 ウンヌカラ アフ エネ イタキ：——  
 Unnukar awa / ene itaki : ——  
 un=nukar awa ene itak i : ——  
 私・~を見る したところ このように 話す こと
- 7 「エフムナ？ チカラクネクル ウンカスイヤン。」  
 “Ehumna? / Chikarkunekur / uncashuiyan.”  
 “e=humna? ci=karku ne kur un=kasuy yan.”  
 お前・誰(である) 私・~の甥 ~である 者 私・~を手伝う しない
- 8 アリ ハウエアン。 インカラシ コ ネシコ ウライ  
 ari hawean. / Inkarash ko / neshko urai  
 ari hawean. inkar=as ko nesko uray  
 と 言う 見る・私 すると クルミの木 やな
- 9 ネフネ クス ネシコ フツカ ヌフキ フツカ  
 nepne kushu / neshko wakka / nupki wakka  
 ne p ne kusu nesko wakka nupki wakka  
 ~であるもの である ので クルミの木 水 にごる 水

クツニサ クトウンクトウン  
 クツニサ クトウンクトウン  
 Kutnisa kutunkutun

或日に水源の方へ遊びに  
 ある日、川の源へ私は遊びに  
 One day, I went to the source of the river

出かけたなら、水源に一人の小男が  
 行くと、川の源に一人の小男が  
 to play, and there I found a little man.

胡桃の木の築をたてる爲め杭を打つのに  
 クルミの木のやなを作るためにやなを打ちつけ  
 Bending and straightening his back over and over again, he was

腰を曲げ曲げしてゐる。  
 腰を上げたり下げたりしていた。  
 pounding stakes to make a fish trap of walnut wood.

私を見ると、いふ事には……  
 私を見つけると、こう言った。  
 When he saw me, this is what he said:

「誰だ？ 私の甥よ、私に手傳つてお呉れ」  
 「お前は誰だ？ 私の甥よ、私を手傳つておくれ」  
 "Who are you? Here, my boy, give me a hand."

といふ。見ると、胡桃の築  
 と言う。見ると、クルミの木のやな  
 When I looked, I saw that because the trap was made from

なものだから、胡桃の水、濁つた水  
 なものだから、クルミの水、濁つた水が  
 walnut wood, a stream of walnut water, cloudy water

- 10 ちसानサンケ、カムイチエプタラ  
chisanasanke, / kamuicheputar  
ci-sanasanke, kamuycep utar  
される・～を前に出す(出る) 神の魚(サケ) たち
- 11 ヘメシパコ ネシコ ワッカ コウエン クス  
hemeshpako / neshko wakka / kowen kushu  
hemespa ko nesko wakka kowen kusu  
のぼる(複) すると クルミの木 水 ～を嫌う ので
- 12 チシ コロ ホシツパ。チルシカ クス  
chish kor hoshippa. / Chirushka kushu  
cis kor hosippa. ci=ruska kusu  
泣く しながら 戻る(複) 私・～を怒る ので
- 13 ポンルプネクル コロ ウライキクトウチ  
ponrupnekur / kor uraikiktuchi  
pon rupne kur kor uray kik tuci  
小さい 大人である 者 ～を持つ やな ～を叩く 槌
- 14 チエシカリ、ポンルプネクル イツケウノシキ  
chieshikari, / ponrupnekur / ikkeunoshki  
ci=esikari, pon rupne kur ikkew noski  
私・～をひつつかむ 小さい 大人である 者 腰 ～の真ん中
- 15 チキク フミ トッコサヌ。ポンルプネクル  
chikik humi / tokkosanu. / Ponrupnekur  
ci=kik humi tokkosanu. pon rupne kur  
私・～を叩く ～の音 コンと音がする 小さい 大人である 者
- 16 イツケウノシキ チオアラカイエ、チオアンライケ  
ikkeunoshki / chioarkaye, / chioanraike  
ikkew noski ci=oarkaye, ci=oanrayke  
腰 ～の真ん中 私・～を完全に折る 私・～を完全に殺す
- 17 ポクナモシリ チコオテレケ。ネア ネシコ ウライニ  
poknamoshir / chikooterke. / Nea neshko uraini  
poknamosir ci=kooterke. nea nesko urayni  
地獄 私・～に～を踏み落とす その クルミの木 やな杭
- 18 チオサウサワ イヌアシ アイケ、イワン ポクナシリ  
chiosausawa / inuash aike, / iwan poknashir  
ci=osawsaw wa inu=as ayke, iwan poknasir  
私・～を揺すって して 聞く・私 したのだが 六つの 地下世界  
ゆるめる
- 19 イマカケヘ チオウシ フミアシ。  
Imakakehe / chioushi humiash.  
imakakehe ci-ousi humi as.  
～の向こう される・～に尻を つける(～に届く) ～の感じ する
- 20 オロワノ イツケウキ□□ モントウムキ□□  
Orowano / ikkeukiror / montumkiror  
orowano ikkew kiror mon tum kiror  
それから 腰 力 手 ～の中 力

が流れて来て鮭どもが  
流れ出ている。そのためサケたちは  
was flowing out of it. Because of that, when the salmon

上つて来ると胡桃の水が嫌なので  
川をのぼって来るとクルミの水を嫌がって  
swam up the river, they were distressed by the walnut water

泣きながら歸つてゆく。私は腹が立つたので  
泣きながら帰っていった。私は怒って  
and swam home, crying. I grew angry

小男の持つてゐる杭を打つ槌を  
小男が持っているやなを叩く槌を  
and snatched away the hammer that the little man

引たくり小男の腰の央を  
ひたくり、小男の腰のまん中を  
was using to pound the fish traps, and when I pounded the man

私がつゝ、音がボンと響いた。小男の  
叩くと、カーンと音が響いた。小男の  
in the middle of his lower back, it made a clanging sound. I snapped

腰の央を折つてしまつて殺してしまひ  
腰のまん中を私は完全に折つて殺してしまひ  
the middle of the little man's lower back clean and killed him, then

地獄へ踏落してやつた。彼の桃胡の杭を  
地下の世界へ踏み落した。そのクルミの木のやなの杭を  
I trampled him down into the underworld. When I tried wiggling

揺り動かして見ると六つの地獄の  
私が揺り動かしてみたところ、六層の地下の世界  
the stakes of the walnut fish trap, the roots seemed to reach

彼方まで届いてゐる様だ。  
の向うまで根が届いているようだった。  
all the way down to the other side of the six-layered underworld.

それから、私は腰の力からだ中の力を  
それから私は腰の力、腕中の力を  
I gathered all the strength of my back

- 21 チヤイコサンケ、ネウライニ シンリチ ワノ  
 chiyaikosanke, / neuraini / shinrichi wano  
 ci=yaykosanke, ne urayni sinrici wano  
 私・～を自ら出す その やな杭 ～の根元 から
- 22 チオアラカイエ、ポクナモシリ チコオテレケ。  
 chioarkaye, / poknamoshir / chikooterke.  
 ci=oarkaye, poknamosir ci=kooterke.  
 私・～を完全に折る 地獄 私・～に～を踏み落とす
- 23 ペテトコ ワ ピリカ レラ ピリカ ワッカ  
 Petetoko wa / pirka rera / pirka wakka  
 pet etoko wa pirka rera pirka wakka  
 川 ～の水源 から きれいな 風 きれいな 水
- 24 チサナサンケ、チシコロ ホシツパ  
 chisanasanke, / chishkor hoshippa  
 ci-sanasanke, cis kor hosippa  
 される・～を前に出す 泣く しながら 戻る(複)
- 25 カムイチェプタラ ピリカ レラ ピリカ ワッカ  
 Kamuicheputar / pirka rera / pirka wakka  
 kamuycep utar pirka rera pirka wakka  
 サケ たち きれいな 風 きれいな 水
- 26 エヤイテムカ ウエンミナハウ ウエンシノツハウ  
 eyaitemka / wenminahau / wenshinothau  
 eyaytemka wen mina haw wen sinot haw  
 ～で回復する 激しい 笑う 声 激しい 遊ぶ 声
- 27 ペプニタラ コロ ヘメシパ シリ  
 pepunitara kor / hemespha shiri  
 pepunitara kor hemespa siri  
 にぎやかである しながら のほる(複) ～の様子
- 28 チョポパツキ。チヌカラ ワ チエラムシンネ  
 chopopatki. / Chinukar wa / chieramushinne  
 copopatki. ci=nukar wa ci=eramushinne  
 パチャパチャする 私・～を見る して 私・～で安心する
- 29 ペテソコ ホシツパアシ。アリ  
 petesoro / hoshippaash. ari  
 pet esoro hosippa=as. ari  
 川 に沿って下へ 戻る(複)・私 と
- 30 ポン オキキリムイ イソイタク。  
 Pon Okikirmui isoitak.  
 pon Okikirmuy isoytak.  
 小さい オキキリムイ 物語る

出して、其の杭を根本から  
 出して、そのやな杭の根本から  
 and arms and cleanly snapped the stakes of the fish trap

折つてしまひ、地獄へ踏落してしまつた。  
 完全に折つてしまひ、地下の世界へ踏み落としてしまつた。  
 at their roots and trampled them down into the underworld.

水源から清い風清い水が  
 川の源からは清らかな風、清い水が  
 From the source of the river, a refreshing breeze and pure water

流れて来て、泣きながら歸つて行つた  
 流れ下つて、泣きながら歸つた  
 flowed downstream, and the salmon who had cried their way back home

鮭どもは清い風清い水に  
 サケたちは清い風、清い水  
 were soothed by the refreshing breeze

氣を恢復して、大さわぎ大笑ひして遊び  
 にいやされて、大きな笑い声や遊び声を  
 and the pure water. Laughing and playing, their voices

ながら、パチャパチャと  
 上げながら川をのぼつてきて  
 rang out merrily as they swam back upstream,

上つて来た、私はそれを見て、安心をし  
 パチャパチャ音をたてた。私はそれを見て安心し  
 making splashing sounds as they went. Seeing that put my heart at ease,

流れに沿うて歸つて来た。と  
 川をくだつて歸つて来た。と  
 and I headed back downstream to my home. Thus

小さいオキキリムイが物語つた。  
 小さいオキキリムイは語つた。  
 related Little Okikirmui.

## 〔言葉の説明〕

## ・ペテトク petetok (2行目)

ペテトク petetok は、< pet-etok (川・先) 川の行く先→川の源。水源。22行目に出てくる エトコ etoko は、etok の所属形で「～の源」という意味。

・ウライキク ネアプ コサニッケウカン プナシプナシ  
uray kik ne a p kosan-ikkew-kan-punaspunas (4～5行目)

ウライ キク uray kik は「ヤナを打つ」。ネ ア プ ne a p (である・過去・こと)、～であったこと。コサニッケウカン kosan-ikkew-kan は、「に下がる・腰・虚辞」→下げた腰。プナシプナシ punaspunas は < pun-as (起きる・立つ) 反復で、何回も上がる。直訳すると「ヤナを打ったこと、下げた腰が上がり上がりする」→ヤナを打つのに腰を上げ下げする。

## ・エフムナ e=humna (7行目)

フムナ humna で「誰」。沙流方言では、フナ hunna (誰)。エ e= は「あなた」。浜田隆史氏から、エフムナアン e=humna-an? (あなたは誰ですか?) の略ではないかという意見をいただきました。人称接辞が疑問代名詞に付いた例はあまり無いようです。

## ・チカラクネクル ci=karku ne kur (7行目)

チカラク ネ クル ci=karku ne kur は直訳すると「私の甥である人」→私の甥。日常のあいさつの時でも、自分より少し若い男性に、クカラク ヘー ku=karku he (私の甥よ) という。実際に甥でなくても使うことが多いです。日本語でいえば「兄さん」といった感じ。6行目全体で「あんた誰? お兄さんちょっと手伝ってくれないか」といった意味。

## ・ネシコ ウライ ネブネ クス nesko uray ne p ne kusu (8～9行目)

直訳すると「クルミの木のなであるものだから」→クルミの木のななので。ここでは、もうクルミの木のなはよくないもの(毒を出すもの)という意味が入っています。毒を出すクルミの木のななので、という意味。

ネ クス ne kusu で意味は十分なので、ネ プ ne p は音節数をふやすためと思われる。

## ・チサナサンケ cisanasanke (10行目)

第3話の16行目にも出てきますが、< ci-sa-na-san-ke (～される・前・の方・出る・他動詞化語) →前の方に出される。→出る。音節を5つにするユーカラ独特の飾り言葉(アトムテ イタク atomte itak)。中心となる動詞はサン san (出る・下る)。

## ・ヘメシパ hemespa (11行目)

ヘメシパ hemespa はヘメス hemesu (川をさかのぼる) の複数形。  
ヘメス hemesu は < he-mesu (頭・を剥ぐ) 自動詞。言葉の元の意味は、「(川をさかのぼるときに流れが) 頭をそぐ」で、そこから「川をさかのぼる」となったものでしょう。流れにさからって上流へ向かうサケのような魚の頭の部分に注目して生まれた言葉でしょう。この言葉は、山にのぼるときにも使われるので、意味が拡大したものと考えられます。

## ・コウエン kowen (11行目)

コウエン kowen は、< ko-wen (～に対して・悪い) ～を嫌う。知里真志保は、この言葉を「(クルミの水に) 中毒する」と訳しています。

## ・トウチ tuci (13行目)

トウチ tuci は、日本語の金槌や木槌の「槌」から入った言葉。ここでは木槌のことをいっているのでしょうか。

## ・チキク フミ トッコサヌ ci=kik humi tokkosanu (15行目)

チキク フミ ci=kik humi は「私が～を打つ音」。トッコサヌ tokkosanu は < tok-kosanu (擬音語・瞬間的な意味をそえて動詞化する語) カンと音がする。トンと音がする。全体で「私が(小男の腰のまん中)を打つ音はコンとした」。

## ・チオアラカイエ チオアンライケ ci=oarkaye ci=oanrayke (16行目)

チオアラカイエ ci=oarkaye は < ci-oar-kaye (私・全く・を折る) 私は～を完全に折る。  
チオアンライケ ci=oanrayke は < ci-oar-rayke (私・全く・を殺す) 私は～を完全に殺す。

## ・ポクナモシリ チコオテレケ pokna mosir ci=kooterke (17行目)

ポクナ モシリ pokna mosir は「下方の世界、地下世界」あの世。チコオテレケ ci=kooterke は < ci-ko-oterke (私・～に・～を踏む) ～を～に踏み(落とす)。

## ・チオサウサワ イヌアシ アイケ ci=osawsawa inu=as ayke (18行目)

オサウサワ osawsawa は < オサウサウ ワ osawsaw wa で「～を揺り動かして」。～ワイヌ ～wa inu で「～してみる」という意味。アイケ ayke は「～すると」。全体で「私が(そのクルミの木の杭)を揺り動かしてみると」。

・イワン ポクナシリ イマカケヘ チオウシ フミアシ  
iwan poknasir imakakehe ciouisi humi as (18～19行目)

イワン ポクナ シリ iwan poknasir は「6つの地下世界」。イマカケヘ imakakehe は、imak (後、向こう)の所属形 imakake の長い形で、「その向こう、その後」という意味。チオウシ ciouisi は < ci-o-us-i (～される・尻・に付く・他動詞化語) 尻が～に付けられている。根が届いてる。フミアシ humi as で「感じがする」。全体で、6層の地下世界の向こうまで根が届いているような感じがする。

## ・モントウムキロロ mon-tum-kiror (20行目)

モン トウム キロロ mon-tum-kiror は「手・の中・の力」→腕中の力。モン mon を知里幸恵は「体」と訳していますが、知里真志保は「手」と訳しています。mon はそのまま訳して「手」でよいと思います。「腰の力、腕中の力を私は出す」こと。

## ・エヤイテムカ eyaytemka (26行目)



これは < e-yay-temka で (～で・自分・を治療する) ～で自らを治す。清い水で (中毒が) 治る。

・ウェンミナハウ wen mina haw (26行目)

この場合の ウェン wen は、程度がはなはだしいことを表わします。「大声で笑う声」「大笑いする声」。この後の ウェン シノツ ハウ wen sinot haw も「大騒ぎして遊ぶ声」。

[参考]

・ネシコ nesko (4行目)

ネシコ nesko は「クルミの木の皮」。クルミ (の実) は、ニヌム ninum。美幌や屈斜路では、メシコ mesko といいます。

・ペプニタラ pepunitara (27行目)

ペプニタラ pepunitara は < pepun-itara (ばちやばちやする・継続) にぎやかである。この pepun は < pe-pun (水滴・持ち上がる) 水しぶきがばちやばちはねあがる、ことが元ではないでしょうか。

コラム (14)

「地獄」はどこにあるのか？

まずことわっておかなければならないのは、アイヌ語の ポクナシリ poknasir を「地獄」と訳すと、意味のずれが起こることです。地獄は、仏教用語であり、アイヌの世界観とは違うので、この言葉は「 」つきで使うことにしたいのです。そのうえ、ポクナシリまたは、ポクナモシリ (下方の世界、あの世) は、地獄とは全く異なるものです。「人間が死後行く世界 (あの世)」と「地獄」は全く別な所なのです。両方の違いをみてみましょう。

① 「あの世」と「地獄」の言葉の違い

- ・ポクナ モシリ pokna mosir (下方・の世界) …… あの世 (人間が死後行く所)。
- ・テイネ ポクナ モシリ teyne pokna mosir (湿った・下方・の世界) …… 奈落。「地獄」。

② 意味の違い

ポクナ モシリ pokna mosir (あの世) は、ポクナ (下方) にあると考えられています。しかし、そこは、先に死んでいった先祖たちが暮らしている楽土 (楽しい世界) だと信じられています。全て、この世と全く変わらない暮らしがそこでは営まれているので、そこに行けば、また次の暮らしが待っているのだから、死を恐れないといえます。今でもそう考えているアイヌのお年寄りがいます。この世とただ一つ違うのは、すべてが反対だという点です。

この世の夏は、あの世の冬であり、この世の昼はあの世の夜だといえます。そのため、夏に亡くなった人に、あの世は冬で寒いのだからと暖かい衣類を死者に持たせたりします。ポクナ pokna には「裏」という意味もあります。もしかするとポクナモシリは「裏側の世界」とか「反世界」と訳した方がいいのかもしれませんが。「あの世」は、明るく楽しいイメージなので、暗い地下世界とは不似合いなのです。

一方、テイネ ポクナ モシリ teyne pokna mosir は、まさに地下世界だと考えられています。しかも、そこはいつもジメジメと湿っていて、「奈落」とも訳せる所です。しかし、あくまでも仏教でいう「地獄」とは違います。これに合うきちんとした訳語はまだないと考えた方がいいのです。ここには、人間を食べた性悪のクマが細切れにされて落とされたり、魔物が同様にされて落とされます。ここに行くとは二度と再生できないとされています。このテキストの中に、6つの地下世界の一番奥、と出てきますが、6つとは数の多いことを意味するので地下の果てしない底の底へ魔物が蹴落されたということで、そこが、いわゆる仏教用語の「地獄」になります。この「湿った奈落の底 (テイネ ポクナ モシリ)」は、魔物や、魔性のものが、細切れにされて二度と再生できないように人間や神に蹴落される場所として、昔話 (ウエベケレ) や神謡 (カムイユカラ) に出てきます。

すると、本来は、人間に危害を与える魔物が再生しないように落とされる場所だったのではないのでしょうか。こうしてみると、人間がこの世で悪業の限りを尽して地獄に落とされるという仏教的な世界観とは大きく異なるように思われます。これは、私の仮説ですが、アイヌの世界観の中の「奈落の底」とは、本来は、魔物が行く地下世界であって、たとえ悪業の限りを尽す人間のように見えても実は、このテキストの小男のように人間に化身した魔物なのではないのでしょうか。つまり、人間は、「湿った奈落の底」には行かないのだと。ここが仏教でいう「地獄」とは全く違う点だと思います。仏教でいう「地獄」は、悪業を重ねた人間の行く所であり、三途の川の向こう側にあるらしい。ところがテイネ ポクナ モシリ (湿った世界) とは、魔物が二度と再生できないように細切れにされて落とされる場所で、そこは明確に地下世界なのです。

11

小オキキリムイが自らをうたった謡

「タノタ フレフレ」

pon Okikirmuy yayeyukar

Song sung by little Okikirmui



第11話

小オキキリムイが自らをうたった謡<sup>うた</sup>

「タノタ フレフレ」

〔物語とその背景〕

この話は第10話ととてもよく似ています。知里幸恵はなぜ似た話を2つも入れたのでしょうか。その彼女の強い思い入れとは一体何かを考えながら読んでみたいものです。

ある日、私（オオキリムイの子供）は、川をさかのぼって遊びに行くと、悪魔の子に出会った。悪魔の子は、いつ見ても顔も姿も美しい。その子はクルミの弓矢をもって、私に「魚を根絶やしにして遊ぼう」と誘ってきた。そしてクルミの矢を川の源に射た。すると、たちまち濁った水が流れ出し、サケたちは、これを嫌って泣きながら引き返していった。悪魔の子はそれを見て喜んでいる。私は、怒って銀の弓に銀の矢をつがえて水源に向けて射ると、たちまち水源から清い水が流れ出し、サケたちは清い水に癒されて、笑い声をたてながら戻ってきた。悪魔の子は怒りを顔に表わして、「そこまでするんなら、今度は鹿を根絶やししてやるぞ」と言って、クルミの矢を空に向けて射放した。すると山の木原から竜巻がおこり、オス鹿とメス鹿を別々に巻き上げて運んでいった。それを見て悪魔の子は喜んでいる。私は、かっと怒りがこみ上げてきたので、銀の矢を鹿の群の後めがけて射ると、天から清い風が吹いてきて、オス鹿の群とメス鹿の群が別々に木原の上に降ろされた。悪魔の子は怒って、「これは驚きだ。よし今度は、力くらべをしよう」と言って上着を脱いだ。私も薄着一枚になってとっ組み合った。そして上になったり下になったりくんずほぐれずとっ組み合った。悪魔の子が意外に力持ちなのは驚いたが、腰の力、腕中の力を出し尽して悪魔の子を肩に担ぎ上げ山の岩へ叩きつけ殺してしまった。そして奈落の底に踏み落としてしまった。それから川沿いに下って帰ってくると、サケたちが笑い遊びながら川をさかのぼっていくのが見えた。山の木原では鹿たちが遊びながら、あちこちで草をのんびりと食べていた。それを見て私は安心して自分の家に帰ってきたのである。と、オオキリムイの子供は物語った。

この物語は、第10話と本当によく似ています。ともに川の源を汚染させ魚が川をのぼってこれないようにする話です。この第11話は、そればかりか、悪魔が山の源である木原も汚染させてしまいます。第10話ではクルミのヤナ杭によって汚染させますが、この第11話では、クルミの矢で汚染させる点が違っています。両話ともオオキリムイの子供が、それをくい止めるのです。

この第11話は、地上の全ての領域、水陸両方を悪魔が汚染させ、生きものが住めないようにする話。それを食い止めるため悪魔とオオキリムイの闘いが行われます。人間の始祖であるオオキリムイは、魔と闘って勝ち、地上に平和をもたらしたのです。

ポン オキキリムイ ヤイエユカラ 「タノタ フレフレ」  
 Pon Okikirmui yaieyukar, “Tanota hurehure”  
 pon Okikirmuy yayeyukar, “tan ota hure hure”  
 小さい オキキリムイ 自らを物語る この 砂 赤い 赤い

小オキキリムイが自ら歌った謡「此の砂赤い赤い」  
 小オキキリムイが自らを歌った謡「この砂赤い赤い」  
 Song Sung by Okikirmui "This Sand Is Red, Red"

サケヘ：タノタ フレフレ tanota hurehure

- 1 タノタ フレフレ  
 Tanota hurehure  
 tan ota hure hure  
 この 砂 赤い 赤い
- 2 シネアントタ ペットウラシ シノタシ クス  
 Shineantota / petturashi / shinotash kushu  
 sinean to ta pet turasi sinot=as kusu  
 ある 日に 川 に沿って上へ 遊ぶ・私 ために
- 3 パイエアシ アワ、ポン ニツネカムイ チコエカリ。  
 payeash awa, / pon nitnekamui / chikoekari.  
 paye=as awa, pon nitne kamuy ci=koekari.  
 行く(複)・私 したところ 小さい 性悪である 神 私・～に出会う
- 4 ネイタ クス ポン ニツネカムイ シリカ ウエナ  
 Neita kusu / pon nitnekamui / shirka wena  
 nei ta kusu pon nitne kamuy sirka wen ya  
 いつ で こそ 小さい 性悪である 神 容貌 悪い か
- 5 ナンカ ウエナ、クンネ コソソテ ウトメチウ  
 nanka wena, / kunne kosonte / utomechiu  
 nan ka wen ya, kunne kosonte utomeciw  
 顔 ~の上 悪い か 黒い 小袖 ~を身につける
- 6 ネシコ ポンク ネシコ ポナイ ウコアニ、  
 neshko ponku / neshko ponai / ukoani,  
 nesko pon ku nesko pon ay ukoani,  
 クルミ 小さい 弓 クルミ 小さい 矢 ~を両方持つ
- 7 ウンヌカラ アワ、サンチャオッタ ミナ カネ  
 unnukar awa, / sanchaotta / mina kane  
 un=nukar awa, sanca or ta mina kane  
 私・～を見る したところ 口 元 に 笑 み を 浮 か べて
- 8 エネ イタキ：—  
 ene itaki：—  
 ene itak i：—  
 このように 話す こと
- 9 「ポン オキキリムイ シノタシ □!  
 “Pon Okikirmui / shinotash ro!  
 “pon Okikirmuy sinot=as ro!  
 小さい オキキリムイ 遊ぶ・私たち しよう

[この砂赤い赤い]  
 この砂赤い赤い  
 This sand is red, red.

或日に流れをさかのぼつて遊びに  
 ある日、川に沿ってのぼつて遊びに  
 One day, I followed the river upstream

出かけたなら、悪魔の子に出會つた。  
 行くと、私は悪魔の子に出会つた。  
 to play, and I happened to meet a devil's child.

何時でも悪魔の子は様子が美しい  
 いつも悪魔の子は姿が美しいし、  
 Devil's children are always beautiful of figure

顔が美しい。黒い衣を着けて  
 顔も美しい。黒い衣を身にまとい  
 and beautiful of face. Clad in black clothing

胡桃の小弓に胡桃の小矢を持つてゐて  
 クルミの小弓にクルミの小矢を持って  
 and holding a little walnut bow and a little walnut arrow,

私を見ると、ニニコして  
 私を見ると、ニヤリと笑つて  
 the devil's child smirked when he saw me

いふことには  
 こう言った。  
 and said:

「小オキキリムイ、遊ぼう。  
 「オキキリムイの子供、遊ぼうよ。  
 "Child of Okikirmui, let's play.

- 10 ケケ ヘタク チェプスツウイェ チキ クシネ ナ。」  
 Keke hetak / chepshuttuye / chiki kushne na.”  
 keke hetak cep-sut-tuye ci=ki kus ne na.”  
 さあ 早く 魚 根 ~を切る 私・~をする つもりである よ
- 11 イタク カネ ネシコ ポンク ネシコ ポナイ  
 itak kane / neshko ponku / neshko ponai  
 itak kane nesko pon ku nesko pon ay  
 話す しながら クルミ 小さい弓 クルミ 小さい弓
- 12 ウエウヌ ペテトク ウン アイエアク アワ、  
 uweunu / petetok un / aieak awa,  
 ueunu pet etok un ay eak awa,  
 ~に~をつがえる 川 ~の水源 へ 矢 ~を射る したところ
- 13 ペテトコ ワ ネシコ ワッカ ヌブキ ワッカ  
 petetoko wa / neshko wakka / nupki wakka  
 pet etoko wa nesko wakka nupki wakka  
 川 ~の水源 から クルミ 水 濁る 水
- 14 チサナサンケ、カムイチェプタラ ヘメシパ コ  
 chisanasanke, / kamuicheputar / hemespha ko  
 ci-sanasanke, kamuycep utar hemespa ko  
 される・~を前へ出す サケ たち のぼる(複) すると
- 15 ネシコ ワッカ コウエン ワ チシ トウラノ  
 neshko wakka / kowen wa / chish turano  
 nesko wakka kowen wa cis turano  
 クルミ 水 ~を嫌う して 泣くこと と共に
- 16 オロヘトポ モム ワ パイエ、ポン ニツネカムイ  
 orhetopo / mom wa paye, / pon nitnekamui  
 orhetopo mom wa paye, pon nitne kamuy  
 引き返して 流れる して 行く(複) 小さい 性悪である 神
- 17 ネワアンペ サンチャ オッタ ミナ カネ アン。  
 newaanpe / sanchaotta / mina kane an.  
 newaanpe sanca or ta mina kane an.  
 そのこと 口 元 に 笑み を 浮か べて いる
- 18 シリキ チキ ネワアンペ チルシカ クス  
 Shirki chiki / newaanpe / chirushka kushu,  
 sirki ciki newaanpe ci=ruska kusu,  
 様子である したら そのこと 私・~を怒る ので
- 19 チコロ シロカニ ポンク シロカニ ポナイ  
 chikor shirokani ponku / shirokani ponai  
 ci=kor sirokani pon ku sirokani pon ay  
 私・~を持つ 銀 小さい弓 銀 小さい矢
- 20 チウエウヌ、ペテトク ウン アカシ アワ、  
 chiuweunu, / petetok un / akash awa,  
 ci=ueunu, pet etok un ak=as awa.  
 私・~を~につがえる 川 ~の水源 へ 射る・私 したところ

さあこれから、魚の根を絶やして見せよう。」

さあこれから魚を根絶やしにしようぞ」

Come on, I'm going to kill off all of the fish!"

と言つて、胡桃の小弓に胡桃の小矢を

と言つて、クルミの小弓にクルミの小矢を

Saying this, he fixed a little walnut arrow to his

番へ水源の方へ矢を射放すと、

つがえて水源へ矢を射放すと、

little walnut bow and shot the arrow at the source of the river,

水源から胡桃の水、濁った水が

川の源からクルミの水、濁った水が

and when he did, walnut water, cloudy water

流れ出し、鮭どもが上つて来ると

流れ出し、サケたちがのぼってくる

came flowing out. When the salmon came swimming upstream,

胡桃の水が厭なので泣きながら

クルミの水を嫌って泣きながら

the walnut water distressed them, and crying,

引き返して流れて行く。悪魔の子は

逆戻りして流れていった。悪魔の子は

they turned around and drifted away with the current.

それをニコニコしてゐる。

それをニヤニヤ笑って喜んでいる。

The devil's child smirked at this.

私はそれを見て腹が立つたので

それを見て私は怒って

Seeing that, I became angry.

私の持つてゐた、銀の小弓に銀の小矢を

私の銀の小弓に銀の小矢

I fixed my little silver arrow

番へ水源へ矢を射はなすと

をつがえて水源へ矢を射放すと

to my little silver bow and shot the arrow at the source of the river.

- 21 ペテトク フ シロカニ ワッカ ピリカ ワッカ  
 petetok wa / shirokani wakka / pirka wakka  
 pet etok wa sirokani wakka pirka wakka  
 川 ~の水源 から 銀 水 きれいな 水
- 22 チサナサンケ、チシトウラノ モム フ パイエ  
 chisanasanke, / chishturano / mom wa paye  
 ci-sanasanke, cis turano mom wa paye  
 される・~を前へ出す 泣く と共に 流れる して 行く(復)
- 23 カムイチエプタラ ピリカ ワッカ エヤイテムカ、  
 kamuicheputar / pirka wakka / eyaitemka,  
 kamuycep utar pirka wakka eyaytemka,  
 サゲ たち きれいな 水 ~で回復する
- 24 ウエンシノツハウ ウエンミナハウ ペプニタラ  
 wenshinohau / wenminahau / pepunitara  
 wen sinot haw wen mina haw pepunitara  
 激しい 遊ぶ 声 激しい 笑う 声 にぎやかである
- 25 ヘメシパ シリ チョポパツキ。  
 hmeshpa shiri / chopopatki.  
 hemespa siri copopatki.  
 のぼる(複) ~の様子 バチャバチャする
- 26 シリキ チキ ポン ニツネカムイ コロウエンプリ  
 Shirki chiki / pon nitnekamui / korwenpuri  
 sirki ciki pon nitne kamuy kor wen puri  
 様子である したら 小さい 性悪である 神 ~を持つ 悪い 気性
- 27 エナントウイカ エパラセシ：  
 enantuika / eparsere：  
 e-nan-tuyka-eparsere：  
 ~の先・顔・~の上側・~で~を沸き起こらせる
- 28 「ソノノ ヘタプ エイキ チキ ユクスツ トウイエ  
 “Sonno hetap eiki chiki / yukshut tuye  
 “sonno hetap e=iki ciki yuk-sut-tuye  
 本当に 一体 お前・する したら シカ 根 ~を切る
- 29 チキ クスネ ナ。」 イタク カネ、  
 chiki kushne na.” / itak kane,  
 ci=ki kus ne na.” itak kane,  
 私・~をする つもりである よ 話す しながら
- 30 ネシコ ポンク ネシコ ポナイ ウエウヌ、  
 neshko ponku / neshko ponai / uweunu,  
 nesko pon ku nesko pon ay ueunu,  
 クルミ 小さい 弓 クルミ 小さい 矢 ~を~につがえる
- 31 カント コトロ チョツチャ アイケ ケナシソ カワ  
 kanto kotor / chotcha aike / kenashso kawa  
 kanto kotor cotca ayke kenas so ka wa  
 天 面 ~に射当てる したのだが 木原 面 ~の上 から

水源から銀の水、清い水が  
 水源から銀の水、清い水が  
 When I did, silver water, pure water came flowing

流れ出し、泣きながら流れて行つた  
 流れ出し、泣きながら流れて行つた  
 out, and the crying salmon who had been carried away

鮭どもは清い水に元気を回復し  
 サケたちは清い水で癒され  
 by the current were soothed by the pure water.

大笑ひをして遊びさわいで  
 遊ぶ声や笑い声を騒がしくたてて  
 Raising boisterous voices of merriment,

パチャパチャ川を上つて行つた。  
 川をさかのぼる音がバシャバシャ響いた。  
 they swam back upstream, making splashing sounds as they went.

すると、悪魔の子は、持前の疝癪を  
 これをみて悪魔の子は、持ち前の怒り  
 When the devil's child saw this, he showed his inborn

顔に表して、  
 を顔に表わして、  
 anger on his face.

「本當にお前そんな事をするなら、鹿の根を  
 「よくもそんなことをしたな、それなら今度は鹿を根絶やしに  
 "What did you go and do that for? That does it; now I'm going to

絶やして見せよう。」と云つて  
 してやるぞ」と言つて、  
 kill off all the deer," he said.

胡桃の小弓に胡桃の小矢を番へ  
 クルミの小弓にクルミの小矢をつがえて、  
 When he fixed a little walnut arrow to his little walnut bow

大空を射ると、山の木原から  
 天空を射ると、木原の上から  
 and shot at the sky, from the forest

- 32 ネシコ レラ スブネ レラ チサナサンケ、  
 neshko rera / shupne rera / chisanasanke,  
 nesko rera supne rera ci-sanasanke,  
クルミ 風 渦巻く 風 される・～を前へ出す
- 33 ケナシソ カワ アツカトパ シンナイ カネ  
 kenashso kawa / apkatopa / shinnai kane  
 kenas so ka wa apka topa sinnay kane  
木原 面 ～の上 から 牡鹿 群れ 別である して
- 34 モマンペトパ シンナイ カネ レラプンパ、  
 momanpetopa / shinnai kane / rerapunpa,  
 momanpe topa sinnay kane rera punpa,  
雌鹿 群れ 別である して 風 ～を持ち上げる(複)
- 35 トオプ カント オルン リキフ シリカン マクナタラ  
 toop kanto orun / rikip shirikan / maknatara,  
 toop kanto or un rikip siri kan maknatara,  
ずっと 天 ～の所 へ 上る(複) ～の様子 ～の上 輝いている
- 36 ポン ニツネカムイ サンチャ オッタ エミナ カネ アン。  
 pon nitnekamui / sancha otta emina kane an.  
 pon nitne kamuy sanca or ta emina kane an.  
小さい 性悪である 神 口 元 に 笑 み を 浮 か べ て いる
- 37 シリキ チキ ウェン キンラ ネ ウンコヘタリ  
 Shirki chiki / wen kinra ne / unkohetari  
 sirki ciki wen kinra ne un=kohetari  
様子である したら ひどい 狂ったような怒りとして 私・～に頭を持ち上げる
- 38 シロカニ ポンク シロカニ ポナイ  
 shirokani ponku / shirokani ponai  
 sirokani pon ku sirokani pon ay  
銀 小さい 弓 銀 小さい 矢
- 39 チウエウヌ ユクトパ オシ アカシ アフ  
 chiuweunu / yuktopa oshi / akash awa  
 ci=ueunu yuk topa osi ak=as awa  
私・～を～につがえる シカ 群れ の後に 射る・私 したところ
- 40 カント オロワ シロカニ レラ ピリカ レラ  
 kanto orowa / shirokani rera / pirka rera  
 kanto orowa sirokani rera pirka rera  
天 から 銀 風 きれいな 風
- 41 チラナランケ、レラエトコ アツカトパ  
 chiranaranke, / reraetoko / apkatopa  
 ci-ranaranke, rera etoko apka topa  
される・～を降ろす 風 ～の先 牡鹿 群れ
- 42 シンナイ カネ モマンペトパ シンナイ カネ  
 shinnai kane / momanpetopa / shinnai kane  
 sinnay kane momanpe topa sinnay kane  
別である して 雌鹿 群れ 別である して

胡桃の風つむじ風が吹いて来て  
 クルミの風、竜巻が吹いて来て  
 a walnut wind, a whirlwind came blowing down.

山の木原から、牡鹿の群は別に  
 木原の上からオス鹿の群が一団となり、  
 Then from above the forest, the deer lined up in one herd of bucks

牝鹿の群はまた別に、風に吹上げられ  
 メス鹿の群は別の一団となって並んで、風に吹き上げられて  
 and another herd of does, and they made a beautiful, sparkling sight as they were lifted

ずーつと天空へきれいにならんで上つて行く。  
 はるか天へと上がっていく様子は美しく輝いた。  
 on the wind all the way to heaven.

悪魔の子はニコニコしてゐる、  
 悪魔の子は得意そうにニヤニヤ笑っている。  
 The devil's child saw that and smirked triumphantly.

それを見た私はかつと癪にさはつたので  
 それを見て、かつと怒りがこみ上げてきて  
 Seeing that, I was filled with rage.

銀の小弓に銀の小矢を  
 私は銀の小弓に銀の小矢  
 I fixed a little silver arrow to my

番へて、鹿の群のあとへ矢を射放すと、  
 をつがえて鹿の群の後めがけて矢を射ると  
 little silver bow and shot it at the back of the deer herds, and

天上から、銀の風清い風が  
 天上から銀の風、清い風  
 a silver wind, a pure wind came blowing

吹降り、牡鹿の群は  
 が吹き下り、その風に運ばれてオス鹿の群  
 down from the heavens. The herd of bucks in one group

別に、牝鹿の群はまた別に、  
 は一団となり、メス鹿の群も別の一団となって  
 and the herd of does in an another group were carried on this wind

- 43 ケナシソ カ チオラプテ。  
kenashso ka / chiorapte.  
kenas so ka ci-orapte.  
木原 面 ~の上 される・~に~を降ろす(複)
- 44 シリキ アワ ポン ニツネカムイ  
Shiriki awa / pon nitnekamui  
siriki awa pon nitne kamuy  
様子である したところ 小さい 性悪である 神
- 45 コロ ウエンプリ エナントウイカ エパラセシ。  
kor wenpuri / enantuika / eparsere.  
kor wen puri e-nan-tuyka-eparsere.  
~を持つ 悪い 気性 ~の先・顔・~の上側・~で~を沸き起こらせる
- 46 「アチカラタ ソンノヘタテ  
“Achikarata sonnohetap  
“acikara ta sonno hetap  
なまいきな (強調) 本当に 一体
- 47 エイキ チキ ウキコロヌカラ アキ クシネ ナ。」  
eiki chiki / ukiornukar / aki kushne na.”  
e=iki ciki ukiornukar a=ki kus ne na.”  
お前・する したら 力較べをする 私たち・~をする つもりである よ
- 48 イタク カネ ホカナシミプ ヤイコアレ。  
itak kane / hokanashimip / yaikoare.  
itak kane hokanasi mip yaykoare.  
話す しながら 上から 着物 ~を自ら脱ぐ
- 49 チオカイ ナッカ エアラカパラペ チヤイコノイエ、  
Chiokai nakka / earkaparpe / chiyaikonoye,  
ciokay nakka ear kaparpe ci=yaykonoye,  
私 も 一枚だけの 薄手の着物 私・~を自らに巻きつける
- 50 チコテツテレケ ウンコテツテレケ。オロワン  
chikotetterke / unkotetterke. / Orowano  
ci=kotetterke un=kotetterke. orowano  
私(カ)・~にとびかかる 私(に)・~にとびかかる それから
- 51 ウポクナレアシ ウカンナレアシ ウコテレケアシ コ、  
upoknareash / ukannareash / ukoterkeash ko,  
upoknare=as ukannare=as ukoterke=as ko,  
互いを下にする・私たち 互いを上にする・私たち 互いにとびかかる・私たち すると
- 52 イネアプクス ポン ニツネカムイ オキラシヌ ワ  
ineapkushu / pon nitnekamui / okirashnu wa  
ineapkusu pon nitne kamuy okirasnu wa  
何とまあ 小さい 性悪である 神 力が強い して
- 53 フマシナンコラ キプネコロカ フナクパケタ  
humashnankora. / Kipnekorka / hunakpaketa  
humas nankora. ki p ne korka hunakpaketa  
感じがある のだろうか けれども どれほど経ってか

山の木原の上へ吹下された。  
木原の上に降ろされた。  
and were set down on the forest.

すると、悪魔の子は  
すると、悪魔の子は  
The devil's child

持前の疝癪を顔に現し  
持ち前の怒りを顔に表わし、  
showed his inborn anger on his face.

「生意氣な、本当に  
「これは驚いた。よくも  
"Well, well. You've really done it

お前そんな事をするなら、力競べをやらう。」  
そんなことをしたな。それなら力較べをしようじゃないか」  
now. If that's the way you want it, why don't we have a contest of strength?"

と言ひながら上衣を脱いだ。  
と言ひながら上着を脱いだ。  
he said, taking off his coat.

私も薄衣一枚になつて  
私も薄着一枚になつて  
I also stripped down to a single thin robe

組付いた。彼も私に組付いた。それから  
相手に組みついた。向こうも私に組みついてきた。それから  
and took hold of my opponent, and he took hold of me. Then

互に下にしたり上にしあつたり相撲をとつたが  
互いに下にしたり上にしたり、とつ組み合いを続けてみると、  
we continued grappling, taking turns losing and gaining the advantage,

大へんに悪魔の子が力のある事には  
悪魔の子が意外に手強いのは  
and I was surprised to find that the devil's child was

驚いた。けれども、とう  
驚いた。しかし、ようやく  
quite stubborn. But finally,

- 54 イッケウキ□□ モントウムキ□□  
 ikkeukiror / montumkiror  
 ikkew kiror mon tum kiror  
 腰 力 手 ~の中 力
- 55 チャイコサンケ、ポン ニツネカムイ  
 chiyaikosanke, / pon nitnekamui  
 ci=yaykosanke, pon nitne kamuy  
 私・~を自ら出す 小さい 性悪である 神
- 56 シカントアフルカ チエシタイキ、  
 shikantapkurka / chieshitaiki,  
 si-kan-tap-kurka ci=esitayki,  
 自分・の上・の肩・~の上一帯 私・~に~を投げつける
- 57 キムン イワ イワフルカシ チエキク フミ  
 kimun iwa / iwakurkashi / chiekik humi  
 kimun iwa iwa kurkasi ci=ekik humi  
 山の 岩山 岩山 ~の上一帯 私・~に~をぶつける 音
- 58 リムナタラ。チオアンライケ ポクナモシリ  
 rimnatara. / Chioanraike / poknamoshir  
 rimnatara. ci=oanrayke pokna mosir  
 ドシンドシンと鳴り響く 私・~を完全に殺す 地獄
- 59 チコオテレケ、フモカケ チャッコサヌ。  
 chikooterke, / humokake / chakkosanu.  
 ci=kooterke, hum okake cakkosanu.  
 私・~に~を踏み落とす 音 ~の後 さっと消える
- 60 タポロフ ペテソ□ ホシツパアシ コ  
 Taporowa / petesoro / hoshippaash ko  
 tap orowa pet esoro hosippa=as ko  
 それから 川 に沿って下へ 戻る(複)・私 すると
- 61 ペツ オッタ カムイチェプタラ ミナ ハウエ  
 pet otta / kamuicheputar / mina hawe  
 pet or ta kamuycep utar mina hawe  
 川 ~の所に サケ たち 笑う 声
- 62 シノツ ハウエ ペプニタラ コ□ ヘメシパ シリ  
 shinot hawe / pepunitara kor / hemeshpa shiri  
 sinot hawe pepunitara kor hemespa siri  
 遊ぶ 声 にぎやかである しながら のぼる(複) 様子
- 63 チョポパツキ、ケナシソ カタ  
 chopopatki, / kenashso kata  
 copopatki, kenas so ka ta  
 バチャバチャする 木原 面 ~の上に
- 64 アッカウタラ モマンペウタラ ウエンミナハウ  
 apkautar / momanpeutar / wenminahau  
 apka utar momanpe utar wen mina haw  
 牡鹿 たち 雌鹿 たち 激しい 笑う 声

とう、或る時間に、私は腰の力からだの力を  
 私は腰の力、腕中の力  
 I gathered the strength in my back and the strength

みんな出して、悪魔の子を  
 を出して、悪魔の子  
 in my arms and lifted the devil's child

肩の上まで引擔ぎ  
 を肩の上にひっ担ぎ  
 onto my shoulders and

山の岩の上へ彼を打ちつけた音が  
 山の岩の上へ叩きつけ、その音が  
 hurled him against the top of the rocky mountain

ぐわんと響いた。殺してしまつて地獄へ  
 がんと響いた。私は完全に殺して奈落の底へ  
 with a thud. I killed him completely and trampled him down

踏落したあとはしんと静まり返つた。  
 踏み落とした。奈落は、はるか深くて、その後落ちた音も聞こえてこなかった。  
 to the bottom of the abyss, and it was so deep that I didn't even hear him hit bottom.

それが済んで、私は流れに沿うて歸つて来ると、  
 それから、私は、川に沿って下りながら帰つて来ると、  
 After that, when I followed the river downstream back to my home,

川の中では鮭どもが笑ふ聲  
 川の中でサケたちが笑う声  
 the salmon were swimming upstream,

遊ぶ聲がかまびすしくのぼつて来るのが  
 遊ぶ声を騒がしく立てながらのぼつてきて  
 raising boisterous voices of merriment and

バチャバチャきこえる。山の木原では、  
 バシャバシャと音をたてている。木原では、  
 making splashing sounds as they went. Throughout the forest

牡鹿ども、牝鹿どもが笑ふ聲  
 オス鹿たちやメス鹿たちが笑う大声や  
 echoed the laughter and merry voices of the bucks



- 65 ウェンシノツハウ ロンロラッキ、  
 wenshinothau ronroratki,  
 wen sinot haw ronroratki,  
 激しい 遊ぶ 声 がやがやする
- 66 タアンタ トオンタ イペシリコンナ  
 taanta / toonta / ipeshirkonna  
 taan ta toon ta ipe sir konna  
 ここ に あそこ に 食ことする 様子 は
- 67 モイナタラ。チヌカラ フ  
 moinatara. / Chinukar wa  
 moynatara. ci=nukar wa  
 のんびりとしている 私・～を見る して
- 68 チエラムシンネ チウンチセヘ  
 chieramushinne / chiunchisehe  
 ci=eramusinne ci=un-cisehe  
 私・～で安心する 私・～の住む家
- 69 チコホシピ。  
 chikohoshipi.  
 ci=kohosipi.  
 私・～に戻る
- 70 アリ ポン オキキリムイ イソイタク。  
 ari pon Okikirmui isoitak.  
 ari pon Okikirmuy isoytak.  
 と 小さい オキキリムイ 物語る

遊ぶ聲が其處ら一ぱいになつて  
 大騒ぎして遊ぶ声がガヤガヤと響きわたり、  
 and does at play.

其處に此處に物を  
 あちこちで草を食む様子は  
 Grazing here and there,

食べてゐる。私はそれを見て  
 のんびりしている。私はそれを見て  
 they made a leisurely picture. Seeing this

安心をし、私の家へ  
 安心して自分の家  
 put my heart at ease, and I returned

歸つて来た。  
 に帰ってきた。  
 to my own house.

と、小さいオキキリムイが物語つた。  
 と、オキキリムイの子供は物語つた。  
 Thus recounted the child of Okikirmui.

## 〔言葉の説明〕

## ・タノタ フレフレ tanota hure hure (1行目)

このサケへは、意味がはっきりしています。タン オタ tan ota (この・砂) フレ フレ hure hure (赤い・赤い)。しかし、「この砂赤い赤い」という言葉と物語とは、ほとんど関係がないようにみえます。もしかすると、全く異なった物語のサケへが、この物語に使われたためにこういうことが起こったのかもしれませんが。そういうことが時々あるのです。

## ・ニツネカムイ nitne kamuy (3行目)

ニツネ nitne とは「硬い」という意味。ニツネ カムイ nitne kamuy を直訳すると「硬い神」となります。これでは何のことは全くわかりません。知里真志保によれば、「硬い」ことは、柔らかいよりもよくないこととされ、硬い神とは悪い神に通じるといいます。そこから nitne kamuy が、悪神、魔物、鬼といった意味になったといえます。

## ・コエカリ koekari (3行目)

これは < ko-e-kari (～に・頭・をくるりと回す) →～に顔を向ける→に会う。

## ・ネイタ クス ～ウエナ neita kusu ～ wen a (4行目)

ネイタ neita は < ne-i-ta (何・とき・に) →いつ。クス kusu は「～こそ」。ネイ タ クス nei ta kusu を直訳すると、「いつにこそ」。ウエナ wen a は < wen ya (悪い・か)。文全体で直訳すると「いつにこそ、悪魔の子の姿が悪いか？」→「いつ悪魔の子の姿が悪いだろうか」(反語) →「悪魔の子はいつでも姿が良い」。同様に「悪魔の子はいつでも美しい」。なぜ悪魔の子は美しいのでしょうか。とても不思議なことです。そこで中本ムツ子さんに聞いてみました。すると、よく山などで、異様に美しい者に会ったら気をつけなければいけないと言われているといえます。もしかすると悪魔の化身かもしれないからだといえます。そのことと関係があるのかもしれませんが。

## ・ウトメチウ utomeciw (5行目)

ウトメチウ utomeciw は < u-tom-eciw (互い・体の中ほど・に刺す) →お互い体の中ほどに刺す→(着物の前を)体の中ほどで合わせる。着物の前を合わせる。→着物を着る。

## ・チェプスットウイエ チキ クシネ ナ cep sut tuye ci=ki kusne na (10行目)

チェプ スツ トウイエ cep sut tuye は「魚・の根もと・を切る」→魚を根絶やする。チキ クシ ネ ナ ci=ki kus ne na 「私・をする・ことになるぞ」。全体で、私は魚を根絶やしにしてやるぞ。キ ki (～をする)の目的語は、チェプ スツ トウイエ cep sut tuye 魚を根絶やしにすること。

## ・アイエアク ay eak (12行目)

アイ エアク ay e-ak は「矢・で・射る」。アク ak は自動詞。エアク e-ak (で射る) は他動詞。似た言葉で、トゥカン tukan (～を射る) は他動詞。

## ・オロヘトポ orhetopo (16行目)

オロヘトポ orhetopo は < or・hetopo (全く・逆もどりして) →ぐるっと引き返して。

## ・シンナイ カネ レラブンパ sinnay kane rera punpa (34行目)

シンナイ～シンナイ sinnay～sinnay で「別々になっている」。カネ kane 「しつづ」→(なって)いて。レラ プンパ rera punpa 「風が～を持ち上げる」。ここの文全体で、「オス鹿の群とメス鹿の群を別々に風が持ち上げる」。

## ・リキヤ シリカン マクナタラ rikip siri kan maknatara (35行目)

リキヤ シリ カン rikip siri kan は、「高くのぼる・様子・虚辞」。マクナタラ maknatara は「明るく輝く」。全体で「高くのぼる様子は美しく輝く」。

## ・ケナシソ カ チオラテテ kenas so ka ciorapte (43行目)

ケナシ ソ カ kenas so ka は「木原・平面・上」→木原の上。チオラテテ ciorapte は < ci-o-rap-te (～される・～に・降りる・させる) →に降りる。木原の上に降りる。

知里幸恵は、ケナシ kenas を「山の木原」と訳しています。それは、単に、どこにでもある木原ではないことを示すためだと考えられます。その前に、矢を天空に向けて射ているので、木原の最も上手、つまり山の木原に向けて射たこととなります。川の源を射て魚に害を与え、陸地の源(山の木原)を射て鹿に害を与えるという対の関係があるのかもしれませんが。

## ・ウキロヌカラ アキ クシネ ナ ukiornukar a=ki kus ne na (47行目)

ウキロヌカラ ukiornukar は < u-kiror-nukar (互いに・力・を見る) 互いに相手の力を見あう→力くらべをする。アキ クシ ネ ナ a=ki kus ne na (私たち・をする・しようぞ) →おれたち～をしよう。キ ki の目的語は、ウキロヌカラ ukiornukar (力くらべをする) こと。全体で、「おれたち、力くらべをしようじゃないか」。

## ・ホカナシミア ヤイコアレ hokanasi mip yaykoare (48行目)

ホカナシ hokanasi は < ho-kan-asi (尻・上の・立てる)。これは < ho-kanna-asi (尻・上方へ・立てる) の変化したものかもしれません。意味は「上方から」。ミア mip は < mi-p (着る・もの) 着物。ヤイコアレ yaykoare は < yay-ko-are (自分・に対して・置く) →を脱ぐ。全体で、上方から着物を脱ぐ→上着を脱ぐ。

いまの岩波文庫版では、hokanacimip と変わっています。久保寺辞典にも、hokana-cimip (上衣) と出ています。しかし、知里幸恵の「ノート」を見ると、はっきりと hokanashi mip と書き分けられています。岩波文庫版は、久保寺と同じ解釈をして、書きかえたものと思われる。初版の郷土研究社版も、弘南堂版も「ノート」と同じです。

## ・チコテッテレケ ウンコテッテレケ ci=kotetterke un=kotetterke (50行目)

チコテッテレケ ci=kotetterke は < ci=koter-terke. koterke (にとびかかる。に組みつく) の反復形で、「私が何回もとびかかる」。ウンコテッテレケ un=kotetterke は < un-koter-terke

(私に・とびかかり、とびかかりする)。「私がとびかかり、向こうも私にとびかかってくる」ことをくりかえす。組んずほぐれず。

・ウポクナレアシ ウカンナレアシ ウコテレケアシ upoknare=as ukannare=as ukoterke=as (51行目)

ウポクナレ upoknare は < u-pokna-are (互いに・下方へ・を置く) → 互いに相手を下に  
する。ウカンナレ ukannare は < u-kanna-are (互いに・上方へ・を置く) → 互いに相手を  
上にする。ウコテレケ ukoterke は < u-koterke (互いに・にとびかかる) → 互いにとっ組み  
合う。全体で、「お互いに、相手を下にしたり上にしたりしてとっ組み合う」。

・イネアックス ～ナンコラ ineapkusū ～nankor a (52～53行目)

イネアックス ineapkusū は「なんとまあ」という驚きの表現。ナンコラ nankor a は <  
nankor ya (だろ～か)。全体で「なんとまあ～であろうか」。

・オキラシヌ ワ フマシ okirasnu wa hum as (52～53行目)

オキラシヌ okirasnu は < o-kir-asnu (尻・力・すぐれている) → (腰の) 力が強い。フ  
マシ hum as は「感じがする」。ワ wa は、前のことが後のことの原因、理由になっている  
ことを表わす「して」。全体で、「力強く感じた」。この2行全体で、「なんとまあ、悪魔の子  
は力強いことだろうか」。

・シカントアツルカ チエシタイキ si-kan-tap-kurka ci=esitayki (56行目)

原文では「shikautapkurka」とありますが、「shikantapkurka」の誤植と考えられます。シカ  
ントアツルカ si-kan-tap-kurka は「自分・の上・の肩・の上」。エシタイキ esitayki は「～  
をどさっと投げこむ」。全体で「自分の両肩の上にどっとひっ担ぐ」。この場合、カン kan  
はなくても意味は通じます。

・チエキク フミ リムナタラ ci=ekik humi rimnatara (57～58行目)

チエキク フミ ci=ekik humi は「私が～を打つ音」。リムナタラ rim-natara は「ドシンと  
いう」。リム rim は擬音語で、ドン、ドシンという音を表わす。「(岩の上)に私が打ちつけ  
た音がドーンとした」。

リムセ rimse (踊る。踊り) も < rim-se (ドン・という) から。踊るときに足でドンと  
床を踏む音からだろうと思われます。

・フモカケ チャッコサヌ hum okake cakkosanu (59行目)

フム オカケ hum okake は「音の後」。チャッコサヌ cakkosanu は < cak-kosanu (はれ  
る・さっと) → 「(曇がはれるように) さっと消える」。全体で「音の後はさっと消えた」。  
「地獄」があまりにも深いので下に落ちた音も聞こえてこなかったということ。知里幸恵の  
「踏み落としたあとはしんと静まり返った」は名訳。

・ロンロラッキ ronroratki (65行目)

ロンロラッキ ronroratki は < ror-ror-atki (擬音語の反復・自動詞化語)。ror は擬音語で、

この場合、ガヤガヤといった音。ロンロラッキ ronroratki で「ガヤガヤという音が回りいっ  
ぱいになる」こと。

・イペシリコンナ モイナタラ ipe sir konna moynatara (66～67行目)

ユーカラ語独得の～シリ コンナ ～タラという言い方。イペ シリ コンナ ipe sir  
konna は「食事をする・様子・は」。コンナ konna は虚辞で音節をふやしたり、雅な語調を  
作り出すために使われます。モイナタラ moynatara は「ゆったり・持続態」→のんびりし  
ている。「食べる様子はのんびりとしている」。

・ポン オキキムイ pon Okikirmuy (70行目)

このポン pon は、小さいという意味。「小オキキムイ」とはいったい何を意味してい  
るのでしょうか。「オキキムイの子供」と訳してもよいようです。というのは、知里幸恵  
が(注)で、両者の父親同士が敵だったとっているのので、その子と考えてもよいようです。  
久保寺の「アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究」に、オキクミが数多くの業績を残していて、  
その全てをととも一代では成しきれなかつたろうと考えて、その次の代のオキクミを小  
オキクミと日高・沙流川筋で呼んだと出ています。また「ワリウネクル wariune-kur 若  
君」とも呼んだといます。こうしてみると、英語名で、～ジュニアと二代目の俳優などを  
呼ぶのとよく似ています。

## コラム (15)

### オキキリムイとは何者か？

このテキストでは、オキキリムイ Okikirmuy と呼ばれます。一方、沙流では、オキクルミ Okikurmi と呼ばれています。

オキクルミとは、いったい何者なのでしょう。オキクルミ カムイとも呼ばれています。はたして神なのか人なのか？

金田一京助の「アイヌ始祖オキクルミ伝説」によれば、次のような人物像が浮かびあがってきます。

初めに国造りの神（コタン カラ カムイ）が、クニ造りを終え、この地上に誰を天上から送り出そうかと考えたときに下界行きを申し出たのがオキクルミだったといいます。オキクルミは天界から穀物のヒエを持って降りてきました。この地上に降りたオキクルミは、魔神たちを追い払い、人間たちが生活するうえで必要なありとあらゆることを教えました。耕作、はた織り、家の建て方、着物の作り方、食草や薬草の見分け方、舟の作り方、モリやヤスといった漁具の使い方、トリカブトを使った矢の製法、仕掛弓の作り方、などの技術面。そして、神を敬うことの大切さ、御幣を削って神を祭る方法、酒を捧げて神に祈ること、神々の由来、祈り言葉、病気の治し方、など生活文化の全般にわたります。そのためオキクルミは「文化神」とか「人間の始祖神」といわれています。

それでは、オキクルミは神なのでしょうか？

オキクルミの呼び名に「アイヌラックル aynu-rak-kur」というのがあります。これは「人間くさい神」と訳されていて、「人間の匂いのするお方」という意味です。またオキクルミのことを「半神半人」ともいいます。

金田一はこう書いています。「神と呼ばれもするけれど狭義の神すなわち火の神や水の神などという場合の神とは全く違う」と。そして、「アイヌが日常、酒や幣を捧げて拝むのは、この火神・水神・木神、それに狩の神や家の神などであって、これらの神の拝むべきことを教え、拝むべき仕方を教え説いた人がオキクルミなのである」と述べています。そして、それはキリスト教でいえば、ちょうどイエス・キリストに相当するもので、祈るときにたとえキリストの名を唱えることがあっても、祈りはエホバ神に捧げられているようなものだと金田一は言っています。

オキクルミは人間を教化した後に再び天界に帰ってしまったといわれます。神の子として地上につかわされたキリストと実によく似た在り方といえます。そして、このオキクルミが地上にいた時代を「霊力のある時代」と考えられていて、オキクルミが天に帰ってからは「衰えた時代（末の世）」と考えられています（第6話参照）。

余談ですが、クリスチャンだったアイヌの女性、バチラー八重子は、オキクルミとキリストをほとんど同一視したような短歌を数多く残していて、キリスト教とアイヌの宗教観が習合している様子がよくあらわれています。

## 12

カワウソが自らうたった謡

「カッパ レウレウ カッパ」

esaman yayeyukar

Song sung by otter god



## 第12話

# カワウソが自らをうたった謡 「カッパ レウレウ カッパ」

### 〔物語とその背景〕

これはカワウソが人間をバカにしたために無駄な死をとげる物語。

ある日、私（カワウソ）は、川を遊びながら泳ぎ下って、サマユンクルの水くみ場となっている枝川の川口へ行くと、サマユンクルの妹が神のように美しい様子で片手に手桶、片手にガマの束を持ってやってきた。私は川のふちで頭だけ出して、「あんたは、父親と母親をもっているかい？」ときいた。娘はびっくりして目をきょろきょろさせ、私を見つけると、怒りを顔にむらむらと表わして、「なによ、このぺちゃんこ頭、つぶれ頭。人の嫌がることをわざときいて。犬たち、おいで、おいで……」といった。すると大きな犬がどつとやってきて、私を見ると牙をガチガチ噛み鳴らした。私はびっくりして川の底へ潜って、川底を伝って下流へ逃げた。

そうすると、今度はオキキリムイの水くみ場となっている入口に出た。そこで頭を水から突き出していると、オキキリムイの妹が神のような美しい様子で片手に手桶、片手にガマの束をもってやってきた。そこで私は、「あんた、父親、母親をもっているかい？」というと、娘は驚いて目をきょろきょろさせて、私を見つけると、怒りの形相もあらわにこう言った。

「なによ、このぺちゃんこ頭、つぶれ頭。人をばかにして。犬よ、おいで……」という大きな犬たちがどつとやって来た。先ほどうまく逃げられたことを思い出して、おかしくなった。そして、また川の底へ潜って逃げようとしたら、まさか犬たちがそんなことをしようとは思ってもよらなかったのだが、牙を鳴らしながら川の底まで入ってきて私に飛びかかり陸にひきずり上げて、頭も体もメチャメチャに噛みついたりむしったりした。しまいには、どうなったのか私は分からなくなってしまった。ふと気がつくと、大きなカワウソの耳と耳の間に私は座っていた。

サマユンクルにもオキキリムイにも父母がいないのを私が知ってわざとあんな悪いいたずらをしたので私は罰を与えられオキキリムイの犬たちに殺され、ひどい死に方をしてしまった。これからのカワウソたちよ、決して人間をバカにしてはいけなぞ、とカワウソは物語った。

娘たちが、手桶とガマの束を手を持って入口に来たのはなぜかということ、ガマの葉でゴザを編むときには、その前に少し水で湿らせた方が編みやすいためです。

知里幸恵も（注）で書いているように、普段なんでもないときに、他人の死んだ親のことをきくのは、とてもよくないこととされています。そのためカワウソが突然、こういうこと

を聞いたので、罰を受けることになったのです。このカムイユーカーラは人間への一種のウパシクマ（教訓）にもなっていると考えられます。

エサマン ヤイエユカラ 「カッパ レウレウ カッパ」  
 Esaman yaieyukar, “ Kappa reureu kappa ”  
 esaman yayeyukar, “ kappa rewrew kappa ”  
 カワウソ 自らを物語る カッパ レウレウ カッパ

サケヘ：カッパ レウレウ カッパ kappa rewrew kappa

- 1 カッパ レウレウ カッパ  
 Kappa reureu kappa.  
 kappa rewrew kappa.  
 カッパ レウレウ カッパ
- 2 シネアントタ ペテソロ シノタシ コロ  
 Shineantota / petesoro / shinotash kor  
 sinean to ta pet esoro sinot=as kor  
 ある 日 に 川 に沿って下へ 遊ぶ・私 しながら
- 3 マアシ フ サパシ キフ、 サマユンクル  
 maash wa / sapash kiwa, / Samayunkur  
 ma=as wa sap=as ki wa, Samayunkur  
 泳ぐ・私 して 出る(複)・私 ~をして サマユンクル  
 する
- 4 コロ ワッカタル プトゥフ タ サパシ アフ、  
 kor wakkataru / putuhu ta / sapash awa,  
 kor wakkata ru putuhu ta sap=as awa,  
 ~の 水汲み 路 ~の口 に 出る(複)・私 したところ
- 5 サマユンクル コツ トウレシ カムイ シリ ネ  
 Samayunkur / kot tureshi / kamui shiri ne  
 Samayunkur kor turesi kamuy siri ne  
 サマユンクル ~の 妹 神 ~のように
- 6 オアツテツコロ ニアトウシ アニ オアツテツコロ  
 oattekkor / niatush ani / oattekkor  
 oattekkor niatus ani oattekkor  
 片手で 桶 ~を持つ 片手で
- 7 キナタントウカ アンパ カネ エク コラン ワクス  
 kinatantuka / anpa kane / ek koran wakusu  
 kina tantuka anpa kane ek kor an wakusu  
 蒲 束 ~を持つ(複) して 来る しながら いる したので
- 8 ペツパルルケタ チサパハ パテク チエトウツカ、  
 petparurketa / chisapaha patek / chietukka,  
 pet parurke ta ci=sapaha patek ci=etukka,  
 川 ~のふち に 私・~の頭 だけ 私・~を突き出す
- 9 「オナ エコラ?  
 “ Ona ekora?  
 “ ona e=kor ya?  
 父 お前・~を持つ か

瀬が自ら歌った謡「カッパレウレウカッパ」  
 瀬が自ら歌った謡「カッパ レウレウ カッパ」  
 Song Sung by the Otter God "Kappa reureu kappa"

カッパレウレウカッパ  
 カッパ レウレウ カッパ  
 Kappa reureu kappa

或日に、流れに沿うて遊びながら  
 ある日、流れに沿って遊びながら  
 One day, I was following the river, playing

泳いで下りサマユンクルの  
 泳いで下ってきてサマユンクル  
 as I went downstream, and I came to the entrance

水汲路のところに来ると、  
 の水くみ路の入口に出ると、  
 to Samayunkur's water-drawing path.

サマユンクルの妹が神の様な美しい容子で  
 サマユンクルの妹が神のように美しい様子で  
 Samayunkur's younger sister, with the beautiful appearance of a goddess,

片手に手桶を持ち片手に  
 片手に手桶を持ち片手に  
 came along holding a bucket in one hand

蒲の束を持つて来てあるので  
 ガマの束を持って来ていた。そこで  
 and a bundle of cattails in the other. Just then,

川の縁に私は頭だけ出し、  
 私は川のふちに頭だけ突き出して、  
 I poked just my head out of the water at the edge of the river, saying:

「お父様をお持ちですか?  
 「あんたお父さんはいるの?  
 "Do you have a father?"

- 10 ウヌ エコラ?」 イタカシ アフ  
 Unu ekora?" itakash awa  
 unu e=kor ya?" itak=as awa  
 母 お前・～を持つ か 話す・私 したところ
- 11 ポン メノコ ホマトウルイペ シツカンカリ  
 pon menoko / homaturupe / shikkankari  
 pon menoko homatu ruy pe sikkankari  
 小さい 女 驚く 激しく～する 者 きよろきよろする
- 12 ウンヌカラ アフ コロ ウエンプリ エナントウイ カ  
 unnukar awa / kor wenpuri / enantui ka  
 un=nukar awa kor wen puri e-nan-tuyka-  
 私・～を見る したところ ～を持つ 悪い 気性 ～の先・顔・～の上側
- 13 エパラセレ、  
 eparsere,  
 -eparsere,  
 ～で～を沸き起こらせる
- 14 「トイ サパカプテク ウェン サパカプテク、  
 “Toi sapakaptek, / wen sapakaptek,  
 “toy sapa kaptek, wen sapa kaptek,  
 ひどい 頭 平べったい 悪い 頭 平べったい
- 15 イオカプシパ、ニマキタラウタラ、チョ チョ・・・」  
 iokapushpa, / nimakitarautar, / cho cho.....”  
 iokapuspa, nimakitara utar, co co.....”  
 人の嫌なことをほじくり出す 歯をむき出している 者たち(犬) チョ チョ
- 16 アリ、ハウエアン アフ ポロ ニマキタラウタラ  
 ari, hawean awa / poro nimakitarautar  
 ari, hawean awa poro nimakitara utar  
 と 言う したところ 大きい 歯をむき出している 者たち
- 17 ウサオクタ、ウンヌカラ アフ ノッセア フミ  
 usawokuta, / unnukar awa / notsep humi  
 u-saokuta, un=nukar awa notsep-humi  
 互いをどっと前に出す 私・～を見る したところ 牙 ～の音
- 18 タウナタラ。チエホマトウ ペタサマ  
 taunataru. / Chiehomatu, / petasama  
 tawnataru. ci=ehomatu, pet asama  
 ガチガチという 私・～に驚く 川 ～の底
- 19 チコラウオシマ、ナニ ペタサム ペカ  
 chikorawoshma, / nani petasam peka  
 ci=korawosma, nani pet asam peka  
 私・～に潜り込む すぐ 川 ～の底 を通って
- 20 キラアシ フ サパシ。  
 kiraash wa sapash.  
 kira=as wa sap=as.  
 逃げる・私 して 下る(復)・私

お母様をお持ちですか？」と云ふと、  
 お母さんはいるの？」と言うと、  
 Do you have a mother?" When I said this,

娘さんは驚いて眼をきよろきよろさせ  
 娘はひどく驚いて目玉をきよろきよろさせて  
 the girl was terribly surprised and looked around.

私を見つけると、怒の色を顔に  
 私を見つけると、怒りを顔に  
 When she found me, her face

現して、  
 表わして、  
 grew angry.

「まあ、にくらしい扁平頭、悪い扁平頭が  
 「なによ、このぺちゃんこ頭、つぶれ頭、  
 "Why, you flat-headed otter, you squashed-head otter,

人をばかにして。犬たちよココ・・・」  
 人の嫌うことをほじくり出して。犬たち、おいで、おいで・・・」  
 saying mean things to people! Here, dogs! Come here, boys!..."

と言ふと、大きな犬どもが  
 と言うと大きな犬たちが  
 When she said this, a pack of big dogs

駈け出して来て、私を見ると牙を鳴ら  
 いっせいにやってきて、私を見ると牙の音を  
 came along all at once, gnashing their fangs

してゐる。私はビツクリして川の底へ  
 ガチガチ噛み鳴らした。私はびっくりして川の底  
 when they saw me. Surprised, I dived down to the bottom

潜り込んで直ぐ其のまゝ川底を通つて  
 へ潜り、すぐに川底を伝つて  
 of the river and escaped along the river bed

逃げ下つた。  
 逃げ下つた。  
 as fast as I could.

- 21 サパシ アイネ オキキリムイ コロ ワツカタル  
Sapash aine / Okikirmui / kor wakkataru  
sap=as ayne Okikirmuy kor wakkata ru  
下る(複)・私 したあげく オキキリムイ ~の 水汲み 路
- 22 プトゥフ タ チサパハ パテク チエトゥツカ、  
putuhu ta / chisapaha patek / chietukka,  
putuhu ta ci=sapaha patek ci=etukka,  
~の口 に 私・~の頭 だけ 私・~を突き出す
- 23 インカラシ アフ オキキリムイ コツ トウレシ  
inkarash awa / Okikirmui / kot tureshi  
inkar=as awa Okikirmuy kor turesi  
見る・私 したところ オキキリムイ ~の 妹
- 24 カムイ シリネ オアツテッコ ニアトウシ アニ  
kamui shirine / oattekkor / niatush ani  
kamuy siri ne oattekkor niatus ani  
神 ~のように 片手で 桶 ~を持つ
- 25 オアツテッコ キナタントウカ アンパ カネ  
oattekcor / kinatantuka / anpa kane  
oattekcor kina tantuka anpa kane  
片手で 蒲 束 ~を持つ(複) して
- 26 エク ワクス イタカシ ハウエ エネ オカイ：——  
ek wakushu / itakash hawe / ene okai：——  
ek wakusu itak=as hawe ene okay i：——  
来る したので 話す・私 ~の声 このように ある(複) こと
- 27 「オナ エコラ？  
“Ona ekora?  
“ona e=kor ya?  
父 お前・~を持つ か
- 28 ウヌ エコラ？」 イタカシ アフ  
Unu ekora?” itakash awa  
unu e=kor ya?” itak=as awa  
母 お前・~を持つ か 話す・私 したところ
- 29 ポンメノコ ホマトウルイペ シツカンカリ  
ponmenoko / homaturuipe / shikkankari  
pon menoko homatu ruy pe sikkankari  
小さい 女 驚く 激しく~する 者 きよろきよろする
- 30 ウンヌカラ アフ コロ ウエンプリ エナントウイカシ  
unnukar awa / kor wempuri / enantuikashi  
un=nukar awa kor wen puri e-nan-tuykasi-  
私・~を見る したところ ~を持つ 悪い 気性 ~の先・顔・~の上側
- 31 エパラセレ、  
eparsere,  
-eparsere,  
~で~を沸き起こらせる

そうして、オキキリムイの水汲路の  
下っていくと、オキキリムイの水くみ路の  
When I got downstream, I came to the entrance to Okikirmui's

川口へ頭だけだして  
口へ出たので、そこで頭だけ突き出して  
water-drawing path. I stuck just my head

見ると、オキキリムイの妹が  
見ていると、オキキリムイの妹が  
out of the water, and Okikirmui's younger sister,

神の様に美しい様子で片手に手桶を持ち  
神のように美しい様子で片手に手桶を持ち  
with the beautiful appearance of a goddess and holding a bucket in one hand

片手に蒲の束を持つて  
片手にガマの束を持って  
and a bundle of cattails in the other,

来たので私のいふことには、  
やって来たので、私はこう話しかけた。  
came along, so I called to her,

「御父様をお持ちですか？  
「あんた父親がいるの？  
"Do you have a father?

御母様をお持ちですか？」といふと、  
母親がいるの？」と言うと、  
Do you have a mother?" When I said this,

娘さんは驚いて眼をきよろきよろさせ  
娘はひどく驚いて目をきよろきよろさせて  
she was terribly surprised and looked around.

私を見ると、怒りの色を顔に  
私を見つけると、怒りを顔に  
When she found me, her face

表して、  
表わして、  
grew angry.



- 32 「トイ サパカプテク ウェン サパカプテク  
 “Toi sapa kaptek, / wen sapa kaptek  
 “toy sapa kaptek, wen sapa kaptek  
 ひどい 頭 平べったい 悪い 頭 平べったい
- 33 イオカプシパ、ニマキタラウタラ、チョ チョ・・・」  
 iokapushpa, / nimakitarautar, / cho cho.....”  
 iokapuspa, nimakitara utar, co co.....”  
 人の嫌なことをほじくり出す 歯をむき出している 者たち チョ チョ
- 34 イタク アフ ポロ ニマキタラウタラ チサオクタ。  
 itak awa / poro nimakitarautar / chisaokuta.  
 itak awa poro nimakitara utar ci-saokuta.  
 話す したところ 大きい 歯をむき出している 者たち される・～をどっと前に出す
- 35 シリキ チキ エシランペ チエシカルン、  
 Shirki chiki / eshiranpe / chieshikarun,  
 sirki ciki esir an pe ci=esikarun,  
 様子である したら さきほど ある こと 私・～を思い出す
- 36 チエミナルスイ コロ ペタサマ チコラウオシマ  
 chieminarushui kor / petasama / chikorawoshma  
 ci=emina rusuy kor pet asama ci=korawosma  
 私・～を笑う ～したい しながら 川 ～の底 私・～に潜り込む
- 37 キラアシ クス イキチアシ アフ、  
 kiraash kushu / ikichiash awa,  
 kira=as kusu iki-ci=as awa,  
 逃げる・私 ために する(複)・私 したところ
- 38 センネカスイ ニマキタラウタラ イキチ クニ  
 sennekashui / nimakitarautar / ikichi kuni  
 senne ka suy nimakitara utar iki-ci kuni  
 ちっとも～ない 歯をむき出している 者たち する(複) と
- 39 チラムアイ ノッセブ フミ タウナタラ、  
 chiramuai / notsep humi / taunataru,  
 ci=ramu a i notsep-humi tawnataru,  
 私・～を思う したのに 牙 ～の音 ガチガチという
- 40 ペタサム パクノ ウンコテツテレケ  
 petasam pakno / unkotetterke  
 pet asam pakno un=kotetterke  
 川 ～の底 まで 私・～にとびかかる
- 41 ヤオロ ウネカッタ、チサパハ チネトパケ  
 yaoro unekatta, / chisapaha / chinetopake  
 ya oro un=ekatta, ci=sapaha ci=netopake  
 岸 ～の所 私・～を～に引っ張る 私・～の頭 私・～の体
- 42 アプクプク アリシパリシパ キ アイネノ  
 apukpuk / arishparishpa / ki aineno  
 a=pukpuk a=risparispa ki ayneno  
 される・～を噛む噛む される・～をむしるむしる ～をする したあげく

「まあ、にくらしい扁平頭、悪い扁平頭が  
 「なによ、このぺちゃんこ頭、つぶれ頭、  
 "Why, you flat-headed otter, you squashed-head otter,

人をばかにして。犬たちよココ・・・」  
 人の嫌がることをほじくり出して。犬たち、おいで、おいで・・・」  
 saying mean things to people! Here, dogs! Come here, boys!..."

と言ふと大きな犬どもが駈出して来た。  
 と言うと大きな犬たちがさっとやって来た。  
 she said, and a pack of big dogs came along.

それを見て私は先刻の事を思出し  
 それを見て私は先ほどのことを思い出して  
 When I saw them, I remembered what had happened a little while ago.

可笑しく思ひながら川の底へ  
 おかしくなってしまう、また川の底に潜り  
 Amused, once again I dived to the bottom of the river

潜りこんで逃げようとしたら  
 逃げようとしていると  
 and tried to escape. Then,

まさか犬たちがそんな事をしようとは  
 まさか犬たちがそんなことをするとは  
 I never imagined the dogs would do

思はなかつたのに、牙を鳴らしながら  
 思わなかつたのに、牙の音をガチガチ噛み鳴らしながら  
 such a thing, but gnashing their fangs,

川の底まで私に飛付き  
 川底までやってきて私に飛びかかり  
 they came to the bottom of the river and pounced on me

陸へ私を引摺り上げ、私の頭も私の體も  
 陸に私をひきずり上げ、私の頭も私の體も  
 and dragged me up onto the river bank and bit and gnawed

噛みつかれ噛みむしられて、しまひに  
 噛みつかれ、噛みむしられ、しまひには  
 at my head and body, and finally

- 43 ネコナネヤ チエラミシカレ。  
nekonaneyya / chieramishkare.  
nekona ne ya ci=eramiskare.  
どのように～であるか 私・～がわからない
- 44 フナクパケタ ヤイシカルナシ インカラシ アワ、  
Hunakpaketa / yaishikarunash / inkarash awa,  
hunakpaketa yaysikarun=as inkar=as awa,  
どれほど経ってか 気が付く・私 見る・私 したところ
- 45 ポロ エサマン アスルペウトウツタ ロカシ カネ  
poro esaman / ashurpeututta / rokash kane  
poro esaman asurpe utur ta rok=as kane  
大きい カワウソ 耳 ～の間に 座る(複)・私 して
- 46 オカヤシ。  
okayash.  
okay=as.  
いる(複)・私
- 47 サマユンクル カ オキキリムイ カ  
Samayunkur ka / Okikirmui ka  
Samayunkur ka Okikirmuy ka  
サマユンクル も オキキリムイ も
- 48 オナ カ サク ウヌ カ サク ルウェ チエラマン ワ  
ona ka sak / unu ka sak ruwe / chieraman wa  
ona ka sak unu ka sak ruwe ci=eraman wa  
父 も ～がない 母 も ～がない こと 私・～をわかる して
- 49 エネアン イララ チキ クス アウンパナクテ、  
enean irara / chiki kushu / aunpanakte,  
ene an irara ci=ki kusu a=un=panakte,  
そのように ある いたずら 私・～をする ので される・私・～を罰する
- 50 オキキリムイ コロ セタウタラ オロワ アウンライケ、  
Okikirmui kor / setautar orowa / aunraike,  
Okikirmuy kor seta utar orowa a=un=rayke,  
オキキリムイ ～の 犬 たち から される・私・～を殺す
- 51 トイ ライ ウェン ライ チキ シリ タパン。  
toi rai / wen rai / chiki / shiri tapan.  
toy ray wen ray ci=ki siri tapan.  
ひどい 死 悪い 死 私・～をする 様子である
- 52 テワノ オカイ エサマヌタラ イテッキ イララ ヤン。  
Tewano okai / esamanutar / itekki irara yan.  
te wano okay esaman utar itekki irara yan.  
これ から 暮らす(複) カワウソ たち 決して～するな いたずらする しなさい
- 53 アリ エサマン ヤイエユカラ。  
ari esaman yaieyukar.  
ari esaman yayeyukar.  
と カワウソ 自らを物語る

何うなつたかわからなくなつてしまつた。  
どうなつたか私は分らなくなつてしまつた。  
I lost consciousness.

ふと気が着いて見ると  
ふと気がついてみると、  
When I came to and looked around,

大きな獺の耳と耳の間に私はすはつて  
大きなカワウソの耳と耳の間に私は座つて  
I found myself sitting between the ears of a big

ゐた。  
いた。  
otter.

サマユンクルもオキキリムイも  
サマユンクルにもオキキリムイにも  
Although I knew that neither Samayunkur nor Okikirmui

父もなく母もないのを私は知つて  
父も母もないのを私が知つて  
had a father or a mother,

あんな悪戯をしたので罰を當てられ  
あんな悪いいたずらをしたので、私は罰を受け、  
I had played a mean trick, and for my punishment

オキキリムイの犬どもに殺され  
オキキリムイの犬たちに殺され  
I was killed by Okikirmui's dogs and

つまらない死方、悪い死方をするのです。  
ひどい死悪い死をとげたのである。  
I died a terrible death, a bad death.

これからの獺たちよ、決して悪戯をしなさんな。  
これからのカワウソたちよ、決して人間をバカにしてはならないぞ。  
So I say to all you young otters: you must never make fun of the humans.

と、獺が物語つた。  
と、カワウソは自らを物語つた。  
Thus told an otter of himself.

## 〔言葉の説明〕

・カッパ レウレウ カッパ kappa rew rew kappa (1行目)

知里真志保は、このサケへを、kap-pa (つぶれ・頭)、rew (止まる) として、「つぶれ頭とまれ とまれ つぶれ頭」と訳しています。

・ワッカタル プトゥフ wakka ta ru putuhu (4行目)

ワッカ タル wakka ta ru は、「水・くみ・路」。プトゥフ putuhu は、プツ put (口) の所属形の長い形。川から水くみ路に入る入口のこと。

・トゥレシ turesi (5行目)

妹を表す言葉は二つあります。「(女性の) 妹」は マタキ matak-i といいますが、このトゥレシ turesi は、「(男性の) 妹」を意味します。この場合、サマユンクルという兄から見た妹。しかし、その男性の恋人や妻であることもあります。日本語の「わが妹 (いも)」といって、恋人や妻を表わすことと似ています。

・カムイ シリ ネ kamuy siri ne (5行目)

カムイ シリ ネ kamuy siri ne で「神々しく」という意味。神のように美しく、という意味。

・オアッテッコロ oattekor (6行目)

オアッテッコロ oattekor は < oar-tek-kor (片方・手・を持つ) 片手に持つ。

・ニアトウシ niatus (6行目)

ニアトウシ niatus は < ni-at-us (木・弦つる・に付く) 木製の弦がついているもの、という意味。桜の木の皮などで容器を作り、そこに手で持つための木製の弦を付けたもの→手桶。

・キナタントウカ kina tantuka (7行目)

キナ kina は ムン mun (雑草) とは違って、役に立つ草。この場合、ガマというゴザ編みに使う草。タントウカ tantuka は、日本語の「手束 (たづか)」からの借用語かといえます (切替英雄氏による)。古語辞典には、清音で「たづか (手束)」と出ています。「たづか」はこれの変化したものでしょうか。

・ホマトウルイペ homatu ruy pe (11行目)

ホマトウ ルイ ペ homatu ruy pe は「驚き・が激しく・て」。この場合の ペ pe は、接続助詞として用いられます。

・シッカカリ sikkankari (11行目)

シッカカリ sikkankari は < sik-kar-kari (目・をくるくる回わす) 目をくるくる回わす。目をきよろきよろさせる。

・サパカプテク sapakaptek (14行目)

サパカプテク sapakaptek は < sapa-kaptek (頭・ぺちゃんこである)。カプテク kaptek は < kap-tek (皮・のようである) →うすい。ぺちゃんこ。つぶれている。全体でぺちゃんこ頭、つぶれ頭。

・イオカプシパ iokapuspa (15行目)

イオカプシパ iokapuspa は < i-oka-puspa (人・の後・を掘り出す) →人の背後にあるものを掘り出す→普段なんでもないときに、他人の死んだ親のことなどを聞くこと。大変よくないこととされています。それをわざとカワウソはしたのです。相手をバカにした行為。

・ニマキタラウタラ nimakitara utar (15行目)

ニマキタラ nimakitara は < nimaki-tara (その歯・をかかげる) →歯をあらわす。歯をむき出す。ここでは名詞として使われていて、「歯むき出し」=犬。山のけものたちから犬は「歯むき出し」と呼ばれて恐れられています。全体で「犬たち」。

・チョチヨ co co (15行目)

チョチヨ co co は、犬を呼ぶとき出す音。おそらく、言葉というよりも、口をとがらせて舌先で出すチョという音。今でも我々は犬やネコなどの注意をひくときにこんな音を出しています。

・ウサオクタ usaokuta (17行目)

ウサオクタ usaokuta は < u-sa-o-kuta (一緒に・前・に・~をあける) → (容器の中の水をざっとあけるように) みな一緒にどっと前に行く→どっとやって来る。

・エシランペ チエシカルン esir an pe ci=esikarun (35行目)

エシランペ esir an pe は、「さっき。先ほど」。アン ペ an pe は「ある・こと」。さっきあったこと。チエシカルン ci=esikarun は「私・~を思い出す」。全体で、「先ほどあったことを思い出す」。犬が追ってこれないので川底を伝ってうまく逃げられたことを思い出した。

・チエミナルスイ コロ ci=emina rusuy kor (36行目)

チエミナルスイ emina rusuy は「笑いたい」→おかしくてたまらない。コロ kor は「そういう状態で」。おかしくてたまらないまま。

・センネカスイ ~クニ チラムアイ senne ka suy ~ kuni ci=ramu a i (38~39行目)

センネ カ スイ senne ka suy は「少しも~ない」。ア イ ai は「~なのに」。センネカ スイ ~クニ チラム ア イ senne ka suy ~ kuni ci=ramu a i で、「まさか~ [するなど] とは思ってもみななかったのに」。ここでは、犬が川底まで潜ってくるなどとは思ってもみななかったのに、ということ。

・ヤオロ ウネカッタ ya oro un=ekatta (41行目)

ヤ オロ ya oro は「陸・の所」。ウネカッタ un=ekatta は「私を・(陸) ~に~をさっ

と引っ張る」。全体で「私を陸へさっと引っ張り上げる」。

・アプクプク アリシパリシパ a=pukpuk a=risparispa (42行目)

アプクプク a=pukpuk とアリシパリシパ a=risparispa のア a=は受身のように訳して「～される」。人称接辞から プクプク pukpuk は他動詞と考えられますので、「～を突き出す(反復)」。(歯)を突き出す→噛む。しかし、プク puk は自動詞で他動詞は プッカ pukka なので、もしかすると プクプッカ pukpukka が元の形かもしれません。

アプクプク a=pukpuk は、くり返し噛まれる。アリシパリシパ a=risparispa のリシパ rispa は「～をむしる(複)」こと。くり返し噛みむしられる。

・アウンパナクテ a=un=panakte (49行目) / アウンライケ a=un=rayke (50行目)

アウンパナクテ a=un=panakte は「～される・私を・を罰する」→私は罰を与えられる。

アウンライケ a=un=rayke は「～される・私を・を殺す」→私は殺される。

コラム (16)

カワウソはなぜ物忘れが激しいのか？

カワウソという動物の最大の特徴は、陸上を何キロも歩いたり走ったりできるのと同時に、水中も自由自在に泳ぐことができる点にあります。この物語は、そんな水陸両方の行動を誰もできないとカワウソが思っていたところ、犬が川底まで潜ってきたために殺されてしまうことになった話。これは、オキキリムイの犬だからできたことで、サマユンクルの犬はできなかったことです。

カワウソは国造りの神の命を受けて天の神の意向を聞いてくる重要な役割を与えられたと伝承されています。とても重要な役目をもつ者と考えられているのです。それはなぜなのでしょう？

カワウソは、日本各地でも特異な動物として扱われています。石川県の能登地方では、河童(かっぱ)に類似したものととらえられてきました。四国の小豆島ではカワウソを神にまつています。そして人を化かす川天狗の正体もカワウソだと伝えられています。こうしたカワウソの怪異性は、水と陸にまたがる生態に由来するからだろうと考えられています。

アイヌ世界でもカワウソは化けると考えられています。美幌では、夜、エサマン esaman (カワウソ)という言葉を使ってはいけないとされます。もし使うとカワウソが何かに化けて出てくるといわれました。また虻田に伝わる話では、カワウソが村長の娘に子供をませたといいます。空知、釧路には、カワウソが夜になると娘の所に忍びこんで娘の命をとろうとしたという話が伝えられています。

カワウソは、昼は主に陸上ですごし、夜になると(夜行性動物なので)川の中に潜って活動します。こうした生態から、夜は、別な生きものになる(化ける)ように考えられたのかもしれませんが。カワウソは水中では、耳と鼻孔を閉じて水が入らないようにできます。目は頭部の上端に付いているので、このテキストのように、そこだけ水面から出すことがよくあります。このように水陸両用の生態をもつ忍者のような不思議な動物なので、特別な力をもった者と考えられたのでしょう。

そのためか、カワウソの頭骨を使ってト占(うらない)を行った話が多く伝えられています。知里真志保は、有名な「呪者とカワウソ」という論文の中で、esamanとは、e-saman-ki(～で・巫術・を行う)が語源だろうと述べています。それは、カワウソの頭骨でト占を行ったことがもとになっているからだといえます。カワウソの頭骨で巫術を行ったことがもとになって esaman という言葉がカワウソになったのだろうといえます。そしてカワウソが「物忘れ」をする動物だといわれるのも、巫者(シャーマン saman)が「忘我」の状態です。神がかかることと関係しているだろうといえます。カワウソは、ウォルン チロンヌネ wor-un-cironnup(水中の動物)ともいわれます。

もとはといえば、みなカワウソの水陸両用の怪異な生態に由来するようです。esaman(カワウソ)は、シャーマン(saman)と関係するので、物忘れ(忘我)が激しいと考えられたのです。アイヌ世界以外では、カワウソが物忘れする話をきかないので、やはり saman(シャーマン、巫者)という言葉が物忘れということと関係しているのでしょう。

13

沼貝が自らうたった謡  
「トヌペカ ランラン」

pipa yayeyukar

Song sung by mussel god



## 第13話

沼貝が自らをうたった謡<sup>うた</sup>  
「トヌペカ ランラン」

〔物語とその背景〕

これはカワシンジュガイの物語。川や沼で見られるカラス貝のような一見地味な貝ですが、不思議な力をもった貝なのです。

日照が続き、水が干上がって私（カワシンジュガイ＝ここでは沼貝と呼ばれる）は今にも死にそうになっていた。「誰か水を飲ませて下さい。水を！」と私が叫び声を上げていると、はるか浜の方から一人の女がカゴを背負ってやってきた。私が泣いていると女はそばを通り私を見つけると「いやな沼貝悪い沼貝。いったい何でこんないやな泣き声を出しているのでしょう」と言って私を踏みつけ、蹴とばし、つぶしたあげく山の方へ行ってしまった。

「ああ痛い、おお苦しい。水を！」私は叫び声をあげていると、また浜の方から一人の女がカゴを背負ってやってきた。私が「誰か水を飲ませて下さい。ああ痛い、おお苦しい。水を！」と叫び声をあげると、その娘は神のような気高い様子で私のそばにやってきて私を見ると、「なんて気のどくなんでしょう。暑くて沼貝たちの寝床が乾いてしまっ、水に不自由しているのだわ。それにどうしたのかしら、踏みつけられているようだわ」と言いながら私たち（沼貝）をみな集めてフキの葉に入れ、きれいな湖の中に入れてくれた。清い冷水で生き返り私は元気になった。そこで初めて、私はあの女たちの素性を探ってみることにした。先に来て私を踏みつぶしたにくい女はサマユンクルの妹だった。そして私たちを憐れんで助けてくれた淑やかな娘さんは、オキキリムイの妹だった。私はサマユンクルの妹を憎んで、その粟畑を枯らしてしまい、オキキリムイの妹の粟畑を実り豊かにした。そして、その年、オキキリムイの妹は豊かな収穫に恵まれた。私（沼貝）のおかげでそうなったことを知って、娘は沼貝の殻で粟の穂を摘んだ。それからは毎年、人間の女たちは粟の穂をつむときには沼貝の殻を使うようになった。と一つの沼貝が物語った。

沼貝が干上がってしまった原因をここでは、日照が続いたとしていますが、類話では、大水に流されて泥の上にあがってしまったとなっています。沼貝が水を欲しがって苦しんでいるときに、二種類の人間が通る点は、どの類話も共通しています。そして、沼貝をやさしく水に戻してくれた女性の畑の実りを豊かにする点も共通しています。しかし、別な類話では、山でクマがたくさんとれるようになったというようになっています。

カワシンジュガイは川の底に寝ているのではなく、立っています。それを足で探り当てて取ります。貝はナベのお湯の中に入れるとすぐに口をあげ、身が固くならないうちにさっと上げ、刻んで酢味噌にしたり、ネギと塩であえて食べたりしました。この貝は、ほとんど一年中川でとることができました。このように、沼貝は、食生活の中に色どりをそえる食べ物となりました。しかし、この貝が、実りを豊かにしたり、猟運をよくするという不思議な力を発揮したのはなぜでしょうか。それは「コラム」でふれることにします。

ピパ ヤイエユカラ 「トヌペカ ランラン」  
 Pipa yaieyukar, "Tonupeka ranran"  
 pipa yayeyukar, "tonupeka ranran"  
 沼貝 自らを物語る トヌペカ ランラン

サケヘ：トヌペカ ランラン tonupeka ranran

- 1 トヌペカ ランラン  
 Tonupeka ranran  
 tonupeka ranran  
 トヌペカ ランラン
- 2 サツシクシ アン ワ オツタオカヤシ カ  
 Satshikush an wa / ottaokayashi ka  
 sat sikus an wa or ta okay=as i ka  
 乾く 日光 ある して そこに いる(複)・私 所 も
- 3 サツ ワ オケレ、タネ アナクネ ラヤシ クシキ。  
 sat wa okere, / tane anakne / raiash kushki.  
 sat wa okere, tane anakne ray=as kuski.  
 乾く して しまう 今 は 死ぬ・私 ~しそである
- 4 「ネンカタウサ ワッカ ウンクレ  
 "Nenkatausa / wakka unkure  
 "nen ka ta usa wakka un=kure  
 誰 か(係り言葉)も 水 私・~に~を飲ませる
- 5 ウンテムカ オカイ！ ワッカポ！」 オハイ チライコテンケ、  
 untemka okai! / Wakkapo!" ohai / chiraikotenke,  
 un=temka okay! wakka-po!" ohay ci=raykotenke,  
 私・~を生き返らせる してほしいなあ 水 (強調) (泣き声) 私・~と激しく声をあげる
- 6 オカヤシ アワ、トオ ホサシ シネ メノコ  
 okayash awa, / too hosashi / shine menoko  
 okay=as awa, too hosasi sine menoko  
 いる(複)・私 したところ ずっと 浜から 一人の 女
- 7 サラニブ セ カネ アラキ コロ オカイ。  
 saranip se kane / arki kor okai.  
 saranip se kane arki kor okay.  
 背負い袋 ~を背負う して 来る(複) しながら いる(複)
- 8 チサシ コロ オカヤシ アワ ウンサマ クシ  
 Chishash kor / okayash awa / unsama kush  
 cis=as kor okay=as awa un=sama kus  
 泣く・私 しながら いる(複)・私 したところ 私・~のそば ~を通る
- 9 ウンヌカラ アワ、  
 unnukar awa,  
 un=nukar awa,  
 私・~を見る したところ

沼貝が自ら歌った謡「トヌペカランラン」  
 沼貝が自らを歌った謡「トヌペカ ランラン」  
 Song Sung by a Swamp Mussel "Tonupeka ranran"

トヌペカランラン  
 トヌペカ ランラン  
 Tonupeka ranran

強烈な日光に私の居る所も  
 強い日射しが降りそそいで、私のいる所も  
 The intense sunlight beat down hard. My home

乾いてしまつて今にも私は死にさうです。  
 乾いてしまい、私は今にも死にそうになっていました。  
 had dried up, and I was in danger of dying at any moment.

「誰か、水を飲ませて下さつて  
 「誰かなんとか水を飲ませて下さい。  
 "Somebody, somehow, please give me a drink of water.

助けて下さればいゝ。水よ水よ」と私たちは泣き叫んで  
 助けて下さい！水を！」と私は叫び声をあげて  
 Help me, please! Water!" As I was crying out,

ゐますと、ずーつと濱の方から一人の女が  
 いました。すると、はるか浜の方から一人の女が  
 a woman came toward me from the direction

籠を脊負つて来てゐます。  
 カゴを背負ってやって来ました。  
 of the beach, carrying a basket on her back.

私たちは泣いてゐますと、私たちの傍を通り  
 私が泣いていると、そばを通過  
 While I was crying, she passed by

私たちを見ると、  
 私を見て、  
 and looked at me.

- 10 「トイ ピパ ウェン ピパ、ネプタプ チシカラ ハウエ  
 “Toi pipa / wen pipa, / neptap / chishkar hawe  
 “toy pipa wen pipa, nep tap ciskar hawe  
 ひどい 沼貝 悪い 沼貝 何 このように ~を泣く 話
- 11 イラムシツネレ オカイペ ネヤ？」 イタク カネ  
 iramshitnere / okaipe neya?” / itak kane  
 iramsitnere okay pe ne ya?” itak kane  
 うるさい ある(複) こと ~である か 話す しながら
- 12 ウノテツレケ ウヌレエトウルセレ ウンセイコヤク、  
 unotetterke / unureetursere / unseikoyaku,  
 un=otetterke un=ure-e-tursere un=sey-ko-yaku,  
 私・~を踏みつける 私・~を足で蹴る 私・~を貝殻と共に潰す
- 13 トオプ エキムン パイエ フ イサム。  
 toop ekimun / paye wa isam.  
 toop ekimun paye wa isam.  
 ずっと 山の方へ 行く(複) して しまう
- 14 「アヤポ オヨヨ！ ワッカポ！」 オハイ チライコテンケ  
 “Ayapo, oyoyo! / Wakkapo!” ohai / chiraikotenke  
 “ayapo, oyoyo! wakka-po!” ohay ci=raykotenke  
 痛い (苦しい時の叫び声) 水 (強調) (泣き声) 私・~と激しく声をあげる
- 15 オカヤシ アフ、トオ ホサシ スイ シネ メノコ  
 okayash awa, / too hosashi shui / shine menoko  
 okay=as awa, too hosasi suy sine menoko  
 いる(複)・私 したところ ずっと 浜から また 一人の 女
- 16 サラニブ セ カネ アラキ コロ オカイ。  
 saranip se kane / arki kor okai.  
 saranip se kane arki kor okay.  
 背負い袋 ~を背負う して 来る(複) しながら いる(複)
- 17 「ネンカタウサ ワッカ ウンクレ ウンテムカ オカイ！  
 “Nenkatausa / wakka unkure / untemka okai!  
 “nen ka ta usa wakka un=kure un=temka okay!  
 誰 か (係り言葉) も 水 私・~に~を飲ませる 私・~を回復させる してほしいなあ
- 18 アヤポ オヨヨ！ ワッカポ！」 オハイ チライコテンケ、  
 Ayapo, oyoyo! / Wakkapo!” ohai / chiraikotenke,  
 ayapo, oyoyo! wakka-po!” ohay ci=raykotenke,  
 痛い (苦しい時の叫び声) 水 (強調) (泣き声) 私・~と激しく声をあげる
- 19 オカヤシ アフ ポン メノコ カムイ シリネ  
 okayash awa / pon menoko / kamui shirine  
 okay=as awa pon menoko kamuy siri ne  
 いる(複)・私 したところ 若い 女 神 ~のようである
- 20 ウンサムタ アラキ ウンヌカツ チキ、  
 unsamta arki / unnukat chiki,  
 un=sam ta arki un=nukar ciki,  
 私・~のそばに 来る(複) 私・~を見る したら

「をかきな沼貝悪い沼貝、何を泣いて  
 「ひどい沼貝、悪い沼貝、何で泣き声を  
 "You awful swamp mussel, you wicked swamp mussel, what are you

うるさい事さわいであるのだらう。」と言つて  
 うるさくたてているのだらう」と言つて、  
 crying so noisily about?" Saying this,

私たちを踏みつけ、足先にかけて飛ばし、貝殻と共につぶして  
 私を踏みつけ、足で蹴りとばし、殻ごと踏みつぶし、  
 she stomped on me, kicked me, and ground me into the mud shell and all.

ずーつと山へ行つてしまひました。  
 ずっと山の方へ行つてしまった。  
 Then she went off in the direction of the mountains.

「お、痛、苦しい、水よ水よ」と泣叫んで  
 「ああ痛い、おお苦しい！水を！」と叫び声をあげて  
 "Ouch, it hurts! Oh, I can't bear it! Water!" As I was

みると、ずつと濱の方からまた一人の女が  
 いると、はるか浜の方からまた一人の女が  
 shouting, another woman came from the direction of the beach,

籠を脊負つて来てゐます。私たちは  
 カゴを背負つてやってきました。  
 carrying a basket on her shoulder.

「誰か私たちに水を飲ませて助けて下さるといゝ、  
 「誰かなんとか私に水を飲ませて助けて下さい！  
 "Somebody, somehow, please give me a drink of water!

お、痛お、苦しい、水よ水よ。」と叫び泣きました  
 ああ痛い、おお苦しい！水を！」と叫び声をあげて  
 Ouch, it hurts! Oh, I can't bear it! Water!"

すると、娘さんは、神の様な美しい氣高い様子で  
 いました。すると、その娘は神のように美しい様子で  
 I cried out. The girl, with the beautiful appearance of a goddess,

私の側へ来て私たちを見ると、  
 私のそばに来て、私を見ると、  
 came to my side, and when she saw me, she said,

- 21 「イヌヌカシキ シリセセク ワ ピパウタラ  
 “Inunukashki / shirseseek wa / pipautar  
 “inunukaski sirsesek wa pipa utar  
 かわいそうに 暑い して 沼貝 たち
- 22 ソツキヒ カ サツワ オケレ、ワツカエウエン ハウエ  
 sotkihi ka / satwa okere, / wakkaewen hawe  
 sotkihi ka sat wa okere, wakka ewen hawe  
 ~の寝床 も 乾く して しまう 水 ~で悪くなる こと(話)
- 23 ネスン オカイネ、ネコナネブ オカイ ルウエ タン、  
 neshun okaine, / nekonanep / okai ruwe tan,  
 nesun okay ne, nekona ne p okay ruwe ta an,  
 きっと だなあ だな どのように ~であるもの ある(複) こと (強調)ある
- 24 アオテッテレケ アプコロ オカイ。」 イタク カネ  
 aotetterke / apkor okai.” itak kane  
 a=otetterke apkor okay.” itak kane  
 される・~を踏みつける かのよう にある(複) 話す しながら
- 25 ウノピッタ ウヌモマレ、コロハム オロ  
 unopitta / unumomare, / korham oro  
 un=opitta un=umomare, korham oro  
 私たち・みんな 私たち・~を拾い集める 露の葉 ~の中
- 26 ウノマレ、ピリカ ト オロ ウノマレ。  
 unomare, / pirka to oro / unomare.  
 un=omare, pirka to oro un=omare.  
 私たち・~を~に きれいな 湖 ~の中 私たち・~を~に  
 入れる 入れる
- 27 ピリカ ナムワツカ チエヤイテムカ、  
 Pirka namwakka / chieyaytemka,  
 pirka nam wakka ci=eyaytemka,  
 きれいな 冷たい 水 私・~で回復する
- 28 シノ トウマシヌアシ。 オッタ エアシリ  
 shino tumashnuash. / Otta eashir  
 sino tumasnu=as. or ta easir  
 本当に 丈夫である・私 そこで 初めて
- 29 ネア メノクタラ シンリチヒ チフナラ  
 nea menokutar / shinrichihi / chihunara  
 nea menoko utar sinricihi ci=hunara  
 その 女 たち ~の素性 私・~を探す
- 30 インカラシ アフ、ホシキノ エク ウヌレエヤク  
 inkarash awa, / hoshkino ek / unureeyaku  
 inkar=as awa, hoskino ek un=ure-e-yaku  
 見る・私 したところ 最初に 来る 私・~を足で潰す
- 31 シルン メノコ ウエン メノコ アナク サマユンクル  
 shirun menoko / wen menoko anak / Samayunkur  
 sirun menoko wen menoko anak Samayunkur  
 ひどい 女 悪い 女 は サマユンクル

「まあかはいさうに、大へん暑くて沼貝たちの  
 「まあ気のどくに、暑くて沼貝たち  
 "Oh, you poor thing. It's so hot that the mussels' bed

寝床も乾いてしまつて水を欲しがつて  
 の寝床も乾いてしまつて、水に困っているの  
 has dried out, and they need

みるのだね、何うしたのでせう  
 ですね。どうしたのでせう  
 water. And it looks like they've been stepped on.

何だか踏みつけられでもした様だが・・・。」と言ひつゝ、  
 踏まれているみたいだわ」と言いながら  
 I wonder what happened." Saying this,

私たちみんなを拾ひ集めて露の葉に  
 私たちみんなを集めて、フキの葉の中  
 she gathered us up and wrapped us

入れて、きれいな湖に入れてくれました。  
 に入れて、きれいな湖の中に入れてくれた。  
 in a butterburr leaf, and then she put us in a clean lake.

清い冷水でスツカリ元気を恢復し  
 清い冷水で私たちは回復し  
 We regained our strength in the clear, cold water

大へん丈夫になりました。そこで始めて  
 とても元気になりました。そこで初めて  
 and felt completely refreshed. For the first time, we looked into

彼の女たちの氣性を探ぐつて  
 その女たちの素性をさぐつて  
 the backgrounds of the two women,

見ると、先に来て、私を踏つぶした  
 みると、先に来て私を踏みつぶした  
 and we found that the awful woman, the wicked woman who had come first

にくらしい女、わるい女はサマユンクルの  
 ひどい女、悪い女は、サマユンクルの  
 and stomped on me, was Samayunkur's



- 32 コットウレシ ネフ、ウネランポキウエン  
kottureshi newa, / unerampokiwen  
kor turesi ne wa, un=erampokiwen  
～の 妹 ～である して 私・～を哀れに思う
- 33 ウンシクヌレ ポン メノコ カムイ モイレマツ アナク  
unshiknure / pon menoko / kamui moiremat anak  
un=siknure pon menoko kamuy moyre mat anak  
私・～を生き返らせる 若い 女 神 淑女 は
- 34 オキキリムイ コットウレシ ネ アワン。  
Okikirmui / kottureshi / ne awan.  
Okikirmuy kor turesi ne awan.  
オキキリムイ ～の 妹 ～である だったのだ
- 35 サマユンクル コットウレシ チエポクパ クス  
Samayunkur / kottureshi / chiepokpa kushu  
Samayunkur kor turesi ci=epokpa kusu  
サマユンクル ～の 妹 私・～を憎む ので
- 36 コロ アマムトイ チスムカ フ、オキキリムイ  
kor amamtoi / chishumka wa, / Okikirmui  
kor amam toy ci=sumka wa, Okikirmuy  
～の 粟 畑 私・～をしおれさせる して オキキリムイ
- 37 コットウレシ コロ アマムトイ チピリカレ。  
kottureshi / kor amamtoi / chipirkare.  
kor turesi kor amam toy ci=pirkare.  
～の 妹 ～の 粟 畑 私・～を良くする
- 38 ネ パハ タ オキキリムイ コットウレシ シノ ハルカラ。  
Ne paha ta / Okikirmui / kottureshi / shino harukar.  
ne paha ta Okikirmuy kor turesi sino haru kar.  
その 年 に オキキリムイ ～の 妹 本当に 食料 ～を収穫する
- 39 チレンカイネ エネ シリキイ エラマン フ、  
chirenkaine / ene shirkii / eraman wa,  
ci=renkayne ene sirki i eraman wa,  
私・～のおかげで このように 様子である こと ～をわかる して
- 40 ピパカプ アリ アマムプシ トウイエ。  
pipakap ari / amampush tuye.  
pipa kap ari amam pus tuye.  
沼貝 殻 で 粟 穂 ～を切る
- 41 オロワノ ケシパアンコ アイヌ メノクタラ  
Orowano / keshpaanko / ainu menokutar  
orowano kessa an ko aynu menoko utar  
それから 毎年 ある すると 人間 女 たち
- 42 アマムプシ トウイエ コ ピパカプ エイワンケ ルウエ ネ。  
amampush tuye ko / pipakap eiwanke ruwe ne.  
amam pus tuye ko pipa kap eiwanke ruwe ne.  
粟 穂 ～を切る すると 沼貝 殻 ～を使う のである

妹で、私たちを憐み  
妹でした。そして私たちを憐れんで  
younger sister. The girl who had taken pity on us

助けて下さった若い娘さん淑やかな方  
生き返らせてくれた娘、神のように淑やかな女性は  
and revived us, the woman who was as gentle as a goddess,

は、オキキリムイの妹なのでありました。  
オキキリムイの妹でありました。  
was Okikirmui's younger sister.

サマユンクルの妹は悪くらしいので  
サマユンクルの妹はにくらしいので私は  
Because Samayunkur's younger sister had been so spiteful,

其の粟畑を枯らしてしまひ、オキキリムイの  
その女の粟畑を枯らしてしまひ、オキキリムイの  
I caused her millet field to wither, and I made Okikirmui's

妹の其の粟畑をばよく實らせました。  
妹の粟畑は、実り豊かにしました。  
younger sister's millet field plentiful.

其の年に、オキキリムイの妹は大そう多く収穫をしました。  
その年、オキキリムイの妹には、沢山の収穫がありました。  
That year, Okikirmui's younger sister had an bountiful crop.

私の故爲でさうなつた事を知つて  
私のおかげで、そうなったことが分つて  
When she learned what I had done,

沼貝の殻で粟の穂を摘みました。  
沼貝の殻で粟の穂を摘みました。  
she used swamp-mussel shells to harvest the millet.

それから、毎年、人間の女たちは  
それから、毎年、人間の女たちは  
Every year since then, human women

粟の穂を摘む時は沼貝の殻を使ふ様になつたのです。  
粟の穂を摘むときは沼貝の殻を使うようになったのです。  
have used swamp-mussel shells to harvest their millet.

43

アリ	シネ	ピパ	ヤイエユカラ。
ari	shine	pipa	yaieyukar.
ari	sine	pipa	yayeyukar.
と	一つの	沼貝	自らを物語る

と、一つの沼貝が物語りました。  
 と、一つの沼貝は自らを物語りました。  
 Thus recounted a swamp mussel of himself.

## 〔言葉の説明〕

## ・トヌペカ ランラン to nupe ka ranran (1行目)

このサケへを知里真志保は to nupe ka ranran 「あれ・涙・も・降る降る」と訳しています。

## ・サツシクシ アン sat sikus an (2行目)

サツ シクシ sat sikus は「乾く日差し」→「干上がらせてしまう日差し」→強烈な日差し。アン an は「ある」。強烈な日差しがあつて。沙流方言では、スクシ suku。

## ・ラヤシ クシキ ray=as kuski (3行目)

クシキ kuski は「～しそうである」という助動詞。ラヤシ クシキ ray=as kuski で「私は死にそうである」。

## ・タ～オカイ ta～okay (4～5行目)

タ～オカイ ta～okay で「～したいものだなあ」。ここでは、「誰か私に水を飲ませて、助けてほしいものだ」という意味。

## ・ワッカポ wakkapo (5行目)

ポ -po は、いとおいしい気持を表します。ワッカポ wakkapo で「わずかでも水を！」という意味。

## ・オハイ チライコテンケ ohay ci=raykotenke (5行目)

オハイ ohay は、「(～したい) よう！」といった呼び声や叫び声で、ライコテンケ raykotenke の目的語。ライコテンケ raykotenke は < ray-ko-tenke (ひどく・～に・～を上げる) →身もだえして声を上げる。全体で、「(水がほしい) よう、と身もだえして声を上げる」。

## ・ウンヌカッ チキ un=nukar ciki (20行目)

「私を見ると」という意味。目的格のウン un= は、「私を」と「私たちを」のどちらをも意味します。同様にここでは、チ ci=、アシ =as も「私」と「私たち」のどちらをも意味します。

この20行目で、ウンサム タ アラキ ウンヌカッチキ un=sam ta arki un=nukar ciki となっている訳を知里幸恵は「私の側へ来て私たちを見ると」としています。同じウン un= を「私(を)」と「私たちを」と訳し分けています。また、30行目は「私を(踏つぶした)」として、32行目では「私たちを(憐れみ)」としています。この訳し分けには、とくに意味を感じません。全体でみると、物語の初めの方と終りを「私」と訳し、中間を「私たち」としているようですが、訳し分けに原則があるようにはみえません。ただし、25行目のウノピッタ un=opitta は、「みんな」に付いているのでこのウン un= は「私たち(みんな)」と訳さないわけにはいきません。

原文が unnukat と語尾が t になっているのは、次の語 ciki の c の前に r が来ているため。

## ・イヌヌカシキ inunukaski (21行目)

これは「かわいそうだ」という意味。分析の試みを「参考」で行いました。

## ・ワッカエウエン ハウエ ネスン オカイネ

## wakka ewen hawe nesun okay ne (22～23行目)

ワッカ エウエン wakka ewen は、「水・に困る」。ハウエ ～オカイ hawe～okay で、「ということ(話)だなあ」。ネスン nesun は < nesi-un (強調・だな)。ネスン ～ネ nesun ～ne で「きつと～だな」。全体で、「きつと水に困っていることなのだな」。

## ・ネコナネフ オカイ ルウエ タン nekona ne p okay ruwe tan (23行目)

ネコナ nekona は「どのように」。ネ フ オカイ ne p okay は「～であるものがある」。ルウエ タン ruwe tan 「～(した)ののだろうか」。全体で直訳すると「どんなことがあったのだろうか」→「いったい何があったの?」。

## ・アオテッテレケ アッコ オカイ a=otetterke apkor okay (24行目)

アオテッテレケ a=otetterke は、「～される・を踏む(反復)」→何度も踏まれる。アッコ オカイ apkor okay は、「のようで・ある」。全体で、「何度も踏みつけられたようだ」。

## ・ウノピッタ ウヌモマレ un=opitta un=umomare (25行目)

ウノピッタ un=opitta は「私たちを・みんな」。ウヌモマレ un=umomare は「私たちを・を集める」。ウヌモマレ umomare は < uwomare < u-omare (一緒に・に入れる)を拾い集める。全体で、「私たちみんなを拾い集める」。

## ・トウマシヌアシ tumasnu=as (28行目)

トウマシヌ tumasnu は < tum-asnu (力・すぐれている) →丈夫である。

## ・シンリチヒ チフナラ sinricihi ci=hunara (29行目)

シンリチヒ sinricihi は、シンリツ sinrit (祖先、根)の所属形の長い形。sinriti → sinricihi。フナラ hunara は「～を探る」。その根(祖先)を探る→素性を探る。

## ・ウヌレエヤク un=ureeyaku (30行目)

ウヌレエヤク un=ureeyaku は < un-ure-e-yaku (私を・足・で・つぶす) →私を足で踏みつぶす。

## ・ウンシクヌレ un=siknure (33行目)

シクヌ siknu は、「生きる。生き返る」。それに使役のレ re (～させる)が付いて「生き返らせる」。ウンシクヌレ un=siknure は「私を生き返らせる」。

## ・カムイ モイレマツ kamuy moyre mat (33行目)

神さま、特に女の神さまは、何事をするにもゆっくりするのが神さまらしいとされています。片方の手甲をはめるのに三日間もかかるような表現がカムイユーカラにはよく出てきま

す。

カムイ モイレ マツ kamuy moyre mat (神・遅い・女) →神のようにゆったりとした動作の女性→神のように淑やかな女性。

・チエポクパ ci=epokpa (35行目)

エポクパ epokpa は < e-pok-pa (で低くする・くりかえし) →を憎らしく思う。

・チスムカ ci=sumka (36行目)

スムカ sumka は < sum-ka (不作である・～させる) →不作にする。チスムカ ci=sumka は「私が不作にする」。沼貝には、不作をもたらすような力があるようです。

・ハルカラ haru kar (38行目)

ハル haru は「食糧。実り」。カラ kar は「摘む。収穫する」。ハル カラ haru kar で、実りを収穫すること。

〔参考〕

・イラムシツネレ iramsitnere (11行目)

イラムシツネレ iramsitnere は < i-ram-sit-ne-re (もの・心・繊維・のように・する) →ものが心を繊維のようにする。→心がうっとおしくなる。うるさい。

シツ sit は、もつれた繊維。心がもつれた繊維のようになること。うっとうしい、苦しい、つらい、くやしい、など多くの意味を生み出しています。

・イヌヌカシキ inunukaski (21行目)

イヌヌカシキ inunukaski < i-nunuke-as-ki (もの・を大切にする・私たち・をする) →大切にされることをする→かわいそうである。イヌヌカシ inunukas でも「かわいそうである」という意味。この場合の元の意味は「大切にされる」。

コラム (17)

沼貝はなぜ豊作をもたらすのか？

「トヌベカ ランラン」というサケへをもつこの沼貝のカムイユーカラは知里幸恵のふるさと幌別のものです。これ以外に、「ヤークリクリ」というサケへをもつ日高の沼貝の神謡、「トーネペカント・トーペカント」というサケへをもつ美幌の神謡、そして、「トーポクポク トーリンナ」というサケへをもつ旭川の神謡などがあります。ストーリーは大体みな似たりよったりですが、助けられた沼貝が、人間にしてやったことは少し異なっています。幌別のものは粟畑を豊作にします。日高のはサケが沢山のぼるようになります。美幌のは、鹿やサケをどっさり与えます。旭川のは、クマを沢山さずけます。一方、沼貝を踏みつぶした人間には、反対に粟畑を枯らしたり魚が来ないようにしたり、飢饉がはびこるようにしました。沼貝は人間の暮らしに大きな影響力をもっているように描かれています。

沼貝は、食べる身の部分が魚などと較べて特別多いわけでもないし、美味しいわけでもありません。なぜ沼貝にはこのような力がそなわっていると考えられたのでしょうか。旭川には、もう一つ「トークリクリ トークリコ」というサケへをもつ沼貝の神謡があります。その結末では、幌別と同じように、助けてくれた人間に豊作をもたらしています。沼貝はなぜ豊作をもたらすものとして伝承されているのでしょうか？

人間の暮らしの中で沼貝が一番大きな働きをしているのは、実は貝の身ではなく貝殻なのです。沼貝の貝殻(片方)は、ヒエやアワの穂ちぎりに用いる大切な農具なのです。穀類の収穫にはなくてはならない道具でした。ピパ pipa という名も、< pi-pa (引っぱる・多回)で、「くり返し引っぱるもの」という言葉が元でしょう。

ボルネオの焼畑農業では今も穂ちぎり具が使われています。実際にそれを使ってみると、穂の部分にひっかけて引っぱるようになってちぎる(摘む)ことがわかります。イチヤ ica (ものを刈る)ともいいますが、穂ちぎりの場合は、まさに、ひっかけて「引っぱる」のです。ヒエは、日本列島原産の穀物だろうといわれているので、縄文時代から作られていたと思われる。その収穫具には、沼貝が古くから使われてきたことでしょう。金属器のカマ(鎌)は、ずっと後のものです。その上、カマは穀物を刈り取るためには使われることはありませんでした。カマはそれで切られると生き返らないといわれ、魔除けに使われたのです。

このようにヒエやアワの収穫と沼貝は切っても切れない関係のものと考えられてきたことでしょう。そこから沼貝(収穫道具)を粗末に扱えば、収穫に悪い影響を及ぼすと考えられたのではないのでしょうか。沼貝を大切に扱った人間に豊作がもたらされるという伝承は、こうした考えから生まれたのでしょうか。

ところで、沼貝と言ってきましたが、正確には沼貝はトピパ to-pipa (沼・ピパ) とい、川の貝はベツピパ pet-pipa (川・ピパ) といいます。沼では、水流がないため貝殻は薄く、一方、川では水流があるため殻は厚くなります。穂ちぎり用には、川でとれる殻の厚

くて丈夫な方が使われました。つまり沼貝ではなく川貝（カワシンジュガイ）が使われました。

その後、ピパ（カワシンジュガイ）を大切に扱えば豊作がもたらされるという考えが発展し、大切に扱おうと、川のサケや鹿、さらにはクマなどが豊かに与えられるようになったのでしょう。平取町の二風谷には、かつてピパウシと呼ばれた所がありました。それは、近くにはピパウシナイ（ピパ貝の多い沢）という沢があったからでした。明治になってから、この沢から名をとって貝沢という姓が生まれたといいます。この他、美唄（びばい）という地名の元、ピパオイ pipa-o-i（ピパの多い所）もあり、ピパは、多くの地名や人名の元になっています。暮らしの上でピパがいかに重要視されたかがわかります。

## 岩波文庫版「アイヌ神謡集」を読むに際して

現在「アイヌ神謡集」を読む場合、岩波文庫版で読む人が圧倒的多数を占めることとされます。しかし、岩波文庫版には各話ごとに訂正を要する箇所があるので、その部分を以下に記しました。なお岩波文庫版の行数は、タイトルを含み、スペース改行は除きます。

岩波文庫版	訂正部分 [本書の行番号]
第1話 16頁 11行目	pono → ponno [1-69]
22頁 7行目	ashurpeututa → ashurpeututta [1-120]
32頁 下から3行目	sakekarichi → sakekarchi [1-225] (全くの誤りとはいえないのですが、「ノート」ではこの形になっています)
第2話 36頁 9行目	ushiyakko → ushiyukko [2-8]
40頁 7行目	achomatup → aehomatup [2-46]
42頁 2行目	rurpa → turpa [2-59]
49頁 10行目	簸 → 箕 [2-124]
第3話 52頁 10行目	upsh → upshi [3-26]
62頁下から5行目	eosineru → esoineru [脚注：本書には未掲載]
第4話 66頁下から6行目	shiran.” → shiran. [4-34]
第5話 82頁 8行目	chirakewehe → chiraikewehe [5-62] (他の物語でi(y)の脱落の起こる例があるので全くの誤りとはいえませんが、元の形を示しました)
82頁 11行目	ingrash → ingarash [5-65]
第6話 88頁下から6行目	eonnohetapne → sonnohetapne [6-35]
第7話 94頁 3行目	“Konkuwa → Konkuwa [7-1]
94頁 4行目	Teeta → “Teeta [7-2]
95頁 3行目	「コンクワ → コンクワ [7-1]
95頁 4行目	昔私の → 「昔私の [7-2]
98頁 3行目	orum → orun [7-44]
105頁 1行目	きれで → それで (18刷から訂正済) [7-104]
105頁 1行目	魚をとると、鹿の頭も → 魚をとる。鹿をとったときは、鹿の頭も (18刷から訂正済) [7-104]
第8話 111頁 15行目	六人の兄様 → 六人の姉様 [8-33]
112頁 12行目	etutumpe → etuhumpe [8-50]
114頁下から3行目	chipahun → chupahun [8-80]
118頁下から4行目	oppittano → opittano [8-120]
120頁 5行目	chienupene → chienupetne [8-128]

124頁 5行目	irihumsehau → irhumsehau [8-172] (全くの誤りとはいえませんが、合成語の中では所属形では普通出てこないのと、「ノート」でもこの形なので)
124頁 12行目	erututtke → erututke [8-179]
126頁 3行目	iramno → isamno [8-192]
第9話 129頁 4行目	「ある日 → ある日 [9-2]
第10話 136頁 6行目	hosippa. → hosippa [10-24]
136頁 10行目	chierameshinne → chieramushinne [10-28]
137頁 6行目	帰って行った。 → 帰って行った [10-24]
第11話 142頁 7行目	hokanachimip → hokanashimip [11-48]
142頁 15行目	shikautapkurka → shikantapkurka [11-56]
第12話 148頁 14行目	wempuri → wenpuri [12-30]
第13話 155頁 11行目	気性 → 素性 [13-29]

今後この他にもまだ幾つかの誤植が見つかる可能性があります。  
(この解説書は郷土研究社発行の初版本を底本としていますが、そこにもほぼ同様の誤植が見られます。その訂正はそのつど本書内で行ったり、本文三行目の解釈で示しました)。

なぜ上記のように多くの誤植が生じたのでしょうか。その理由は、実は以下のような事情があったからです。

知里幸恵はこの原稿をノートに書きました。ところが、その原稿があまりにも美しく書かれていたため出版を薦めてくれた渋沢敬三は、それを印刷所に回してさまざまな割り付けの印が入れられるのを惜しみました。そのため複製の原稿を作ることになりました。多くの誤植はそのとき起こったと考えられます。アイヌ語をまったく知らないタイプストが打ったためです。さらに悪いことに知里幸恵は、タイプで整然と印字されたその複製原稿で校正していききました。きちんと印字されたものは誤りを見逃ししやすいものです。そのため多くの漏れが生じたものと考えられます。しかも、元原稿のノートがいまだに行方不明なのです。あるいは焼失したのか、紛失したのか、どこかに眠っているのか、それは謎です。その元原稿さえあれば、それを元に訂正は楽に行えますが、それがいまだに行方知れずなのです。知里幸恵は、その前にも一度ノートにほぼ同じ内容のものを書いていて、それは今も現存しています。しかし、その「ノート」は必ずしも最終原稿と同じではありません。例えば、第11話で川の水源に「銀の小矢」を射るくだりがありますが、「ノート」では、「銀の小もりさい鉾で突く」ようになっています。水源の水を清める道具まで違っているので、この「ノート」をそのまま今日の「アイヌ神謡集」の元と見ることは出来ないのです。あくまでも参考に使うだけに留めるしかありません。

知里幸恵のノート原稿があまりにも美しかったがためにこのような原稿をめぐる変転が生じたのでした。

## 底本

本書は、郷土研究社から炉辺叢書として発行された下記の初版本を底本としています。

知里幸恵編「アイヌ神謡集」 郷土研究社 1923年

本書では、フォントの対応の問題等で、原本の旧字を新字で表記しているところもあります。

## 参考文献（著者五十音順）

- 片山 龍峯 「カムイユカラ」解説 片山言語文化研究所 1995年  
萱野 茂 「萱野茂のアイヌ語辞典」 三省堂 1996年  
萱野 茂 「アイヌの民具」 すずさわ書店 1978年  
萱野 茂 「カムイユカラと昔話」 小学館 1988年  
切替 英雄 「アイヌ神謡集」辞典 北海道大学文学部言語学研究室 1989年  
金田一 京助 「金田一京助全集」 三省堂 1993年  
金田一 京助 「ユーカラ集 I～VI」 三省堂 1959-66年  
久保寺 逸彦 「アイヌ叙事詩 神謡・聖伝の研究」 岩波書店 1977年  
久保寺 逸彦 「アイヌ文学」 岩波書店 1977年  
久保寺 逸彦 「アイヌ語・日本語辞典稿」 北海道文化財保護協会 1992年  
更科 源蔵・光 「コタン生物記」I、II、III 法政大学出版局 1977年  
ジョン・バチェラー 「アイヌ・英・和辞典」(第四版) 岩波書店 1938年  
知里 真志保 「知里真志保著作集」 平凡社 1976年  
知里 真志保 「地名アイヌ語小辞典」 北海道出版企画センター 1984年  
知里 真志保・小田 邦雄 「ユーカラ鑑賞」 元々社 1968年  
知里 幸恵 「爐邊叢書 アイヌ神謡集」〔復刻版〕 知里真志保を語る会 2002年  
知里 幸恵 (横山 むつみ 編) 復刻版「知里幸恵ノート」 知里森舎 2002年  
知里 幸恵 (北道 邦彦 編) 「ノート版 アイヌ神謡集」〔改訂版〕 私家版 2000年  
田村 すず子 「アイヌ語沙流方言辞典」 草風館 1996年  
田村 すず子 「アイヌ語音声資料 1～12」 早稲田大学語学教育研究所 1984-2000年  
中川 裕 「アイヌ語千歳方言辞典」 草風館 1995年  
中川 裕 「アイヌの物語世界」 平凡社 1997年  
中川 裕 「アイヌ神謡集講義録」(第1話途中まで) 銀の滴講読会 1992年  
服部 四郎 編 「アイヌ語方言辞典」 岩波書店 1964年

## あとがき

難解な言葉を多く含んだ「アイヌ神謡集」の解説書を書くなどという大それた試みを自分がすることになるとは全く予想もしなかったことでした。最初は「アイヌ神謡集」の中のアイヌ語の朗読をCD化することで、アイヌ語の響きを知ってもらいたいと思ったのがきっかけでした。しかし、アイヌ語の音がわかっても言葉の意味がわからなければアイヌ語を知ることにはなりません。そこで畏れの気持ちを抱きながらも重い腰を上げてこの「解説書」作りをすることに決めました。原文の1行を4行にして説明し、背景や言葉の解説、コラムを入れ、不明語や難解語にも分析の試みをするといったかなり欲張ったことを計画したため、予想以上の時間を要する作業となりました。また、同時に進めていた「アイヌ神謡集」を謡として復元する作業もありました。くる日もくる日も朝から晩まで何ヶ月も解説書作りの作業は続きました。難解な言葉にぶつかり、様々な文献にあたる必要もありました。それはまるで孤独なマラソンランナーのような日々でした。

そんなときに文字入力をお願いした浜田隆史氏の率直な助言や意見がどれほど支えになったか知りません。浜田氏は、アイヌ語ペンクラブ発行のアイヌ語新聞「アイヌタイムズ」(季刊)の編集をしていて、アイヌ語の知識を豊富に持っている方です。独りよがりになりがちな私の考え方にズバリ異を唱え、氏から教えられることは実に多くありました。巻末のグロッサリーは浜田氏が作成してくださったものです。ここで改めて浜田氏に厚くお礼を申し上げます。

本書を書くにあって切替英雄氏の「アイヌ神謡集辞典」は、大変参考になりました。氏の労作という土台があったお陰で安心して私独自の異なる論や仮説も提示することが出来ました。切替氏に心からの感謝を申し上げます。

英語訳を担当して下さった貝澤ジュリーさんは、前回の「ウパクマ」同様お世話になりました。知里幸恵は神謡を初めて口語(日常語)で訳すという記念碑的な仕事を残しました。その精神を継いで英語も分かりやすい日常語にしてほしいとお願いし、その意に添って作って下さいました。序文の英訳も含めてジュリーさんの英語訳は「アイヌ神謡集」を世界に発信する原動力となるでしょう。深くお礼申し上げます。

また私の手書き原稿を入力して下さった佐々木ひろ子さんとそのグループの方々にも感謝申し上げます。難しいアイヌ語混じり日本語文にさぞ苦勞されたことと察する次第です。各話の扉のカットの一部分に「カムイユカラ」の絵の中の成田秀敏氏と西山史真子さんのものを使わせていただきました。大野徹人氏にはひと通り目を通していただき貴重な意見をいただきました。ありがとうございました。このように多くの方々を支えられて本書は出来上がりました。初めての試みのために誤りや遺漏があることと思います。不備な点をご教示いただければ、版を改める際に直していきたいと考えております。

知里幸恵生誕100年の記念の年 2003年5月15日

片山言語文化研究所代表 片山 龍峯

## 片山 龍峯

1942年 東京生まれ。

東京外国語大学ポルトガル・ブラジル語学科卒業

片山言語文化研究所代表

著書：「萱野茂アイヌ語会話初級編全4巻」「日本語とアイヌ語」

「アイヌ語日常会話集1」「カムイユカラ」「ウパシクマ①②」

「クマにあったらどうするか」

## 「アイヌ神謡集」を読みとく

---

2003年6月8日 改訂版第2刷発行

著者 片山 龍峯 Katayama Tatsumine ©  
発行所 片山言語文化研究所  
Katayama Institute of Linguistic and Cultural Research  
東京都武蔵野市吉祥寺東町 2-43-11 (〒180-0002)  
tel 0422-20-2070 fax 0422-20-2071  
発売元 株式会社 草風館  
東京都千代田区神田神保町 3-10  
tel 03-3262-1601 fax 03-3262-1602  
e-mail: info@sofukan.co.jp http://www.sofukan.co.jp  
印刷所 株式会社シナノ

---

本書は、その直接出版費の一部として平成15年度の財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構の出版助成を受けて刊行した初版を改訂したものである。